
テンプレな転生 強き信念持ちし者

龍賀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テンプレな転生 強き信念持ちし者

【Nコード】

N7066P

【作者名】

龍賀

【あらすじ】

神のミスで死んでしまい、能力をもらい転生する事に。リリカルなのはの世界に行く事にした龍斗。はたしてどんな困難が待ち受けているのか。

なのは編はひとまず終わり、次はネギまで。

主人公設定（挿絵追加）（前書き）

今回初めて書かせていただきます。誤字脱字が目立つでしょうが、
生暖かい目線で読んでいただけたら嬉しいです。

主人公設定（挿絵追加）

森 龍斗

R a i N様に書いてもらいました！本当に感謝です！

> i 2 2 7 1 6 — 2 2 9 6 <

年齢 無印開始時 9歳

身長 130cm

体重 25？

趣味 読書、昼寝

容姿 髪の毛は肩まで伸びていて、ひとつに結んでいる。顔は上の中くらい（本人は否定）。瞳は右目が蒼で、左目が紅。筋肉がないのではなく、無駄の無い体つきになっている。

能力 よくありがちな、漫画などに出てくる能力や武器、その他アイテムなどを使えるというもの。勿論魔力と気もEX。アイテムは、王の財宝みたいなどころに入っている。

ただし、自分の知っていない物は使えない。

神のミスで死んでしまった少年。しかし、特に前にいた世界では未練が無いため、

リリカルなのはの世界に行くことにした。

主人公設定（挿絵追加）（後書き）

とりあえず設定だけです。おそらく次の日ぐらいに1話投稿すると思います。これからよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

今回は早く書き上げることが出来ました。ですが、書ける時に書くのでこれからは遅くなるかもしれません。駄文ですがどうぞ。

プロローグ

俺の名前は、森 龍斗。

普通のオタクだ。まあ友達の影響だけだな。なんで自己紹介をしてるかと言うとまあだいたい想像はつくだろうけど、つくのか？まあいいか。俺は死んだらしい。

普通に家で寝ていて、気がついたらこれだ。しかもなんか俯いている爺さんもいるし。とりあえずここにはあの爺さんしかいないから聞いてみるか。

「すいませんが、あなたは誰だ？それとここはどこなんだ？」

すると爺さんは俯いていた顔を上げ言った。

「ワシは神じゃ。それとここは天国と地獄の境目じゃよ。」

「天国と地獄の境目？」

「そうじゃ。ここは死んだ者が閻魔の判決を待つ場所なんじゃ。」

なら何故神様（仮）はこんなところに？

「（仮）をつけるでない。ここに来た理由は君じゃよ。」

俺？

「ならどうして俺はここに？」

まさかミスったてか？そんな二次創作じゃあないんだか「よくわかったのお。」

「なん…だと？」

「いやの？少しばかり目を放した際にコーヒーがこぼれてしまったのお。」

いそいで見てみればなんと書類に当たってしまい君の命を消してしまっただんじゃ。すまんのぉ。」

なんだ？こんな時はテンプレごとでも言えばいいのか？まあとりあえず殴つてもいいよね？

「歯あくいしばれ！！」

「お、落ち着くのじゃ！まだ話は終わつとらん！」

「じゃあ、さっさと話せ。」

「お詫びと言ってはなんじゃが、3つ特典付きで転生させてやるっ。」

「その特典はこちらで選んでいいのか？」

「もちろんじゃよ。こちらに非があるしの。」

「なら一つ目は俺の知ってるアニメ、漫画の能力と武器をくれ。魔眼もな。」

「魔眼もかの？」

「ああ。魔眼も能力の一つだからな。」

「わかったわい。」

「次に二つ目に膨大な量の魔力と気をくれ。」

「ならばEXランクになるぐらいでいいかの？」

「十分だ。最後は能力と同じような設定でアイテムをくれ。」

「なぜじゃ？」

「備えがあつて悪いことは無いからな。それで？俺はどの世界に行くんだ？」

「それはのお。リリカルなのは世界じゃよ。時代は無印より少し前じゃ。」

「そうか。なら今すぐ送つてくれ。」

「わかったわい。でわの。」
すると段々意識が薄れてきた。

「さて、どうなるかな？」

プロローグ（後書き）

次ぐらいに原作キャラをだすつもりで頑張ります。アドバイスと感想お待ちしております。

第1話（前書き）

今回もすぐにできました。グダグダですがそれでもいい方はどうぞ。

第1話

とりあえずこれは一体どういうことだ？何故今俺は落ちているんだ？！

「あの爺さんミスリやがったな！くそついきなり死んでたまるか！」

「くそつデバイスはないのか？あると楽なんだがな」

『マスター、ここです』

「どこだ？」

急いで探すがなかなか見当たらない。

『右ポケットですよ、急いで下さい』

右ポケットを見ると、確かに紅色の十字架のネックレスがあった。

「これが、名前は？俺がつければいいのか？」

『はい、お願いします』

「なら、お前の名前はブラッディクロスだ！クロスって呼ぶからな
」！

『了解、正式名称をブラッディクロス、愛称をクロスで登録します、
セットアップして下さい』

「よし！ブラッディクロス、セットアップ！」

『Set up』

『バリアジャケット（以降B.J.）を展開します』

「よし、飛行魔法で飛ぶぞ！」

『了解、飛行魔法を展開します』

すると、落ちる速度が遅くなりやがて浮くことができた。

「ふう、なんかあったかな？とりあえずここが何処なのか調べないとな」

『マスター、どうやらここは海鳴市のようです』

「そうか、なら自分の持ち物の確認をするか」

いつの間にか背負っていたリュックの中を見てみると、財布と携帯電話、水の入ったペットボトルがあった。

「あの爺さんがくれたのか？ありがたいな、ん？なんだこの紙は」
「これを読んでおるということは無事に着いているということじゃな、リュックに入っているものは好きに使いなさい、その携帯でわしに電話する事が可能じゃがいつでもでられるわけではないからのお、どうしてもという時に掛けてきなさい」

なるほど。アフターケアも万全という事が。しかし財布の中にはいくら入っているのかな？

「ん？クレジットカードが入ってる、しかも諭吉さんが10枚も！」

これだけあればしばらくは困らないな。だけど一体何処に住めばいいのやら。

『マスター、近くに人の反応がありますが？』

「人数は？年齢は分かるか？」

『詳しくは分かりませんが人数は6人います』

「少し行ってみるか、動かないと何も始まらない」

早速行ってみるか。

>??> Side<
どうしてこんなことになったんだろう。今日もいつもどおりに過
してただけなのに。アリサちゃんやすずかちゃんと一緒に帰ってい
たら急に3人の男の人が来て、

「こつちに来て!!」

っていつて私たちを無理やり車に乗せようとしてきたの。もちろん
抵抗はしたけど無駄だった。二人も最初は抵抗していたけれど、男
の人たちが暴力を振るってきて気絶しちゃったの。

これって誘拐だよな? 私たちどうなっちゃうのかな? 誰か助けて!!

>??> side out<

なんだ? いきなり誘拐の場面に遭遇かよ。しかもあの女の子たちは
なのはたちだよな?

「助けない訳にはいかないな、クロスいけるな?」

「はい、準備はできています、あの男たちをボコボコにしましょう
!」

「お前そんな性格だったんだな...まあいい、とりあえずいくぞ!」

どうやら数は少ないようなのですぐに終わりそうだな。能力の確認
にもなるしな。とりあえずばれないように近づき、能力を発動させ
る。

「トレース・オン」

今回は気絶させればいいので、木刀をだし攻撃する。

「ぐわめ!」

それによって一人が倒れる。

「どうした!？」

そういつて様子を見に来た男には木刀を投げつける。

「くっ、だ、誰だ!」「貴様らに名乗る名前など無い、ここで寝て
る」

そういつと男たちはキレた。

「生意気なガキが!調子に乗るな!！」

そういつて拳銃を取り出し発砲し始めた。

しかしそんなものにあたるはずも無く、すべて回避する。
よし。これならいける!さっさと終わらせてやる!

「魔人剣!」

そういつて木刀から斬撃を飛ばす。

「ぐふあ!」

そしてまた一人倒れる。

「なんなんだよ、なんなんだよ!お前は!」

「だから言つたる、貴様らに名乗る名などないと、じゃあな刑務所
で反省してな」

そして最後の男にもさつきと同じ斬撃を喰らわした。

「案外あっけなかったな、まだ試したいことがあったんだがな…まあいいとりあえず縛っつとしてそこらに置いていたら勝手に警察が回収するだろ」

警察に見つかる厄介なことになるだろうからさつきとどこかに行くかと思っていると、

「あ、あの」

「ん？」

ああ誘拐されていた女の子か。まあたぶんなのはなんだろうが。

「どうした？」

「助けてくれてありがとうなの！」

「何気にするな、偶然通りかかったただだからな」

「で、でもなにかお礼がしたいの！」

「そういわれてもな、特にないんだが」

「なら家にくるといいの！家でお礼がしたいの！」

「そこまで言うならありがたく寄らせてもらおう、しかし先に君の友達を連れて帰ろう、親が心配しているだろうからな」

そう言って二人を背負う龍斗。

「そういえば自己紹介がまだだったな、俺は森 龍斗だ、自由に呼んでくれ」

「私は高町 なのは、なのはって呼んで？」

「分かった、とりあえず運ぼう、警察には連絡を入れたが君たちの家族は知らないだろうからな」

そして背負った二人をそれぞれの家に送った。

とても感謝されたが当然のことをしただけなのでといい、その話を終わらした。

とりあえずもう一度行かなければならなくなったが。

そして後はなのはの家に行くだけとなった。

第1話（後書き）

龍「今回から、他の方達のように後書きコーナーをしてみたわけだが」

なんだ？急に黙って。

龍「必要なのか？これって」

おい！そんなこというなよ。必要か必要じゃないかじゃなく、楽しむためにやるんだからな！

龍「そうか、とりあえずすすめるぞ」

ああ。とりあえず感謝コーナーから、A r i s h i a様感想ありがとうございます！

龍「お前のこの小説を書くきっかけの人だな」

ああ！そうだ。そのおかげでお前がいるんだからな。感謝しろよ！

龍「はいはい、まあこの駄文じゃあ誰も納得しないだろうがな」

ぐふっ！そんなことゆーなよ…。事実だけどさあ。

龍「ならいいじゃねえか、とゆーよりさっさと進める」

くっ！いつか思い知らせてやる！

ゴホン！次回はおそらく早ければ明日、遅ければ28日ぐらいにな

りそうです。

では、次回で会いましょう。

龍「さよならー」

第2話（前書き）

一日の内にもうひとつ投稿出来ました。

まだ無印には入っていませんがもうしばらくお待ちください。

キャラの口調がちがう場合は言うてください。

でわ！これまたグダグダですが、お楽しみいただけるとうれいいです。

第2話

さて。ついになのはの家まで来たんだが、帰っていい？かなりしんどいんだが。

どうしてこうなった。俺はただ送り届けただけじゃねえか。

なのに恭也がすごい殺気を向けてくるんだが。

「貴様！！なのはに何かしたのか！」

「何もしてない、とゆーよりなぜそうなる！」

「誤魔化すつもりか！なのはがお前を何故名前で呼んでいる！」

「さっき説明しただろうが！そう呼べと言われたからだ」

「恭也、いい加減にしなさい」

「だけど、父さん！」

「さっき説明されただろう、それになのはもそういつている、だから落ち着きなさい」

士郎さんのおかげでどうにかなったな。まったくシスコンも大概にしるよな。

ついでにいつておくが、自己紹介はすでになっている。別に面倒だからじゃないからな？

「なのは達を助けてくれてありがとう、おかげでなのは達は無事だ、お礼といっではなんだが夕食食べるかい？」

「うれしいですがいいんですか？」

「いいのよ、食べていきなさい」

桃子さんが急に話に入ってきたが、いつの間に。まったく気配が感じれなかったぞ。

「ではご飯をごちそうになります」

そうしてご飯をご馳走になることになった。

「ご馳走様でした」

ご飯を食べ終えた。別に特に説明する必要を感じないから省略な。さて、そろそろ家を探しにいけますか。

「ところで龍斗君、君はどこに住んでいるんだい？もうこんなに暗いんだ、親も心配しているだろうから送っていい？」

士郎さんにそういわれおもわず固まってしまふ。

「い、いえ大丈夫です、ここからそんなに遠くないですし」

「嘘なの！この辺りの道をまったく知らなかったの！」

ちい！やっとでてきたと思ったら余計なことを言いやがって！

「何？それは本当かい？龍斗君」

くっ。もう誤魔化せないじゃないか。

>>マスター、いいじゃありませんか、この人はいい人ですし頼んでみては？<<

>>それができれば苦労しない！いい人達だから頼みづらいんだろ
うが！<<

そうだ。それにばれたらここに住むことになりそうだからな。

ここの人かなり頑固だしな。

「えっと、大丈夫ですから気にしないで下さい」
「そうはいかない、なのは恩人なんだ、その恩人が困っていたらこちらが困る」
「そうね、いいづらいのかしら？」

だめだ。これは諦めるしかないな。

「えっとさつきは嘘をいってすみません、実はここには来たばかりで住む場所はないんです」

「そうか、ならここに住むといい、いいだろう？桃子」

「ええ士郎さん、私は賛成よ」

「私も賛成なの！」

「私も別に構わないよ？」

「俺は反「いいわよね？恭也？」…ハイワカリマシタ」

こええー！なんだよあの笑顔。笑ってるようで笑ってないぞ。

絶対に桃子さんは怒らせないようにしよう。

「で、ではよろしく願います」

「」「」ようこそ、高町家へ！」「」

「……俺は認めんぞ（ボン）」

まあ仕方ないか。これから世話になるなあ。恭也には狙われつつけるんだらうなあ。

まあ返り討ちだがな。

この家族はいい家族だしな。迷惑をあまりかけたくないな。とりあえずの住処は決まったな。あとは無印が始まるのを待つのみか。

「あと、龍斗君」

「はい？」

「君学校は？」

「行つてませんが」

「ならなのはと同じ学校に行くといい、なのはもそうしたいだろうからね」

「悪いですよ、それに学校に行かなくても大丈夫ですから」

いまさら小学校になんか通えるかよ。恥ずかしいしな。

あと俺は死ぬ前は18歳だったからな？

「ええー、一緒に行こうよー」

いきなりなにをいいだすかな、なのはさんは？

「お金がかかるから遠慮しますよ」

あつ、そういえばクレジットがあるということはお金が預けてあるはず。

後で確認しにいこう。

「なに君一人増えたぐらいじゃあたいて変わらないさ、それに君ぐらいの年の子が気にする必要はないよ」

「しかし」

「ならこうしよう、君はここに住む代わりに学校に行くこと、これが条件だ」

「……分かりました、学校に行けばいいんでしょう、…はあ、強情ですね」

「ははは、いいじゃないか、君も学校に行つて新しい友達を作ればいいじゃないか」

「まあいいですよ、ならしつかりと楽しんできますよ」
「そうするといい」

まったくこの家族は……。

優しすぎる。俺には眩しいぐらいに。

とと、暗くなりすぎたか。とりあえず眠いな。

子供になったせいで眠くなるのが早いな。

「とりあえず眠くなってきたので寝てもいいですか？」

「そうか、もうこんな時間か、なのはも寝なさい」

「はぁーい、おやすみなさい」

「さて、君の部屋だが、一室だけ空き部屋があるから案内するよ」

「分かりました、それとありがとうございます」

「何気にしないでくれ、私達も感謝しているからね、これぐらいな
んてこと無いさ」

本当に優しいな。ありがたい。

「ここが君の部屋だよ、必要なものがあつたらいつてくれるかい？」

「ありがとうございます、必要なものくらい自分で揃えますよ、で
わおやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

さて。これからのことを少し考えるか。

「なあ、クロス」

『なんでしょうか、マスター』

「これからについてだ」

『これからについてですか？』

「そうだ、お前には知識はあるのか？」

『はい、マスターと同じぐらいは』

「そうか、ならこれからどうしたらいいと思う？」

『とりあえずマスターの思った通りにしていればいいと思いますよ？』

「そうかな？ならなるべくハッピーエンドを目指せるようにがんばるかな」

『それがいいですね、何事もハッピーエンドがいいですね』

そう話しているとだんだん眠くなり気がついたら眠っていた。

『マスターはこれから大変でしょうけど頑張ってください、私は何があってもあなたの味方ですから』

眠る直前そんな声が聞こえた気がした。

第2話（後書き）

今回は後書きコーナーは休みです。
感想お待ちしています。

第3話（前書き）

今回もグダグダです。
それでもいい方はどうぞ。

第3話

朝6時ぐらいに起きたんだが、これは一体？

「なぜなのはがいる、寝ぼけたのか？」

しかしこれがばれると恭也に殺されかねないな。
なんとかしなければ。

「おい、起きろなのは」

「う、うん、ふえ？おはよう龍斗君」

「ああおはよう、しかしなぜここにいる？」

「ん？……／＼／」

どうやら寝ぼけていたらしい。仕方ないか。

「とりあえず着替えるから部屋を出てくれるか？」

「わ、わかったの！」

少し、いやかなり恥ずかしそうに出ていったな。
とりあえずさっさと着替えるか。

『マスターは恥ずかしくないのですか？』

「ん？ああ、たいして恥ずかしくないな、なんせ姉と妹が似たような事をしていたからな」

あれは何がしたかったのだろうか？

『マスターは鈍感ですか（ボソツ）』

「ん？何か言ったか？クロス」

『いいえ、何も言ってません、それよりも早く1階に行ったらどうです？待ってると思います』
「そうだな」

そしてさっさと1階に行くことにした。

「「「「「馳走様でした」「」」」」」

朝食を食べ終え、何をしようか悩んでいたところで周りを見ていると、なのはと目が合ったがすぐに逸らされてしまった。

「貴様！なのはに何かしたのか！」

やはりこうなったか。

「何もしていませんよ、なあなのは？」

「う、うん！何もしてないよ！／＼／＼」

おい。なぜそこで頬を赤らめる。誤解されるだろうが。

「やはり何かしたな！！」

はあ。何を言っても無駄な気がする。

「勝負だ！！」

まあいいか。試したいこともあったし。
そして二人で道場に行く。

「さて、何故こうなったかは知らないけど審判は私がしよう」

「分かった」

「分かりました」

士郎さんと合流し、恭也と試合することになったが死合いにならないだろうな？

というか止めて欲しかったぜ士郎さん……。

お互い武器をかまえる。相手は二刀流だが、こちらはナイフみたい
に短い木刀だ。

「お互い準備は？」

「大丈夫だ（です）」

「ならば、始め!!」

そして始まった試合だが、様子見するべきか？
まずはこれだな。

「蹴り穿つ!!」

――閃走・六兎――

そう俺が今回使うのはとある七夜一族の技だ。

「くっ!!」

しかしぎりぎり回避された。まあ当然か。
なら!これはどうだ!

「斬刑に処す!!」

――閃鞘・八点衝――

一気に攻め込む！

「くっ！なめるな！！」

「なっ！」

まさか全部見切られるとはな。やはり慣れていないせいかな。

「次はこちらの番だ！」

そして恭也は一気に距離を詰めてきた。

くっ！速い。だがまだ見えないほどじゃない！

「いくぞ！」

急に速度が！これが神速か！だがこれくらい！

「極彩と散れ！」

――閃鞘・迷獄沙門――

ほぼ回避不能な速度で叩き込む！

「ぐっ！」

「っう！」

同時に攻撃が当たる。

「やるな、まさかここまでとはな」

「こちらの台詞ですよ、お互いキツイですし次で決めませんか？」

「いいだろう」

さて、結構きついがまだいける！これで終わらせる！
ナイフ形の木刀を上に向ける。
相手も準備できてるな。

「いきますー！」

「いくぞー！」

「極死……」

「うおおおおー！」

「……七夜！」

攻撃は当たったはず！これで倒れなければキツいんだが。

「ぐはっ」

恭也は限界がきたのか倒れた。

「そこまで！勝者、龍斗君」

なんとか勝つことができたか。やはり特訓しないとな。

「やるな」

「もう大丈夫なんですか？」

「話すぐらいならな、これからも相手をしてくれるか？」

「構いませんよ、時々でいいならですが」

まあこちらもいい特訓になるからな。

そつえば俺はどうしたらいいんだろうか？

「すみません」

「ん？何かな」

「俺はこの後どうしたら？」

「そうだな、お店を手伝ってもらえるかな？」

「分かりました」

えっ？急に話を変えるなって？知るか。俺じゃなく作者に聞け。

>>マスターそれは若干メタだと思えます<<

>>メタ？<<

>>いえ、何でもありません<<

おかしな奴だなあ。

とりあえず店の手伝いをしますか！

さて、店の手伝いも終わり夕方だ。

何？店での出来事はだと？特になしだ。

さて、外にでるか。

「すみません、外に出ていいですか？」

「いいわよ、でも6時には帰ってくるのよ」

「はい」

さて何処に行くかというと、山だ。
能力の確認だ。

「では、いつてきますー！」

「はい、いつてらっしゃい」

そして山に来た訳だが。

「結界を張ってくれ」

「分かりました」

さて能力の確認だが、何からしよう。

『まずは魔法の練習をしてみては？』

「そうだな、よし！クロスセットアップだ！」

『Set Up』

そしてB Jが展開される。

「まずは攻撃魔法だな、モードチェンジ！2nd」

『モードチェンジ、ツインガン』

「いくぞ！バレルレプリカ・フルトランス！」

上に向けて撃った攻撃はものすごい威力だと分かった。

「やべえ、むやみに人に撃てねえぞこれ」

『ですね』

この後も色々試したが、威力がやばいものが多く、加減する事に力を入れることにした。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

やはり返事があるといいな。

「あっ！龍斗君どこ行ってたの！」

急になのはが詰め寄ってきた。

「どうした？何か用か？」

「アリサちゃんとすずかちゃんが会わせてっていつてるから明日会いに行くの！」

そうか。そーいえば前は気絶したままだったからな。

「分かった、何時に出るんだ？」

「昼ごろに出るから準備している」

恭也が途中で会話に入ってきた。

「昼ごろか、特にすることがないからいいか。」

「分かりました」

「じゃあ、ご飯を食べようか」

「」「」「いただきます」「」「」

食事もすぐに終わり、準備するために部屋に戻った。

「といても準備する物がないんだけどな」

「明日は忙しくなりそうだ、早めに寝るか」

そして風呂に入り寝た。

第3話（後書き）

今回もだいぶグダグダだなあ。

龍「いつもながらこれは酷い」

ストレートだなおい！

龍「さて、感謝コーナーだ」

無視ですか！

コホン、さてArishia様、マーボー様、感想ありがとうございます！

龍「本当にありがとう」

これからもがんばりますので応援よろしくです！

では！また次回で。

第4話（前書き）

今回も能力の確認などで終わってしまいました。
おそらく無印に入るのに2、3話かかると思います。

第4話

今日はアリサとすずかに会いに行くんだっ たな。
早めに起きておくか。

『おはようございます、マスター』

「ああ、おはよう」

『ところでマスター』

「ん？」

『あの神様からメールが届いていますか？』

「あの爺さんから？まあいい、みてみるか」

早速携帯を開いてしてみた。

「今回は伝え忘れていたことがあったの、実は君の体を真祖の吸血鬼の状態にしちゃった」

「何が だよ！いい加減にしろよ！！いい年こいて何してんだよ！かなり重要なことじゃねえか！」

「もちろん空想具現化はつかえるぞい、あとその世界でだけじゃがスキルにアルティメット・ワンをつけといたぞ！やったのう！」

「何がやった！だよ！ただのチートじゃねえか！」

『マスター、落ち着いて下さい』

「ふうー、すまない動揺してしまった、しかしだとすると不老不死なのか？」

メールにはまだ続きがあった。

「その体じゃがな、体の成長はある程度コントロールできるからの、5歳〜25歳ぐらいじゃがの」

それは助かる。このままだと戦い辛くてしかたないからな。

「では、また今度」

「あの爺さん、次会ったらぶん殴る！」

『マスター、早く行きましよう』

そして下に下りた俺達はなのは達と一緒に待った。

というのも両方に会いに行ったり、片方の家に集まるよりこちらで集まったほうがいいそうだ。

たいして変わらないと思うがな。

「何時に来るって言ってたんだ？」

「昼すぎだって」

だとすると、12時ぐらいかな？

ならもうすぐだな。

ピンポーン

どうやら来たようだ。

「いらっしやい！アリサちゃん！すずかちゃん！」

「おじゃまします」

「で？私たちを助けてくれた人はどこにいるのかしら」

「龍斗君なの！」

なのはよ。名前だけじゃ誰か分からんだろ。

「どうもお二人さん、俺は森 龍斗だ、よろしく」

「私はアリサ・バニングスよ」

「私は月村　　すずかです」

さて自己紹介も終わったし、次はどうするのかねえ。

「私たちを助けてくれたんでしょ？礼を言っわ、ありがとう」

「ありがとうございます」

「何なのにも言ったが気にするな、俺は偶然通りかかっただけだ」

「それでもよ、ありがとう」

「なら受け取ろう」

本当に頑固な奴が多いな。

まあそれがいいのかもしれないが。

「それで？何かお礼したいんだけど何かないのかしら？」

「特にないな、そのために助けた訳じゃないからな」

「ふうーん、まあいいわ、なにかあったら言っ頂戴、可能な限り

叶えてあげるわ」

「ありがとう」

その後アリサとすずか（両方に名前前で呼べと言われた）となのはと一緒に楽しく語り合った。

「今日は楽しかったわ」

「私も楽しかった」

「俺もだよ、実に有意義だった、学校でも世話になる」

「任せなさい！」

「ああ、ではな」

「「「また明日」」」

そしてまだ4時過ぎなので桃子さんに外にでる許可をもらい、また山に行き、体について調べることにした。

「さて、吸血鬼になっていているらしいがどうやら吸血衝動はないみたいだな」

そう俺には吸血衝動がないみたいだ。これは喜ばしいことだ。

「さて空想具現化試してみるか」

もちろん結界は張ってある。

「まずはこれだ！」

――Blut de Scwestern>>ブルート・ディ・シ
ユヴェスタア<<――

地面からいくつもの鎖が生えてきた。

「続いていくぞ！」

――Gnaden Sturz>>グナーデン・シュトース<<――

そしてその鎖にむかって手を振り衝撃波をだす！

「すごいな、まさかできるとは思わなかった」

「あつちもできるのか？」

試してみるか。

「偽りの月よ！」

I Blut de Scwester >>ブルート・ディ・シ
ユヴェスタア<<ー

今度は月落としをしてみた。

「おいおい、まじでできるのかよ」

本当に月が落ちてきた。

「これも人に使えないな、空想具現化の方はともかく月落としはな
『そうですね、非殺傷設定でも厳しいですし』

さて帰りますかねえ。

あっ！もちろん他の技も練習したぞ？

「しかしだいたい威力が高すぎて使えない技が増えたな」
『そうですね、やはり力加減を覚えるべきですね』
「ああ、練習あるのみだ」

さてと。多分もう少して無印が始まる。

それまでに威力をコントロールできるようにしないとな。

第4話（後書き）

龍「さて今回も能力の確認だけで終わったんだが、やりすぎだろどう考えても」

いや、あのね？他の方もすごい能力ばかりだよ？

龍「だとしてもこれはないだろ」

気にするな！俺は気にしない！

龍「はあ、さて感謝コーナーだ」

A r i s h i a様、雨季様、感想ありがとうございます！

龍「本当にな、こんな駄文を読んでくれるよな」

ぐうう。ま、まあとりあえず今回もお楽しみいただけたらうれしいです。

それではまた次回！

デバイス設定（前書き）

今回はデバイスの設定です。

見苦しいとは思いますが、気楽に見てください。

デバイス設定

ブラッディクロス

愛称 クロス

待機状態は紅色の十字架のペンダント

マスターの龍斗にたいしては忠誠心が強い。

他の人は龍斗が助けたいと思った場合は助けるがそれ以外には関心がない。

モード

最初の状態はナイフ。

接近戦重視のため身体強化と飛行魔法以外はあまり使わない。

2ndモードはツインガン。

中距離から遠距離にかけて戦うため、補助と攻撃両方の魔法を使う。

3rdモードはマントになる。おもに近、中、遠どれでもいける。

魔法はワラキアの夜と同じものや、投影魔術などを使う。

フルドライブは日本刀。

神速以上の速度を出すため、体への負担が大きい。

どうしてもという時にしか使わない。

魔法はなるべく負担を削るようを使う。

フルドライブの状態で空想具現化を使うとデバイスの補助のおかげで威力が上がる。

もちろんコントロールもできる。

BJは志貴の制服を黒くし、マントをつけた状態。3rdモードの
マントはBJに元々あるマントと一体化させたもの。

デバイス設定（後書き）

龍「今回は俺のデバイスのクロスの設定か」

ああ。

龍「珍しいタイプのデバイスだといいな」

そうなんだよなー。まあ俺の頭じゃあこれが限界だよ。

龍「さて、作者が落ち込んでいるが、感謝コーナーだ」

龍「雨季様、Arishia様、メガネ様、感想ありがとうございます」

ありがとうございます！

龍「今回はデバイス設定だが、次はきちんと本編だ」

ですので次回を頑張って書きます！

もうしばらくお待ちください。

それでは！また次回！

第5話（前書き）

今回は今まで以上にグダグダです。
それでもいい方はどうぞ！

第5話

さて、今日から学校か。
まさかまた小学校に行くとはな。

『マスターおきてますか？』

「ああ、起きてるぞ、しかし吸血鬼になったと自覚すると朝日がだるい」

『しかたありませんよ、吸血鬼ですし』

まあクロスの言う通りなんだが。灰にならないだけいいか。

「龍斗君、起きているかい？」

「あ、はい起きてます」

「朝ごはんがもうすぐできるからなのはを起こしてきてくれるかい？」

「はあ、分かりました」

士郎さんは何故俺に？

まあいいか。さっさと起こしにいくか。

「おい、なのは起きろ」

「うっん、後5分」

なのは寝起き悪いな。

仕方ない。こつなつたら！

「なのは起きろ、でないと……」

「うにゃ〜!!!／／／」

起きたか。よかったよかった。

「な、な、何を言ってるのかな！龍斗君は！！」

「何って？」

「それは〜その〜」

「早く起きないとなのはの分の〜ご飯食べちまっぞと言おうとしてただけだが」

「／／／／」

まったく何と勘違いしたのやら。

「さっさといくぞ」

「ま、まって〜」

さて。なのはを起こしたことだし士郎さん達に聞いてみるか。

「すみません」

「ん？どうしたんだい？」

「学校は今日からですか？」

「そうだよ、もう編入準備も終わっているよ」

「い、いつの間に」

「昨日の内にね」

まったく。行動が速いというかなんというか。

「はい、これが制服よ」

「あの、何故サイズが丁度なんでしょうか？」

「ふふふ」

その笑顔が怖いです桃子さん。

「早く学校に行くの!」

「分かった分かった」

早速準備することに。本気でどうやって知ったんだろつか。怖いから気にしないでおこつ。

「「いつてきます!」「」

「はい、いつてらっしやい」

学校か。まあ楽しむしかないか。

「龍斗君!バスがきたの!」

「そうか、わかった」

そしてバスに乗り込むと、アリサとすずかに手を振られた。

「ほらほら、こつちよ!」

「おはよう、なのはちゃん、龍斗君」

「ああおはよう、アリサ、すずか」

「おはよう!アリサちゃん!すずかちゃん!」

後ろの席に4人で座った。

その後学校に着くまで喋り続けた。

「それじゃな、職員室に行ってくる」

「また後でね」

「一緒のクラスだといいいね」

「うん!」

こうしてなのはたちと別れた。
なんか同じクラスになりそうだ。

「すみません、今日から編入する森 龍斗です」

「あゝ君がね、君の担任は私よ、よろしく」

「よろしくお願いします」

「ついて来て」

そして教室に案内された。

「はい静かに！今日からこのクラスに転校生が来ます」

「先生ー、その子は男ですか？女ですか？」

「男の子よ、さあ入って！」

今時の小学生はあんな質問をするのか。

「はい自己紹介して」

「森 龍斗だ、趣味は読書と昼寝だ、好きな食べ物は寿司で嫌いな食べ物は茄子だ、よろしく」

「仲良くしてあげてね」

「「「はい！」」」

本当に元気だな子供は。

「じゃあ君の席は…なのはちゃんの隣が空いてるからそこに座ってくれるかな？」

「分かりました」

なのはの隣か。だいぶ気が楽だな。

「なのは、よろしくな」
「うん！」

たいした事もなく、まあ質問攻めされたぐらいか、学校は終わり家に帰る準備をする。

「さて、帰るか」

「一緒に帰るの！」

「そうだな」

「それじゃな、二人とも」

どうやらアリサとすずかは習い事があるらしい。

「ええ、また明日」

「また明日、なのはちゃん、龍斗君」

なぜか家に帰る途中から不安で不安で仕方ない。

「どうしたの？龍斗君」

「いや、なんでもないさ」

そう気のせいだよな？

そうこうしているうちに家に着いた。

「「ただいま」」

「おかえりなさい、二人とも」

よかった。気のせいか。

「ところで龍斗君」

「はい？」

「これを着てみてくれないかしら」

そうして渡された服はメイド服。

いやな予感はいか！！

「あの、俺は男ですよ？」

「分かっているわよ？男の娘でしょ？」

何かが違うぞ！！

「あのぉ、拒否権は？」

「あら？私は頼んでるだけよ？」

「な、なら」

「頼んでるだけよ？」

ああ。用は拒否権はないと。

そして桃子さんはじりじりと近づき。

「う、あ、うわあああああ！！…！」

その後メイド服の格好で店の手伝いをした。

「くそそう、なんで俺がこんな目に」

本当に不幸だー！

『マスターお疲れ様です』

もういやだ。もう二度としないぞー!!

『それはフラグです』

第5話（後書き）

龍「なんで俺がこんな目に」

さあ主人公がいきなり落ち込んでいますが、後書きコーナー始まるよー。

まずは感謝コーナー！夜神様、感想ありがとうございます！新しく増えるとうれしいです。

龍「そうだな……、俺はそんなに女顔か？」

うん。そりゃあ参考にしたキャラがキャラだからね。

龍「誰を参考にした？」

メルブラの姫アルクを男にしたバージョンがお前だ。

龍「殺す！」

えっ！

龍「スヴィア！ブレイク！スライダー！」

ぐふあああああああ！！！

龍「ふう、ではまた次回」

第6話（前書き）

今回もグダグダです。

それと別の作品のキャラがでます。

ここから少しオリジナルです。

原作にも少し絡ませるつもりです。

第6話

昨日のことは忘れよう。
うん。それがいいよな！

『マスター、現実逃避はそこまでにして下さい』
「結構鬼畜だなお前」

はあ。まあしばらくはないよな？
ないはず！

「そうだ、何事もポジティブに考えよう」
『その意気ですマスター』

さて飯食いにいきますか！
えっ？性格が違う？テンションあげていかなばやってられんわ！

「いやー、やっぱり似合うと思ったのよー！」
「な、なんのことです？」
「モチロン女装よ、これからも時々着せるかもね」

くっ！逃げ場がないだと！

>> 現実是非情ですねくく

どうしてこうなった。

「はあ………」

「げ、元気だすの！似合ってたよ！」

「なのは……それはトドメだ」

「うえっ！え、えっと……ごめんなさい！」

「いや、いいよ、もう」

いつまでもこうしてる場合じゃないな。

色々準備しないと！それにはまず能力を鍛える！

（幸い今日は早めに学校が終わるからな、また特訓ができる！）

「またよろしくね（女装的な意味で）」

もう愛と勇気だけが友達でいいかもしれん。

「それは見てみたいわね」

「あはは……」

「お前らもか」

そんな話をしながら学校へ行っていた。

学校では男子からラブレターを貰ったりした。

まったくもって訳が分からん！

「俺は男だといってるのにな」

むしろそれがいいとはなんだ！理解しがたいぞ。

「ははは……」

「まっ、女顔のあんたがいけないんじゃない？」

「ア、アリサちゃん！」

くっ！この顔がいけないのか！

「ま、まあ気にすることはないわよ！あんなの無視すればいいじゃない」

「そうなんだがな、一応返事は返しておかないとな」

「変に律儀よねアンタ」

変じゃないだろうに。

そうこうしている内にチャイムが鳴った。

「さて、終わった終わった」

「龍斗君！一緒に帰るの！」

「悪いな、少しよる所があつてね、先に帰っていてくれるか？」

「分かったの」

少し機嫌が悪くなった？何故だ。

>>このニブチンマスター<<

>>いきなりひどい言い草だなく<<

俺は鋭いつもりだが。

(それが鈍いんですよ)

なんだろうか。かなり失礼なことをいわれた気がした。

「じゃあな」

早めに行くことにする。

山につくと早速結界を張り、能力の特訓を始めようとすると、

『マスター、近くに生体反応が』

「何？どこにいるか分かるか？」

『50mほど後ろです』

「かなり近いなオイ」

一体なにがいるんだ？

後ろを見てみるととても大きな黒い熊がいた。

「はっ？」

おもわずそんな反応になってしまった俺はおかしくないはずだ。
なんせどう考えてもあれは……。

(ネロ・カオスの分身だよな……)

だがなぜここに？この世界ではないはず。

「ふむ、何故私がここにいるか分からんが、呼ばれたのならその役目を果たすまで」

「ネロ……カオス」

そこにいたのは月姫やメルブラにでていたネロ・カオスだった。

「何故貴様がここに？」

「ふん、私も知らん、だが呼ばれたのなら私は全てを喰らい尽くすのみ」

どうやらあちらも理由は分からないらしい。
まさかロアもいるのか！

「貴様：まさか真祖か？」

「だったらどうする？」

「我が混沌にて喰らうまでだ」

「させるとでも？」

いつでも攻撃できる準備を！

「起きよ、食事の時間だ」

「お前はここで殺す！」

「ならば、ゆくぞ！」

そうして戦闘が始まった。

「いくぞ！」

――閃鞘・七夜――

相手の頭上に移動し斬りつける！

「ふん、甘いわー！」

ネロ・カオスの体から獣がでてき、反撃してきた。

「くっ！これじゃあだめか」

やはりこの程度じゃ見切られるか。

「ならこれならどうだ!」

——閃鞘・一風——

相手を通り過ぎるまでに斬る!

「ぬっ!」

よし!当たった!

「ならばこちらからゆくぞ!」

——混沌開放・黒翼種——

「食らい尽くせ!」

数が多い!

仕方ない、こつなつたら!

「くっ!」

Il Blut de Scbwesterr>>ブルート・ディ・シ
ユヴェスタア<<——

空想具現化で壁を生成し防ぐ。

「やはり使えるか」

やばい!まだくるか!

「ならばこれはどうだ」

――混沌開放・幻想種――

くう！今度は幻想種か！

ならば、直死の魔眼で、

「斬刑に処す！」

――閃鞘・八点衝――

切り刻む！

「その眼は……、そうかあの小僧と同じ眼か、ふははははは！奴と同じく我を殺すか！」

「言った筈だお前はここで殺す！」

「いいだろう！我が全力でもって貴様を潰す！」

――武装666――

ネロ・カオスは姿を変え突進してきた。

「弔毘八仙、無情に服す！」

――閃鞘・迷獄沙門――

こっちはナイフを持つ手とは反対の手で掴みに行く。

「うおおおおおおお！」「」

ぐしゃ！

そんな音が聞こえたきがした。

「ぐうう、その眼には勝てんか、やはり私の終焉はこころしい」

「じゃあな、ネロ・カオス、もう二度と出てくんないよ」

「ふっ、それは約束できんな、舞台はまだ開演中なのでな」

「なっ！タタリがいるのか！」

そしてネロ・カオスは消えた。

だがタタリがいるとするとまた戦うことになるな。

「どうなってるのやら、まあややこしくなってるのは確かか」

『どうするんですかマスター』

「とりあえずは警戒するしかないだろう？」

被害がでなければいいが。

第6話（後書き）

龍「まさかネロ・カオスがでるとはな」

うん。オリジナルというよりかメルブラのタタリを混ぜようかと思
った。

龍「お前：後のこと考えているのか？」

いんや、全然。行き当たりばったりなのですよ。

龍「星の息吹よ！」

I I Blut de Scbweste r >>ブルート・ディ・シ
ユヴェスタア<<ー

ぐふあ！！

龍「ふう、さて感謝コーナーだ」

A r i s h i a様、メガネ様、夜神様、雨季様、感想ありがとうこ
ざいます！！

龍「ちっ！もう復活しやがった」

作者は不死身です！！

龍「まあいい、こんな作品だがこんなに感想をくれるものなんだな」

とても感謝です！！

では！また次回！！

第7話（前書き）

今回もグダグダの戦闘ですが、気楽にお読み下さい。

第7話

昨日は大変だったな。

まあしばらくはないだろうが。

『一応の警戒はしておきます』

「ああ頼む、なにかあってからじゃ遅いからな」

そうだ。せめて目の前の人間くらい助けたいからな。

今日は学校がないからな。

『では今日は何をする予定ですか？』

「そうだな……」

悩むな……。能力はある程度確認したし、昨日のあれはしばらくないだろうが、

「見回りかな？」

『見回りですか』

「ああ、もしかしたらイレギュラーがあるかもしれんからな」

警戒しといて損はないからな。

『分かりました、どのぐらいまでするのですか？』

「とりあえず近くからだな、遠くはサーチャーでも使えばいい」
『了解』

さて。なにもなければいいが。

今昨日の山に来ている。
もしかしたら何かあるかもしれんからな。

「どうだ？何かあったか？」

『特には』

「そうか」

何もなしか。何かあれば対策がとれたかもしれんが仕方ない。

「他をまわろう」

『はい』

もしタタリがいるなら、何かしてくるはずだが。
まさかもう次の奴がいるのか？

「クロス、サーチャーの範囲を広げてくれ」

『分かりました』

勘はあたって欲しくないんだが。

『マスター！2km先に何かいます！』

くそっ！次は誰だ！

「どうした？そんなに慌てて」

「お前は……」

「俺を知ってるのかい？なら話は早い……さあ、殺し合おう」

次は七夜 志貴か！

直死は持つてるのか？それによつては対応が変わるんだが。

「どうした？こないのか？ならこちからいくぞ」

「くっ！」

「寝てな！」

――閃鞘・八穿――

くっ！食らうとまずい！

「斬る！」

――閃鞘・七夜――

上に回避して斬り込む！

「ほう、あんたも使えるのか、ますます面白い！さあお互い、遠慮なしに燃え尽きようぜ！」

「お前だけで燃えてろ！！！」

とりあえず攻撃に当たらないようにしないとな。

「斬刑に処す！」

――閃鞘・八点衝――

「うおっと、やれやれ、つれないなあ、せつかく殺し合つんだ、楽しまないとなあ！」

「蹴り穿つ！」

——閃走・六兔——

「何！」

全てよけただと！

「おいおい、せっかくこつちがやる気になってんのにそれはないだろ……、本気で来いよ！」

仕方ない。七夜の技が通じないなら、両儀の技だ。

「いくぞ……見えた！」

——直死の魔眼・七景終落——

姿勢を低くし直死の魔眼を発動させ突っ込む！

「何！」

ザクッ！

「くっ、いいねえ、やっぱりこつじゃなきゃな！」

腕を一本斬り落としただけかなら！

「次で終わらせる」

「いいぜ、来いよ」

武器をナイフから日本刀に変える。

「極彩と散れ！」

――閃鞘・迷獄沙門――

「終わりだ」

――無垢識・空の境界――

勝負は一瞬でついた。

「ぐはっ！」

七夜は力尽きたように倒れたが俺が近づくと急に喋りだした。

「楽しい、楽しすぎだってアンタ、軋間と同じくらいにな」

そう言って笑う。

「ああくそ、目が見えなくなってきたな」

悔しそうに笑っていた。

「くそ、もう少し、もう一秒だけでもいいから
続けていたかったが……この未練が、
オレには相応しいんだろうな」

「だろうな」

「ははっ、言うねえ、まっいいさ、ここで塵のように消えるさ、じやあな、また殺し合おうぜ」

「お断りだ」

「つれないな、本当に……まあいいか、満足だ」

そう言っつて笑顔で消えた。

「ふう、なんとかなっただか」

『マスターお疲れ様です』

「まっただか、殺人貴とは戦いたくないね」

どうやら直死の魔眼は持っていなかった様だが、本当に疲れた。しばらくはないことを祈ろうか。

家に帰り飯を食い、風呂に入った。

「さて、もうそろそろ無印が始まるな」

『はい』

「タタリが紛れ込まないように気をつけないとな」

『ええ、なのはさん達では対処できないでしょうからね』

「ふぁ、眠い……、おやすみ」

『おやすみなさい』

そして寝る直前に開始の合図が聞こえた。

>> 誰か、助けて……<<

開始の時は近い。

第7話（後書き）

後書きコーナー！

龍「あれはないな」

いきなりですか。

龍「それは仕方ない、他の人も早く原作入れと思っているだろう」
た、確かに。

龍「次には入るんだろう？」

ああ、多分……。

龍「はあ、こんな作者だが見捨てないでやってくれ」

うう。こほん！とりあえず感謝コーナー！！

龍「A r i s h i a様、夜神様、雨季様、マーボー様、メガネ様、
感想ありがとう」

ありがとうございます！！

龍「次は無印に入る予定だから、あまり期待せず待っていてくれ」

ま、まあ仕方ないか。

うちのキャラを使いたい方はどうぞ！

龍「いないだろそんな人」

いいんだよ！とりあえず頼んどくんだよ！

龍「はあ、ではな、また次回」

さよならー。

第8話（前書き）

今回から無印に入ります。基本グダグダですが、おおめにみてくだ
さい。

第8話

昨日のあの声はユーノだろうな。
ということとは、今日から始まるわけか。

「悔いの残らないようにしようか」
『そうですねマスター』

俺は俺のできることをする。
それだけだ。

「さて、またなのはを起こしにいくか」

まあ前と同じだと恭也がうるさいから普通に起こしたかな。

「「「「「馳走様でした」「」「」」」」

朝食を食べ終えたからさっさと行くか。
その後今日の予定について考えていると、

「ねえ龍斗君、昨日変な夢見なかった？」

変な夢か……、まあユーノが関係しているのは確定だな。

「ああ、確かに変な夢をみたな」

「本当?!」

「嘘を言っただろうか」

「なんなんだろうね?あの夢」

「さあな?」

言えるわけないよな。実はあれは実際にあったことだなんて。

まあその後学校に行ったんだが、またラブレターを5通ほど貰った以外は特にないな。(そのうち3通が男からで残り2通が女だ)もちろん断った。

そして昼休み。

「龍斗！」

「ん？なんだ？」

「さつきからずつと呼んでたんだから、さつさと反応しなさいよ！」

「悪い悪い、それで？話の内容は？」

「だ・か・ら！将来の夢に決まってるでしょ！」

「将来か……、とりあえず安定した仕事につきたい」

「あ、あんた夢がないわね」

「仕方ないだろ、そんぐらいしかないんだからな」

「あ、あははは」

なんだなのはとすずか、苦笑いとは失礼な。

そんなたわいもない話をしているうちに、昼休みは終わった。

そして放課後。

「こっちのほうか近道なのよ、道は悪いけど」

そう。もうすぐユーノ(という名の淫獣)を拾うところだ。

そして俺はその道に付き合っているとこだ。

「こっ、夢で見たような」

なのはもう気がつき始めているな。
さてと、もうそろそろご対面か。
どう対処しようかな？

「龍斗君！」

「何だ？」

「さっき何か聞こえたの！」

「どっちだ？」

「こつちななの！」

「ちよつと！二人とも待ちなさいよ！」

「なのはちゃん！龍斗君！」

くそっ！考えているうちに聞こえてたのか。

「あっ！何かいる！」

「ほんとだ」

ふむ、ようやくユーノを見つけることができたか。

「この子怪我してる！」

「どうしよう！」

「落ち着け、近くに動物病院があったはずだ、そこに連れて行け」

「龍斗君は？」

「俺は少し調べてくる」

「何をよ」

「怪我の原因をな」

そして三人と別れた。

その後家で待っていると、なのはが家で飼っていいか聞いていたので変わりないだろう。

そして夜。

さきほど念話で助けを呼ぶ声が聞こえてきたので、始まるだろう。

「さて、なのはも出たことだし、俺達も出るか」
『そうですね』

そして俺達も声が聞こえた所に行くことにした。

そして着いたわけだが、
やっぱり変身してぼうつとしている。ちっ！思念体が動き出した！
なのはがあぶない！

>なのは Side <
昨日と今日聞こえたあの声の元に行くためにあのフェレットを預けた動物病院に向かったの！
するといきなり大きい爆発とともにフェレットが飛んできた！
なんとかキャッチすると、

「すみません、助けてください」

「喋った！」

「今はあまり説明している時間がありません！、お礼はします！だから助けて下さい！」

「お礼とか言ってる場合じゃないでしょ！どうすればいいの？」

「これを、これを使ってあいつを封印して下さい！」

「ど、どうやって？」

フェレットさんがきちんと説明してくれたの！

別に作者さんがこれ無理って諦めた訳じゃないの！

「セーットアップ！」

『Set Up』

すると急に光りだしたの！

「すごい、なんて魔力だ、とりあえず杖とB Jを想像して！」

そういわれたので、

とりあえずこれでいいやとすぐに考えたの。

すると光が収まり、自分の格好は学校の制服に似た服になりました。

「ふえええええ！」

驚いていると、黒い怪物が襲ってきたの。

ぶつかる！そう思って目をつぶっていると、いつまでも衝撃がこなかつたから目を開けてみると、そこには龍斗君がいたの！

>>なのは Side End<<

まったく……。

なんとか間に合ったか。

「龍斗君なの？」

「それ以外に見えるのか？」

「う、ううん」

「ならよし、さてそのフヘレット」

「は、はい……」

『封印』

そして無事ジュエルシードを封印できた。

「さて、とつとどこから離れるぞ」

「どうして?」

「この状態でいつか?」

もう遠くからパトカーのサイレンが聞こえる。

「い、ごめんなさーい」

「はあ、少しやりすぎたか?」

その後なんとか逃げ切り、自己紹介をすませ、家に帰ってきた。

どうやらなのははばれていないと思っただらしい。

もうばれているのにな。

「おかえりなのは、一体どこに行っていたのかな?」

「ふえ!? えつと……」

はあ。そこでつまるなよ。

「すみません土郎さん、どうやら今日預けたフェレットがどうしても気になったようなので、一緒に見に行ってみました」

「そうかい、しかし一言言ってからでもよかったんじゃないかい?」

「はい、すみません、次からは気をつけます」

「なのはもだぞ?」

「うん!」

ふう。まあ誤魔化せてないだろうけどな。

「今日はもう遅い、早く寝なさい」

「はい」

「分かりました」

なんとか今日は無事に終わったな。
部屋に戻るとなおさら思っちまう。

「しかし、微妙にちがったな」

『そうですね』

本来は何もしなくてもなんとかなっただけだからな。
少しばかり警戒しておこう。
タタリも含んでな。

『これからも今日みたいにするつもりですか？』

「ああ、基本封印はなのはに任せよう、どうしようもなくなった場合のみ介入する」

『分かりました』

さてもうそろそろ寝るかな。

無印は始まったんだ、頑張るしかないからな。

「じゃあ、おやすみ」

そして俺は眠った。

明日からの出来事に備えて。

第8話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「グダグダだな」

認めざるおえない。

龍「だろうな、あれはひどい」

仕方ない。ほとんどろ覚えだからな。

龍「何故それで書くこうと思った」

書きたいから！！

龍「はあ、こいつに何を言っても無駄か」

失礼な。ともかく感謝コーナーだ！！

龍「夜神様、マーボー様、ユタ様、感想ありがとうございます」

ありがとうございます！！

龍「こんなに読んでくれる人がいるんだ、もっと頑張れよ」

ああ！今の俺ができるかぎりな！

龍「それでいい、では今度はおそらく1月2日以降だと思っが、気

長に待っていてほしい」

すみません。しかし！帰ってきたらすぐに次の分を書くので許してください！！

龍「それではな」

さよーならー。

第9話（前書き）

今回も戦闘です。

ただしグダグダです。

それでもいい方はどうぞ。

第9話

あのなのは初めての魔法戦があつてからすこしたつたが、あれ以降特に変わったことはなかった。

このまま、無事に終わればいいが。

さて今俺は何をしているかというところ、また女装させられている。別に趣味でもオシヤレでもない！否！断じて否！
今日はゆっくりできると思っていたのになあ。

「はい、龍ちゃん、これをあのテーブルに持っていってくれるかしら」

「了解」

そうさ。分かっていたさ。逃れることができないことぐらい、だれにと夢を見てもいいだろう？

「次はあつちね？」

「はい……」

ああ。疲れた。

なによりも何か捨てちまった気がするぞ。

「さて、今日も見回りだな、もうそろそろでてくるか？」

『そうですね、もう反応は分かりましたから、こちらも反応できるかと』

さすがだな。これでかなり後手にでなくてすむな。

「じゃあ今はいるのか？」
『調べてみます、少しお待ちください』

そうしてクロスは黙った。おそらく、調べるのに全力を出しているんだろうな。

『マスター、出ました』

「どこだ？」

『あの山です』

「またか……」

あの山には何かあるのか？

「早速行くぞ」

『了解しました』

桃子さんの許可を貰い、山に向かった。

「さて、この辺りのはずなんだがな」

山にきて、早速調べているが、気配はするが見えない状態だ。油断はできない。

『マスター！上です』

「何！……」

上を見てみると確かに何者かが向かってきていた。

「ふむ、なるほど、これを避けますか」

避けてその姿を確認すると、そこにはシエルがいた。

「次はシエルか……」

「私の名前をしっているのですか……、何者かは知りませんが、あなたからは人の気配がしません」

そして少し溜めた後言った。

「ですので、私が浄化します！」

いきなりか！！

「ゼロ、ゼーノ！」

――黒鍵・断罪（第一符）――

黒鍵が投げつけられる。

「クアットロ、キャトル！」

――黒鍵・割礼（第二符）――

ちっ！面倒だ！

「セツテ、セツト！」

――黒鍵・断頭（第三符）――

トドメといわんばかりに三射目が投げられる。
だが、

「この程度か？」

そう言っただけで叩き落とす。

「やりますね、いいでしょう、私も本気を出します！」

やれやれ。じゃあこちらからも行きますかねえ。
ただし、今回はメルブラの技はなしだ。

「いくぞ……！」

——氷翔剣——

まずは牽制からだな。

「このぐらい！」

まあ避けられるわな。

「食らいなさい！」

その攻撃を待っていた！

「食らえ、虚空刃……！」

——虚空刃・雪風——

「雪風……！」

がら空きの状態に剣で斬りつける！

「がはっ！」

よし！なら次はこれだ！

「クロス！モード2nd!!」 『モード2nd』

銃に切り替え撃つ！

「食らえ!!！」

——零銃・フェンリル——

零距离からの射撃だ。

死にはしなくてもダメージはかなりあるはず。

「がはっ！」

シエルは相当堪えているな。ならあと一撃。

「くっ！」

——第七聖典・原罪救済——

「セブン！コード…スクエア!!！」

相手も終わらせにきたか。
ならば俺も終わらせる！

――千魂冥烙――

「人より千の死を与えし冥府の蛇よ！……そのアギトで……全ての魂を食い尽くせ！！！」

ウロボロスを使い一気に攻める！！

グチャッ！

そんな音が聞こえた。

「やはり無理でしたか」

「分かっていたのか？」

「ええ、あの真祖と同じ気配、いやそれ以上の気配を感じましたから」

いくらタタリで出現していようと、それぐらい分かるのか。

「それでは、さようなら」

「ああ」

そして前の奴らと同じように消えていった。

「さて、帰るか」

『そうですね、マスター』

しかし。何故こんなにメルブラのキャラばかりでてくるんだ？
タタリなら他のものもいけるはずだが。
まあいいか。今は警戒していればいいか。

「今日も大変だったな、特に店の手伝いが」

『そうですね』

「帰ったら寝る、今日は疲れた」

家に帰ったら、なのはの機嫌がかなり悪かった。

何故かと聞くと、すずかの家に行く予定だったのに俺がいなかったためである。

これは仕方ない。

なのはにはできる限り言う事を聞くということにしたらすぐに機嫌がよくなった。

何故？

『マスターの鈍感（ボソツ）』

そんなことを言われた気がした。

その後部屋に戻ってクロスと相談した。

「どうやらフェイトとの初戦を見るのは失敗したらしい」

『そうですね、なるべく会っておきたかったですね』

まあいいか。まだなんとかなる。絶対に後悔をしないように頑張ってみせるさ。

そう一層深く自分に刻みこんだ。

第9話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「少し送れて貴様は反省もなしか？」

滅相もない！しっかり反省しています！！

龍「なら何故家に帰ってきたときにすぐに書かなかった？」

そ、それはぐえつくと？

龍「言えないか、なら俺が言ってやるうか？」

ブレイブルーやってみました！！すみません！！

龍「なら次はもっと早く書くんだな」

分かったよ。

さて！感謝コーナー！！

龍「夜神様、雨季様、Laptop様、感想ありがとうございます」

ありがとうございます！！

龍「無印は後何話で終わるか分からんが、読んでくれるとうれしい」

今回も文がひどいですが、これが俺の全力です！
なのでご勘弁を。

龍「いや、向上しろよ」

もちろん！

龍「ならよし、ではな」

では！また次回！！

第10話(前書き)

今回は龍斗がフェイトに出会います！
グダグダですが見ていってください！

第10話

今日はなにかあったかな……。
そう確認していると、

「龍斗君！起きてるの？」

なのはが来た。

「どうしたんだ？なのは」

「ちよっと相談があるの」

「分かった、俺でよければ聞こう」

なのはが俺に相談？魔法関連かな。

「で？なにが聞きたい」

「この間会った子についてなの」

フェイトのことが。

「それで？」

「色々話したいことがあったのに意味がないって断られたの」

「そうか……。ならひたすら話すしかないだろうな、意味がないなら作ればいいしな」

「うん！分かったの！」

まあなんとか元気になったか。

これで次にフェイトに会う時はましになるかな？

「それじゃあいつてくるね！」

「何処にだ？」

「ジュエルシードを探しに！」

「分かった、俺も後で行く、何かあったら言ってくれ」

「分かったの！」

さて色々準備するか。

そして夜になった。

すると、

>> 龍斗君！ジュエルシードを見つけたの！だけどあの子が！<<

>> 分かった、すぐ行く<<

どうやら始まったみたいだな。おそらく今日がジュエルシードの暴走する日だな。

「早く行くぞ」

『了解です、マスター』

セットアップしてからなのはのもとに向かった。

>なのは Side<

フェイトちゃんが今回もいた。

龍斗君の言った通りひたすらに話しかけるの！

「話し合っただけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ってたけど……だけど、話さないと……言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ！ぶつかり合ったり、競い合ったりするのは、それ

は仕方ないのかも知れないけど……だけど！何も分らないままぶつかり合うのは……私、嫌だ！！」

私の思いを精一杯伝える！

「私がジュエルシードを集めるのはそれがユーノ君の探し物だから……ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユーノ君はそれを元通りに集めなさいといけないから！ 私は、そのお手伝いで………だけど！ お手伝いをする事になったのは偶然だったけど……今は自分の意思でジュエルシードを集めて、自分の暮らしている町や自分の周りの人に危険が降りかかったら嫌だから………これが、私の理由！！」

私の気持ちは精一杯言ったの！

「わ、私は……」

伝わった？！

「フェイト！答えなくていい！優しくしてくれる人たちのところでぬくぬく甘ったれて暮らしているガキンチョになんか何も教えなくていい！私たちの最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！！」

うっ！もう少しかったのに……。

落ち込んでいると、フェイトちゃんがジュエルシードに向かっていったの！

「なのはー！」

私も急いで向かう。

するとジュエルシードに互いのデバイスが交差するように当たる。
するとジュエルシードからすごい光が！

「ぎゃああああー!!」

あまりの勢いのせいで吹き飛ばされた。

「ごめんねレイジングハート」

レイジングハートを待機させる、ごめんね。

「フエイト!!」

気がついたらフエイトちゃんがジュエルシードに向かっていたの！
でもデバイスなしでの封印は危険じゃあ。
そう考えていると、

「たくつ、何をしているんだ？」

今一番頼りになる人の声が聞こえた。

>なのは Side end<

あーあ。間に合わなかったか。
けどまだフエイトが無理やり封印する前に来れたか。

「たくつ、何をしているんだ？」

そう言ってなのは達に近づいていく。

「あなたは……何者ですか？」

やはり警戒しているか。
当然だな。

「その方法は危ないことだと分かっているだろ」
「でも必要ですから」

やはり頑固だな。

「名は？」

「えっ？」

「名前は何だと聞いたんだが」

「フェイト・テスタロッサ」

「そうか、いい名だな」

「／／あ、あなたの名前は？」

「俺か？俺は森 龍斗だ、龍斗でいい」

よかった。自己紹介はなんとかできたか。

「さて、フェイト」

「何？」

「今回のジュエルシードは俺に任せてくれ、次なのはと戦ったときに勝ったら渡すから」

「……分かりました」

「フェイト！」

「いいのアルフ、この子に任せよう？」

「フェイトが言うなら従うけどさ」

なんとか納得してくれたか。

「じゃあジュエルシールドを封印してくる、少し下がれ」

そうしてなのは達を下げた。

「いくぞ！」

Il Blut de Scwester >> ブルート・ディ・シ
ユヴェスタア << ー

空想具現化で鎖をだしジュエルシールドに巻きつける。

「さらにいくぞ！」

Il Gnaden Sturz >> グナーデン・シュトース << ー

一気に魔力を纏った手を振りかざす！

「クロス、これでいいか？」

『十分です、封印します』

「ああ、頼む」

ん？周りの奴が全員驚いているが、何故？

「あれはいつたいたいなんだ！」

ああ、あれか。まあレアスキルとでも言っていればいいか。

「レアスキルだ」

「デタラメなの」

確かにな。

「さて、今回は俺が預かる、それでいいな？」

「はい、でも次は貰います」

そう言つてフェイトたちは去つていった。

その後なのはとユーノに色々問い詰められたが誤魔化した。

さて、今回は何もでなかったが、いつタタリの影響でおかしくなるとも限らない。

あの眼も慣れとかないな。あれがあれば魔力を使うのも楽になる。

「また練習かなあ」

『どうしたんですか？マスター』

「ああ、あの眼を一度も使ってないからな、練習していないときついしな」

『あの眼とは？』

「ああお前は知らなかったな、妖精眼>>グラムサイト<<だよ」

『そうですか、何時なさるのですか？』

「そうだな、いざとなつたら別荘を使うか」

『あれをですか』

「ああ、じゃあ俺は明日に備えて寝る、おやすみ」

『はい、おやすみなさい』

そして今日は終わった。

次はおそらくあのKY執務官が来るからな、あいつは一回ボコる。そう決めて俺は眠りについた。

第10話（後書き）

後書きコーナー!!

龍「今回でようやくか」

そうだね、仕方ないよね、俺がアニメをもつほとんど覚えてないもの。

龍「だから何故書いた……」

書きたかったからさ!

龍「そうかい……」

さてっ!感謝コーナー!

龍「はぁー、さてユタ様、マーボー様、メガネ様、感想ありがとう」

ありがとうございます!!

龍「本当にな、そろそろ番外編でも書かないのか?」

俺にそんなものが書けるとでも?

龍「書け、PV一万超えただろうが」

た、確かに。

龍「なんか記念に書け、それぐらいできなくてどうする」

うっ！ま、まあ余裕ができたらね？

龍「ちっ！まあいいだろう、だが絶対に書けよ？」

分かってるさ！……多分。

龍「死ね！」

——煉獄氷夜——

ぐ、ああ、ガクッ。

龍「なるべく次のやつも急がせるので勘弁してほしい、ではな」

第11話(前書き)

今回はいままで以上にグダグダです。
それでもいいならどうぞ！

第11話

前回の衝突から数日たった。
レイジングハートも完全に修復したから今日あのKY執務官が来るな。

「さて、どうしてやるうか」

『どうしたのですか？マスター』

「いやな、KY執務官をどうしてやるうかと思ってな」

『そうですか、ならほどほどに』

「ああ、やり過ぎないようにするさ」

そう、やり過ぎないさ。

そうして話していると、魔力反応があった。

「これは……」

『これはジュエルシードですね、行きましようマスター』

「ああ」

早速ジュエルシードのもとにむかった。

「なのはー！」

「龍斗君ー！」

「どうだ？倒せそうか？」

「バリアが破けなくて……」

「そうか」

そうだったな確かバリアがあったな。

「なら俺が破るから後は頼む、フェイトもな」
「うん」

どうやら原作よりは険悪ではないな、よかった。

「じゃあいくぞクロス」
『了解』

「いくぞ、氷夜に沈め！」

――煉獄氷夜――

かなり加減した煉獄氷夜を叩き込む！

「いまだー!!」
「うん！デイバイーン……」
「サンダー……」
「バスター！」
「スマツシャー！」

二人の魔法で封印は簡単にすんだ。

「ジュエルシードには……衝撃を与えたらいけないみたいだ」
「うん、ゆうべみたいなことになったら……私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも可哀相だもんね」
「……… だけど、譲れないから」
「私は……… フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど」

二人が互いにデバイスを構える。

もうそろそろか。

フェイトとなのはがぶつかろうとした時。

「ストップだ！」

KYが二人を止め言った。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ………詳しい事情を聞かせて貰おうか？」

ちっ！KYが！そんなんだからKYって言われるんだろっが！

「フェイト！逃げるよ！」

そっだ、この後確か！

「よける！フェイト！」

「えっ？」

KYいやクロノがジュエルシードを取りに行ったフェイトに魔力弾を放った。

「させるか！」

I I B l u t d e S c b w e s t e r >> ブルート・デイ・シ
ユヴェスタア<<---

いつもだす鎖ではなく、守るために熾天覆つ七つの円環>>ロー・
アイアス<<をだす。

「なっ！」

急に出てきた盾に驚くクロノ。

「今のうちに！さっさと行け！」

「う、うん！」

これよし。

「君は何をしている！」

「何って、それは愚問だな、不審者から助けただけだが？」

「誰が不審者だ！時空管理局ぐらい知っているだろ！」

「知らんな俺は」

「知らないはずないだろ！魔導士なら知っていて当然だろ！」

はあ、こいつは。

「貴様の常識で周りを見るな、知らんと言っているだろっに」

「貴様！」

すぐに切れやがって。

まあやりやすいかな？

「ステインガレー！」

いきなりか。

「効かないな」

――デッドスパイク――

剣を振り上げて衝撃波をだす。

「くっ！なら！ブレイズキャノン！」

また魔力砲撃を打ち込んできた。

「だから効かないと………言っている！！」

――カーネージシザー――

相手の攻撃を避けながら近づき斬り付ける！

「ぐああー！！」

よし、あとは刀に変えて

「いくぞ、我が秘剣避けきれるか？」

――秘剣・燕返し――

多重屈折現象を起こし攻撃する！

「うっうわあ――！！」

これで終わりか。

「時空管理局のリンディ・ハラウンです、すいませんが、そのままにしてくれませんか？」

するといきなりモニターが現れ女の人が喋りかけてきた。

「別に、ただの正当防衛だからな」

「すいません、ですがこちらに来て頂けますか？」

「いいですよ」

まああつちでポカンとしているのはたちも一緒にアースラに乗り込んだ。

まあ乗り込んでからの話はいいとして、ただユーノの姿を見てなのはが驚いただけだな。

「ジュエルシードの搜索はこちらがします」

「君達は日常に戻ってくれ」

「で、でも！」

少しだけ話が違つかもしれんが気にするな。
文句なら作者に言え。

「でもすぐに言われても整理がつかないだろうから明日まで考えてね」

おかしいだろうに。何故明日まで待つのだら。

「ではさようなら、後はそちらに任せます」

「えっ？」

なにがえっ？だ。利用しようとしたくせになあ。

「任せるといったんだ、別にいいだろう？」

「ま、待て！貴様はだめだ！」

「何故だ？」

「管理局員に攻撃しただろ！それだけで罪になる！」

「はあ、正当防衛だといっているだろうに」

「そんな言い訳が通ると思っているのか！！」

「言い訳ではない、事実だ」

まったく。攻撃をしてきたのはそちらからだろうに。

「まちなさい、クロノ」

「かあ、艦長！！」

「確かにこちらが悪かったわ、ごめんなさい」

はあ、あやまる内容がちがうだろうに。

「あやまるなら、なのはにあやまれ、利用しようとしたことをな」

「な、なにをいっている貴様！」

「だってそうだろう？何故明日まで待つ必要がある、一般人は関わるなど言っというて待つ必要もないだろうに」

「あっ」

なのはも気づきたか。

「すみません、そんなつもりはなかったのですが、そう思ったのなら謝ります、でもこちらから協力を頼みづらかったの、だから頼みます私達に協力してくれませんか？」

最初からそう言えばいいものを。

「はいつ！」

「もちろんです！」

「了解、ただし条件がある」

「条件ですか？」

「ああ条件だ、こちらの自由があればいい」

「……………分かりました」

よし。これで先でも困らないな。

「世話になっている人に会いに行つていいですか？」

「ええ、明日もう一度ここに来て頂戴」

そして俺達は家に戻った。

第11話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「なんだ？この駄文は」

ぐっ！事実なだけに否定できない！！

龍「なら上達しろ」

分かってるよ。

龍「では感謝コーナー」

ユタ様、雨季様、夜神様、Arishia様、感想ありがとうございます！！
います！！

龍「ありがとう、こんな作者の駄文でよければ読んでくれ」

ひびっ！！

龍「事実だ」

はあ。ではまた次回！！

第12話(前書き)

今回はあるキャラが出てきます。まあグダグダには変わりありませんが。
ではどうぞー！

第12話

昨日の話の後すぐに家に戻り、なのはの両親に相談したが、原作と大差がなかった。

やっぱり親は強いな。

そうして相談した後に準備をして寝た。

そして次の日。

「さて、なのは準備はできているか？」

「うん！」

「なら行くぞ」

俺となのは達でアースラに向かった。

そしてアースラで他の局員に自己紹介が終わり、自分の部屋に行き、この後のことを考える。

「どうしようか、タタリはおそらくもう少しで出てくるだろうしな」

『そうですね、おそらくこの無印の間に2、3回くらいは出てくるでしょうね』

そうなんだよな。

次は誰なのかが分かればいいのだが。

「まあ悩んでもしかたないか、次に備えようか」

『了解です』

そしてジュエルシードの反応があった。

「いけるか？なのは」
「うん！」

鳥型の思念体は動きが速いが単調すぎるのでなのはに任せた。

「ジュエルシード封印！」

どうやら終わったらしいな。

「お疲れ様、なのは」

そうやってなのはの頭を撫でた。

「うにゃー！／／／」

まるで猫みたいだな。

「いやあー、なかなか楽しそうですねえ」
「誰だ！！」

そうやって俺は後ろを見た。

「私はしがない諜報員ですよ」
「ハザマか……」

そう、そこにいたのはブレイブルーのハザマだった。

「おや？私を知ってるんですか？いや、私も有名になったものですねえ」

そうのんきに言いながら近づいてきた。

「なんの用だ」

「あら？嫌われてます？」

「なんの用だと言っている！」

「龍斗君？」

なのはの疑問の声が聞こえるが気にしている暇はない。

「いや、急にこんな所にいるものですからねえ、少しお尋ねしたかっただけですよ」

「ならさっさと帰れ」

「本当に嫌われてますねえ、私何かしました？」

「なのは、下がってる」

「えっ？う、うん」

なのはを下がらせる。

「お前の目的はなんだ？ユウキニテルミ、ここにはユニットも何も
ないぞ」

そう言うつと肩を揺らし笑い始めた。

「クツクツク、ヒャーハツハー！どうして知ってるんだあ？俺様は
言っただけでもないんだがなあ」

そう言って笑い続ける。

「まあいい、とりあえずその眼が気に入らねえなあ、まあ死んどけ

「やー!!」

くっ!いきなりか!

投げられたナイフを避ける。

「やるじゃねえか!なら次はこれだ!いけっ!ウロボロス!」

――蛇咬――

アークエネミー・ウロボロスを飛ばし近づいて攻撃してきた。

「喰らうか!!」

――虚空陣 雪風――

カウンターを繰り出す。

「うおっと!危ない危ない、その技……ハクメンの技だなあ?なん
でお前が使えるわけえ?」

「教えるとでも?」

「だよなあ!ならこつちもある程度本気で行くぜえ!」

そういつて構え始めた……!あの構えは!まさか蒼の魔道書を?
プレイブル

「第666拘束機関解放、次元干涉虚数方陣展開……コード_{ソウル}SS
オプ・ランゲージプレイブル
OL……碧の魔道書起動!いくぜえ!」

ちっ!ならこちらも!

「第666拘束機関解放、次元干涉虚数方陣展開……イデア機関接

続！……蒼の魔道書起動！！」

こちらもブレイブルーを起動させて戦うのみ！

「何っ！あのガキと同じ！！ちっ！だけど負けるはずねえだろーが
！」

そう言っつて突っ込んでくるテルミ。

「いくぞ！見せてやるよ……蒼の力を！」

ーブラック・オンスロートー

「喰らうかよお！」

ー千魂冥烙ー

お互いの必殺技があたり相殺された。
やはり加減したままじゃ厳しいか？

「どうしたよ！まだいけんだろお！かかって来いよ！」
「ならば本気で潰す」

加減してたのが悪いな。
さっさと終わらせよう。

「今度こそ見せてやるよ……蒼の力を！」

ーブラック・オンスロートー

「恐怖を教えてやる……」

「やってみるよ！」

切り込み連撃を加える。

「地獄はねえよ……」

「がはっ！」

さらに切り刻む！

「あるのは無だけだ……」

「ぐふっ！こ、こんなガキに……」

そして最後に一撃を加える！

「これが蒼の力だ！」

技が終わるころにはテルミは消えていった。

「あ、あれは一体？」

ああ。説明か。

「あれは、タタリといって人の恐怖しているものを再現できるんだ」

「そんなものあるはずがない！」

「あるんだよ、実際にいただろうが、あれがタタリの一部だ」

「あれが一部……」

まあ驚くよな。あれが一部だと。

「まあ今のところあれに対処できるのは俺だけだから俺に任せてもら

「う」

そうしないと死人がでるからな。

「分かりました、あれについてはあなたに一任します」

「それでいいさ」

さて終わったことだしさっさと寝るか。

「なのはも早く寝ろよ」

「う、うん」

早く寝よう。今日は疲れた。

「おやすみ」

『はい、おやすみなさいませ』

そして今日は終わりを告げた。

第12話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回はまさかのメルブラからではないと？」

そっだよー。メルブラばかりじゃなんだしねえ。

龍「ただ単にハザマを出したかっただけなんていわないよな？」

ギクツ！！ソ、ソナコトナイヨー。

龍「なら何故棒読み」

さてっ！感謝コーナー！！

龍「無理やりかえやがった」

夜神様！ユタ様！感想ありがとうございます！！

龍「はあ、次も読んでくれるとありがたいな」

だなぁ。さて今回は早くて明日、遅くて明後日くらいになりそうです。

龍「学校が始まるからな」

うん。けど！なるべく早く書くようにします！

龍「だそうだ、次回からもみてくれ」

では！

第13話(前書き)

今回もいつも通りにグダグダです。
ですので、いつも通りに大丈夫だ、問題ない。という人だけどうぞ
!!

第13話

前回のハザマと戦って分かったことは、やはりタタリはメルブラ以外のキャラも出せることだな。
かなり厄介だな。

「さて、おそらく次はフェイトが無茶をするところだろうな」
『でしょうね、どうするのです？マスター』

「なんのために自由をもらったんだ？このためだろうか」

『そうですね、ではフェイトさんはどうするのですか？』

「無論助けるさ、そのための力だ」

そうだ、この力は守るための力、そのために貰ったんだからな。

「フェイトがでてくるまで待つか」

その後クロスとずっと話していた。

「龍斗君！フェイトちゃんが！」

どうやらアラームが聞こえないほどに考え事に夢中だったらしい。

「なのははどうしたい？」

聞くまでもないだろうがな。

「もちろん助けに行くの！」

「だろうな、さて！行くぞ」

「さて！勝手な行動をするな！」

このKYめ。だからKYなんだ。

「俺達は自由に行動できるはずだが？」

「ぐっ」

こういえばなにもできまい。

「さて、こんどこそ行くぞ」

「うん！」

そして俺達はフェイトたちを救うために転移した。

>フェイト Side<

残りのジュエルシードは海にあることが分かって強制発動させたま
ではよかつたんだけど、

「はあ…はあ…、やっぱり少し厳しいかな？」

発動させるのにほとんどの魔力を使ったせいで、封印することがで
きない！

「フェイト！！」

アルフの声が聞こえて振り返ると、竜巻がすぐそばまできていた。

(避けられない！！)

そう思って眼をつむったけど何時までたっても衝撃がこないことに

疑問を覚え、眼をあけて見てみると、

「よお、なんとか間に合ったみたいだな」

目の前に龍斗が立っていた。

>フェイト Side out<

おいおい、ギリギリじゃねえか。

あぶないかったな、何とかなつたか。

「よお、なんとか間に合ったみたいだな」

そういつてフェイトに近づく。

「あ、あの!」

「ん?」

「どうして?」

「なにがだ?」

「どうして助けたの?私はあなたの敵なのに」

「俺はお前を敵だと思う前に友達だと思っていたからな、友達を助けるのに理由はいらないからな」

「!?!」

そうとう驚いているな。

「それとも俺が友達じゃいやか?」

「い、いやじゃないけど」

「ならいいじゃねえか」

「フェイトちゃん!?!」

おっ、なのはがきたか。
後は二人に任せるか。

「二人で封印……、できるな？」

「うん！」

「いい返事だ」

これなら二人に任せれるな。

俺は攻撃を防ぐことだけ考えようか。

>>クロス、いつでも防御できるように準備だ<<

>>了解、準備しておきます<<

これで大丈夫なはずだ。

「「ジュエルシード封印!!」」

おっ、そうこうしている間に終わったみたいだな。
そろそろ来るか？

「友達になりたいんだ」

なのはがそう言った。

(来る!!)

空から雷が降ってきた。

「なのはやフェイトたちに当てさせるかよー!」

ロー・アイアス
「熾天覆う七つの円環――」

七枚の花弁で雷を防ぐ。

「龍斗君!」

「龍斗!」

「いいからさっさと回収しろ!」

そう言ったのが伝わったのが二人で3つずつ回収していた。

「ふう、なんとかあったか」

あの雷を防ぎ終え、一息つき、

「フェイト、さっさと行かないと捕まるぞ?」

「あっ」

どうやら気づいてなかったらしい。
本当にどこか抜けてるな。

「またねー、フェイトちゃん!」

そういつてなのは手を振っていた。

「君達……、逃がしてどうする」

「あっ」

なのはがしまったと言わんばかりに顔をしかめた。

「いいじゃねえか別に、次に捕まえればいいだろ」

まったく反省をしていない俺達を見て、リンディさんにかなり怒られたのは言うまでもない。

第13話（後書き）

後書きコーナー!!!!

龍「どうした？」

いやー、いろんな作品を読んでいると元気をもらえる！

龍「まあお前とちがって文才があるからな」

ぐっ、否定できない……。

龍「まあいいからさっさと進めようか」

はいはい。

感謝コーナー!!

龍「ユタ様、Arishia様、夜神様、感想ありがとう」

いつも感想には助けられています！

龍「感想が来るとやる気がでるのか？」

それもあるけどやっぱり読んでくれるんだなあーと。

龍「うれしくなると」

そういつごと……!

龍「まあ次回からも頑張れ」

お前もな。

龍「それではまた次回」

では!!

第14話(前書き)

今回は戦闘なしです。

いつも通りグダグダですがお楽しみいただけると嬉しいです！

第14話

前回のジュエルシードは全部回収し終えたか。

「もうすぐだな」

『ええ、もうすぐですね』

もうすぐで無印が終わる。

だがフェイトの方にはまったくいいほど干渉していないな。どうするかな。

「まあ問題は死者の蘇生が可能かどうか」

『可能ですよ？デメリットがありますが』

「本当か？デメリットは何だ？」

『一時的な能力の限定です』

なんだ。たいしたデメリットじゃないな。

「なら大丈夫か」

さて問題はプレシアか、あいつはフェイトのことを人形扱いしていたな。

もしそのまま変わらないのなら……。

「俺はあいつを……」

『マスター……』

「いや、弱音を吐いてどうする、なんとかするんだ、絶対に」

そのためならなんでもしてやる！

「さて、タタリはおそらくだがラストにでてくるだろうな」

『でしようね、そんな気がします』

「なら今のうちにできることはしておこうか」

『了解』

といつてもできるのは相手の本心をさぐることが出来る薬の製作ぐらいか。

「じゃ、薬をつくりますかね」

『でしたら、結界のなかでして下さい、悪用されると困るので』

「だな、ならクロス、結界を頼む」

『了解、認識阻害の結界を張ります、これでこの中でしたことはばれませんが』

「ありがとうございます、さっそく作業に入りますぞ」

『了解』

そうして薬を製作することにした。

そして一通りできた時になのはに呼ばれ、何だと思いきくと、どうやら一時的に家に戻っていいそうだ。

「よかったな、なのは」

「うん！」

こうして俺達は一時的とはいえ家に帰ることができた。

次の日久々に学校に行くと、アリサ達がノートをとっていたので笑顔で感謝すると顔を真っ赤にしていた。

何故だ？そして何故かなのはの機嫌が悪くなった。

そうして学校が終わり、放課後になると、アリサが、

「今日は遊べるんでしょう？なら家に来なさい、珍しい犬も拾ったし」

やはりアルフはアリサの家にいるか。

「分かった、今日はお邪魔しようかな、なのはもいいだろ？」

「うん！」

>> やっぱり珍しい犬って<<

>> ああ、確実にアルフだろうな<<

アルフに聞けばある程度なんとかなるかな？
まあ行ってみればわかるか。

「さあ行くか」

「」「うん！」「」

元気なこって。

そうこうしている内に、アリサの家に着。

「こいつがその犬か……」

「そうよ、珍しいでしょ？」

「そうだな」

まちがいなくアルフだな。

>>おいアルフ、起きているか？<<

>>あ、アンタは！<<

>>何があった？フェイトは？<<

>>アンタなら頼めるね、頼む！フェイト達を助けてやって！！<<

達？なにか違うみたいだな。

「なのは、先に行ってアリサ達とゲームでもしてくるといい、俺はこいつを少しみてから行く」

「はい」

そうやってなのはたちは行った。

「どづいつことだ？」

>>管理局のやつらも聞いてるんだろ？<<

>>ああ、内容によっては助けられるかもしれない<<

「話してくれるか？」

>>分かってるよ……<<

そうしてアルフは話し始めた。

「そうか、そんなことが」

その内容は、急に現れた男のせいでプレシアがおかしくなったこと、本来はプレシアは優しかったこと、男の目的は不明だということが分かった。

(なるほど、おそらくタタリだろうな、ならばなんとかなるかな？)
「私が頼めた義理じゃないけど、助けてやっておくれよ！！」

「分かっているさ、友達を助けるのに理由はいらない、まして友達が苦しんでいるならなおさらだ」

俺にとって大切な人は全力で助けるさ。

>> 本当ありがとう！<<

「礼は全てが終わってからだ、まだすることは沢山あるからな」

そうだ、これがタタリの仕業ならば俺が一人で戦う。

いざとなればあの眼を使えばいいしな。

その後の予定をクロノたちと相談した。

相談した結果、フェイト達を保護した後に謎の男と戦うということになった。

無論男とは俺一人で戦うと言ったが最初は拒否されたが理由をいうと、しぶしぶ許可された。

「後はフェイトがなのはに勝負を仕掛けるのを待つのみか」

『そうですね、謎の男はどうするのですか？』

「勿論潰すさ、いざとなったら眼を使う」

『分かりました、無理はしないで下さいね』

「なるべく善処する」

いざとなったら体への負担を考えずに能力を使えばなんとかなるだろうからな。

「まあとりあえずフェイトが来るのを待つか」

『ですね』

フェイトはおそらく明日か明後日ぐらいにくるだろうな。

なのはに任せるか。

「フェイトとの戦いはなのはに任せよう、なのはも望んでいるだろうしな」

『了解です』

さて、次に備えるかな。

そして次の日にフェイトから決闘についての念話があった。

決着の日は近い。

第14話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回は戦闘なしか」

ああ、次で決闘のところまでいくしね！

龍「予定はどうなんだ？」

一応後2、3話ぐらいで無印を終わらせようかな〜と思ってる。

龍「なるほど、その後は？」

番外編みたいなことができたらな〜と。

龍「自信なさすぎないか？」

仕方ないだろ！ないもんはない！

龍「開き直るな！」

ぐっ、まあ番外編はいいとして。

龍「よくないからな？」

感謝コーナー！！

龍「無視かよ」

ユタ様、マーボー様、A r i s h i a様、夜神様、感想ありがとうございます！

龍「ありがたいな、本当に」

そうだな。

龍「この後はどうなるのかを楽しみにして、次回を待っていてほしい」

まあ予想はつくんだろうねえー。

龍「そうだとってもいいじゃないか」

そうだな。

龍「それでは次回で」

では！！

第15話(前書き)

今回は戦闘です！
グダグダですがどうぞ！

第15話

今日フェイトとの決闘がある。

もちろんなのはに任せているが、もしタタリからの干渉があれば俺が何とかする予定だ。

「なのは、大丈夫か？」

「うん！絶対に手出ししないでね」

「ああ、分かっているさ、そちらは任せた」

「うん」

そついいながら約束の場所までいく。

まあすぐに始まったわけだがな。

「バインド！」

おっフェイトがフォトンランサー　ファランクスシフトを食らわしたな。

「なのは！！」

ユーノは心配しすぎだな。

あっ、なのはのバインドにフェイトが捕まった。

「受けてみて！ディバインバスターのバリエーション！」

あの技がみれるとはな。

「スターライトブレイカーアアアア!!」

これはひどいな、フェイトのトラウマになるなこれは。

おっと、雷か。

ならまた防ぐのみ!

――熾ロー・アイアス天覆う七つの円環――

ん? 威力が下がっている?

まさかもう体が?

「なのは、フェイトと一緒にアースラに行くぞ」

「うん、分かったの」

そしてアースラに乗り込んだ。

その後は原作通りに進み、フェイトは倒れた。

一言言ってから行くか。

「フェイト、お前は確かにアリシアのクローンかもしれない……だがな、今のお前はクローンじゃないんだ、フェイト・テストロッサという一人の人間なんだよ」

フェイトの目に光がともった。

「まだお前は自分自身を始めていない、今からはじめろ、そして自分の道を歩め、手伝いぐらいならしてやる」

「うん、ありがとう……そうだね、まだ始まってなかったんだよね、ならこれからはじめろよ、だからよろしくね?」

「ああ、任せろ」

これで大丈夫だな。

「さて、なのは達が待ってる、さっさと行くぞ！」
「うん！」

そして俺とフェイトは時の庭園に向かった。

「フェイト」

「何？」

「先になのはたちと合流しろ、俺は少し用事があるんでな」

「……………分かった、必ず合流してね？」

「分かっているさ、だから先に行ってくれ」

「うん」

フェイトには先に行ってもらった。

「これで俺だけだ、いい加減出てこい！」

「よく分かったな、うまく気配は消していたつもりなんだが」

「殺気を出していてよく言うなあ」

できたのは、メルブラのロアだった。

「お前が黒幕か」

「ああ、確かに私がそうといえるかな？」

「ならば、殺す」

そういつてナイフを構える。

「なんだ？お前はあの女を殺しにきたんじゃないのか？」

「プレシアは救う、だがお前は生かしておけないからな」

「ふむ、救うか……フ、フハハハハ、あんな女をか！あんな女を救う？笑えるなあ、あんなやつをかあ」

「お前………何かしたのか？」

「あー、少しだけ暗示をかけたただけだぜ？なのにあんなに変わるとはなあ、いやはや実におもしろい」

「貴様………」

やはりか。アルフがプレシアが急におかしくなったと言っていたのはそのせいか。

「やはり貴様はここで殺す」

「お前では私は殺せない、まあ相手ぐらいはしてやるっ」

そういつてロアは血でできたナイフを構えた。

「いくぞ！」

――閃鞘・一風――

「うおっと」

――閃鞘・八点衝――

「斬刑に処す！」

「あぶないあぶない」

ちっ！まだ余裕か。

ならこれならどうだ。

――閃鞘・迷獄沙門――

「極彩と散れ！」

一気に攻める！

「ぐっ！右腕が斬られたか、だが式は発動している」

そうロアがいうと、斬られた傷がなくなった。

「あの術式か」

「知っているならわかるだろ？無駄だったことが」

確かに普通なら無理だな………普通なら。

「生憎俺は普通じゃないんでね、この程度で諦めたりしない」
「ならここで死ね」

そういつてロアは斬りかかってきた。

避けきれない！

「ぐっ！」

すぐに傷が治るとはいえやはり注意しないとな。

「何故お前も傷がなくなる？」

「さあな、教えるとても？」

「ならこれならどうだ？」

そういつてロアはおそらくだが魔眼を発動させた。

「な、何故見えない、何故だ！………まさか！彼女と同じ真祖とでもいうのか！」

「ふん、だとしたらどうする？」

「最高だ！最高じゃないか！姫君と同じならぜひ確かめさせてもらう！」

ちっ！やはりその反応か。

少し戦い方を変えるか。

「いくぞ」

——グラム・サイト妖精眼——

「ハイル我は命ずる」

そういつてヤドリギを投げる。

「ケルト魔術か！」

そついいながらロアも魔術を発動させ反撃する。

「ハイル我は命ずる」

もう一度、次は拘束目的で投げる。

「無駄だ！」

やはり無駄か。

「どうした！そんなものじゃないだろ！」

やはり相性が悪いか、なら妖精眼グラム・サイトを使いながらいくか。

右斜め45度から75度にかけて火行呪符かな。

「疾ッ！」

まるで吸い寄せられるように口アに向かった。

「なんだ？いきなり攻撃のキレが上がった？」

そっぴいながら迎撃する。

次は左50度から70度に向けてヤドリギだな。

「ハイル我は命ずる」

ヤドリギを投げつける。

「くっ！いきなり避けづらく！」

やはり決定打にはならないか。
ならば確かめてみるか。

「グラム・サイト妖精眼&直死の魔眼同時発動——」

「ぐうっ！」

感覚が狂いそうになるな。
だが、これならば！

「そ、その眼は私と同じ!?」

「ちがうさ、お前とは視ている物がちがう」

「ま、まさか……………あいつと同じ!」

「そうだ、だからこれで終わりだ」

「くっ!!」

ロアは魔術を連発してきたが、その魔術の死を斬ることで消した。

「覚悟はできたか？」

「く、くそっ!ば、化け物っ」

「恐ろしくはないだろう?お前にとっては馴染んだ道(死)だ……

…だが帰ってはこれまい、じゃあな」

そしてロアは消えていった。

これでプレシアの暗示は消えたはず、後は急いで向かってこの事を説明しないと自殺しかねん!

「急ぐぞ!クロス!」

『了解です!マスター』

最高速度で先に進んで行った。

間に合わせる!必ず!

第15話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「無駄に中途半端だな」

仕方ないだろ！いつ区切れればいいか分からなかったんだし。

龍「まあいいか、とりあえず後2話ぐらいで無印終了だろう？」

ああ。その予定だ。

龍「ならいいさ、いつまでも長く続くよりいいだろうしな」

で、では感謝コーナー！！

龍「ユタ様、雨季様、感想ありがとうございます」

もう少しで無印も終わります。

それですこし番外編を入れてA・Sに入ります！

龍「まあ次回もすぐにはいかないが投稿するから次回も読んでくれるとうれしい」

ではまた次回！！

龍「ではな」

第16話(前書き)

今回は少し遅れました。

すいません。

次回で無印は終わりです！

では今回もグダグダですが楽しんでもらえるとうれしいです！

第16話

ロアを倒して、今は全力でプレシアがいる場所に向かっている。

「間に合えよ……………」

『間に合います、間に合わせます!』

そついいながらスピードをあげた。

>プレシア Side<

私はフェイトのことを娘だと思っていた。

いくらクローンでも本人にはなれない、それぐらいすぐに気づけた。それでも私の娘だということは変わらない、そう思って過ごしてきた。

だけどそんな日々は長く続かなかった。

急にやって来た男が私になにかをしたせいで私はフェイトに酷いことをしてしまった。

だから、私はフェイトたちと一緒に過ごせない。

だから……………」

「幸せになりなさい、フェイト」

「母さん?」

そついつて私は虚数空間に落ちようとした。

「死なせるかよ!」

そんな時そんな声が聞こえた。

>プレシア Side end<

よし！なんとか間に合ったか。

けれどももうプレシアは虚数空間に落ちようとしていた。

「死なせるかよ！」

なんとしても死なせはしない！

フルト・ディ・シュウエスタア
I I Blut de Scbwester I

空想具現化で背中に翼を出し、今までで最高のスピードでプレシアに向かう。

今にも落ちそうな状態のプレシアを掴んで、救出した。

「どうして助けたのかしら？」

「？」

「私はフェイトたちと一緒に暮らす資格なんてないわ、あんなことをしてしまったのだから」

「あんな、本気で言ってるのか？」

「ええ、もちろんよ、あんなことをしてしまった私に資格なんて……」

「……」

そうプレシアが言った瞬間俺はプレシアの顔を殴った。

「あんなふざけてんのか？…資格がない？だから暮らせない？……ふざけんのも大概にしるよ」

「ふざけてなんかいないわ、私は本気で……」

「それがふざけてるって言ってるんだろぅが！！」

俺は本気で切れた。

フェイトがあんなに覚悟を決めて会いに行ったのにこいつは……………！

「だから死ぬのか？」

「ええ、そうよ」

「そうやって逃げんのか、あんたは」

「逃げてないわよ！……………こうするしかないのよ」

「それが逃げているって言うんだろ？、それしかない？ちがうな、それしかないはずがない、他にも方法があるはずだろーが」

「方法なんて……………」

「そうやって諦めんな！何故一緒に暮らすという選択肢がないんだ？」

「だから資格がないから」

「資格なんていらねえーよ、なんで家族で過ごすだけで資格がいるんだよ、家族を愛しているならそれでいいじゃねえか、それともあんたはフェイトを愛していないのか？」

「そんな訳ないじゃない！愛してるに決まっているわー！！」

プレシアは心の底から叫んだ。

「ならいいじゃねえか、フェイトもあんたと過ごしたいに決まっているだろ？……………なあ、フェイト」

そう言ってフェイトに目を向ける。

「うん！私は母さんと一緒に暮らしたい！だって家族だから！」

「！ー！」

「ほら、後はあんた次第だ、だがな？死ぬより生きてあいつと一緒に幸せになるのがあんたのできることにじゃねえか？」

そう言つとプレシアは泣き崩れた。

「ううう！」

「母さん！！」

「よかつた……」

よかつた。これでいい。

後はアリシアだけか。

一応言つておくか。

「プレシア」

「な、なにかしら？」

まだ泣いているがこちらに向いて聞いてきた。

「アリシアを生き返らせる」

「……」

かなり驚いているな、まあ仕方ないか。

「できるはずがない！」

クロノ、いままで空気だったっていうのに何いってるんだ？

「できるから言っている」

「なら……お願いするわ」

「分かつた、まずはアースラに戻ろう、ここは不安定だからな」

「ええ」

「わかつた」

そういつてみんなでアースラに戻った。

「さて、アリシアを蘇生するんだがな」

「どうした？」

「まずは服を着せてくれ」

そう。あんなものに入っていたので服をきていない。
だからなのはやプレシアに任せた。

「もういいわよ」

「そうか、なら蘇生するが、リンディさん」

「なにかしら？」

「ここで見た事は内緒にしてくれ、あまり見せたくないんでな」

「分かったわ、ここでの出来事は私達だけの秘密よ」

物分りがよくてよかった。

「じゃあ蘇生するぞ」

そういつて準備する。

「我は望む、我の生命力を糧とし彼のものを蘇生することを、我は
理を捻じ曲げる、その代償は能力の限定！……………いくぞ、蘇生せよ
！」

そう唱えていく。

すると、

「う、ううん……………」

「えっ！」

「あれ？母さん？」

「アリシア！！」

「姉さん！」

よかった。これで本当のハッピーエンドかな？

>>マスター、能力の限定ですが<<

>>なにが使えない？<<

>>宝具を創ることができなくなっています、あと投影も<<

>>空想具現化は？<<

>>問題なく使えます<<

ならいいか。

今はこの光景をみていよう。

この光景を見るために頑張ったんだからな。

第16話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「次回で無印も終わりか」

ああ。あつという間だったな。

龍「まあなんとかなってよかった」

まあよかったと思えるね。

龍「さて、感謝コーナーだ」

ユタ様、雨季様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「納得いかないところもあるかもしれないがこれが作者の限界なのでな、勘弁してほしい」

勘弁して下さい！！

龍「次回はついに無印の最終回だ、まだA・Sがあるとはいえようやく一息つける」

うんそうだね。

龍「まあ番外編を書くんだろう？考えているのか？」

考えてません！！

龍「いばるな、とりあえずこんな作者だがこれからも頑張るのでみてほしい」

ではまた次回！！

龍「ではな」

第17話(前書き)

今回で無印は終了です！

番外編を2、3話はさんでA・Sに入ります。

後書きに一応のアンケートがあるので見てください。

第17話

あの事件から少したった。
今はゆっくりとしている。

「今日ぐらいか？クロノからの通信は」
『そうですね、今日だと思いますが』

そう話していると、

「龍斗君！！」

なのはが扉を壊すような勢いで入ってきた。

「どうした？なのは」

「今日フェイトちゃん達に会えるの！！」

「そうか、よかったじゃないか」

「うん！」

さて準備しますか。

「早く行くぞなのは」

「ま、待って〜」

少しなのはが遅れたが問題なく行くことができた。

そして約束の場所についた。

クロノが何か空気の読めないことをいつていた気がするがスルーす

る。

後、リニスがいんだが理由を聞くと、今まで暗示のせいでうまく契約が維持できていなかったらしい。

だから暗示の解けた今はなんの問題もなく生活できるらしい。

「プレシアやフェイト達を助けてくださってありがとうございます」

「俺がしたいと思っていただけだ、礼を言われる筋はねえ」

「ふふ、そうですか、でもお礼くらいは受け取ってくれませんか？」

「分かったよ、受け取っておく」

まったく、本当に頑固な奴ばかりだな。

「ところでフェイト達が呼んでいますが行かなくても？」

「ん？ああ、行ってくる」

おそらく友達になりたいとかならうな。

「よう、話は終わったのか？」

「うん、なのはと友達になったよ！」

「よかったなフェイト、アリシア」

「うん！」

本当に守れてよかったな。

「で？俺を呼んだ理由は？」

「え、えつとね、私と友達になってください！！」

「ん？俺達はもう友達だろ？」

「え？」

「おいおいそう思ってたのは俺だけか？」

「え〜と、いいの？」

「いいから友達になってるんだろっが」
「ありがとう!!」

本当にいい笑顔だな。

「そろそろ時間なんだが」

ちっ！KYめ。

「何か酷いことを言われた気がするが」

「気のせいじゃないか？」

無駄に鋭いな。

「フェイトちゃん、アリシアちゃん、これ」

どうやらリボンの交換をするらしいな。

俺もしたほうがいいか？

「俺は1本しかないんでな、これで勘弁してくれ」

「「ありがとう!!」」

そして俺はアリシアと、なのははフェイトとリボンを交換した。

「元気でな」

「うん、そっちもね」

「なにかあったらすぐに駆けつけてやるからな」

「／／／／」

ん？なんで二人は顔が赤いんだ？

なのははなのはで小声で、

「後でO H A N A S H Iなの」

とか言ってるし、ていっかなのは怖！

「と、とりあえず！早めに会えるんだろ？なら次に会うのを楽しみにしている」

そうフェイト達の裁判だがプレシアに暗示が掛けられていたので無罪は無理だがそうとう罪は軽くなるらしい。よって早めに帰れるそうだ。

「うん、またね」

「またね」

そう言っつてフェイト達は戻っていった。

「さて、俺達も帰るか」

「うん……でも後でO H A N A S H Iなの」

やはりこの運命からは逃れることができないのか。

>>マスター、現実を見てください<<

>>現実逃避くらいさせろよクロス<<

>>マスターに伝えなければならぬ事があるので<<

伝えなければならぬ事？

>>聞かせてくれ<<

>> どうやら蘇生の代償ですが、能力の限定では少しだけ足りなかつたようです<<<
>> そうか<<<

まあ確かに甘すぎるとは思ったがな。

>> で？何が起ころ？<<<
>> 分かりませんが、実際に起きるまでは<<<
>> そうか、ならその時になんとかするか<<<

次はA・Sに入るんだ。

なるべく早くに解決しないとな。

その時に何もできませんでしたなんていやだからな。

>> クロス<<<
>> はい、なんでしょう？マスター<<<
>> 何か変化があったら言ってくれ<<<
>> 了解です<<<

何も無いほうがいいんだがな。

そうこうしている内に家に着いた。

ついた後は大変だった。

なにせあのシスコンが暴れだしたからな。

まあ桃子さんのあの笑顔で一瞬で静かになったがな。

あれは俺も怖いよ。

そう思ったのがばれたのか知らんが、また女装をさせられた。何か崩れる音が聞こえた気がする。

「もつやだ……（泣）」

「「「!」「」」」

なんかなのはと恭也と桃子さんが血の海に沈んだ。
その後恭也がずっと、

「あいつは男あいつは男あいつは男あいつは男あいつは男あいつは男あいつは男
男……………」

と呟いていたが聞こえなかったフリをする。

あ後の事は聞かないでくれ。一種のトラウマいや黒歴史だからな。

「クロス、次はまたハッピーエンドで終わらせることができるだろ
うか？」

『私とマスターならばできます、そう私は信じています』

「そうか……………これからもよろしくな、相棒」

『はい!』

そして俺は寝た。

A'sもなんとしてでもハッピーエンドで終わらせる!
悲しい顔はもううんざりだから。

第17話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「ようやく無印も終わりか」

うん。次はA'sだな。

龍「ああ、なんとしてでもハッピーエンドにしてみせる！」

頑張れよ。

龍「勿論だ、さて感謝コーナーだ」

A r i s h i a様、ユタ様、雨季様、感想ありがとうございます！！

171

龍「さつそくアンケートだが、気楽に答えてくれ」

番外編ですが、内容は決まっています！

なので何かこんなものを書けばいいんじゃないか？などを感想に書いて貰えると助かります。

龍「こんな駄作者でもよければコラボも可能かもしれん」

ちよっ！難易度上げないで！

龍「まあこいつは文才がないからこんなんじゃない！とかあるかもしれないからそれでもいい奴は言ってくれ」

そんな人いないだろ！。

龍「まあそんな時はそんな時だろ？」

まあね。

龍「それでは感想での答えを待っている」

それでは！！

番外編（前書き）

今回はユタ様の作品とのコラボです。
グダグダですが楽しんでいただけたらいいです。

番外編

今日はいつも通りに修行をしていた。
すると携帯に神から電話があった。

「急で悪いんじゃないがそちらの世界に転生者がいってしまったのぉ、
そいつの処理を頼む」

「分かった、だがなぜだ？」

「そいつの考えが酷かったのじゃよ」

そいつの考えていることを教えてもらい、なんとしても潰すと心に決めた。

そして、そいつのいるところを教えてもらい行くと、そいつがいた。

「おい、おまえが奴観 黒矢か？」

「なんで俺の名前を？」

「神に頼まれて貴様を潰しにきた」

「はぁ？あいつにかぁ？まあいい、この力があれば負けるはずがない！」

そして戦いが始まった。

> 優 Side <

DAが長期休暇だったから、セイ達と一緒に別の世界に行くといきなり目の前で戦っているところに遭遇した。

「どうしますか？」

「どつするの？」
「事情を聞いてみるか」

そう思い戦っている男達に近づいた。

「これは一体どういうことだ？」

近づくと、1回だけ会った事がある龍斗がいた。

「こいつは最低で変態な転生者でな、神に頼まれて排除しようとしていたところだ」

「にしては苦戦してるな」

「仕方ないだろ？あいつもアニメの技をつかうんだし」

「なら手伝おうか？」

「ああ、助かる」

「私達も手伝います」

「私も手伝うわ」

「くうくん」

どうやら変態と聞いてやる気をだしたらしいな。
ついでに言うとそいつの目的は聞いている。

ふざけた奴だな。全員雌豚にしてやるなんてな。

>優 Side end<

どうやら優達は手伝ってくれるらしい。

「なら俺が近接をやるから遠距離を頼む」

「分かった」

「分かりました」

「了々解々」

そして俺は七ツ夜をだし、一気に攻める!!

――閃鞘・八点衝――

一気に斬撃を繰り出す。

「無駄無駄!」

しかし、あいつにはまったく効かない。

「次は俺からいくぞ!」

くる!!

「アイヌ サンダートルネード氷と雷の竜巻!!」

すると優が後ろから援護してくれた。

「助かった」

「気にするな」

しかし俺と同じ真祖なのかネギまの方なのかだな。

「バイロシューター!!」

アルテミス

「Artemis」

「ぐうあああああ!」

どうやらあれぐらいなら効くみたいだな。

ならば。

「極彩と散れ！」

――閃鞘・迷獄沙門――

直死の魔眼で切り刻む！！

「させるかあ！！凶がれ！！」

ちっ！歪曲の魔眼か。

「ギャラクシー・ブレイカー！」

優の攻撃は凶げることができないらしく、直撃した。

「くそっ！くそっ！なんだよお前ら！俺の邪魔をするなあー！！」

あれは！ゲートオブバビロン王の財宝か。
ならば！

「星の息吹よ！」

I I B l u t d e フルート・ティ・シュウエスタア S c b w e s t e r i i

空想具現化で防ぐ！

「終末の鎌・ラグナロク！」

優は鎌で攻撃していた。

すると、攻撃がなくなった。

「なっ！」

相当驚いているな。俺もだが。
さて、さっさと終わらせたいな。

「早く終わらせようか」
「ああ」

そして奴観を天の鎖でしばり、とどめをさすため攻撃の準備をする。

「いくぞ！なのはの砲撃の見よう見真似の……」

『ジェノサイドブレイカー』

「イージスagis展開。デイスハーダ、リミッター50%開放、王の財
宝展開……いくぞ！」

ーデーメンション・バースト フルバージョンー

「集え照星…全てを焼き消す焰となれ！」

ーシルシフェリオンプレイカーー

「アポロンAPOLLON」

「狐火！」

全員の攻撃が奴観に当たる。

「ぎゃあああああああああああああ……！」

こうして戦いは終わった。

「助かったよ、ありがとな」

「いや、偶然来ただけだからな」

「礼がしたい、そうだなこれを渡しておこうか」

そう言って手作りの料理（どんなに時間がたっても冷めない状態）を優達に渡した。

「ありがとう」

「ありがとうございます」

「ありがとー」

「ありがとう」

よかった。喜んでもらえて。

「ではな、また会えた時は戦うか？」

「いいぞ別に」

「そうか、なら次があれば模擬戦するか」

「分かった、じゃあな」

そう言っつて優達は帰っていった。

「今日は大変だったな」

『そうですねマスター』

「でも同時に楽しく思えたな」

『よかったですねマスター』

「ああ、また会いたいものだな」

『ええ、そうですね』

そう話しながら家に戻った。
その時に服が汚れ、傷があったためかなり怪しまれた。

番外編（後書き）

後書きコーナーは学校からなので休みです。
次回に感謝コーナーをします。

番外編2（前書き）

今回は雨季様とコラボです。
かなり短いですが。すいません。

番外編 2

あの要にお礼を言いたくて神に頼んだら、ものすごく嫌そうな顔をしながら了承した。何かあったのか？

「礼は何がいいだろうか？」

取り敢えず胃薬か？というより胃薬あるか？

「胃薬しか思いつかないとはな、なんと不憫な」

呼んでもらっているから待つだけか。暇だな。

>要 side<

森の所の神様が来た。森の奴が礼をしたいと言うから来てくれと。今回はゆっくりできそうだからいいかと思いい行くことにした。さっそく移動するといきなり森がいた。

「よう、来たぞ」

「あの時はありがとう、おかげで力に溺れずに済んだ」
「気にするな、俺がしたくてしたことだからな」

だがそれだけの価値があったな。また今度修行してやるか。

>要 side end<

やはり不器用だな。だが助かったのは事実だからな。

「礼をしたいんだが受け取ってくれるか？」

「ああ、受け取るっ」

そして俺は自分で作った料理を渡した。

「これは？」

「これは俺が作った料理だ、こんなものしか渡せなくて悪いな」
「気にするな、ありがたく食べるさ」

そっだ！胃薬も渡そっか。

「これも渡そっ」

「並みの胃薬は効かないんだが？」

「これは普通の胃薬の百倍以上の効果がある、気休め程度だがな」
「ありがたく受け取っておく」

あれで気休め程度なんだよな。悲惨だな。俺は胃痛にはならないようにしよう。

「また今度そっちに行ったら修行してくれないか？」

「別に構わないさ、加減はしないが」

「だから意味があるんだ、加減はいらない」

「わかった、考えておこっ」

その後はそれぞれの世界での出来事を話し合った。

「ありがとう、来てくれて」

「別に構わない、こちらもなかなか楽しめたからな」

「何かあったら呼んでくれ力になれたらなる」

そう言っって見送ろうとしたがその前に、

「俺はどんなに時間がかかってもあんたを越えてみせる！覚悟してろ！」

そう言うつと要に言つと、少し笑い、

「やってみろ、若造」

と言い帰った。

「ああ、やってやるぞ！」

そつ心に刻み家に帰った。

余談だが、あの神はボロボロになって帰って来た。本当に何があつたんだ？

番外編2（後書き）

後書きコーナー！！

龍「遅い、もう少し早く書け」

わかってるよ。けど学校があるからな。

龍「言い訳はいい、さっさと次に行くぞ」

感謝コーナー！！

龍「メガネ様、ユタ様、雨季様、夜神様、感想ありがとう」

前は学校で投稿したので後書きコーナーを休みました。
すいません！

龍「まあ仕方ないのか？」

今回はファッションショーをします！

龍「おい！まさかあれをやるのか？」

もちろんさ！

龍「orz」

ではPCが故障したのでPS3からの投稿になるので短くなるかもしれないが頑張りますので次回もよろしくお願いします！

龍「ではな」

番外編3 (前書き)

今回はファッションショー?です。かなりキャラが崩壊しています。
それでもいい方はどうぞ!

番外編3

何故だ。何故にこうも。

今の俺はその気持ちで一杯だった。

理由は回想でだ。

回想

「ん？どうしました？桃子さん」

そう質問すると、桃子さんは待つてましたと言わんばかりに語りだした。

「少し龍斗君に頼みたいことがあるのよ」

「出来ることならばしますが？」

そう言うつと物凄く目を輝かせて言った。

「そう？ならこの服を着てほしいのよ」

そう言うつて桃子さんはチャイナ服を出してきた。

「無理です！全力で拒否します！」

「いいじゃない、減るものじゃないでしょ？」

「減ります！間違いなく何が減ります！」

あんなものを着てしまったら男としてアウトだろ！

え？女装はオシヤレ？………違う！絶対に俺は認めない！

「さあ着替えましょうか？」

くっ！逃げ場はないのか！

「なのは〜手伝って〜」

なん……だと？

まさかなのはまであちら側なのか！

「へへ、やっぱり俺って……………」

そう言いながら俺は諦めた。

「そして今に至ると」

「何言ってるの？龍斗君」「気にするな、もう諦めただけだ」

「じゃははは……………」

くそ！諦めたとはいえかなり恥ずかしいぞ、これ。

「やっぱり似合うわね〜、私の睨んだ通りね」

もうやだこの人。

「次はこれね？」

「ぐすっ……………」

もういいよね？「ゴールしても。

「うううう……………」

次の服はかなりスカートの短いメイド服だった。
これはかなりきつい。

「似合うわね〜」

桃子さんから全く嬉しくない言葉をもらった。

「次はこれを着てほしいの！」

「……これは？」

「スクール水着なの！」

本気なのか？俺に羞恥心で死ねと？

死なないけどな！

「なあなのは？冗談だよな？」

「本気なの！」

「orz」

そして俺はスクール水着（勿論女物）を着るはめになった。

「もうやだ……ぐすっ」（涙目＋上目遣い）

「／／／／」

何故か桃子さんとなのはが同時に顔を赤くしていた。

「あれは反則なの」

「本当にそうね？」

怖い、女装はキツイ。精神を強くもて、俺！

「次はこれね？」

「泣くぞ！」

俺を苛めて楽しいか！！

そう思っている俺を余所に、桃子さんは新しい服を持ってきていた。

「次はこれなの！」

なのはが次に持ってきたのはかなり上と下が短いセーラー服だった。だから何故そんな服があるんだ！？

「なんなんだよこの服、スカートも短いし上も腹が見えてるし、こんな服着るはめになるとは」

もう限界だ。今日だけで、15着ぐらい着たぞ。桃子さんは満足したようだから助かったのか？

「今日はずっとメイド服でお手伝いしてね？」

この世に神はいない！

『呼んだかのお？』

神は敵だ！ちくしょー！。

番外編3（後書き）

後書きコーナー！

龍「ぐすっ……………」

まだ主人公が立ち直っていないので、このまま進みます！

龍「ううう……………」

ついでに言うと、今の龍斗の格好はセーラー服です！

龍「後で作者殺す！」

え？本気かよ。

龍「冗談なんか言わないか、勘弁してくれ！」

龍「許すとても？」

デスヨネー。だが貴様の拳法では死なん！サラダバー。

龍「あつ！待て！……………そうだ、作者から一言伝え忘れていたらしいが、今携帯で登校している途中に投稿しているから、感謝コーナーは次回一気にやるそうだ……………俺は作者を潰しに行くからさよならだ、ではな」

A・S編 プロローグ(前書き)

今回からA・Sに入ります！

いつも通りにグダグダですがどうぞ！！

A・S編 プロローグ

あの事件から半年ぐらいたった。
もう少してA・Sが始まるな。

「今回もタタリは干渉してくるだろうか？」

『まちがいなく干渉してきます』

「そうか、だがだとしても俺は守る、そのための力だ」

そうだ、まだ力の全てを把握した訳ではないが、今はこの力でみんなを助ける！

「だから協力してくれるか？クロス」

『当然ですよ、私はマスターの相棒ですから』

「ありがとう、クロス」

一人ではできなくても一緒に戦ってくれる仲間がいれば何とかできる！

「まずはやっぱりはやてと会わないとな」

『そうですね』

ということでは俺は図書館にやってきた。

今の時間にいるだろうか？

そう思いながらも探すこと数分。

本を取るうとしているはやてらしき少女がいた。

「どれが読みたいんだ？ついでだから取るよ」

>はやて Side<

いつも通り本を読みに来たんはええんやけど高いとこにあって取れへん。

困ったなあ、あれ読みたいのに。

そう思いながら本を取ろうとしていると、

「どれが読みたいんだ？ついでだから取るよ」

そういつて笑いながら話しかけてくる女の子がおった。

>はやて Side end<

なんだろうか。女に間違われている気がする。

まあ気のせいだろう。

「で？読みたい本はどれだ？」

「え〜と？いいん？」

「ああ、ついでだからな」

「ならその本を取ってくれる？」

「これか？」

「そうそう、ありがとなあ」

お互いの本を選び、近くの机に行き、話し始めた。

「さっきはありがとだな、私は八神 はやてや」

「気にするな、俺は森 龍斗だ、龍斗でいい」

「ならこっちははやてでいい」

すぐにある程度打ち解けることができた。

いろいろな話をしている時の俺が男だと言つと、とても驚いていた。そんなに俺は女に見えるのか？
そうこうしているうちに、夕方になった。

「あ、もうそろそろ帰らんと」

「そうか、もうそんな時間か」

「ホンマやなく、楽しい事はあつとゆうーまやなあ」

「ああ、そうだな」

「また会えるかな？」

「ああ、また会えるさ」

「それじゃあまたなあ〜」

「またな」

そしてはやてと別れた。

「やっぱりいい子だな、はやては」

『そうですね』

「なんとしても救いたいな、いや救ってみせる！」

『協力しますよ、マスター』

本当にいい相棒を持ったな俺。

「じゃあまたハッピーエンドを迎えるために頑張るか！」

『ええ、了解ですマスター』

俺の手が届く範囲はなんとかしてでも救ってみせる！

たとえ偽善だとしても俺はこの気持ちを買き通してみせる！

そのためにはあの使い魔達を抑えるか。

確かにあの考えは正しいだろうけど、俺はそれ以外の方法で解決し

てみせる。
なんとしてもな。

「そのためにも準備や修行をしないとな」

『そうですね、やっておいて損はないですしね』

「それに手はあればあるほど有利になるからな、だから少しでも多く手を増やすぞ」

『了解です、マスター』

守ると思うのは傲慢かもしれないが、それでも守れるなら守りたい。もう後悔したくないからな。

『マスター・・・』

「ん？どうした？」

『いえ、少し暗い顔をしていたので』

はは、やっぱりわかるか。

「大丈夫だ、もし何かあったらお前にも相談するぞ」

『ならいいですが』

ああ、相談するぞ。

大事な相棒だからな。

「さて！この後のことを考えるか！」

『了解です』

これからは今まで以上に忙しくなるかもしれないからな。

はやてだけじゃなく、守護騎士全員が笑顔で過ごせるようにも頑張ってみせるぞ。

「そのためにもまずは能力の完全掌握だな、それと100%以上の力を出すためにもな」

『あの方に教えられた事ですね』

「そうだ、100%で満足せずにもっと上を目指すんだ、守るためにも」

でもどうすればいいのやら。

星の枷もないしなあ。

やっぱり、力の把握に力を注ぐか。

「よし！明日から早速力の把握に全力を尽くすぞ」

『了解です、マスター』

A・S編 プロローグ（後書き）

後書きコーナー！！

龍「なんだこれは」

A・S編のプロローグだよ！

龍「はやてが出てきたのちよつとだけじゃねえか」

うっ！だ、大丈夫だ！次から少しずつ本格的に入るから！

龍「ならいいがな」

では感謝コーナー！！

龍「夜神様、メガネ様、ユタ様、雨季様、感想ありがとう」

ありがとうございます！！

龍「いつもありがとうな」

そうだな。なにか送らないのか？

龍「ならお前が送れ」

いいのか？

龍「は？」

俺が送るとお前の女装姿の写真を送るが？

龍「なん・・・だと？」

まあもう送ったけどね！！

龍「死ね！！！」

ぐふっ！！

龍「いいか？そちらに行った写真をいまずぐ消してくれ！頼むから！！」

無理だと思っが？

龍「orz」

では！また次回！

第18話(前書き)

今回は短い上に雑です。
それでもいい方はどうぞ！

第18話

初めてはやてに会って少したった。
今はまた山に行き修行している途中だ。

「やはりタタリは来るか、あまり来てほしくないんだがな」
『そうですね、ですがどうやら来たみたいですよ?』

やはりタタリか。

次は誰になったのやら。

そう思っって振り向く。

「次は誰だ?」

「貴様こそ何者だ?」

どうやら次はブレイブルーのジン・キサラギか。

「貴様は僕の障害だな?ならば殺す!」

いきなりかよ。

今回は確かめるためにも、使ってみるか?

あれを。

「どうした!? 障害!」

「少し五月蠅いな、黙らせるか」

まずは空想具現化で杖をだして、

「いくぞ!」

「来い」

早速確かめてみるか。

「雷の暴風！」

取り敢えず無詠唱でやってみたがどうだろうか。

「くっ！」

どうやらいけるみたいだな。

次はこれだ！

「くらえ！」

――氷翼月鳴――

氷によってできた矢を放って来た。
だが俺も能力は発動させている！

「なっ！攻撃が跳ね返ったと！？」

やはり驚くか。

俺は一方通行の能力を使っている。
あまり覚えていなかったから使わなかったが、せめてリンカーコア
の周りにつけとくかな？

「くっ！ならばこれならどうだ！」

――煉獄氷夜――

ならば俺も、

「氷夜にて絶望に沈め！」

――煉獄氷夜――

同じ技で攻撃する。

「何！同じ技だと！？」

「終わりだ」

「なめるな！」

やはりユキアナサがあるあちらの方がやりやすいか。相殺されちま
ったな。

「けど、無駄だ！」

俺は準備しておいた、コインを上投げた。

「何を・・・！」

そして俺は超電磁砲を打ち込んだ。

「がふっ！」

終わったか、やはり他の能力も使ってみるのもいいかもな。

「くっ！僕は一体何を」

「あんたは怖い夢を見てたんだよ」

「そうか、だがこれは一体？」

やはり違和感があるか、それはやはり意思があったからだろうな。

「何か言うことはあるか？」

「いらないな、そんなもの、僕は兄さんに会えればいいと思うだけさ」

やはり思った通りだな。

「じゃあな」

「ふん！障害」
「ときが」

ジンは最後まで言うことはできずに消えていった。

「今回はまた早くにでてきたな」

『そうですね、前回よりも数が増えているかもしれないね』

「それはしんどいな」

『ですが、おそらく次はまたすぐに来るかもしれないね』

「だな、だがおそらく最終決戦の時は確実に出てくるだろうな」

最終決戦は無事に終わらせたいからな。

その為ならいくらかでも無茶な事でもやってやるさ。

「その為にもまずは妄想以下と言われた空想具現化を鍛えるか、少なくともあの人に傷をつけれるぐらいにはな」

『はい、一緒に頑張っていきましょう』

さてもう数日で始まるだろうからな、あまり時間を無駄にできない

からな。

なるべく手を増やしていこうかな。

「タタリにも気を付けていこう、今まで以上に」

『了解です、頑張りましょう』

その後、夕方になるまで修行をしていた。

無論なのはには何をしていたのかを聞かれたが、適当に言い訳をしておいた。

無印ではハッピーエンドを迎え、皆が笑い合える状況にできた。

次もハッピーエンドを迎えることができるのだろうか？

第18話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「遅い、何故こんなに遅いんだ？」

自分の部屋のパソコンが動かなくなってな、親が自分で何とかしろと言ってきてな。

龍「できるのか？」

無論無理だ！

龍「断言しやがった」

と、取り敢えず感謝コーナー！

龍「そらしたか」

うー！ユタ様、メガネ様、夜神様、雨季様、感想ありがとうございます！

龍「今回は貰い物があるな」

おう！まずは中華料理からだ！

龍「美味しそうだな」

いただきます！

龍「貴様にはない」

シヨボーン。

龍「口で言うな」

つ、次はこれだ！
コダイ君の写真だ！

龍「何が写っている？」

一枚目は、これ！
メイド服を着ている写真だ！

龍「無駄に似合うな、男なものにな」

そ、そうだね・・・。
に、二枚目はこれ！
セーラー服にダボダボのセーターを着た写真だ！

龍「さすが女装はオシャレだと言ひ張るだけあるな、ノリノリだ」

ゴフツ！

龍「は？」

こいつは威力がありすぎる！

龍「はあ、もう知らん、ではな、また次回」

で
で
は

第19話(前書き)

今回は今まで以上に駄文です。
それでもいいかたはどうぞ！

第19話

さて、タタリがさらに活発になった訳だが・・・。
これはないな。

「どうした？かかってこないのか？」×1000

まさかこんなに出てくるか？普通。

今の状況はまわりに、前回倒した転生者が複数人でできた。
ざっとだが100人くらいだな。

うん。気持ち悪いな、同じ顔が沢山だからな。

「さっさと倒して帰るかな」

そして俺はそいつらを速効で潰し帰った。
というよりいらないだろ。どう考えても。

そう考えるが、まあ気にせずに、今日の予定を考え始め、クロスと
相談していた。

「さて、おそろくだが今日か、なのは達が襲撃されるのは」
『どうするのですか？』

「一応敗北はさせるが、リンカーコアを取らせはしない」
『理由はあるのですか？あるなら説明を』

「理由ならあるさ、まず敗北させるのはな？カートリッジシステム
もあるが、敗北をして学ぶ事が多いからだ、といっても危険になっ
たらなんとしても助けるさ」

『経験者は語るですね？』
「まあそんなものだ」

いざというときに経験はものをいうからな。

「さて、結界が張られるまで待機するか」
『了解』

さて悪い方向にイレギュラーが無ければいいが。

そしてなのはが襲撃された。

「さて、もうフェイトは来ているから急いで助けに行くか」

『マスターはとても心配そうにしていますたしね』

「それを言うな、それと心配するのは当然だ、大切な人達だからな」
そして、俺はなのは達のいる場所に向かった。

なのは達の所に着くと、もう終盤だった。

(不味い！なのは達を守らないと！)

俺は今の全力で旅の扉だったか？を防ぐために、一方通行の能力で、
なのは達の周りを覆った。

「スターライトオオオ！ブレイカーアアア！」

どうやらリンカーコアから魔力を取られずに済んだらしいな。
良かった。けど、やっぱり俺はこういう事には合わないな。
次からは俺も積極的に参加しよう。

あいつらが傷ついていくのを見てみると辛いからな。

「さて、あいつらに会いに行くか」

『そうですね』

「俺に出来る限りのことをしよう」

まずはあの使い魔達をなんとかしないとな。

あの二人をなんとかして、その後に守護騎士を説得しないとな。

「守護騎士達にはどう説明するべきかな？」

『今はそれより会いに行くべきでは？なのはさん達に』

そうだな。会いに行くか。

なのはたちが心配だからな。

一応酷い怪我はないはずだが。

そして俺は二人に会いに行った。

そこで扉を開けると二人が抱き合っていたので、

「じゅっくり」

そう言って扉を閉めようとする。

「ち、ちよつと待って！！誤解なの！」

二人は慌てて俺を引き止めた。

「なんだ、ちがうのか？」

「ちがうよ！私は・・・／／／」

「何故赤くなる？」

「はぁ・・・、鈍感なの」「？」

「はぁ」「」

おい二人共何故ため息をはく？

『さすがマスターです、かなりの鈍感ですね』

なんなんだ？皆して俺が悪いみたいに。

「と、ところで怪我はないか？二人共」

「うん、それほど酷い怪我はないよ」

「こっちもそんなにないよ」

「よかった、デバイスはどうだ？」

「それは・・・」

そこはやはり原作と変わらないか。

「直すのに必要な時間は？どのくらいかかるんだ？」

それが分かれば楽なんだがな。

「今ユーノ君が見てくれてるの」

「そうか、なら見に行くかな？」

「「うん！」」

やはり二人ならそう言うか。

早速ユーノのいる場所に向かった。1週間ぐらいで直るらしい。よかった。たいした差はないようだな。

「早く直して、またそれぞれの相棒と頑張れよ？」

『Yes, sir』

「「うん！」」

うん。これなら大丈夫だろうな。

次からは本気で助けるさ。大切な人達だからな。
もう後悔したくないから。

だから能力の可能性を見つけてみせるさ。それが必要ならばな。

第19話（後書き）

後書きコーナー!!

龍「まずは感謝コーナーからだ」

A r i s h i a様、ユタ様、夜神様、雨季様、メガネ様、マーボー様、感想ありがとうございます！

龍「今回もかなりののできの悪さだが許してほしい」

龍斗の女装した写真をあげるので勘弁して下さい！

龍「ふざけるな！」

で、では！

龍「待て！・・・ではな」

第20話(前書き)

今回かなり遅くなりました！すいません！！
今回も駄文でグダグダですがどうぞ！！

第20話

あれから少したった。

なのはとフェイトは順調に怪我を治していき、デバイス達はカートリッジシステムを取り入れることに決めた。

「この調子で行ったらもう少しでまた戦わないとな」

『そうですね、次はマスターも戦うのですよね？』

「ああ、といっても相手がいればだがな」

たしかこの後の戦いは、それぞれ一対一で戦ってたからな。

『それでもタタリがいますからね』

「そうだな」

まだタタリを完全に倒していないからな。

本来ならば短い期間のみはずなんだが。

『イレギュラーとして出てきたために期間無制限ですからね』

「だから完全に滅するまで出てくる」

『ええ、そうですね』

やっかいだな。

「それでも負けるつもりはないがな」

『そうですね』

おそらくタタリはあの姿になるだろうが、あの姿ではあいつは完全になっっていないからな。

朱い月を出さないと。

『朱い月ですか?』

「ああ、それさえあればあいつは本来の姿で出てくるからな」

タタリはひとまずそれでいいか。

「後は相手の行動しただいな」

『そうですね、悪いイレギュラーがなければいいですが』
「そうだな」

クロスと一緒に話していると、

>> 龍斗!<<<

>> なんだ? クロノ<<<

>> すまないが、こちらに来てくれ!<<<

>> どうした?<<<

>> 闇の書の守護騎士達がいた! だから来てくれ!<<<

>> 分かった<<<

どうやら今日だったらしいな。

「いくぞクロス」

『了解です、マスター』

俺が着くとすでになのは達は来ていたらしく、すでに交戦状態だった。

「やっぱり相手がないか」

『どつやら来たようですよ?』

「そうか、次は誰だ?」

振り返ると、そこにいたのは、

「そこにいるのは誰!」

ブレイブルーのツバキ「ヤヨイだった。

「今度はこいつか」

「その人!何者?」

「俺か?俺は森 龍斗だ」

「そうですか、私は・・・」

「知っているよ、ツバキ「ヤヨイ中尉」

「あなたはいつたい・・・それにここはどこですか?」

「ここは少なくともあなたの世界じゃないさ」

「私の?」

「そうだ・・・さてもういいだろ?さっさと終わらせようか」

「あなたと戦う理由がありません」

「俺にはあるんだ、あんたを野放しにはできないんだ、だからあんたには悪いが・・・倒す!」

「くっ!どうしてもですか?」

「そうだ、君に違和感があるだろ?まるで自分が此処にいるようではないような感覚が」

「そうですね、ですが戦うというなら断罪します!!」

あいつらが心配だからな、なるべく早く終わらせる!

「いきます!」

そう言って相手は剣を向けこちらに向かってきた。

――審剣・光ヲ断ツ剣――

「食らうか！」

――虚空陣 雪風――

俺はその攻撃にカウンター技を使った。

「くっ！」

「まだまだ!!！」

――霧槍 尖晶斬――

一気に攻撃する！

「そ、その技は！」

「避けたか」

「な、何故あなたがジン兄様の技を！」

「答えるとても？」

「くっ」

――審技・空ニ閃ク光――

空中技か……。

ならば！

――インフェルノディバイダー――

対空用の技で迎え撃つ！

「き、きゃああああ！」

当たったか。

「ま、まだ終わりじゃない！」

——審罰・天ヲ刈ル焰——

ディストーシヨンドライブか！

「ならば！」

——蛟竜烈華斬——

こちらもディストーシヨンドライブで対抗するのみ！

「くっ！」

「うおおおおお！！！」

神速の速さで相手を切り刻む！

「くっ……」

ん？急に空中に浮いてなにを……。

まさかあいつ！

あれを撃つ気が！

「ならば俺も！」

そうして俺もあいつと同じ技の準備をする。

「白き羽根は潔白の証明、黒き羽根は原罪の咎、我ら神の代理となりて罪を裁き刑を執行する者なり！結審、瞬きの間に…！全ての罪に、断罪を…！！」

「――審聖・人ヲ裁ク神――」

そして二人同時に攻撃を振り下ろした。

「くっ！そんな・・・」

ツバキ「ヤヨイはそう言った後消滅した。

「くそっ！やはり気分が悪いな」

『そうですね、ですが』

「ああ、分かっているさ、負ける訳にはいかないのだから」

そうだ。負ける訳にはいかない。

大切な人を守るためにもな。

「で？あいつらはどうなっている？」

『少しお待ちを・・・大きな魔力反応が！』

「ちい！あの雷か！」

もう書のページを消費するところまでいったのか！

「いそいでなのは達のところへ行くぞ！」

『了解です、マスター』

俺はいそいでなのはとフェイトがいるところに向かった。

第20話（後書き）

後書きコーナー!!!!

龍「まずは感謝コーナーからだ」

A r i s h i a様、メガネ様、ユタ様、夜神様、感想ありがとうございます
ございます!!

龍「その感想が最近の元気の元らしい」

仕方ないだろ!?!学校ではDQNが多いからストレスが・・・。

龍「それは災難だな」

それに今はテスト期間だし。

龍「おい学生、何をしている」

息抜きには丁度いいんだよ。
それに最近の癒しだしね〜。

龍「そ、そうか」

最近の友達に胃薬です!

龍「友達?」

もう胃薬必須なもの。

龍「あの人はマシだろうがな」

うん。リアルであんなに痛くなったら素で死ぬる。

龍「まあいい、次回はいつに更新するんだ？」

え、急に話変えるなよ。

龍「いいから言え」(いつでも月落としができる状態)

は、はい！

次回はおそらく早くて土曜日遅くて月曜日です！

龍「だそうだが、かなり遅くなるが許してほしい」

で、では！また次回！

龍「ではな」

第21話(前書き)

今回は今まで以上に駄文です！
それでもいい方はどうぞ！！

第21話

ツバキ「ヤヨイを倒してどうするか悩んでいると、もう結界を破壊するための雷を撃とうとしていたらしく、俺は急いでなのは達の所へ向かったのだが、

「あ！龍斗君！どこ行ってたの！」

「そうだよ、心配したんだよ？」

いきなり怒られた。

なんで？

そんな場合じゃないな。

「取り敢えず早く防御するぞ！そっちも早く防御しろ！」

「うん！」

二人にも防御させたから俺も防御するか……。

「星の息吹よ……」

II Blut de Scbwester>ブルート・ディ・シュ
ヴェスタア<ー

俺は空想具現化で防ぐ事にした。
そして上から雷が降ってきた。

「ちっ！」

「くっ！」

こっちはある程度余裕があるが、あつちはないようだ。
そう思つてある程度こちらで攻撃を軽減させたんだがな。
原作より威力が上がっているのか？
でもなんとかなりそうだな。
そう思っていると、

『マスター！！後ろです！』

「何！」

後ろに仮面をつけたやつがいた。
しまった！奴らを忘れていた！

「ぐっ！」

くっ！リンカーコアが！

俺のやつは取られないようにしていたのに！
防御に力を使い過ぎたか！

「蒐集しろ」

「だが・・・」

いつの間にかシグナムがこちらに来ていた。
おそらく仮面の男を追いかけたんだらうな。
でもこのままではなのは達まで魔力を取られる！
それだけは防がないと！

「か、返せ・・・俺の魔力を返せ！」

「まだ動けたか」

そう言つて仮面の男はこちらに近づいてきた。

このままじゃやられちゃう！

「これで終わりだ」

また俺は守れないのか？

また俺は大切な者を守る事ができないのか！

「なら俺に任せろよ・・・」

誰だ？

「誰でもいいだろ？お前は守りたいんだろ？」

そうだ！

「なら俺に代われ」

その声を最後に俺は意識をなくした。

>なのは Side<

大きな雷を耐えて安心していると、龍斗君の後ろから急に男の人が出てきたの！

龍斗君はその男の人にリンカーコアを取られて苦しそうにしたの。

「か、返せ・・・俺の魔力を返せ！」

龍斗君は必死に手を伸ばしてしたが、

「まだ動けたか」

男の人がさらに攻撃をしようとしていたから私達で止めようとする
と、

「これで終わりだ」

「誰がだ？」

龍斗君が急に変わったの。

「貴様！まだ動けるのか！？」

「龍斗・・・君？」

私が呼ぶと、

「残念ながら俺は龍斗じゃないよ、まあ体は龍斗のものだけだな」

「一体どういうことなの？」

「まあ名乗るなら鏡夜と名乗るかな？」

わ、訳が分からないの！

>なのは Side end<

>鏡夜 Side<

やれやれ主人格にも困ったものだな。

まあ取り敢えずはこいつの魔力を取り返すか。

「誰だお前は！」

「言っただろ？鏡夜だって」

「くっ！早く蒐集しろ！」

「させるとでも？」

俺は主人格みたいに甘くはないぜ？

――閃鞘・七夜――

クロスをナイフにして斬りかかる！

「くっ！」

ちっ、避けられたか。

面倒だな。さっさと終わらせるか。

「いくぜ？死にたくないなら必死に避けな！」

――第四波動――

これなら大丈夫か？

「ぐあああああ」

よし当たったな。

さて回収させてもらうかね？

「させるか！」

おっともう一人出てきたか。

都合がいいな。まとめて殺っちまうか？

アゲニツシユワッタス
――炎神の息吹――

一気に燃やし尽くす！

「ちい！」

おっと？調節をミスったか？
ならば！

――デーンンドライブR・T――
ロケットスレット

マツハ9で突撃する！

「ぐあああああ！」

さて今度こそ返してもらおうか。

「魔力は返してもらおう？」
「くっ！」

あーらら。ものすごく反抗的な目だ。
なにも少し痛い目にあわせるかな？

「ほらいくぞ？」

――圧力――
バイオニック・コンプレッサー

これで押し潰す！

「ぐはあ！」

加減が難しいな。

「まだまだいくぜ？」

「ーメイデンリストラクションー

まずは麻痺させてから、

「ーデー・ンドライブ・H・プラス ヒート・エクスプロージョ
ンー」
フォックスハウンド

マツハ2のスピードで超高温の拳を連続で叩き込む！

「ぐあああああ！」

さて後はどうしようかな？

魔力も取り返したしな。

「やめろ！！」

「ん？邪魔すんなよな、今いいところなんだからなあ」

ちっ！もう出てきやがったか。

まあいいかな？

もう十分楽しんだしな。

後はなのはとフェイトから俺に関する記憶をなくすか。
その方が面白いし。

「分かったよ、すぐに戻ってやる」

まあ記憶を改竄するけどな。
さて次はいつ出てこれるかな？

>鏡夜 Side end<

くっ！何があつた！

何かを忘れたような気がするんだが。

「なのは！フェイト！無事か！」

「「うん！」」

よかつた・・・。

でも本当に何があつたんだ？

それにいつの間にか魔力が戻っているし。

「クロスは分かるか？」

『何がでしょうか？』

「分からないならいいんだが」

一応警戒しておくべきかな？

「さて、終わったんだからさっさと戻るぞ？」

「「うん！」」

そして今日の戦いは謎を残して終わった。

第21話（後書き）

後書きコーナー！！

鏡「何なのこれ？」

今日は龍斗じゃなく鏡夜に来てもらいました！

鏡「別に自分のキャラなんだからその言い方じゃなくてもいいんじゃない？」

気にするな！俺は気にしない！

鏡「まあ自分の駄文ぐらいは気にしたらいいんじゃないかな？」

ぐふっ！

鏡「まあいいや、感謝コーナーだっけ？」

そうだ！White Seal様、雨季様、ユタ様、夜神様、マーボー様、感想ありがとうございます！！

鏡「まったくだね、こんな駄文で楽しめてるのかな？」

ストレートすぎる！！

鏡「まあ多分こいつよりは上手く書けてるなと思えるからじゃない？」

楽しんでくれている人に失礼だろ！

鏡「まあどうでもいいや」

なら言っな！

鏡「まあ次も早く書きなよ」

まあテストも終わって後は2月18日まで休みだから書くよ？

鏡「なら次はいつ更新？」

多分今週中に1、2話ぐらいかな？

鏡「絶対？」

た、多分。

鏡「ならいいや、また次回も読んでねえ」

で、では！また次回！

第22話（前書き）

今回もいつも通りグダグダです！

後書きにはアンケートがありますのでできれば答えてください。

それではどうぞ！

第22話

前の戦いから少しだった。

あの時に何があったかを映像で確認しようとしたら何故かノイズがあり確認する事ができなかった。

「あの時俺に何があったんだ？」

『分かりません、ですが警戒しておくべきかと』
「だろうな」

取り敢えず警戒はしておくか。
無駄な気がしないでもないがな。

さて。あの後グラムに会ったり、守護騎士達について話したりしたが、まああんまり変わらないから省略だ。
別に面倒だったからじゃないぞ？

「で？何故俺は此処にいるんだ？」

そう言つと、

「フェイトちゃんが携帯を持ってないから買いに来たの！」

「そうか」

ん？なら何故俺もなんだ？

「龍斗君もまだ携帯持ってないでしょ？」

「いや、持ってるが？」

「「「「「！」「」「」「」

何故みんなで驚く。

「知らなかったわよそんなの！」

「言っていないからな」

「ならさつさと教えなさい！」

「別に構わんが」

という事でみんなに俺の番号とアドレスを教えた。

「」「」「」

フエイトも携帯が決まりご機嫌のようだな。

だが何故なのは達も機嫌がいいんだ？

「」「」「はあ」「」「」

全員同じ反応だと？

「」「」「鈍感」「」「」

そんな事があつたが、アリサとすずかと別れて今はフエイト達が住んでいる家にお邪魔する事にした。

「」「お邪魔します」「」

早速中に入ったのだが・・・。

「あれ？アリシアは？」

そう言った瞬間、

「龍斗く〜!」

「ぐふぁ!」

いきなりタツクルを喰らった。

「なんでなかなか来てくれないの〜?」

「す、すまない」

だがいきなりタツクルは理不尽だろ。

「ただいま〜」

む?どうやらエイミイが帰って来たみたいだな。

「あ、龍斗君となのはちゃん来てたんだ」

「ああ」

「お邪魔してます」

そういえば、

「艦長は?」

「今はアースラに行ってるよ、なんでも武装をつけたんだって」

そうか、アルカンシエルを……。

「アルカンシエル?」

なのはが不思議そうにしていると、

「えつとね、発射地点を中心に、百数十キロメートル範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲、だったかな」

エイミイが詳しく教えてくれた。

「そついえばエイミイ」

「ん？」

「今はエイミイが指揮をするんじゃないか？」

「うんそつだけど、でも緊急事態なんてそつそつ……」

その先を言おうとした瞬間アラームがなった。

エイミイそれはフラグだ。

今はモニターで砂漠でワームと戦っているシグナムを見ていた。局員が結界を張るまで待てないな。

「私とアルフが行く」

「気をつけてね」

フェイトとアルフが転送された。

少しするとモニターにはワームを倒しシグナムと対峙するフェイトと、ザフィーラと対峙するアルフが写った。

「嘘!？」

「どつした?エイミイ」

「別の世界に他の守護騎士の反応が」

ならば、

「なのは行くか？」

「え？」

「あいつと話がしたいんだろ？」

「うん！」

別のモニターがなのはとヴィータの姿を写した。
ヴィータが転移魔法で逃げようとする、なのはがディバインバスターを放った。

「うわあ、大丈夫かな？」

「大丈夫だろ」

すると仮面をつけた奴が現れた。

だが何故か本調子じゃないようだ。

何故？

だが今は両方を守らないと！

そう考え俺は某忍者の影分身をした。

「エイミー！それぞれの所へ俺を転移してくれ！」

「う、うん！分かった！」

かなり混乱していたがきちんと送ってくれた。

さすがだな。

あちらは分身にまかせて俺はフェイトの方に向かった。

> 龍斗（分身） Side <

本体になのはの方を任された。

あの仮面の奴はおそらくなのはの魔力を狙うだろうから今のうちに準備しておくか。

「デバイスは本体が持つてるから加減しづらいんだが・・・」

まあなんとかするか・・・。

そうして俺は空想具現化で某兄貴の機体を身に纏い、

「狙い撃つぜ！」

俺はあの仮面の奴に向かってビームを撃った。

> 龍斗 (分身) Side end <

あちらも間に合ったか。

こっちもフェイトに攻撃をしようとした仮面の奴を殴り飛ばしたところだからな。

「ぐっ」

「龍斗！」

「貴様は・・・」

「一対一の戦いに水を差すなよな」

どうやらまだ狙っているようだな。

ならばこちらもそれ相応の対応をするか。

「フェイト少し下がれ、そこにあんたもな」

「ああ」

「分かった」

よし二人は下げた。
さて少し懲らしめるか。

「いくぞ！・・・万象をなしえる根源たる力 太古に刻まれしその
記憶 我が呼び声に答え
今、此処に蘇れ」

――エンシエントカタストロフィー――

呪文で相手に攻撃する。

「ぐううううう！」

まだだ！

「貫け、鮮烈なる刃 無限の闇を鋭く切り裂き
仇名す者を微塵に砕く！」

――漸毅狼影陣――

神速の斬りで相手を斬り刻む！

「ぐあああああ！」

相手はもう虫の息だな。

もうこれでこの後の出来事には干渉しないだろうな。

「ちい！」

どうやらもう一人がこちらの奴を回収に来たみたいだな。

>>すまない本体、なのはの方は間に合わなかった<<

>>そうか・・・なら分身を解くぞ？<<

そうか・・・。

やはりタタリは干渉してくるか！

分身からの情報でタタリが干渉してきた事が分かった。

「くそっ！またか！またなのか！」

俺は！また・・・守れなかった。

転生してもこれじゃあ・・・。

今回の戦いではなのはの魔力が蒐集された。

第22話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回も酷いな・・・」

ああ、自覚してるぞ。

龍「ならもつと精進しろ」

もちろんだ！

龍「感謝コーナーだ」

ユタ様、雨季様、夜神様、感想ありがとうございます！！

龍「そういえばついにユニーク数が一万を超えたな」

かなり嬉しいです！

龍「他の所は何か番外編みたいなものをしているが？」

そうだねえ〜。

龍「貴様は何かしないのか？」

思いつかない。

龍「はあ〜、すまないがアンケートだ」

気楽に答えてください！

龍「まあ次の1〜3までで選んでくれ」

1、前回の番外編みたいな感じのもの。（何をすればいいんじゃないかなど）

2、コラボ（キャラ崩壊覚悟で）

3、そんなことより本編しようぜ！！

龍「1の場合は〜すればいいと思うなどの具体例もくれるとありがたい」

2の場合はどのキャラを出すかなどを書いてください。

龍「いざとなったらメッセで送ってくれ、返答はなるべくはやくするのでは」

というよりいるのかな？コラボしたい人。

龍「いないんじゃないか？」

まあいいや！

龍「ではな、感想に書いてくれるとありがたい」

では！

番外編4（前書き）

今回も雨季様とコラボしました。

キャラが崩壊している可能性があるのですがそれが許容できる人はどうぞ！！

番外編 4

今日はゆっくりできると思い、店の手伝いをしようとする。

『マスター、魔力反応がありましたか?』

「はあ、まあ行ってくるか」

桃子さんに少し出かけることを言ってから転移による魔力反応があるところに向かった。

>楔 Side<

最近面白い事がないから神様に頼んだらこの世界に飛ばされたんだけど……

「あんたは誰だ?」

いきなり何か面白そうな感じの女の子……いや男の娘がいた。

>楔 Side end<

転移の反応のあった場所に向かうと女の人がいた。

何故かこの人からは桃子さんと同じ……むしろ上の感じがする。

「あんたは誰だ?」

「そっちは?」

「俺は森 龍斗だ」

「ああ、要が言ってた……」

「要を知っているのか?」

「だって私も要だもの」

「は？」

その後ある程度解説してもらった。
その時に自分の事も話すと、

「ギター！」

と叫んできたので驚いたが。
特に女装した事を言うとなんかテンションがかなり上がっていた。

「取り敢えずすることがないなら家に来るか？」

「もちろん！」

なにか怖いを取り敢えず家に楔（でいいといわれた）を家に連れて
行った。

だがまさか要が性転換した姿だとはな・・・予想外だな。

「ただいま」

「おかえりなさい・・・この人は？」

取り敢えず桃子さんに楔の事を紹介した。

「そう、よろしくね？」

「ええ、よろしく」

あれ？一緒にいては駄目な二人な気がするが気のせいかな？

「店を手伝います」

「そう？ならこれを着てくれるかしら？」

そう言つて桃子さんが渡したのはチャイナドレスだった。

「いやですよ！俺は男なんですよ！？」

「いいじゃない、減るもんじゃないでしょ？」

「減ります！だから勘弁して下さい！」

「桃子さん……」

おっ！助けてくれるのか？

「私も手伝います！！」

なん……だと？

やはりこの二人は会わせてはいけないと今頃分かってしまった……。

「ううう」

桃子さん一人でも負けるのにそれ以上の人がいては逆らえなかった。結果俺は今チャイナドレスを着ている……。とても似合つわ！

龍斗君！

「嬉しくないんですが……」

「いいじゃない別に」

「よくねえーよ！」

なんで俺は女顔なんだよ……。

「次はこれね？」

「まだ着るんですか！？」

「もちろんよ？」

「当然じゃない？」

何故当然？

そして俺はしばらくの間着せ替え人形とかした。

「もう・・・無理・・・」

「よかったわ」

「最高」

二人はものすごく肌がツヤツヤになっていた。

女装はオシャレじゃないのに・・・。

否定しないとやっていけないな・・・。

「まだ足りないけど・・・」

「あれでまだ足りないのか・・・」

もう30着も着たぞ？

「もう帰るわ」

「そうか・・・」

「要がまた修行してくれるそうよ？」

「そうか、その時は是非頼むと伝えてくれ」

「オツケ」

女装が絡まなければいい人なんだがな。

「あら？もう帰るのかしら」

「ええ」

「ならこれをあげるわ」

「これは？」

「写真よ」

なんの写真か怖くて聞けない……。

「じゃ〜ねえ〜」

「ああ、またな」

「またいらっしやい」

どうやら帰ったようだな。

はあ〜。なんでせつかくの休みに疲れないといけないんだかな。

『ドンマイですマスター』

「はあ〜、まあいいか」

その後今日のあの時の写真が神によってあちらに渡されていたのを知り、ボコリにいったのは別の話。

番外編4（後書き）

後書きコーナー！！

龍「まったく・・・ひどい目にあっただぞ」

それは仕方ない。

龍「というよりもだ」

そうだな。

龍「まさか4件もコラボ希望がくるとはな」

こんな文才の欠片もないのにねえ。

龍「言ってて悲しくならないか？」

少し・・・。

龍「取り敢えず感謝コーナーだ」

雨季様、Arishia様、ユタ様、夜神様、感想ありがとうございます！！

龍「これからしばらくコラボの話になると思っが気楽に付き合ってくれとありがたい」

では！雨季様！こんな感じでよろしかったでしょうか？

何か間違いがあったら感想かメッセージで言って下さい！

龍「すぐに直すからな」

では！

龍「ではな」

番外編 5 (前書き)

今回は Arishia 様のところのフラグ最高神とのコラボですがかなりグダグダですがどうぞ！

番外編 5

さて。前はかなり疲れたな。
今日は休みだし、ゆっくり休むか……。

「すまんが……」

「なんだ？神、何か用か？」

「またイレギュラーが出てしまったのお」

「人数は？」

「男一人に女一人じゃ」

またこの神は厄介事を……。

「すまんの」

「まあいい、場所を教える」

そして俺はその教えられた場所に向かった。

>優 Side<

今日はなんとかなのは達から逃げられたんだけど……

「此処はいつたい？」

何で平穩に過ごせないのかなあ……
はあ……。

「ナイトハート此処がどこかわかる？」

『すみません、私にも此処がどこかは分かりません』

「そうか・・・」

うーんどうすれば・・・。

「あんたは誰だ？」

そう悩んでいると急に話しかけられた。

> 優 Side end <

早速その世界に行ったんだが・・・。

あの悩んでいる奴か？

にしてはもう一人がいないな・・・。

一応聞いてみるか。

「あんたは誰だ？」

「えーと？」

「ああ、俺は森 龍斗だがあんたは？」

「暁 優だけど・・・」

そうかこの人があのフラグ最高神で有名な・・・。

「かなり失礼な事を言われた気が・・・」

「気のせいだ・・・」

無駄に鋭いな。

その鋭さを女の子に向けてやれよ・・・。

(お前が言うな!!)

何か電波が来た気がするがスルーで……。

「で？なんで優はこっちに？」

「気がついたらここに……」

なるほど……二人のイレギュラーと一緒に来てしまったのか。

「ならこちらの神に頼んでそちらの世界に送ろう」

「いいのか？」

「多分こちらの神のせいだからな」

さてさっさと送って用をすませるか。

『マスター！！』

「どうした？クロス」

『こちらに何かに向かってきます！』

「数は？」

『二人です！』

そうか。来ちまったか。

「悪いが送るのは後になりそうだ」

「手伝おうか？」

「手伝ってもらう理由がない」

「理由なんていらないだろ？」

「お人よしめ」

「よく言われる」

さて……。なら能力の確認だな。

「そつちはなにができるんだ？」

「武器の創造かな？」

「デメリットはあるのか？」

「一応・・・そつちは？」

「アニメや漫画の能力が使えるな」

「うわぁ・・・チート」

仕方ないだろうに・・・。

でもデメリットをある程度抑えてみるか。

そうこう考えているうちにどうやら敵が来たようだな。

「貴様・・・何者だ？」

「そついうあんたは？」

まあ見た事あるけどなぁ。

「なぁ」

「何だ？」

「なんでギルガメッシュが？」

そつ男の方はギルガメッシュだった。

「貴様ら！雑種の分際でこの我を無視するか！」

うわぁ。なんとという自己中。

こつちは何とかなるかもだけどあつちの女が誰か分からないな・・・。

「そつちのあんたは誰だ？」

「私？私は神野 命よ！」

誰だよ……。

拙いな相手の能力が分からないな……。

>> 神！あいつの能力は分かるのか？<<

>> 一応のう、能力は現実の攻撃を無効化する程度の能力と、ドラクエの魔法を使うぐらいじゃなく<

つまりあの女の方は転生者か……。

なら何故ギルガメッシュがいる？

>> 実はおそやつが一度だけ召喚をできるように頼んだのじゃ<<

なるほどな、ならば。

「優にはあの女を任せていいか？あいつは現実の攻撃が効かないら

しい」

「分かった」

さてと……さっさと終わらせるか！

> 優 Side <

うん。現実の攻撃が効かない？どういう意味なんだ？

取り敢えず、

「アルトリア！」

『エクスカリバー』

色々確かめないと……。

「あ、あぶないわね！なんて攻撃してんのよ！」
「なんで文句？」

言われる筋合いはないはず……。

「いいわ！ならおかえしよ！……バギクロス！」

え〜。まさかのドラクエかよ……。

龍斗の奴聞いてないぞ！

取り敢えず避けないとな。

「避けないでよ！」

「無茶ゆーな！！！」

避けないと死ぬわ！

「むー！ならこれならどうだ！ギガデイン！」

こゝこれは洒落にならないなー！

「……星の息吹よ」

I I B l u t d e S c b w e s t e r > ブルート・ディ・シュ
ヴェスタア<ー

どうするか考えていると龍斗が空想具現化で防いでくれた。

「助かった！」

「気にするな、言わなかった俺が悪いからな」

さて・・・どうするかな・・・。

>優 Side end<

何とか間に合ったか。

さて・・・こちらもどうにかするかな？

「感謝しろ雑種」

「ああ？」

「この我が相手してやるのだからな！」

うわぁ～潰そうさっさと潰そう。

「いくぞ！」

「来い！雑種！」

――煉獄氷夜――

まずは凍らせる！

「効かんわ！」

さすがにこの程度では駄目か・・・なら！

「クロス！モード2nd」

『モード2nd』

銃に変えて、

「くらえ！」

——バレルレプリカ・フルトランス——

撃ち込む！

「ぐうううう！おのれええええ！」

よし少しはダメージが通ったか。

「雑種ゴツごときがあああああ！」

——王の財宝——

「ならば！」

——閃鞘・八点衝——

全て叩き落とす！

「ぐうううううう！」

「ふはははは！」

あの高笑いがムカつくなあ。

「死ね……」

——天地乖離エヌマ・エリシユす開闢の星——

あいつ自身の技で葬る……。

「なっ！」、これは私の……！」

「このまま消える」

「ぐうぐうぐう！」

まだ消えないか……。

なら、

——約束された勝利の剣——
エクスカリバー

俺の場合は投影の方が威力は上がるのだが、今はまだ投影が使えないために空想具現化で無理やり再現したのだが……まあ十分だろ……。

「おのれ！このような！」

「これで終わりだ……」

俺はさらに魔力を込める。

「雑種」ごときに！」

ふう。なんとか終わったか……。

あつちはどうなったかな？

そう思い優が戦っているほうを見ると、

「／／／」

女の方が顔を赤らめていた。

何があつたかは聞かないでおこうか……。

フラグ最高神ゆえ仕方ない。

「何か酷い事を言われた気が・・・」

「気のせい」

「そうか・・・」

「というよりそっちはどうなってるんだ？」

結局聞く事にした。

「聞かないでくれ・・・」

ものすごく疲れた顔だな。

まあ聞かないでおこうか・・・。

「さて、送るか」

「そうしてくれるとありがたい・・・」

「まあ次は何もない事を祈ってるよ」

「ああ、ありがとう」

「じゃな、また会おう」

「ああ」

そして優を元の世界に戻した。

まあ命への説明が面倒だったのは当然だが。

番外編5（後書き）

後書きコーナー！

龍「お前にはまだ早かったか・・・」

だねえ。まだフラグ最高神は再現できなかったよ。

龍「こんなので満足してくれるはずがないな」

だな。文句は当然Arishia様からならどんな文句だろうと受け付けます！

龍「ただし優、おまえは駄目だ」

ひどっ！

龍「どうせ誰がフラグ最高神だー！とか言っからな」

だろうね。

龍「さて、感謝コーナーだ」

雨季様、夜神様、リオン・マグナス様、Arishia様、感想ありがとうございます！！

龍「まあこんな奴の文でいいならこれからもよろしく頼む」

ぐっ！で、では！

龍「ではな」

番外編 6 (前書き)

今回はユタ様のところの優とコラボです！
デュエルを書くのは難しいですね……。
では！どうぞ！

番外編 6

今日は転生前にもやっていた遊戯王のデッキを作ってみたんだが・
・相手がいないな。

「マスター」

「ん？何かあったのか？」

『今さっき転移反応がありました』

「そうか・・・行ってみるか」

また別の転生者か？

取り敢えず行ってみるかな。

> 優 Side <

ん？ここは・・・。

「龍斗のいる世界か」

ならもうそろそろ来るかな？

「む？優か・・・」

そうこう考えているうちに龍斗が来た。

そういえば何故俺が使っているデッキがあるんだ？

おいといたはずなんだが・・・。

> 優 Side end <

そういえばこっちの優は遊戯王やってたな・・・。

「なあ」

「なんだ？」

「デュエルしてくれないか？今日デッキ作ったんだが相手がいないか
つたんでな」

「ならやるか」

「「デュエル！！」」

龍斗 LP4000

優 LP4000

「俺のターンからだ！ドロー！モンスターをセットし二枚カードを
セット！ターンエンド」

龍斗 LP4000

場 セット

伏せ 2枚

手札 3枚

「俺のターン！ドロー！俺はモンスターをセットしリバーズを1枚
セットしターンエンド！」

優 LP4000

場 セット

伏せ 1枚

手札 4枚

「俺のターン！ドロー、俺は手札を1枚捨てクイックシンクロンを特
殊召喚！そしてセットモンスターをリバーズ！レベル1のレベル・
ステイラーにレベル5のクイックシンクロンをチューニング！い

でよ！ドリル・ウォリアー！ドリル・ウォリアーも効果発動！攻撃力を半分にし直接攻撃！」

「ぐっ！」

優 LP2800

「さらにドリル・ウォリアーのレベルを一つ下げてレベル・ステイラーを特殊召喚！そして手札を1枚捨てドリル・ウォリアーをゲームから除外しターンエンド！」

龍斗 LP4000

場 レベル・ステイラー

伏せ 2枚

手札 0枚

「俺のターンドロ―！俺は手札を1枚捨てTHEトリックキーを特殊召喚！そしてダークリゾネーターを召喚！レベル5のTHEトリックキーにレベル3ダークリゾネーターをチューニング！瞬く星が夜空を染める星屑と成る。天翔ける龍となれ！シンクロ召喚！星空にきらめけ、スターダスト・ドラゴン！さらに！墓地の希望を与えし者を特殊召喚し、さらに終末を与えし者を反転召喚！レベル8のスターダスト・ドラゴンにレベル2希望ひかりを与えし者とレベル2終末やみを与えし者をダブルチューニング！希望と終末やみが交わりしとき、星屑の竜に新たな可能性が生まれる！シンクロ召喚！希望と終末やみの竜、NEOスターダスト・ドラゴン！！」

ちっ！もうでてきたのか！

「NEOスターダスト・ドラゴンでレベル・ステイラーに攻撃！」

「ぐっ！」

「俺はカードを1枚伏せターンエンド」

優 LP2800

場 NEオスターダスト・ドラゴン

伏せ 2枚

手札 1枚

「俺のターンドロ―！この瞬間ドリル・ウォリアーが戻ってくる！そして効果によって墓地のジャンク・シンクロンを手札に加える！そしてドリル・ウォリアーのレベルを1つ下げてレベル・ステイラーを特殊召喚！そしてジャンク・シンクロンを召喚し効果で墓地のグローアップを特殊召喚！レベル5になったドリル・ウォリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！いでよ！スターダスト・ドラゴン！そしてレベル1レベル・ステイラーにレベル1グローアップ・バルブをチューニング！いでよフォーミュラーシンクロン！効果で1枚ドロ―！レベル8オスターダスト・ドラゴンにレベル2フォーミュラーシンクロンをチューニング！いでよ！アクセルシンクロ！チューニング・スター・ドラゴン！さらに手札から死者蘇生を発動！墓地のドリル・ウォリアーを蘇生、そしてチューニングの効果発動！デッキから上5枚をめくる！チューナーは3枚！よって3回攻撃だ！」

だが相手の攻撃力には勝てない・・・。

「ドリルの効果で半分にして直接攻撃！」

「ぐっ！」

優 LP1600

「ドリルを手札を1枚捨て除外しターンエンド」

龍斗 LP4000

場 シューティング・スター・ドラゴン

伏せ 2枚

手札 1枚

「俺のターンドロー！NEOスターダストで攻撃！」

「シューティングの効果によってこのカードをゲームから除外し攻撃を無効！」

「カードを1枚伏せターンエンド」

「この瞬間シューティングが戻ってくる！」

優 LP1600

場 NEOスターダスト・ドラゴン

伏せ 3枚

手札 1枚

「俺のターン！ドロー、ドリルの効果で墓地のジャンク・シンクロンを回収しジャンク・シンクロンを召喚する！効果で墓地のフォーミュラーシンクロンを特殊召喚！さらに墓地のグローアップの効果発動！デッキの1番上のカードを墓地に送り特殊召喚する！レベル6ドリル・ウオリアーにレベル2フォーミュラーシンクロンをチューニング！いでよ！レッド・デーモンズ・ドラゴン！さらにレベル8レッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル3ジャンク・シンクロンとレベル1グローアップバルブをダブルチューニング！いでよ！スカレット・ノヴァ・ドラゴン！」

一気に攻める！

「スカレットの攻撃力は墓地のチューナー×500アップ！墓地

には4枚のチューナーがいるから攻撃力は2000アップ！よってスカーレットの攻撃力は5500だ！」

「この瞬間デモンズ・チェーンを発動！スカーレットを対象にする！」

「何！」

「よってスカーレットの攻撃力は3500に戻った！」

「ちっ！ならば！シユールディングの効果発動！めくった結果はチューナーが3枚！よって3回攻撃だ！さらに伏せの月の書を発動！NEOスターダストを裏にする！」

「ならば！スターシンクロを発動！このカードによってNEOスターダストを戻し場にスターダストと終末を与えし者と希望を与えし者を特殊召喚する！」

「くっ！ならば全員に攻撃！」

「くっ！」

「カードを1枚セットしターンエンド」

龍斗 LP4000

場 シユールディング・スター・ドラゴン

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン

伏せ 2枚

手札 1枚

「俺のターン！ドロー、リビングデッドの呼び声発動！墓地からスターダストを蘇生する！さらに死者蘇生を発動！そっちの墓地のレッド・デーモンズを蘇生する！さらに紅蓮の同調者を召喚！効果で紅蓮の使い魔を手札に加える！紅蓮の使い魔は効果で手札に加わった場合特殊召喚できる！レベル1紅蓮の使い魔にレベル1紅蓮の同調者をチューニング！神と同調するとき新たな奇跡が生まれる！シンクロ召喚！いでよ！奇跡の同調者！さらにレベル8スターダスト・ドラゴンとレベル8レッド・デーモンズ・ドラゴンにレベル2奇跡

の同調者をチューニング！星と悪魔が交わりし時、無限の可能性を秘めた龍が誕生する！デルタアクセル！来い！スター・デモン・ドラゴン！」

これがスター・デモン・ドラゴンか・・・。

「さらに星屑のきらめきを発動！このカードの効果によってスターダストを特殊召喚！さらに墓地の希望を与えし者を特殊召喚！レベル8スターダスト・ドラゴンにレベル2希望を与えし者をチューニング！星屑の竜が終末を照らす希望の光となる！シンクロ召喚！希望のスターダスト・ドラゴン！このカードの効果によってチューニングの攻撃力を1000下げる！」

「なっ！」

「希望のスターダスト・ドラゴンで攻撃！」

「くっ！シューティングの効果で除外して無効！」

「スター・デモン・ドラゴンでスカーレットに攻撃！」

「ぐう！」

龍斗 LP2500

「ターンエンド！」

優 LP1600

場 スター・デモン・ドラゴン

希望のスターダスト・ドラゴン

伏せ 0枚

手札 0枚

「俺のターンドロー！シューティングで希望のスターダスト・ドラゴンに攻撃！」

「ぐうっ！」

優 LP1300

「ターンエンド！」

龍斗 LP2500

場 シューティング・スター・ドラゴン

伏せ 2枚

手札 2枚

「俺のターンドロ―！俺は奇跡の架け橋を発動！このカードの効果
によってスターダストと希望を与えし者を特殊召喚！さらに墓地の
終末を与えし者を特殊召喚！そして希望と終末ひかりが交わりしとき、星
屑の竜に新たな可能性が生まれる！シンクロ召喚！希望と終末ひかりの竜
NEOスターダスト・ドラゴン！！」

やばい！

「NEOスターダストの効果でシューティングの攻撃力を1000
下げこのカードの攻撃力を500上げる！NEOスターダストで攻
撃！」

「シューティングの効果で無効！」

「スター・デモン・ドラゴンで直接攻撃！」

「ぐあああああ！」

龍斗 LP0

「ありがとうデュエルしてくれて」

「気にするな」

「お礼にこのカードを受け取ってくれ」

「ん？星屑の血統？」

「俺は使わないからな」

「ああ受け取っておく」

「また今度デュエルしてくれ、次は俺が勝つ！」

「ああ、楽しみにしているよ」

「じゃな」

「ああ」

そして優は自分の世界に帰った。
家に帰ったら改良しようかな。
次が楽しみだ・・・。

番外編6（後書き）

後書きコーナー！！

龍「なんだこのグダグダなデュエルは・・・」

返す言葉もございません。

龍「で？星屑の血統ってどんな効果なんだ？」

こんな感じ、

星屑の血統

永続罫

効果 墓地のスターダストと名のつくモンスター1体を蘇生する。

このカードによって蘇生したモンスターはシンクロ召喚扱いになる。

このカードが破壊された時、蘇生したモンスターも破壊する。

龍「けっこうひどいな」

なに気にするな。

龍「ユタ様、これを使うかは自由だからな？」

じゃあ次は感謝コーナー！！

龍「雨季様、夜神様、ユタ様、Arishia様、感想ありがとうございます」

ありがとうございます！

龍「ユタ様、こんな感じになったが大丈夫か？」

なにかあればメッセか感想でどうぞ！

龍「ではな」

では！

番外編 7 (前書き)

今回は夜神様のところの作品とコラボです！
かなりグダグダですがどうぞ！

番外編 7

今日はいつも通りに修行をしていた。

『マスター』

「どうした？」

『また転移反応が』

「またか・・・」

最近多くないか？

そんなに不安定なのか？この世界。

「とりあえずどこに反応があったか教えてくれるか？」

『了解です』

さて次は誰なんだろうか。

>カナタ Side<

あれ？

「此処は・・・何処？」

俺はただ歩いてただけなのに・・・。

「リオン？」

『何でしょうか？』

「此処が何処だか分かる？」

『すいません、私には分かりません』

ん？どうしようか？

『ああ、その悩んでる顔も可愛いです！マスター』

この駄バイスの一言は無視だ！

「今度は誰なんだろうか・・・まともな奴だといいが・・・」

悩んでいると目の前に急に女の子が出てきた。

「えっと？」

「ん？君が今回こちらの世界に来た子か？」

「えっと、多分」

「そうか・・・」

女の子は急に上を向いた。

多分念話か？

「君を元の世界に戻すにはもう少し時間が掛かるみたいだからこちらの家に来るか？」

「え？」

「ああ、急に言われても分からないか・・・ならば説明するか」

そう言って女の子は説明してくれた。

>カナタ Side end<

はあ、またあの神のせいか。

念話で聞いたらまだ安定していないから送るのは無理とかぬかしやがった。後でシバくか。

その後説明をしたんだが、まあ驚くはな。

「取り敢えず自己紹介しようか」

「そうだね」

「まず俺からだ、俺は森 龍斗だ」

「僕はカナタ・アマギだからカナタでいいよ？」

「なら俺も龍斗でいいさ」

何か誤解されてそうだな……。

「一応言っておくが俺は男だ」

「え？」

やはりか……もう慣れたよ……。

『マスター、どんまいです』

「クロス……」

『仕方ないですよ、マスターは男の娘なんですから』

むしろ自分のデバイスに止めをさされた。

「さ、さて！取り敢えず君を家に案内したいんだが……いいか？」

「え？う、うん、別にいいけど……」

ならさっさと案内するか。

そう思い行こうとすると妙な寒気を感じた……。

「どっしたの？」

「い、いや別に問題はない」

そつだ、問題はないはずだ……。

そう思っていたがまさかああなるとは今の俺には想像できなかった。

さて、家についたんだが……。

「龍斗くんの家ってここなんだ……」

「ああ、居候の身だが此処に住んでいる」

さて、桃子さんはいたかな？

「ただいま」

「おかえりなさい」

やっぱりいたか。

「ん？そこの子は？」

「友達です」

「えつと……カナタ・アマギです」

「可愛いわねえ」

「桃子さん？この子は男の子ですよ？」

そう言つと桃子さんの目が光つた。

拙い！これはあの時の二の舞だ！

「で、では！桃子さん、少し俺の部屋に連れて行きますので……」
「龍斗君？」

！ー！や、やばい！何故か動けないー！

このままじゃあ力ナタも俺も女装させられる！

>>マスター、知ってますか？・・・魔王からは逃げられないですよ？<<

>>そんなの聞きたくなかったー！！<<

「お店が少し忙しいのよ、手伝ってくれるかしら？」

「ハイヨロコンデ！」

「え？え？」

もう諦めるしかないのか・・・。

「うううう」

「あう／＼／」

こうして俺たちは女装をするはめになった。

二人ともメイド服を着せられた。

「やっぱり可愛いわ」

「へう?!」

そしてカナタが桃子さんに抱きしめられていた。

無駄に似合うな・・・。

『さすがマスターです！似合いですぎです！』

何か聞こえた気がしたが、気にしたら負けな気がする・・・。

「さあ次はこれよ？」

「え？」

まだ着るのか！

「さあまだまだあるわよ？」

まだ始まったばかりか……。

そして次はスク水にセーラー服を着せられた……。

「orz」

「あうううう／＼／」

お互いにかなりのダメージがいった気がする。
主に精神的な。

「ジュルリ」

「「！！」」

あ、あれ？何故か貞操の危機！？

「えつと?!桃子さん?美由希さんを何とかして下さい!」

気がついたらいたんだが、まさかこうなるとは!!
迂闊だった!

「か、か」

「か?」

「可愛い〜!!」

「へっつっつう!?!」

あつ、カナタが美由希さんに捕まった。

つて!のんびり考えている場合じゃないな。

「美由希さん！カナタを離してあげてください！」（無意識で上目遣い＋涙目）

「!？」

あれ？美由希さんが血の海に・・・。

「さ、さて次はこれよ？」

「もう勘弁して下さい!!」

「あう／＼／」

そうして俺たちはあの後15着ほど着る事になった。

そしてどうやらそうこうしている内に安定したらしく、送れるようになった。

「つ、次はまともに見える事を祈ろうか・・・」

「だ、だね」

「取り敢えずお詫びといっではなんだが、クッキーだ、帰ったらみんなで食べてくれ」

「うわぁ！ありがとう!」

まああんな事があつたんだからこれくらいじゃ足りないだろうが・・・。

「じゃあな、また会おう」

「うん、またね」

そしてカナタは元の世界に帰った。

もちろん神はその後で徹底的にぼこぼこにしてやった。

番外編7（後書き）

後書きコーナー！！

龍「なんだ？あれは」

また女装しただけだろ？

龍「よし、貴様を殺す！！」

ちよっ！勘弁！

龍「ちっ！」

さ、さて感謝コーナー！！

龍「Arishia様、ユタ様、夜神様、感想ありがとうございます、後で作者は潰す」

怖い！？

龍「こんなので満足できたのだろうか？夜神様は」

できていたらうれしいなあと。

龍「何かあったらメッセで送ってくれ」

次は本編の前に、ユタ様からご指摘があったのでおそらく訂正すると思います！

龍「だから本編はその後だ」

それでは！また次回！

龍「ではな」

第23話(前書き)

今回は今まで通りの駄文です。
それでもいい方はどうぞ!!

第23話

あのなのはの魔力を取られてしまっただけからかなりの時間がたった。今はもうほとんど問題がなくなり順調に回復している。今日はさすががはやての見舞いに行こうと誘ってきた。勿論なのはやフェイトが断るはずもなく、行く事にきまった。

「で？ここにはやてがいるのか？」

「うん、あれ？龍斗君ってはやてちゃんの事知ってるの？」

「ああ、図書館で会ったことがあるからな」

「そうなんだ」

「「そうなの!?!」」

何故そんなに驚く？

その後なのはとフェイトに説明するのが面倒だったが、きちんと説明したので納得したようだ。

「さて、早く行くぞ」

「「「うん」」」

「分かってるわよ」

さてはやてにもタタリが干渉してなければいいんだがな。

「お邪魔します」

「どっぞ〜」

「「「「こんにちは〜!」」」」

「よう、はやて」

「え？龍斗君？」

「入院したって聞いてな、心配で来たんだが」

「そうなん？」

「まあ大丈夫そうだな？」

「大げさなんや、みんな」

「それだけみんな心配してるってことだろ？」

まあそれを分かっているからこそなんだろうけどな。

「俺は何か飲み物を買ってくるが何か希望はあるか？」

「「「お任せで！」「」「」

「任せるわ」

はあ、任せられると一番困るんだが・・・ゲテモノでも渡してやろうか？

というより・・・

「クロス・・・」

『ええ、タタリの反応が微かにはやてさんから見つかりました』

「だな・・・」

やはりここまでタタリは干渉してくるか・・・。

「今取り除けるか？」

『不可能でしょうね、あれはかなり奥にいます』

「そうか、なら最終決戦の時になんとかするしかないのか・・・」

『そうですね』

だがおそらくそう簡単にはいかないだろうな。

「だが今回も守ってみせるぞ・・・どんな方法でもな」

『マスター・・・』

「だから手伝ってくれクロス」

『勿論ですよ』

「さて、いつまでも待たせる訳にはいかないよな？」

『そうですね、あちらも待ちかねていると思いますよ？』

「ならさっさと行くか」

『その前に分身だけでもあちらに向かわせましょう』

「了解だ」

そして俺は分身をはやて達のところに向かわせ、敵のところに向かった。

「む？」

「次はお前かよ・・・」

どうやらシオン・エルトナム・アトラシアみたいだな。

「あなたは何者ですか？」

「あんたには関係無いだろ？」

「それは・・・しかし！あなたからは人間とは感じられない！」

「ああ、俺は人間じゃないな」

「ならば吸血鬼・・・死徒ですか？」

「吸血鬼は合ってるけど死徒ではないよ」

「な！？ならば真祖ですか！？」

「ああ、だけど君の力にはなれないな」

「何故？」

「君は本人ではないからな」

「な！？ま、まさか私はタタリが生み出した虚像なんですか？」

やはり気づくのが早いな。

「ああ、その通りだ」

「そ、そんな」

「だから君は俺が消す」

「うああああああ！！」

ちっ！さっきの言葉のせいで完璧に吸血鬼化してしまったな……。

「アア：アアアアアア！！！」

「ちっ！さっさと倒すぞ！クロス！」

『了解です』

——エーテライト・エアー——

「うおつと！！」

「まだ！」

——テラーニュース（ライ）——

「ちい！」

「次！」

——レプリカントコンダクター（オシリス）——

アルクエイドか！

「ならば！」

——Scb Maiden Ender——

攻撃して打ち消すのみ！

「落ちろ！」

――グリン
グリン dicber

これで倒れてないにしろだいぶダメージは与えたはずだ。

「クロス、相手の反応は？」

『まだ健在です』

「そうか……」

やはりそう簡単には倒れてくれないか。

「ぐうう！」

「さて……終わりだ！」

「うあああああ！」

――ブラッドバイブル・ハートブレイカー――

「リリース……！コード、

サクラリッジ……！」

――閃鞘・迷獄沙門――

「弔毘八仙、無常に服す……！」

「ぐはっ！」

終わったか……。

「私は一体……」

「あんたは悪い夢を見たんだ……だからもう寝ろ」

「そう……ですか」

「ああ、そうだ」

「ありがとうございます……」

「何故？」

「何故かは分かりませんが……言わないといけない気がして」

「なら受け取っておこう……だから眠れ」

「はい……では」

「ああ、お休み」

シオンはそうして消えた。

「シオンが出たからもしかしたらあいつも出るかもな……」

『マスター？』

「何でもないさ、さて早く戻って分身と合流しないと」

『……そうですね』

おそらくもう少しでA・Sも終わるだろうな……。

最後に出てくるのはおそらくタタリ本体かアイツだな。

「どちらにせよ倒すのに変わりはないがな」

『そうですね』

さて早く戻るか……。

第23話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「おい」

ん？

龍「修正はどうした？」

さ、先に本編がうかんじゃって……。

龍「修正せずにこんな駄文を？」

す、すいません！！

龍「はあく、感謝コーナー」

ユタ様、夜神様、雨季様、Arishia様、感想ありがとうございます！

龍「もう少しでA・S編も終わりになるな」

最低でも2月中にはA・S編を終わらせませす！！

龍「まあそうでなくては困るしな」

まあテイルズにはまり過ぎなければだけどね！

龍「ああ、ヴェスペリアか」

後レディマイもあるよ！

龍「ほどほどにな」

OK！

龍「ではな」

では！また次回！

第24話(前書き)

今回は遅くなつてしまいすいません!!
急展開ですがすいません!!
それでは・・・どうぞ!!

第24話

シオンを倒して戻ったら何かよく分からんことで怒られた・・・何故？

それはいいとしてあれから数日たった。

「もうすぐで終わりだな・・・」

『そうですね・・・何事もなければいいんですがね・・・』

クロスの言う通りだな。

何事もなければいいが・・・、

「そううまくいかないのが人生なんだよなあ・・・」

そして今日はずいにはやての覚醒してしまっ日なんだよな。

「さて、ハッピーエンド目指して頑張るか！」

『了解です！マスター！』

俺はもうなのは達が病院に向かっているので急いで病院に向かったが、

「ちい！遅かったか！」

どうやらあの糞猫どもはまだ懲りてないらしいなあ・・・。

「あの糞猫二匹が今どこにいるか分かるか？」

『あそこです』

そうか・・・あんなことしといてまだあそこにいるのか・・・。

「あいつらより先にはやてを何とかしないとな」

『そうですね』

「あいつらは後でいくらでもシバけるからな」

そつだ、今はあんな二匹よりはやて達だ！

「今覚醒したせいでタタリはどうなっている？」

『かなり活性化していますね・・・このままでは危険です！』

「なら急ぐぞ！」

タタリなんぞにはやて達の命を奪われてたまるか！！

「いくぞ！クロス！」

『了解』

結界を一瞬で破り来たのでなんとか間に合いそつだ・・・、

「あれは！？」

『どうしたんですかマスター？』

あれになのは達が勝てるはずがない！

もつと急がないと！

「まさかもつ出てくるとはな・・・タタリ！」

そつ今出ているのはアルクエイドの姿をしたタタリだった。

あれにはなのは達じゃあ長くもたない！

そつ思い俺は全力で向かった。

>なのは Side<
はやてちゃんの姿が変わって攻撃してきたと思ったら急に変な丸い球みたいなのが現れたの！

あれはかなり怖くてフェイトちゃんも私も動けなくなったの・・・。
その球が急に姿を変えて、女の人になったの！

「ふうん、そういうことね、まさかこんな形で私の想像できない結果になるなんてねえ」

何を言ってるのか分からなかったけどひとつだけ分かったのが、

この人は危険

ただそれだけが分かったの。

フェイトちゃんもそれが分かったらしく急いで離れようとしていたの！
だけど、

「そこのお二人さん？何処にいくのかしら？」

「あ、ああ・・・」

「あら？この程度でそんなになるなんて・・・まあいいわ取り敢えず・・・死になさい！」

そう言っただけで女の人はこちらに攻撃を仕掛けてきた！

避けられない！そう思って目をつむっていると、

「何とか間に合ったか・・・」

そういいながら龍斗君が私たちを守ってくれたの！

>なのは Side end<

ふう。ギリギリか……。

「何とか間に合ったか……」

よかった。あの攻撃は普通の人間じゃあ耐え切れないからな……。

「なのはとフェイト達は今すぐ離れてくれ」

「「で、でも！」」

「こいつは今までの相手とは違うんだ！……だから頼む」

「「う、うん」「」

そういいながら二人は下がってくれた。
すまないな。

「あれ？あなたは誰かしら？」

「俺の事はどうだっついていいだろ？タタリ……」

「へえ、私を知ってるのね？ここは私のいた世界ではないのに」

「ああ」

「それにあなた……人間じゃないわね？」

「「！？」」「」

「ああ」

二人にもばれたか……。

この戦いが終わったら説明しないとな……。

「そんなことはどうだっついていいだろ」

「そうね、でも私と踊りたかったらまずは人間を辞めないとねえ？」

「知るか」

「まあいいわ・・・人間じゃないなら少しは壊れにくいのよね・・・
・なら簡単には壊れないでね!」

II Weiss ヴァイス Kattze カツエ

攻撃が飛んでくる!

「うお!」

「次いくわよ?・・・飛べ!」

II Eins アイン Hei ハイス

「くっ!」

「消える!」

II Zwi ツヴァイ Kalt カルト

「ぐっ!」

「おしまい!」

II Drei ドライ Reise ライゼ

ぐっ!今までの奴等よりも攻撃力が高いな・・・。

「あら、もう終わり?」

「んな訳ねえだろ・・・」

「そう?ならもう少し私を楽しませなさい!」

「ならば本気でいくぞ!」

——グラム・サイト妖精眼&直死の魔眼発動——

「その眼は……」
「いくぞ！」

——閃鞘・迷獄沙門——

「そんなの食らう訳ないじゃない」
「そんな事分かっている！」

——千魂冥烙——

「な!?!」
「そのアギトで喰らい尽くせ!ウロボロス!」
「なんて言うと思った?」
「何!?!」

——フルートBlut デイde シユヴェスタアScwesteri——

ちい!これでも無理か……。

「なかなか面白いわね……なら受けてみなさい?」
「何を……まさか!」
「偽りの月にて狩られよ!……偽りの月よ!……!」

——フルートBlut デイde シユヴェスタアScwesteri——

月落としか!

「ちい!」

「龍斗君！」

「龍斗！！！」

「大丈夫だからそこから動くな！！！」

このぐらいならなんとかなる！！

「星の息吹よ……」

I I フルート B l u t デイ d e シユヴェスタア S c b w e s t e r i e

まずはその月を壊す！！

「うおおおおおお！！！！」

「なっ！！」

まだまだ！まだいける！

「クロス！モード2nd！！」

『モード2nd』

「いくぞ！！」

ー ブラックバレルー

直死の魔眼にて本体ごと撃ち抜く！！

「ぐうううう！！」

無事撃ち抜くことができたが……これでやっとタタリのいやワラキアを引きずりだせる！！

「くくく、まさかこれで終わるとでも思っていたのかね？」
「な!?!」

これは!?!?

「あの子の書の中にいたら興味深いものがあってね、それを使わせてもらったよ」

まさか原作でフェイトが喰らったものを喰らうとはな……。

「私は君の壊れる所をじっくり観賞してしよう……」
「くっ!?!」

マズッ!

しかし俺は抵抗できずに吸い込まれてしまった……。

第24話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「何故こんなに遅くなった？」

レディマイをやってました！！

龍「はあ〜何故そんなにテンションが高い？」

PCを初期化してまた動かせるようになったからさ！！

龍「そのかわりに中身全て消えたと・・・」

まあこの遅くなった理由にはならないんだけどね！

龍「まあその場の勢いだからな・・・何も考えずに書くからこんな駄文に・・・」

ぐふっ！

龍「さて感謝コーナーだな」

くっ！まあいいか、ユタ様、Arishia様、White Sea
a1様、夜神様、リオン・マグナス様、感想ありがとうございます！

龍「まあこんな駄文だがもうすぐでA・S編も終わりだからな・・・

」

まあまだ続くけどね！

龍「これからもよろしく頼む」

では！また次回！！

龍「ではな」

第25話(前書き)

今回はかなりグダグダで暗いです。
それでもいい人はどうぞ!!

第25話

タタリに飲まれて少し時間がたった。

「ここは・・・」

そして今の俺の姿は転生前の姿だった。

「どういう事だ？何故この姿に・・・」

それにクロスもないしな・・・。

「これが闇の書的能力と同じならば望んでいる夢を見せるんだろうが・・・タタリだからな、どんな夢を見せてくるのかな」

だがここはあまりにも懐かしく感じてしまうな・・・何故だ？

「ここは君のいた世界を再現したものだよ」

「ワラキア・・・どういっつもりだ？」

タタリは悪夢を見せるはず・・・決して望んでいる夢を見せたりはしないはずだ。

「ふっ、楽しみにしていたまえ」

そう言ってワラキアは消えていった。

「だがここが俺のいた世界なら・・・いや望んでも無駄か」

そつだもつ俺の家族は・・・。

「何してるの？お兄ちゃん」

「なつ！？」

な、なんで恵が？

・・・そつかここはあの空間だったな。ならば可能だろうな。だがこれではタタリらしくないな・・・一体何をするつもりだ？

「もう！聞^いてるの？」

「ああ、すまないな」

「はあく、いつも人の話を聞かないよねえ」

「すまないな」

「もう謝らないでよ、なんだか私が悪く感じちゃうから！」

そつだ早くここから出ないと！

確かにこれは俺の望んでいた状態なのかもしれないけど俺は過^{むかし}去^いじやなく現在^{いま}を生きてるんだ。

だから、

「なあ恵」

「ん？何？」

「俺は行くよ、今の大切な人達を守るために」

「うん、そう言うと思つてたよお兄ちゃんは、でもね・・・」

「恵？」

「ここはタタリが生み出した空間なんだよ？」

「分かつているが？」

「タタリは悲劇を生み出すんだよ？こんなので終わるはずないでしょ？」

まさか……。

「そう、ここを出るには私を殺さないと出られないの」
「何!?!」

そうか……そういうことかワラキア!?!
何が楽しみにしておけだ……くそっ!

「でも私もただ黙って殺されるつもりはないよ」
「どういう……」
「こづいことだよ」

――ブラックバレル――

「な、に?」
「お兄ちゃんが今までのタタリとの戦闘で使ってた技が使えるの、だから油断していると死ぬよ?」
「くっ!」

くそっ!どうすればいいんだ!?

「どうしたの?何を躊躇ってるの?お兄ちゃん言ったよね?」俺は
過去むかしじゃなく現在いまを生きる『って』
「それは……」

確かに転生前のこいつとの最後の会話で言われて俺が決めた時に言
ったが……。

「なら悩まないでよ!何時までも此処にいたら大切な人を守れない
んだよ!?!」

「!？」

「だから悩まないでよ・・・、私は大丈夫だから・・・だから現在いまの大切な人の所に行つてあげて」

そんなに泣きそうな顔で言われたら断る訳にはいかないじゃないか・・・。

「分かった・・・」

「うん、それでいいんだよ」

「ならば全力でお前と戦おう」

「うん!でも私も全力でぶつかるからね?」

「当然だろ?」

「ははは・・・」

覚悟は決めた。

後は・・・、

「行動あるのみだ!!」

「いくよ?」

「来い!!」

「うおおおおお」

この時の戦いは今までで一番辛く一番心に残る戦いだつた。

「やっぱりお兄ちゃんには勝てないか」

「ああ、妹には負ける訳にはいかないからな?」

「うん、よかつた」

「何がだ?」

「いつものお兄ちゃんに戻ってくれたから」

「俺は弱いからな」

「うん、だから周りの人に頼ったらいいんだよ、きつとお兄ちゃんを助けてくれるから・・・ね？」

「ああ、分かった」

「じゃあね、ちょっとしか話せなかったけど楽しかったよ」

「すまない」

「なんで謝るかな、別にいいって！私も気にしてないから」

「だが・・・」

「しつこいよ？」

「あ、ああ」

「それじゃあね、一つ頼み事するね？」

「何だ？言ってみる」

「自分を責めないでね？」

こんな時までこいつは・・・。

「きつとお兄ちゃんは自分を責めると思うから・・・私はお兄ちゃんの事恨んだりしないから」

「・・・分かった」

「本当に？」

「ああ、本当だ」

「ならいいや！さっ！早く戻ってね」

「ああ、じゃあな」

「うん、先に待ってるよ？」

「ああ」

そして俺はナイフを恵の心臓に刺した・・・。
すると空間が崩れ始めた。

「あいつの言ってたことは本当か・・・」

ならもうすぐで外に出られるな。

「だがな……自分を責められずにはいられないよ……」

なんせ二回も妹を……家族を守れなかったんだからな。

「ああくそっ！目にゴミが入りやがった……痛いなあ」

『マスター』

「ああクロスか？」

『はい』

「すまないな、少しみっともないところ見せちまう」

『いいんですよマスター、思いつきり泣いて下さい』

「すまない……くっ」

その後空間から出る少しの間俺は思いつきり泣いた。

第25話（後書き）

後書きコーナー。

龍「あの後だと明るくできないんだが・・・」

だよね・・・。

龍「まあいい、感謝コーナーだ」

ユタ様、雨季様、altlene様、リオン・マグナス様、感想ありがとうございます！

龍「まあ今回はこんなテンションだが次回には元に戻っていると思うから許してくれ」

今回は今週中に更新予定です。

龍「まあ気長に待っていてくれ」

では！また次回！

龍「ではな」

第26話(前書き)

今までで一番長くグダグダです！
それでもよければどうぞ！！

第26話

妹との戦いが終わり、あの空間から出てきた。するとワラキアが笑いながら話しかけてきた。

「まさかああなたとはね・・・いやはや楽しませてもらったよ」

「ワラキア・・・」

「ん？何かね？」

「お前はここでシンデロ」

そついいながら朱い月を空想具現化で具現させる。

「な！？」

「貴様はここで潰してやる」

「何故貴様が朱い月を出せる！？」

「俺も真祖の吸血鬼だからな、空想具現化できるんだよ」

「ば、馬鹿な！？」

「ここで貴様の徒労はここで終わりだ」

「私の望みは・・・」

まだそんなことを言うか。

「叶わねえよ、ここでその存在は終わりだワラキア・・・なによりお前の劇そのものが不快なんだよ！」

「ハハハハハハハハ！！」

壊れたか？

「くり返しくり返し！幾度も幾度も「タタリ」を駆動し続け！永い

永い流転の果てに我が身が第六法に辿り着く事を夢見た・・・その結果が、無限の時を経て辿り着いた結末が・・・またこれなのか！

「その通りだ、たとえ幾千幾万の時を重ねても所詮は叶わない見果てぬ夢だ」

今のワラキアは現象となる前の姿だ。

今ならあいつを消せる！

「ハハハハハそうかそうかそうか至れぬか！何千年タタリを続けようと貴様には至れぬか、朱い月よ！！」

「？」

何を言っているコイツ・・・。

「だが！滅びぬ！私は滅びぬぞ！たとえ今宵が私の果てだとしても！」

「！？」

「あの真祖と同じならば貴様を仕留めれば嘘も消えよう！・・・元よりこの方法で至れぬならば夢もこれまで！」

コイツは・・・。

「貴様を飲みつくしその力を以て次の手段を講じよう！！・・・我が名はワラキアの夜、現象と成った不滅の存在だ！！」

何としても俺が潰す！！

「人の身に至れぬ？人ならざる身で叶わぬ？然り其は神々の領域たれば・・・キ・・・キキキキキキ！！魂魄ノ華爛ト枯レ杯ノ蜜八腐

乱ト成熟ヲ謳イ例外ナク全テニ配給、嗚呼是即無価値ニ候・・・蛮
脳ハ改革シ衆生コレニ賛同スルコト一千年！学ビ食シ生カシ殺シ称
エル事サラニ一千、麗シキカナ 毒素遂ニ四肢ヲ侵シ汝ヲ畜生ヘ
進化進化進化進化セシメン！！！」

「くっ！」

「カカカカカ・・・カ・カ・カッ！カッ！カッ！カッ！カッ！カ
ッ！リテイク！！！」

くっ！さすがに今までの奴等みたいに簡単にはいかないか・・・。

「我 朱い月の血を以て第六へと至らん！！！」

あの姫とは一応別物なんだがな・・・。

「キーーーー！！キイイイイ！！！」

避けないと！！！」

「ぐっ！」

やはり朱い月を出しながらだとかかなり動きづらいな・・・。

「キイキイうるせえんだよ！！・・・！！？」

ぐっ！

「「？」「」

くそっ！やはり死者の蘇生に投影魔術だけじゃ足りなかったのか！？
だが何故今なんだ！

「くそっ！」

何とか避けれたがどうしようか……。

「……フ、フハハハハハ、そうかそうかそうかそうか
そういう事か！」

「くっ……」

「如何に朱い月といえど具現化で力の大半が奪われている状況なら
私にも勝機があると思ったが……なるほど、なかなか楽には勝た
せてくれぬ」

「何を言っ……」

「ソレが貴様を守る奥の手か」

「龍斗君！大丈夫？」

「龍斗君……」

「な!？」

なんでなのはとフェイトがいるんだ!？
かなり強めで結界を張ったのに！

「早く逃げる!!」

「「いや!!」」

「死にたいのか!!」

「死にたくないけど……龍斗君を見捨てるのはもつと嫌だ!」

「それに龍斗君には私の家族を救ってもらった……そんな人を見
捨てるなんてできない!!」

「なのは……フェイト……」

そんな事を……。

「このソワレの主役はダブルキャストと理解した・・・真祖の代わりとしてはいささか以上に役者不足だが・・・」

そっぴいなから構え始める。

「よかろう!! 殺戮は筋書きなしの方が愉しめるといふモノ・・・では本番前のゲネラルプローベとしゃれ込もう!!」

この二人と一緒に戦うしかないのか・・・。

「見え透いているよ 人間」

「え!?!」

「誘導性を持たした魔力弾か・・・先の私と真祖の小競り合いのときに既にコレを準備していたのはよかつたが・・・この程度では私に傷をつけることすら不可能だ」

「うっ」

「リテイク!! やり直したまえ!!」

やはりあれぐらいじゃあダメージもないか・・・。

「はぁああああ!!」

「やめろ!!」

「ハハハハハハ、人間にも人形にもなれない半端者が私に挑むと!?!」

「黙れええええ!!」

「よろしい! 同じ魔術を使う先達として指導してやろう!!」

「あなたみたいな人に教わることなんて・・・ない!!」

「む・・・?」

フェイトが冷静じゃなくなっただかと思えばそうじゃなかったから安

心したが・・・何とかして止めないと。

「ふむ・・・複数の魔力弾による多重攻撃か、その魔力弾で敵の行動範囲を狭めてから死角からの複数同時攻撃・・・」

「なっ!?!」

「では採点しよう」

「避けるフェイト!!」

「くっ!」

「リテイク!!」

やはりこの攻撃も読まれてしまうか・・・。

「不利と悟るや即座に距離をとるといった判断はなかなか良い・・・さてこれで理解したかね？」

「うっ!」

「この程度の攻撃では私に傷をつけるのは不可能という事を憶えておきたまえ!!」

「ぐっ!」

「ましてや同じ魔術師・・・既知の技能で挑む愚を悟るべし!!」

「ッ・・・う・・・」

ゴウッ!!

「少々高い授業料だったかな?・・・以上で講義は終わりだ、何か質問はあるかね？」

「フェイト!!」

「フェイトちゃん!!」

くそっ!何故だ何故動かない!動けないと守れないだろうが!!

「クロス!!」

『了解です、Finalモード』

「うおおおおお!!」

今はどんなに無茶をしてもなのはとフェイトを!

「ハハハハハハ素晴らしい!! 悪くない脚本だ、体を痛めながら向かってくる滑稽さ!! それでこそだ!・・・さて それでは舞踏を続けよう」

くそっ!これじゃあ空想具現化が使えない!

幸いある程度の武器や道具はあるからなんとかなるか?

「うおおおおお!!」

「テラー・ニューサー」

「キキキキ!!」

「バット・ニューサー」

相殺できたか・・・。

「キャスト!!」

「レプリカント・コーディネイター」

「くっ!!」

それなら!

ーレプリカント・コンダクターー

「カットカットカットカット!」

「うおおおお!」

まだまだ!まだ動けるはずだ!

「龍斗君!」

「な!?!」

そんな攻撃じゃあこいつには!

「愚かな・・・学ばぬか」

「まずい!」

「なんとこの興奮め!!なんたる茶番!!もういい幕引きにしよう
!」

「え?」

「愚か・・・無様な立ち振る舞いは舞台の興を削いでしまう・・・
・ツマらないツマらない人間ナンテツマラナイ!!自滅シロ自滅
シロ!ツマラナイナラ自滅シロ!!」

「なのは逃げる!」

「え?」

「幕だ」

ーナイト・オン・ザ・ブラッドライアーー

あの攻撃がなのはに当たるとまずい!!

「間に合え!!」

ドンッ！！

「うっ！！」

「何とか間に合ったか・・・」

「龍斗君！！」

「ぐあああああ！！」

くっ！！きついなこれは・・・。

「フハハハハハ！！嗚呼・・・見ルモ無惨ナ悲シ嬉シ・・・謳工
汝ラ蠅ノ如ク！木ツ端芥ノ華ノ生命ヨ！！」

「ぐはっ！！」

「斯くして名優の奮戦は茶毘に付す！！ネズミよ回せ！秒針をサカ
シマに！誕生をサカシマに！世界をサカシマに！回せ回せ回せ回せ
回せ回せ回せ！！」

――ナイトルーラー・ザ・ブラッドディーラー――

「龍斗君！！」

「・・・奈落に落ちた役者に次はない、その闇で永遠に訪れぬ再演
を待つがいい！フハハハハハハハ・・・」

その声が聞こえながら意識をなくした・・・。

> 鏡夜 Side <

やれやれ・・・俺の出番早くないか？

まあ別に構わないが。

「おいおい勝手に終わらせるなよ、俺はまだまだいけるぜ？」

「お前は・・・何者だ？」

「まあそんな事はどうだっていいさ、さっさと殺し合おうぜ？」

「その状態でかい？」

「ああ、確かに怪我はどうだっていいんだが性能が落ちるのは問題だ・・・だがあんたにならこの状態で勝てるさ」

「ふむ、ならば再演といこうか！」

「すぐに終わるがな」

――閃鞘・七夜――

「ぐっ！その眼は・・・まさか！」

「ああ、直死の魔眼だぜ？さて、終わりだ！」

一気に決めさせてもらうか・・・この体でもあまり持たないからな。

「極彩と散れ！！」

「開幕直後より鮮血乱舞、烏合迎合の果て名優の奮戦は茶毘に伏す！回せ回せ回せ回せ回せ回せ……！」

――閃鞘・迷獄沙門――

――ナイトルーラー・ザ・ブラッドディーラー――

これで終わりだ・・・。

「現象にまで成ったこの私が・・・！！」

まだ生きていたか。

「有り得又！！カットカットカットカットカット！！」

「失せるタタリ、この世界に貴様の居場所はない」

――極死・七夜――

これで本当に終わりだ……。

「……そうか無駄か、すべて……カハツ!!」

そう言いながらタタリは血を吐いた。

>鏡夜 Side end<

俺が気がついた時にはもう終わっていた。

「キキキキキキキキキキキキキキキキ！ソウカ全テ無駄カ！ヤハリ欠落！ヤハリ欠損！ヤハリ欠戦！ヤハリ欠定ききききステニ無脳ステニ変脳ステニ低脳トウニ死ノウ！ききききききききききききききききキキキキキキキキキキ！何ヲ、何ヲ求メタノカコノ吾ハ!!」

「!?!」

「この雫……！この滴り……！ひ！！ちちちちち血この流れ落ちる命の血……！！ヒヒヒヒ」

「血の臭いが強すぎる……」

先になのはとフェイトを転移させよう……。

「先にそこにいるはやてと一緒にアースラに行ってくれるか？」

「で、でも！」

「頼む……」

「うん、分かったの」

「ありがとう」

こいつにはまだ聞かないといけないことがあるからな。
吸血鬼に何故なつたかと闇の書の防衛プログラムはどうしたかを。

「ワラキア……」

「あは、ひ、キキ……」

「お前は どうして吸血鬼に……」

「キ……それはね……答えを見たからだよ」

「……」

「答えを見たんだ、私は答えを……君もいつかその果てにたどり着くかもしれないがね」

変えようのない滅びというモノに！！

「かつて……アトラスの先人たちは平穏な世界をもたらす為未来を読んで世界を運営しようと試みた……ところが現れた未来は「滅び」なんだ！！」

「……そうか」

「考えた考えた考えた考えた考えた考えた考えた考えた考えた！あらゆる方法をシミュレートした！あらゆる手段を以て対抗策を練った！なのに手を尽くせば尽くすほど……未来はより酷くグロテスクにおぞましさを増し我々を打ちのめす！！滅びの未来に至った錬金術師は皆狂ったように未来に挑んだ！！そして……本当に気が触れた」

「……」

「私はついに確信した、吸血鬼と成って自身の能力を強化させ……第六へ至るしかないと！！」

泣き笑いの仮面で語るソレは自身の歪んでしまった理由……

今までの疲れと蘇生の代償が今更きて俺はそこで意識を失った。

第26話(後書き)

後書きコーナー!!

龍「あれ漫画ほぼそのままじゃね?」

気のせいだ!!

龍「ならいいが・・・」

で、では感謝コーナー!!

龍「White Seal様、雨季様、マーボー様、感想ありがとうございます」

ありがとうございます!!

龍「おそらく次でA・S編も終わるだろうが、終わった後はどうするんだ?」

一応番外編みたいなものを複数話やってからStsに入りたいと思つてます!!

龍「何をするんだ?」

まだ未定・・・。

龍「はあ」

で、でも今月中にすくなくとも2、3話ぐらい投稿するよ!!

龍「ならいいが」

では！また次回！！

龍「もし何かしてほしいものがあれば感想に書いてくれるとありがたい、ではな」

第27話(前書き)

今回でA・S編が終わりです！

かなり無理やりというかグダグダというか・・・取り敢えず楽しんでいただけたらうれしいです！！

第27話

タタリを倒して気絶していた俺だが、少しの時間で起きる事ができたようだ。

だから聞いておこう。

「夜天の・・・いやリインフォースは大丈夫なのか？」

するとリインフォースが近づいてきて、

「ああ、どうやらあのタタリというやつが私の中にあつた防衛プログラムを全て取り込んでしまったらしい」

「ということはもう防衛プログラムは暴走することはないと？」

「そういうことになるな」

よかった・・・。

「だが・・・」

「どうした？」

「どうやら主はやてとの繋がりがかなり薄くなってしまっている・・・
・ユニゾンができない」

やはりそううまくいかないか・・・。

「そして何故かそちらと繋がりがつつある」

「何？」

「どうやらあのタタリとやらが防衛プログラムを吸収しお前と戦い敗れた結果、防衛プログラムを少しだけだがそちらに取り込まれたようだ」

「それだけじゃこつちにこないだろ」

防衛プログラムが俺の体に入り込んでてもそうならないはずだ……。

「実はタタリが取り込んだのは防衛プログラムと少しだけの権限なんだ」

「は？」

「その権限がそちらに移ってしまいそのまま主はやての権限もそちらに移ろうとしている」

「何とかできないのか？」

せつかくはやてが幸せに暮らせると思っていたのに……。

「できていたらしているぞ」

「そうだな……」

「龍斗君……」

なのはとフェイトにはやて……。

「はやて……すまない」

「え？」

「家族を守れなくて……ごめん」

「な、なんで謝るん？龍斗君は何も悪くないやんか」

「いや俺がもつとしつかりとしていればこんなことには」

確かに人間全てが完璧にできる訳じゃないけどな、思わずにはいられない。

「龍斗君には感謝しとるよ、だって本来ならリインは消えてまうところやったし」

「だが……」

「本当に気にせんでいいのに……」

「そうだよ、みんな無事なんだからそれでいいの!」

「なのは……」

「それに龍斗君が無事でよかった……」

「フェイト……」

そうだ……。いつまでも引きずるんじゃないかと前を見て生きていこうとしたんじゃないか……。なら、

「リインフォース」

「どうした？」

「あとどれぐらいで権限の移行が終わっちゃうんだ？」

「おそらく明日までには終わるだろう」

「そうか……。今一度あやまる、すまない」

「別に構わない、本来なら消えていたのだからな」

「はやて……」

「ん？」

「本当にすまない」

「ええよ別に、これからもみんなと過ごせるやし」

「ありがとう」

やっぱりこいつらは俺と違って心が強いな……。

「リインフォース……。これからよろしく頼むな？」

「はい、新しい主……」

そういつて二人で握手した。

その後守護騎士達はどうなるかを聞いたところ、タタリに吸収された権限はリンフォースの部分らしく、守護騎士の四人の分ははやるのほうにとどまったらしい。

それだけはよかったと思えた。

その後、アリサやすずか、そして高町家の皆さんに説明をなのはとフェイトが必死にしていた・・・俺はそれを少しだけ手伝ったがな。

「龍斗君ももう少し手伝ってほしかったの・・・」

「本当だよ・・・」

「あの二人にばれたのはお前らのせいだろ？」

「うっ！」

「だったら二人で説明しないとな」

「うっ！」

「まあまあ、龍斗君もそんな意地悪せんと手伝ってもええんとちゃう？」

そんなことをはやてが言ってくるが、

「ある程度は手伝ってるさ、このくらいなら大丈夫だろって思うくらいな」

だからこれ以上は手伝わないんだがな。

「ぶっ、龍斗君の意地悪」

「意地悪で結構だ」

「わ、私は思っていないよ？だから手伝ってよ龍斗・・・」

あの事件の後からフェイトは俺の名前を呼び捨てにし始めた。

なにやら「呼び捨てにして距離をぐっ」と縮めるのよ！」「うん分か

「つたよ母さん」なんて会話が聞こえたが・・・意味が分からん。

『はあくこれだから鈍感と言われるんですよマスター』

「ひどい言い草だなあクロス」

「と言うよりもプレシアさんははっちゃけすぎな気がするんだが・・・それとアリシアだが今は魔法の特訓をすることでミッドチルダにいる。才能はフェイトと同じくらいあるらしく、かなり上達しているそうだ。」

「聞いているの!?!」

「ああ、聞いているさ」

「どうやらうなあ、龍斗君って案外抜けてるしなあ」

「失礼だな、俺はそんなに間抜けじゃないぞ?」

「まあええわ、取り敢えず用件はわかっとなるんよな?」

「ああ、今日みんなで集合だろ?」

「わかっとなるんやったらええんや」

今日は俺となのはとフェイト、それに八神家全員で集まる約束をしていた。

まあA・Sの最後の集まりの増加版とでも思ってくれ。

「じゃあ行くか」

「うん!?!」

「了解や」

この後もSttSがある・・・またイレギュラーがあるかもしれないがそれでも俺は大切な人達を守るだけだ!

『それでこそマスターです』

「ああ、これからもよろしく頼むぜ？」

『こちらこそ』

「じゃあ今度こそ行くか」

これから少しの間時間があるんだ、俺のできることをしよう・・・
またハッピーエンドを目指してな。

第27話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「ようやく終わったと思ったらなんだこの駄文は・・・」

くっ！言い返せない！

龍「こんなのでは皆さんが混乱するだけじゃないか？」

まあ説明苦手ですから！

龍「自慢するな」

では感謝コーナー！！

龍「無視しやがった・・・」

ユタ様、雨季様、メガネ様、夜神様、マーボー様、感想ありがとうございます！！

龍「今回の分は今まで以上に理解できないとおもぅがこれが作者の限界だ、勘弁してやってくれ」

次から少しだけ番外編を書いてからS7S編に入りたいと思います！！

龍「次の分も今回同様かなり遅くなるかもしれんがきちんと書かせるので気長に待っていてくれ」

では！また次回！！

龍「ではな」

番外編 8 (前書き)

今回もしつこく女装編です！
それにかなり適当です！！
それでもいい方はどうぞ！！

番外編 8

ワラキアを倒して数日・・・今日も修行をしていたんだが・・・。

『マスター』

「どうしたんだ？」

『どうしてリミッターをつけたまま戦うんですか？』

「は？」

『マスターはずっとリミッターをつけたまま戦ってたじゃないですか』

「本気で？」

『ええ』

なん・・・だと？

なら今までの苦労は一体・・・。

「まさか何処ぞやのやつのおっかりまでうつってないだろうな」

『マスター？』

「いや・・・なんでもない」

まあこれからはある程度楽になるのかな？

「取り敢えず戦いの時は外しておいてくれ」

『了解です』

そうこうしながら今日の修行は終わった。

「」どっつてこうなったんだ・・・」

いきなりのごとで何のことか分からないだろうが俺は分かりたくもない！
なんせ……

「龍斗君……これを着てくれないかしら？」

「いやこれの方が似合ってますよ桃子さん」

「あら？龍斗には黒い服が似合ってるに決まってるでしょ？」

この三人が手を組んで俺に女装させようとしているからだ……。さすがに女装ネタがしつこい気がするぞ？

「あ、あの桃子さん？リンディさん？プレシアさん？」

「……何かしら？」

「どうしてこんなことを？」

「……似合うから」「」

そ、そうだ！まだなのはやフェイトとはやて、アリサやすずかと守護騎士達がいるじゃないか！
だ、誰か味方をしてくれるやつを……、

「龍斗君！これ着てほしいの！」

「龍斗……これ似合うと思うんだ」

「ちよっと着てくれんかなあ？似合うと思うんよ」

「ちよっとコレ着てみなさいよ、似合うからきつと！」

「ちよ、ちよっとアリサちゃん！」

味方がすずかしかないだと？

「こっちの方が似合うに決まってるよ！」

すずかもか・・・orz。

「か、勘弁してくれ」

「「「「無理」「「「「」

やはり女装からは逃げられないのか・・・。

『マスター、強く生きて下さい』

「ああ、味方はクロスだけか・・・」

「もちろん私もあなたの味方ですよ、主」

「アイン・・・」

あの時から俺の事を主と呼び、はやてのことを元主もしくははやてと呼ぶようになった。

まあはやてのほうははやての希望でそうになったのだが、俺の方は気がついたらそうになっていた。

「それに主ならば似合ってると思いますよ?」

『アインさん?それはフォローになってないですよ?』

ああ、俺の心にグサリときたよ・・・。

「龍斗君が落ち込んでいる内に着替えさせましょ?」

「「「「賛成」「「「「」

こうしてもう何回目になるか分からないがまた女装をすることになってしまった・・・。

「くっ・・・は、恥ずかしい／＼／」

「すごく似合ってるの!!」

「ほんまに男か疑問に思えるぐらいやなあ」

今回は月姫のアルクエイドが着ていた服そっくりな服装になっている……。

今回はおとなしめなのか？

「ま、前のに比べれば……まだマシなのか？」
『そうですね』

でも嫌な予感しかしないんだが……。

「次はコレよ！」

だよなあ。

「つ、次はコレかよ……」

「うわあ、本当に女の子みたいなの！」

「本当よね」

次はとあるに出てくる美琴の制服みたいな感じの服装になった。
というよりも何故ある!？

「昨日作ってみたのよ？」

心が読まれてる!？

「気のせいよ？」

桃子さんは恐ろしい……。

「次はこれよ！」

「まだ続くんですか!？」

「当然でしょ？」

「orz」

もう諦めようかな……。

「うう……////」

「本物の巫女さんみたい！」

次は巫女服かよ!しかも腋あいてるし!
どこの腋巫女だよ!?

「うう……アイン」

「あ、主!？」

「た、助けてよ」(涙目+上目遣い)

「!?!？」

「ア、アイン!？」

な、なんでアインが血塗れに!?

「あ、あれは可愛すぎるの……////」

「あれじゃあアインもああってまうわ////」

その後みんなが血の海に沈んでファッションショーは終わった……。

結局アインの倒れた理由は分からなかったが何故か忠誠を誓ってき

たのが怖かった。

番外編 8 (後書き)

後書きコーナー!!

龍「死ね！」

いきなり!?

龍「長い間投稿せずにいたくせにこれはなんだ？」

す、すいません!!

龍「次は容赦しないからな？」

イ、イエッサー!!

龍「さて感謝コーナー」

夜神様、メガネ様、A r i s h i a様、リオン・マグナス様、感想
ありがとうございます!!

龍「次回はどうするんだ？」

一応マテリアル編をした方がいいのかなあと思っている。

龍「できるのか？」

できるかできないかじゃなくて、やるかやらないかだろ!

龍「それだけの実力があればだな」

Orz

龍「マテリアル編はした方がいいかどうか感想に書いてくれるとありがたい」

「応他に何かしてほしいなどがあれば言ってください！
できればします！

龍「ではな」

ではまた次回！

マテリアル編 カ(前書き)

今回はかなり無理やりです！
まあいつもの事ですが・・・。
それでもいい方はどうぞ！！

マテリアル編 力

今日もいつも通りに修行をしていたんだが……。

「なあクロス、アイン……」

『なんでしょうかマスター』

「なにかありましたか？」

「この気配は……闇の書の反応だよな？まさかマテリアルか？」

あの時にきちんと消えたと思っていたんだがな……。

『どうしますか？』

「そんなものは聞かなくても分かるだろ？」

『よけいな質問でしたね』

「まあ何とかするしかないんだがな」

さて、どうするかな？

「主、こちらに何者かが向かってきています」

「数は？」

「1人です」

「なら一応リミッターを外してやってみるか」

『了解です』

リミッターを外したらどのくらいになるのやら。

「主、来ます！」

どうやらもう来たみたいだな……誰だろうか？

「やい！そこのお前！僕と勝負しろ！」
「・・・馬鹿か？」

なんだかフェイトに似ているけど圧倒的に馬鹿っぽいんだが・・・。

「なんだとー！馬鹿って言った方が馬鹿なんだ！」

「えっと、アイン？もしかしてマテリアル全員がこんな感じとは言わないよな？」

「え、ええ、こんな感じなのはおそらくこの子だけでしょう」

ま、まあ大丈夫だよな？

他の2人は大丈夫なはず・・・もう殆ど覚えてないが。

「取り敢えず僕と勝負しろ！」

「なら・・・いくぞ！」

とあるの能力主体でいくか。そう思い首につけているチョーカーのスイッチを押した。

これはとあるにでてくる一方通行の首についでるチョーカーだったか？をとあるの能力を使う時の切り替え用にネタで作ってみたんだが・・・いいなコレ。

「いくぞ！電刃衝！」

「む？」

これは・・・誘導性はなしか・・・。

「避けるまでもないな」

「なっ！」

だが反射して無効化する・・・やっぱ反則だなコレ。

「次はこれだな」

そういいながら俺は周りにルーンの書いてある紙（水に濡れても大丈夫なやつ）を一気にばら撒いた。

「そんな物でどうするつもりだい？」

「こうする・・・灰は灰に

（AshToAsh）

塵は塵に

（DustToDust）

吸血殺しの紅十字！！（SqueamishBlood

yRood）」

まあ吸血鬼の俺が使うのは変かもしれんが。

「うわぁー!!」

「やはり当たらないか・・・」

フェイトのスピードに耐久力がついたみたいなものだからな・・・
ややこしい。

「これならどうだ!!」

——光翼斬——

次は誘導性ありか・・・。

「ならば！世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ
(MTWOTFFTOIIGOIIOF)

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり(I
IBOLAIIAOE)

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸
なり(IIMHAIIBOD)

その名は炎、その役は剣(IINFIIIS)

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ(ICRMMBGP)・・・

インケンティウス
魔女狩りの王！

そして俺はとあるに出てくるステイル＝マグヌスのインケンティウス魔女狩りの王を
出した。

「な、何それ？」

「ん？これはインケンティウス魔女狩りの王とってな、その意味は『必ず殺す』だ
そうだ、と言つても本来ならもつときちんとした準備をしないと
いけない物を無理やり使つたから威力は格段に落ちているがな」

きちんと準備すればこれの数倍は上の威力になるからな。

「さて、これで終わりかな？」

「な、なめるな！」

――雷刃滅殺極光斬――

「砕け散れ！・・・雷刃滅殺！極光斬！」

そして思いつき雷刃の襲撃者は自分のデバイス・・・バルニフィ
カスを振り下ろした。

「凄いで強いぞカツコイ〜！」

すごく喜んでいるところ悪いが……、

「インケンティウス
魔女狩りの王！」

「なっ!?!」

一気に燃やし尽くす!

「そ、そんな〜」

「最後に油断するからだ」

「むう〜」

さて……どうするかな?

「アインはどうしたいんだ？」

「私は……この子達には別の生き方をしてほしいです」

「なら雷刃の襲撃者だっけか？」

「なんだよ……」

「俺たちと一緒に暮らさないか？」

「え?」

俺がそう言つと雷刃の襲撃者はかなり驚いていた。

「いいの?」

「ああ、もちろんだ」

「な、なら……よろしく」

「よし!ならまずは名前だな!いつまでも雷刃の襲撃者なんて呼びづらいしな」

なんて名前がいいだろうか……。
よし！ここはステイルの魔法名からもらおうか。

「名前は Fortis から取ってルカだ、Fortis はラテン語で強いという意味なんだが……。どうだ？」

「ルカ……。うん！これから僕の名前はルカだね！気に入ったよありがとう！」

よかった……。気に入ってくれたか。

「とりあえず一旦休んでいてくれ、君の仲間も一緒になれるようにするからな？」

「分かったよ！それじゃあまたね！」

こうして雷刃の襲撃者あらためルカは一旦書の中に入った。

おそらくイレギュラーがなければ後2人マテリアルがいるはずだが・
・イレギュラーはあるんだろうな。

「さて次はどいつが来るのかな？」

『マスター、別の反応が見つかりました』

「ここから距離は？」

『そう離れていません、どうしますか？』

「もちろん行くに決まってるだろ？」

「私もお供します」

「アイン……。無理だけはするなよ？」

「分かっていますよ」

「じゃあ行くか！」

「『はい』」

そうして俺達は次の相手がいる場所に向かった。

マテリアル編 力（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回は今まで以上に無理やり感が・・・」

自覚してるからヤメテ！！

龍「何故こうなった？」

マテリアルズにも出番をあげたかったからだ！

龍「はあくそれだけの理由でか？」

それだけの理由で十分だ！

龍「はあく、感謝コーナー」

スルー！？えつとRain様、メガネ様、マーボー様、雨季様、Arishia様、リオン・マグナス様、夜神様、感想ありがとうございます！

龍「まあ女物の服を渡してきた人にはお仕置きしないとなあ？」

か、勘弁してやって！？

龍「無理」

あ、後アンケートです！

龍「ちっ！」

舌打ち！？えつと雷刃は決まりましたが他の星光と闇統べる王の名前が決まっています！すいませんが何かアイデアがあれば感想に書いてください！！

龍「こんな作者ですまない」

期限はおそらく3月4日までくらいが目安です！

龍「感想に書いてくれるとありがたい」

では！また次回！！

龍「ではな」

マテリアル編 理(前書き)

今回もかなり無理矢理です！
それでもOK！な人はどうぞ！！

マテリアル編 理

ルカを一度休ませるために書の中に戻ってもらい、次のやつ所に
いこうとしていたが……。

「雷刃の襲撃者はやられましたか……」

次はなのはにそっくりなやつが来た。

「君は？」

「私は星光の殲滅者です、私の目的のため……私の魔導のために
戦ってくれませんか？」

どうやらあのルカとはちがい賢そうだな……。

「どうかしましたか？」

「いや……あの子みたいなやつばかりだとどうしようかなと思
ってただけだ」

「では……戦っていただけますか？」

「もちろんだ……いくぞ？」

「では……いきます！」

前のルカのようにはいかなさそうだな……。

「パイロシューター！」

誘導弾か……。

「斬刑に処す！」

――閃鞘・八点衝――

全て斬り刻む！

「甘い！」

「む？」

「ブラストファイヤー！」

なのはのディバインバスターと同じか！

「喰らうか！」

――封魔陣――

遠距離攻撃を無力化できる陣を発生させる。

「なっ！？」

「隙ありだ！」

――劉櫻――

気を練って一気に放つ！

「くっ！？」

「やはり慣れてない技じゃ無理か」

「ならば！……ルベライト！」

「バインド？」

という事は……大技か！

「集え、明星・・・全てを焼き消す焔となれ！」
「ならば！」

「ルシフェリオン、ブレイカー！」

「剽華燎乱 “闇螢”！」

「なっ！」

「まだまだ！さらに！剽櫻 円想虚 “空”！」

「さすが・・・ですね」

「気はすんだか？」

「ええ、なので私はここで・・・」

「気が済んだのなら俺達と一緒に過ごさないか？」

「え？」

「アインがお前達にも他の生き方をしてほしいらしいな・・・俺もそう思ったのでな」

「よいのでしょうか？」

「俺が言っただ、いいに決まってるだろ？それに俺はお前と過したいからな」

「!？」

ん？何故か顔が赤いが・・・風邪か？

「わ、私でよければ・・・」

「ああ！これからよろしく頼む」

「ええ、分かりました」

「なら名前決めないとな・・・」

「名前ですか？」

「ルカ・・・雷刃の襲撃者にも言っただがその名前？は言いつら
いからな」

「そつでしようか？」

「ああ、だから名前を考えないとな……」

何がいいだろうか……そつだ！

「ヒカリはどうだろうか？」

「ヒカリ……ですか？」

「ああ、まあ単純に君の星光の殲滅者の光から取っただけなんだが……」

「ヒカリ……そつですね、単純ですが確かにいい名ですね」

「そつか、気に入ってくれたか？」

「ええ、これから私はヒカリと名乗ります」

「そつか、ならば今は休憩しててくれ」

「分かりました、ではまた後で」

「ああ」

よかつた……。

でも次はおそらくはやてそつくりなやつなんだろうな……。

「ややこしい性格じゃなければいいんだが……どうやらマテリアル達はキャラが濃いみたいだからなあ」

『マスター、頑張って下さい』

「人事だな」

『実際頑張るのはマスターですし』

「反抗期か？」

『いいえ』

何故か反抗期みたいになっているんだが……気のせいかな？

「主……」

「どうしたアイン？」

「どうやら次の相手が来たようです」

「そうか・・・」

さて・・・次はどんなやつなんだろうな。

まともだったら嬉しいんだが・・・無理か。

マテリアル編 理（後書き）

後書きコーナー！！

龍「ネーミングセンスゼロだな」

いきなり！？

龍「もつとマシな名前をつけなかったのか？」

これが限界なんだ！

龍「こんなやつが作者でいいのか？」

うっ！

龍「まあいい、感謝コーナーだな」

えっと・・・ユタ様、A r i s h i a様、リオン・マグナス様、メ
ガネ様、雨季様、夜神様、感想ありがとうございます！！

龍「今回の技の元ネタが分かる人は感想で言ってくれ、当たってて
もお菓子を俺が作って渡す程度だな」

むしろ知ってたら私が歓喜します！！

龍「ではな、また次回でな」

では！また次回！！

マテリアル編 王(前書き)

今回もかなりグダグダです！
それではいつも通りに気楽にどうぞ！

マテリアル編 王

つい先ほどヒカリを倒したのだが・・・、

「休憩する暇はないと？」

『え？休憩必要ですか？』

「一応あったほうがいいだろうが・・・」

『そうですね』

なんだろう・・・本当に反抗期なんだろうか・・・。

「主・・・次の子が来ます」

「そうか・・・」

さてと・・・どう戦うかな？

「2人はやられたか・・・」

「君は・・・」

「我は閻統べる王だ」

やはりはやて似か・・・戦法も近いのかもな。

「うぬは何者だ？人間の気配がしないとは」

「ただの化物だよ」

「そのような事はどうでもいい、我は目的さえ果たすことができればよいのだ」

「そんな事はさせないと言ったら？」

「うぬのような塵芥が我に勝てるとても？」

「ああ、思ってるよ」

そう言つといきなり撃ち込んできた。

「我を侮辱する気か？塵芥の分際で！」

「さあな、とりあえず戦つてみたら分かると思うが？」

「……いいだろう、そこまで言つなら我の力を見るがいい！」

「御託はいい、いくぞ！」

さて……どうくるかな？今までのやつと同じならば牽制を入れてくるが……。

「アロンドイト！」

いきなり砲撃か！？

「くっ！ならば……クロス！モード2nd！」

『了解、モード2nd』

「バースト！」

『了解』

これで相殺できた……次は……！？

「アロンドイト……！」

「くっ！またか！」

今度はかなりチャージされてるな……。

「ならばそれ以上の攻撃で相殺するのみだ！」

——ブラックバレル——

「なっ!?!」

「呆けている暇はないぞ?」

「くっ!」

「喰らえ!」

――バレルレプリカ・オベリスクー

「ぐう!?!」

「ちい!まだ終わらないか・・・」

「なめるな塵芥が!」

すると闇統べる王がチャージを始めた・・・。

「これで終わりにするってか?」

「ああ、これで終わりだ塵芥」

「いいだろう、ならば俺も全力で相手をしよう!」

「絶望にあがけ塵芥・・・エクスカリバー!!」

「そんなものをエクスカリバーとは言わない!これが本当の約束さ
れし勝利の剣だ!」

「何!?!」

お互いの攻撃は一瞬さえも拮抗せず闇統べる王の攻撃は一方的に飲み込まれた。

「勝てなかったか・・・」

「ああ、お前の負けだ」

「我では目的を叶えることさえできないとはな・・・」

「そんなものを目的にせずにこれからは別の目的を作ったらどうだ?それぐらいなら俺も手伝う」

「我は何を目的にすればいいのだ・・・」

「それは自分で見つけろんだ、俺は君がその新しい目的を見つけるための補助しかできないからな」

「ならば・・・うぬの元にしても構わぬか？」

「ああ、そもそもそのつもりだったからな」

「そうか・・・」

よかった・・・どうやらあちらから言ってくれたから進めやすいな。

「ならまずは名前だな」

「名・・・だと？」

「ああ、閻統べる王だと過ごしていくのに不便だからな・・・いいか？」

「・・・いいだろう、だが変な名前をつけたら承知せんぞ？」

「そうだな・・・メアはどうだろうか」

「メア？」

「ああ、閻繋がりって事でまあ安直だがな」

「・・・メアか」

「だめか？」

「ふ、いいだろう！今から我はメアと名乗ろう！」

どうやら気に入ったらしい。

「じゃあ今は休んでいてくれ」

「よかろう、ではまた後で会おう」

「ああ、またな」

さて・・・イレギュラーがなければこれで終わりだろうが・・・、

『マスター！かなり大きな魔力反応がこちらに向かって来ます！』

「数は？」

『1つですが・・・魔力の大きさが異常です！』

となると俺のマテリアルか？

「主・・・」

「大丈夫だ、キツイなら下がっていてもいいぞ？」

「いえ、私も戦います」

「そうか、ならば無理だけはしないでくれ」

「それは主もです」

「ああ無理はしないさ・・・無茶はするけどな（ボソツ）」

「何か言いましたか？」

「いや？何も言っていないさ」

次は今まで以上に大変そうだから・・・。
少なくとも楽には勝てそうにないな。

「まあそれでも負ける訳にはいかないんだけど・・・」

さあもう少し頑張るか。

マテリアル編 王（後書き）

後書きコーナー！！

龍「お前名前決めるの適当だろ」

そんなことはない！

龍「ならいいんだが・・・」

さて！さっさと進めようか！

龍「なら感謝コーナー」

メガネ様、雨季様、Arishia様、ユタ様、感想ありがとうございました！
ざいますー！！

龍「おそらく後1、2話くらいでマテリアル編は終わると思う」

マテリアル編が終わればおそらく番外編を複数挟んでからSTS編に入ると思います！

龍「それまで気楽に読んでもらえるとありがたい」

主人公のマテリアルですが名前というか称号？はまだ決まってるませ
ん！

龍「おい」

センスがないのでいいのが思いつきません！

龍「どうするつもりだ？」

え〜と、他の人に募集してみるという事で・・・OK？

龍「他人任せすぎだろ」

で、では！よろしければアイデアを感想にどうぞ！

龍「こんな作者ですまない・・・ではな」

マテリアル編 幻（前書き）

今回もかなりグダグダです。

自分でも何が伝えたいか分かりません！

それでもいい方はどうぞ！！

マテリアル編 幻

メアを倒してすぐに敵の反応が近づいてきたのでここで待っている
と、

「主！来ます！」

「さて・・・次のマテリアルはどんなやつだ？」

そう思いながら今来たマテリアルの姿を確認すると、

「あの3人はやられちまったか・・・まあどうでもいいや」

いかにも悪人みたいな態度をとっている俺に似たやつがいた。

「お前は誰だ？」

「俺か？俺は幻想の支配者っていうんだが・・・まあイレギュラー
だな」

「それで？お前の目的もあいつらと同じか？」

「ああ？ちがうちがう、だれがそんな物を望むかよ・・・ただ俺は
周りを壊したいだけだぜ？」

コイツ・・・。

「なあオリジナル・・・お前もそう思ってたか？」

「何を言っている？」

「あんたの前世の記憶ぐらいはあるんだよなあ俺には・・・タタリ
のおかげだな」

「!？」

「世の中は非情だよなあ、家族を目の前で失った気持ちはよく分

かるぜえ？」

「黙れ」

「酷いよなあ普通に過ごしてただけなのにある日急に胸騒ぎがして早く帰ってみれば・・・家族みんな死んじまつてるんだからなあ」

「黙れと言ってる」

コイツは・・・俺の前世全てを語るつもりか？

「そんな状態で犯人が目の前にいたんだ・・・殺すのが当たり前だよな？まあその時は記憶が吹き飛んで気がついたら殺してたんだがな」

「黙れ！」

「その後はさらに酷かったなあ、なんせお前がお世話になる親戚もみくんな目の前で殺され続けたもんなあ？そりや世や神を恨みたくなるわなあ」

「黙れって言ってたろうが！」

「うおっと？最後まで言わせるよなあ、そんなお前がとる行動は・・・殺し一択だったよなあ、そんなお前のなれの果てが俺なんだよ・・・殺人に快楽を求めた殺人鬼・・・お前の可能性の一つだ」

ちがう・・・ちがう！

「違わねえよ、そもそも殺しに正当な理由があるのか？」

「何を・・・」

「守りたいものがあるから殺す？殺されたくないから殺す？・・・ふざけてんのか？人はみんな綺麗な理由で・・・正当化して殺そうとするやつが多いんだよ！」

コイツは・・・何を？

「犯罪者だから殺されて当然？ならその犯罪者を殺したやつはなんだ？何故犯罪者にならない！同じ罪だろ！何が正当防衛だ・・・結局殺してんのに変わりはないだろ！」

まるでそれを肯定してほしいかのように語りだした。

「取り敢えずオリジナル・・・あなたは俺が殺す、俺はお前の存在を認めない！」

「無茶苦茶だなお前」

「ああそつだ！だがあんな生き方してたら納得なんてできるはずがないだろうが！」

確かにそうなのかもしれないな・・・、

「だが過去をいくら振り返っても所詮過去は過去だ、後悔しても意味はない」

「なら貴様は後悔せずにいられたのか！」

「後悔しかしていないさ、だが後悔なんて後でいくらでもできるんだ・・・でも今を生きるのは今しかできないんだ・・・俺には夢がある！お前にもあるだろ？夢が」

「ああ、あつたさ！だがもう生きている意味のない俺がどうしろってんだ！」

「生きていけば！」

「!？」

「生きていけばいつかきつとなんとかなるんだ！・・・俺は少なくともお前みたいに夢を諦めたりしない！」

「くっ！なら・・・お前が正しいなら俺に勝ってみせろ！」

「勝つてやる！俺は俺自身になんか負けてたまるか！」

こうして俺達の戦いが始まった。

「いくぞ！」

「来い！」

――閃鞘・八点衝――

「くっ！」

いきなりか・・・だが！

「この程度の攻撃で俺をどっにかできると思っているのか！」
「ならコレならどうだ？」

――ブラックバレル――

「くう！！！」

こうなったら・・・、

「クロス！モード2nd！ただし銃は1丁だけだ！」

『了解モード2nd』

「来い！」　「くっくっ」

そう俺が叫ぶと何処からか虫が俺の銃に飛んできた。

「何をやる気だ？」

「くっするんだよ」

その虫は銃と同化した。

「何!？」

「いくぞ?銃の威力は跳ね上がってるから気をつけるよ?」

「くっ!」

幻想の支配者はすぐに距離を離れたが・・・何故だ?

「喰らえ」

――極死・七夜――

「くっ!」

急いで離れたが・・・やはり避けきれないか。

「どうした!そんなものかよ!俺に勝つんじゃないのかよ!」

「ああ、勝つさ」

そつだ俺はコイツだけには負けたくない!

「さあもつと力を貸せ!」 かつこう”!!俺の夢を喰らってんのな
らもつと力を!」

「なっ!?!なんだその腕は!」

「さあな、教えるとも?」

俺の右腕の半分が緑色のナニカに埋め尽くされている。

「いくぞ?」

「くっ!」

俺の放った一撃であいつの腕が吹き飛んだ。

「お前の夢はなんだ！」

「俺の夢だと？」

「そうだ！お前にもあったんだろっが！」

「俺は・・・俺は！シアワセになれる場所がほしかった！誰だって望むだろ！だが・・・俺のせいで人が死んでいくんだ、そんな夢は持つ資格がないんだ」

「俺は！自分のいていい居場所がほしかった！そう思える場所がなかったからな！だが俺は諦めなかったぞ！・・・それに夢に資格も糞もねえだろっが！」

夢は全員が持つてもいいものだ。

「うるさい！お前だって前世で絶望したはずだ！家族を殺され親戚も殺され続けたなら！」

「ああ確かに絶望したさ、だがなこの世界に転生して・・・あの家に世話になって、俺は守りたくなった！もう一度！今度こそは守りたいと！居場所をくれたあの優しい家族を守りたいと思えたんだ！」

途中からお互いになんの技もなくただただ殴り合う。

「俺は・・・俺は！」

「いつまでも逃げてんじゃねえよ！俺でも先に進めたんだ！お前も先に進め！」

「俺は逃げてなんかいない！」

「逃げてるだろっが！確かに辛いだろうが俺達みたいに辛いやつはいくらでもいるんだ！悲劇の主人公を気取ってないで先に進んで見せる！」

誰かが幸せなら誰かが不幸になるんだ・・・ならこんな所で立ち止

まる訳にはいかない。

「どうしろってんだよ・・・俺はどうしたらいいんだよ」

「そんなものは自分で見つけないと意味がない・・・だから俺ができるのはその手伝いだけだ」

「俺は・・・あんたに酷いことも言った、殺そうとしたのに・・・どうしてそんなに優しくできるんだよ！」

「さあな？ただ甘いだけだろ」

「ああ確かにそうだな、本当にあんたは甘い・・・だがそんなあんただから今があるんだろうな」

「お前も過ごそうと思えば過ごせるぜ？」

「いや・・・遠慮しておこう、だがもう一人の俺いや彼女を頼む、あいつはあんたと一緒にいた方がいいだろうからな」

「お前はどするんだ？」

「俺は素直に消えるさ・・・夢は彼女に託すさ」

「・・・分かった」

「ああ、これでいいんだよな？俺は・・・十分幸せだ」

そう言いながら幻想の支配者は消えた。

だが、その消えた場所には女の子がいた。

「あ、あれ？ここは何処？」

「君は？」

「え、えっと・・・オリジナル？」

「は？」

「えっと・・・僕は幻想の支配者っていいいます、確かそのはず・・・多分」

「そ、そうか・・・君は男の方の幻想の支配者は知らないか？」

そう聞くと不思議そうに、

「僕は女だよ？男の僕なんて知らない」

そうか・・・どうやら片方しか知らなかったみたいだな。

「そうか、そいつに君の事を頼まれたんだ、だから来てくれるかな？」

「うん、何かよく分からないけど・・・ついてく」

「ああ、ありがとう」

お前の事は俺が覚えておくから・・・お前は安心して眠れ・・・俺。

「そつだ・・・名前を決めないとな」

「名前？」

「ああ、不便だろ？幻想の支配者ってのは」

「そつかな？」

「そつだ」

どんな名前がいいかな。

「そつだな・・・ハルはどうだ？」

「ハル？」

「ああ、春のように暖かい笑顔でいられるようにと意味をつけたんだ」

「ハル・・・うん、ありがとうございませす、これからはハルって名乗ります」

「ああ、これからよろしくな？」

「は、はい！」

『マスター・・・』

「ああ、あいつの事はもう少し黙っていよう、最悪言わないかもし

れないが」

「ええ、そのほうがいいでしょうね」

なあお前は満足か？

好き勝手言って・・・勝手に人を託して消える、本当に無茶苦茶だな。

「だが約束は守るさ」

帰ってからのこいつ等の説明がしんどそうだが・・・まあ甘んじて受けると思いますか。

マテリアル編 幻（後書き）

後書きコーナー！！

龍「これでマテリアル編は終わりか？」

うん、後は数話番外編を挟んでからStS編に入ります！

龍「漸くか」

あっという間だったな〜と。

龍「それより感謝コーナーだ」

雨季様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「メガネ様にはマテリアルの称号を考えてもらったからな」

本当に感謝です！！

龍「次回からまた番外編だが・・・まあ何か希望があれば感想に書いてくれ、なるべく書かせるから」

で、では！また次回！

龍「ではな」

番外編？（前書き）

今回はリオン・マグナス様とコラボです。
かなりグダグダですがどうぞ！

番外編？

マテリアル達を住まわせるのに桃子さんに相談して、俺のプライドとかその他もろもろを犠牲にして何とか許可をもらってから数日たった。

「龍斗・・・少しいいかのお？」

「ん？何か用か？」

「どうやらお主と戦いたいと言っやつがおつての・・・こちらに送った」

「事後承諾かよ・・・まあいい、で？相手は誰だ？」

「水無月悠二という名前じゃ」

「水無月悠二か・・・何時来るんだ？」

「もうすぐ来るじやろう」

ふむ・・・わざわざ戦いに来ているんだ、何か目的があるんだろうな。

「すまないが今回だけ投影を・・・固有結界を使えるようにしてくれないか？」

「何故じゃ？」

「本気で戦いたいからな」

「了解じゃ、使えるようにしておこう」

「ああ、ありがとう」

「では頑張つてのお」

よし、これで全力でいけるな。

「後は相手が来るのを待つのみか」

『マスター……』

「ああ、もちろん全力だからリミッターをはずしといてくれ」
『……了解です』

>悠二 Side<

今日はあちらの神様に龍斗と戦えるように頼み込んで約束してもらった日だ。

「あいつと戦うのは初めてだ……勝てるか？」

いや……勝つのも目的だがもう一つ目的があった。

「もつそろそろかな」

そう思っていると目の前に龍斗がいた。

>悠二 Side end<

「龍斗……勝負だ！」

いきなりか……まあ、

「いいけどな」

「？」

「いやこちらの話だ、さて水無月悠二……いや悠二、何故勝負を申し込んだ？」

「それは……」

言いつらい事なのか？

「言いつらいならば勝負の中で聞くと」

「ありがとう」

「さて、ルールだが・・・結界を張るからその後を決めようか」

「ああ」

そして俺は結界を張った。

「この結界は？」

「この結界は攻撃を吸収しさらに硬度を上げる結界だ、だから壊れない」

これで全力を出しても周りに影響はない。

「ルールは戦闘不能になるか参ったと言つまででいいな？」

「ああ」

「じゃあ始めようか」

さて・・・どこまでいけるかな？お互いに。

「戦う前に一つ聞いてもいいか？」

「ん？何だ？」

「お前の正義は何なんだ？」

「俺の正義？」

「ああ」

正義か・・・そんなもの、

「俺は大切な者を守る・・・かな」

「大切な者を守る？」

「ああ、そういうお前は？」
「それは……」

悠二は顔を俯かせる……なるほどな。

「自分の正義を見失っているのか」

「何故？」

「顔に書いてるよ」

分かりやすいくらいにな。

「自身の正義が分からない……見つからないんだろっな」

「ああ、どうすればいいんだ？」

「そんなものは自分で見つけるしかないな、そもそも正義なんて人それぞれだろ？他人から決められた正義ではなく自分で見つけた正義の方が貫きやすい」

どごぞやの悪・即・斬みたいにな。

「そもそも無理に正義に拘らなくてもいいだろ、たとえ自分が悪になろうとも大切な人が守れたら俺は満足だがね」

「そう……だな」

ふむ……これなら大丈夫か？

「さて話はここまでだ、この続きは戦いながらしたらいいだろ」
「分かった」

さてどうなるかな？

「いくぞ！」

考えていると悠二がどうやら投影した干将・莫耶を持って向かってきていたらしい。

「なら俺は……」

槍で行くか。

トレス・オン
「投影開始」

「なっ！ 刺し穿つ死棘の槍！？」

「そっだ……いくぞ！」

そう言いながら俺は悠二に槍を向けた。

「くっ！」

「そらそらそら！」

「なめるな！」

「ちい！」

やはり当たらないか……なら！

「その心臓……貫い受ける！」

「なっ！？」

ゲイ・ボルク
「突き穿つ死翔の槍！！」

そして俺は刺し穿つ死棘の槍を投げた。

「くっ！ 熾天覆う七つの円環！」

やはり防いでくるか。

「次はこっちから行くぞ！」

何をしてくる？

「I am the bone of my sword .」

体は剣で出来ている。）

Steel is my body , and fire is
my blood . 血潮は鉄で 心は硝子。

I have created over a thousand
blades . 幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death . ただの一度も敗走
はなく、

Nor known to Life . ただの一度も理
解されない。

Have withstood pain to create
many weapons . 彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に
酔う。

Yet , those hands will never ho
ld anything . 故に、生涯に意味はなく。

So as I pray , unlimited blad
e works . その体は、きっと剣で出来ていた。 「

固有結界か。

「クロス、モード2nd」

『了解、モード2nd』

「かつこじ」

「それは・・・」

「さあ・・・来い！」
「いくぞー!!」

銃に虫を寄生させて威力を上げる。

「はあああああー!!」

「うおおおおおー!!」

お互いに撃ち合う。

「お前には夢があるか！」

「夢？」

「そうだ！夢があればその夢を叶えるために生きるはずだ！それはないのか!？」

「俺は・・・人殺しだ、そんな物をもつ資格なんて・・・ない！」
「糞が！どいつもコイツも夢に資格を求めやがって！夢を持つのになんぞに資格があつてたまるか！」

「な!？」

「俺は知つてると思うが自分の居場所がほしい！だから俺はこの夢をかなえるために努力をする！お前にもないのか？そんな夢が・・・」

「・・・」

黙っちまったか・・・まあいい。

「それならば自分の夢を・・・自分だけの夢を見つけろ！無理ならば周りに頼れ、お前の周りの人なら喜んで協力してくれるだろうからな」

「ああ」

「さて、俺の説教にもならん説教はここまでだ、この勝負・・・終

わらせるぞ!」

「ああ」

これで終わりにする!

「いくぞ!」

「来い!」

——無限の剣舞——

アムリミット・ブレイダンス

剣が大量に降ってくる。

「ならば……」

その全てを撃ち落とす!

「うおおおおお!」

「はあああああ!」

お互いに出せる全ての力を出しながら攻撃する。

「かつこう!」俺の夢を喰らい力を増せ!」

右腕が緑色のナニカに埋め尽くされる。

「うおおおおお!」

まだ剣戟が撃ち出される。

「まるで雨みたいだな……だがこの程度で諦めてたまるか!俺は

諦めない！俺の夢を叶えるまでは！だから・・・” かつこう” 俺の夢を・・・叶えるためにもっと力を寄越せ！」

『マスター！これ以上は・・・』

「まだだ・・・まだいける！いくぞ！バレル・レプリカ・・・フルトランス！」

「なっ！？」

こちらの攻撃が悠二に当たった・・・これで終わってくれとありがたいが・・・。

「ぐっ・・・負けた」

「どうだ？何か掴めそうか？」

「さあ？でも少しだけスッキリしたよ」

「ならよかった、次は勝負なしで来てくれるとうれしいが」

「ああ、次は勝負なしで会おう」

「なら土産だ、少し作りすぎてな・・・苺のケーキなんだが、持って帰ってくれ」

「ありがたくもらうよ」

よかった。処理しきれなかったからな。

「じゃあな」

「ああ」

こうして悠二は帰っていった。

やれやれ疲れたな・・・やはり虫の能力はあまり使わない方がいいのか？

「さて帰りますか」

『ええ、それと少し話があります』

「ん？なんだ？」

『説教です』

「え？」

その後家に帰ったらクロスから2時間ほど説教された。
か、かなりしんどい。

『自業自得です！』

番外編？（後書き）

後書きコーナー！！

龍「おい」

ん？

龍「こんな駄文で納得できるとでも？」

え〜と・・・。

龍「間違いなくリオン・マグナス様から苦情がくるだろうな」

そ、その場合は直すさ！

龍「こんな駄文ですまないな、キャラがかなりというより原型をとどめていない気がするがこれがこの作者の限界だ・・・勘弁してやってくれ」

とことんストレートだな！？

龍「感謝コーナー」

スルーかよ・・・Arishia様、リオン・マグナス様、雨季様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「次回はおそらくまた2日3日くらい先になるだろうが気長に待っていてくれ」

リオン・マグナス様！こんなのでよろしいでしょうか？
何か訂正があればメッセージでお送り下さい！

龍「それではな」

では！

番外編10（前書き）

今回はツヴァイの話です！
かなり雑ですがそれでもよければどうぞ！

番外編 10

あの戦いからある程度たち今日はアインがはやてとユニゾンできなくなつたためにはやてにユニゾンデバイスを製作することになつた。

「やはり原作通りにツヴァイになるのかな？」

『ですね』

「少しくらい強化するべきなのか？」

『それはマスターの独断では決まられませんよ』

「そうだな」

はやてには内緒でいたいしな。

「主・・・そのユニゾンデバイスはいつ製作するのですか？」

「そうだな・・・やはり俺達だけで製作するには色々と面倒だからな」

製作するのには別荘を使えば1週間以内に完成するが・・・、管理局がややこしいからなあ。

「大丈夫でしょう、登録を済ませればあまりうるさくは言わないかと」

「だといいんだが・・・そうだ何かアイデアはあるか？」

アインの妹になるんだから頑張らないとな。

『アイデアといつても・・・あまりありませんよ？』

「主・・・書のデータを使っては？」

「元々使うつもりだ」

そうだな・・・少しだけだが他の世界の魔法も入れてみるか？

「さて・・・じゃあさっそく別荘にいつて製作しますか」

「『了解』」

さて・・・原作よりも高性能にしますかね？

さっそく製作を開始して半年くらいだった・・・まあ別荘の中なん
で実際は外に出れば1時間くらいだがな。

『マスターは本当に規格外ですね・・・まさか本当に完成させると
は』

「主・・・」

何故かアインからは呆れた目で見られてんだが・・・他の世界には
もつとやばい規格外が沢山いるぞ？

「さて・・・はやてを呼ぶか？」

「そうですね・・・この子もはやく会いたいでしょっし」

それじゃあさっそくはやて達を呼ぶとするか。

>>はやて、今暇か？<<<

>>え？う、うん暇やけどないしたん？<<<

>>はやてだけにプレゼントがあるんだ、だからこちらまで来てく
れるか？<<<

>>う、うん分かった、すぐ行くわ！！<<<

やたら嬉しそうだったな・・・それだけ気になるのか。

「主？はやては何か言ったのですか？」「ああ、すぐ来るって」

「そうですね・・・主はやてに何を言いましたか？」

「ん？それは・・・」

念話の内容を伝えるとアインは呆れたかのようなため息をはいた。

「主・・・もう少し考えてから話してみては？」

「失礼だな俺が何も考えていないみたいじゃないか」

「そうですね・・・」

またため息をはいた・・・俺が悪いのか？

「き、来たで！」

「お、おお？かなりいそいで来たみたいだな？」

「そ、それは・・・その・・・」

「まあいいか・・・それよりはやてへのプレゼントはこの子だ」

「まあええつて・・・はあく・・・ん？この子・・・は！？ま、ま

さか誘拐してきた・・・今すぐ自首するんや！今ならまだ罪は軽く・

・・・「んなわけあるか！？何故そうなる！？」

「違うん？」

「違う！・・・はあく、アインと同じ存在だよ」

「アインと？」

「ああ、アインと同じユニゾンデバイスだ」

「そうですね、はやて・・・あなたのために主と協力して製作しました」

「私のために？」

「そつだ・・・名前はリインフォースアイン?からもらいリインフォースソウアイ?だ」

「リインフォースソウアイ?」

「そつだ、じゃあさつそくはやて・・・君がこの子を選んであげてくれるか?」

「う、うん・・・リインフォースソウアイ?」

はやてがそう呼ぶと眠っていたリインフォースソウアイ?が目を覚ました。

「リインフォースソウアイ?です!えつと・・・よろしくお願いします!!」

「え、えつと・・・よろしゅう?」

「おいおい・・・緊張しすぎだろ、もう少し気楽にな?」

そう言う少しは楽になったのか、

「改めまして!リインフォースソウアイ?と言います!よろしくです!」

「うん、私は八神 はやてや、よろしくな?」

「はい!えつと・・・」

「ああ、そつちの好きに呼んでええよ?」

「じゃ、じゃあはやてちゃんでもいいですか?」

「ええよ、じゃあ私はリインて呼ぶな?」

「はい!よろしくです!」

こうしてリインフォースソウアイ?とはやての挨拶はすんだ。

その後はリインソウアイ(リインフォースソウアイ?にそう呼べと言われた)に父様と呼ばれたりアインが姉様と呼ばれたりはやてが母様と呼ばれたり大変だった(なのはやフェイト達への説明的な意味で)。あいつらは容赦がなかった・・・あれはきつかった。

「全員で最強技ぶつけてきたもんなあ」

『ええ、まあ自業自得ですが』

「何故？俺は別に何もしてないが？」

『何もしてないからじゃあないですか？』

「？」

『はあく、なのはさん達が大変そうですね』

いきなり独り言を始めたが・・・止めたほうがいいんだろうか？

「おいクロス」

『大体マスターは鈍すぎ・・・はい？』

「何を言おうとしたのかは後で追求するとして・・・マテリアル達は大丈夫なのか？」

『ええ、もう完全に回復していますし勉強もしっかりさせていますから大丈夫です』

「そうか」

大丈夫じゃないと俺があんなにトラウマになるような約束をした意味がなくなるからな・・・。

「じゃあまあ程々に次の準備だな」

『ええ、忙しいですがまあ頑張りましょう』

「じゃあさっそく追求するぜ？」

『あ、あれ？誤魔化せたのでは・・・』

「んな訳ないだろ？これからじっくりと聞かせてもらっつからな？」

『逃げるなら・・・いやもう遅いですね』

その後約2時間程尋問したが・・・まあどうでもいいよなあ？

番外編10（後書き）

後書きコーナー！！

龍「グダグダな上はかなり適当にできなかったか？」

キノセイデスヨー。

龍「まあ駄文なのはいつものことか・・・」

えっと・・・すみません！！

龍「謝るくらいならもっと頑張れ」

ごもつともで。

龍「感謝コーナー」

雨季様、リオン・マグナス様、メガネ様、感想ありがとうございます！！
す！！

龍「後1、2話くらいでStS編に入る予定だ」

なので気楽に気長にお待ち下さい！

龍「ではな」

では！

番外編 1 1 (前書き)

今回はかなり遅くなったうえに駄文です。
それでもよければどうぞ！

番外編 11

いきなりで悪いが最近の悩みが女顔だということなんだが、

「どうにかならないか？」

『無理ですね、それが運命です』

「どれだけ酷い運命だよ」

そんな運命俺がぶち壊す！って言いながら右手で殴るぞ。

「何をですか？」

「それはまあ神？」

というより……、

「さりげなく地の文を読むな」

『声に出てますよ』

「マジで？」

「ええ、マジです」

なら仕方ないのか？

「と、取り敢えず！」

「『逃げましたね』」

「俺はこの顔を何とかしたいんだが……」

『それは某フラグ最高神さんがフラグを建てないくらいの確率です
ね』

「絶望的……だと？」

『まあ運命は残酷ということだ』

なんだろう・・・すごく理不尽な気がしてきた。

「どうすればいいんだろうか」

『マスターも諦めが悪いですね』

「女装は無理・・・あれは罰ゲーム以外のモノではないな」

『どこかの人はオシヤレと言っていますか？』

「否！断じて否！」

断じてオシヤレではない！

『マスター落ち着いて下さい、どこぞの子安ボイスになっています』
「気のせいだ」

さて・・・もう帰ろうかな。

「でも今家に戻ると桃子さんがなあ」

『また女装するはめになりますからね』

「だから逃げてきた訳だがな」

『前に言いましたよね？』

「ん？何をだ？」

『魔王からは逃げられないと』

「まさか・・・」

もう追いつかれたのか！？

『ええ、しかもなのはさん達が協力しています』

「あいつらもか？」

『はい、マテリアル達もです』

「数が増えたorz」

なんであいつ等まで協力してんだよ……。

『まあマスターの女装が見たいからでは?』

「俺の女装なんて見苦しいだけだろ?」

『いいえ、可愛いですよ?』

「喜べない……」

そう話していると、

「バインド!?」

『ようやく追いつきましたか』

「な!? お前もあちら側だったのか!? クロス!」

『マスターの女装が見たいので』

「オンドウルウラギツタンデイスカ!」

『私にオンドウル語は理解できません』

くそー! まさか近くに裏切り者がいるとは!

「さあ龍斗君? 観念しようか」

「大丈夫やで? 痛くせーへんから」

「何をする気だはやて!?!」

「そんな事聞かんといてーなノノノ」

「な!? なのは! フェイト! はやてを何とかしてくれ!」

じゃないと大変な事に!?!

「はやてちゃん? 何をしようとしてるのかな? かな?」

「なのは! それは別の人だ!」

「はやて……抜け駆けは駄目だよ?」

「フェイト!? ツツコむところ違うからな!?!」

「なのはちゃんフェイトちゃん、考えてみてや?」
「な、何を?」

ま、まずい!何故だかわからんがこのままじゃまずい!

「「「さあ龍斗(君)?覚悟はできた?」」」
「だ、誰でもいいから助けてくれ!」

結局なのは達は丸め込まれたからマジでヤバイ!

「了解です、主」
「アイン!」

アインが転移してくれたおかげで何とかなったか・・・?

「ありがとうアイン何とかなったよ」

「い、いえ、主のためですから」

「本当に!助かった!」(少し涙目+上目遣い)
「うっ!?!」

「ど、どうしたアイン!?!」

「あ、主・・・私は幸せです」

「アイン?アイン!?!な、なんで鼻血で沈んだ!?!」

いや落ち着け俺・・・ここが何処だか調べるんだ。

「ここは何処だ?」

「何を言ってるのかしら?」

「え?」

「ここはあなたの家よ?」

「桃子さん!?!」

「ここは高町家か！」

「さあコレに着替えてくれるかしら？」

「龍斗・・・着替えて下さい」

「そっだよ〜見てみたいから着替えて！」

「ふむ・・・我も見たいので着替える」

「あ、あの・・・私も見てみたいです」

ヒカリにルカにメアにハルまで・・・。

「拒否権は？」

「「「「「ない」「」「」」」」」

「はは、逃げるなら・・・いやもう遅いか」

その後女装をさせられたがみんなが血の海に沈んだ。

もう桃子さんからは逃げられない事が分かったからなるべく少なく

してもらえるように頼む事にしました。

次からは減つてる事を祈ります。^{マル}

『作文ですか!?!』

番外編 11 (後書き)

後書きコーナー!!

龍「もう死ねよお前」

いきなり酷いな!?

龍「なんで俺は女装しないとイケないんだよ」

それが運命なのです!

龍「そんな運命嬉しくねえよ」

えっと・・・感謝コーナー!!

龍「逃げたな? まあいい、マーボー様、メガネ様、Arishia様、感想ありがとうございます」

いつもありがとうございます!

龍「こんな駄文でも楽しめていたら幸いだ」

うっ、反論できない。

龍「今回は遅くなったが次は2日ぐらいで投稿できると思う」

11回じゃあ中途半端なので12回まで番外編をした後にStS編に入りたいと思います!

龍「だから何か希望があったらそれをやるかもしれん、だから何か希望があれば感想で言ってくれ」

では！また次回！

龍「ではな」

番外編 12 (前書き)

今回は長くてグダグダです！ (グダグダはいつも通り)
それでもよければどうぞ！！

番外編 12

やれやれ・・・中途半端だからといって急にまた番外編するなんて言うなよな作者・・・。

『いきなりメタ発言はどうかと思いますが』

「地の文を読むな」

『口に出ていると言いましたが?』

「本当にか?」

『ええ、本当です』

これはクセなのか?なら何とかしないと・・・。

『マスター?』

「なんだ?」

『神から電話です』

神から?また転生者でも来たのか?ややこしいやつじゃなければいいんだがな。

「何の用だ?」

「いきなり機嫌が悪そうじゃのう」

「あんたから電話があったら碌な目にあわねえからな」

「まあ気にするでない、それで用件じゃが・・・また転生者が紛れ込んだじゃった」

「きもい」

『気持ち悪いです』

いい年の爺がすることじゃないだろ。

「いきなり酷くないかの!？」

「それはいいとして・・・何人だ？」

「よくはないんじゃないが・・・数は一人じゃよ」

「名前は？後ソイツの能力も」

「名前は鈴木 卓郎じゃよ、能力は王の財宝と投影魔術じゃの」

まあありがちすぎるな。

「他に能力はあるのか？」

「それぐらいじゃよ、今は此方に来るようにしておいたからもつすぐでくるじゃろうな」

おいおい、まあまったくの無人世界だから別に構わないが。

「これ終わったらお前にO H A N A S H I Iだな」

「そ、それは、勘弁してほしいかのぉ」

「うん、それ無理」

さて、神へのお仕置きは後ですとして・・・もうそろそろ来るか？

「ん？お前は誰だ？」

「鈴木 卓郎だな？」

「ああ？お前は誰だよ」

「俺は森 龍斗だ」

いかにもあれだな・・・悪そうなやつだな。

「お前の目的はなんだ？」

「俺の目的？そんなもんハーレムに決まってるだろ？男の夢だろ！」

「知るか、というより馬鹿かお前」

「何だと!？」

「此処が何処でどんな世界か分かってんのか？」

「ああ、ここはリリカルなのは世界だろ？」

ああ、コイツもあれか。

「此処はリリカルなのはの平行世界だ」

「平行世界？」

「ああ、だからお前の知っているようにはいかない、実際ここではタタリが発生したからな」

「なっ!？タタリ・・・メルブラかよ」

相当驚いているな・・・俺も初めて出会った時は焦ったが。

「だ、だったらお前が消えればいいんじゃないか!お前が消えたら俺がなのは達を守ってやるよ!」

「俺が消えてあいつらが助かるならさっさと消えているさ、それにお前がいてもイレギュラーが起きるんだ、変わりはしない」

「な、ならお前を消して俺がこの世界の主人公になってやる!だからお前は俺に消される」

コイツ・・・殺すべきか?ここまで救いようがないとはな。

「お前が俺を消す？」

「そうだ!そしてなのは達は俺のモンだ!」

ああ、コイツは俺を怒らせるのが上手いなあ。

『マスター!落ち着いて下さい!』

「クロス何を言っている?俺は落ち着いているさ・・・」

「何を言っているか分からねえがお前を消す！」

そう言っつて鈴木 卓郎・・・いやもうやつでいいか、やつが向かってきた。

「クロス・・・あいつは潰すぞ？」

『了解です・・・』

「モード2nd」

『モード2nd』

「そんな銃で俺が殺される訳ないだろ！俺は吸血鬼なんだぜ！？」

吸血鬼・・・真祖ではないみたいだな。

「真祖じゃなければ殺すのは簡単だ・・・」

「何！？」

「クロス・・・ツインガン変更・・・454カスール カスタム

オートマチックとジャツカル」

『了解、モード2ndツインガン変更』

銃をこの2丁に変える。

「だから無駄だっつて言ってるだろ！」

「五月蠅い」

あの人と同じ戦い方に変える。

ドンッ！！

「なっ！？」

「何が無駄なんだ？」

「お、俺は吸血鬼になつたのに何故こんな銃で!？」

「ただの銃じゃないからだ」

「な、なら!王の財宝!！」
ゲイトオブパレロン

ゲイトオブパレロン

王の財宝から大量の宝具が降つて来るがよける必要がない。

俺は全ての攻撃をわざと受ける。

「はあ、はあ、やったか？」

「ク・・・クハ・・・ツクハハハッハハハ」

「なっ!？」

「この程度で俺を殺せると思つなよ？」

「何だと?」

「この程度で殺せると思つなよと言つたんだ化物」
フリークス

「くっ!ならば!」

そう言いながらやつはエアを出した。

「いくぞ!天地乖離す開闢の星!！」
エヌマ・エリシュ

これは少しキツイか？

「ならば・・・全て遠き理想郷」
アヴァロン

全て遠き理想郷を使い防ぐ。
アヴァロン

「なっ!?!全て遠き理想郷だと!?!」
アヴァロン

「何を不思議がるんだ?俺はイレギュラーで転生者だ、それぐらいできると思えよ」

「くっ」

「さて・・・お前は俺の代わりになのは達を守ると言つたな?」

「あ、ああ」

「そこに不純な思いがなければまだしも不純な思いだけで行動しようとした」

「そ、その何が悪い！」

コイツ・・・開き直りやがった。

「そうか・・・ならお前は生かしておく訳にはいかないな、俺は貴様を全力で殺す・・・さあできるだけ足掻けよ？」

「何・・・？」

「拘束制御術式第3号、第2号、第1号、開放・・・状況A「クロムウエル」発動による承認認識、目前敵の完全沈黙までの間 能力使用限定解除開始・・・では教育してやろう、簡単に死ぬなよ？」

「ひい！？」

あいつはかなりのスピードで逃げ始めた。

「か、勝てるはずがない！あんなモノに・・・勝てるはずが！」

「どうした？なのは達を守るのだから？ならば俺を倒せないと守れないぞ？」

「くっ！？」

やつの足を干切った。

「ぐあああああ！！」

「どうした？その程度ではないだろ？お前は吸血鬼になったのだから？」

「ひい！？」

「まだ足がちぎれたただけだぞ？さあかかって来い！」

「！？？」

「そしてその腐った心根を治してこい、そして守りたいものを見つけてる」

「・・・分かった」

「ふん、最初よりはマシな顔になったな、ならば・・・おい神！」「な、なんじゃ？」

「コイツを別の場所に跳ばしてやってくれ、普通の人間としてな」「・・・ふむ、分かったわい、そっちもそれでよいな？」

「・・・ああ」

「それじゃあ跳ばすぞい、場所は分からんがまあ大丈夫じゃろ」

「次に会うか分からんが次はもう少しマシになってこいよ？」

「ああ、分かってる」

「じゃあな」

こうしてやつは何処か別の世界に跳ばされた。

今回の様な転生者は多いがやつみたいに自分を見詰めなおしたやつは初めてだった。

みんなやつみたいに自分を直せたらいいんだがな。

「ふう〜終わったぞい」

「そうか」

「で、ではの！」

「おい」

「！！！」

「まだ O H A N A S H I が終わってないぞ？始まってすらい」

「ええっと・・・」

『神・・・』

「おおー！、「こやつを何とかしてくれ！」

『諦めて下さいー！』

「ええ！？」

まだ諦めてなかったか。

「吾は面影糸を巢へと張る蜘蛛、ようこそ！この素晴らしき惨殺空間へ」

「うぎゃああああー！」

『南無』

その後神の姿を見た者は誰もいなかった。

「勝手に殺すでないわ！」

「おい、まだ終わってないぞ？」

「こ、これ以上は勘弁を！！」

「うん、それ無理」

「ぎゃあああああ」

その後も神に対してO H A N A S H Iをした。

今までのストレスがなくなっていく感じがしてスッキリした。

「次からもやってやろうか？」

「本気で勘弁して下さい！」

『マスター』

「どうしたクロス」

『程々にしておかないと・・・』

「おかないと？」

『その神がMに目覚めます』

「うわあ〜」

「そこ！本気にして距離をおくでない！誰がMに目覚めるか！」

「ならまだ大丈夫だよナ？」

「あ、あれ？地雷踏んだかの？」

『救われないですね、私もあなたも』

こうして今日は終わった。

SとSまでまだまだあるが俺の出来るだけのことをするだけだ。

『「無理やり終わらした!?!」』

番外編 12 (後書き)

後書きコーナー!!

龍「今回はただクロムウエル使いたかつただけだろ？」

ソナナコトハナイヨー。

龍「なら横にあるヘルシングの漫画はなんだ？」

き、気のせいだ！

龍「まあいいか」

感謝コーナー!!

龍「Arishia様、メガネ様、雨季様、けーくん様、感想あり
がとう」

本当にありがとうございます!!

龍「こんな駄文でも・・・な」

この作品は必ず！必ず完結させます！

龍「いつになるか分らんがな」

それまで気長に気楽にお付き合い下さい！

龍「ではな」

では！

S t S 編 プロローグ (前書き)

今回からS t S 編に入ります！
グダグダですがどうぞ！

龍「グダグダはデフォだろ？」

O r z

S t S 編 プロローグ

あの事件から数年たった。

「今回はうまくいくかな？」

『マスターは管理局では協力者扱いですからね・・・干渉が難しいのでは？』

「なんとかするさ」

今の俺は囑託魔導師で管理局にいる。

理由は管理局の裏を見すぎて信用できないからだ。

「あれを見た時は信じられなかったな」

『ええ、それに行った時はすでに手遅れでしたしね』

「ああ、俺がもう少し早く気づいていたらよかったのかもしれない」

『マスター、全てを救うなんて無理ですよ？』

「クロス・・・そんなものは分かっているさ、だが・・・せめて

俺の周りのやつくらいは助けたいと思うのは駄目か？」

『いえ・・・それがマスターの意思なのであれば』

「ありがとうクロス」

『いえ・・・』

あれから数年・・・色々あったな。

『色々ありましたね』

「殆どの思い出がお前らに女装させられた事ばかりだがな！」

『私のメモリーには何もありません』

「コイツ・・・誤魔化しやがった！」

いつからこんなひねくれ方を……。

『何のことやら……マスター!!』

「どうした？」

『どうやら空港で火災があったそうです！なので至急来てほしいと分かった！すぐ向かうと伝えてくれ』

すぐにその空港へと向かう。

「クロス！飛行許可はでたか！」

『ええ、許可できました！いつでも飛行できます！』

「なら急ぐぞ！」

クロスをセットアップしさらに速度を上げて向かう。

イレギュラーがないといいんだが……。

空港についたので急いで周りを調べる。

「今何人この空港内にいるか分かるか？」

「い、いえ！ただ……」

「どうした？」

「まだ2人子供がいるとの情報がありました」

「そうか……ならばその2人を助けに行く、だからここは頼んだ

！」

「は、はい！／／／」

俺は急いでその2人を探すために空港の中に向かった。
だが何故あの女性は赤くなっていたんだ？

「何故か分かるか？」

『・・・今は救助優先でしょう？急ぎますよ！（鈍感ですね）』
「あ、ああそうだな」

何故か失礼な事を言われた気が・・・気のせいかな？
今はそれ所じゃないな・・・もっとスピードを上げるか！

『マスター！近くに人の反応が！』

「何人が分かるか？」

『2人ですが・・・1人はなのはさんです！』

「それだと安心だが・・・」

『不安ならば行ってみるといいのでは？』

「そうだな・・・今から向かおう」

念には念を・・・だな。

そう思いながらもスピードを上げて反応のあった場所に向かった。

「見つけた！」

見つけたのはよかつたんだが、なのはが安心させようとして話しかけていると、柱が倒れようとしていた。
なのは達は気づいていない！

「クロス！」

『分かっています！』

俺は急いでその柱を鎖で縛り付けた。

「龍斗君？」

「たくつ・・・最後まで気を抜くな」

「は、ははは、ごめんなさい」

「そつちの子は大丈夫か？」

「え、は、はい！」

「ん、よかった」

どうやらたいした怪我もないみたいだな。

「さて・・・まだもう一人いるはずだから「もう一人の子は今救出されました！」・・・だそうだからさつさと脱出するぞ？」

「あ、お姉ちゃんが・・・」

「ん？君の名前は？」

「え、えつと・・・スバル・ナカジマです」

「そうか・・・姉の名前はギンガであってるかな？」

「は、はい、でもどうして？」

「今さつき救出された子の名前がギンガ・ナカジマだったからね」

「よ、よかった」

さて・・・いつまでもここに居る訳にはいかないな。

「なのは」

「ん？どうしたの龍斗君？」

「今から脱出する、この子を頼む」

「わ、わかった」

さて・・・さつさと脱出しますか。

「クロス、モード2nd」

『了解』

「いくぜ！ブラックバレル！フルトランス！」

上に向かって撃つ！

「さて・・・行くぞ?」

「う、うん」

俺たちは空港から出て、無事スバルとギンガを助ける事ができた。これで明日はやてが自分の部隊を持つ事を決めるだろうな。なのはとフェイトを誘って。

「今回もハッピーエンドで終わらしたいな」

『そうですね』

「そのためにも俺のできる事を精一杯しますか」

『ええ、頑張りましょう』

その後家に帰るとアインが拗ねていた。

慰めるのに1日掛かり今日一番労力が必要だった。

S t S 編 プロローグ（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回からS t S 編なんだが・・・」

どうした？

龍「いつもながら駄文だなあとな」

ひ、酷い・・・。

龍「事実だろうが」

そ、そうだけど。

龍「さて感謝コーナーだ」

J a m 様、メガネ様、けーくん様、感想ありがとうございます！

龍「次からおそらくS t S に本格的に入るだろうが駄文なので気楽に読んでほしい」

今日はやたらストレートだな！？

龍「まあ見捨てられない程度に頑張れ」

うっ！が、頑張ります。

龍「ではまた次回」

あ、あれ？流された？

で、では！・・・あれ？

S t S 編 第1話(前書き)

今回から少しずつS t S 編に入ります！
いつも通り駄文ですが気楽にどうぞ！！

S t S 編 第1話

あの空港の火災から数年……。
今日はスバルとティアナの試験……つまり原作第1話の部分だ。

『あの2人は大丈夫でしょうか？』

「さあな、イレギュラーがなければ危険行為で不合格だろうな」

『そうですね……』

「まあそれでも機動六課には呼ばれるんだからな、気にする事はないさ」

『ですが……あの事は』

「いざとなったら言うさ……あれは俺が未熟だったせいで守れなかったんだ、責められて当然だろ？」

『あれは……マスターの責任ではありません！管理局の責任ですよー！』

「それでも……それでも俺はあいつを守れなかったんだ、だから俺は背負うんだ」

『マスター……』

やれやれ……暗くなっちまったな。

「さて！あいつらの試験はもうすぐ終わるだろうからコッソリ行くぞ？」

『了解です』

そう話しながら俺は試験会場に向かった。

「あれは……」

着いた時にはもう終盤だったのだが・・・スバルは何をしようとしている？

『マスター』

「どうした？」

『どうやらスバルさんはマスターの技を使おうとしています』

「は？」

あいつに見せた技なんて・・・ブラックバレルか！

「まさかディバインバスターじゃなくブラックバレルを使うか・・・

」

『おそらく両方でしょうけどね』

「だろうな」

やれやれ・・・まああの技くらいなら別に構わないんだがな。

「さっそく行ってみるか」

『もうそろそろゴールしますからね』

「そうだな」

ゴールで待つておくか。

その方が面白そうだからな。

>>さて・・・クロス<<

>>どうしましたかマスター？<<

>>出るタイミングが掴めない<<

>>それくらい自分で何とかしてください<<

着いたはいいがなんかタイミングが……。

「ところで龍斗君は何をしてるのかな？」

「!？」

ま、まさかなのはに気づかれるとは……気を抜きすぎたか！

「いやな……出るタイミングを逃してな」

「普通に出てきたらいいのに」

『なのはさんの言う通りですよマスター』

「……そうだな」

味方がいない……。

「あ、あの!」

「ん？」

「森 龍斗さんですよね？」

「ああ、そうだが」

「あ、あの時はありがとうございました!」

「別に気にする事はないさ、俺はするべき事をしただけだ」

「あの……」

「ん？」

スバルと話していると今度はティアナが話しかけてきた。

「あなたが……あの『朱い殲滅者』なんですか？」

「な、なんだその二つ名」

そんな中二臭い名前が俺にもあったのか？

「えっと、敵の攻撃を全て受けながら、笑いながら倒す様子を見た人がつけたんです」

「そ、そうか・・・」

ま、まさかアーカードと同じ戦い方をしていただけなのにそんな名前がつくとはな。

「で？スバル達は合格したのか？」

「え、えっと・・・」

「2人とも危険行為で不合格だよ」

「うっ！」

まああんな事をしたんだから当然か。

「まあ取り敢えずはあっちにいるため・・・はやて達の用件を済ませようか」

「龍斗君？何か言わんかったか？」

「気のせいだ」

「ならええんやけど、取り敢えずその2人はこっちに来てくれる？少し話したい事があるんよ」

「は、はい！」

こうして2人の機動六課入りは確定した。

ん？飛ばしすぎ？作者が忘れてしまっていて不安なんだと、だから文句は作者に言ってくれ。

「で？どうして俺がここにいるんだ？」

「それは気にせーへん方が得やで？」

「まあいい、俺に用件があるから呼んだんだろっ？」

「まあそーやけど・・・龍斗君」

「ん？」

「機動六課に入ってくれんかな？」

「いいぞ？」

「そうやんなあ、やっぱりいきなりはあか・・・え？」

「だからいいといっているんだが」

「ええん？」

「ああ、お前達を守りたいから管理局にいるんだからな、だから機動六課に入るのは当然だ」

「あ、ありがとう／＼／」

何故顔が赤いんだ？

「も、もしかして龍斗さんって・・・鈍感？」

「それもかなりなのでしょうね」

聞こえてるぞ？かなり失礼だな。

「取り敢えず今日は解散でいいだろ？」

「え？う、うん」

「じゃあ解散な？俺は次の仕事をさっさと終わらせてくるから」

「うん、またね」

「ああ、またなフェイト、なのは、はやて、スバル、ティアナ」

こうして俺はこの場所から離れた。

「・・・グッ！」

『マスター！？』

「やっぱりちよっとずつだがきつくなっているな・・・あどどのかくらいもつかない？」

『マスター・・・やはり体が・・・』

「確かにきついがこの1年は大丈夫だろ？なら十分だ」

『無理はしないで下さい・・・なのはさん達が悲しみます』

「ああ、分かっているさ、あいつらの体も心も守らないと意味が無いんだ、だから俺は死なない！死ねないんだ」

この体はもって1年・・・だから早く終わらせてその後回復に専念すればいい。

「だからもう少しもってくれよ？俺の体・・・」

『マスター・・・』

「さて・・・さっさと次の仕事を終わらせるぞ？じゃないとなのは達がつるさいからな？」

『・・・了解です』

そうだ・・・ほんの少しでいい、守る事が出来れば・・・。

「死ぬのは逃げだ、なら死ぬ訳にはいかない・・・俺は守り抜くん
だ、大切な人達を！」

そう心に決めながら俺は次の仕事に向かった

S t S 編 第1話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「なんだあれ？」

ん？何が？

龍「何故俺は死にそうなんだ？」

その方がかつこいいから！

龍「読者は置いてけぼりだよ」

まああなつた理由はおそらく分かります！・・・多分。

龍「最後の一言は余計だ」

えっと・・・感謝コーナー！！

龍「A r i s h i a様、メガネ様、雨季様、けーくん様、感想あり
がとう」

ありがとうございます！！

龍「次回はおそらく3日後くらいになると思う、遅くてすまないな」

えっと・・・明日からと言うよりも今日ですが2日祖母の家に行く
ので執筆ができません！

なので3日後になります！

龍「それまで気楽に待っていてほしい」

では！また次回！

龍「ではな」

S t S 編 第2話(前書き)

今回もいつも通りです！

それでもよければどうぞ！

S t S 編 第2話

スバルやティアナが機動六課に入る事が決まり原作がもう少しで始まるのだが……。

「後はエリオとキャラカ」

『はい、なのでシグナムさんと一緒に向かっているのでしょうか？』
「そうだが……」

なんかシグナムって怖いんだよなあ。

「む？何か言いたい事があるのか？」

「いや、それより早く迎えに行かないとフェイトが嫌いぞ？」
「そうだな、ならば急ぐとしよう」

そうこうしている内に目的の場所に着いた。

「あっ！」

着いた時に見たのはキャラカが落ちる瞬間だった。

「クロス！」

『了解、ベクトル変換』

急いでキャラカの元に向かった。

「大丈夫か！？」

「は、はい」

よかった・・・怪我が無くて。

「あ、あの」

「ん？すまないな、今おろすよ」

「い、いえ！ありがとうございます！」

「気にするな、俺が助けなくてもあの子が助けたらろっしね」

そうだった、エリオがここでキャラ口を助けるんだったなあ。

「それで？貴様はいつまでそうしている」

「え？」

「シグナム、何故怒っているんだ？」

「怒ってなどいない！」

「そ、そうか・・・」

「と、取り敢えず早く六課に向かうぞ！」

「あ、ああ」

「そのこの2人もだ！」

「は、はい！！」

俺たちは急いで車に乗った。

「ところで・・・」

「はい？」

「君たちの名前を聞いていなかったからな、自己紹介をしようか」

「はい」

「俺は囑託魔導師の森 龍斗だ」

「あ、あなたがあの・・・『断罪の女神』」

「なんだそれは・・・」

「え、えっと・・・」

「まあいい、君達の名前は？」

「エリオ・モンディアル三等陸士です！」
「キャロ・ル・ルシエ三等陸士です！」

さてこれで自己紹介も終わったし・・・シグナム？もう終わらせてあるそうだ。

「それで？『断罪の女神』ってのはなんだ？」

「え、えっと悪い人に対してのみに処罰している所を見た人がつけたそうです」

「そうか」

まさか女だと思われていたとはな。

「あ、あの！」

「ん？」

「お姉ちゃんって呼んでいいですか？」

「は？」

「そ、その・・・ぼ、僕もいいですか？」
「り、理由は？」

「その・・・頼りになると言うか・・・フェイトさんに聞いたんです！」

フェイトは一体なんて言ったんだよ・・・。

「龍斗さんはとても頼りになる人でとても優しいと聞きました！なので・・・」

「あのかな？俺は男だ」

「え？」

何だよその「何言ってるの？そんなはずないじゃんか」とでも言いたげな顔は。

「・・・」

「どうかしたんですか？」

「ん？いや、何でもないよ」

「そうですか？」「ああ、だから気にしないでいいよ」

どうやら次の仕事があるみたいだな。

「シグナム」

「どうした？」

「どうやら次の仕事が入ったみたいだから先に行っていてくれるか？」

「分かった、なるべく早く来い」

「分かった」

さて、転移の許可はもらっているからさっさと行くか。

「じゃあな、次は六課で会おう」

「はい！」

そして俺は無人世界に転移した。

「で？ここに研究所があるのか？」

『はい、前は無人世界でしたが今は人の気配がします』

「人数は？」

『生きているのが一人で死んでいるのが数百人くらいですね』

「今回は少ないな、いつもならこの十倍くらいいるのにな」

『そうですね』

だがまあ死んではいても相手は動くんだがな。

「さて、早く終わらせようか、見ていて気分のいいものでもないしな」

『まったくですね、喰屍鬼^{グール}なんて見ていていい気分にはなりません』
「だから早く終わらせたい・・・来たか」

会話をしているとあちらから喰屍鬼がこちらに向かってきた。

「まあ今回は数が少ないからな、まだ楽なんだが・・・気の進まないのは変わらないな」

『そうですね、彼らも好き好んでなった訳ではないですしね』

「ああ、だから早く楽にしてやるっ」

『了解、モード2nd』

「貴様らに恨みはない、だが俺は貴様らを潰す、恨みなければ好きだけ恨め、俺はその恨みを背負おう」

そう言いながら銃を構える。

やはりいい気分ではないな。

「だが止まる訳にはいかないんだ、だからここは通してもらおう」

銃でひたすら敵を撃つ。

「此処にいる吸血鬼を殺さないといけないんだ、さっさと向かうぞ、クロス」

『了解です、モードFinal』

「いくぞ、偽りの月によって沈め」

I I B l u t d e S c b w e s t e r r i

「これで終わりだ、さて次はお前だが・・・覚悟は出来ているな？」
「な、何故ばれた！？わ、私の場所は分かるはずがないほどに完璧なはず！！！」

「世の中に完璧なんて物はありません、完璧だったら面白くないだろ？」

「くっ！！！」

『マスター、遊びは終わりにして下さい』

「さて、これだけ喰屍鬼を出したんだ、終わりにしようか」

「ふ、ふざけるな！私はそんなただの銃では死なない！」

「ただの銃じゃないからな、ランチェスター大聖堂の銀十字錫溶かして作られた13mm爆裂鉄鋼弾を使っているんでな、これを喰らって平気な化物はいないそうだ」

といつても空想具現化で創った弾だから弾切れがないんだが。

「くっ！！だ、だが私はしなければいけない事があるんだ！それまでは死ねない！」

「ほう？その目的は何だ？」

「復讐だ！私を捨てたやつら全員を殺してやる！」

「・・・くだらん」

「なんだと！？」

「実にくだらん、そんな理由でこいつらを喰屍鬼にしたのか」

「その何が悪い！目的のために数を揃えただけだ！」

コイツは・・・。

「自分勝手な復讐に周りを巻き込むな！自分の目的に他人を巻き込んでいい訳がないだろうが！」

コイツは生かしておいたらなのは達に危害が及ぶ！

「もういい、貴様を吸血鬼にしたやつは誰だ？」

「こ、答えるはずがないだろ！」

「それもそうか、ならばお前の血に聞こうか」

『早く終わらせましよう』

「分かってる」

「ば、馬鹿にするなあ！！」

そっぴいながらやつは向かってきた。

「さて・・・試してみるか？」

『マスターの自由ですがあまり遊ばないようにして下さい』

「分かってるって」

つい最近知った魔術をやってみるか。

「Apparea Mali Umbra, Per Speculum
lum（鏡の内より出でよ、内なる悪よ）」

そっぴいながら俺は鏡魔術リートウス・スペクルムを使った。

「な、何だこれは！？」

「今お前には何が見えているのかな？」

リートウス・スペクルム
鏡魔術は応用で相手に対してかなりの幻覚紛いのものを見せる事ができるし迎撃にも向いている。

だから今回は使用してみたのだが・・・いいなこれ。

「だ、だが！所詮は偽者だ！こんなものに負けるはずが無い！」

おっ？どうやら弱点に気づいたか。
これの弱点は鏡を使っているため鏡に見えない範囲から攻撃されると簡単に破壊されるところだ。

「やはり適当に作ったら壊されるか、次はもつと壊れにくくしようか」

さて、次は禁呪でも使うか？

いわく、禁呪は万物を禁じてくくる、魔術だそうだ。
火を禁ずれば熱を無くし、鳥を禁ずれば飛ぶことはかなわず、刃を禁ずれば斬ることはあたわず、そして人を禁ずればその存在自体が消え失せると、伝説では言われているらしい。

「さて・・・試しに動くことを禁じてみようか」

そついいながら無理やり禁呪を使った。

「ぐっ！？何故動けん！」

「動きを禁じているからな、さて・・・終わりだ」

「ま、まだ私の目的を果たしていない！まだ死にたくない！」

「そつ言っているやつをお前はどうした？」

「あ、ああ」

「じゃあな、来世からやり直せよ」

そついい俺はやつを血を飲んだ。

「やはりコイツくらいのやつじゃあ持っている情報はたかが知れているか」

『そつですね』

「まさかヘルシングの世界の吸血鬼が出てくるとはなあ、まさかア

「カードやアンデルセン、ウォルターとかでないよな？」
『そんな事がないように祈りましょう』
「そうだな」

本当にいないといいな。

「さて、今日は帰るか」

『六課には行かないのですか？』

「今日は疲れた、禁呪を無理やり使ったしな」

『なら明日行くと伝えます』

「ああ、頼む」

さて、今日はゆっくり寝るか。

またやつかいなやつが出る前に休んでおかないとな。

次はいつ出てくるか分からないからな。

S t S 編 第2話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「アーカードとか出てくるのか？」

いやいや、ヘルシングの吸血鬼の概念を持ってきただけだから大丈夫！！

龍「だったらいいんだが」

さて！感謝コーナー！！

龍「メガネ様、H a t e . r e v o l v e 様、けーくん様、リオン・マグナス様、A r i s h i a 様、感想ありがとうございます」

いつもありがとうございます！！

龍「さて質問だ」

空想具現化についてですが、以前とある人が調べてくださりスペルが違うそうなのですがどうするべきでしょうか？

龍「一応今回まではS c b w e s t e r だったがこれは公式でもこうなんだが、実際はS c h w e s t e r が正解らしい」

公式でも結構誤字が多いのでどちらがいいか分かりません！

龍「だからどちらがいいか言ってくれとありがたい」

締め切りは一応4月1日です！

龍「従姉妹の家に行くのでな30日と31日に」

では！次回の更新は4月1日の予定です！それでは！

龍「ではな」

S t S 編 第3話(前書き)

今回はかなり遅れてしまいました！すいません！
それなのにクオリティーが・・・。
それでもよければどうぞ！！

S t S 編 第3話

やれやれ・・・昨日は疲れたな。まあそうは言ってられないか。

『マスター』

「ん？」

『早くしないと遅れますよ？』

「げっ」

もう朝は過ぎてもう昼になりそうな時間だった。

「なんでもっと早く言わなかった？」

『その方が面白・・・気づかなかっただけです』

「今面白そうって言おうとしただろ？」

『ソナナコトハナイデスヨ』

「おい」

育て方を間違った親の気分なんだが・・・。

『そ、それよりも！早く行きましょう！！』

「・・・そうだな、だが後でオボエテイロヨ？」

『りよ、了解です』

さて・・・さっさと行くか。

「で？何故俺がここにいる？」

「にはは・・・」

「説明してくれるよな？」「う、うん」

説明を受けたところフォワード陣に俺の実力を見せたいそうだ。

「別に構わないが・・・誰が相手するんだ？」

「私がしよう」

何故か予想ができたが・・・シグナムか。

「まあいいか」

「わ、私もいいかな？」

「フェイト？」

そういえば2人ともバトルマニアだったなあ。

「いいだろう、2人してかかって来い！！」

そういつて今回の模擬戦は始まった。

「はあああ！！」

「うおっと」

いきなりシグナムが斬りかかって来た。

「はあああ！！」

フェイトも一気に斬りかかって来た。

「お前ら容赦ねえな、おい」

「容赦をしてはお前には勝てないのでな」

「だから本気で行くよ!!」

「まあいい、ならば俺も本気で行くところか」

まあ今は全力で戦えないんだがな。

「いくぞ」

俺はクロスをモード1ndにした状態で向かう。

「喰らえ」

――閃鞘・八点衝――

「くっ!!」

「まだまだ!!」

「ならば」

――閃走・六兎――

蹴り上げる。

「うっ!」

「ぐううっ!」

「クロス、モード2nd」

『了解、モード2nd』

「終わりだ」

――ブラック・バレル――

蹴り上げた2人とどめの攻撃を撃ち込む。

「そこまで!!」

「ふう〜、やはり鈍ってるな・・・また修行でもしたい」

まだまだ強くなりたいからな。

「す、すごい・・・フェイトさんもシグナムさんもまったく苦勞せずに対手するなんて・・・」

「君達も強くなれるさ、そのための訓練だろ? まあ過度な訓練はしないようにな? じゃないと倒れちまうからな」

「「はい!!」「」」

「・・・はい」

やっぱり納得してなさそうだなあティアナは。

まあ仕方ないか、でも・・・あいつには話さなきゃいけない事があるからな。

「さて! 今日の訓練は終了だ! 後は任せた!」

「ちよつ! 龍斗君!?!」

なのはが後ろから何かを言っていた気がするが気にしない。

「ふう、クロス」

「何でしょうか」

「ここはいいところだな」

「そうですね」

「だから俺は此処を守りたいんだ、この場所も此処にいる人達も」
「難しいと思いますか?」

「難しくてもやるしかないだろ? それに俺は諦めが悪いんだ、たとえイレギュラーがでて俺は戦い続けるぜ?」

『無理だけはしないで下さい』

「まあ今回の事件が終わったならばらく眠るさ」

『本当にいいのですか？』

コイツは……、

「言ったはずだぞ？俺は止まる訳にはいかないんだ、確かに少し止まれば助かるかもしれない、解決するかもしれない、だがな？それじゃあいざと言うときに守れないだろうが、心配してくれるのは本当にありがたいがな？俺は進み続けるさ」

『マスター』

本当にいい相棒を持ったな。

「まあその無茶も今回の事件までだ、だからそれまでは無茶をさせ
てくれ」

『……分かりました、ですが！もしこれ以上は無理だと判断したら私は無理やりにも止めますよ？』

「いいさ、その時はその時だ」

『……ではもう帰りましょうか？』

「いや、もう少し此処にいるさ、なんせまだお前に対しての O H
A N A S H I が終わってないからな」

『あ、あれは冗談では？』

「ははは、俺は冗談が嫌いだ」

『え、えっと……逃げちゃ駄目ですか？』

「駄目だな」

『ふ、不幸だー！ー！』

「それはどこぞやのフラグ最高神と幻想殺しの台詞だ、それに……
まだ始まったばかりだぞ？」

『ひい！？』

「大丈夫だ、いつか慣れるって」
『な、慣れちゃ駄目でしょ』
「さうして今回は何にしようかなあ」
『だ、誰かー！！助けてくださいー！！』
「此処が貴様の終焉だ」
『・・・ぎゃああああ』

この後クロスの姿を見た者は誰もいなかった。

『勝手に殺さないで下さいー！！』
「まだ余裕があるなあ、もっとキツめに行くか？」
『ご勘弁をー！！』
「うん、それ無理」
『ぎゃあああああ』

S t S 編 第3話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「何故遅れた？」

家に泊まるのが1日伸びてしまっただね。

龍「なら仕方ないのか？」

か、感謝コーナー！！

龍「リオン・マグナス様、メガネ様、けーくん様、感想ありがとうございます」

ありがとうございます！！

龍「まあこれからもこんな感じのグダグダだが気楽に読んでくれると嬉しい」

うちの龍斗を使いたい人がいればメッセで一言言ってくれれば自由にどうぞ！！

龍「いないだろ」

と、取り敢えず次回の更新は4月4日くらいの予定です！

龍「次回は間に合わせるから待っていてくれ」

では！

龍「ではな」

S t S 編 第4話(前書き)

今回も遅れてしまいすいません！

今回は龍斗が一方通行みたいな喋り方をします。

それでもよければどうぞ！！

S t S 編 第4話

前回の模擬戦から少したったのだが・・・、

「今日も勝負だ！」

「いい加減にしてくれ・・・こつ毎日戦ってたら倒れちまうだろうが」

「む・・・そうか」

ん？今回は簡単に諦めてくれるな・・・何かあるのか？

「今回は諦めがいいな？何かあったか？」

「い、いや、別にない」

「そうか？ならいいが」

取り敢えず今は情報待ちなんだよな・・・暇だ。

『マスター』

「ん？何だクロス」

『どうやら情報が入ったようですがどうしますか？』

「そうか・・・なら今から行くぞ？」

『その前にはやてさんに許可を貰った方がいいのでは？』

「そうだな、じゃあ俺は行くぞ？シグナムも頑張ってくれ」

「あ、ああ」

やれやれ・・・次はどんなやつがいるんだろうな。

「で、許可を貰いに来た」

「で、てなんやねん！いきなり言われても意味が分からへんがな！

「！」

「む？」

『きちんと説明しないとイケませんよ、マスター』

「・・・そういえばしてなかったな」

「はあ、なら説明してくれるやんな？」

「ああ、今から出かけるんだが」

「何処に？」

「管理外世界」

「理由は？」

「犯罪者の残党狩り」

「応嘘はついていない。

「何時までや？」

「おそろくすぐに終わるから明日には帰る」

「・・・何か隠してるんやろうけどまあええわ、いつか話してや？」

「・・・了解」

やはりはやてには隠し通せないか。

「んじゃあ行つてきい」

「ああ、すぐに戻る」

これで心置きなく向かえるな。

「クロス、それじゃあ情報にあつた場所まで転移してくれ」
『了解です』

そして管理外世界に向かった。

「ここがそうなのか？」

『ええ、此処に吸血鬼の反応があったそうです、数はどうやら2人のようですが』

「2人？」

『はい、吸血鬼は2人です』

「なら喰屍鬼は？」

『すごい数ですね、おそらく五千はいつてますね』

「それぐらいなら何とかなるか」

『およそなので誤差はあると思いますが』

だとすると・・・大体五千から六千くらいか。

「何とかするしかないよなあ」

『ですね』

「ならある程度喰屍鬼を潰してからだな」

『はい、なので今回も2ndモードで行きましょうか』

「そうだな」

さて・・・もうそろそろ来るかな？

「G u u u u・・・」

「来たか・・・」

『どうやら七千はいますね』

「どうやってここまで増やしたのやら」

『そこも調べる必要があるみたいですね』

「前回のやつじゃあそこまで情報が手に入らなかったからな」

次の奴で手に入ればいいが・・・。

「取り敢えずは・・・潰すか」

『了解2ndモード』

「さあ小便はすませたか？神様にお祈りは？部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする準備はOK？」

『マスター相手は喰屍鬼グールですよ？聞こえるはずがないですよ』

「いや・・・こいつらに言っているんじゃないやねえよ、吸血鬼2人組に言ってるんだよ」

『そうでしたか』

「じゃあ始めようか」

まずは・・・、

ーブラック・バレルー

一発ぶち込む！

「G u a a a a a a a a」

『1千ほど減りましたね』

「今回はいつもより強めで撃ち込んだからな」

『そうですか・・・早く終わらせましょう、じゃないと・・・』

「分かっている、じゃないと体がもたないからな」

『分かっているならいいんです』

「じゃあ残りの奴らも潰すぞ！」

『了解』

残りの殲滅のためにひたすら銃を撃ち続けた。

「やれやれ・・・やはり喰屍鬼グールでは話になりませんか」

「だから言っただろ？コイツは俺達じゃないと殺せないって」

「ああ、だから私達で殺そうか」
「よっしゃ！また血が飲める！」

喰屍鬼^{グール}を全て潰すと二人の男が現れた。
こいつらが今回の吸血鬼か。

「さあて！コイツ一人なら俺達で十分だぜ！」

「そう油断すると足元を掬われるぞ？奴は簡単には勝てそうにもないからな」

「あ、兄貴がそう言うならいいけどさあ、こんな女顔の奴に負ける訳無いじゃん、だから余裕だぜ」

「おい・・・」

「ああ？今話してんだよ、邪魔すんな」

「だれが女顔だつて？」

「お前だよお・ま・え」

そ、そうかあ、そんなに死にたいか。

『マ、マスター？』

「どうした？」

『お、落ち着いて下さい・・・れ、冷静に』

「アア、俺は冷静だぜ？今ならアイツらを笑イながら殺し尽くせそうだ」

『ひい！！そ、その吸血鬼！今すぐ謝りなさい！寧ろ謝れ！！』

「ああ？なんで俺が謝る必要があるんだよ、事実を言ったまでだろ？なあ？兄貴」

「そうだな、お前は事実しか言っていないな」

『あわわ・・・もうお終いだ・・・勝てるはずがない・・・逃げるんだあ』

「お前はどこのベジ〇タだ」

『殆ど隠せてないですよ!?!』

いちいち細かい事を気にするな。

「さアてスクラップの時間だぜエ!!--」

『ま、まずい!本気で切れてますよ!ど、どうにかしないと・・・この星がなくなる!!--』

失礼な奴だなア、少しばかり星が減るだけじゃねエか。

『ぎゃあああ!!--マ、マスター!!--本気で落ち着いて下さい!!--潰すのはあの二人だけにして下さい!!--』

「アア、理解してるぞ?」

『れ、冷静になって下さい!本当にお願いします!その状態で星を一つ破壊しかけたでしょうが!!--』

「まアいいじゃねエか、取り敢えずは・・・クロス」

さアてどう潰すかなア。

「ふはははは!!--俺達を殺す?無理無理!無理に決まってる!」

「あア?」

「お前は弱いんだよ!そして俺達は最強なんだ、お前が勝てるはずがないんだよ!!--」

「確かに俺は弱いかなア、だが・・・それでもお前達が強いってことじゃねエだろうがよオ、あア!!--」

あまりにもイライラしすぎてベクトル変換を使いながら地面に足を叩きつけていた。

「うお!!--」

『もう止められないんだろっなあ（遠い目）』

「ッははは！最高だねエ！・・・お前から死体決定だクソ野郎がア！」

『マスターがますます一方通行みたいに・・・もうあいつらを恨もう』

クロスの言っている事は殆ど無視して・・・。

「オラオラ！どーした！もっと攻撃して来いよ！まだこんなモンじゃねエだろっが！！」

「このクソガキがあ！！！」

「喰らうかよ！」

俺は攻撃を反射させる。

「ぐああああ！！な、何だよ！何で俺がダメージを受けてんだよ！」

「わからねエならそのまま死んでろ」

まるで自分じゃないみたいだなあ。

「ほう、どうやら反射させたみたいですねえ、いやはや実に興味深い」

「その程度で俺の使ってる能力を分かった気にいるんじゃないよ」

「何？」

「反射だけじゃねエんだよ」

「ますます興味深いな、ぜひ実験動物モルモットになつてくれないか？」

「はア？馬鹿かテメエ、そう言われて「はい分かりました」とでも答えると思っつてんのかア？」

「はははまさか、無理やりにも連れて行きますよ」

「・・・できるもんならしてみやがれ！！」

「いいでしょう、私の力で君を捕らえるとしましょう」

どこまでも余裕のある顔で言い放ってきた。

「行きますよ!!」

反射が効いてるから攻撃は大丈夫なはずだ・・・あれに気がついていなければ。

「ふっ!!」

「ぐっ!!」

やはり気づいていたか。

「やはりあなたの反射は完璧ではないですね、こつも簡単に攻撃できるとは・・・少しがっかりですよ、これでああなたの反射は効かない・・・もう私達の勝ちです」

「さすが兄貴!! やっぱりこんな奴楽勝だったな!!」

「・・・」

「コイツを殺して喰屍鬼ゲイルにしてコイツの大事なやつら全員を殺してやるうぜ!!」

「それも面白いですね、ではそうしましょう」

・・・アイツラナンテイッタ? オレノダイジナヤツヲクロス?

「く、かか」

「?」

「くかつ、くかきけこかきくけききこくけきこきかかかー」

クロス・・・コイツラダケハクロス!

「なっ!?!」

「あ、兄貴、どういう事だこれは!」

「ああ、もうお前ら本当に愉快だなア、でもなア、テメエらはやっぱりいけねエ事をしようとしてんだ、だからよオ……一切容赦しねエぞクソ野郎がア!」

I I Blut de Schwester I

結界を張り月を落とす。

「何だと!?!」

「つ、月が落ちてくる!?!」

「そのままさっさと死ンじまいなア!」

「くううううう!?!」

まだ生きているか……。

「ああ、本当にしぶといなアオマエら、いい加減死ねよ」

「な、何なんだよお前は!?!何でキレてんだよ!」

「理由が分からないほど頭が幸せなのかアテメエらは」

「なんだと?」

「テメエらは俺の大事な奴らを殺すつて言ったなア」

「そ、それだけでそこまでキレるか普通!?!」

「ああ?」

「普通そんな事でキレるはずないだろうが!お前頭おかしいんじゃないか!?!」

ああそうか。

「オマエには・・・オマエらには大切な奴がいなかったのか、哀れだなア、本当に哀れだ」

「んだと!?!」

「そうだなア、今からオマエらの皮膚を五割を剥いでやる、それでも生きていたら許してやつてもいいかもなア、まアオマエらが耐えられるほど生易しい状態にはしねエがなア!?!」

さあて早く終わらせようか、まだ理性が勝っている内に。じゃないとコイツらをどうにかしちまいそうだ。

「豚の様な悲鳴を上げやがれエ!」

「ぎゃああああ!?!」

まずは弟らしき奴の腕を思いつきり千切る。

「う、うううう」

「その程度でへばってんじゃねエぞ!三下!?!」

まだこんなもんじゃ気がすまない。

「そのオマエも逃げンじゃねエぞ」

「ひ、ひい!ば、化物!?!」

「そんなもん言われ慣れたぜエ?例え化物と言われても守りたいモノが守ればそれでいいんだよ、だから安心してここで死ね」

「ひいひいひい!?!」

さて、血を飲んで情報を引き出さすか。

「今回はいい情報があればいいんだがなア」

『マスター、まだ口調が一方通行みたいになってますよ』

「ああ？別にいいだろうが」

『マスターがよければそれでいいですが・・・そのままですと怖がられますよ？』

「・・・これでいいか？」

『それでいいですよ、早く帰りましょう、今日はいつもより力を使います、休まないともちませんよ？』

「なら少し待ってくれ、あいつ等に連絡するから」

『了解です』

情報はいいのがあまり無かったので戻ろうとしたらクロスにそう言われたのでマテリアルズに連絡する事にした。

「ヒカリ、今何処にいる？」

「今は自宅で待機していますが・・・何かあったのですか？」

「ああ、取り敢えずはお前達も六課に行ってくれるか？」

「別に構いませんが・・・私だけですか？」

「いや、ルカやメア、ハルも連れて来てくれ」

「・・・分かりました、何時頃向かえばいいのでしょうか？」

「明日に来れるか？」

「大丈夫です、では明日」

「ああ」

何故か他のマテリアルの名前を出したら不機嫌になったんだが・・・
何故だ？

『これだから鈍感って言われるんですよ』

「ああ？何か言ったかア？」

『ひいつ！！いいいえ何も言ってますん！！決して駄目だコイツ早くなるとかしないと・・・なんて思ってますん！！・・・あ』

「見事な自爆だったなア、まだ足りなかったみたいだからもっとキ

つくするかア？」

『か、勘弁を！！』

「さアて問題です、俺はお前を許すと思うでしょうか？」

『あ、これは無理ですね、諦めるしか・・・ないですねえ！！』（自棄）

「正解者には安らかな眠りをプレゼントオ」

そう言いながらクロスを持つ手に力をこめる。

『あ、あれ？何故かミシミシいつてますう！？し、死んじやうのでこれ以上はあああああ』

「ちっ！」

『舌打ち！？は、早く帰りましょう！！さあさあさあ！！』

あ、クロスがやけになったな。

まあ帰るのは同意するからさっさと帰るか。

「じゃあ家に帰ったら続きな？」

『え！？』

「じゃあ帰るか」

『う、嘘ですよねマスター！もうふざけませんから！！勘弁して下さい！！』

クロスの叫びを聞きながら俺は家に帰った。

S t S 編 第4話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「何故ここまで遅れた？」

ブレイブルーのアビスモードで999行ったのが嬉しくて余韻に浸かってたらこんな事に。

龍「そして何故俺は一方通行みたいな喋り方になったんだ？」

自分が一方通行が好きだから！！

龍「・・・そうか」

では感謝コーナー！！

龍「ユタ様、Jam様、メガネ様、けーくん様、感想ありがとうございます」

今回もかなりの駄文ですが楽しんでもらえたら嬉しいです。

龍「楽しめているのか？」

ま、まあそこはそれぞれで・・・ね？

龍「まあいい、次は何時になるんだ？」

一応8日には投稿する予定です。

龍「まあ予定だからな、なるべく間に合うようには努力させる」

頑張ります!!

龍「ではな、また次回」

では!

S t S 編 第5話(前書き)

今回は短め？だと思えます!!

本編はまったく進んでいませんがそれでもよければどうぞ!

S t S 編 第5話

昨日は昨日で疲れたな……。

今日はあいつらが六課に来ているはずなんだが……、

「おい」

「何でしょうか主？」

「なんでお前しかいないんだ？他の奴らはどうした？」

「今は少し用事でいませんが」

用事ってなんだよ……。

「用事？」

「ええ、何故か「あの塵芥は我が主を侮辱したから殺……潰……話してこようと思うがついてくるやつはいるか？」」「勿論ついていく!!」「はあ」といいながらどこかに」

確実にいやな予感しかしねえんだが。

「あ、後どれぐらいで帰ってくるんだ？」

「おそろくもうそろそろ帰ってくるかと」

「そうか……」

ならもう少し待ってみるか。

「ただいま戻りました」「ただいま〜！」

「戻ったぞ」

「あ、あの……ただいま」

少し時間がたった後にマテリアルズ全員が戻ってきた・・・服に血をつけながら。

「おい」

「・・・はい?」「」

「何故血がついているんだ?まさか・・・本当に」

「い、いや・・・これは・・・」

「ちがうよ!?!ちがうからね!?!?」

「言い逃れできないのでは?」

「は、はははは・・・はあゝ」

ま、まさか・・・。

「どうやらこの血は・・・クロノ提督の血ですね」

「クロノロー!?!?!」

何故クロノが!?!?

「あやつが我の邪魔をするから・・・」

「まったくです」

「本当だよね」

「少しは反省しろよ!?!?」

くっ!!確かに昔はKYだったけど・・・今は・・・今は・・・あれ?

「そういえば最近クロノに会ってなかったような・・・」

『実際5年くらい会っていません、仕事もリンディさんからでしたし』

「そうか・・・」

「で？返答は？」

「」「」「喜んで！！／／／」「」「
「主が望むならば……」

よかった。来てくれるのか。

「ならば今日から行くぞ？」

「はやくには知らせたのですか？」
「……あ」

忘れてた。まあ何とかなるだろ。

「と、取り敢えず！！早く行くこうか、じゃないと怒られるからな」
「」「」「そこなんだ」「」「」

怒られるのは苦手だからな。

そして許可をもらい転移して六課に着いたので、

「という訳でこいつ等も六課で働くから」

「ちよっ！？いきなりかいな！？というより制限が！？」

「そんなもんはO H A N A S H Iしたら許可くれたぞ？」

「何やってんの！？」

仕方ないだろ？あいつらクズみたいなやつが多かったんだからな。
ついつい遠慮がなくなつた。

「ま、まあそこは気にせずにおいてやな……理由ぐらい言っ
てくれんと……」

「皆を守るのに必要だからだ、無論こいつ等も守るべき対象だがな」
俺一人では守りきれない可能性もあるからな。

他人に頼るのは悪い事じゃないからな。頼りすぎるのは駄目だが。

「という訳でOKか？」

「・・・そんな言われたら許可するしかないやんか」

「ありがとう」

よかった。これである程度のイレギュラーには対応できるな。

「それで？この子達はどのくらい強いんや？」

「1対3で勝つくらいだ」

「1は？」

「こいつら」

「3は？」

「はやてとなのはとフェイト」

「え？」

実際こいつ等と修行しまくっていたらすごく強くなった。

少なくともリミッターをつけている状態の三人には負けなくらいには。

「そ、そうなんか」

「ああ、戦力としては保障しよう」

「なら喜んで迎えるわ、よろしくな」

「」「よろしく」「」

「何故こんな奴と・・・」

「メア？」

「むう・・・よろしく」

「よろしい」

まったく・・・まあこれで準備はある程度そろったな。
次はもっと情報を集めないとな。

S t S 編 第5話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「何故こんな状態に？」

いやー、10日に専門学校の入学式があるんだよ、だからそれ以降は更新スピードが落ちる可能性があるから今の内にね。

龍「それでも本編が進まなければ意味がないだろうが」

うっ！！

龍「ふう〜、感謝コーナー行くぞ？」

メガネ様、リオン・マグナス様、夜神様、雨季様、けーくん様、感想ありがとうございます！！

龍「これからは更新スピードが落ちるかもしれんが・・・見てくれると嬉しい」

では！また次回！！

龍「ではな」

S t S 編 第6話(前書き)

今回も遅くなった上にかかなりの駄文です！
いつも通りにどうぞ！

S t S 編 第6話

今日はフォワード達と模擬戦する事になった。

「あ、あの・・・」

「ん？」

「条件は？」

条件か・・・。

「なら10分間避け続けるか俺に攻撃を当てるかでいいか？」

「え！・・・はい」

あれ？少し不機嫌になった？

「じゃあフォワード対龍斗君で模擬戦始めようか、条件はさっきの通りで」

「・・・はい！！」「」「」

「了解」

今日は試したい事もあるからやってみるか。

「クロス、モード「白仮面」」

『了解、B」展開します』

「え？」

やはり驚くか。

「ゆくぞ！我は鋼！我は空！我は刃！我は一振りの剣にて全ての罪

を刈り取り！悪を滅する！我が名はハクメン、推して参る！」

「!?!」

「遅い！」

——鬼蹴キシユウ——

「うっ！！」

「止まるな！」

——残鉄ザンテツ——

「きゃあああ！」

「ティアナさん！」

「貴様らも余所見をしている場合か！」

——虚空陣 疾風シツフウ——

剣を振り下ろす！

「ぐうううう！！」

「きゃあああ！！」

「うわあああ！！」

む？ティアナがない……。

「警戒しておくべきか……」

——虚空陣奥義 夢幻ムゲン——

「今！」

「む？」

ティアナが魔力弾を撃ち込んできた。

「フツ！」

「――封魔陣フウマジン――」

ゲームでは特定の技を出すと出てくる陣を出す。
これは飛び道具を無効化する力がある。

「なっ!?!」

「無駄だ！それでは私には届かん！」

「はあああああ!?!」

「むっ？スバルか！」

だが！

「それでは届かん！」

「――斬神ザンシン――」

「うわっ!?!」

カウンターの要領で投げる。

「はあああああ!?!」

「エリオか！」

それでもまだ、

「攻撃は届かんぞ！」

「今よキャラ！」

「はい！」

「くっ！」

鎖・・・バインドか！

「今の内に決めるわよ！」

「はい！（おう！）」

「フッ、やるな・・・ならば我が奥義を見せてやろう」

「え？・・・みんな！今すぐ離れて！！」

「えっ？」

もう遅い。

――虚空陣奥義 阿克メツ 悪滅――

これはカウンター技でゲームではトドメに使われる技だ。

「悪滅」
阿克メツ

やはり強くなっているな、このフォワード達は。

デバイスが完全ではないのにな。

「えっと・・・」

「私の負けだ、やつらの攻撃は私に届いた、今回の模擬戦はこれで
終わりだ」

これからが楽しみだ。

どこまで強くなれるのか・・・しつかり見届けようか。

「綺麗に終わったと思ったんだがな・・・」

「そうはいかないのがこの小説だぶんや」

若干メタ発言をしながらため・・・はやてがきた。

「むう？」

「どうした？」

「いや、何か失礼な事言われた気がしてなあ」

「気のせいではないか？」

「まあそれはええんやけど・・・いつまでその格好なんや？」

おお、忘れていた。

「すまない、クロス」

『了解』

ふう、やはりあれはキツイな。

「何やつとたんや？妙に龍斗君らしくなかつたけど」

「あれは一時的に自分の人格を変えているんだよ」

「それ大丈夫なんか？」

「一応な、最初は今の自分が死に掛けて大変だったけどな」

「あかんやん！」

「昔はな、今は大丈夫だ」

「・・・ならええけど」

だからさっきまでハクメンになっていたしいざとなれば他のキャラの人格を使えるからな。

欠点はその元となった人格の技しか使わない事か。

「まああいつらも強くなってるからな、それ相応の力であたるさ」
「むう、無理はせんといてや？」

「ああ、だからはやてははやてのできることを頑張ってくれ、応援している」

「え、あ、うん／＼／」

何故赤くなる？

『鈍感・・・』

「何か言ったかア？」

『ひい！な、何も言ってますん！！』

「ならいいがなア」

本当に懲りない奴だな。

それよりも・・・どうやら今日もしくは明日みたいだな。

最初のアラートがあるのは。

「それじゃあなはやて、今日は他の所も見てくるよ、多分今日はいないだろうけどその間マテリアルズをよろしく」

「え？う、うん分かったけど・・・明日は来るん？」

「ああ、明日また来るよ、でも何かあったら呼んでくれ、すぐに駆けつけよう」

「う、反則やでそれ・・・／＼／」

「？」

何故反則になるんだ？

まあいいか。

「じゃあ行ってくる」

「うん、いつてらっしゃい」

やれやれ・・・どうやら敵は俺を休ませたくないらしいな。

「さて・・・次こそ有益な情報を持っててくれよ？」

『マスター・・・』

「分かってるさ、無茶はしない、今の自分の全力で戦っただけさ、守るための戦いだ・・・躊躇いはしない」

アイツらを守るためなら悪にもなるしなんだってしてやるぞ。

「じゃあ行くぞ？」

『・・・了解です』

そして俺達は次の標的の居場所に行き吸血鬼を潰した。

やはり下っ端らしくたいした情報は持ってなかった。

あまり余裕が無い状態になる前に決着をつけたいんだがな。

「さて・・・今日は寝るか」

『はい、今日はゆっくりお休みください』

そして家に戻って最初に見たのはアインのドロップキックだった。

その後の事は覚えていない、気が付いたら布団でアインと寝ていた。

「何故？」

自分にはその疑問を解く事はできそうになかった。

S t S 編 第6話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「何故遅れた？」

今日入学式だったんだよ専門学校のこと。

龍「理由になつてないが？」

入学式が苦痛でなあ・・・話だけで2時間だ。

龍「・・・そうか」

さ、さて！気分を変えて感謝コーナー！！

龍「けーくん様、夜神様、マーボー様、感想ありがとうございます」

ありがとうございます！！

龍「さて、作者も言っていたがこれから専門学校の授業が始まるかな、更新が遅れるかもしれない」

それでも最低1週間に1話投稿はできるように頑張ります！！

龍「だから気楽に待っていてくれ」

では！次回も暇だったら見て下さい！！

龍「ではな」

S t S 編 第7話(前書き)

今回はヘルシングを読んでいたのでそのネタが大量に入っています！
それでもよければどうぞー！

S t S 編 第7話

さて・・・今日があの日みたいだな。

「クロス、今回はある程度様子見でいいと思うんだが？」

『そうですね、原作よりも大分強くなってますしね』

「ああ、まあイレギュラーがあればすぐにでもでるがな」

『心配症ですね』

「心配するのは当然だろ？管理局はどうでもいいがあいつ等は守りたいモノだからな」

だから今の俺は一応管理局にいるんだからな。

「む？」

『どうしました？』

「どうやらアラートがなったらしい」

『いよいよですか』

「ああ、何も起こらないのを祈るか」

あの神以外だがな。

「龍斗君！」

「ん？どうしたなのは」

「どうしたじゃないよ！今回は龍斗君もでるんだよ！？」

「ああ、了解した、今すぐ向かおう」

さて・・・イレギュラーなんて起こるなよ？

「それじゃあ今から空にいるガジェット達を潰しに行くから下は任せませ？」

「はい！」「」

「……」

やはりキヤロは怖がってるな……。

「キヤロ」

「は、はい！」

「怖いのか？」

「！？……はい」

「確かにキヤロの能力はみんなを傷つけてしまうかもしれない」

「龍斗君！……」

「……」

「だがな……傷つけるかどうかはその能力の持ち主しだいなんだよ、だから信念を持って、決して折れない信念を！……守りたいんだろ？」

そう言つとキヤロの目に力がこもった。

「それにお前は一人で戦う訳ではないだろ？守ってくれる仲間がいる、だから恐れるな！恐れずに信じていれば必ず竜達は答えてくれるぞ」

「はい！……」

やはり気のきいた言葉が言えないのはな。

「じゃあ行つてくる！さっさと終わらせてそっちに行くからお前達も頑張れ！」

「」「」「はい！」「」「」

これでよし！これでこいつ等は大丈夫だろ。

「ブレイズー！森 龍斗行くぞー！」

『了解、モード選択どうぞ』

「ああ、じゃあ今回はさつさと終わらせたいからモード「バトル執事」を
『了解』」

さて・・・さつさと終わらせるぞー！

『数はまああいつ等に比べればマシでしょう』

「そうだな、ならば早く終わらせましようかね」

手袋をはめて準備する。

これだけで十分だ。

『来ますよ』

「ふむ・・・」

ヒュン！！

ズババババツ！

「やはりこんなものか」

慣れていないから少ししか片付かなかったな。

「なのは達も戦っているんだ、俺も頑張らないとな」

『マスター、何故口調が変わってないのですか？確かあれは人格そ

のものを塗り潰すようなもののはずですが』

「少し改良してな、能力と経験のみ引き出す状態だ、といってもやはり完全ではないがな」

これなら人格を塗り潰した方が威力が高いいからな……まだ改善の余地ありか。

「後どれくらいで終わりそうだ？」

『おそらく5分もかかりません』

「そうか」

ならあいつらの様子も見れるな。

「フツ！」

シユン！

スパツ！

「ふう、これで終わりか？」

『ええ、マスターの分は終わりですしなのはさん達も大丈夫でしょう』

「そうか」

ならあいつらの様子でも見に行くか。

様子を見に来たんだが……ガジェットが可哀想なぐらいだな。

『完璧にいじめですね』

「ああ、まさかスバルがブラックバレルをここまで使えるとはな」
AMFが無意味な状態だな。

「はあ！！雪風！」

は？

『あれはマスターが使った技ですね』

「エリオ・・・何時の間に・・・」

たしかにやり方は教えただけだな・・・。

「この調子ならまったく手伝いがいららないな」

『ええ、なのでのんびり見学でもしてますか？』

「いやいや、周りを警戒しておかないとな」

そつえばスカリエッティはここを見ているんだつたな。

「なら少し邪魔をするか」

『?』

さあて・・・少しは楽しめるかな？

と思つたがそんな事はなかつた。

「すぐに壊れて終わりだったからな・・・面白くないな」

『そこに面白みを求めるのはどうかと』

「それもそうか」

最近考えが物騒になっている気がする・・・何故だ？

「む？どうやらレリックは回収できたみたいだな」

『そうですね、戻りましょうか』

「ああ・・・!？」

『どうかしましたか？』

「どうやら俺に対してんのお客さんみたいだ」

そう言いながら俺は振り向いた。

「おや？ばれていましたか」

「それだけ殺気をだしてよく言えるな？」

「ははは、まあそれだけあなたを恨んでいるのですよ、なので勘弁願いたいのですが？」

恨んでいるか・・・。

「そうか、何故恨んでいるか聞いても？」

「ええ、別に構いませんよ、これは私の八つ当たりに近いですからね」

八つ当たり？

「私はとある管理外世界に住んでいました、いたって普通の家庭です」

「・・・」

「そんな私たちもたった一つの出来事で崩れ去った」

「まさか」

「ええ、自らを吸血鬼と名乗りながら私たちを殺していきました、

私は親が庇ってくれたので助かりましたが・・・他の皆さんは全滅でした」

あの時の二人組みの吸血鬼か。

あいつらの記憶の中に確かにあるな、コイツの言う通りの映像が。

「その後すぐにあなたが来てあの化物達を殺してくれました、ですが・・・私の・・・私達の家族は助からなかった！何故もつと早く来てくれなかったのか！どうして私達を救ってくれなかったのか！どうして！・・・そう思うとあなたを許せなくなつた」

ああ、本当に八つ当たりのつもりなんだろうな。
だが・・・、

「どうしてお前は私達と言っている？まるで・・・」

「私以外がここにいます？」

「ああ、そしてお前本当は死んでいるな？」

「はは・・・ははは！」

そう俺が言い放つとコイツは狂つたように笑い始めた。

「よく分かりましたね、ばれるとは思ってなかったのですが」

「俺の目は特別でね、それぐらいなら分かるのさ」

「そうですね・・・ですがあなたを恨んでいるのは変わりませんよ？」

「そんなものは分かっているさ、だから俺も貴様も戦うんだからな」
「ふふっ！確かにそうですね、では私の八つ当たりのために死んで下さい！！」

悪いな・・・まだ死ぬ訳にはいかないんだ。

お前も俺は背負おうだから・・・いや、

「俺らしくないか」

「はあ!!」

「うお!？」

取り敢えず考えるのは後だな今はコイツを何とかしないと。

「クロス、モードノイライフキング「不死の王」

『了解』

今回は人格を塗り潰す。

「くくく、さあかかって来い!人間!ヒューマン」

「急に様子が・・・」

やはり・・・油断すると喰われそうだ。

今は心を完全には塗り潰してはいないから思考は俺のままだが・・・
いつそうじゃなくなるか分からないな。

「さあ行くぞ!」

「くっ!」

・454カスール カスタムオートマチックとジャツカルを構える。

「はあああ!!」

腕が斬り飛ばされる。

だが・・・、

「なっ!? 再生した?」

「その程度か? 失望させてくれるなよ? 人間^{ヒューマン}」

「くっ!!! なめないでもらいたいですね、私は剣以外にも銃も使うんですよ!」

「ダァン!」

「くくく、ただの銃では吸血鬼は殺せん」

「なっ!?・・・ならば!」

「ん?」

相手は剣を構えて斬りかかって来た。

「はあ!!!」

「む?」

「あなたが化物ならば私はあなたが死ぬまで殺し続けます!」

「くく、くはっ、はははははは! 面白い! やはり人間^{ヒューマン}はこうでなくてはな!」

やはり大分飲まれてるな。

「さあ次はこっちの番だ! 拘束制御術式^{クロムウェル} 三号、二号、一号、開放」

「なっ!?!」

「さあかかって来い!」

そう言うと相手は剣から銃にもう一度変えた。

「まさか使うはめになるとは・・・ですが! 有象無象の区別無く、私の弾頭は許しはしない!」

むっ？まさか・・・魔弾か。

「ほう？そんなモノを残していたか、誰が残したかは知らないが・・・」

「」

「？」

「心せよ、亡霊を装って戯れなば・・・汝、亡霊となるべし」

「まるで魔王ザミエルみたいですね」

実際そのようなモノだしな。

「ですが、さつきも言いましたが・・・有象無象の区別無く、私の弾頭は許しはしない！」

その言葉を聞いた俺はニイッと笑っていた。

ドッ！！

ガパッ

相手の魔弾が俺の体を貫く。
だが・・・ダメージは殆ど無い。

ギギギギギギギギギギギギ
ギユリリッ

弾は曲がり再び俺に向かってくる。

ポッ！

ギギギギギギギギギギギギギギギギ
ギギギギギギギギギギギギギギギギ
ギギギギ

ドッ ガッ ドッ ドカッ

「いい加減に死んで下さい！」

ゴパッ

「死んで・・・」

ドカッ

「死ね！！」

キイイイイイイイ

「死んで滅びろ！！」

ガシッ

「つかまえたふはあつえら」

「な、なんで・・・」

「私はおまえをつかまえた」

これでチエックメイトだな、おそらくあの魔弾はアイツの切り札だろうからな。

「さて・・・貴様も吸血鬼だな？」

「・・・ええ」

何故コイツは自分の敵と同じ吸血鬼になったんだ？

「何故吸血鬼になった」

「・・・復讐するためです、復讐するには人間のままでは無理でしたから」

「ふざけるな！」

「!?!」

「人間では化物には勝てないだど？」
ヒューマン フリックス

「そうじゃないですか!どうやって勝てって言うんですか!」

「化物になった貴様に私は殺せない、いつだって化物を打ち倒すのは人間だ」

確かに。

「だったら・・・どうすればよかったのですか?私は・・・どうすれば!」

「貴様は走狗しゅうこか?」

「違います!」

「ならば自分で考える」

あー、戻るタイミングが・・・。

「貴様からは情報をもらおう」

「ええ、何故かもう復讐する気が起きないのでどうぞ、ですが・・・」

「なんだ?」

「どうか・・・どうか他の人たちを守って頂けませんか?」

「守るのは私ではないコイツ自身だ、だからコイツに言え」

ちよつと待て!急に・・・、

「くっ!急に戻りやがって!」

「元……？いえ、別にいいですねそんな事は
「ん？」

「あなたに頼んでもいいですか？」

「……全てを守る事はできない、それは神でさえ不可能だろうな
「ええ」

「だから……」

「はは、まあそれでいいでしょう、対価は私の血で我慢して下さい
「分かった、その願い俺の全てをかけて叶えよう」

そう言うとソイツは納得した顔をした。

「そつだ……名前を聞いてもいいですか？」

「森 龍斗だ、お前は？」

「私は……リオです」

「そつか……後一文字あれば獅子になれたかもな」

「はは、一度言われましたよ、では、お別れです」

「ああ、お前は俺が背負う、だから安らかに眠れ」

「ええ、では……また出会えたら」

「それは無理だな、俺は地獄に行くだろうからな」

「そつ、ですか、ではさよなら」

「ああ」

そして俺はリオの血を飲んだ。

「クロス」

「はい」

「今回で情報が入ったんだ、アイツラヲユルシハシナイ」

『ええ、徹底的に潰してやりましょう』

これ以上犠牲が出ないようにするためにも。

リオとの約束のためにもな・・・。

S t S 編 第7話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回は無駄に長かったな」

仕方ないだろ！？いつもその場その場で考えてるんだから！

龍「大体2時間もあればいけるもんな」

そ、それでは！感謝コーナー！！

龍「またそらしやがった」

メガネ様、ユタ様、夜神様、雨季様、けーくん様、感想ありがとうございます！！

龍「ただでさえ低いクオリティーがさらにさがりつつあるが・・・
生暖かい目で見てください」

ひどいっ！？

龍「事実だ」

うう・・・。

龍「次回はもしかしたら今週中に投稿できるかもしれない、といつてもいつも通りの駄文だがな」

うう・・・挫けない！絶対に。

龍「はあくではな」

では！

S t S 編 第8話(前書き)

最近やたらとヘルシングにはまってしまいました！

そのせいで技が・・・。

それでもよければどうぞー！

S t S 編 第8話

さて・・・リオとの戦闘から数日たった。

あの時に手に入れた情報で分かったのは相手の特徴と組織名、それにリーダーの顔だ。

「あいつはこんなにも重要な情報をくれた・・・だからアイツらを潰すぞ」

『ええ、それにしても・・・もしや相手の組織のリーダーはもしかや転生者でしょうか？』

「その可能性もあるからな・・・警戒しておこう」

もしくだらない理由でこんな事をしているなら・・・俺は全力で奴を殺す。

でも今は場所が分からないからな・・・。

「まだ情報を集めなければならぬな」

『ええ、早く揃えましょう、これ以上の犠牲が出る前に』

・・・もしかしたらあれを使うはめになるかもな。

「でも今はこつちを何とかしようか」

『ですね、このままではアグスタを守りきれませんしね』

そう今俺はホテル・アグスタにいる。

飛ばしすぎ？仕方ないだろ？何時までたっても終わらないよりはマシだ。

それに文句なら俺じゃなく作者に言え。

『メタ発言はいい加減にして下さい』
「む……すまん」

取り敢えず現状は、

? アグスタに任務でみんなでGO。

? そろそろガジェット達が来るかなあ？

? 数が本来の5倍以上……だと？

? 俺……この任務が終わったら告白するんだ…… 今ココ。

『死亡フラグ!? というよりふざけないで下さい!! 最後だけです
が』

「すまない、何故かふざけなくなった」

最近はずいぶん話ばかり? だったからな。

『マスター、早く片付けないと皆さんが』
「分かってるさ、いくぞクロス、モードノライイフキング「不死の王」だ」
『了解です』

さて2丁の銃を構える。

「さあガラクタ共! 私を楽しませろ!」

ティアナが心配だが……今はコイツらを片付けないとな。

『マスター』

「なんだ？」

『数はおそらく千はいるかと……』

「原作よりも圧倒的に多いな」

『なので固有結界を使つては？』

「それはどの結界だ？」

『無論それはマスターに任せます』

ならば……無限の剣製でいいか。
剣は使わないが。

「なら無限の剣製を使う」

『了解です、なら相手は私が纏めます』

そうクロスが言ったので俺は準備をした。

『相手を纏めました！ですが……どうやら吸血鬼と喰屍鬼ゲールも紛れ込んでいます！』

「了解した、今の私には慈悲はないぞ？」

そして唱える。

「I am the bone of my sword .

体は剣で出来ている

Steel is my body , and fire is
my blood .

血潮は鉄で 心は硝子

I have created over a thousand
d blades .

幾たびの戦場を越えて不敗

Unknown to Death .

ただの一度も敗走はなく、

Not known to Life .

ただの一度も理解されない

Have withstood pain to create many weapons .

彼の者は常に独り 剣の丘で勝利に酔う

Yet , those hands will never hold anything .

故に、生涯に意味はなく

So as I pray , unlimited blade works .

その体は、きつと剣で出来ていた」

俺は自分のではないが固有結界を展開し、一気に準備を終わらせる。

「棺桶を」

『了解』

自分の立っている地面の下から黒い棺桶が出てくる。

これで、

「準備完了だ、さっきはナイスだクロス、とっさにあっちに行こうとしていた馬鹿共を連れてきてくれた、感謝する」

『当然のことをしたままでです』

「さて馬鹿共、覚悟はできているな？ 貴様らはやっつてはいけない事をした、さあ謳うぞ？ 幾千幾万となつて帰還を果たそう」

周りの吸血鬼と喰屍鬼ゲールは俺に攻撃をしてきた。

「ここに居る全てが感じているんだ」「恐ろしい事になると、私と
いう化け物を倒してしまわないと、恐ろしい事になると、だがもう
遅い」

もう準備は整った。

そして俺は謳う。

「拘束制御術式 零号、開放」

さあ逃げ惑え！ 今からココは死の河で埋め尽くされる。

「私はヘルメスの鳥」

そこらじゅうの敵が俺に襲い掛かる。

だが・・・俺を殺す事はできない。

「私は自らの」

敵の銃による攻撃が俺に当たる。

ダメージはない。

「羽根を喰らい」

さあ今からは死人が舞い、地獄が歌う。

「・・・そうか」

「そして俺のハーレムができる！最高だ！死んじまったがこれでも夢が叶う！！」

ああ・・・コイツも敵か。

「だからお前は邪魔なんだよ！だからココで死ね！」

「周りを見てから言え」

「周り？」

そいつが周りを見るとそいつは死の河で囲まれていた。

「なっ！？なんだコレは！？」

「お前の血は一滴たりとも飲みはしない、貴様は無様にもここで死ぬ」

「くっ！！せっかくあいつ等に吸血鬼にしてもらったのに！！」

「あいつら？」

こいつ・・・まさかやつらの場所を知っているのか？

「誰が言うかよ！ばーか」

「気が変わった、貴様の血は少しだけ飲んでやろう、情報をもらおう」

「はっ！出来る訳ねーだろうが！俺は最強オリ主だぜ！？」

「お前がか？そのちっばけな能力と力が最強だと？」

「何！？」

ふん、たかが王の財宝と魔力EXがあるだけで最強になれてたまるか。

「世界にはもつと強いやつが数え切れないほどいる、俺も少なくとも

もお前よりは強い」

「はあ？今のお前は一人だろ？俺に勝てる訳ないだろ」

「くく、くはははは！まさか一人だから負けるとでも？なめられたものだ・・・いいだろう、貴様は全力で殺す」

死の河をやつにぶつける。

他のやつはもう片付いたためにコイツに集中する。

「くっ！王の財宝！！」

「ふん、その程度か？」

「うおおおお！！」

やつは王の財宝で死の河を攻撃し始めた。

だが・・・

「その程度で私が倒せるはずがないだろう？」

「くっ！！」

「さあどうした！まだ始まったばかりだ！まだまだ楽しみはあるだろう？」

「なめるなあ！！」

おそらくエアを使おうとしているんだな・・・まあさせないが。

「いくぞ！」

「させる訳ないだろうが、貴様は馬鹿か？」

「なっ！！？」

「悲鳴を上げる、豚のような！」

腕を引き千切る！

「ぎゃあああああ!!」
「次は足だ」

足を思い切り踏み砕く。

「うああ、あ、あ」

「ふん、それでよく最強を名乗れたものだ、くだらない」

「くう!!」

「ほう? もう回復し始めるか・・・今までのやつとは違うみたいだな」

「あ、当たり前だろ! 俺は最強オリ主なんだ! 今からお前を殺してやる!!」

「お前は・・・自分の意思で化物になったのか?」

「はあ?」

「答える」

「何当たり前の事言ってるんだよ! 当然だろうが!」

「そうか・・・」

コイツも人間でいらなかったやつか。

「貴様も人間でいる事にいらなかった弱体化け物か」

「何だと!? 俺が弱い?」

「そつだ、貴様はただの雑魚だ、取るに足らん雑魚だ、だからココで消える」

ああ、本当に取るに足らん。

「お、俺は!」

「ん?」

「最強のオリ主で! ハーレムを目指せる男なんだ!!」

「貴様のような馬鹿がまだいるとはな・・・さあ足掻くがいい！」
「くそおおお!!」

奴はやけになったのか、宝具をひたすら撃ち込んできた。

「いい加減死ねよ！コノヤロー!!」

「貴様では私は殺せん、殺したければ人間の時に来るべきだったな」

それは確実に無理だがな。

「さあ貴様の情報をもらおうか」

「ひい!? や、やめろ！俺は主人公だぞ！こんなので死ぬはずが・

」

「なら確かめてみるがいい、何度でも殺してやる」

「なっ!?!」

「さあどうした？まだ死なないんだろ？なら抵抗して見せろ！まだ出来るはずだ！早く！早く！早く！早く！」

「ひいひいひい!!ば、化け物！」

「!?!」

「く、来るな化物!!」

「フツ、ならその化物の前にいるお前はなんだ？人間か？化物か？
犬か？」

「くっ！くそが!!」

そう叫びながら攻撃をしてきた。

「残念ながら死の河はまだあるんでな、その相手でもしている」

「う、うわああああ!!」

ふん、これでおわりか。

「ぐあああああ!!」

血を少しだけでも飲まなければな。

「情報はもらっ」

ガブツ!

そいつの首元に噛み付き血を飲んだ。

「なるほど・・・やはりコイツは会っていたか・・・」

『マスター』

「ああ、これで大分範囲を絞り込めた、もう少し調べれば分かりそうだ」

『早く出しましょう、ティアナさんもそうですが、皆さんも心配です』
「そうだな」

533

その後行ってみると原作通りのミスショットを撃ってしまった。
次の模擬戦にはしっかり干渉しようと思う。
何故なら俺が納得しないからだ。

「両方が完全に分かり合う事はなくてもぶつかると減らす事はできるからな」

『そうですね・・・話すんですか?あれを』

「ああ、知るべきだろ?敵の話なんだからな」

さて・・・模擬戦は無事に済むといいがな。

S t S 編 第8話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「見ている人は何人いるんだろうな」

い、いきなりテンション下がる事言わないでくれ。

龍「それはすまないな、毎回クオリティーを下げているやつに言われるとは思わなかった」

O r z

龍「さて、感謝コーナーだ」

ユタ様、夜神様、メガネ様、雨季様、けーくん様、感想ありがとうございます！！

龍「最近の悩みはこの小説のタイトルをどうしようかだそうだ」

いつまでも飯をつけるのはねー。

龍「いいのと思いつかないのなら諦める」

O r z

龍「ではな、次回は来週だ」

で、では！

S t S 編 第9話(前書き)

今回は何故か変に・・・いつもの事か!!
そう思えたのならばどうぞ!!

S t S 編 第9話

今日は模擬戦の日だ。

何もしなければティアナがなのはに撃墜されて終了だろうな……。

「まああのままじゃあ駄目だと思うからこそ介入するんだがな」
『そうですね、ですが……どうするんですか？』

そうだな……。

「取り敢えず模擬戦のなのはがティアナに攻撃する直前に介入しようか」

『了解です』

もう模擬戦が始まるまで時間がないからな……急がないと！

「というより……何故起こさなかった！」

『起こしましたよ！マスターが起きなかっただけでしょ！』

「うっ！」

何故か最近は寝坊が増えた気がするんだが……まさか！

「今の俺の状態に関係が？」

『可能性はありますね、何が起こるかよくわかっていませんし』

まあ今は進めるだけ進めるか。

「ていうより考えてる場合じゃないだろ」

『急いでください！後10分で始まりますよ！』

「ま、間に合うか？」

そして俺は急いで模擬戦をやる場所に向かった。

「ま、間に合ったか？」

「遅いよ龍斗！」

「フエ、フエイト？」

「もう少して始まるよ？」

よかった・・・間に合ったか。

「すまないな、寝坊してしまった」

「また？最近多いね？・・・大丈夫？」

「ああ、最近疲れが少し溜まってただけだからな、もう大分楽になった」

「ならいいけど・・・何かあったら相談してね？」

「ああ、そうするよ」

何時相談できるか分からんがな。

「あっ！始まりますよ！」

エリオの声が聞こえたと思ったら模擬戦は始まった。

「あれ？」

「ん？どうした？」

ある程度時間がたった時に疑問の声が上がった。

「ティアナさんの攻撃にキレがないような・・・」
「コントロールはいいみてえだが・・・」

あれはまずいな。

>>いつでもいける準備しておくぞクロス<<
>>了解です<<

するとなのはの目の前にウイングロードが創り出された。

(もうそろそろやばいな)

そう思った俺は急いでッ準備をした。

「ティアナが砲撃!?!」

「いや・・・あれも幻影!?!」

拙い!

>>今すぐ起動できるか?クロス!<<

>>ええ!準備はできています!<<

ならば。

「おかしいな・・・2人ともどうしちゃったのかな?」

やばいな・・・なのはのやつ本気でキレてやがる。

「頑張ってるのは分かるけど・・・模擬戦は喧嘩じゃないんだよ?」

そうだな、確かに模擬戦は喧嘩じゃない。

「練習の時だけ言う事聞いてるふりで……本番でこんな危険な無茶するんなら……練習の意味、ないじゃない、ちゃんとさ、練習通りにやるうよ？……ねえ？私の言ってる事……私の訓練……そんなに間違ってる？」

確かに訓練は間違っではないだろうさ、実際に成果は出ている。だがな……？

「私は！もう、誰も傷つけたくないから！なくしたくないから！！だから強くなりたいです！！」

「少し……頭冷やそうか？……クロスファイヤー」

「うわああああ！！ファントムブレイ……」

「シユート」

今のお前は自分の意見を押し付けてるだけじゃねえか！だから俺は止める！たとえ嫌われようとも！

「クロス！！！」

『ロー・アイアス 熾天覆う七つの円環展開』

なのはの攻撃をロー・アイアス熾天覆う七つの円環で防ぐ。

「何で邪魔するのかな……龍斗君」

「今のお前が見てられないからな、ヒカリ！ティアナ達を連れてけ」「はい」

これでいいか。

「後は・・・クロス結界を」
『了解』

これで誰も邪魔はできない。

「私が間違ってるって言うの？」

「訓練は間違っていないし考え方も殆ど間違っではないないさ」

「だったら！」

「だがな・・・あれからティアナとしつかり話したのか？」

「どういう意味？」

やはりしていないみたいだな。

「アグスタの一件の後一回でも話したのか？訓練の途中でもいい、デスク仕事の時でもいい、したのか？」

「・・・しなくても、わかってくれるから」

「分からなかったからこそなったんだろ！それに！お前はあの攻撃の後もう一度攻撃するつもりだっただろ？」

「・・・」

「今のお前は冷静じゃない、一度気絶してから考える」

「龍斗君には分からないよ！」

悲痛そうに叫ぶ。

「龍斗君はいいよね？私達と違うから・・・悩まなくて済むもんね

「！」

「・・・」

「こ、こら！ハル！落ち着けて！ルカもメアも！」

やっぱり・・・もう少し早く気づくべきだった。
もっと早くに気づいていれば・・・ここまで酷い事にはならなかつたのに・・・。

『マスター後悔は何時でもできますよ？』
「分かっているさ、だから今はあの馬鹿なのはを止めるさ」

覚悟は出来ているはずだ、なら何を迷う必要があるんだ？
今は俺の信じている道を進むだけだ！

「さあいくぞなのは！お前こそ頭冷やしやがれ！」

「レイジングハート・・・」

「クロス！モード「不屈レイジングハートの心」だ」

『了解』

俺はなのと同じBJを着る。

まあ男版だな。

「・・・何のつもり？」

「今のお前ならこれで十分だ、それに・・・頭を冷やすのには丁度いいだろ？」

なのには向けて少しだけ殺気を向ける。

「！？」

「どうした？何かあったか？そんなんじゃ俺には勝てないぞ？」

「うるさい！レイジングハート！」

「まったく・・・少しは昔みたいに話し合いをしようとは思わないのか？」

「ダイバイーン」

「はあ」

「バスター!!」

「プロテクション」

『了解』

プロテクションで防ぐ。

「確かに人間は変わる生き物だ、変わるのには別に構わない、だがな・
・お前が昔対峙したやつらと同じ行動してどうするんだよ」

「!?!」

「今のお前は昔のあいつらと同じだ!話し合いをせずに自分の事を
理解してもらえと思うな!理解し合いたいならば話し合え!・
・それがお前の強いところだっただろうが・
・」

「・・・これでも伝わらないかな？」

「う、うるさい!アクセルシューター!!」

「デイベインシューター」

お互いの攻撃を相殺する。

「くっ!!」

「今は理解できなくてもいい、俺を嫌っても別に構わない、だがな・
・今は眠って考えろ、それで理解できないなら・
・話し合えな
いならば、俺はお前の翼を奪う」

「!?!」

悪役なんて喜んで演じよう。

それでなのはが頑張れるならば、俺は構わない。

まあ演じきれないがな。

「じゃあ眠れ、起きた時に理解できている事を祈る」

「あ、ああ」

「スターライトブレイカー」

極大の魔力砲撃がなのはを襲う。

「力の意味を・・・理解してくれ」

そう思いながらなのはをシャマルの所に連れて行った。

「龍斗」

「シグナム・・・」

「何故あんな事をした？」

「俺の我侭だ、それ以上でも以下でもないさ」

「ふっ、素直ではないな」

「人の事言えるのか？」

そう言うとシグナムは慌てて、

「そ、それよりも！貴様には力の意味があるのか？」

「勿論だ」

「それは？」

「自分の守り抜きたいモノのために、後悔をしないように、全ては守れない・・・だが自分の周りだけでも守りたい、だからこの力をそのためだけに奮う」

「・・・そうか」

「勿論シグナムもその守りたいモノに入っているぞ？」

「！？／／／きゅ、急に何を！」

何故慌てる？

「そ、そのだな・・・わ、私は嬉しいが・・・」
「？」

「その・・・だな・・・／＼／」
「む？何か言いたい事があるなら言ってくれ、出来る事なら何でもするぞ？」

「／＼／な、ならば・・・」「すみません！」「・・・」
「どうした？」

「ガジェット反応です！今すぐ準備して下さい！」
「分かった！今いく」

なのはは休んでいるからな、代わりに俺が出ればいい。

「シグナムは何を言いかけたんだ？」

「・・・何でもない」

「・・・そうか？」

「ああ」

すごく不機嫌なんだが・・・。

「さて・・・もう出撃する直前なんだが・・・」

「誰に言っただやがんだ？」

「いや・・・気にするな」

？あの後原作通りの対処法で行く事になった

？さあいくぞ！

「？ティ「納得いかねえ！」シ「少し黙ってる！」ガスッ！ ス「ナゼナンデイス！」

「早く出る！ 今此処。

『ふざけすぎでしょう・・・』

「若干俺も反省している」

「早く出るぞ！」

「あゝ、了解、ティアナ！後でなのはと話し合え！ならきつと理解し合えるはずだ！」

さっさと終わらせよう・・・あれ？このままだと俺の過去もある程度ばらされそうな・・・キノセイダヨナ？

そう思いながら俺はガジェット達のいる場所に向かった。

S t S 編 第9話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「しかし・・・面白くもないのにカオスにしてどうするんだ？」

い、一応タグにコメディって書いてあるし・・・。

龍「そうか・・・まあいい感謝コーナーにさっさと行け」

えっとメガネ様、夜神様、けーくん様、感想ありがとうございます
！！

龍「次回が詰まってしまったらもしかしたら土産で番外編をするか
もしれないそうだ・・・」

まあメガネ様にもらった土産（性変換薬と姫アルクの服など）を使
うんだけどね！！

龍「勘弁してくれ・・・というより詰まるな」

ま、まあ頑張ってみますけど・・・詰まったらゴメンネ

龍「死ね」

ちよっ！勘弁！？

龍「ではな」

で、
では・・・ガクッ。

番外編 13 (前書き)

今回は土産を消費したほうがいいと思いましたが！
決してツマツタワケデハナイですよ？

番外編 13

今日は模擬戦の日まで後一週間といったところか……。

「それより……」

『どうしました?』

「これは誰からの贈り物だ?」

『コダイさんからですな、早く飲まないともつたいないですよ?』

だがなあ……コダイからの時点で大分怖いんだが……。

『なのはさくん、マスターにこれを飲ませてください』

「う、うん」

「え?」

どうやら考え事をしているうちになのはが来ていた様だ。
つて!?

「な、何をする!」

「え?クロスに頼まれたから飲ませるだけだよ?」

『さあ!早く!早く!早く!早く!』

「後で覚えておけよ……」

こうしてコダイからもらったよく分からない飲み物は俺の口に入
た。

「ぐっ!」

「龍斗君!」

『W k t k』

後でシバク……。

「くっ!」

「龍……斗、君?」

「む?何かしら?何かおかしいところでも……」

待て……何故俺は男なのに女口調になっている!?!?
ま、まさか……。

『おめでとうございますマスター!見事に女になりましたね!』

「ええええええええ!!」

「後で覚えておきなさい……」

くそっ……まんま姫アルクじゃねえか……。

「うう……負けた」

「?」

『マスター……女の敵ですね、体型的な意味で』

「?」

取り敢えず部屋に籠ろう。

一日くらい飯を抜いても大丈夫だろ……。

というよりも今出ても碌な目にあわないだろうからな。

『さあマスター!はやてさん達に会いに行きましょう!』

「断るわ、何故私のはやて達に会いに行かなければならないの?碌な目に遭わないじゃない」

だからなのは……連れて行くこととするな!

「え、でもはやてちゃん達にも見せてあげたいし・・・」

「私は嫌なの！しかもご丁寧に姫アルクの服まで置いてあるし！」

あれを俺に着ると！？

ムリだな。

『マスターに拒否権はないですよ？今回は運がなかったって事で』

ああ、本当についてないな。

『さあ！Let's Go！です』

「うん！」

「うう・・・」

こうして俺はなのはに姫アルクの服を着せられてはやて達の所に向かわされた。

「ま、負けた・・・」

「？」

はやて達の所に行き事情を説明するといきなりorz状態になっていた。

「元男のはずやのに・・・反則やわ」

「自信なくすよ・・・」

「にはは・・・」

取り敢えずこの状態がいつまで続くかなんだよな・・・。

「クロス？」

『なんでしようかマスター？』

「何時になつたら元に戻るのかしら？」

『いつまでもそのままです。』

「クロス（ニコリ）」

『ひい！！あ、明日には治っているはずですよ！』

「最初から素直に言ってくればいいのかよ」

「どうやら明日には治るらしい。

なら今日我慢すればいいだけか。」

「羨ましいわあその胸・・・」

「肩がこるだけじゃない」

「それが余裕なんかあー！！」

「ひゃっ!?!」

急にはやてが胸を揉み始めた。

「うう・・・なんで男やった龍斗君の方が胸でかいねん・・・不公
平や!?!」

「し、知らないわよ！そ、それより・・・もうやめなさい!ノノノ」

「まだ満足してへん！私達の満足はこれからや!」

「何よそれ・・・」

もう駄目だ・・・早くなんとかしないと。

「はやてちゃん・・・程々にしとかないと・・・後が怖いよ?」

「はっ!?!そ、そうやった!」

ようやく元？に戻ったかはやてのやつ……。

「というより……」

「ん？」

「その服は？」

「とある女装はオシャレと言い張るやつから送られた」

まったく……何故こんなものを……。

(マスターがコダイさんに送った人が原因だと思えますがね)

「何か言った？」

『い、いえ！ナニモイッテマセンヨ？』

何故にカタコト？

「それよりも……どうするの？」

「何がかしら？」

「えっと……今日の訓練」

ああ、そういえば今日は俺が当番だったな。

「勿論やるわよ？」

「でも……大丈夫なの？」

「力は変わってないから大丈夫よ、寧ろ忌々しい事に少しだけ強くなっているし」

本当になんでだろうな。

「じゃあ頑張つて」

「ええ、勿論」

そうだ……あいつらには悪いが少しだけ……ほんの少しだけ本
気だすか……。

「きゃあああああ!!」

「無理無理無理!!」

「うわあああああ!!」

「な、何よあれ!？」

「我が微笑^{えみ}を止めてみせよ」

ええ、自棄になって姫アルク状態になって暴れています。

フォワード達が可哀想だが……まあこれでまた強くなるだろ……
多分。

「啼くように奔るがよい下郎」

そして終わらせる。

「星の息吹よ……」

I I B l u t d e S c h w e s t e r I I

「我が身、我が爪こそ星の息吹と知るがいい」

I I G n a d e n S t u r z I I

一気に爪を振り下ろす!

「「「きゃああああ！」「」

「うわあああああ！」「」

「ふう、余興にはなった、感謝しよう」

さて、これで今日の俺の分は終わりだな。

うん、今日は部屋で大人しくしていたい。

「まあそううまくいくとは思ってなかったわよ……」

うん。なんで俺の周りはまともなやつが少ないんだ？

「まともじゃないわね、お互い」

「？」

「なんでも無いわ、それより……用件は何かしら？ハル」

「ええ、少しばかり聞きたいことが……？龍斗……ですよね？」

「ええ、今は女になってしまったけど龍斗よ」

本当に嫌なんだがな。

「え、えくと……」

「早く用件をいいなさい」

「新しい情報が入ったので言いに来ました！！」

「そう……ありがとう、助かったわ（ニコ）」

「はう！！／／／」

「？」

どうして真っ赤になるんだ？

「どうかしたのかしら？」

「い、いえ！何でもありません！で、では！戻ります！！」

そういつてハルは急いで戻って「痛っ!?!」・・・大丈夫か？
今日は無駄に疲れた・・・もう寝よう。

「じゃあ次におきたらO H A N A S H Iよ?」

『か、勘弁を!?!』

「無理よ?あなたが調子に乗らなければこつはならなかったでしょ
うね」

『ひいつ!?!』

「それじゃあお休みなさい」

そして俺は寝た。

次の日には元に戻ったが服はそのままだったのを忘れ、六課のやつ
らの殆どが鼻血で沈んだ。

番外編13（後書き）

後書きコーナー！！

龍「ねえ」

何でしょうか？

龍「どうして私は戻ってないのかしら？」

何となく！

龍「・・・そう」

あ、あれ？

龍「取り敢えずは感謝コーナーをなさい」

は、はい！メガネ様、けーく様、夜神様、感想ありがとうございます！！
ます！！

龍「コダイ・・・これで満足したかしら？じゃないと・・・」

どうするつもりだよ・・・。

龍「さあ？それは私にも分からないわ」

え〜。

龍「うるさいわね・・・ケスワヨ？」

ごめんなさい!!

龍「今回は本編を更新するわ、おそらく土曜か日曜になるわね」

それでは!!

龍「じゃあね」

ちよっおまつ!?!ぎゃあああああ!!

S t S 編 第10話(前書き)

何故か長くなりそうなのでここで一旦きります。

今回はなんでこうなったか分かりません！

それでもよければどうぞ！

S t S 編 第10話

ガジェット達をストレス発散のために壊していたら分身から、

「今からどうやら過去話みたいだぜ？どうする？」

と言われたので、

「取り敢えず様子見、ただしあの部分はカット」

「・・・まあできたらな」

ん？分身の性格が俺と違う？

・・・まああれだ、人格は気がついたらああなってたんだ、仕方ないだろ？

でも分身に任せるのが不安だな・・・よしさっさと終わらせるか。

「はやて」

「ん？何や？」

「今からすぐに終わらせるからシグナム達に避難するように言っておいてくれ」

「え？・・・はあ、なるべく今まで使った技でやで？」

「了解」

「ならええわ、早く終わらせてええで」

なら終わらせるか。

「クロス、モード「バトラ執事」だ」

『了解です』

「さあ終わらせるとしよっ」

シュンッ!

「ふむ……やはり機械ではこの程度か」

『マスター……飲まれてはいけませんよ』

「分かっている、そのための修行もした、今の俺は俺であって俺でない……ただの吸血鬼だ」

『マスター……』

「はやて、今全てのガジェットを潰した、今から帰還する」

「了解や、お疲れ様やな」

「ああ、でもそうだな……俺は帰るのが少し遅れそうだ」

「龍斗君？」

どうやらあのガラクタどもに混ぜていたみたいだな……アイツらの仲間なら容赦はしない。

「すぐに戻る、シグナム達はすぐに帰す、だから安心してくれ」

「……無事に戻ってくる？」

「勿論だ、今の俺の戻るべき場所は六課だ、だから約束しよう、必ず戻ってくる」と

「なら……頑張つてな？」

「ああ」

さて……、

「これで俺は必ず戻らないといけなくなったな」

『勿論ですよマスター、あなたはすでに一人ではないのですから』

本当にいいやつらだな。

「さて、いい加減出て来い、じゃないと出てくる前に・・・何も出
来ずに死ぬぞ？」

そう言うとすぐ目の前に一人の人間・・・いや吸血鬼が現れた。

「お前は・・・」

>分身 Side<

ん？俺の出番だと？

しかも中途半端にきりやがって・・・、

「俺の出番短くする気だな？」

「何言っているんですか？」

「いや・・・気にしないでくれ」

「そうですか」

今俺は過去話が終わり、ティアナに会っていた。

無論俺が分身なのは話している。

「で？本体の言いたい事となのはが言いたかって事は理解できたか
？」

「はい・・・」

「ならよかった」

「あの・・・」

「ん？どうした？」

そう言うとティアナが言い辛そうに、

「あの事件について教えて下さい」

「!?!」

なんでティアナがその事を!?!

「誰から聞いた?」

「手紙がきていてその・・・森 龍斗がその事件の真相を知っている」と

「そうか」

誰が一体何のためにこんな事を?

まさか・・・吸血鬼を大量に出しているアイツらか?

「あの!」

「ん?あ、ああ」

「説明・・・してくださいませよね」

どうするか・・・言ってもいいんだが・・・今のこの子に言ってもいいのか?

今言うべきなのか?・・・だがごまかせはしないか。

「いいだろう、だが説明するのは難しいのでな、君に今から俺の能力でその時の場面を直接見せよう」

「本当ですか!?!」

「ああ、だが条件がある」

「条件ですか?」

「ああ、条件は二つ、一つは今から見るのは全て真実だ、嘘は一切ないから信じてくれ、二つ目は・・・その」

「どうしたんですか?」

「これを見てもあいつを・・・本体を恨まないでやってくれないか?あいつはかなりこの事を気にしているから」

「・・・内容を見ていないので必ずとは言えませんが・・・努力はします」

まだこれでいいか。

これを見ても大丈夫かな？・・・管理局の裏の姿を。

「じゃあ見せるよ？キツくなったら言ってくれ、すぐにも中止するから」

「はい」

じゃあみせるとしようか。

>分身 Side end<

分身がティアナと話しているさなか俺は敵と対峙していた。

「まさかこうなるとはな」

『マスター？』

「ええ、まさかこうなっちゃうなんてね」

本当に運がないな。

まさか前世での俺の姉が出てくるとはな。

「まさかあなたが来るとは思いませんでしたよ」

「私もそうよ？まさかあなたがここに来ているとは思わないじゃないかい」

『マスター・・・まさか』

「ああ、あの人は俺の姉だよ」

「まだそう思ってたくれたんだ、嬉しいわ」

「当然ですよ、あなたは・・・俺を大切にしてくれた、でも・・・俺はあなた達を守れなかった」

あの時に今の力があればと・・・最初は後悔していたからな。

「仕方ないわ、世の中は平等で不平等なもの、人間はそれを理解しないよね？」

「ええ、それは仕方ないですが、同時に納得はできないでしょうね」「それでも世の中は進んでいくわ、とても残酷な事にね」

「ええ、人がどれだけ消えようとも世界は常に進む」

「だから私達は一生懸命に今を生きなければならぬのよ、当然だけどね」

だから俺も今を全力で生きている。

「それよりも・・・」

「何かしら？」

「あなたも吸血鬼になったんですね」

「ええ、まあ望んではなかったのだけれど」

「え？」

「アイツらに母と父を人質にとられてね、逆らえないのよ」

「何で・・・」

「だから・・・」

「どうして!」

「私はあなたを殺さなくちゃいけないのよ」

「どうして・・・こうなっちまったんだ」

もっと早く気づいていれば・・・妹がタタリとはいえこちらに来たんだ、他の・・・母や父、姉が来ている事を考える事ができなかったんだ!

「あなたが自分を責める必要はないのよ」
「でも！」

「こんな事は誰も予想はできないのよ、そう……誰にも」
「せっかく会えたのになあ」

「私もそう思っているわ、何故こんな会い方をしたのかと……ね」

あいつ等は許さない……絶対に！

だがその前にこの場をどうするか考えないと……。

「さあ戦うわよ？」

「姉さんはそれでいいんですか？」

「よくはないわね、でもこうしないと母と父が殺されちゃうのよ」

こうなったら……やるしかないのか？

『マスター』

「なんだクロス？」

『神から電話です』

何故今のタイミングで？

「なんだ？」

「龍斗！目の前にお主の姉がおると思っんじゃないか……」

「ああ、今から戦う」

「その姉の両親じゃが……」

「何かあったのか！？」

「もうすでに殺されておる、クロスから言われて探しておったんじやが……」

「な……に？」

もうすでに死んでいる？
ならこの戦いは？

「じゃから今すぐ戦うのを止めるんじゃ！今は争っている場合ではないじゃろっ！」

「・・・そうか」

アイツラハツクツクオレノタイセツナモノヲウバウンダナ？

「姉さん」

「何かしら？」

「信じてくれなくてもいいから聞いてくれ」

「？」

「姉さんの家族はもう死んでいる、アイツラに殺されている」

「え！？」

「姉さんが脅された次の日に殺されているんだ」

「っ、嘘よ」

「嘘じゃない、こちらは神に調べてもらっている、確かに神は全知全能ではないがそれぐらいならすぐにできる」

そう言うと姉は泣き崩れた。

「どうして・・・どうして！殺したくない相手を殺そうとしたのに！どうして・・・」

「本当に世の中は残酷だ・・・」

だが・・・出来る事もある。

「なあ神」

「なんじゃ？」

「おそらく姉さんの体の中にチップみたいなものがあると思うんだ、抜いてくれ」

「分かった」

これで燃やされたりすることはないだろう。

「なあ姉さん」

「・・・何かしら」

「俺と一緒に来てくれないか？」

「え？」

「一緒に仇をとろう、俺はもう一人の命を背負っちゃった、だから背負えないけど・・・意味もないけど、姉さんは意味がある」

どこかのやつが言っていた、「人は生きている中で一人しか殺せない」と。

俺はタタリで出ていたとはいえ妹を殺した。

だから俺は意味を持たせることは出来ない。

「だから・・・一緒に来てほしいんだ、また一緒にすごしたいんだ、次は守れるから」

「龍斗・・・」

「おいおい、んだ？この三文芝居」

「誰だ！」

「俺の名前なんてどうでもいいだろ？どうせここで死ぬんだし」

「コイツ・・・今までの奴のようにはいかないか。」

「姉さん」

「何かしら？」

「今から神のいる所に転移させる、だから今はそこで待っていてくれ」

「龍斗・・・大丈夫なの？」

「ええ、俺は死ぬ訳にはいきませんから、だから早く！」

「ええ、ちゃんと無事に帰ってくるのよ？」

クロスに姉を送ってもらった。

これで周りの被害を考えずに戦える。

「ん？まあいいか、今はお前を殺すのを優先されるからな」

「お前はアイツラの仲間か？」

「おお、まあどうやらどこかの漫画から最後の大隊と名乗っている」
ミレニアム

少佐がいそうな名前だな。

「まあどうでもいいだろ？どうせ死ぬんだし」

「ああ、そうだな、本当にどうでもいいがな、死ぬのはお前だ」

「何？」

さっきまでヘラヘラしていた奴の顔が歪んだ。

「俺が死ぬ？笑えない冗談だな」

「ああ、冗談ではないからな、俺は今まで一番キレているんだ、
容赦はしない」

「くくく、俺を殺せるはずないだろ？俺は命を何万とストックして
いるんだ、殺せる訳ないだろうが！！」

「そうか」

――直死の魔眼発動――

「オマエに何万という命があるうが関係ない」

「何？」

「俺が殺すのはオマエという「存在」^{セカイ}そのもの……その世界を抹殺する」

奴の体に無数の線と点が見える。

久々に使うな……だがこれで奴を殺す。

「粹がっても殺せるはずがないだろうが！いい加減分かれ！」

「ならそう思っているがいい、俺はオマエを殺す」

「ちい！ふざけるな！」

そう叫び奴は向かってくる。

確かに今までのやつよりは早いし強いだろうな。

だが……、

「まだ遅い」

「何！？」

すれ違いざまに相手の腕を斬りおとす。

「う、腕が再生しないだ！？……貴様何をした！」

「ただ殺したただけだ、簡単な話だろ？」

「な……に？」

さあ次はどうしてやるうか。

「さあ出て来い分身、今からコイツに地獄をみせてやるう」

「」「ああ」「」

「さあ完全人格変化だ」

分身はそれぞれ別の人格を使った。

一人は不死の王、一人は神父、そして最後は執事となった。

「さあ貴様も化物だろ？ならもつと楽しませろ！」

「DUST TO DUST、ちりにすぎないおまえはちりに還れ」

「私は私の殺意を以ってこの夜明けに貴様を切断しようと思う」

さあ地獄を見せてやる。

S t S 編 第10話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「中途半端だな」

仕方ないね！いつも行き当たりばったりだからね！

龍「威張るな」

感謝コーナー！！

龍「そして話をそらすな」

リオン・マグナス様、メガネ様、Rain様、けーくん様、感想ありがとうございます！！

龍「前回の番外編みたいに何か土産があれば使つかもしいないが・
・まともなやつで頼む」

それはムリだな。

龍「なん・・・だと？」

今回はティアナに見せた結果と戦闘終了までです！

龍「次はおそらく3日後か2日後だろうな、だから気長に待っててくれ」

では！

龍「ではな」

S t S 編 第11話(前書き)

今回はティアナが・・・あってるのかな？これ。
今回も駄文ですがそれでもよければどうぞ！！

S t S 編 第11話

分身を完全に人格変化させ、自分はどうするかを考える。

(今回はあの巫女のスペルを使ってみるか?)

昔ネタでやったらできてしまったスペルで、これは使いたくないと思っていたやつだ。
だが・・・、

「コイツ相手に遠慮なんていらなよなア」

まあ巫女は巫女でも・・・、

必然「キングクリムゾン」

鬼巫女のだな。

「ぐあああああ!!」

「ふん・・・まだこの程度ではないだろう?化物、本気を見せてみる!!」

「貴様!!何をした!!」

「教えるとでも?」

「くっ!!」

どうやら命のストックを削る事しか出来なかったみたいだ・・・なら、

「次は耐えられるか?」

煉獄「アマテラス」

連続でダメージを与え続ける……。

「ぐっ！ぐあ！！ガフツ！」

奴が攻撃を受けている時も分身の攻撃は止まらない。

「AMEN」

「拘束制御術式、三号、二号、一号……開放」

「小便はすませたか？神様にお祈りは？部屋のスミでガタガタふるえて命ごいする心の準備はOK？」

「くっ！！くそがああああ！！！」

奴は悪あがきに攻撃をしてきた……無駄だな。

「なっ！？」

「効かん、その程度の攻撃ではまったく話にならん、来世からやり直せよお前」

「ぐううううう！！！」

まだ死なないか……次だな。

魔神「死狂い」

とある格ゲー？では即死攻撃であるこの技。
今はただの拷問用の技にしか見えないな。

「があああああ！！！」

「まだ叫べるか、案外しぶといな・・・だが俺は貴様を許しはしない、俺の家族に！俺の大切な人を守るために！貴様はここで殺す！」
さらに攻撃の威力を上げる。

「さあ貴様の命のストックはどれくらいあるんだ？・・・もっと抵抗してみせろ！その悉くを俺が粉碎してやる」
「ぐううううう！！なめるな！！」

奴は今までで一番威力の高い攻撃を出してきた。

「ガフツ！」

「大丈夫か？本体」

「マスター！？」

「・・・大丈夫だ、今はコイツを潰すだけだ」

「ならば命令をよこせ！」
オーダー

やはり完全に飲まれてるか・・・。

「私は殺せる、微塵の躊躇も無く、一片の後悔も無く塵殺できる、この私は化物だからだ、ではお前は？」

「・・・」

「銃は私が構えよう照準も私が定めよう・・・弾を弾装に入れ遊底を引き安全装置も私が外そう、だが・・・殺すのはお前の殺意だ、さあどうする、命令を！！」

俺はインテグラではないんだがな・・・まあ、

「サーチアンドデストロイ
見敵必殺だ！！」

あの人と同じ命令をする。

「俺はこの命令を変える気はない！我々に敵対するあらゆる存在は叩いて潰せ！！全ての障害はただ進み押し潰し粉碎しろ！！」

「了解、我が本体」

俺は俺の守りたいモノ全てを守る！そのためなんだったと決めた！それは昔から変わらない！

「さあ覚悟しろ、その命尽きるまで足掻いて見せる！」

「ぐっ！！」

「今から絶望を見せてやる！！」

絶望「鮮血の結末」

あのゲームでは殆どのキャラが耐え切れなかった技だ、これで終わらせる。

「があああああ！！！！」

アンデッド

「この私の眼前で死人が歩き不死者が軍団を成し戦列を組み前進をする・・・唯一の理法を外れ外法の法理をもつて通過を企てるものを・・・この私が許しておけるものか！貴様は震えながらではなく・・・藁のように死ぬのだ！！」

やれやれ・・・まんま神父だな。

「さあどうする？まだ諦めずに戦つか？抵抗せずに楽になるか？どちらか選べ」

「ふ、ふざけるなあ！！俺が貴様にやられるはずが・・・」

「シネ」

一気に振り下ろす。

「ぐああああああ!!!!」

「そうだ、もしこのスペルに耐える事ができたらとっておきを見せてやろう」

「何・・・?」

「さあ耐えて見せる!」

「G u a a a a a a a a ! ! !」

もはや人の声ではないな・・・。

「零号・・・開放」

「断罪してやる!」

この攻撃でストックがなくなりかけたみたいだな・・・。

「ぐ・・・あ」

「まだ生きていたか・・・だが俺も忙しいのでな、終わらせる」

永遠「レクイエム」

本来のこのスペルは完全にネタ扱いでバグだ。

だが俺はこのスペルを改良して拷問用にした。

内容は本来はない世界を擬似的に創り出してそこに閉じ込める・・・
無論幻覚を見るので完全に精神崩壊を起こす。

まあ他の世界のチート共には無駄だろうけど・・・。

「さて・・・終わったから消えていいぞ?」

「了解」

やれやれ・・・どうやらあちらに置いておいた分身はティアナに見せたみたいだな・・・まあいつか見せようと思ってたからいいがな

「恨まれるだろうなあ」

『マスター？』

「いや・・・早く帰ろう、姉さんもあちらに送ったままだしな」

『・・・了解です』

そして俺は六課に戻った。

「で？何故話した？」

「・・・手紙がきていたらしい、しかも本体・・・お前の名前も書いてあったそうだし」

「何？」

そんな事をするのは・・・まああいつ等だろうなあ。

「で？見せたんだろ？」

「ああ、おそらく大丈夫だろうが・・・お前が見てきてくれ」

「・・・俺は恨まれてると思うぞ？」

「そんなものは本人に聞け、だから早く行け」

「分かったよ・・・はあ」

本当にどうなるんだろうな・・・。

そう思いながら俺はティアナの所に向かった。

>ティアナ Side<

龍斗さんの分身から見せられたのは管理局の闇の部分とあの時の事

件の真実……。

見せられた最初は信じられなかった、管理局がこんな事をするなんて思いもしなかったから。

でもよく考えたら管理局はおかしい所が沢山あった。

私の兄は管理局のせいで死んだ……その真実が私には深く突き刺さった。

もう私は何を信じたらいいか分からなかった、自分の目指した道は間違いだったのだろうか……そう考えてしまう。

「どうしたら……どうしたらいいのよ……」

そう零すと、

「さあな、少なくとも立ち止まるのは間違いだ」

目の前に龍斗さんがいた。

今はあまり会いたくなかったのに……今会えばこの人に八つ当たりをしそうだったから……。

「聞いてたんですか？」

「ああ」

この人は……どうしてこんなに冷静になれるんだろうか？
きっと私に恨まれると思っていないのだろうか？

「ティアナ」

「はい」

「君の兄を救えなくて……すまない」

「え？」

な、なんで謝るの？

龍斗さんはむしろ急いで助けようとしてくれていた……周りが無理だと諦めていてもただ一人だけでも諦めなかった……そんな人なのに。

「ど、どうして謝るんですか？」

「俺は君の兄を救えなかった、確かに俺は万能じゃない、救えるのは限度があるだろうな」

「……」

「でも守りたかったんだ、あいつは俺にとって大切な友達だったから……」

本当に悲しそうに語っている龍斗さんを見ると私まで悲しくなる。

「俺は友達一人すら守れなかったんだ……ティーダを守れなかった！」

どこまでも悲しそうに……悔しそうに語っていた。

「だから俺は前以上に強くなった、これ以上大切な人を失いたくないから……だから！」

「はい」

「今は謝らせてくれ……君は俺を恨んでくれていい、でも立ち止まらないでくれ、ティーダと約束したから」

「はい」

その約束は……、

「ティアナが大人になるまで見守ってほしいと頼まれたから……最初は見えている事しかできなかった、そんな資格がないと思ってい

「だから」

「……」

「でもそれは逃げだ！逃げていては前には進めない……だから君と向き合おうと決めた、まあ時間はかかったがな」

龍斗さんは苦笑いをしながら言った。

「だから俺は君を支えよう、たとえ恨まれていても、君に殺されかけても……君を守ると誓おう」

「／／／」

そ、そんな顔で言われると……恥ずかしい。

「と、取り敢えず！」

「？」

「私はあなたを恨みません」

「!？」

「あなたは兄を助けようとしてくれました、それに今約束を守ろうとしてくれています……恨めるはずないじゃないですか」

本当に……恨めない。

この人は強くて弱い……なら私が支えないと！

>ティアナ Side End<

ティアナが許してくれた次の日。

「さあ今日も模擬戦するよ！今日の相手は龍斗君だから精一杯頑張つてね！」

「「「「はいつ!?!」「」「」「」

今日はティアナも元気に参加していた、スバルも嬉しそうだ。

「じゃあ今回は前回と同じルールだが・・・」

「・・・だが?」「」

「レベルを上げるぞ?」

「え!?!」

「こ、これ以上あがったら・・・」

「拙いですね・・・(汗)」

「ど、どうしよう」

みんなあわてるな。

「落ち着け、お前達は確実に強くなっている、だから自分の力を信じる」

「・・・」

「もし自分の力を信じていけないなら・・・仲間を信じる」

「・・・はい!」「」

「いい返事だ、じゃあ始めるぞ!」

さあ今日も一日頑張っていくか。

ますます守りたいモノが増えていくが全部守ってみせる!そうより一層決心しながら俺は模擬戦を始めた。

S t S 編 第11話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「あっさり解決しすぎだろ・・・」

し、仕方ないだろ！？これが俺の限界だ！

龍「呆れるしかできんな」

うっ！！と、取り敢えず感謝コーナーいってみよう！！

龍「R a i N様、メガネ様、けーくん様、感想ありがとう」

本当にありがとうございます！！

龍「次回はおそらく早ければ木曜遅ければ土曜くらいに投稿予定だ」

これからも頑張っていきます！！

龍「ではな」

では！

S t S 編 第12話(前書き)

今回は遅い上に短い?です。
それでは!気楽にどうぞ!!

S t S 編 第12話

ティアナに秘密を打ち明けすこし楽になったんだが・・・、

「何故俺はここに居るんだ？」

『それはマスターがついてないだけで？』

そつだよな・・・別に俺のせいどころなつた訳じゃないよな？

『まあとりあえずはどうにかしましょうよ・・・この模擬戦』

「はあ〜」

そつ・・・俺は今フォワード陣達と模擬戦をしている。

フォワード達だけならまだ楽なんだが・・・何故かフェイトとなのは、シグナムにヴィータが混ざってきた。

「だって久々だったから・・・」

「ふむ、また戦いたくなつてな」

「にははは」

「笑うくらいなら止める・・・」

「無理だろ・・・」

「ヴィータ」

何故かヴィータだけ乗り気じゃない？

「今日はあいつらの特訓しようとしてたんだ・・・それがなくなつたからな」

「やっぱり楽しみだったのか？」

「う、うるせえ！」

「うお!?!」

いきなり攻撃してくるか……。

「じゃあいつも通りのルールでいいか？」

「いいよ」

「うん」

「ああ」

「」「」「はい!?!」「」「」

はあく疲れそうだな。

『どうするんですか?』

「そうだな……モード」七夜「で」

『了解』

今回はこれでいってみるか……。

そう思いつつ俺はクロスをナイフにする。

「じゃあ始めるよ!」

「ああ、少しは楽しませてくれよ?」

こうして模擬戦が始まった。

「はあ!?!」

「甘い!」

――閃走・六兔――

蹴り穿つ。

「やあああああ!!」

「遅すぎるんだよ!!」

——閃鞘・一風——

つかみ投げる。

「いつて!!」

「無駄だ」

——閃走・水月——

避け続ける……。

「今よ!!」

「おう!!」

「ん?」

——ブラックバレル——

スバルか!?

「やれやれ……まいったね、どうも」

「まだまだ!トライデントスマッシャー!」

これは……。

「斬る」

――閃鞘・七夜――

回避しながら攻撃する……。

「くっ！」

「テストロツサ！」

「やれやれ……やっぱりこのぐらいか……まあ普通のやつよりは楽しめるな」

「エクセリオンバスター！！」

「うおっと」

いきなり飛んできた砲撃を避ける。

「容赦がないな……まったく、怖いな」

「まったく思ってたなさそうだよな？」

「いやいや、怖いモノは怖いさ」

本当に吃驚したからな。

「蹴り穿つ！」

――閃走・六兎――

一見何も無いところに蹴りを放つ。

「うわっ！！」

「な、何ではれたのよ！」

ふむ……やはりティアナのオプティックハイドか。

「俺の目は特別製でね、見えなくても何とかなるんだよ」
「くっ！なら！」

次はどうするつもりだ？

「スバル！エリオ！」

「はい！」

「分かった！」

どうやら念話で何か話したみたいだな。

「吾は面影糸を巢と張る蜘蛛、
われ

ようこそこのすばらしき惨殺空間へ」

少し本気を出すでしょう。

まあ七夜としてだな。

「アクセルシューター！」

「飛竜一閃！」

「シュワルベフリーゲン！！！」

ひたすら遠距離もしくは中距離攻撃だな・・・こちらから近づくか。

――閃走・水月――

ヴィータの後ろに移動し攻撃を繰り返す。

――閃鞘・八点衝――

「ぐっ!!」

やはり警戒されていたせいであまりダメージは通らなかったか。

「テートリヒ・シユラーク!!」

「危ない危ない」

当たるところだったな。

「キャロ!」

「はい!」

何を……。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士そうに、駆け抜ける力を」

ブーストか。

「猛きその身に、力を与える祈りの光を」

ブーストアップ・アクセラレーションとブーストアップ・ストライクパワーか。

機動力と攻撃力が上がったか。

「シユタールメツサー!!」

避けないとまずいな。

――閃走・水月――

急いで距離を離す。

「危ないな・・・もう少しで当たるところだったな」

「もう少しかったのに・・・」

「ああ、君達をよくやったよ、だから俺も君達に2つの技を見せよう」

「まさか！」

「どうしたんだよシグナム？」

「まずい！早く離れる！！」

「「「え？」「」」

「もう遅い」

――閃鞘・迷獄沙門――

「きゃあああ！！」

「うっ！！」

「くっ！！！！」

大半のやつが倒れる中、シグナムだけが立っていた。

「やっぱり君はそう簡単に倒れはしないか」

「あ、当たり前だ！」

「じゃあもう一つ、いくぞ？」

「くっ！！」

――極死・七夜――

「カハッ！」

「これで終わりか・・・やれやれ、下手だね・・・どうも」

これにて終了で御座いますってか？

「さて、今日はここまでだ、今日は昼から休みだ」
「え？」

俺が考え事をしている内に合格が貰えたらしい。

だから合格を貰ってからの一言にかなり驚いている。

まあ仕方ないか、今までもろくな休みなかったし。

「だから今日はゆっくり休むなり行きたい所に行くなり自由にしろ」
「……はい！」「……」

まあ休みはなくなるんだがな……。

『マスター……』

「ああ、ヴィヴィオはきちんと守るさ、後はレリックも守ればいいんだが……まあ警沢はいけないな」

『ええ、今日はどうするんですか？いくら休みがなくなるといっても途中までは暇ですよ？』

「今日はアインとハルとメアとルカ、ヒカリと何かしているさ」

そうしないとまた拗ねそうだ。

理由は分からないが。

『本当に……困ったものですね、マスターの鈍感さには』(ボソッ)

クロスが何か呟いていたような気がするが……気にしないでおうか。

「今日からも結構大変になるな」

『ええ、それにやつらも行動し始めるでしょうし』

「最悪なパターンはスカリエッティと組んでいる場合か」

『その場合は・・・』

「俺が潰す、一切の情なく・・・な」

守るためなら鬼にも悪魔にもなるさ。

『気をつけて下さい、これからは何が起こるかわかりませんので』

「ああ、俺は負ける訳にはいかないからな、気をつけるさ」

さて・・・やつらも行動を始めるだろうな、だが俺は皆を守るためにも全力で行動するのみだ！

S t S 編 第12話(後書き)

後書きコーナー!!

龍「何故遅くなった？」

それは・・・。

龍「まあどうせ他の作者の作品をみたりニコ動だとあるのMADと
か見てただけだろ」

チガイマスヨー。

龍「はあ、こんな作者で大丈夫なのか？」

一番いい作者を頼む(キリッ

龍「感謝コーナー」

スルー!?

龍「R a i N様、メガネ様、けーくん様、感想ありがとう」

今回はGW中に上げれると思います!!

龍「まあ気楽に気長に待っていてくれ」

今回は昼からです!まあいつも通り駄文ですが楽しんでいただけだ
ら嬉しいです。

龍「ではな」

では！

S t S 編 第13話(前書き)

今回はもしかしたら今まで以上にグダグダです。
それでもよければどうぞ！

S t S 編 第13話

昼までの間、マテリアルズといたら、

「女の子を見つけました!」

まあ他にも言っていたがこんな感じで言われて、ついにここまで来たかと思えてしまった。

「分かった、すぐに向かう、指示があるだろうから頑張れ」

「はい!」

さてと・・・俺も早く向かうか。

「アイン、今日は来てくれ、何かあってからでは遅いからな」

「はい、主」

「ええ、アインだけなの? 僕も行きたい!」

「ルカ・・・龍斗に迷惑をかけるつもりですか?」

ルカが我俣を言うとヒカリが物凄く怒る、それがいつもの風景でもあるな。

「分かったよ・・・頑張つてね!」

「ふん、別に頑張らずとも主なら可能だろう? だから我は応援なんぞせん」

「素直じゃないね」

「なっ!? だ、黙れハル! いくら貴様でも言っていないことと悪い事があるぞ!」

「喧嘩するなよ?」(「ゴゴゴ」)

「「はいつ!!」」

うん、いつもの光景だ。

喧嘩を止めながら俺は思った。

いやいや、今は急がないとな。

「じゃあ行ってくる、何かあれば呼ぶかもしれないが・・・留守番頼むぞ?」

「「「はい!(うん)(ああ)」「」「」」

さて、急ぎますか!

とりあえず着いた訳だが・・・分身出しとくか、2体ほど。

「お前はへりの護衛、お前は空のガジェット達の殲滅な」

「了解」

俺自身はフォワード達のところに行くか。

もし余裕があれば2人組のやつらを探すのもありか。

「じゃあ、散!」

これでいいか。おそらくフォワード達はもうギンガと合流しているだろうしな。

「じゃあ向かうぞクロス」

『了解ですマスター』

そして俺はフォワード達のところへ向かった。

>分身A Side<

Aって適当だなあおい。

まあいいか。

「お〜い、なのは！フェイト！」

「龍斗（君）！？」「」

「違うよ〜、今の俺は分身Aもしくは鏡夜って呼んでね！」

まあ今は分身として本体から出てるだけだけどね。

勿論使うのは前回と同じだよ。

「ガジェットの殲滅は俺に任せて2人は周りを見てきてくれるかな？」

「え、う、うん」

「けど大丈夫なの？」

「これくらい余裕余裕、だから任せたまえ〜」

ん？前回出た時と性格が違う？

仕方ないじゃん、あれは疲れるんだし。

まあ戦闘になつたら切り替えるよ。

「じゃあ始めようかワンサイドゲーム一方的な虐殺を」

といつても相手はただのガラクタだけどね。

ーヴァルカンショックイグニションー

巨大な火球を放つ。

「やっぱり幻影があるみたいだね、まあ全部吹き飛ばすけど」

——ジャイルグラビテーション——

重力で押し潰す。

「ふむ、これで半分は減ったかな？」

「まだ増えよるからまだまだだな」

「え、面倒だなあ、よし！一気に潰そう！」

「え？」

——アゲニツシュワツタス炎神の息吹——

まあ能力名だけど今は技でもあるからいいか。

そう思いながらマイクロウェーブ超分子振動を発生させ炎を出し燃やし尽くす。

「うわあ」

「うん少し加減しすぎたかな？」

「あれで加減しとったんかいな!？」

「勿論！」

「え」

そんなに驚かれるのは心外だなあ、別にいいけど。

これでここは大丈夫だろうけど・・・一応ここにいる事にしよう。
後は任せたよ？分身Bと本体。

>分身A改め鏡夜 Side end<

>分身B Side<

私は分身Bですか・・・別に構いませんが。

「どうしたのかしら？」

「ん？いえいえ、何もありませんよシヤマルさん」

「・・・変な気分ね、龍斗君の顔で敬語を使われるのは・・・」

「分身ですから」

まあ似合わないでしょうがね。

「名前は一応狂識といいますが、あつ別に戯言シリーズは関係ありませんよ？」

「？」

知っている人は何人いるかわかりませんが、作者も題名と少ししか知りませんけどね。

「とりあえず私がこのへりの護衛ですので安心してください」

「え、ええ」

技は基本超能力ですね。

まあ一方通行の能力だけで大抵の事は何とかできますが、今も一方通行の能力は使っています。

「この子・・・」

「どうかしましたか？」

「え？えつと・・・大丈夫だと思っけど早く休ませてあげたいから」「優しいですね、なら急ぎましょっ」

といつてもあまり急ぎすぎても駄目なんですけどね。
本体から情報が来ました。
なるほどもうすぐこちらに攻撃がくると。
なら準備しておきましょうか。

「え！？攻撃！？」

「きましたか」

まあ全力で防ぎますがね。オフenseアーマー 室素装甲で防御してもいいのですが、万全を期して普通に一方通行の能力でいいでしょう。

「え！？攻撃が返った？」

「ただ反射しただけですよ、それより少し急ぎましょうか、また攻撃されても大丈夫ですが、この子が心配です」

「え、ええ」

「急げますか？」

「お、おう」

よかった。これで少しは安心できそうですね。
後は任せましたよ鈍感な本体さん。

>分身B改め狂識 Side end<

何故か分身に馬鹿にされた気がする。

今俺はフォワード陣と一緒にいる。

まあさつきまでの出来事は大して原作と変わらない。
あえて違つところをあげるとすれば……、

「あなたは……」

「何故こうなった」

ルーテシアに妙に懐かれているくらいか？
昔少しの間だけ一緒にいたからな。
その時の事を覚えているらしい。
無論全てが終わった後にだがな。

『どうするんですかマスター？』

「どうしたの？」

「ルールーがここまで懐くなんて・・・」

俺の方が吃驚なんだが？

「いつまでもここに居るのは拙いんじゃないのか？」

「はっ！そ、そうだった！ルールー！早く戻らないと旦那に怒られる！」

「大丈夫、もう伝えてる」

「手回しがいいな・・・無駄に」

仕方ない・・・、

「今日はもう帰るといい、ゼストも心配しているだろうからな」

「でも・・・」

「大丈夫だ、生きていればいつかきつと再会できるんだ、それに君達の事はあいつらには言わないさ」

「そ、そんな事して大丈夫なのかよ」

アギト（きちんと教えてもらった）が心配そうに言ってくる。
やはり根は優しい子なんだな。

「大丈夫と言ったはずだ、それに・・・君達をあまり傷つけないな

いからな」「ニコッ
「／／／」

ん？何故赤くなるんだ？

『はあ、また犠牲者が・・・』

犠牲者？

『気づいていないならそれでいいですよ・・・鈍感（ボソッ）』

何故か馬鹿にされた気がする。

「とりあえず今日はここでお別れだが・・・また会おう」

「うん」

「おう」

こうして別れる時に転移をしようとするよ、

「龍斗・・・」

「どうした？」

「私を送る」

「いいのか？」

「うん」

やはり優しい子だな。

「じゃあ目瞑って・・・」

「ん？分かった」

転移に目を瞑る必要性があったか？
まあいいか。

「ルルー！？」

ん？何故か口に暖かい感触が……。

目を開けると目の前にルルーテシアの顔があった。
話す時にしゃがんでそのままだったからか？

「じゃあね」

「あ、ああ、またな」

「ルルー泣かしたら許さないからな！」

「勿論だ、君達も俺の守りたいモノに入っているからな」

「は、恥ずかしい事をよく真顔で言えるなあ／＼／＼」

「／＼／」

「？」

よくは分からないがルルーテシアにはとても懐かれているみたいだな。

『そこでそう解釈しますか……本当に鈍感ですね（ボソ）』

「何か間違っているか？」

『はあ、マスターは女心をもっと理解すべきです』

「？……よく分からん」

まあいいか。次はおそらくヴィヴィオが攫われるだろうな……その前にヴィヴィオに会うのが先か。
まあ攫われないようにするんだがね。

「さあもうすぐで一段落つくんだ、頑張るか」

『ええ、悔いを残さないためにも』

そう思いながら六課に戻った。
戻ったところではやて達から説教をされたのはいい思い出？だ。

S t S 編 第13話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「俺は何故あそこまでルーテシアに懐かれているんだ？」

簡単に言えば昔に世話していたから。

龍「確かにしていたが・・・」

他の男より何倍も優しくて頼りになるやつをみたらそうなると思うけど？

龍「そうなのか？」

そうなんじゃない？

龍「・・・感謝コーナー」

流された！？

龍「雨季様、メガネ様、けーくん様、感想ありがとう」

ありがとうございます！！

龍「しかし・・・いい加減題名変えろ、いつまでも（仮）じゃ駄目だろ」

そう言われても・・・いい題名が浮かばないんだって！

龍「はあ〜これだから駄作者なんだよ」

グサツときた・・・。

龍「本来はこんな事をするべきではないんだろうが・・・すまない、何かいい題名はないだろうか」

このままだと（仮）が抜けるだけに・・・友達にはありえん（笑）
って言われましたし。

龍「まあ（仮）が抜けるだけでいいとかこんな題名はどうだ？とか
を感想に書いてくれると作者がハイテンションになる」

誰得ww

龍「次回はおそらく水曜日になるだろう、まあ大して進まない可能性
があるがな、今回のように」

グフツ！？

龍「ではな」

で、では。

S t S 編 第14話(前書き)

今回も大して進展もない駄文です。
それでもよければどうぞ！！

S t S 編 第14話

今日はおそらくヴィヴィオに会いに行くんだろうな。
だって俺が誘われているからな・・・なのはに。

「何故俺も行かなければならないんだ？」

「だって龍斗君・・・子供に好かれやすいんだもん」

そつだ、確かに俺は何故か子供に好かれやすい・・・だがそれだけで行く理由にはならないはずだ。

「そ、それに・・・／／／」

「？」

何故そこで赤くなるんだ？

「で？どれくらいで着くんだ？」

「・・・もうすぐだよ」

そして不機嫌そうな顔である。
もう意味が分からないよ・・・。

『マスター、口調が変です』

「声に出していないはずだが？」

『勘です』

「NTか？お前」

『普通のデバイスですよ』

本当にコイツのいるところで迂闊に考え事ができないな。別に構わ

ないが。

『どうやら着いたみたいですよ?』

「そうか・・・なのは、行くぞ」

「うん」

早く帰らないとマテリアルズ・・・特にルカがうるさいからな。
早く用事を済ませて戻ろう。

「すみません！」

「ん？」

シスターシャツハが来た。

どうやらヴィヴィオが脱走したらしい。

別に子供一人が抜け出したくらいで警戒しすぎだろ・・・。
まあ分からんでもないがな。

「じゃあ別れて探すぞ?俺となのはは中庭から、シャツハはその他
な?」

「あ、あの・・・私の範囲だけ広くありませんか?」

「気のせいだろ?」

「で、ですが・・・」

「頑張ってくれ」(ゴゴゴ)

「は、はい・・・」

よかった、喜んで受けてくれたな。

『マスターは時々逆らえないオーラを出しますからね・・・』

「何か言ったか?」

『イイエナニモ』

まあそれは後で追い詰めるとして・・・今はヴィヴィオを探すか。

「じゃあ探すぞ」

「うん！」

「・・・はい」

何故かシャツハだけテンションが低かった。
本当に何故だろうか？

「確か中庭からだよね？」

「ああ」

「どうして中庭からなの？」

本当は原作で知っているから・・・とは言えないよな。

「子供の行動範囲でなおかつこれまでの時間で考えて中庭の方が可能性が高いからだ」

「そ、そうなんだ」

適当に理由を並べたが・・・大丈夫だよな？

「とりあえず早く探すぞ、じゃないとまた移動しそつだからな」

「うん」

さて・・・中庭に向かいますか。

中庭に向かうとすぐに見つかった。

よかった・・・まだ遠くへ行ってなくて。

「あっ！」

「待て、まだあの子は怖がっているからそっとな？」

「うん、分かった」

そう言いながら俺達はヴィヴィオに近づく。

「うっ……」

「怖がらなくても大丈夫だ、君を傷つけたりしないよ」

「うっ？」

「うん、いい子だ、君の名前は？俺は森 龍斗って言うんだ」

「ヴィヴィオ……」

「ヴィヴィオか……いい名前だな、今君は何をしているんだ？」

そう聞くともう警戒をしていないのかすぐに答えてくれた。

「ママとパパ探してるの」

「ママとパパをか？」

「うん」

「……なら探すのを手伝おう、一緒に探そう」

「本当？」

「勿論だ、なのはもいいだろ？」

「うん！勿論だよ」

なら後は……。

「なら今はなのはの事をママだと思つといい、本当のママが見つかるまでな」

「なのはママ？」

「ちよつと龍斗君……？」

「いいだろ？」

「う、うん」

「なのはママ！」

「なに？ ヴィヴィオ」

これで少なくとも寂しくないはずだ。

「リュウトパパ！」

「は？」

な、何故俺がパパ・・・父親なんだ？ というより・・・。

「俺が男だと分かるのか？」

「う？」

何故かかなり嬉しいな・・・女に間違われないのは。
いつ以来だろうか・・・。

「ま、まあいいか」

「龍斗君がパパって事は・・・／／／」

「？」

『かなりカオスですね・・・六課に戻った方がカオスかもしれない
んが』

「言つな」

何故かあいつらは機嫌が悪くなりやすいんだよな・・・何故だ？

『ここまで鈍感だといつそ清々しいといいますが・・・』

「何故だ？」

『いえ・・・気になさらずに』

「そうか？」

『ええ』

おかしなクロスだな。

「とりあえず戻るか、六課に」

「う、うん」

「うん!!」

やれやれ・・・もうこの歳で子供ができたか。

でもこの子は守ってみせるさ、俺はそう決めたんだからな。
だから好きにはさせないぞ？スカリエツティ。

まあ今はそれ以外のイレギュラーがあるんだがな。

「どうしたの？」

「ん？」

「何か不安そうにしてたような気がして・・・」

「なのはにばれるとはな・・・」

「酷いよ!？」

「ははは、まあ大丈夫だ、お前は俺が必ず守る」

「!?!?!」

『ある意味すごいですねマスターは』

「は？」

帰りもカオスになりながらも六課に戻った。

シャツハ？ちゃんと伝えたぞ？ただし軽く落ち込んでたけどな。
それはいいとして。

(よくはないと思いますよ?)

(本当にねえ)

(黙ってる、鏡夜、狂識)

昔からいたみたいだが俺がきちんと認識したのは少し前だ。
戦いの途中で話かけてきたのだ、鏡夜が。
理由は暇だから・・・だそうだ。
それでいいのか？

(いいんだよ、所詮理由はどうでもいいんだよ、いつかは話さないといけないしね)

(それでもあれは無いでしょうに・・・まあおもしろ・・・楽しそうではありましたが)

(言い直す意味無いよね？それ・・・本音駄々漏れだからね？)

まっただ。

って、いつまでも話している場合じゃないな。

一応聞こう。

(何？(ですか？))

間違いなくカオスになるだろうが・・・何か対策はあるか？

(ないんじゃないかなあ、難しいよ？諦めたら？)

(分からないと言ったほうが面白そうなので分かりません・・・決して面白いからではありませんよ？)

(最初から隠す気無しだよねソレ)

(ええ、その方が面白いですし)

性格が歪んでいる気がする・・・これが俺の別人格か。

「龍斗君？」

「パパ？」

「ん？」

少ししゃべりすぎたか。

「大丈夫だ、今何処だ？」

「もうすぐで六課につくよ」

そこまで経っていたか。

（おやおや、ぼーっとしていると襲われますよ？女性から）

（ありえそうだから言わないでくれないかなあ〜）

（お断りします、私は面白い事なら全力で行動しますので）

なおさら性質が悪い。

いやいや・・・気にするな・・・もうつくからな。

「着いたよ？」

「あ、ああ」

「パパ大丈夫？」

「大丈夫だよ、心配してくれてありがとうな？ヴィヴィオ」

「うん！！」

どうやら着いたみたいだ。

はやて達にどう説明しようか・・・。

（素直に言うてはどうかでしょうか？）

（おっ？意見があったね）

（ええ、そうした方がいいでしょうね、面白いので）

（やっぱり他の方法考えよう）

こいつが言つと嫌な予感しかしねえからな。

(失礼ですね・・・結構考えたんですよ?)

(碌な考えしてない君が悪いと思うけど?)

(少し用事を思い出しました、鏡夜?少し来てくれますか?)

(え!?!え、遠慮するよ~)

(無理ですね、逃げるには遅すぎました)

すまないな鏡夜・・・無力な俺を許してくれ。

(では・・・後に)

(た、助けて!?)

南無。

(ではO H A N A S H Iです、楽しみですね)

(か、勘弁してくれえ~)

さ、さて!さつさと報告を終わらせるか。

決して頭に流れる音が断末魔にしか聞こえないとかあったわけじゃないからな?

誰かに言い訳するように俺は現実逃避した。

その後なのはさらにさらに心配されたのはある意味当然と言える。

S t S 編 第14話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「何故遅くなった？」

悩みすぎた結果がこれだよ！

龍「ああ、題名か」

そうだけど・・・いまいい題名が浮かばないんだ。

龍「なら（仮）が抜けるだけでいいんじゃないか？今は」

そうだな。次の投稿までに案がなければそうしよう。

龍「かなり偉そうだなおい」

さ、さて！感謝コーナー！！

龍「・・・R a i N様、けーくん様、感想ありがとうございます」

今回はおそらく土曜か日曜です！

龍「次こそはきちんとさせる、しなければ、永遠「アマテラス」改
な？」

し、死ねる！？

龍「ではな、次回も読んでくれると嬉しい」

では！

S t S 編 第15話(前書き)

今回は短いうえにグダグダ&カオス?です。
それでもよければどうぞ!!

龍「いつも通りだろ?」

O r z

S t S 編 第15話

ヴィヴィオを六課に連れてきたのだが・・・、

「どういう事が説明してくれるんやろーなあ?」

「な、なんでなのはがママって呼ばれてて龍斗がパパって呼ばれてるの!?!」

「説明してもらおうか・・・」(剣を構える)

「して・・・くれますよね?」(旅の鏡展開)

「説明しないとぶっ飛ばす!」(アイゼンを構える)

どうしてこうなった・・・。

『マスターが日頃フラグを建てまくるからですよ?』

「そうなのか?」

『え!?!?』

「何故驚く」

『今まで否定しかしてこなかったのに!と思ひまして』

まあ確かにな。

『まあ考えてくれるだけで大分助かります』

「ああ、もう少し悩んでみるさ」

じゃないとあいつが怖い。

「さて・・・どうすればいいんだ?」

『それくらい自分で考えて下さい』

という訳だが？

(で？なんで俺に頼るの？)

(まったくです)

お前らは俺でもあるんだ。

頼るのは当然だろ？

(汚いさすが主人格汚い)

(今回は賛同せざるおえないですね)

何故に？

(今は目の前の事に集中したらいいんじゃないかな？)

(でないと死にますよ？)

何それ怖い。

(今のあなたには似合わない言葉ですね？)

(もう少し言葉選べば？)

気にしないでくれ・・・俺も焦ってただけだから。

(ならいいけど・・・頑張れ！)

は？

(私はのんびり見学させてもらいますよ、その方がおもしろい・・・よ
さそつですしね)

隠せてない……。

「で？理由は？」

「あ、ああ」

理由は今はある程度考えてたこれでいいだろ。

「ヴィヴィオが両親を探していると言っていたからな、なら見つかるまで代わりとは言えないがなった方が安心できると思ってるな」

「……まあええわ、一応それで納得したろ」

「そうか」

よかった。

「ならうちらもママになってもええやんな？」

「え！？」

何故だ？母親が複数いるのは拙いんじゃないやあ？

「気にしたらあかんで！世界には一夫多妻制のところもあるんやからな！」

「龍斗君と2人きりで（ブツブツ）」

本当にカオスだな。

「というより龍斗君はどうやって子供が生まれるか知ってるん？」

「急にどうした？」

「いや、知らなさそうやったから何となく？」

馬鹿にされた気がする……。

「無論知っている」
「なら聞かせてもらおか?」(ニヤニヤ)
「ああ、コウノトリが連れてくるんだろ?」
「」「」「え?」「」「」

え?何故そんな反応を?

「ま、まだ信じてるなんて・・・」
「違うのか!?」
「違うで?」

なん・・・だと?

「しよ、小学生でも信じてないのに・・・」
「どう反応したらいいのかしら?」
「龍斗・・・純粹すぎるんじゃないあ」
「おめえに言われたら駄目な気がするぞ?」
「ヴィータちゃん言い過ぎじゃあ」
「グスン」

やばい・・・はやてのせいでさらにカオスに!?

(というよりあれを信じてるなんてねえ)
(少し予想外ですね)
(とゆうより馬鹿なだけじゃねエか?)
(誰?)()

気がついたら増えている・・・何故?

(俺はテメエが作った人格の一つだ、まア元はもろ一方通行だけど
なア)

喋り方で理解できるが……。

(納得はできねエか？まアいいがなア、気にすんな)

それでいいんだろうか？

つて今はそれよりも現状況を何とかしないと。

「パパ？」

「どうした？」

「疲れてるの？」

「!？」

やはり子供は純粹で鋭いな……怖いくらいに。

「大丈夫だ、一段落ついたらゆっくり休むからな」

「うう……」

「どうした？眠いのか？」

「うん」

「じゃあ寝たほうがいい、何処で寝るんだ？」

「パパと一緒にいい」

「……!？」

「そうか」

どうしたものか……すでにアイン達がいるんだが。

「龍斗君！パパとママは一緒に寝てあげた方が言いと思うの!」

「ちよっ!?!せこいでなのはちゃん!」

「世の中は所詮弱肉強食なの！強い者が生き弱い者が死ぬ！」

お前はどこのココロだ。

(まさかの英語表記！？)

(いや、単に漢字を思い出せないだけでは？)

(どーでもいいがアイツらはほっというて大丈夫なのか？)

「とりあえず今日はヴィヴィオと俺で寝る、その後でまた決めればいいだろ？」

「うん、龍斗がそう言うなら」

どうやら全員納得したみたいだな。

「じゃあまた明日、おやすみ」

「おやすみ」

さて、今日はもう遅いからな、あのカオスのせいでもう夜だ。仕事？しながらあの状況だが？しかし……、

「眠い……」

「うん？」

「早く寝ようか」

「うん！」

そっぴいなながら俺とヴィヴィオはベットに入る。
今日はゆっくり寝れそうだ。

(いつもは襲撃されていますからね)

(不便だよね、まあ自業自得だから頑張っしてほしいね)

頭の中で響いている声を聞いていると、

「すう・・・」

「もう寝たか、疲れてたみたいだな」

でもこの顔も絶望に歪んでしまうのか・・・。

(そうさせないために行動してんだろугア、テメエが頑張らねエと意味がねエだろうが)

(まあそこは主人格のあなたに任せますが・・・後悔はしたくないのでしょうか?)

勿論

(なら頑張っして下さい、そうじゃないときつとあなたは壊れてしまいますから)

(だから俺達も手伝っよう)

フツ、頼りにしている。

共に頑張ってくれ。

((了解)))

この子も大事な家族になった・・・なら俺は全力で守りぬくのみに！
たとえイレギュラー共が来ても守り抜いてみせるぞ。

(じゃあ早く寝よう)

(私達も疲れました)

(じゃあな)

こうして今日という一日が終わった。
決戦の時まで近いだろうが俺は俺の出来る事をするのみだ。
そう決心し、俺は眠った。

S t S 編 第15話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「何故こうなった・・・」

気がついたら君を純粋な子供みたいな感じに・・・どうしてだろうね！

龍「それは二〇二〇動画の画面から目を離してから言え」

さ〜て感謝コーナー！！

龍「コイツ・・・MUGEN関連の動画みていやがったのか」

メガネ様、Rain様、雨季様、Jam様、けーくん様、夜神様、感想ありがとっございます！！

龍「とりあえず題名はこれで落ち着いた、もしこれよりいいのがあると思ったら変えるかもしれない」

次回はおそらく今週中には投稿できます！

龍「次回はきちんと物語を進めるので勘弁してほしい」

では！

龍「ではまた次回」

S t S 編 第16話(前書き)

今回は姉の力を見せたただけです！
でも何故かグダグダに・・・それでもよければどうぞ！！

S t S 編 第16話

。昨日のカオスな状況から逃げ、ヴィヴィオと一緒に寝たのだが・・・

「ん・・・」

「は？」

何故姉さんがいる？

今は神のところにいたはずなんだが・・・。

「どういう事だ？」

『神から連絡がありました』

「何て言ってた？」

内容によっては O H A N A S H I だな。

『お主の姉に脅された（泣）だそうですが？』

「・・・今回は大目にするか」

まあ前世でも姉さんは押しが強かったからな。

神でも脅しそつだ。

「今はこの状況を何とかしないと・・・起きて下さい姉さん」

「ん、後5年・・・」

「冬眠よりたちが悪いですよ？早く起きないと怒りますよ？」

「はい！起きました！」

よかった。前世でもこれで起きてくれたからな。

「あれは怖かった・・・」

「？」

『どうやら何かトラウマがあるようですね』

「あれはトラウマで済むものじゃないわよ・・・」

そうなのか？ただ嫌いだと怒っただけだが？

『それは相手にとっては絶望しかないような・・・なのはさんたちには絶対に言わないで下さいね？』

「何故だ？」

『まちがいなく大変な事になるので』

「そうか」

なら言わないでおう。

まあいざとなったら言うがな。

「それよりも姉さんの事をなのは達に紹介しないとな」

まあもうすぐで来るだろうけど。

『後1分』

「何のカウントダウンしてるの？」

「なのは達が俺を起こしにくるまでの時間」

「え？」

『後10秒』

「9、8、7、6、5」

数え始めたと同時に大きい足音が聞こえる。

「4、3、2、1」

「おはよう！龍斗君！早く起きない・・・と」

「どないしたんや？なのはちゃ・・・ん」

「どうした・・・の」

あれ？コレ地雷踏んだか？

『ええ、それも核並みのをですな』

「救われないよな、俺も」

え？その後の事か？・・・聞かないでくれ。

あれは思い出したくない。

『そしてマスターの姉の実力を知るために模擬戦が始まるのでした』

「誰に言ってたんだ？クロス」

『いえいえ、気にしないで下さい』

「そうか・・・というより姉さんはデバイス持っているのか？」

「持つてるわよ？挨拶しなさい」

『はあく、めんどくさいマスターだこと、私はマスター・・・森
彩香のデバイスのフランよ、よろしく』

「フラン・・・東方？」

「好きなんだから仕方ないじゃない」

まさか能力は・・・。

「そうよ、東方のキャラの能力が使えるわ」

「うわあく戦いたくないんですが」

「うんそれ無理や！」

うわあくこの狸め・・・ムカつく笑顔だな。

まあいいか。

「で？ルールはどうするんですか？」

「ルールは特に変更なし、負けを認めるか戦闘不能になれば終了よ」「了解」

じゃあ今回は……。

「これでいいか、クロスモード」「朱い月」「

『了解、モード「朱い月」』」

何故か朱い月になるとドレスに変わるんだよな……慣れてしまった自分がある。

「さあゆくぞ？」

「じゃあ行くよ！フラン！」

『了解、マスター』

おそらく能力が使えるのなら……、

「いくよー！」

――禁忌「クランベリートラップ」――

やはりか。

「その程度では避ける必要もない、喰らうがよい」

――Blut der Schwester――

「ちょっと!？」

やはり姉さんなら避けるか。

「その姿になった時点で分かってたけど理不尽すぎるわよ！」

「他の世界では我以上の理不尽がいるが？」

「何それ怖い」

まあ本当に理不尽だからなあ（遠い目）。

「それより・・・龍斗なのよね？」

「うむ、確かにこの体は龍斗のものだ、今は我が使っているがな」

「まさか」

「そう、人格の塗り潰し、常人は間違いなく手を出さぬ行動であるうな」

「何でこんな事を・・・」

「非情に成りきれないから・・・らしい、安心するといい、こやつは我達全員気に入っているのでな、消してしまったりはせぬ」

まあ納得はできないだろうな。

「さて、実力を見るのであるうつ？なら早くするがよい」

「そうね」

――禁忌「レーヴァテイン」・・・

「行くわよ!」

「来るがよい」

「はあ!!--」

姉さんが思いつきり振り被って来た。
「だけど・・・、」

「まだまだ甘い」

「なっ!?!」

「I S c b m e i d e n E n d e i -」

「うわあっ!?!」

「安心するのはまだ早いぞ?」

「I E i n s H e i -」

「くう!?!」

「I Z w e i K a l t -」

「きゃっ!?!」

「I D e r i R e i s e -」

「きゃああああ!?!」

「ふむ・・・やはりしぶとい」

「まだ・・・いけるわよ!」

「ー禁忌「フォーオブアサインド」 - -」

姉さんが四人に分身した。

「まだまだ!」

――禁忌「カゴメカゴメ」――

――禁忌「恋の迷路」――

――禁弾「スターボウブレイク」――

――禁弾「カタディオプトリック」――

一気に攻めてきたな。

「それ、まずは一体目」

「なっ!?!」

相手の攻撃をものともせず攻撃する。

「なら……これで終わらせる!!」

「よかるう……我を楽しませてみよ!」

残りの分身2体と一緒に向かってきた。

「はあ!!」

――禁弾「過去を刻む時計」――

――秘弾「そして誰もいなくなるのか?」――

「ラストの分身には何もさせぬ」

「え?」

1体の分身を消す。

まだこの攻撃では俺を止める事はできない。

「ならっ!」

「――QED」495年の波紋」――

ラストスペルか……。

「これで!」

ああ確かに普通のやつならこれで終わりだろうな……だが、

「生憎負けてやる気は無いのでな、すまぬがこれで終わらせようか」

「そ、そんな!?!」

「少しばかり戯れようか?」

ゲームでのラストアークを決める。

「そこまで!?!勝者龍斗君!」

「あゝあ、負けちゃった……弟には負けたくなかったんだけどな
あ」

「仕方あるまい、こやつは負ける訳にはいかぬのだから」

「それより……終わったんだから戻れば?」

「む?そうだったな、すまぬな、今日は疲れた、少しばかり眠ると
しよう」

何とか勝てたか。

というより……、

「何でフランドールのスペルだけで戦ったんですか？」
「フランドンが好きだから！」
「即答ですか……」

まあいいけどさあ。

「さて、これで姉さんの実力は分かっただろ？」
「うん、よく分かったで！今日からよろしくや！」
「……よろしく」

あゝ、まあ慣れないよな……あんな前世で終わってたら。

「さて……この後はフォワード陣との模擬戦だな」
「……え!?!?!」
「安心しろ、今日は俺の分身が相手だ、来い」
「了解」

さて……分身にはコイツでいいか。

「クロス、分身に対してモード「アルカード家当主」
『了解』」

これで大丈夫だろ。

「じゃあ頼むぞ?」
「ええ、私が出るほどでもないけれども……仕方ないから出てあげるわ」

「まあ頑張れ」

「さあ行くわよ?私今は少し機嫌がいいの、だから手加減してあげるわ、泣いて喜びなさい」

うわあ〜フォワード陣南無。

『出した本人が言いますか』

「まさかあなるとはな」

後ろで悲鳴と雷が降る音が聞こえるが・・・、

ーークラウニツシュ・カレンデュラーー

うわあ〜シルフィードで近づけてのアストラルヒート・・・本当に加減しているのか？

でも今言えることはただ一つ・・・、

「強く生きる」

そう言うしかなかった。

S t S 編 第16話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「なんで東方の能力なんだよ・・・」

何となく（キリッ

龍「死ねばいいのに」

さ、さて！感謝コーナー！！

龍「ユタ様、メガネ様、けーくん様、Rain様、夜神様、雨季様、ケルベルス様、感想ありがとう」

ありがとうございます！！

龍「ついでに言うとコイツは調子に乗ってこの後書きコーナーにゲストを呼ぶといっている」

番外編でもいいんですが此処で慣れようかと思ひまして。

龍「まあ参加してくれる人がいればだがな」

そうだね〜。

龍「次回の更新は一応金曜日もしくは土曜日の予定だ、それまでに参加表明があればその時に、その後ならばその後ゲストを呼ぼうと思う」

一応数に制限はかけていないので一話につき一作品のキャラをだそうかなあと。

龍「なのでもし出てやってもいいとおもったら感想に書いてくれ」

では！次回も頑張ります！！

龍「ではな」

S t S 編 第17話(前書き)

今回から後書きにゲストが来ます！

まさか四件もくるとは・・・今回は R a i N 様の作品から来ています！

それでは！かなりグダグダですがどうぞ！

トーマ達がいこんなじゃにと思ったら言っってください、直しますの
で！

後今回の後書きコーナーは長いです。

S t S 編 第17話

あの姉さんが六課に来て数日。

おそらく今日か明日くらいに六課と地上本部に襲撃があるだろう。

俺はほぼ間違いなく地上本部に行かなければならなくなるだろうが・

・・・、

「守りたい者を優先するのは・・・別に構わないよな？」

『ええ、私はマスターと共に進むだけですから』

「わたしもそうですよ？」

「アイン、クロス・・・ありがとう」

本当にいい相棒・・・家族をもったな。

こいつらも守りたい。

贅沢だと言われようと無理だと言われようともこの気持ちだけは変わりはない。

それだけが俺の今の生きる理由・・・戦う理由だからな。

「さて、今日はどうしようか？」

『おそらく今日みたいですからね、今さっき確認してきましたが、どうやら今日地上本部に向かうようですから』

「どうやって確認したんだ？」

こいつはずっと俺の近くにいたはずだが？

『アインに頼みました、なので正しい情報ですよ』

「そうか、ありがとうなアイン」

「いえ、当然の事をしただけです」

それなら今日は六課にいるか・・・でもギンガが襲われちゃうな。

「なら分身を向かわせるか」

『後マテリアルズもですね』

「ああ、あいつらならやってくれる、そう俺は信じるぞ」

そして俺はその事を・・・少し誤魔化したがはやてに言い、六課に残った。

「分身よ、頼んだ」

「ええ、分かっていますよ、ギンガは・・・いやフォワード達も守りますよ」

「ああ、では向かってくれ狂識」

「了解しました」

これで大丈夫だろうな。

何故分身に2人で入ったのかは知らないが・・・守ってくれよ。

「俺はこつちを守りきってみせるからな」

俺に生きる理由と目的をくれたあいつらを誰一人として失わせはしない！

『マスター！』

「何だ」

『どつやら先客のようです』

「先客？」

そう思いながらも俺はその先客のいる場所に向かう。
そしてその先にいたのは、

「お前・・・」

「あゝあ、出会っちゃったか」

「七夜 志貴・・・タタリで具現化した時は殺したはずだが？」

「ああ、確かに俺はあの時死んだ」

「なら・・・」

「だがまた新しく俺を呼んだやつがいるのさ、まったく、死人使いが荒いね」

何処のどいつだ？そんな物好きは・・・まあ最後の大隊もどきのやつだろうがな。

「なら何故ここにいる？」

「ああ、理由か、俺は俺を呼ぶ者を殺す、ならまずはそいつの居場所を知ってそくなやつに聞くのが常識だろ？」

七夜に常識を言われたくないんだが。

「まあ今は誰かれ構わずって訳にはいかない・・・というよりも召喚のされ方が少し拙かったらしい」

「何？」

「どうやら極端に俺にある衝動全てを持っていったらしい、殺す事は出来ても殺そうという意思がでない、これじゃあ殺せない」

「それでもお前は殺すんだろ？」

「ああ、当然だ、言ったる？俺は俺を呼んだ者を殺すと」

なら仲間にできるか？

「なら協力しないか？」

「協力？」

「ああ、そいつには近々会う予定だったからな、そいつの所まで案内してやる」

「だから協力しろと?」

「いやか?」

これで断られたら・・・まあ守りたいモノに被害がなければいいんだがな。

「本来なら断るんだが・・・いいだろう、だが油断するなよ?俺はいつでもあんたの命を狙うぜ?」

「お前に俺は殺せないよ、俺が俺である限り死にはしない」

そう言うと七夜はそれがおかしいかのように笑った。

「くく、ああ、さすがだよあんた、それでこそ殺しがいがあるってもんだ、あの時は負けたが次は殺すぜ?」

「ああ、それでいい、だが今はこっちのが問題でね、今は守りたい奴を守るんだよ、姉さんがいても限度があるしな」

「そうか、なら俺はどうしたらいいんだ?」

「手伝わなら手伝わ、手伝わないのならここにいろ」

そうじゃないと邪魔だからな。

「なら俺はあんたについて行くとするか、その方がいい気がするしね」

「なら手伝え」

「了解した、まあたまにはいいか」

どうやら本当に殺戮を楽しむという感情をなくしたらしい、まあ何時戻るか分からないが。

そう思いながら俺は六課に戻った。

>狂識 Side<

私がこの地上本部に来て少したった時にいきなり襲撃がありました。

「やれやれ、やはり敵は待ってはくれませんか」

ギンガやフォワード陣を守るためにも私も頑張りますか。

「とりあえずは・・・後ろの人？達、早く出なければ消し炭にしますよ?」

「何故分かった」

「あなたからは人の気配に機械が混じっていましたから分かりやすいんですよ」

「くっ！お前たち！ここは姉が足留めをする！だから逃げろ！」

「で、でも！」

「いいから！」

どうやら困っているようですな。
なら、

「早くその姉の願いを叶えたらどうです？何時までも待つ私ではありませんよ?」

「くっ！」

おやおや、これでは私が悪みたいですねえ。

別に構いませんが。

「そのケースに入っているのはギンガですね?」

「ああ」

「なら取り返すとしましよう、幸いスバルはまだ来ていませんし」
それに少しイラついてますから手加減忘れそうですね。

(すまねエが今回は俺に任せてくれねエか?)

おや?まさかあなたがいるとは……ですがいいのですか?

(ああ、それに最近は戦ってないからなア、少しは戦つとかねエとな)

分かりましたが……殺さないでくださいよ?

(ああ、それぐらい分かってんだよ、だからさっさと変わりやがれ)

はいはい、まったく……我儂な人ですねえ。

そう思いながらも私は彼に変わりました。
任せましたよ?大助。

>狂識 Side end<

>大助 Side<

「さア!スクラップの時間だぜエ!」

「何?人が変わった?」

そんなことはどうだっていいんだよ。

それよりもなア、

「俺の仲間に手エ出しやがって・・・ただじゃすませねエぞ！この三下がア！」

俺が一番嫌いなモノはなア、自分が守ると決めた奴を傷つけられることなんだよオ！

「くっ！？」

能力のベクトル変換を使って殴りかかる。

俺は基本ベクトル変換しか使わねエからな。まア避けられる事ぐらい分かってたがなア。

ーランブルデトネーターー

爆発が襲う。

反射をデフォにしている俺にはまったく効果が無いがなア。

「何故効かない！」

「そんな事俺が教えるとも思ってたのかア？なら随分幸せな頭してんだなアオイ」

「くっ・・・」

「今ならそのケースを置いて行くだけで助かるんだぜエ？さっさと置いて行けよ」

「断る！私はコレを持って帰らなければならんのでな」

「そうか・・・だがよオどんなに頑張っても・・・」

そう言いながら俺は能力を使って風で翼を作り相手に向かう。

「ワリイが此処から先は一方通行だ！大人しく尻尾巻きつつ泣いて

無様に元の居場所に帰還しやがれエ！」

そう言いながら俺は殴りつけた。
勿論だがケースは無事だ。

「逃げたか……」

どうやらセインがいたらしいなア。
ディープダイバーで逃げられちゃった。

(別に構わないでしょう？今はギンガを)

分かってるってエの。

そんなにうるさく言うんじゃないよ。

(では向かいますか、早く向かわないとスバルが来てしまいます)

あア。了解だ。

(しかし……あまりにも無様ですな私達も……やはり最強は無理ですかね？)

確かにな。だがなア、

「たしかにこのざまじゃ最強は無理かもしれないねエが、それでも俺は本体が挫けない限り最強を名乗り続けるって決めてんだよ、クソツタレが」

(ますます一方通行ですな)

うるせエよ。

(まあだからこそ・・・なんでしようけどね)

・・・俺はアもう寝る。今日は起こすじゃねエぞ？

(はいはい、まったく・・・素直じゃないですね)

狂識の言葉を見せしめ、俺は先に向かった。

こっちは守ったんだ、そっちも守らねエと許さねエぞ？

>大助 Side end<

S t S 編 第17話（後書き）

後書きコーナー！！！！

龍「いつもよりテンションが高いな」

だつてついにゲストが来るんだぜ！？

龍「そうか、なら早く感謝コーナーを終わらせるか」

感謝しろよ！？

龍「勿論だ」

それでは、R a i N様、雨季様、J a m様、ユタ様、夜神様、メガネ様、けーくん様、感想ありがとうございます！！

龍「それでは感謝コーナーが済んだのでゲストの登場だ」

R a i N様の魔法先生ネギまF o r c e（護る者と支える者）から
トーマ・ミグラシオン君とリリイ・シュトロゼツクちゃん（合つて
るかな（汗））です！！

ト「どうも」

リ「来たよ」

まさか呼べるとはねえ〜。

龍「まったくだな、こんな駄文に態々来てくれて感謝する」

この子酷い!?

ト「あまり作者を苛めてやるなよ龍斗」

龍「苛めではないな虐めだ」

リ「あれ?酷くなつてない?」

龍「気のせいだ」

本当にこの子酷いorz。

ト「とりあえずは・・・何故呼ばれたんだ?」

龍「そちらの作者が送ってくれた」

ト「後で作者をめるか」

リ「やつちやえ〜」

R a i N様逃げて!!

龍ト「逃げるなら・・・いや、もう遅いか」

リ「楽しそうだねトーマ」

ト「ああ、やはり友といえるのは楽しいからな」

龍「同感だな、やつぱり友達っていうのは遠慮したら嘘だな、遠慮しないで触れ合えたら最高だろ?」

うわあ〜すごく厨二です・・・。

龍「トーマ手伝え、少しお灸を据える」

ト「耐久弾幕回避ゲームだな?」

リ「やつちやえ〜!」

逃げるー!!

龍「いくぞー！」

ト「ああ」

11 Silver Stars “ Hundred millio
n ” ー

ー 禁忌「フォーオブアカインド」 + 魔砲「ファイナルスパーク」
ー

ちよつ！？洒落になんない！？

龍「まだだ！」

ト「そうか？もういいんじゃないか？（というよりもやりすぎな気が
が・・・まあいいか」
リ「すごいねえ」

11 Divide Zeror ー

ー 禁忌「フォーオブアカインド」 + Blut de Schw
ester ー

ぎゃあああああー！！

ト「やりすぎだろ・・・」

龍「スッキリした」

ガフツ・・・。

龍「ところで」

トリ「「どうしたの()?」「」

龍「歌をまた聴きたいんだがいいか？」

リ「うん！いいよ」

)

龍「本当にいい歌声だな」

リ「ありがとう」

ト「そろそろ戻らないとな」

龍「ならまたな」

ト「ああ、またな」

リ「またね」

そ、それでは・・・また次回・・・ガクッ。

S t S 編 第18話(前書き)

今回も後書きにゲストを呼んでいます！

今回はJ a m様のところから呼んでいます！

本編も後書きもグダグダですがどうぞ！

J a m様、何か間違いがありましたら言ってください。
直しますので。

S t S 編 第18話

「どうやら地上本部は大丈夫みたいだな。
マテリアルズも狂識も頑張ってくれているからな。
なら、

「後は俺達を守り抜けばいいわけだな」

『ええ、頑張りますよ』

「俺はどうすればいいのかな？」

「七夜はガジェットっていう機械を潰していてくれ」

「人を解体^{バラ}す事ができないのは面白くないが仕方ないか」

「すぐ諦めてくれたか。」

『もうそろそろ着きますよ！』

「ああ、なら任せたぞ？七夜」

「ああ、まあ役割は果たすさ」

「そう言いながら俺たちは目的地に到着した。」

「ヴィヴィオ！」

「パパ！」

「よかった！まだ無事だったらしい。」

「おや？その歳でもう親か・・・異性に興味を持つのはいいが子供を持つには早すぎないかな？」

「何を勘違いしているか分らんがこの子は義理の子供だ、でも大切なのは変わらない」

「そうか、ならきちんとその手を握っているといい、じゃないと俺が殺してしまうよ?」

「そんなことはさせないさ」

そのための力だからな。

「さて、客が来たようだ、なんなら俺が御持て成しをしようか?」

「いや、俺が相手するさ」

さあ鬼が出るか蛇が出るか。

まあそれでも負けは許されないけどな。

「で?あんた達の目的はこの子でいいのかな?」

「ああ、機械共は俺が潰した、後はそいつを持って帰るだけだ」

「で?あんたは誰だ?戦闘機人の子達を殺したのか?」

「いや、殺す価値の無い輩を殺してどうする、ただ四肢を潰しただけだ」

そうか、無事か。

ならまだ大丈夫だな。

「七夜、いやだろうがあの子達を守ってくれないか?」

「殺人鬼の俺に頼むか?」

「ああ、今はお前を信じるさ」

「・・・いいだろう、だが約束は守ってくれよ?」

「勿論だ」

「ならいいさ、まったく・・・似合わない事はしたくはないんだがね」

そう言いながらも七夜はヴィヴィオを連れて四肢を潰された子達の

もとに向かった。

これで遠慮する必要がなくなった。

「さて、目的はなんだ？まあ言うてくれるとは思わないけどね」

「目的は貴様を殺す事だそうだ」

「俺を？」

「ああ、うちのリーダーは貴様を殺すことにえらく執着していてな、そしてそのためなら手段も選ばん」

「何故ヴィヴィオを狙った」

俺にだけ構えばいいはずなのに。

「何、貴様を怒らせる・・・それだけだ」

「な・・・に？」

「貴様は仲間を傷つけられる事を極端に嫌う、ならその仲間を殺せばいい、なら貴様は本気で向かってくるだろう？」

「・・・なら何故ヴィヴィオなんだ」

「それはその方が楽だからそうだ」

「そうか」

つくづく殺したくなるほどのクズの集まりだな。

ああ、もう我慢しなくていいよな？もうこの殺人衝動に・・・退魔衝動に身を任せて殺したい。

「クロス、モード「無」」

『ですが・・・あれは危険です！』

「いいから」

『・・・了解、モード「無」』

「固有結界『無限の絶望』発動」

今回はコイツを一刻も早く殺したいから無詠唱だ。

「なんだコレは！」

俺の・・・俺自身の固有結界は朱い月があるだけ、それ以外は真っ黒な世界。

能力は剥奪。

俺よりも何かが悪くていれば全てを奪う結界。

「貴様は・・・貴様たちは許さない、殺しつくしてやる、俺の家族を傷つけるやつは一人として例外なく情けなく問答無用で殺す」

「くっ！こ、これが貴様の心象世界だと言うのか！」

「そうだ、俺でもこんなモノになってしまっただ、他のやつはどうなるんだろうな、まあどうでもいいが」

この状況が予想外だったらしく、うろたえている。

だが許しはしない。家族を傷つけようとしたコイツに遠慮なんかいない。

「さあ覚悟はできたか？」

「くっ！！ナメルナア！！」

む？どうやらただの吸血鬼ではなかったらしい。

まあただの吸血鬼とナニかが混ざった合成獣だがな。

おそらく竜だろうが。

「ククク、これでも同じ事が言えるか！」

「それは死亡フラグじゃないか？『剥奪』」

「何！？」

俺が一言言っただけでやつは元の姿に戻った。

「何をした!」

「ただ剥奪しただけだ、貴様のその竜としての姿を・・・能力をな」

「な、何?そんなものに勝てるはずが!」

「ああ、だから貴様は此処で終わりだ」

そして俺はやつが存在そのものを『剥奪』する。

そうするだけでやつは消滅し始めた。

「や、やつは・・・化物・・・でした、気を・・・つけて・・・ください」

「・・・」

「じゃあな、恨むならこの世界を恨め、俺のこの世界をな」

どうやらチップみたいなものが埋め込まれているみたいだ。

やつに筒抜けか。

なら、

「もし聞こえているなら言っとしてやる」

聞こえているだろうから言う。

「もし俺の仲間に・・・家族に手を出したら・・・固有結界じゃす

まさないぜ?生きている事を後悔させてやる」

やつは完全に消えた。

ならもう聞こえはしないだろう。

「ようやく終わったか・・・ガフッ!」

『マスター!!!』

「主!!」

「ア、アインか、大丈夫だ、何も問題はないよ」

「嘘を言わないで下さい!!どうしてこんな無茶をしたのですか!」

何故無茶をしたか?そんなもの、

「守りたいからに決まってるだろうが」

「え?」

「守りたいモノのために全力を尽くすのは悪い事じゃないだろ?だから全力を出したただけだ」

「あ、主……」

くそっ!この体が完全ならば……こんな無様な姿を見せずに済んだのになあ。

『マスター……早く休んで下さい、今はもう限界のはずです』

「ああ、なんだか眠いんだ、だから少し眠るよ、早めに起こしてくれ」

『了解……しました』

ああこんな調子じゃあ固有世界なんか使ったら……死んじまうんじゃないかねえか?

でも今は……、

「アイン」

「何ですか?主」

「少し眠るから……だから今は任せた、俺の守りたいモノを守っててくれ」

「分かりました、なのでゆっくりお休みになって下さい」

そう言いながらアインが頭を撫でてくる。
そんな事されたら・・・寝ちまうじゃねえか。
そう思いながらも襲い掛かる睡魔に負けて眠ってしまった。

「龍斗!!」

眠る直前に泣きながらこちらに向かってくる姉さんの姿が見えた気がした。

ちくしょう。また・・・大切な人を泣かしちゃった。

泣かさないと誓ったのになあ。

これ以上は考えることなく意識が沈んだ。

S t S 編 第18話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「俺死にかけなんだが？」

死なないから安心して！

龍「ならいい、ゲストが待っているんだからさっさと感謝コーナーいくぞ」

おう！Rain様、メガネ様、けーくん様、夜神様、雨季様、感想ありがとうございます！！

龍「さて、今回のゲストは」

魔法少女リリカルなのは〜魔法少女と異能少年が交差したとき〜から上条 当麻君です！後デバイスのミサカさんです！

当「どうも」

ミ「私はオマケですか？とミサカは不満げに言ってみます」

龍「よろしくな」

当「おうー！」

ミ「はい」

とじろで・・・何しよう？

龍「決めてなかったのか？」

うん！

当「威張るところか？」

ミ「少なくとも威張るところではないですね」
龍「というより威張るな」

みんなしてひでえ。

ミ「そういえば」

当「どうした？」

ミ「戦いたくて来たのでは？」

当「そうだったな」

龍「そうなのか？」

嫌な予感がひしひしと・・・。

当「理不尽は俺がぶっ殺してやる！」

龍「なら一時戯れてやろう」

うわあ〜戦い始めた。

ミ「頑張ってくださいねマスター」

あれ？君はいなくていいの？

ミ「その方が面白いと作者に言われまして」

うわあ〜当麻君どんまい。

当「おい！なんでミサカがないんだよ！」

龍「どうした！まだそんなモンじゃねエだろ！」
当「ゲッ！くっ！」

行かなくていいの？

ミ「能力は使えるはずなので大丈夫かと」

ク「大変な作者を持ったものですねお互い」

なんでクロスまで！？

ク「マスターがまったく私を使わないので」

龍当「「お前ら〜！！」」

クミ「「作者に頼まれたので仕方なくですよ？」」

ちよっ！？

龍「勝負がつまらない終わり方したじゃねえか・・・」
当「まったくだ」

お、俺じゃないって！

龍当「「問答無用だ！！」」

――未元物質――

ダークマターは勘弁しぎゃあああああー！！

ク「やはり作者はこうなる運命でしたね」

ミ『こちらの作者もこうなるか楽しみですね』
当『どうした？』

ミ『いえ、うちの作者にもお灸を据えないといけないと思ひまして』

Jam様・・・逃げて！

当『もうそろそろ帰るか』

ミ『そうですね』

龍『なら次はきちんと邪魔が入らないところで戦おう』

当『ああ、楽しみにしてる』

龍『ではな』

当『ああ、またな』

ミ『また会いましょう』

で、では・・・またこんなオチかよ。

S t S 編 主人公設定（前書き）

今回は感想でみたいと言われたので主人公設定です！
後書きには勿論ゲストを呼んでます！

今回はユタ様のキャラが来ます！

何か龍斗に関しての質問があれば感想でどうぞ！

ユタ様は何か間違いがあれば言ってください！
直しますので！

S t S 編 主人公設定

30分で書いたのでかなり雑です(汗)

これはバリアジャケットの簡易バージョンです。

> i 2 3 9 8 3 — 2 7 4 3 <

森 龍斗

19歳(ただし吸血鬼になったので実質9歳で止まっているが能力で変化させている)

性別 男(の娘)(笑)

身長 165cm

体重 40kg

容姿 金髪で右目が蒼で左目が紅。髪の毛は腰まで伸びていてポニーテールにしたりただ一つに結ぶかにしている。

筋肉は無駄のないようになってる。

ぶつちやけ姫アルクと同じくらい。(胸がないだけ)

能力 能力は無印と変わらず。主に使うのは、

空想具現化、投影魔術、七夜体術、アーカードの能力、直死の魔眼、グラム・サイト妖精眼、ブレイブルーに出てくる技など沢山ある。

オリジナルは固有結界。

名前は『無限の絶望』

発動すると朱い月が出て、それ以外は真っ暗な世界が現れる。

能力は自身より少しでも何かが悪くなるモノからありとあらゆるモノを『剥奪』する事ができる。

無論存在そのものを剥奪できるので大抵の敵は負ける。

龍斗の場合は究極の^{アルティメット・ワン}で存在を上にするのでよほどのバグ相手でない

ければ勝つ事が可能。

本来は負担はあってないものだが今の龍斗は弱っているので使うと倒れてしまう。

他には自分に他の人格を上書きする事によってまったくの別人として戦う事も可能。

それによって相手にリズムを悟られないように使う。

ただし使用しすぎると完全に塗り潰される危険性があるため、分身に使用している。

性格 基本他者には無関心だったりする。

しかし一度心を開くと絶対に守ってみせる！となる。（いわゆるクーデレ？）ただしやはり根は甘いのでなんだかんだで優しくしたりする。

過去にあった出来事のせいで仲間もしくは家族を失うのを極端に恐れる。

キレると一方通行みたいな口調になる。

姉には基本敬語だがたまに敬語じゃなくなったりもする。

デバイスはインテリジェントデバイスのブラッドイクロスとユニゾンデバイスのアインの2人。

アインからは主、クロスからはマスターと呼ばれている。

StSではルーテシアに懐かれ、ヴィヴィオにパパ、エリオとキャロにはお兄ちゃんと呼ばれている。（案外嬉しそうなのは内緒である）

S t S 編 主人公設定（後書き）

後書きコーナー！！

龍「では悪いがさつそく感謝コーナーだ」

リオン・マグナス様、メガネ様、Jam様、Rain様、雨季様、Hate・revolve様、けーくん様、感想ありがとうございます！！
ます！！

龍「本当にありがとう」

では今回のゲストを呼ぼうと思います！！

龍「今回は誰なんだ？」

今回は魔法少女リリカルなのは〜大切な人のために〜からレン君とそのデバイス、クラウ・ソラスが来てくれました！！

レ「作者に言われて来た」

クラ『どうも』

さつそくだがここでこれに挑戦してもらいたい！

龍斗もな！

龍「俺もか」

レ「何するんだ？」

クラ『どうやらあれのようですね』

龍レ「「ダーツ？」」

そう！今回は何が出るか分からないダーツです！

ちなみに拒否権をなくすためのものはそちらの作者様がくれました

ww。

レ「後で少し話すか（肉体言語で）」

龍「さつさと終わらせようか」

レ「そうだな」

ではスタート！！

グルグル。

龍「今だ！」

サクッ！

クルクル〜ピタッ！

出ました！何とクラウド・ソラス・・・クラウンの命令一つに絶対遵守です！！

レ「え？」

クラ『やりました！』

いや〜他には女装とか女の格好をするとか異性の格好をするとかありましたがね〜。

龍「全部一緒じゃねえか！！」

レ「よし帰ろう、今すぐ帰ろう」

クラ『では命令を出させて頂きます！』

どうぞ!!

クラ『勿論マスターと龍斗さんに女装してもらいます!!』

レ龍「「やっぱりな!!」」

龍「予想はしてたぞ!もうその選択肢しかないもんな!?

レ「あれか?そんなに俺達を女装させて楽しいか!」

クラ『ではさっそく!』

龍レ「「無視か!?!」」

残念!君達は逃げる事ができない!

龍「くそっ!また女装か・・・」

レ「大変そうだなそっちも・・・」

龍「レン・・・」

レ「龍斗・・・」

ガシッ!

あっ、友情が出来てる。

クラ『これを着てほしいです』

これ(龍斗にはメルブラのシオンの服装、レンにはどこぞの姫が着ていそうなドレス)

龍「くう・・・スカートが短すぎるだろ!?!?!」モジモジ
レ「確かに女顔だけど女装は嫌だって言っただろ!?!?!」

クラ『(ああ、恥ずかしそうにしているマスター・・・最高に可愛いです！龍斗さんもかなり際どいですね・・・これは永久保存版です！2人とも)』

龍「くう・・・もう気がすんだらろ!？」

レ「もう着替えてもいいだら!？」

クラ『いいえ！まだ着てほしいものが沢山あります！次はこれです！』

龍レ「まだあるのかよ!」「」

あゝ、これ以上は2人のためにもお見せできません・・・まあ写真はクラウ・ソラスさんが大量に撮っているのでそちらに頼んで下さい！

龍レ「「ようやく終わった・・・」」

クラ『これで満足です』(ツヤツヤ

デバイスなのにすごくツヤツヤしてる!?)

レ「もう疲れたから帰る・・・」

龍「ああ、次はゆっくりできるといいな」

レ「本当に・・・」

クラ『次も楽しみです』

龍レ「「次は女装なんかしねえよ!？」」

クラ『チツ!』

龍「こいつ・・・舌打ちしやがった!？」

レ「もう気にしないでおこつ」

じゃあね〜。

レ「ちよっ!?!?穴に落とすなああああああ(ドップラー効果)」

では!次回は本編更新です。

龍「次もなるべく急がせるので気長に待っていてくれ」

よかった・・・なんともないや。

龍「ではな」(月落し)

ちよっ!?!?ぎゃあああああ。

S t S 編 第19話(前書き)

今回はまったくなのはと関係ない気が・・・(汗)

今回はもしかしたら今まで以上に駄文です！

それでもよければどうぞ！

コラボはけーくん様です！

訂正があれば感想もしくはメッセでどうぞ！

S t S 編 第19話

固有結界を使つて意識をなくして数日。

まだ俺はこの暗い空間から抜け出す事ができないでいる。

「ここはどこだ？一応朱い月が見えるから俺の心象世界なんだろうが・・・」

ただ真つ黒なだけの空間。

そこにいつまでもいたら時間感覚なんて感じなくなつちまう。

さて・・・どうやったら出る事が出来るんだ？

「それは簡単だよ？」

「誰だ！」

俺が声の聞こえた方に顔を向けるとそこには、

「やだな～忘れちゃったのかな～？結構世話してあげたはずなんだけどな～」

一人の女が立っていた。

といつても見た目は14歳くらいの女の子にしか見えないが。

「本当に誰だ？」

「酷っ！？本当に忘れたの！？一応何度か会ってるはずなんだけどな～、まだ会つてなかつたっけ？」

「少なくとも俺の記憶には残っていない」

そう言つと女の子は納得したように、

「そうかそうか！まだ会ってなかったのか！・・・ならまずは自己紹介からだね、僕はセラだよ」
「セラ？」

どこかで聞いた事があるようなないような・・・。

「聞き覚えはないはずだよ？だって記憶操作されてるっばいし」
「何？」

「っていつよりこのままじゃいつまでも話が進まないから先に用件を言うね？ずばり！身体が弱っている理由だよ」

「は？それは俺が人間の血をまったく吸ってなかったからじゃないのか？」

そうだと思ってたんだが？

「違うよ、君は今死者の蘇生のデメリットが続いているからなんだ」
「デメリット？」

「そうだよ、投影魔術だけじゃやっぱり無理だったからね、代わりに君の心臓を貰ってたんだ」

「なん・・・だと」

それじゃあ俺は今まで心臓なしで生きてきたのか？

「まさかここまで持つとは思わなかったらしいよ？だから神達は興味を持ってね、なら心臓を戻したらもつとすごいものを見るんじゃないかな？と思ったさそうだよ」

「すぐくム力つく理由だな」

「まあ僕も納得はしてないよ、娯楽のために人を使うのは嫌いだし、だからちよつと此処に来て助けてみようと思ってるね」

どうやらこの子も神みたいだな。
他のクスと同じではないみたいだ。

「まあおじいちゃんが送った人間だしね、ある程度は信頼してるよ」
「おじいちゃん？」

「君をこの世界に送った神様だよ？」

「マジか・・・」

「一応聞いておくけどおじいちゃんを恨んでる？」

何を当たり前の事を。

「普通なら恨むだろうさ」

「え？」

「だが俺はあいにくと前世に未練がなかったからな、逆に今俺がいる世界にはやばいほど未練が残ってたんだ、今戻しやがったら逆に恨むぜ？」

「なんで？」

「は？」

「普通の人間は元の世界に戻れるなら大喜びして戻るって言うのに」

本当に不思議そうに聞いてくるセラ。

理由なんて、

「守りたいモノが出来たからに決まってるだろうが、前世では力がなくて守ることができなかった、言い訳に過ぎないだろうがな」

「そんな事ないよ、普通の人間なら間違いなく狂うよ」

「ああ、だから俺は狂ったように人を殺し続けていた、実際に狂っちまったんだ」

「・・・」

「でもな？この世界にきて・・・あの家族の暖かさを感じて・・・俺は守りたいと思えた！たとえこの手が真っ赤な血に染まるうとも！罪を犯そうとも！その罪全てを背負ってみんなを守り抜くと決めただ」

罪からは逃げられないし償えない。

でも背負うことはできる！たとえ偽善と言われようともな。

「うん、龍斗の心にある覚悟は見せてもらった」

「ん？」

「次はその身体でその覚悟を見せて！」

「分かった」

ここにいると守ることができない。

さっさと出て俺は守る！

「ここだと君は力の全てを使えるはずだよ」

「了解、で？相手は誰だ？」

「相手はこの子がしてくれるよ」

そう言いながらセラは俺の相手を出した。

その相手は、

「やっぱりか」

「うん、分かってた？」

「それは当然だろ？今の今までの会話で出てくる相手は一人だ」

「うん、過去の自分」

そう、今俺の前にいるのは前世の姿の俺だ。

おそらく過去との決別、もしくはその過去を越えるという意味なん

だろうな。

「いいぜ、俺は過去を否定したりはしない！過去があるからこそ今があり未来があるんだ！だから俺はその過去を糧とし先に進む！」

そう言いながら俺は一振りの剣を出す。

相手もそれに合わせて剣を出してきた。

「いくぜ過去よ、俺の罪は今の俺が背負う、だから眠れ」

「・・・」

こうして俺と過去の俺との勝負は始まった。

「・・・」

「はぁ！！」

2人同時に剣を振るう。

「・・・」

そうしているとやつから仕掛けてきた。

——第七聖典——

「くっ！！」

「・・・」

まだ何かしようとしている！？

もうさせるか！

【「こ」「では」「使えない」
「!?!」

言葉を使って能力・・・正しくは剣による攻撃しかできなくした。

「無粋な技を使おうとするなよ・・・今はこの剣で全てを終わらせようぜ」

「・・・」

そう言つとやつはもう一度しっかりと剣を握り直した。

(縛ってられるのは5分だけ・・・その間に決着をつける!)

「!!!」

「くっ!」

奴の攻撃が重い・・・何かしていると思つた方がいいな。
だが何をした？

「はあ!!!!」

「・・・」

何度か攻撃をしていると違和感を覚えた。

「まさか!」

こいつ・・・最初から能力を!

「仕方ないか・・・」

俺は油断しすぎたな・・・やはり悪い癖だな。

「強制解除」

「？」

言葉による縛りをなくす。

「>体は絶望で出来ている・・・血潮は無で心は闇、幾たびの戦場を越えて不勝・・・ただ一つの希望もなく、ただ一つの勝利もなし」

呪文を詠唱する。

「担い手は常に一人、虚無の世界で絶望を歌う・・・故に我が生涯に意味は要らず、この体はきつと無限の絶望で出来ていた」

『無限の絶望』

「!?!」

「さあ来い、過去の俺、ここにあるのはただの絶望だ、たったそれだけだ！恐れずしてかかって来い！」

俺は過去を背負うために・・・守りたいモノのために眼前の敵に向かって進む。

「これは・・・かなり悲しい世界だね・・・無限の絶望か、本当に神って何もできないんだね」

そうセラが俺達には聞こえない声で言っていた。

「『剥奪』!」

「!?!」

相手の腕を『剥奪』で奪う。

だが本来は全てを奪うつもりで攻撃した・・・やはり同じか。どうやら同じレベルの存在には効きが甘いな。

「・・・」

「何も喋らないか・・・」

まあ期待した訳じゃないがな。

「!?!」

「何!?!」

まだこんな力があつたのか!?!

腕を斬り飛ばされてしまった。

ここでの死は体の死だからな。

「負ける訳にはいかないんだ!?! 守るためにも!?! お前を休ませるためにも!?! 俺は負けない!?!」

「あれは!?!」

俺が負けたくない・・・負けなれないと思い、なのは達の顔を思い浮かべた瞬間、この『無限の絶望』に光が射した。

「これは・・・」

「まさか・・・固有境界!?!? でも・・・なんで!?!?」

固有境界?

何か分からないが頭に呪文が浮かぶ・・・。

「>体は希望と絶望でできている、血潮は光で心は虚無・・・幾たびの戦場を越えても不変、ただ一度の勝利もなく、ただ一度の敗北もなし、担い手は常に希望と絶望を抱く、故に我が生涯に意味を見つける・・・この体はきつと、希望と絶望で出来ていたく」

『絶望の中の希望の世界』

固有境界・・・どうやら固有結界と世界の間らしいな。
能力は・・・は？

「無限の絶望の強化版かよ・・・」

相手がどんな存在だろうと『剥奪』する。
もしくは『付与』する事ができると。

「さあ終わらせよう、長い長い過去との戦いを・・・しっかりと背負うからお前は眠れ」

相手の能力全てを『剥奪』する。
後は、

「俺の中で眠らせる・・・じゃあな」

俺にやつを『付与』する。

同じ存在だからこそできる技だ。

「あり・・・がと・・・う」

俺に取り込まれるときにやつがそう言った気がした。

「ふつ、まさか最初で最後の言葉が感謝か・・・まあ後は俺が背負うからゆっくり休め」

「終わったね」

「ああ」

「それじゃあ目を覚まさせるよ？」

「頼む」

セラは苦笑しながら言った。

「起きたら気をつけてね？まあ自業自得だけどさ」

「ああ、怒られるのは分かっているさ、それくらい甘んじて受けるさ」

「そう？ならいいんだ、けど・・・無理はしないでね？人には背負える限界があるんだから、皆を頼るんだよ？」

「勿論だ、俺一人じゃ出来ない事でも皆に頼れば可能かもしれないからな」

そう言つと一応納得できたのか、

「まあ一応それでいいよ・・・（まあそれでも無茶しちゃうんだろうけどね）」

「じゃあな、また会えたら会おう」

「うん、じゃあね」

こうして俺は自分の心象世界から抜け出した。

「僕が君に会ったのはS.T.S.が終わってすぐなんだよね・・・君はそこで死んじゃったんだけど・・・今回は大丈夫だよな？」

そんな事をセラは言っていたが俺には聞こえなかった。

S t S 編 第19話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回も感謝コーナーを先に終わらせるぞ」

ユタ様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「今回の話はまったく納得がいかないだろうが、我慢？してくれ」

酷い・・・まあ確かだけども。

龍「さて、ゲストだが・・・」

今回は魔法少女リリカルなのは〜チートな主人公の頑張り物語〜から石神 剣介君です！

剣「ああ、どうも」

龍「今回はよろしく」

剣「ああ」

で？何する？誰か呼ぶ？

龍「どうやって決めるんだ？」

コソ（くぐぐ）

剣「くぐじ？」

何が出るかな？そおおい！

龍「む？なんだ、姉さんか」

彩「なんだかは酷くないかなあ？」

劍「急に出てきたな」

彩「どうも〜龍斗の姉です！」

劍「石神 劍介です」

彩「よし！勝負だ！！」

劍「は？」

うわあ〜最近龍斗に構ってもらってないからって……。

彩「ギョっとして〜」

ちよっ！？

彩「ドカーン！」

ぎゃあああああ！！

劍「大丈夫なのか？アレ」

龍「大丈夫だ、問題ない」

え、エルシャダイ？ガフツ。

彩「さあ〜しよ〜ぶ！」

劍「しないといけないのか？」

龍「諦める・・・軽い戦闘狂なんだよ」

劍「はあ〜」

あっバトルが始まった。

ク『毎回バトルか作者がぶちのめされるかですからね』

酷くね？それ。

龍「事実だろ？」

彩「すごいすごい！ならこれもいけるよね！」
剣「げっ！！」

――禁忌「レーヴァテイン」――

やばくね？

龍「ああ、完全にスイッチ入った、狂気に飲まれたフラン状態だな、最悪」

ク『その時は止めますか？』

龍「ああ、そうしないと両方に被害があるしな」

あっ！

龍「どうした？」

――QED「495年の波紋」――

龍「あっ」

剣「ぐっ！！」

彩「ハハハ！モットタノシモウヨ！！」

龍「はい、終了」

ペシッ！

彩「ううゝまだ燃えたりない」

剣「勘弁してくれ・・・もう疲れた」

龍「また今度戦つてあげますから」

彩「ホント！？お姉ちゃんとの約束だよ！」

龍「はい」

何とか収まつたか・・・。

剣「何なんだ？あれ」

ク「ただのじゃれ合いですよ」

剣「はあく疲れた、もう帰るか」

龍「む？帰るか、ならコレを土産に持つて帰るといい、クッキーですまないが」

剣「ありがとう、戻つたら食べる」

おっ？今回はお互いの作者が無事で終わりそうだ。

ク「それはフラグですよ？」

あっ！？

龍「そういう事だ、じゃあな」

剣「俺もするのか？まあいいか」

――王の財宝――

ぎゃあああああ！！

ク『これにて終了でございます』

龍「じゃあな、またそちらにお邪魔したいな」

剣「ああ、待ってるさ」

ク『ではさようなら！』

S t S 編 第20話（前書き）

もうすぐでクライマックス！なのに文はいつも通りの駄文！
鬱だ・・・死のうと思ったのは数知れず！

そんなこんなで今回もお送りします！

今回のゲストはメガネ様のところのキャラです！

違和感があれば言うてください！

S t S 編 第20話

心象世界から出てきた俺を待っていたのは阿修羅すら凌駕しそうな人達でした。

いや、覚悟はしてたけどこれは予想外だ。

「で？倒れたつちゅー事はまた無理したんやな？」（ニコッ

今はその笑顔が怖いです。

「なんで無理したんや？」

「・・・みんなが殺されると、そう思うとついな・・・すまない」

「はあ、まあ心配してくれとるんやから嬉しいんやけど・・・もう少し頼ってくれへんの？」

やはりそうなるよな・・・。

「ああ、次からは頼りにするさ、共に頑張ってくれ」

「そういう事らしいで？」

「むっ」

そうはやてが言つとみんなが出てきた。

「もし誤魔化してたら怒ってたよ？」

「なのは・・・」

「龍斗は背負いすぎだよ・・・もう少し私達を頼つてよ・・・」

「フェイト・・・」

やはり相当心配させていたみたいだな。

本当に嬉しいかぎりだ、こんなやつを大切に・・・心配してくれて。

「ああ、さっき言った通りこれから頼りにするさ」

「『約束だま(や)』」

「了解した」

『よかったですねマスター』

「ああ、本当にいいやつらだよ」

こんな事があり、その後六課や地上本部がどうなったのかを聞いた。どうやら相手はヴィヴィオの代わりを用意できたらしい。

ここはやはりイレギュラーがあつたみたいだな。

しかし俺は気に入らない部分が出てきた。

アイツらが用意したみたいだが、その用意されたやつは生きていないらしい。

おそらく無理やり合わせられたせいで死んだのだろう。

「気に食わないな・・・」

『ええ、あのような外道潰してやりましょう！』

「そうだな」

「で？どないするんや？」

「多分だが俺相手に宣戦布告してくるだろうからそれに乗るさ」

「大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だ、俺は守りたいモノのためにも負ける訳にはいかないからな」

あいつらの目的が俺の予想通りならば戦争がしたいんだろうな。

なら俺が零号を開放して戦争モドキをさせてやる・・・だからかかって来い！

「そういえば通信があつたんや」

「誰から？」

「その相手からや、今は寝てるって言うたらこの映像を見せてくれて言われてなあ」

「分かった、その映像は俺一人で見る」

「龍斗君？」（ニコリ）

「だ、大丈夫だ、内容は伝える、今は一人で情報を整理したいんだ」「ならいいけど・・・黙って行動したらスターライトブレイカーなの」

やばい・・・リアル死兆星が見えそつだ。

「じゃあ見終わったら呼んでや？」

「了解した」

そしてなのは達が外に出たのを確認し、結界を張ってから見ることにした。

『ここまで嚴重にする必要があつたのですか？』

「あいつらは手段を選ばない・・・ならグロい部分もあるだろう、なら見せないほうがいいと思つてな」

『そつですか・・・では見ますか？』

「ああ、映像を出してくれ」

『了解です』

「アインもきつかったら言ってくれよ？」

さつきからずっと黙っていたからな。

「大丈夫です・・・それより主は大丈夫なのですか？」

「ああ、大丈夫だ、だから今これを見るんだ」

「なら私も見ます、ある程度の覚悟は昔からありますので」

「そうか、でも無理はするなよ?」

「主には言われたくないですね」

「ごもつともで」

そう話しているうちに映像が始まった。

<やあやあ龍斗君だったかな?私は皆から少佐と呼ばれているんだがね?それ以外で呼ばれた事がないから君も少佐と呼んでくれるとありがたい>

いきなり画面に映った男はまさしくヘルシングの少佐の姿をしていた。

<君はこの姿をみて驚くだろう、何故この姿になったのだろうか、と>

確かにそうだ、転生したのならばもっと色々な力や姿があっただろうに。

<私がこの姿になった理由は簡単だ、少佐に共感したからに過ぎないのだよ>

つまりは戦争がしたくてたまらないと。

<そして私を転生させてくれた神が言ったんだ、アーカード以上の化物をどこぞやの神が転生させたと>

まああれは予想外だったがな。

<その時私はすごく喜んだ、まさか本当に少佐と同じ行動をとれる

んだ、喜ぶに決まっている！>

コイツも狂っているのか。

<だから私は頼んだ、少佐の部隊と体をよこせと、そして私がその化物を打倒してみせると>

確かにアーカードは一度少佐に負けている・・・。

<だが私が来たのは中途半端な時期だった、だから準備をした！君を打倒するためにだけこの10年をつぎ込んだ！ああすごく楽しかった！心躍る10年間だったよ>

だからあれだけおとなしかったのか。

本来なら一つの星くらいなら滅ぼせそうだからな。

<今回は招待をしようと思ってね「ぎゃあああ、た、助けてくれ！死にたくない！」うるさい、少し黙っててくれるかい？「こ、この人でなしが！何故こんな事を！？」もう撃つてしまえ、後餌だ「GYAAAAA」「や、やめ！？」ふう続きだが・・・>

やはりあちらには何人かが捕らえられているようだな・・・助けないとな。

<やれやれ、漸く静かになったか、では招待する場所はゆりかご！そこに招待しよう！時間も場所も君なら分かるだろう？人数はそうだな・・・君を除いて12人だ！もしくはナンバーズ・・・スカリエッティと手でも組むといい>

おそらく場所も時間も原作に合わせるのだろう・・・それまでに戦

力を整えないとな。

<さあ！祭りが・・・戦争が始まる！私達の戦力はアーカードが零号を開放した時に合わせて572名で行こう！楽しみにしている、せいぜいお互いに楽しもうじゃないか！「GYAAAAA」 「ぎゃあああああ」 またつるさくなくなつたな・・・ドク！こいつらを殺せ「はっ！」ではまた会おう>

ドンッ！ドンッ！ドンッ！

銃の音と何かを食べる音が聞こえ、一瞬だけその映像が流れ、消えた。

『マスター』

「主・・・」

ああ、分かっているさ、やつらを許せないのはお前達だけじゃないさ。

「あいつらは俺が殺す・・・他の誰でもない、俺が！」

『マスター、はやてさん達にはどう話すのですか？』

「日程と場所、あと誰を連れて行くのか・・・スカリエッティのほうも俺が何とかすると伝えようか」

「主・・・私も行きますよ？」

「ああ、勿論だ、頼りにしているぞ？」（ニコッ

「は、はい／＼／」

後は説明をしていかないとな・・・スカリエッティにもな。

「少佐・・・やつは戦争に執着しすぎているからな・・・ここで止

めないと意味がない、今回はここが正念場だからな、体調も元に戻った・・・これからが本当の本気だ」

『マスター・・・元に戻ったのですか？』

「ああ、どうやら心臓がなくなってたらしい」

『気づきましたようよ・・・』

「主・・・」

うわぁ〜2人ですごく白い目で見て来るんだが・・・。

「相当強力な認識障害で誤魔化されてたんだ、仕方ないだろ？機械さえ誤魔化すんだからな」

『・・・それなら仕方ですね、これからは気をつけてくださいよ？』

「ああ、分かってるぞ」

でもどうするか・・・俺を除いて12人か・・・誰を連れて行くべきか・・・。

「そこは要相談だな」

『ですね』

「ええ、ですが少なくとも姉は来そうですね」

「だな・・・まあなのはとフェイトとはやて・・・それに守護騎士達も来るんだろうさ」

『寧ろフォワード陣も来るでしょうね』

ならもう殆ど決まってるじゃないか。

「なら説明後はひたすら特訓だな、今まで以上のキツさで行かないとな」

『そうですね』

さあ今日はもう寝よう。

明日から当日に備えてやる事は沢山あるんだからな。

まあその後なのは達が突撃してきて寝たのはその2時間後だがな。

S t S 編 第20話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「まったく・・・いつも通りの駄文？いつも以上の間違いだろ？」

ぐふっ！？す、ストレートですね！？

龍「そんなことはどうでもいい、まずは感謝コーナーだ」

ユタ様、雨季様、Rain様、リオン・マグナス様、夜神様、けいくん様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「さて・・・今回もゲストが来ると聞いたが？」

もうそろそろ来るんじゃないかな？

？「きたよー！！」

龍「うお！？新手の奇襲か！？」

おおー来たね。なら紹介だ！メガネ様の作品、魔法少女リリカルなのはがある転生者の新たな世界へのコダイ君のデバイス！レイ・モモ・ブラッドちゃんです！

レ「レイ・モモ・ブラッドです！」

龍「やあ、よく来たな」（なでなで

レ「うにゅ〜」

あれ？そういえばなんで来たのかな？

レ「?わすれちゃった!」

うわぁ〜・・・可愛いから許す!

龍「おいおい」

?「いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい」(ドカーン
龍「うおっ!?新手の奇襲か!?!」

本日二回目だね。

?「くっ・・・ここは?」

おお?コダイ君じゃないか!

コ「ん?そうか、レイを連れ戻しにきたんだった」

龍「コダイか」(なでなで

コ「ん?龍斗か」

レ「ん〜」

いつまでなでてるんだ?

龍「中々クセになるんでな」

コ「そうなのか?」

龍「まあ人それぞれだけどな」

で?どつするのかな?

コ「とりあえずレイは連れて帰る・・・そうだな、そちらの作者に

相談があつた」

え？何？内容によっては協力するよ？

コ「拒否権はない」(ノートを出す

ハイ！了解シマシタ！

コ「頼みたいことは・・・ゴニョゴニョ」

ふむふむ・・・難しいですね。

コ「女装はオシャレだ」

龍斗は否定してますけどね。

コ「ノート(ボソツ」

！？

コ「コウノトリ(ボソツ」

止めて！？これ以上黒歴史を掘り起こさないで！？

コ「なら頑張れ」(すごい笑顔

精一杯努力させていただきます・・・。

龍「で？レイは本当に用件を忘れたのか？」

レ「？うん！わすれちゃった！でもリュウト君にあいにきたただけだ

よ?」

龍「そうか・・・(そういえばかなりの天然だったな」

もうそろそろお開きです。

コ「もうか」

龍「まあ次はそちらにお邪魔できたらいいな」

コ「ああ、そうだな(その時は女装させてみるべきか?」

龍「ん?(ゾクッ」

レ「またあおうねえ〜!!」

龍「ああ、またな」

あっ穴があいた。

コ「またこれか・・・作者・・・覚えてる」(穴に落ちた
レ「ブルブル」

あれ?レイちゃんが送られてない・・・龍斗!転移してあげて!

龍「了解した、ではな」(なでなで

レ「ん〜またね!」

ふう〜終わった・・・。

龍「お前もな」

え!?

龍「じゃあな」(マスタースパーク

で、では！また次回・・・ぎゃああああああああ！

S t S 編 第21話（前書き）

もうゴールしてもいいよね？（本文より後書きに力を入れようとして両方に力がいかなかった愚か者の諦め）

今回もかなりの駄文の上に短いです。

それでもよければどうぞ！！

今回の後書きには雨季様の作品のキャラをお呼びしています！

何か訂正があれば言ってください！

S t S 編 第21話

あれから少したった。

ああ？アレからってどういうことかって？

要は俺が目覚まして、説教くらった日からって事だ。

誰に説明しているんだろうか……。

「さて……そろそろ着くか？」

『ええ、もうすぐでスカリエッティのアジト（笑）に着きます』

「お前あいつ等に何か恨みでもあるのか？」

『いいえ？別に改造されそうになったとかありませんでしたよ？ええ、ありませんでしたとも』

あゝだからあの時クロスがいなかったのか。

まあマッドだしな。

いいやつではあるんだが……。

「さて、到着だ」

『はい、では入りますか？』

「その前にインターフォン押さない」と

ピンポン。

<はい>

「龍斗だ、今日は用事があった来た」

<了解です、しばらくお待ちください、ドクターをたたき起こしにいくので>

寝てたのか。

「ああ、じゃあ入ってていいか？」

<別に構いませんよ、妹達が喜びます>

じゃあ許可を貰ったから入るか。

そう思ったのと中から悲鳴が聞こえたのは同時である。

「おっ！お兄さん！お久しぶりっス！」

「おお、元気そうだなによりだ」

ウエンディはやはり元気だな。

「はあああああ！！」

「む？」

これはノーヴェか。

「もう少し頑張れ」

——崩拳——

かなり加減した崩拳を打ち込む。

「ぐうづづづづー！」

「やめろ！ノーヴェ！」

「別に構わないさ、こついうのも楽しいからな」

たまにだったらな。

「で？あの悲鳴は？」

「ドクターですよ？」

「デスヨネー」

まあ男の声の時点で分かってたがな。

「やあ、龍斗、今日はどのような用件かな？」

「ああ、最後の大隊は知っているな？」

「ああ、あの狂ってるやつ達かい？私も狂っているのは自覚しているがあれは別格だね」

うん、スカリエッティがボコボコでもスルーだよな。

「で？どうすればいいんだい？此処に来たという事は何か用事があるんだらう？」

「ああ、今回の事件・・・協力してくれないか？」

「君の頼みだ、受けよう」

「感謝する」

「友の頼みだ、受けない訳にはいかないよ、まあクアットロが納得するかどうかだね」

まあ・・・、

「今シルバーカーテンで隠れてるから聞かせ」

ギクッ！！

そんな擬音が聞こえてきそうな反応が・・・。

「ば、ばれちゃいましたか？」

そう言いながらクアットロが出てきた。

「で？いいのかい？」

「ええ、その方が面白そうですし……それにこの方には逆らえませんから」

うん、何故か逆らわないんだよね。

『確実にアーカードの能力全開で鬼ごっこをしたからでしょうね・
・他にはスペカを大量に使ったり、後は精神的に追い詰め続けましたしね』

「あれでか？」

「ひい!？」

うわあ、すごく怖がられてるな。
あれぐらいで怖がるなよ……。

「さあ、なら準備をしようか、今回は大変そうだけどね、楽しそう
だ」

「準備はすぐに済むさ、まあ今回は大変だからな、しっかり準備し
てくれ」

そう言うとスカリエッティはおかしそうに、

「本当に君は管理局員かい？君は寧ろ団体に属しそうにないんだが
ね」

「管理局は嫌いだよ、なのは達がいるからいるに過ぎない」

「本当に嫌いみたいだね」

「ああ、あんな正義正義って言うやつは大嫌いだ、そんなに正義になりたいなら大人しく死んでればいい、脳髄共は俺が殺すよ」

「いいのかい？」

何を言うかと思えば・・・、

「俺は当の昔に決めているさ」

「でも君は殺すことになるんだ、その覚悟はあるのかい？」

「それこそ愚問だな、殺しに躊躇いはない、それに当の昔に数百・・・いや数千以上の人を殺したさ、今更だな」

前世含めな・・・。

「では君に任せよう、その方が君のためにも私達のためにもなりそうだしね」

「じゃあ準備よろしく」

「ルーテシアには会わないのかい？」

「ああ、今日はな、またゆっくり時間がある時に会おう」

「そうかい？ならそう言っておこう」

「ああ、じゃあな」

「では当日に会おう」

そういつて俺たちは別れた。

それとナンバーズだが・・・好意的なのは分かったんだが洗浄に俺も巻き込まないでほしいな（遠い目）

『マスターですから仕方ないですよ』

「まあノーヴェにはライバル意識されてるっばいんだが」

『（あれは好意の裏返し・・・いわゆるツンデレ？ですよ・・・）

あの子も報われませんね。』

「どうかしたか？」

『マスターには後もう少しくらい好意に敏感になってもらいたいと思っただけですよ。』

「そうなのか？」

『ええ（まあ初期に比べれば大分マシになりましたが・・・まだまだですね）』

まあ今は余裕がないからな。

その後に考えるとするか。

「今日はこれで終わりか？」

『ええ、なのでゆっくりして下さい、いくら元に戻っても無理は禁物ですよ？』

「分かってるさ」

さて・・・決戦まで後一週間くらいか・・・フォワード陣を鍛えたりもしないとな。

そう考えながら六課に向かった。

その時、紫髪の女の子が少し落ち込んでいたのを気づくのは無理というものだったりする。

勿論、その後六課の人々への説明が色んな意味で面倒なものも無い。（耳を塞ぎながら）

『子供ですか・・・』

S t S 編 第21話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「適當すぎだろ・・・」

自覚してます・・・。

龍「なら直せ」

次回から本気出す！

龍「変わらんから諦める」

o r z

龍「では感謝コーナーだ」

雨季様、メガネ様、夜神様、リオン・マグナス様、Jam様、感想
ありがとうございます！！

龍「さっそくゲストを呼ぼう、時間がなくなる」

今回のゲストは！チートじゃ済まないinnネギまから一条 要君で
す！

要「来たぞ」

龍「よく来たな要」

要「ああ、森も元気そうだな」

元気だけがとりえだしね！

龍「死ぬか？」

すいませんでしたー！！

要「さて、せっかく来たんだ、少し修行してやるっ」
龍「ああ、よろしく頼む」

あゝあ、さっそくバトル始めちゃったよ……。
どう思う？

ク『いいんじゃないでしょうか、楽しそうですし』

間違いなく戦闘狂になってるよね……。

ク『気にしたら負けですよ』

そうだね〜。

要「武装・O R T」

龍「極彩と散れ」

うわあ〜白熱してるなあ〜。

ク『楽しそうで何よりです』

要「どうした？そんなもんじゃないだろう？」
龍「固有境界『絶望の中の希望の世界』」

あつ！それ使うか！？

ク『ノリノリですね』

龍「ありとあらゆるものを切断できる能力を『付与』！」
要「させると思うか？抜骨・四肢抜き！」

あつ。

ク『はずされましたね』

龍「まだまだ！」

もう終わりだ！！

龍「まだ戦えるぞ！」

要「ここまでにしておけ、また相手してやる」

龍「次こそ勝つ！」

要「ああ、楽しみにしているぞ？小僧」

ふう〜何とか止まったか・・・。

龍「一応修行してくれたお礼だ、まあクッキーだが」

何？最近クッキー作るのが流行ってるの？

龍「気紛れだ」

要「作者と食べておこう、またな森」

龍「ああ、そちらにまた行く機会があればまた修行してくれ、では

な

転送！

龍「やはり強いな・・・勝てやしない、それでこそ超えがいがあるんだがな」

まあ頑張れ。

龍「ではな、次回はおそろく2日後だ、それまで気楽に待っててくれ」

では！

S t S 編 第22話(前書き)

今回もかなり短いですが、へへ、やっぱ俺って・・・可能を不可能に・
・それでもよければどうぞ！

今回の後書きはリオン・マグナス様とのコラボです！

希望がなかったのですが・・・何かあれば言って下さ
い！

修正しますので！

ついでにアンケートもあるので読んで下さい！

S t S 編 第22話

スカリエッツィのアジトに行ってから数日。

今日が約束の日だ。

今日で全てが終わる。

「もう少しで休めるな」

『ええ、なのでしっかりお休み下さい、その前にもう少し頑張らないといけません』

「ああ、それに相手に猫がいるからな、やすやすと消えてやる訳にはいかないからな、十分に気をつけよう」

あの猫のせいでアーカードは30年もの間、その姿を現すことができなかつたからな。

『どうやら来たようですね』

「ああ」

皆には待機してもらっている・・・まあ一応だが。

「さあ始めよう、こんな喜劇にもならない劇は幕を引くべきだ」

「ああ、さあ！こちらの兵は君に言った通りの数だ！君は何人用意したのかな？」

「用意じゃねえよ、共に戦ってくれるのは10人だ」

フォワード達には六課の守護を頼んだ。

あいつらなら守りきれるだろうからな。

こちらはなのはにフェイト、はやたと姉さん。

そしてナンバーズからは4人・・・クアットロは俺といると頼れな

いのではない。

後シグナムとヴィータが来ている。

正直姉さんだけで事足りる気がしたのは気のせいだと思いたい。

「だってかなりの戦闘狂だもんなあ」

『それもテンションがあがるとフランと同じ状態ですしね』

あれは怖かった、いろんな意味で。

「何を考えているのかは分からないが……来たまえ、勝負だ」

「ああ、全ては鬼札ジョーカー、全て終わらせよう……勝負だコウル」

さあ始めよう、全てを終わらすために……そして全てを始めるために！

この勝負……負けは許されない。

「どうするの？おそろくだけどやつは嘘をついてるよ？兵の数はおそらく500から1000くらいだと思う、まあ龍斗なら大丈夫だろうけど」

「ええ、姉さんたちは兵を潰して下さい、俺はあいつと狼を潰すので」

「了解！頑張つてね？私も頑張るから」

「なのは達に言つて下さい、無理はしないように……と」

そう言つと姉さんは苦笑した。

まあ言つ事は、

「「そつちもね」……分かつてるならいいよ、お互いに頑張ろつ！」

「ええ、なので気をつけてくださいよ？」

「分かってるわよ!」

そう言い、姉さんは敵の兵が大量にいる場所に向かった。

「さあて、少佐もどきの所に行くのにあんたを倒さなきゃいけないみたいだな・・・」

「・・・」

目の前にはあの狼男がいた。

「お前はまた死にたがりか？」

「・・・」

「そうならば殺してやるからかかって来い・・・これ以上犠牲者を出す訳にはいかないんだ、大切な者を守るためにもな」

そう言いながら分身を出す。

「さあかかって来い!（お前たちにはただ二つ・・・見敵必殺と守サーチアントデストロイることだ）」

（了解）

念話で分身に指示を出す。

「・・・」

そうしているとやつが向かってきた。

「此処が貴様の終焉だ・・・クロス、モード『鬼巫女』」

なのはちゃん達も大分頑張ってるし・・・少し本気だそうか。

「ハハハ！簡単二八潰レナイデヨ？」

「ー禁弾「スターボウブレイク」ー」

一気に相手の数が減る。

「面白クナイナア・・・モット頑張ッテヨ」

本当に弱すぎるよね、うん、さっさと片付けよう。

「ー禁忌「フォーオブアカインド」ー」

4人に増えてからの、

「ー禁忌「レーヴァテイン」ー」

剣を振り下ろす！

「GYAAAAAAA」

「ウン、ヤツパリ面白クナイヤ、早く終わラセヨウ」

今は完璧にフランと同じだからねえ、羽根も生えてるし、今の体は吸血鬼だし。

でもまさか・・・、

「結界デ太陽ノ光ヲ消スナンテネ、吃驚ダヨ」

まあそのおかげでフランの状態でいられるんだけど。

「す、すごいね・・・」

「私達いらなかったんじゃあ・・・」

「言うなよ・・・」

「反論できんな」

そんな事言いながらもきちんと仕事してるよね。

まあ早く終わらせて龍斗の活躍がみたいからやる気もっと出しますか！

「行くヨ？」

「秘弾」そして誰もいなくなるのか？」

瞬く間に弾幕によって敵が殲滅されていく。

だが少しの敵は生き残った。

「ハハハ！イイヨ！モット強イノ逝クヨ？生き残ツテミテヨ！」

「――QED」495年の波紋」

さつき以上の弾幕が敵を襲った。

ついでに言うとなれの設定はライフが4分の1以下・30秒の状態の設定だからかなり厳しいはずだね。

でもやっぱり少し残ったか！。

「モウ面倒ダカラ・・・ギユツとしてドカーン！」

「フランの能力・・・ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」
を使って破壊し尽す。

「コレで終わり・・・マアマア楽シカッタヨ」

さて・・・龍斗の様子を見に行きますか！

そっ思いながらもなのはちゃん達に指示を出してから向かった。

>彩香 Side End<

S t S 編 第22話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「結局こうなるのか」

し、仕方ないね！

龍「はあ、さて感謝コーナーだ」

雨季様、R a i N様、メガネ様、リオン・マグナス様、夜神様、けーくん様、感想ありがとうございます！！

龍「今回のゲストは・・・」

今回のゲストはD、C、？ 孤独な転生者と孤独だった魔法使い、から水無月悠二君です！

悠「来てみたが・・・」

龍「どうした？」

悠「何をすればいいのかが分からない」

えええ。

悠龍「死ぬか？」

すみませんでした！！

龍「なら少し戦うか？ここでなら現実に影響はないから全力で戦え

るぜ?」

悠「望むところだ」

あゝあ、態々後書きでまで戦う必要はないでしょうに……。

ク『そうしたのは誰ですか?』

ナ、ナンノコトカナー。

ク『まあ別に構わないんですがね』

ならつるさく言うなよ〜。

ク『ならあれを止める事ができますか?』

あれ?

龍「さあ!もつと本気を出せ!出し惜しみしてンじゃねエぞ!」

悠「くっ!」

うわあゝ……スルーしたい、全力で!

ク『残念ですがそれは不可能です』

何で?

ク『こちらに向かっけてきてますから』

龍「拘束制御術式 零号開放!」

悠「術式兵装『極光纏う騎士王』」

全力すぎる！？やめなさい！！

龍「ちい！」

悠「はぁ・・・はぁ・・・」

お前らは遠慮や加減を知らんのか！？

龍「楽しすぎてついな」

悠「なかなかいい経験になった、感謝する」

龍「こつちも楽しかった、またやろうか」

悠「勿論だ」

うわぁ〜やだよ戦闘狂が増えるの・・・。

龍「ではな、一応クッキーを渡しておこう、甘いのと甘くないのをな」

悠「作者と食べることにする、ありがとうな」

ク『そちらも頑張って下さい』

悠「ああ、・・・落とし穴かぁあああああ！！！」

あっ、あっちの作者が落とし穴を！？

龍「さて、同時にアンケートを行う」

スルー！？

龍「もうすぐでなのはが終わるんだが・・・次の世界に行くのかそれともオリジナルをするのかどちらを所望するか聞きたい」

ブシドー！？

龍「もし次の世界にというならその世界の希望を言ってくれ、締め切りはなのはが終わるまでだ」

すいませんね！

龍「ではな、おそらく次は火曜日くらいになるだろうが、きちんと書かせるので安心してくれ」

では！

S t S 編 第23話(前書き)

今回はかなり短いです！

ですがその代わり、おそらく次の更新は明日か明後日くらいにします！

アンケートはまだうけつけています！

S t S 編 第23話

どうやら姉さんは敵の殲滅ができたようだな。

「アハハ、ハハハハハ！ サア！ もっと足掻イテミセロ！」

——獄炎「アマテラス」——

一気に攻撃するが敵はぎりぎり耐える。

原作より強くないか？ この狼。

「・・・！」

「少し喋レヨ・・・マア気ニシナイガナア」

次は、

——魔神「死狂い」——

さらに攻撃を強力にしていく。

「!？」

まだ耐えるか。

「ソナナ狼ニプレゼントダ！」

——絶望「鮮血の結末」——

まだ俺の攻撃は終わらない。

「!?!?」

「何ダ？ソノ程度力？ソレナラソコデ死ネ、モシクハ永遠ニ苦シメ」

「――永遠「レクイエム」改――」

相手を空想空間に閉じ込め、精神崩壊を起こさせる結界に閉じ込める。

「アゝ、ウン、ム・・・よし！元に戻った、さて、君とはもう会わないだろうから・・・さよならだ」

本部の脳髓共相手に送ったあいつを思い出す。
大丈夫かな？まあ信頼するしかないんだがな。

「・・・」

「ふっ、やはり死ぬ時はそんな顔をするんだな」

やはりこいつ等は狂っているな・・・まあ俺もか。

「こちらはもうすぐで終わる・・・いや、終わらせる、だからそこらは任せたぞ？七夜」

『七夜なら大丈夫ですよ、無事に終わらせる事ができるでしょう、今は先に行く事を考えましょう』

「そうだな」

ああ、あいつならうまくやってくれるだろう、だからこちらも終わらせるか。

「少佐・・・今から向かうが命に保険はかけたか？まあ無駄になる

「ただがな」

「ククク、やはり君は面白い・・・さあ来たまえ、そんな君だからこそ打倒しがいがあるというものだ」

少佐がいるのはおそらくゆりかごの最深部。

そこに向かうのには後10分はかかる。

そう思い、さらに急ぎながら俺はどうするかを考えていた。

>七夜 Side<

やれやれ、脳髄共の始末を自分で引き受けたのはいいんだが・・・、

「本当に報われないな、俺もやつらも」

さて、早く終わらせて消えるでしょう。

まああのお人よしが許しそうにないけどね。

『何者だ!』

おや? 気配を殺しているつもりがばれたらしい。

本当に、

「下手だね、どうも」

まあそれでもすることは変わらない、ただ殺すだけだ。

『貴様・・・呼んだ者を忘れたか! 貴様は私達の言う事を聞いていればよいのだ! 正義のために!』

「虫唾が走るな、潔くよく逝くものはまた速やかに逝く、安心して消えるがいい、あんたらの後釜にはやつが座ってくれらるだろう」

――閃鞘・八点衝――

これで一人。

『我々は死ぬわけにはいかんだ!』

「奈落より這い山河を越え大路にて判を下す、

ヤマの文帖によると、アンタの死は確定らしい」

『貴様ア!!』

――閃鞘・八穿――

これで残り一人だな。

『や、やつの命令か! 森 龍斗の!』

「あいつは関係ないさ、俺は俺の意思であんたを殺す・・・さて、行き先は決まったか?

地獄に落ちたら、閻魔によろしく言っといてくれ」

『止めるオオオオオ!!』

「極彩と散れ」

――閃鞘・迷獄沙門――

さて、

「その魂、極彩と散るがいい、

毒々しい輝きならば、誘蛾の役割は果たせるだろう」

それにいい忘れていた。

「俺は俺を呼んだ者を殺す、だから今回は自業自得だろ？まあ運が良かったな、

大凶にあたるなんて、選ばれた人間の証だよ」

さて、そろそろ隠れるとしますか。

そういう指示だったはずだ。

「やれやれ、本当に甘くなっ たな、俺も」

そついいながらも少し嬉しく思っている自分に驚きながらも隠れるための場所に向かった。

>七夜 Side end<

S t S 編 第23話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回はゲストはいない」

まあ後書きならいつでもO kですけどね！

龍「いい練習になるしな」

そうそう。

龍「さて感謝コーナーだ」

メガネ様、R a i N様、リオン・マグナス様、夜神様、雨季様、けーくん様、感想ありがとうございます！

龍「前書きで書いた通り、おそらく次の更新は明日か明後日だ、次は少なくとも3ページは書くそうだ、それでも短いかな」

本当にすいません！ですがこれももうすぐで終わります！

そういえば・・・次の世界に行くのは別の小説として書くべきなんだろうか？

龍「さあな」

まあそこは後で考えますか！

龍「そうしておけ、ではな」

では！また次回！

S t S 編 第24話(前書き)

今回も遅くなつてすみません！

それなのにクオリティーがあ・・・(汗)

それでもよければどうぞ！

今回もユタ様のところからゲストをお呼びしています！

S t S 編 第24話

少佐の所に向かっている途中にはやはり敵がいたが、すぐに倒して先に進んだ。

「もう着くか？」

『ええ、予定より2分遅れましたが』

「仕方ないだろ？敵が5000も出てきたら2分くらい遅れるさ」

イラツときてついつい極悪砲撃連発してたら瞬く間に消えたからな。極悪砲撃が何かは読者の想像に任せよう。

「さて・・・着いたな」

『ええ、早く終わらせましょう、マスターなら大丈夫です』

「さあね、まあ油断はしないしできないからな」

本当に少佐と同じという保障がないからな。

「さあ、君は絆を大事にしている・・・私に勝てなければ君のお仲間全員死ぬ、だから全力で来たまえ」

「そうか」

元々手加減なんてできるほど俺は強くないさ。だから全力で向かうのみだ。

「ははは！やはり化け物はそうでなくちゃいけない！そうだからこそ打倒しがいがあるんじゃないか！」

「そうか」

「さて、話していてもばかりではいささか飽きるな・・・そろそろ戦

うか」

どうやって戦うつもりだ？

そう思いながらも俺は2丁の銃を出した。

「君が勝つか私が勝つか・・・さあ小規模すぎるが戦争を始めよう」
「死ね」

あいつが喋った瞬間、俺は3発撃ち込んだ。
頭と腕、足を撃った。

「あつけないな・・・だがこれで「ククク」何？」
「この程度では死ねないよ」

まさか・・・、

「自己再生能力リジネーションと回復法術ヒールンクか」

「ああ、そうじゃないと死んでしまうからね」

「じゃあお前の体は・・・」

「そうだ、半分だけが機械だ」

だからこそ使えるのか。

「それにあの神父の技も使えるぞ？寧ろ敵側の技は大半使える」

それはそれは・・・随分と面倒だな。
だが・・・、

「都合がいいな」

「何？」

「貴様は簡単には殺すつもりはなかったんだ、徹底的に潰させてもらうぞ?」

「できるものなら」

そも他人の力を借りたに過ぎない俺達が自分の力として使うのがおかしいのだからさ。
利用はするけどな。

「さて、どうする?君のその銃じゃ私は殺せないよ?」
「なら銃以外を使えばいいだけだ」

――閃鞘・八点衝――

武器をナイフに変えて攻撃する。

「む?」

「まだまだ、蹴り穿つ!」

――閃走・六兎――

そして蹴り上げる。

「まだまだ!極彩と散れ!」

――閃鞘・迷獄沙門――

さらに斬り刻む。

「やはり完全には当たらないか」
「嫌な予感がしてね、急所だけ避けさせてもらったよ」

「本当に少佐じゃないな、色々混ざってやがる」

「ああ、だがこの気持ちは間違いなく少佐と同じだ！」

「だからどうした」

「何？」

「お前が誰だろうと関係ないんだ、ただ俺の守りたい人たちに危害を加える敵にすぎない・・・だからここで殺す」

――直死の魔眼発動――

「さて、終わらせるか」

「何だ？その眼は・・・とてつもなく嫌な予感がする・・・」

「だろうな、けど教えるはずがないだろ？あんたはここで死ぬんだ、いずれ地獄で会おう」

――極死・七夜――

相手の首を折る。

さらにナイフで相手の死の線を斬ろうとすると、

「ぐっ！させないよ」

「ちい！」

どうやら首は犠牲にしてナイフによる攻撃だけを防いだようだ。

「やはり君はまだ本気を出していないみたいだね、ならこうしよう・

・・・ドク！」

「はい」

「なんだ？」

急に目の前に画面が・・・！？

「貴様……」

「ククク、いいねその顔！そうだ！もつと怒れ！もつと憎しめ！そして本気で私を殺しにかかれ！」

画面にはなのは達やフォワード陣が映っていた。

その中には今にも攻撃しそうな状態で待機している兵士がいた。

コイツ……まさか人質にする気か！？

「君が本気を出さなければ彼女達はここで死ぬよ、それがいやなら本気で来るといい」

「……いいだろう、ならさっさと死ぬ」

I I B l u t d e S c h w e s t e r i I

空想具現化で相手を縛る。

「何だこれは」

「死ぬ」

I I G n a d e n S t u r z I I

そして追撃をぶち込む。

「ぐう！！」

相手の体が千切れ飛ぶ。

やはり機械で出来ていたか。まあ半分に減ってはいるが。

「痛覚はまだ生きてるか？脊髄はまだ存命？脳漿はこぼれてないか

？・・・そう、いい子だ、息絶えるまでの空白を、絶望で走り抜ける」

「ククク、酷い言葉だ・・・だがまだ終わってはないさ、まだ私は生きているのだから」

そっぴいながらやつは銃を構えた。

「いや、もう終わりだ」

「どうだろうな、だがそれもいい・・・さあ来い！敵はここだ！ここにいる！！君はそこに居て私はここだ、ここにいる！」

「機械の身で言うか」

「失礼な事を言うもんじゃない、私はしっかりと人間だよ」

少なくとも完全に機械の体になっても生きようとするやつは殆どいないだろうな。

「いいや、ばけものだよ」

「違うね、私や少佐は人間だ・・・人間が人間たらしめている物はただ一つ、己の意思だ」

「・・・」

「血液を魂の通貨として他者を取り込み続けなければ生きていけない様な・・・アーカードや君の様な哀れな化物と・・・あんなか弱いものと一緒にするな」

やつの独白は続く。

「私は私の意志がある限り・・・たとえガラス瓶の培養液の中に浮かぶ脳髓が私の全てだとしても、きつと巨大な電算機の記憶回路が私の全てだったとしても・・・私は人間だ、人間は魂の心の意思の生き物だ」

「・・・」

「たとえば彼や君が別の姿で微笑みかけようと、歴戦の戦人の姿で感傷たつぷりにひざまずこうと・・・彼や君は化物だ」

「確かにな」

「だからこそ私や少佐は心底彼や君を憎む・・・吸血鬼たる君や彼を認めない！」

「認められたくもないな」

「彼や君は人間のような化物で私は化物のような人間なのだろう・・・私は私だ」

奴の独白はまだ続く。

「「こつちわたしはあつちあなたと違う」・・・この世の闘争せんそうの全てはそれが全てだ、人間がこの世に生まれてからな・・・君も私と違うと思ってる、戦いの布石はとうの昔に済んでいる、さあ戦争をしよう」

そついいながら銃をこちらに向けてくる。

俺はそれに応えるように銃を向ける。

バンッ！バンッ！

攻撃が当たらず、俺は奴との距離を縮める。

バンッ！バンッ！バンッ！バンッ！バンッ！

やはり少佐と同じで悲しいほどに当てられないらしい。

もう俺とやつの距離は零に近い。

そして俺は直死の魔眼で撃ち抜く。

奴もまた銃を撃ち込んできた。

俺の放った弾は奴の頭に当たった。
それと同時に奴の放った弾は俺の左目に当たった。

「ふ、はは、初めて当たったぞ！・・・ああ、これは良い、少佐が喜ぶはずだ・・・良い戦争だった」

そう言っつて奴は死んだ。

「お前は死なねばならない・・・これは絶対応報だ」

それに・・・、

「お前がいくら人間を自称しようとお前はもはやかけらも人間ではない、お前は俺と同じただの 正真の化物だ」

とある人が言っつてたな。

「『化物を倒すのはいつだって人間だ、化け物は人間に倒される・・・人間だけが「倒す」事を目的とするからだ、戦いの喜びのためなどではない、己の成すべき義務だからだ』 そうだ」

それに、

「お前は人間ではない・・・化物のお前に俺は殺せない」

もう聞こえてはいないだろうがな・・・。

「さて、このゆりかごを潰して脱出するぞ?」

『了解です、ならば一度宇宙に出してしましましょうか?』

「いや、まあ大丈夫だ、固有結界で消すさ」

「大丈夫なんですか？」

「ああ、もう大丈夫だ、デメリットほぼなしで使える」

「ならいいんですが・・・」

「さっさと消すか」

そっぴいながら俺はゆりかごを大量の死体と一緒に消した。

こうして本来のストーリーではありえなかった事件は終わりを迎えた。

S t S 編 第24話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「グダグダだな」

自覚してるってば。

龍「なら直せ」

これから気をつけます。

龍「・・・はあく、感謝コーナーだ」

R a i N様、ユタ様、雨季様、メガネ様、夜神様、感想ありがとうございます
ございます！！

龍「今回もレンが来るのか？」

うん。まあレン君とクラウンだけじゃないけどね。

龍「他に誰が来るのか？」

今回は！神になりし者が行く 異世界の旅 くりメイク版から哭
堵 優君も来てくれました！

レ「また来たぞ」

クラ『どうも』

優「作者に行けと言われたんでな」

龍「よく来たな、こんな作者の後書きに」

「やっぱり酷い!？」

龍「で?今回はどうするんだ?」

ユタ様から希望があったのでまたまた女装です。

龍レ「「なん・・・だと?」」

クラ『(写真をとるチャンスですね!マスターも似合いますし龍斗も似合っていましたね)』

優「?別に構わないが」

龍レ「「なん・・・だと?」」

同じ反応二回するほど驚いてるなあ。

優「女装は普通だろ?」

龍「絶対に違う!」

レ「男が女装して誰が得するんだよ!」

クラ『私です!』

レ「お前かよ・・・」

うわあ〜カオスになってるなあ。

ク『誰のせいですか誰の』

自分は希望通りにしただけだ!俺は悪くねえ!

ク『黙りなさい親善大使』

で？どうなった？

龍「くっ！またこんな服を・・・誰が用意したんだよ・・・／＼／＼」
（東方のフ란の格好）

レ「まったくだ・・・まあこれは絶対作者のせいだろうから・・・
また『お話』だな、でも恥ずかしいなやっぱり／＼／＼」（東方のレ
ミリアの格好）

優「そうか？普通だと思うが」（東方の咲夜の格好）

クラ『（最高です！！これは永久保存しないと！）』

ク『（クラウンはおそらく痛い目に遭うでしょうね・・・これはも
はや運命ですし）』

見事に紅魔郷組だなあ。

龍「はあ～もはやどうすればいいか分からない・・・（泣）」

レ「そうだよな・・・（泣）」

優「？」（少し満足そう）

クラ『今回もよかったです！』（すごくツヤツヤ）

さて！今回は残念ながらここまで！

龍「ようやく終わったか・・・まさかまた10着も着させられると
は思わなかったぞ・・・」

レ「確かに・・・」

優「今回は楽しかったからまた呼んでくれ」

余裕があればですけどね。

龍「ではな、そちらも頑張ってくれ」

レ「それは作者しだいだろ？両方」

優「そうだな、まあそつちも頑張れ」

じゃあねえ〜。(転移させた)

龍「よし、気晴らしにコダイに少佐の死体をプレゼントだ、食べた
がってたからな」

マジで送るのかよ!?

龍「まあな」

はあ〜、まあいいや、では次回は金曜日予定です!!

龍「ではな」

S t S 編 次の世界への導入編（前書き）

今回でなのはは完結？です！

なのに駄文・・・鬱だ・・・首を吊ろう。

もう心を広くお持ち下さい。

今回の後書きには夜神様のキャラが来ます！

何か間違いがあれば言っして下さい！！

S t S 編 次の世界への導入編

あの事件から数日。

今日は六課が解散する日でもあり、そして模擬戦の日でもある。

「まあ何故か俺と姉さんvsフォワード陣+なのは達になったんだが」

「まあこうでもしないとすぐ終わるもんねえ」

「今のフォワード陣もなのは達も大分強くなってるんですから油断は禁物ですよ、姉さん」

「分かってるわよ」ただ・・・本気ディッテモインダヨネ？」

最近本当に不安定だな・・・まあそれは後で何とかするとして、

「さあ、そっちの準備は整ったか？なら始めるが？」

「」「」「はい！」「」「」

「出来てるよ」

さあ始めようか。

まあその前にこうなるまでの回想が先だが。

「はあ？ドクも殺したのか？」

「ああ、あまりにも暇だったもんでね、偶然見つけたから解体^{バラ}しておいた」

「まあ別に構わないが」

どうやら七夜は脳髓共を殺した後にドクも殺していたらしい。

まあ助かったが。

「で？お前は自分を呼び出したやつを殺せたがこれからどうするんだ？」

「さてね、本来ならオレは不確かな水月だ、もとより存在しないもの、千切れて消えるのが幸福なんだろうさ」

「俺をあんたは殺せてないが？」

「クク、それは確かに魅力的な誘いだな、だけど化物は化物でも余分なものがある、吸血鬼分は不要だよ」

本当にブレないな。

「まあいいか、ただ勝手に消えるのは許さないぞ？」

「怖い怖い、まあそうならないように気をつけるとしよう」

「じゃあな、また会おう」

「ああ」

こうして一時的に七夜と別れた。

その後はやて達の報告をしているとフェイトとシグナムが、

「模擬戦をしよう」

「拒否権はない」

と言ったり、なのはがそれを聞いて、

「ならフォワード陣たちも混ぜちゃおうか」

と言いかかなり大規模な模擬戦が開始されることになった。

ここまでが回想だ。

いや、模擬戦をするのは別に構わないんだが・・・何故拒否権がないんだよ。

『日頃の行いの所為では？』

「そんなに酷いか？」

『ええ、かなりですね』

「ええ、まったくです」

「アインまで……」

「龍斗はもう少し女心を考えるべきだと思っよっ」

「ルカまで……」

というより途中から関係なくないか？

……まあいいか。

「でこうなってるんだが……」

『誰に言ってるんですか？』

「読者」

「メタ発言は控えてください」

「了解」

まあ言えるのはもうすぐ模擬戦が始まるってことだ。

「さあて、今回は非殺傷設定での全開で来いと言われたな、ならモ

ード「東方」

『了解です』

まあ要は東方のスペルカードと能力全てを使うモードだというだけだから大丈夫だろ。

「じゃあ、開始！」

こうして俺と姉さんvs六課が始まった。

これはこれで大変そうだ。

「じゃあ姉さんにはなのは達を任せてもいいですか？」

「勿論！そっちの方が楽しそうだしね！」

「なら任せます！」

「了解！」

姉さんとは二手にわかれる事にした。

「さて、フオワード諸君、頑張つて避けたまえ」

「――邪恋「実りやすいマスタースパーク」――」

まずは小手調べに放つ。

「うわっ!?!」

スバルは見事に避けた。

周りはそもそもあたるような場所に居ない。

「よく避けた！なら次はコレだ！」

「――神技「八方鬼縛陣」――」

札をばら撒く。広範囲ばら撒きのおかげでかなり避けづらくなっている。

「きゃああああ！」

どうやら軽く当たったらしい。

でもまだまだ向かってくるだろうな。

「はあ！！」

「む？」

エリオがすでにこちらに向かっていた。
ならば、

「神槍「スピア・ザ・グングニル」」

迎え撃つだけだ。

そう思い準備をしていると目の前に謎の物体が！

「エリオ！こっちに来るな！」

「は、はい！」

おそらくロストロギアなんだろうが・・・どういうものなんだ？

<もしもし？聞こえておるかのお？>

<何だ？>

<そのロストロギアはこちらの神が勝手に送ったものじゃ、すまない、止める事ができなかった>

<・・・気にするな、俺は大丈夫だ>

何があっても耐えてみせるさ。

<で？どんなロストロギアなんだ？>

<まったくの別世界に飛ばす能力じゃよ>

<ならここには戻れないのか？>

<いや、戻れるはずじゃ、だから少し我慢してくれるかの？>

<あなたの責任じゃないんだ、あなたを責めはしないさ>

だからこのロストロギアには嫌な予感しかしなかったのか。
なら、

「すまない！皆！俺はしばらく戻れないが必ず戻る！だから待っていてくれ！」

こうして俺は別の世界に飛び立った。

これからどうなるのかは誰も分かりはしない。

S t S 編 次の世界への導入編（後書き）

後書きコーナー！！

龍「無理やりすぎるだろ」

否定はしない。

龍「はあ、では感謝コーナーだ」

ユタ様、リオン・マグナス様、Rain様、メガネ様、夜神様、雨季様、けーくん様、感想ありがとうございます！！

龍「さて、ゲストだが・・・」

今回のゲストは魔法少女リリカルなのは、転生者はHAPPY ENDを至高とするからカナタ・アマギ君？です！

カ「焰龍一閃！」

ぎゃああああ！！

カ「なんで疑問系なのかな？」

すいませんでした！！

龍「まあ落ち着け」（なでなでカ「へう／＼／」

さ、さて！ゲストを呼んだので毎回の恒例の行事をしたいと思いま
す！！

カ「恒例の行事？」

龍「まさか・・・」

そう！女装です！！

龍「死ぬか？」

NO！NO！NO！

龍「君が！泣いても！殴るのを！止めない！」

ガフツ！

カ「あ、あの〜？」

龍「ああ、コイツの言った事は気にしないでくれ」

そちらの作者に頼まれたので拒否権はないZE！

龍「は？」

だから女装は決定事項です！

カ「し、仕方ないよね・・・拒否権ないんだし・・・」

龍「カ、カナタ？」

カ「はっ！ち、違うよ！？別に桃子さんに染められたとかじゃなく
て！」

龍「カナタ・・・強く生きよう・・・お互いに」

カ「・・・うん」

じゃあ今回は1着でいいよ！

そして今回着る服はコレ！

龍斗にはとあるに出てくるシスターズの服。

カナタ君にはとあるの姫神さんの服だ！

龍「くっ！油断すると見えちまう！／／／」

カ「・・・へう／／／」

あれ？いつもならすぐに照れるのに・・・やっぱり染められたんだな。

龍「もう・・・いいか？」

あ、ああ、もういいぞ？（写真はとったからな）

龍「カナタ・・・もう疲れただろ？」

カ「う、うん・・・少しだけ」

龍「なら今日はもう帰るといい、次はもっとゆっくりできるよつにな」

カ「うん、分かった！」

龍「今回はクッキーを渡そう、あちらで食べてくれ」

カ「ありがとう！またね！」

龍「ああ、またな」

・・・さて！ゲストの方が帰ったのでさらにアンケートです！二つあるので両方お答えしていただくと嬉しいです！

龍「一つ目は次の作品だが、一応候補が上がったのでそこから選んでくれ？ネギま？東方？ゼロ魔？Fateだ、これから一つから二つ選んでくれ」

二つ目は次の世界の物語を別の作品として投稿するべきかどうかです！

答えてくれると嬉しいです！！

龍「ではな、次の世界の話は6月からだそうだが、その前に番外編を一つ書くらしい、まあできたらだがな」

では！また会いましょう！

番外編14（前書き）

アンケートの結果ですが東方2票ネギま2票ゼロ魔2票Fate1票でした！

どうしよう（汗）

と、とりあえず番外編（転生者が出てくる）どうぞ！

今回の後書きにリオン・マグナス様の所のキャラが来ます！

番外編 14

今日のはんびりできると思いゆっくりするために自分の別荘ネキマのあれに向かう途中に神から連絡があった。

「すまんがまた転生者が現れてのお・・・処理を頼む」
「・・・またか」

今回で何人だ？確か1万超えたあたりから数えるのを止めたんだが・・・というよりも他の神暇すぎるだろ・・・。

「敵は1人じゃ、能力はお主と同じで自分の知っている漫画やゲーム、小説の技が使えるというやつじゃ」

「面倒だな、まあ頼まれたんだ、一応やってみるさ」

「すまん、いつか礼はさせてもらうからの」

「別に構わないさ、俺はこの世界に來ただけで嬉しいんだ、大切な者ができただけで・・・な」

だからよほどの無茶ではなければやるさ。

「で？居場所は？」

「居場所はミッドじゃが・・・居る場所まで送ろう」

「分かった、今すぐ・・・いや」

「どうしたのかの？」

そうだ、少し転生者を試すか。

「クロス、モード『真祖の姫』」

『了解です』

これで見たやつはアルクエイドにしか見えないだろう。

「さて、送ってくれ」

「了解じゃ、頑張ってくれ」

そう言われて俺は転生者の下に送られた。

奴が転生者か・・・さっそく会ってみるか。

勿論口調は姫アルクだけだな。

「その人間、何をしておる」

「ん？って姫アルク！？ここはなのはの世界じゃないのかよ!？」

ふむ、やはりコイツはなのはを知っているな。

「何を言っておる・・・何用だと聞いたのだが？」

「俺は・・・(待てよ？今の俺なら姫アルクくらいなら余裕で勝てるはず・・・その後に楽しめばいいか)」

本当に屑だったみたいだな。

心を読む程度の能力で相手の心を読んでいる。

遠慮はしないでいいみたいだな。

「行くぜ！」

「ふむ、一時戯れてやるっ」

I I B l u t d e S c h w e s t e r i i

月を落とす。

結界を張ってあるから安心してつかえるな。

「無駄無駄ア！」

I I Blut de Schwester I

相手も空想具現化で返してくる。

まあ姫アルク知ってるから使えるだろうけどな。

「ふむ・・・これならばもう少し本気を出してもよさそうだが、しかと耐えてみせよ」

I I Blut de Schwester I

「鎖!?!まさか!」

「喰らうがよい」

I I Gnaden Sturzer I

「があああああ!?!」

「ほう?まだ耐えるか」

やっぱりしぶといな。

というより・・・もう姫アルクじゃなくてもよくないか? よし、

「ああ、少しは楽しめると思ったのだがよオ、期待はずれかアオイ」

「な!?!まさかお前も転生者か!?!」

「ピンポン、正解者には安らかな死を」

「くっ!？」

――閃鞘・迷獄沙門――

「ならば！」

――閃走・水月――

避けたか。ならば！

そう思い攻撃しようとするど、

「龍斗く！」

「なっ!？ルカ!？」

「何!？何でここにレヴィ・ザ・スラッシャー雷刃の襲撃者がいるんだ!？」

ちい!!コイツにばれたら最悪人質に!

「あれ?そつちの人は誰?龍斗の友達?」

「ルカ・・・今コイツと取り込み中なんだ、少し下がっててくれ」
「う、うん、別にいいけど」

よし、後はルカに結界を張れば・・・。

「レヴィ・ザ・スラッシャー雷刃の襲撃者は好きなキャラだったんだよなあ、よし！」

拙い!やつがこっちに来る!

その前にルカを結界に入れないと!

「よし!張れた、これで大丈夫・・・」

「龍斗!!」

「ぐっ!!」

あぶなかった・・・後少し反応が遅れたら死の点を突かれる所だった。

やはりどこかで慢心していたらしい・・・。

「今回はお前に感謝する」

「は？」

「礼として全力で相手する・・・簡単には死ぬなよ？」

――固有境界「絶望の中の希望の世界」――

固有境界を発動させる。

そして周りは何処かおぼろげで儂い光が照らす朱い月のある世界になった。

「な!?!これはなんだ!」

「これは固有境界・・・固有結界を越えた世界だ、能力は『剥奪』と『付与』だ」

「何？」

そうしている間にやつの能力の源を『剥奪』した。

「な!?!貴様何をした!?!」

「何って・・・ただ能力を『剥奪』しただけだが？」

「く、来るな・・・」

能力を奪われただけでこの怯えよう・・・反吐がでる。

「まずは両手両足を千切る・・・吸血鬼だから死にはしないだろ？」

ブチィ！

「ぎゃあああああああ！！」

「うるさい、たかが腕と足が千切れただけじゃねえか」

「ぐううううう！！ば、化物が！」

「よく言われる、それと対峙したお前は何だ？人か？狗か？化物か？」

「く、来るなああああああ！！」

すごい怯えようだな、俺が何をした？

『どう考えても両手両足を千切ったからだと思えますよ？笑いなが

ら

「よくある事だ」

さて、終わらせるか。

「お、俺が何したってんだよ！俺は俺のしたい事をしようとしただけだろ！その何が悪いんだ！！」

「全部だ（EVERYTHING）」

「何！？」

「お前は俺の大切な人に危害を加えようとした、それだけで殺す理由は十全だよ、だから殺す・・・まあ運がなかったって事で」

そっいいながらやつの能力を戻す。

「能力が！？・・・死ね！」

「なんで能力を戻したのか分からないのか？喰らうためだよ」

「何！？」

「じゃあ、イタダキマス」

ガリー！ゴリツ！バリツ！グチャツ！ゴチャツ！

「ふむ、これでまた死の河に転生者が増えたな」

『まあ終わりましたし報告は私がおきますのでマスターはゆっくり休んで下さい、決戦までもう少しなのですから』

「ああ、なら休ませてもらう」

こうしてまた一人転生者を潰した。

ついでに言うとこれは決戦・・・少佐との戦いまで一週間くらい前の日の出来事だ。

番外編14（後書き）

後書きコーナー！！

龍「まずは感謝コーナーだ」

Rain様、White Seal様、ユタ様、メガネ様、夜神様、リオン・マグナス様、Jam様、けーくん様、感想ありがとうございます！！

龍「前書きでも言っているがまさかの同時だからな、作者もどうするか決めかねている」

本当にね。まあそこは頑張るかもう一度アンケート取るかな。

龍「愚痴はここまでにしてゲスト紹介だ」

といつても今回も水無月 悠二君なんだけどね！

悠「ああああああ！！」（ドカーン）

あつ、また落ちてきた。（一度目はコダイ君）

龍「何故東方のパチュリーの服なんだ？」

悠「作者が着せやがった」

GJ！

悠「死ね！」

龍「死ねや！蛇翼崩天刃！」

ぎゃあああああ！！

龍「で？今回は何をするんだ？」

悠「作者がこれを渡してきた・・・」(女装セット)

龍悠「・・・」(逃走)

しかし回り込まれた！

龍悠「なん・・・だと？」

しってるか？作者からは逃げられない！

さあ！Let's Party!!

龍悠「止めろー！！」

だが断る！

龍「諦めろと？」

Yes! Yes! Yes!

悠「抵抗はOKか？」

NO! NO! NO!

龍悠「逃げるなら・・・いや、もう遅いか」

そして着替え終わって・・・。

龍「くっ！なんで東方のキャラなんだよ・・・／／／」（小傘の格好）

悠「まったくだ・・・／／／」（鶴の格好）

写真写真・・・。

龍悠「死ねえ！！／／／」

ぎゃあああああああ！！

龍悠「ふう！ふう！」

悠「はやく写真を抹消しないと！」

龍「そうだな！」

残念でした・・・もうすでに今回感想くれた人全員に送ってやってあげ・・・ガクツ。

龍悠「orz」

ク『どんまいですマスター』

シャ『元気出してください坊ちゃん』

復活！！

龍「もういい、今日は不貞寝する、また今度暇な時に来るといい、次はそちらにお邪魔したいがな」

悠「ああ、また今度な、俺は作者と O H A N A S H I してくる」

じゃあねえ〜。

悠「ああ、またな」

悠「君帰ったね。」

龍「ああ、まあまた会えるぞ」

次の更新はおそらく次に行く世界が決まり次第です！

一応まだ選択は出来ませんが、東方かネギまかゼロ魔にしてくださいね？

龍「ではな」

ネギま編 プロローグ(前書き)

今回からネギまです！

他を希望して下さったかた・・・すいません！

キャラはあまり把握できていないので変ならば言っして下さい！
直します！

ネギま編 プロローグ

模擬戦途中に謎のロストロギアのせいでもどこか分らないところに飛ばされた。

今の状態でわかるのは唯一つ・・・、

「今は戦争中のところに来ちまったわけだな？」

『そうみたいですね、それに皆さん魔力を持っているみたいですし・・・』

ここはどこなんだ？それが分からないと行動のしようがないんだが。

<聞こえるかの？>

そう思っていると神から連絡が来たみたいだ。

<なんだ？>

<すまん、今お主がいる世界はネギまの並行世界じゃ、といつてもお主が介入しなければ原作通りに進むじゃろうが>

何？ネギまだと？死亡フラグ満載な世界じゃねえか。

<後今お主は戦争をしていると真ん中に送られておる、どうやら他の神がお主を殺すために送ったのじゃろうな（無駄なんじゃがの）>
<そうか・・・今俺の近くに敵はどのくらいいるんだ？>

<それは頭に直接送るから大丈夫じゃ、すまんがわしでは戻せそうにない・・・>

<責任は他の神にある、あんたの責任じゃないさ>

まあ確認はできた。
準備もできている。
なら、

<俺はここを周る、何かあったら連絡をくれ>
<了解じゃ、またの>

ふう・・・さて、

「少しうっとおしいからぶっ飛ばすか」

『マスター・・・機嫌が悪いのですか?』

「別に・・・俺をここにトバシヤガツタカミヲドウシテヤロウカナ
ンテカンガエテナイゾ?」

『ひい!?!』

「サテ・・・ツブスカ」

――禁弾「スターボウブレイク」――

「な、なんだこれは!?!」

「こ、こっちに来るな!ぎゃああああ!」

ふむ・・・カオスだ。

『で?どうするんですか?まさか何も考えていないなんてないですよね?』

「ああ、今は大戦中みたいだからな、ナギに会いに行こうかと思っ
てる」

『理由は?』

「そのほうが面白そうだからだな」

『だと思いましたよ・・・』

「じゃあ探すか」
『了解です』

そついいながら俺達はナギ達を探そうとしていた。
すると、

「おい！誰だお前ら！！」

「ん？俺か？」

「お前しかいないだろうが！」

「ふむ・・・ならまずはお前が名乗ってくれるか？」

「いいぜ！俺の名前はナギ・スプリングフィールドだ！」

うわぁ〜何の苦労もなく見つかったぞ・・・。

「で？あなたは誰なんですか？」

「そつちのお前こそ」

「私はアルビレオ・イマですよ、あなたは？」

「俺は森 龍斗だ、で？何用で来た」

そつ言うつと待つてましたと言わんばかりにナギが、

「お前強そうだなあとと思ってな！だから俺と勝負しろ！もしくは仲間になれ！」

「は？」

「ちよっ！？何言つてんだナギ！」

「いいじゃねえか詠春〜、こいつらだけじゃ面白くないんだよ〜」

「別に構わないが？」

「ほら！コイツもこつ言つてるしな！」

うわぁ〜すごく目を輝かしてるなぁ〜。

「いいのか？」

「別に構わないさ、え」と

「ああ、青山 詠春だ」

「そうか、詠春と呼んでも？」

「構わない」

これで大分自己紹介も終わったな。
まあまだゼクトとは会ってないが。

「じゃあ始めるぜ！」

「来い」

「え」と

いきなりナギはアンチヨコを見始めた。

「ケノテートス アストラブサト 虚空の雷 デ・テムト 薙ぎ払え ディオス・テュコス 雷の斧！！」

——雷の斧——

いきなりか！ならば！

「そちらに合わせよう！」

「何？」

「ケノテートス アストラブサト 虚空の雷 デ・テムト 薙ぎ払え ディオス・テュコス 雷の斧！！」

——雷の斧——

同じ技で相殺する。

「なっ!?!」

「ん?どうした?来ないのならこっちからいくぞ?」

そっぴいながら唱える。

ウエニアント・スピー
「**来れ雷精 風の精!!** 雷を纏いて 吹きすさべ **南洋の嵐** 雷
の暴風!」
ヨウイス・

――雷の暴風――

本来は無詠唱でもいけるがこっちの方が威力があるためこっした。

「うおっ!?!」

ナギはギリギリかわしていた。

「今度はこっちの番だ!え」と

何かしまらないな・・・。

「**百重千重と 重なりて 走れよ稲妻 千の雷!!**」
ヘカトシタキス・カイ キーリアキス・ アストラサト
キーリブル・アストラペー

――千の雷――

「うおっと!そう来るなら!」

次は、

「**契約に従い** 我に従え **炎の霸王** 来れ **浄化の炎**
燃え盛る大剣 ほとばしれよ **ソドム**を 焼きし **火と硫黄**
ト・シユンボライオン デイアーコネート・モイホ・テュラネ・フロゴス エヒゲネーテトカロクス・カタルセオース
フロギネー・ロンファイア レウサントーン ビュール・カイ ハ・エペフレゴン・ソドマ

ハマルト・トウス
罪ありし者を

エイズ・クイン・タナト
死の塵に……

ウーラニア・フロゴース
燃える天空!!!」

――燃える天空――

広範囲焚焼殲滅魔法を使う。

「うわあつつつ……容赦ねえな」

「お前に容赦してたら負けちまう」

「へっ！まだまだ行くぜ！！」

「ああ、来い！」

そしてナギとの戦いは3時間続いた。

「はあ、はあ、つ、強いなお前」

「お前もな」

「くっそー、俺はこんなにはててんのに何でお前はそんなに余裕な
んだよー！」

「日頃の修練の違いかな？」

「よし！なら次の攻撃で終わりにしようぜ！」

「いいだろう……全力で来い！俺も俺の力の一部を見せよう……
ある意味全力だ！」

「へっ！それは楽しみだが……勝つのは俺だ！」

「ふっ、言ってる」

そう言い合いながらお互いに最後の攻撃に出た。

「いくぜ！これが全力だ！百重千重と重なりて走れよ稲妻千
の雷!!!」
ヘカトンタキス・カイ キーリアキス・
ル・アストラペー アストラブサト
キーリブ

――千の雷――

「なら俺はこつだ!」

I I Blut de Schwester I

空想具現化で鎖を出す。

「なっ!?!」

ナギは突然の出来事に反応できず捕まる。

「これで終わりだ!」

I I Gnaden Sturzi I

一気に攻撃する。

「くうっくうっくうっ!」

ドカーン!!

これでようやく終わった。

その後ナギに認められてアラルプラ紅き翼に入った。

入った後にゼクスと挨拶した。

これから大変になるだろうが今の全力で相手するのみだ。

ついでに言うとおいつらは俺を女だと思っただらしい……、

「俺は男だー!!」

『諦めて下さい』

「orz」

やっぱり最後はしまらないな。

ネギま編 プロローグ（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回からネギまなんだが・・・何故あまり知らない大戦期からなんだ？」

何となく！

龍「・・・まあいいだろう、さて感謝コーナーだ」

雨季様、メガネ様、ユタ様、リオン・マグナス様、読むだけ様、Jam様、ケルベルス様、夜神様、けーくん様、感想ありがとうございます！！

龍「今回からネギまだが作者は原作を5巻までしか持っていない状態だ、そして金もない、だから穴だらけだろうがそこは許してほしい」

次回はおそらく木曜日更新予定です！

龍「ではな、次回も頑張るので気長に待っていてくれ」

ではでは！

ネギま編 第1話(前書き)

今回はラカンが出てくるところです！

何か間違いがあれば言ってお下さい！

なにせ此処あたりはまったく知らないのです(汗)

ネギま編 第1話

俺がナギ達の仲間になってある程度日が経った。

色々なところで戦っていたため俺にも二つ名がついた。

主に「不死の王」ノライフキングや「処刑人」、「殺人貴」などと呼ばれたりしていた。

『他には「冷笑浮かべる女王」とか「全てを内包する女神」とかですね』

「認めない！俺は男だ！！」

『後は「あれ？コイツに攻撃当たらねえーんだけど？」とか「またバグか・・・（泣）」とかですな』

「ふざけすぎだろ・・・というより最後の二つは二つ名ではないだろ」

「何を言っておるんじゃ・・・」

「何、少し二つ名が納得いかないからな」

今俺達は何をしているかというと、

「こいつが旧世界の日本の鍋料理ってやつかあ」

「ああ、そうだな、久々に食べるな」

「へー龍斗は食べた事あんのか？」

「ああ、俺は昔は日本に住んでいたからな、食べた事は何回もあるさ」

鍋料理を食っている。

そういえばなのは達と食べると小さいバトルロワイヤルになるから危険だったな。

ただ俺が調理しただけなのにな。

『マスターの料理の腕は桃子さんと同じかそれ以上でしたからね、
そうなるのは必然です（まあそれ以外にも理由はあるんですが・・・）』

「そうか？」

「龍斗は料理が得意そうですね・・・また今度作ってはくれませんか？」

「俺のでよければな」

そう会話しているうちにナギやゼクトが、

「んじゃあ早速肉を」

「トカゲ肉でも美味いかのう？」

肉をいきなり入れていた。

詠春はたまらず、

「あつ！ナギ、おまつ・・・何肉を先に入れてるんだよ！？」

まあ確かにな。

「ナギだから仕方ないだろ・・・」

「龍斗！？仕方ないですませるな！お前も知っているだろ！？火の通る時間差というものがあってだな・・・」

「いいじゃねえかよ！詠春！美味しいものから先だよ」

ヒョイヒョイ

「まあ野菜から入れたほうがいいのは分かってるぞ？でもナギが言う事を聞くとでも・・・こらナギ！いくらなんでも肉を入れすぎだ

「それじゃあ駄目だろうが！」

「何！？そうなのか？」

そうナギに注意しているとアルが、

「フフ、詠春、龍斗、知っていますよ・・・日本ではあなた達のような者を「鍋將軍」と呼び習わすそうですね」

いやいやそれは違うだろ。

「ナベ・シヨーグン！？」

「つ、強そうじゃな」

「分かったよ詠春、龍斗・・・俺の負けだ、今日からお前等が鍋將軍だ」

「全て任す、好きにするが良い」

嬉しくないんだが・・・。

「んゝ嬉しくないな」

詠春も当然ながら嬉しそうではない。

「うおっ！このソースうめえ！」

「醤油だ」

「それと大根おろしだ」

というより・・・、

「ナギは知らないのか？詠春といるなら日本くらい行ってそうだが？」

「馬鹿だから忘れてるんだろ・・・」

「馬鹿つて言うんじゃないやねえ！それにしてもこの美味さ・・・姫子ちゃんにも食わせてやりたいな」

「姫子ちゃん？誰だそれ」

確か・・・アスナだっけか？

「姫子ちゃ・・・？ああ、オスティアの姫御子の事じゃな」

「ふくん、なるほどな」

やはりか。

「まあ戦が終われば彼女を自由にする機会を掴めるやも・・・です」

「その戦だが・・・やはりどうも不自然に思えてならんな」

「ん？何がだ？」

さすがナギだ・・・鳥頭と言われるだけあるな。

「お前が言い出したんだろつが、それと野菜を食え、肉ばかり食つな」

俺達が普通に喋っていると、

ヒュン！

ドカン！

いきなり大剣が飛んできて鍋を吹き飛ばした。

ナギとゼクトとアルは肉だけを掻っ攫っていた。

いやいや、野菜も取れよ。

「お食事中失礼〜！俺は放浪の傭兵剣士、ジャック・ラカン！いつちよやるうぜ！」

崖の上に筋肉ダルマがいた。
アイツか。

「なんじゃ？あの馬鹿は」

「帝国のつて訳じゃなさそーだな、おい、えいしゅ……むお！？」
肉を食いながら（行儀が悪い）ナギが向くと、そこには鍋を頭に装備した詠春が……まあただかぶってるだけか。

「フ、フフフフ、フ……食べ物を粗末にするやつは……」

あゝあ、完全にキレてるな。

「どおーした！？来ねえーのかあ！来ねえーならこっちから」

キンッ

「いッ……」

「斬る」

ギギン！ドカア！！

詠春がいつの間にかエプロンを脱ぎ捨て、一瞬で間合いを詰め、ジャックの剣を斬り、戦闘が始まった。

「うおっ！？マジつええな！ちよつとまたねえ！？」

「ふざけるな！真面目に戦え！」

「フツ！だが、アンタらの事は調査済みだぜ？」

そう言いながらジャックは何かを投げた。

するとよく分からんが女の子が出てきた。

何だあれ？

「情報その一、真面目剣士はお色気に弱い」

「グハアアアアア！」

「詠春！？」

やはりそういうのに弱いのは克服できなかったか！

「さあて！次は誰が相手だ！？その女か！」

お・ん・なだと？

「まずいですよナギ！ゼクト！逃げますよ！」

「おっ！」

「分かっておる！」

潰す……。

「さあ……覚悟はいいな？」

「え？まさかコイツノイライフキング「不死の王」か！？じよ、情報その4ノイライフキング「不死の王」

・特徴『最凶』『女顔と言つと地獄を見せられる』……やべっ
！？」

アア、モウ我慢出来ナイ。

「サア、モウ一度問ウ・・・覚悟ハ出来タカ？」

「お、俺はこれで帰らせてもらおう！」

「マア答工八聞イテナイガナ」

――永遠「レクイエム」改――

「な、なんだコレ!？」

「少し地獄ヲ見テ来イ、何、タダノ3時間ダ、気ニスル事ハナイ」

「ちよつ!？マジでかんべ・・・ぎゃあああああああ」

その後本当に3時間で戻された。

戻された瞬間のラカンの顔は絶望で染まっていた。

この後も幾度となく勝負を挑んできたがナギと戦うばかりで俺とは戦いはしなかった。

あれ？でも何故かラカンはアララブラ紅き翼に入っていた。

まあ入ったからよしとしよう。

「次は何だつけ？もう殆ど覚えてないな」

『まあそれはその時に考えましよう』

「そうだな」

ついでに余談だが、俺以外のアララブラ紅き翼のメンバーで俺を絶対に怒らせては駄目だと心に刻んだらしい。

ネギま編 第1話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「あいつはまた潰すか」

もう許してあげて!？

龍「だが断る」

また、天国への扉使ヘブンスドアつぞ？

龍「ちっ!」

それでよし!

龍「では感謝コーナーだ」

リオン・マグナス様、ユタ様、夜神様、ケルベルス様、メガネ様、Rain様、Jam様、けーくん様、感想ありがとうございます!!

龍「今回はブリッジ奪還戦だ、おそらく土曜日くらいになるだろうが気楽に待っていてくれ」

もう少ししたらまた番外編をするかもしれせん!

龍「どうするんだ?」

番外編を確実にすると決めた場合は言いますのでその時に希望を書

いてください！

龍「つまり今はまだ決めていないと？」

そーいう事です！

龍「ではな、また次回でも会おう」

ではでは！

ネギま編 第2話（前書き）

今回は早く書けました！

まあ楽しみにして下さっている人が何人いるか分かりませんが・・・

（汗）

今回も間違いがあるかもしれませんが！

その場合は報告下さい！直しますので。

ネギま編 第2話

ラカンが仲間になってから少し時間がたった。
どうやらグレート＝ブリッジが落とされたらしい。
それにより俺達を取り戻すのに動いた。

「で？ここがグレート＝ブリッジなのか？でけえな」
「ええ、ここがそうです」

「じゃあ分散して殲滅でいいな？」

「おう！」

「ええ」

「じゃあいくぞー！」

そう言いつつ俺達は敵を殲滅するために行動し始めた。

「クロス！」

『了解です』

クロスをナイフに変えて攻撃をする。

――閃鞘・八点衝――

でも効率が悪いな・・・ならば、

「分身・・・数は3体だ、ここで殲滅を開始する」

「了解」「」

「なら散れ」

「分身使いが荒いですね」

「それが本体だから仕方ないよ」

「どうでもいいがア、早くするんだろオ？さつさと行くぞオ」
「はいはい」

まったく・・・また面倒になりそうだ。

「こつちはこつちで殲滅しないと、それに・・・鉄火を以って闘争を始める者に人間も非人間もありはしない、お前達は来た！殺し打ち倒し 朽ち果てさせるために 殺されに 打ち倒されに 朽ち果たされるために・・・それが全て！全てだ！」

かのアーカードも言っていた。

「闘争の契約だ！お前らは自らの弱いカードに自らの全てをかけた！そういう事だ！ 殺さなければならぬ！・・・それを違えることはできない、誰にも出来ない、唯一ツの理だ」

それは神も悪魔も俺も・・・そしてお前達も。

「だから殺そう、恨むなどは言わない、恨みなければ永遠に恨み続ける、それでも俺は前に進み続ける」

『モード「ノイライフキング不死の王」』

だからといって他の技が使えないわけじゃない・・・だからこそ、

「全力で相手しよう・・・俺の名を刻んで死ぬ、俺はお前達の間も未来を生きよう」

ーブラックバレーー

ジャッカルから砲撃を放つ。

これで少し減ったか。

「さあ、悲鳴をあげろ！豚のような！」

拘束制御術式 三号、二号、一号開放

「うわあ、やってるな・・・俺も負けられないな！」

「よし！ならナギ！俺様と勝負だ！」

「いいぜ！ならさっそく開始だ！」

「おう！」

隅のほうで勝手に潰した数を競い始めた馬鹿二人は置いといて・・・

「さて、見せてやろう！俺の戦い方を！」

——固有境界「絶望の中の希望の世界」——

『剥奪』をしてから一気に進む。

そもそも拘束制御術式は俺自身の能力も抑えている。

そのため今は素の状態である。

「さあさあ！死にたい奴から向かって来い！」

そう言いながら俺は敵の陣地のご真ん中に進んでいく。

「く、来るな！！」

バンッ！

「ば、バケモノ！」

バンツ！

「た、助け……」

バンツ！

「死にたくない！」

バンツ！

敵を容赦なく同情なく一切合切の矛盾なく殺していく。

（本当の悪役は間違いなくこっちだな）

苦笑しながらそんな事を思っていた。

「さて、分身達も殲滅が終わったみたいだからこちらも終わらせるか」

I I Blut de Schwester I

「偽りの月よ、落ちよ！」

ズドーン！！

「これで終わりだな」

『ええ、ここも取り戻せたようですし……戻りますか？』

「ああ、まったく……こんな事ばかりして英雄だぜ？笑いだ

よな・・・稀代の殺人者が英雄だぞ？笑い話にもなりやしない」

『マスター』

「いや、分かっているさ、止まりはしない、止まる事は許されないからな」

そうだ、他者を殺している時点で俺は止まる訳にはいかない。

前を進むしかないんだからな。

それから少しだった。

ガトウも仲間に入り、幾度かの戦闘を行いさらに数日・・・ガトウに呼び出され、メガロの首都に来ていた。

「俺達の故郷がある旧世界じゃ強力な科学兵器・・・核って言うんだが、それが開発されててこんな大戦はもう起こらねえ」

「そうだな」

「始めたが最後、全員核爆弾で全滅だからな、だから誰も戦争をしない」

「ああ、だがこの戦は何時終わる？帝国を滅ぼすまでか！？この世界には核以上の破壊力を持つ大魔法もある！・・・こんな戦やってても意味はねえのに！これじゃあ・・・」

「・・・これじゃあまるで誰かがこの世界を滅ぼそうとしているかのような・・・か？」

アルの台詞を先に言わせてもらった。

「その可能性は、考えてても良いかもしれないぞ、俺と少年探偵団の成果が出た」

ガトウか。

「やはり奴等は帝国、連合双方の中枢まで入り込んでいる……名
は「コスモエンケレテイア完全なる世界」だ」

あいつ等もあいつ等なりに自分の信念を持っているんだろうが……
俺は俺であいつ等を止める。

信念を持つ者として全力で止めてみせるさ。

それはともかく、

「ガトウ、それだけか？」

「む、そうだな、もう一つ用件がある」

「何だ？」

「会って欲しい協力者がいるんだ」

という事はアリカ姫が来るのか。

会ってはいないから原作通りだとは思うが。

「協力者？」

「そうだ、ナギ・スプリングフィールド」

「マクギル元老議員！あんたが？」

「いや、ワシちゃう、主賓はあちらの方」

というより違うならもつと普通に出て来いよ……ナギが勘違いす
るだろうが（もう勘違いしてたが）

「聞こえてるぞ！」

「声に出してたか……失敗した……以後気をつけよう」

「テメエ……表出る！反省してないだろ！」

「ゴホン！呼んでもよいか？」

「うちの馬鹿共がすいません！」

「誰が馬鹿だ！！コイツと一緒にするな……真似すんな……」

……コイツ！！」「

「お、落ち着け！で、では！呼んでいただけますか！？」
「う、うむ」

誰が馬鹿だ・・・少し O H A N A S H I だな。

「ウエスペルタティア王国第一王女、アリカ・アナルキア・エンテオフユシア王女」

名前が長い・・・覚えづらいし間違えそうだな。

「喧しい、気安く話しかけるな下衆が」

む？気がついたらもう皆が自己紹介をすませていた。
次は俺か。

「俺は森 龍斗だ、ノイライフキング「不死の王」とか「殺人貴」なんて呼ばれてる」

「む？お主がか？」

「そうだな、まあ人は見かけによらないからな」

だから楽なんだが、油断してくれるし。

ただし女顔とか言ったやつは潰す。

「ふむ、噂では女ではないかと言われておったが・・・男だったのだな」

なん・・・だと。

その噂を流したやつは探し出して潰すとして・・・初めてではないだろうか、初対面で男と理解してもらえたのは。何故か涙が出そうだな。

「む？ど、どうした？」

「いや・・・男だと気づかれたのが嬉しくてな、つい」（涙目＋上目遣い＋笑顔）

「／／／（何故男なのにこんな顔ができる！？）」「？」

そういえば今の俺は14歳くらいの体だったな。

身長は大体150cmだ。

それはどうでもいいとして・・・この後は特になかったのでキンクリするぞ？

あえて言うなら急に抱きつかれたくらいか？

「今日は疲れたから寝る・・・明日起こしてくれ」

そして今日が終わった。

もう少しで大戦も終わるだろう。

ゼクトを護ればいいがな。

そう思いながら俺は寝た。

ネギま編 第2話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「まったく・・・何故こつも駄文ばかりになるんだ？」

それが俺だ！

龍「威張るな」

では感謝コーナー！！

龍「リオン・マグナス様、メガネ様、KONA様、夜神様、雨季様、Rain様、Jam様、けーくん様、感想ありがとう」

というより・・・アリカ姫どうしよう。

龍「何がだ？」

フラグ建てるかどうかとか。

龍「何故？」

いや〜キャラがよく分かってないし！

龍「それでよくやろうと思ったな」

その場のノリだ！ノリは大事だぞ？

龍「ノリだけで進むのもどうかと思うが？」

そうかな？でもここまで続けられたぞ？
ストックもプロットもなしで。

龍「いつまで続くんだろうな」

いつまでも！

龍「はあくまあいい、次回は早ければ土曜日、遅くても日曜日に更
新予定だ」

では！また次回！

龍「ではな」

ネギま編 第3話(前書き)

大戦編は急ぎ足になるかもです！
今回も駄文ですがどうぞ！！
あっいつもの事か(汗)

ネギま編 第3話

あれから数日たった。

最近こういう始まり方がデフォな気がしてきた。

『メタ発言は控えてください』

「そうだったな」

ついな。

そして今俺が何をしているのかというと、

「何を考え事しておる！そんな余裕があるなら早く終わらせよ！」

「ああ、面倒だなア、ていうかよオ、もう面倒だからさっさと潰してやる・・・クロス！ワイドエリアサーチ！」

『了解』

何故かナギとアリカが襲われるイベントが俺とアリカが襲われるイベントに変わってしまった。

こうなるなら誘い断ればよかったか？

『マスターはお人よしですから・・・断らないでしよう？』

「ああ、もう不幸だ、で？見つかったかア？」

『ええ、見つけたのでさっさと行きましよう（完全にキレてますね・・・相手にはご愁傷様としかいいようがないです）』

さて、アリカをナギ達に任せて行くか。

「じゃあ姫さんはナギ達のところに向かってくれ、分身を護衛につけるから」

「断る、我もお主と向かう、それに王族の魔力は役に立つぞ？」

「言えない・・・俺もそれくらいなら使えるって言えない！」

「・・・はあく頑固な姫だ、いい、向かうのはいいが俺から離れるな、いいな？」

「分かっておる」

こうして敵のアジトに向かい殲滅した。

え？何故省略したかって？

んなもの作者に聞け。

『メタ発言禁止です』

「なん・・・だと？」

まあそれはいいとして・・・今は詠春に怒られている。

なんでも勝手に姫様を連れ込んで襲われ、さらには巻き込んでどうする！って言われた。

でもタカミチが言った一言で詠春は黙った。

「ナイス！タカミチ！」

「え？あ、ありがとうございます？」

まあこれで大丈夫だろ、本来はナギが見つける証拠を代わりに持って来たんだからな。

あれ？次はどうなるんだ？覚えてないんだが・・・。

『マスター！』

「どうした？何かあったのか？」

証拠を渡して数日。
急にクロスに呼ばれ何事かと聞くと、

『アリカさんが捕まりました！今ナギ達にも報告しています！マスターも早く！』

「何！？」

そうか！アリカは夜の迷宮にいたんだっただけ！
何故覚えてなかった！クソツ！

「いや、今は後悔している暇があるのなら……速攻で取り戻しに行くべきだな、いくぞ！クロス」

『了解！すぐに取り戻して見せましょう！』

そして俺達はナギより早く夜の迷宮に急いでむかった。

>ナギ Side<

姫さんが捕まったと龍斗のデバイス？だったか……のクロスから連絡を受けた。

「くっ！やはり姫ひとりで行かせるのは失敗だったか！」

「今は急いで向かいますよ！龍斗は何処にいるのですか？」

「知らん！だがこの事はやつにもクロスが言っておくじやろう、ならすぐに向かうだろうから安心じやろう？」

「そうですね」

「そんな事より！さっさと姫さんを助けるぞ！」

そう言いながら俺達は向かおうとした。
そうすると、

「な！？あ、あれは龍斗の魔法か！？」

「どうやらもう向かったようですね……」

「あの馬鹿！一人で行きやがって！」

俺達は仲間だろうが！何で一人で行くんだよ……仲間ってのは互いに助け合って共に戦うもんだだろうが……。

「さっさと行くぞ！あの馬鹿には一発ぶん殴ってやる！」

「フフ、そうですね、彼には少し罰を与えましょう、フフフ」

こ、こえーぞアル。

と、とりあえず一発ぶん殴ってやるから覚悟しろよ！龍斗！

>ナギ Side end<

クロスから報告を受け、俺はすぐに夜の迷宮にむかった。

すぐに向かったせいかわからないが、警備がかなり厳しく、召喚師もいたみたいで悪魔が大量に出てきた。

「アリカを返せ」

「返すはずがないだろ、馬鹿か？」

「そうか……返すなら楽に死なせてやるうと思っただがな」

「で？返さなかったらどうなんだ？」

「楽に死ぬると思うなよ、人間ヒューマン！！」

「やれ」

そついい、敵は俺に悪魔を向かわせてきた。

「悪ク思ウナヨ？人間……イヤ吸血鬼力」

「ああ、それに別に構わないさ、お前達は還ることすらないのだから」

ら

――直死の魔眼 & 妖精眼発動――
グラム・サイト

「ナ、ナンダソノ眼ハ！ソソナモノヲ個人デ持ツテイイハズガナイ
！」

「さアな、どうでもいいだろオ？還るなら見逃すが・・・向かって
くるなら容赦なく情けなく、一切の情もなく殺してやる」

「クツ！ダガコレハ契約ダ、我々ハ逃ゲラレハセン！」

「ならそこに短剣を置いといてやる、だから刺して逃げる」

そういいながら俺は破戒ルール・ブレイカーすべき全ての符を置いた。

「さあ刺して逃げる、その短剣は契約破棄に使えるものだからな」

そう言うと我先にと悪魔達は自分に破戒ルール・ブレイカーすべき全ての符を突き刺し
始めた。

「な、何！？契約が解除される！？」

「ふむ、面白いな、お前の名前は？」

「俺か？死に行く者が聞く意味があるのか？」

「ククク、違くない、だが興味あることを聞いて悪いかね？」

「・・・森 龍斗だ、死んだら閻魔によろしく言っといってくれ、ま
あ行けるか分からんがな」

「ハハハ！いいぞ！君なら私を楽しませてくれるかもしれん！さあ
！始めるぞ！殺し合いを！」

まったく・・・やっかいなやつを呼び出したな・・・。
それでも俺のすることに変わりはない。

「殺すと言ったからな・・・ただ殺すだけだ」

――閃鞘・八点衝――

一気に近づき攻撃する。

「あぶないな」

やはりこの程度では避けられるか・・・なら。

――ブラックバレル・ジェノサイドバレット――

銃に切り替え撃ち込む。

「ぐうづづづづづ！」

「しづとー」

――閃鞘・十六点衝――

八点衝の倍の斬撃を喰らわせる。

「がああああああ！！」

「とどめだ」

「なめるな！」

――二重閃走・六兎――

から、

――閃鞘・迷獄沙門――

「これにて終演でございます」
「ぐっ・・・やはり勝てぬか、まったく攻撃できなかった・・・だがどこか清らしい・・・これが死か」
「そうだ、そして此処が貴様の終焉だ」
「ククク、やはり戦ってよかった、ではな、もし地獄というものに逝けたらまた会おう」
「ああ、会えたらな、あんたの名前を覚えてくれるか？」
「ああ、私の・・・名前は・・・」

グシャ

悪魔の最後の言葉を遮るように・・・邪魔をするかのようにやつが攻撃してきた。

「クソツ！クソツ！なんだよお前は！それにそいつもまったく役に立たなかった！役立たずが！」

今何て言った？

「貴様がそれを言えるのか？」

「何？」

「貴様はただそこで高見の見物をしていただけだろ？それなのに・・・コイツを馬鹿にしたな？許しはしなかったが・・・ああ、ますますただでは殺せないな」

「何だと？・・・！？」

そう言いながら攻撃する。

「ぐ、あ、あああああ」

ネギま編 第3話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「で？あの技の説明はできるのか？」

うん。とっさに考えたただだからね。

龍「じゃあ説明」

まずはブラックバレル・ジエノサイドバレルだけ。

龍「ああ」

あれはブラックバレルを魔力が続く限り撃ち続ける技だ。でも撃っている間は無防備になるから数発撃つただけだね。

龍「閃鞘・十六点衝と三十二点衝は？」

ただ斬撃の数を増やしただけ。

龍「二重閃走・六兎は？」

あれは七夜の分身六兎あるじゃんか？あれだと思ってくれたらいいよ。

龍「そうか・・・なんか納得できないが・・・感謝コーナーだ」

夜神様、Jam様、Rain様、KONA様、メガネ様、けーくん

様、感想ありがとうございます！！

龍「次回の更新は火曜日だ、気楽に待っていてくれ、まあついでに何かあるそつだ」

アリカにフラグを建てるかどうかです！
多ければ建てます！

龍「まあ戯言だから気にするな」

答えてくだされば嬉しいです！！

龍「ではな・・・コダイに貰ったジュースどうしようか・・・飲みたくないんだが」

諦める。

龍「orz」

ではでは！

ネギま編 第4話（前書き）

今回は一旦これで落ち着きました！
納得がいかない場合はすいません！
それでは！いつも通りの駄文をどうぞ！！

ネギま編 第4話

夜の迷宮にいた警備をしていて俺に敵意を抱いたやつらの存在を『剥奪』し終え、アリカを探す。

「何処か分かるか!?!」

『ええ、次の道を左です!』

「くそつ!面倒だ、アリカがいる正確な位置を言え!」

『何故・・・まさか!?!』

「早く!」

『え、ええ』

クロスに場所を教えてもらい、準備をする。

「いくぞ!」

――ブラックバレル――

壁を撃ち抜く。

『後処理はどうするんですか!』

『オールフレイクシオン大嘘憑きで誤魔化す』

『ならいいのですが』

まあ過負荷マイナスはコレしか使われないかもしれなけどな。

あつ、でももしかしたら光化静翔テーマンダは使うかもな。

まあ異常だから大丈夫か?

「それよりも急ぐぞ!ナギ達も向かっているとはいえイレギュラー

がないとは言い切れないからな」

『了解です、なら光化静翔テーマンダを使ってください』
「そうするか」

それならすぐに向かえるしな。

そう思いすぐに光化静翔テーマンダを使う。

自身を光に変えて移動する。

『ここです！』

「ここか」

どうやらもう着いたみたいだ。

壁は壊れていなかったのでもた壊す。

「大丈夫か？アリカ姫」

「遅いぞ我が騎士」

おいおい、それはナギに言う台詞じゃなかったか？

「姫さん！大丈夫か！つて龍斗！？」

「どうしたナギ？」

「一発殴らせる！」

「断る」

まあ理由は分かっているが……。

「とりあえずは無事でよかったです、でも龍斗は後でお置ききですよ？フッフ（コダイ君に貰ったジュースと着替えがありますからね）」

ゾクッ！

な、なんだ？嫌な予感が・・・気のせいかな？

「さて、敵がまったくいなかったが龍斗・・・君が何かしたのか？」
「ああ、全員の存在そのものを『剥奪』した、もう存在していない」
「・・・バグじゃな」

否定できないな。

「帰るか、そこにいる帝国の姫も一緒にな」
「よいのか？」

「ああ、まあそこは君が決める、俺は強制したりはしない」
「・・・ついていこう」

「そうか、なら早く戻ろう、全員近づけ」
「おう！」

「ああ」

「ええ」

「??？」

「じゃあ場所は俺達のアジトで、『転移』」

そして俺達は自分達のアジトに戻った。

「何だ！これが噂の紅き翼の秘密基地か！ただの掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してやがんだ、このジャリはよ」

「まあ仕方ないだろ？というより噂が気になるな」

「貴様ら！皇族に向かって無礼であるう！」

「ヘッへ〜ん、皇族にや貸しはあっても借りは無いんでね！」

「どうでもいいな」

「何い！貴様ら何者だ！」

俺・・・まさかあれで知られてないよな？

「俺は森 龍斗だ」

「何！？まさかあの「殺人貴」か！？」

「一応そう呼ばれてるみたいだな」

俺には似合わないがな。

「こ、殺すのか？」

「いや、俺が殺すのは外道と敵だけだ、今の君は保護すべき対象だ」

まったく・・・どんどん増えてくるな、護りたい対象が。

でも護りきつてみせるさ。

そして戻ってみせる、なのは達の元へ。

「というよりお前達ドジんなよ」

「うるせえ！まあいいじゃねえか！英雄だったのに一瞬で反逆者だぜ？面白いじゃねえか！」

「だからお前は馬鹿なんだ」

俺が力を完全に使うために、この星と同化している間に反逆者となつたらしい。

「で？どうするんだ？アリカ姫、連合にも帝国にも味方はいないぞ？君の国にもな」

「恐れながら事実です王女殿下、殿下のオスティアも似たような状況で、最新の調査ではオスティアの上層部が最も『黒い』という可能性まで上がっています」

「やはり・・・か、我が騎士よ」

「俺は元々騎士にふさわしくないんだが？むしろ魔法使いだろ？」

微妙にむず痒い。

「もう連合の兵ではないのじゃろ？ ならば主はもはや私のものじ

や

「は？」

この姫め・・・

「世界全てが敵か」

「そうだな」

「じゃが主と主の紅き翼は無敵なのじゃろ？世界全てが敵、良いではないか、此方の兵はたったの8人・・・だが最強の8人じゃ」

その8人目がタカミチなのかクロスなのか。

まあどうでもいいか。

「ならば我らが世界を救おう、我が騎士龍斗よ、我が盾となり、剣となれ」

「・・・やれやれ、未恐ろしい姫だ、了解した、俺の力と信念を君に預けよう」

ああ、まったく。どんどん護り抜きたいモノが増えていく。

でも護り抜いてみせるさ、それが俺の信念なのだから。

それはともかく・・・逃げるか。

「逃がしませんよ？・・・フッフ、是非着て欲しい服が見つかったので着て欲しいのですが？」

「な、何故逃げられない！」

「いわゆるギャグ補正というやつでは？」

なん・・・だと？

「逃げるなら・・・いや、もう遅いか」

「フフフフ・・・」

「うわあああああああああああああ！！！」

『マスター・・・強く生きてください』

その後、アルとアリカがすごく艶々し、俺が精神的にスタボロになつたのは言うまでもない。

ネギま編 第4話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「・・・」（スク水）

うわあ。

龍「能力が・・・使えない」

ジュースのせいだね

龍「潰したい」

まあこれの詳細は番外編でやるんだけどね！

龍「なん・・・だど？」

さて！感謝コーナー！！

龍「Jam様、Rain様、メガネ様、けーくん様、夜神様、KO
NA様、感想ありがとう」

一応ナギがアリカと結ばれないからといってネギがでなくなる訳ではないので安心してください！！

龍「一応アリカのところの皇族の分家みたいなところのやつと結婚、
王家の魔力を偶然にも遺伝した、という設定になりそうだがな」

次回は水曜日か木曜日です！

龍「いつも通り気楽に待っていてくれ、ではな

ではでは！

ネギま編 第5話(前書き)

今回は短い上にネギまが殆ど絡んでこないです！

それでもよければどうぞ！

・・・球磨川 楔の喋り方これで合ってるのかな・・・(汗)

ネギま編 第5話

俺達が反逆者扱いを受けてから数日。

俺達は肉体労働派と頭脳労働派で別れて行動をしていた。

俺？両方ですが何か？

最近は何もして仕方がない。

『もうすぐで終わりますから頑張ってください』

「そっさいえいさ」

『何ですか？』

「アインやマテリアルズは俺とパスが繋がってるから連絡くらいで
きないのか？」

『世界が違いますからね、もう少し落ち着けば可能でしょうが』

「ならさっさと終わらせるか」

『ええ』

今俺達は何をしているかというところ・・・、

「敵の殲滅だ」

『マスター？』

「気にするな、説明しただけだ」

というよりあいつ等面倒だから俺に押し付けたな？

「後でO H A N A S H Iだな」

『ご愁傷様ですね、まあ自業自得ですが』

「さて、どうやら僕の番みたいだね」『楽しそうだから張り切る』

『よ』

『マ、マスター？まさか』

「『今は球磨川 襖って』 『名乗ろうかな?』 『その方が面白いしね』」

『大丈夫なんですか?』

「『大丈夫だよ』 『まあ基本は異常と過負荷しか使わないけどね』」

だつてその方が面白いし。

あれ?段々考え方が・・・まあいいか。

「『君達には恨みはないけど』 『ここで螺子ふせるね?』」

「ふざけるな!」

まあそうだろうな。

お?戻ってきたか。

「貴様は見ではいけないものをみた!だから此処で死ね!」

「『ひどいなあ』 『僕は暇つぶしに來ただけだよ?』 『それなのによつてたかつて・・・』」

「?」

「『だからさあ』 『僕も頑張つて螺子ふせるよ』」

そう言いながら+の螺子を出した。

「魔法の射手火の三矢!」
サギタ・マジカ セリエス・イグニス

「『なめてるのかな?』 『その程度の攻撃が効くとも?』」

そう言いながら攻撃を虚構なかつたことにした。

「なつ!?まさか完全魔法無効化か!?あれは黄昏の姫御子しか使えないはず!」

「『やだな』 『そんな不便なモノと一緒にしないでよ』 『僕のは

オールフイクション
大嘘憑きつていうやつだよ」「

あれは魔法しか無効化できないからな。

「『さて』『ご苦労様』『もう休んでもいいよ?』『あの世だけど
ね』」

「なっ!?!」

グシヤ!

相手の顔に螺子をぶち込む。

「『うん』『楽しいけど』『面白くないね』『早く帰ろっか』『
え、ええ、そうですね』」

オールフイクション
大嘘憑きで相手を虚構なかつたことにする。

うん。本当に怖いね。

まあ一人だけ残したんだけどな。

「『さあ』『答えてくれるかな?』『君達のボスのいる場所を』『
ふ、ふざけるな!言うわけないだろ!』『
『そう?』『なら少しだけ』『痛い目見てもらっつよ?』『』」

――致死武器スカーデッド――

相手の古傷を開く。

勿論心の傷トラウマも開いた。

「う、あ、うわあああああああああ、ぐあああああああああ
あ!!--!」

「『うるさいなあ』『もう少し黙っててくれない?』『少し心の傷スウソウをいじつただけじゃないか』」
「が、あ、た、助け・・・」
「『うん?』『言う気になつたかな?』」
「あ、ああ、けどこのままじゃあ言えねえ、だから止めてくれ!」
「『うん?』『考えるだけでいいよ?』『それで分かるし』」
「え?」

受信感度で聞く。

「『もう殆ど壊れてるね』『まあどうでもいい事だけどね』『まあ目的は果たしたからね』『安心して死んでね?』」
「なっ!?!た、助けてくれ!死にたくない!」
「『やだなあ』『誰も殺さないって』『言つてないよ?』」
「くっ!あ、悪魔め!」
「『別にどう呼ぼうと構わないよ』『どうでもいいしね』『じゃあまた明日とか!』」

グシャツ!!

「『まあ死んでたら会えないけどね』『でも大丈夫だよね』『死体は虚構なかつたことにするんだし』」
「『マスター・・・大丈夫ですか?』」
「『うん?』『僕を疑うのかな?』『大丈夫だよ?』『もう終わったんだし』」

最悪あいつ等に会うまではこのままでいようかと思ってるし。

「『まあ吃驚だよね』『今回で6回目なのに』『もう二つ名があるしね』」

『・・・狂言者ですか？』

「『うん』 『まあ驚いたけどね』 『でも合ってはいるんじゃないかな？』 『僕も気に入ってるよ？』」

それよりも、

「『いつまでもここに居る訳にはいかないよね？』 『早く行くよ』
『早く帰りたいしね』」

「了解です」

アリバイブロック

「『なら腑罪証明使おうか』 『その方が楽だし』」
『了解です』

こうして俺は腑罪証明アリバイブロックを使って帰った。

本気で便利だと思ったな。

そして基地に帰り、得た情報を仲間に行った。

その情報のおかげで大分進んだらしい。

すごく喜んでた。

よかったよかった。これで少なくとも大戦は無事に済みそうだ。

少し早いけどね。相手も合わせてくれるでしょ。

それからも時々球磨川 楔になっていると相手からは見ただけで逃げられるようになった。

逃がさないけどな。

こうして最終決戦までの準備が整った。

後はラスボスをぶっ飛ばすだけ。

決戦のときは近い。

ネギま編 第5話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「『死ぬかい？』 『今なら楽に死ねるよ？』 『僕も手伝うし』」

止めて！？

龍「『というよりも』 『僕は球磨川 楔って名乗ったのに』 『そのままなんだね』」

一応龍斗が人格を変化させただけなんで。

龍「『まあいいや』 『じゃあ感謝コーナー』 『行ってみようか！』」
けーくん様、KONA様、RAIN様、Jam様、雨季様、メガネ様、夜神様、感想ありがとうございます！！

龍「『まあ』 『今回も駄文だけど』 『次も頑張らせるから』 『見てくれると嬉しいな』」

事実だけど・・・心がいたい。

龍「『ハハハ』 『君に痛む心があったんだ』 『そこに驚きだよ』」

うわあゝ。早く戻れよゝ。

龍「『少なくとも』 『次回までは無理だね』 『そうしたのは』 『君だよ？』」

そうだったorz。

龍「『次回は』、『木曜日か』、『金曜日に』、『更新予定だよ』」

では！また次回！

龍「『そうだね』、『それじゃあ』、『また次回とか！』」

ネギま編 第6話（前書き）

今回は自分でも何がしたいか分かりません！

龍「おい」

いつも以上に駄文ですがそれでもよければどうぞ!!
リンドウさんまじ格好いい！

ネギま編 第6話

敵から情報を得て、色々やっていたら反逆者呼ばわりされなくなっていた。

まああれだけ情報を流したんだからそうならないと困る。

そして今日はもう決戦である。

え？早すぎる？仕方ないだろ？作者が大戦編はまったく知らないのに書いてたんだからな。

文句は作者に言え。

『マスター？』

「ん？」

『考え事ですか？』

「いや、少し電波が・・・」

『・・・マスター』

「残念な奴を見るような声を出すな、それより・・・ついたのか？」

『ええ、今はもう皆さん準備してますよ？』

「早く言ってくれよ」

『言いましたよ、マスターが反応しないだけで』

「・・・すまない」

とりあえず合流しよう。

そうして合流して準備を完了し、ついに墓守人の宮殿についた俺達は連合・帝国・アリアドネ 混成部隊が集結し、準備が完全に出来た状態でした。

「不気味なくらい静かだな、奴ら・・・」

「舐めてんだろ、悪の組織なんてそんなモンだ」

「いや、ただ準備してるだけだろ？もしくはあれだ、命乞いの準備」
「ハハ！違いねえ！」

そう話していると一人の女性が来た。

「あ、紅き翼の皆様！連合・帝国・アリアドネ 混成部隊、準備完了しました！」

「おう、あんた等が外を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突撃できる、頼んだぜ！」

「ハッ！そ、それで、あの、ナギ殿、龍斗殿・・・／＼／」

あれ？俺もか。

「そ、尊敬しておりました！サ、サインをお願いでしょうか！？」

「ん、おお、いいぜ、そんなくらい」

「ああ、俺も構わない」

「あ、ありがとうございます！！」

俺は人気になるようなことをした覚えがないんだが・・・。

「フッフ、あの写真のおかげで大分人気が出ましたからね」

「ん？何か言ったかアル」

「いえいえ」

『（マスターの寝顔や風呂上がり・・・それに女装させられての涙目状態の写真・・・アルさん恐ろしい人！）』

何故だろうか・・・クロスがキャラ崩壊している気がする。
そんなことより、

「えっと・・・、セラスだったかな？」

「はい！なんでしようか龍斗殿！」

「これから始まるのは戦争だ、死ぬ奴も出るだろう、もしかしたら君も死ぬかもしれない」

「・・・」

「けれどだからと言って諦めていいわけがない、だから約束してくれ、そして今から言う言葉を君の隊に伝えてくれ」

「・・・はい！」

「仲間を助けようとするのはいいが決して自分を犠牲にするな、生きる事から逃げるな」

俺は自分が尊敬する人の言葉を・・・命令を言う。

「俺が言うのもなんだが・・・命令を3つ言う、よく聞いてくれ」

「はい」

「死ぬな、死にそうになったら逃げろ、それで隠れる、運がよかつたら・・・不意を突いてぶっ殺せ」

「あの・・・」

「ああ、これじゃ4つだな・・・これから先は俺が直接言おう、この命令は戦う前にも言っただけでくれ」

「はい！」

英雄扱いの俺が言うのも皮肉だが・・・、

「連合・帝国・アリアドネ 混成部隊の諸君！今から俺達は世界をかけた戦いをする！だが忠告しておく！いいか！歯が立たないと思つたら絶対に無理をするな！英雄気取りで玉砕したって誰も褒めてはくれない！各自生きる事だけ考えろ！死ぬな・・・これは命令だ！絶対に生き延びろ！後は万事どうにでもなる」

その後はこの言葉を言う

「これは命令だ・・・全員必ず・・・生きて帰れ！」
「」「うおおおおおおおお！」「」

うん、この言葉は・・・この台詞は、俺にも言えるな。
自分を犠牲にせずに生き残ろう。

そして・・・護りたいモノを護ろう。

「生きて帰れますか・・・難しい事を言いますね」

「そうか？ならアルはここで死ぬつもりか？」

「その覚悟はありました・・・ですが、龍斗がそこまで言ったので
すから死ぬ気で生き延びますよ」

「矛盾してないか？」

「言葉のあやですよ」

「さすがだな！龍斗！俺のライバルだけあるぜ！」

「そーかい、まあお前も死ぬなよ？」

「誰に言っつてやがる！俺は死なないぜ？」

そうだったな・・・まあこいつらも護ってみせるぞ。

「俺が最初の一撃を相手に食らわせる！その後突撃してくれ！」

「はい！」

「じゃあ行くぞ！」

――エンドレスバスター――

極太のレーザーが相手に直撃する。

これで大分数が減った。

だがもう一回！

――エンドレス・レクイエム――

終わり無き鎮魂歌の名に相応しいかどうかは知らないが、相手を擬似固有結界で包み、消していく。
消えたといっても見えないだけで敵は永遠に苦痛に苦しむ。

「さて、後は君達に任せた！しっかり生き残れよ！」
「はい！」

そして俺達は宮殿の中に入った。

そして入って少し経つと目の前にフェイト達が現れた。

「やあ、紅き翼の諸君、また会ったね」
「そうだな」

「この半年で、僕達は随分数を減らされてしまった、ここで終わりにしよう」

「いいぞ、ただし勝つのは……」
「いいぜ！ただし勝つのは……」
「俺達だがな！（だけどな！）」

こうしてフェイト達との戦いが始まった。
そしてしばらく経った。

「これでトドメだ！」

――無極零式・虚無――

刀で相手を斬り刻む。
勝負はついた。

ナギが何かを聞いている・・・拙い！

「ナギ！避ける！」

「何！？」

何処からともなく攻撃が飛んできた。

ナギはフェイトごと貫かれた。

他のやつも満身創痍だ。

俺は大嘘憑きで怪我をなくしたため大丈夫だ。
オルフィクシオン

まあ全部は消しきれなかったが。

ともかく・・・これでいよいよ大詰めだ。

ナギもゼクトも行く気満々だからな。

「無茶です！ナギ！」

「大丈夫だ、俺も向かう」

「龍斗！あなたまで！」

「無理だ！あいつは今までのやつとは違う！勝てるはずがねえ！」

「おいおい、ジャック・・・らしくないじゃねえか！俺達を誰だと思っ
てやがる！」

「そうだ、俺達に負けは許されない、だから生きて帰ってくるさ」

そう言っ
て俺達は造物主の下へと向かった。

「ゼクト」

「なんじゃ？」

「絶対に死ぬなよ」

「勿論じゃ、おぬしも死ぬなよ？」

「ああ」

「来たか」

そう話しているうちに到着した。

目の前には造物主がいる。

ナギには傷はない。無かった事にしたためだ。

「いくぜ！龍斗！お師匠！」

「おう」

「うむ」

こうして最後の戦いは始まった。

「行くぞ！」

——無極一式・牙——

刀で相手に刺突を喰らわせる。

「まだまだ！」

——無極二式・雨——

連続で刺突を浴びせる。

「追加だ！」

——無極三式・烈火——

刀に炎を纏わせ、居合いで斬り付ける。

「おら！雷の斧！」

「千の雷！」

救いえる次善解と知るだろう」

「人間を、なめるな！（んじゃねえ！）」

ナギは雷の槍を投げ、俺は、

——無極極式・世界——

相手を固有結界に閉じ込め、無極の零式から四式までを食らわせ、最後に修行で使えるようになった居合いで直死の魔眼を使って斬りこむ。

無論点を狙って。

「これで・・・終わりか」

「ああ」

「う・・・む」

全員満身創痍か・・・でもまだ術式が消えていない。

「さて・・・最後の仕事だ」

「最後・・・まさか龍斗デメエ！」

「安心しろ、死にはしない、必ず帰る」

「その約束破りやがったらどこまでも探して追いかけてぶん殴るかならな！」

「クク、怖いな、ああ、約束しよう・・・俺は生きて帰る、じゃあな、また今度」

そして俺は術式を止めて眠りについた。

>龍斗 Side end<

この戦いでは犠牲者はほぼ出ていない。

ただ一人を除いては。

だが、紅き翼の人間だけは信じた。

その者が帰ってくるのを。

そしてアリカ姫が捕らえられ、処刑されることになった。

そのときに龍斗も目を覚ます。

ネギま編 第6話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「俺はあんなキャラだったか？」

さあ？

龍「死ぬか？」

すみませんでした！！

龍「ならよし」

さ、さて、感謝コーナー！！

龍「Rain様、KONA様、メガネ様、雨季様、夜神様、Jam様、感想ありがとうございます」

えっと無極ですが、もし他者の方と被っていたりしたら知らせてください！直しますので。

龍「一応説明だな」

零式は小型のブラックホールを斬激で作り、相手を飲み込む技。

一式は高速の刺突を喰らわせる技で、二式はその刺突を連続にしただけ。

三式はまんま炎を纏わせての居合い、四式は光の速さを超えた居合い。

極式は全部の技のあと直死の魔眼で居合いです！

龍「エンドレスバスターとエンドレス・レクイエムは？」

バスターは相手に当たるまで追尾する極太のレーザーでレクイエムは固有結界の『無限の絶望』に相手を閉じ込めて永遠に傷をつける（心と体両方）技です！

龍「まあない頭で捻り出した技だからな、全然ダサイが我慢してくれ」

酷い……。

龍「それと何故がまた砲撃が飛んできたんだが……」

ああ〜感想で受けたのにね〜。

龍「まあいい、喰らってやるつではないか」

口調が！？

龍「ガフツ！だ、だが……Rain様には地獄を見てもらおう」

――不慮の事故――

龍「無論対象はRain様だ、覚悟しておけ」

ひい！？Rain様逃げて！

龍「ではな、今回は土曜日か日曜日の予定だ」

あくまで予定ですので気楽にお待ち下さい！

龍「予定で終わらせるな」

イエッサー！！

龍「まあ気楽に待っていてくれ」

ではでは！

ネギま編 第7話（前書き）

今回も駄文です！

やはり知識がない状態でするんじゃないやなかつたと思ってる今日この頃。
でも今出来る限り頑張りますので！
それではどうぞ！！

ネギま編 第7話

造物主との戦いから何日・・・何年経ったか分からない。
無に帰す魔法を消すのに満身創痍では少しだけきつかったらしい。
少しだけ残ってしまった。

「まあ被害は零に近いらしいがな」

『十分でしょう、まあマスターは納得しないのでしょうか』

「いや、俺も護れるのは限られている、全てを護れる訳じゃないからな」

『そうですね、というよりも大分寝てたみたいですよ？』

「そうだな、星に聞いたが・・・今は大変みたいだな」

今はもう力も戻って大丈夫だから今から行動するか。

『では向かきましょうか、アリバイプロック腑罪証明で行きますか？』

「そうだな」

その方が早いだろう。

処刑まで時間がないみたいだからな。

ナギが助けるだろうが・・・自分で救いたいと思うのは駄目ではないだろうか？

「さて、確か今日が処刑の日だったはずだ、急ぐぞ！」

『ええ、一度だけ行って助かりました、イメージがしやすいですからね』

「じゃあ向かうぞ！ケルベラス溪谷へ！」

『了解！』

そして俺達はケルベラス溪谷へ一腑罪証明（アリバイブロック）を使って向かった。

>ナギ Side<

龍斗が無に帰す魔法を止めに行き、帰ってこなくなってから少し経った途端、姫さんが処刑されることになった。

龍斗のことをかなり心配してた姫さんだが、どうやら自分の国を護るためにした行動のせいで処刑されるらしい。

「で？どうするんですかナギ、まさか見捨てるわけではありませんよね？」

「ああ、当たり前だ！けどな・・・姫さんを助けるのは龍斗の役目だぜ？」

「フフ、そうですね」

姫さんが処刑されると聞いて慌てたのはクルトくらいだった。

「なんでそんなに落ち着いてられるんですか！処刑されるんですよ！？龍斗さんもないのに・・・どうするつもりですか！」

分かってねえな。

「龍斗は帰ってくるって言ってたんだ、信じて待つのが仲間ってもんだろうが！」

「それに龍斗はあんなにいた兵全員に「生き残れ！」といった人ですよ？死ぬ訳がないでしょう？」

「それにあの龍斗が簡単に死ぬとは思えんしの」

お師匠・・・。

「で、ですが！実際はここにいないんですよ！？あなた達が護らなければ誰が護るんですか！」

「だ〜から、龍斗だって言ってるだろ？俺達は処刑当日に妨害してやりやいいんだよ！その方が面白そうだしな！」

「・・・そうですか、ならば私は私で助けます！・・・がっかりしましたよ、あなた達なら助けてくれると思っていたのに！」

勝手にがっかりされてもなあ？

「俺達は仲間を信じてるだけだ、なら当日まで他のやつらを助けるぞ！」

「了解です、とりあえずは龍斗には説教ですね」

「ああ、それよりもぶん殴るけどな！」

「おう！それには俺様も混ぜるよ？」

「・・・はあ〜、早く戻ってきてくれ龍斗・・・ストレスで倒れそうだ」

なんだよ詠春、俺達の所為って言うのかよ〜。

「クク」

「フフ」

「ハハハ！」

「そうだよな！龍斗は簡単にくたばったりしねえよな！さて！色々しなきゃな！」

「ええ、頑張りましょう」

こうして姫さんの処刑当日まで俺達は他の人々を助けまくっていた。そして処刑当日。

俺達はばれない様に隠れて様子を見ていた。

「さあ進め」

「触れるな下衆、触れられなくても進める」

龍斗・・・早く来ねえと手柄を横取りするぞ？

(それは困るな、俺もやっと起きてこっちに向かったんだ、手柄くらい俺にくれ)

へっ！おせえよ！龍斗！

「よおしくこんなモンだろ！」

おっ！ラカンが行動しやがった。

急げよ？龍斗。

(ああ、もう助けた、俺も混ざるかもしれないんが思う存分暴れてくれ、いざとなったらなかったことにするから)

ああ、いいぜ！俺もこいつらにはムカついてたんだ！全力で暴れるぜ！

「録れたか？ちゃんと録れたか？よおしく御苦労ッ！おっさん、これ生中継とかじゃねえよな？生中継だとさすがにマズいんだが、さすがにねえよな？」

「無礼者！何者だ？貴様名を・・・」

あっ、ラカンがおっさんの顔をつかんだな。

よし！潰しちまえ！

「おっさん」

「ぬぐっ」

「録画はここで終わりだ、で、今からここでおこることはすべて」
「なかったこと」になる、わかるか？」

よし！そろそろ出番だな・・・暴れるぜ！

「き、貴様・・・」

ラカンが鎧を筋肉で飛ばした。

すげえどうやったたらあんなのできるんだ？

「せ、千の刃の・・・ジャ・・・ジャック・ラカン！？」

おゝ動揺しまくってるなあ・・・よし！全員出て来い！

「ナギ・スプリングフィールド！？」

「青山・・・詠春ッ！」

「アルビレオ・イマ！」

「ガトウ！？」

「ゼクトもだど！？^{アラルブラ}紅き翼・・・馬鹿な！？では、谷底の女王は！」

クク、龍斗が助けたからな、あいつなら絶対に助けられる！

「ああ、面倒だなこいつら・・・」『つくづく』「螺子ふせたくない
ね」『やっぱり』『ムカつくよ』「」

あ、龍斗のやつ完璧にキレてやがる・・・巻き込まれない程度に全力で暴れるか。

どうやら間に合ったようだな。

「な、何故龍斗が地獄に……」

「勝手に殺すな、あんたも俺もまだ生きている」

「そう……なのか？」

「ああ、俺があんたを助けたいから助けた」

「な、何故だ、他にも助けろべき命があるはず……何故！」

「グダグダうるさい！俺は全知全能じゃねえんだ！救えるのにも限りがあんだよ！なら俺は大切な者を護る！そう決めたんだ！」

「ノノな、なら私も大切な者に入っているのか？」

「当たり前だ、さて、ナギ達が上で暴れてるだろうから加勢してくる」

「む？」

「アリカを傷つけたんだ……タダでは潰さない」

「ノノノ」ボンツ！

む？赤くなっちゃった。

『またマスターの毒牙に……』

「失礼だなクロス」

「間違つてはおらんだろうに……」

「何か言ったか？」

「む？い、言っておらん！」

む？まあ後でゆっくり話そう。

「じゃあ行ってくる、アリカは俺が作った別荘でゆっくりしててくれ、すぐに戻る」

「約束じゃぞ？」
「勿論だ」

こうしてアリカを別荘に送って上に戻り、今に至る。

「『で？』 『何か弁明は』 『あるのかな？』 『まあどうせなかった
ことにするから』 『いいんだけどね』」

「な、何故此処に狂言者がいる！あやつは消えたはず！」

「『さあ？』 『でも僕は今ここにいるよ？』 『だから君達は消える
んだ』 『さようなら』」

この後起こったことを話そうとすると皆が止めてくるので言わない
でおこう。

ただ言える事はただの虐殺でオーバーキルだったということだけだ。

ネギま編 第7話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「おそらく次回は京都に行く」

そうだけど・・・いきなり言うか！？

龍「どうでもいいんでな、アリカを救えたのでな」

まあ失うのを恐れてるしね。

龍「ああ、だから護れて本当によかった」

では感謝コーナー！

龍「いきなりだな」

気にしない！では、雨季様、Rain様、夜神様、Jam様、メガネ様、リオン・マグナス様、KONA様、感想ありがとうございませー！！

龍「次回が終わればしばらく番外編になるだろう、だからアンケだ」

？コラボを所望する！

？～やってくれるかい？

？本編を進めたまえ

？俺は人間を止めるぞ〜！ジヨジヨ〜！

龍「おい、？がおかしいだろ」

何、気にする事はない。

龍「・・・はあ〜、まあいい、ではアンケートに答えてくれるとありがたい」

では！次回の更新はおそらく明日か明後日です！

龍「まあアンケートは感想に書いてくれ」

では！

龍「ああ、ではな」

ネギま編 第8話(前書き)

やっぱりキャラが掴めていない……。
変な場合は言って下さい！直すので！

ネギま編 第8話

処刑の日から数日。
今は京都にいる。

「久々だな」

「そうなのか？」

「ああ、行く暇がなかったからな、来たのは一度だけだが」

死ぬ前の修学旅行だな。

「アスナは大丈夫か？」

「うん・・・大丈夫」

アスナは処刑があつた日の次の日に助けた。
最初はまったく表情を変えなかったが、今はある程度感情表現が出るようになっていた。

「さて、詠春の家に向かうか」

「ええ、そうですね」

「あの馬鹿共には付き合いきれん」

「ひでーなお師匠」

「事実だろう？」

「龍斗まで・・・」

「ナギは馬鹿？」

「なっ！？ 姫子ちゃんまでかよ！」

あゝ、ナギがものすごい勢いで沈んでいく。

「さて、馬鹿も静かになったからいくか、アリカも行くぞ」
「ああ」

今回はアリカも付いて来ている。
アリカには認識阻害がかかっており、並大抵のやつじゃあ気づかない。
い。

だから今回は普通に来ている。
まあ老害共にはお話をしたから大丈夫だろうが……。

「で？何故こうなっている？」

「すまない、スクナが復活してしまった」

「ああ、ただでさえストレスが溜まってンによオ……潰す」

――無極零式改・虚無時雨――

「うわあ、スクナが可哀想に見える」

「同感ですね」

「フハハ！どうした！モウ終わりか！」

「GU・・・A・A A」

「終わりだ！」

――無極極式・世界――

直死を使わずに攻撃する。

「これで終わりだ」

「すまないな、龍斗」

「気にするな、いいストレス解消になった」

「はは・・・そうですか」

「で？どうするんだ？コイツら」

スクナを再封印してから宴会みたいなテンションで飲み続けたコイツらは今は酔い潰れて寝ている。

「風邪を引くといけないからな、連れて行こう」

「了解した、では連れて行こう」

こうして京都での出来事は終わった。

それからいくらか経った日に俺は一人で散歩をしていた。

まあ軽く世界規模だが。

散歩を続けていると、

「くっ！」

「追い詰めたぞ！エヴァンジェリン！」

「む？」

どうやら誰かが襲われているらしい。

というより……、

「なあクロス」

『なんでしようか』

「あれを見て悪はどっちだ？」

『どう考えても幼女を襲っている大人ですね』

「だな」

という事で……潰すか。

あえて口調を変える。

「『さて』『君達は』『幼女に何をしているのかな？』『どう考え
ても犯罪者だね』『」

「貴様！何者だ！」
「『どうでもいいよね』 君達は『ここで消えるんだし』」
「ま、まさか……」
「どうした！」

あゝあ、もうばれたか。

「な、何故狂言者がここに!?!」
「なっ!?!狂言者だと!?!」
「『あらら』 とうばれちゃったか』 とう少し遊びたかったけど・
・『』 『さよならだね』」
オルフィクション
大嘘憑きでなかったことにする。

「『さて』 君はどうするんだい?』 別に戦っても構わないけど・
・『』 『今の君じゃあ話にならないよ』」
「くっ!私を殺すのか?」
「『いや』 『殺さないよ?』 『意味がないしね』 『それに』」
「それに何だ?」
「『僕は』 『君に危害を』 『与えるつもりは』 『ないんだ』」

とうより口調戻すか。

「とういつつもりだ?私は悪の魔法使いだぞ?」
「知るかそんなもの」
「なっ!?!」
「悪とかどうでもいいんだよ、ただ自分の信念を貫き通すなら文句はないしな」
「……」
「それに見た目幼女のお前に危害を与えるのは気が引ける」
「おい!それが本音だろ!」

「そんな事はない」
「うがー!!」

やれやれ……。

「で？どうするつもりなんだ？俺はこのまま散歩を続けるが？」
「散歩？どこから来たんだ？」

「京都」

「……」

「？」

何故震えながら黙る？

「そんな遠距離な散歩があるかあああああ!!」

「だが散歩だ」

「何故！そんなに遠くに行くのが散歩になるんだ!!」

「俺の使う能力のおかげで世界どこでも行けるから、一瞬で」

「……バグめ」

「失礼な、バグではない」

バグならもつと他にいる。

「それじゃな、元気に過ごせ」

「待て！お前……私の従者になれ！」

「は？」

「お前は面白いからな、他の奴に取られる前にな……／／／」

む？

『またマスターの毒牙に……』

毒牙一発！毒牙一発！

何故だろう・・・何故か頭にフルネームが変な女の子2人がよぎった。

「で？どうなんだ！」

「その気持ちは嬉しいが・・・今は無理かな？」

「な、何故だ！み、見た目か！？見た目なら好きに変えられるぞ！年齢なら100歳は超えている！」

「違っよ」

「な、なら何故！」

「今はしなければならぬ事があるからな・・・そうだ」

「な、なんだ？」

「俺は色々な場所を周る、だから自分の足で見つけてくれ、そうすれば言う事をなんでも聞こう」

そう言つとすぐく輝いた目で、

「本当か！？嘘じゃないだろうな！」

「いや、俺はあまり嘘は好きじゃないんだ」

「な、なら約束だ！」

「ああ、そうだ、一応言っておくともし見つからないならナギに聞け、ヒントくらいなら手に入るだろうさ」

そついった後、指きりをして別れた。

それから大分経った。

「くっ！クロス！ガトウがいるのはこの先か！？」

『ええ！急いで下さい！もう少して死んでしまいます！』
「くそっ！間に合え！」

今日がガトウの死んでしまう日だと気づいたのは大分遅い状態だった。

くそっ！気をつけていたはずなのに。

一応保険みたいなものはアスナに渡してるが……。

「ガトウ……死ぬなよ」

そう呟きながら俺は急いだ。

>アスナ Side<

敵に遭遇してから少し時間が経った。

「くっ！嬢ちゃん、タカミチ君……ここは任せて逃げろ」

「そんな！師匠！」

「駄目！」

「ハハ、大丈夫だ、今話があった、龍斗がもう少しで来るらしい」

「龍斗さんが！？な、なら！もう少し逃げていけば！」

「そうはいかないさ……タカミチ君、彼女の記憶を消してあげてくれないか？彼女には平和な世の中に生きて欲しいからな」

「師匠！」

タカミチは悲痛そうな顔をしていた。

……そうだ、龍斗からもらったあれなら。

お願い！皆を助けて！

(了解した、今すぐ向かおう)

願った瞬間に目の前に魔法陣が現れて、その中から龍斗が出てきた。

「さて、何とか間に合ったみたいだな、さっさと片付けて帰るぞ！」
龍斗は気楽な・・・いや、頼もしい言葉と共に戦いの場に躍り出た。
きつと何とかしてくれ・・・そう感じさせてくれる・・・そんな
背中を見て・・・意識を手放した。

>アスナ Side end<

アスナに渡しておいたのは令呪の応用で作ったもので、強制的にマ
スターの目の前に転移できるのならそれだけを再現してみようとい
うことで作った、ペンダント型の転移機だ。

それによって俺は、今はガトウ達の目の前に現れる事ができた。

「さて、何とか間に合ったみたいだな、さっさと片付けて帰るぞ！」

そう言っつて、敵に向かっていった。

敵は悪魔だった。

今の状態なら十分なんとかできるのでガトウ達には別荘に行っても
らった。

「さて、覚悟は出来てンだろうなア！」

「ククク、覚悟八貴様ノ方ダロウ？」

「あア？ふざけンじゃアねエぞ！オマエら全員・・・死体決定だク
ソ野郎オ！！！」

——無極零式・虚無——

「グッ！」

「よく耐えやがったなア・・・ブラックホールじゃアまだ足りねエか」

もう満身創痍だろうがな。

――無極極式改・宇宙――

零式から四式までを3回くり返し、最後にトドメに直死の魔眼を使い居合いする。

「ガ・・・ア・・・アア」

「後500」

――閃走・二重六兎――

「495」

――ブラックバレル・フルバースト――

「400」

――夜摩判決――

「300」

――逆行運河・創世光年――

「250」

これで半分。

「ナ、ナンダオ前八！ナ、何故ダ！」
「うるさい、もうお前らは一番俺が嫌な事をした・・・我俣だといわれようとも・・・オマエラヲケス」

I I Blut de Schwester I I

相手を鎖で纏める。

「死ね」

I I Gnaden Sturz I I

纏めた相手にトドメをさす。

「これでおしまい」

『大丈夫ですか？マスター』

「ああ、さて、別荘に入るか」

そう思い、別荘に入った。

アスナの記憶を消さずに、なおかつガトウを救う事ができた。たとえこの道が間違っていようとも、何度でもこの道を選ぶ。救う事ができたのならば・・・後悔はしない。

その後は原作まで変化なく過ごし、ついには原作に入った。

ネギま編 第8話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回で大戦編は終わり、番外編を数話したら学園編に入るつもりらしい」

さて！感謝コーナー！！

龍「Rain様、ケルベルス様、リオン・マグナス様、Jam様、メガネ様、夜神様、けーくん様、KONA様、感想ありがとう」

さて！次回からは番外編（コラボもあるよ！）です！

龍「最初はRain様からだ」

次回の更新は木曜日か金曜くらいです！

龍「これからも大変なんだから頑張れよ？見捨てられない程度に」

勿論だ！というよりアンケートで？が案外人気だった件について。

龍「知るか」

ではでは！また次回！

龍「ではな」

番外編 15 (前書き)

今回からアンケート通りにコラボやIF、その他を数話していきます！

最初はRain様です！

何かおかしければ指摘してください。直します！

番外編 15

今日はナギ達と別れてから大分経ち、やる事もないので周りを散歩していた。

『世界規模ですけどね』

「気にするな、俺は気にしない」

そう話していると神から電話が来た。

「すまんがそちらに2人送るから会いに行ってくれんかの？」

「害は？」

「勿論ありませんよ、おぬしも知っておるはずじゃしな」

「誰なんだ？」

「それは会ってからの楽しみじゃ」

「そうか」

そうして俺は神が連れてきたやつに会いに向かった。

「で？まだ来ていないみたいだが？」

「もうすぐで来る、少し待ってくれ」

そうしてしばらく待つと、

「む？」

「おお、到着したみたいじゃな」

「ああ、トーマとリイだったのか」

「ああ、久しぶりだな」

「久しぶり〜」

来たのはトーマとリイだった。

「アリアだったか？はいいのか？」

「ああ、心配だな」

「クク、まさしく父親みたいだな」

「そうか？」

「ああ、で？何しにきたんだ？まさか世間話だけで終わる訳もないだろ？」

そう言うとトーマは、

「やっぱりばれるか、ああ、俺と戦ってほしい」

「何故・・・と聞くのは無粋だな、戦いの中で聞くとしよう」

「よろしく頼む」

「ああ、じゃあ別荘の中でやるか」

そうして俺達は別荘の中に入った。

「で？此処の設定はどうなっているんだ？」

「外の1時間がこの中での1週間だ」

「そ、そうか」

「すごいね」

まあかなり苦勞はしたがな。

「さて、ルールはどうする？」

「ルールは降参するか戦闘不能になるまで・・・でいいか？」

「ああ、最初から全力で来い！ここなら俺も100%で相手できるからな」

そしてお互いの準備が出来たところで、

「始めるか、クロス！Set up！」

『了解です』

「ECデバイダー」

『Start up』

お互いに武器を構え・・・、

「リリイとリアクトしなくていいのか？」

「最初はな」

「クク、最初で終わってくれるなよ？俺もトーマとの戦いは楽しみにしていたんだからな」

「ああ、それは俺もだ、リリイ、合図を」

「うん、では・・・はじめ！！」

「いくぞ！」

——無極一式・牙——

まずは刺突で攻撃する。

「ならこっちは・・・」

——シルバーハンマー——

む、やはり無理か。

そう思いながら俺は距離をとった。

「なんだ？さっきの技」

「とある人に言われてな、オリジナルの技がないとキツイそうだからな、だから考えた」

「そうか」

「まだ行くぞ！」

「ーエンドレスバスターー」

「なあ」

「どうした？」

「極太のビームが追尾式っておかしくないか？」

「何故か出来たから仕方ない」

「くっ、なら！」

「ーデイバイド・ゼロー」

やっぱりあれはチートだよな。せつかくこめた魔力が無駄になった。

「次はこっちから行くぞ！」

「む？」

どうやらかなりスピードが速くなっている……まあ何とか追いつけるが。

それに、

「そのスピードで満足したら俺以上のやつに手も足もでないぞ？

俺もまだまだ弱いんだからな」

「そう簡単について来られると自信なくすんだが」

知るか。

「で？いつまで小手調べなんだ？もうそろそろ全力で来い」
「ああ、分かった」

そついいトーマは動きを止めた。

「リリイ！」

「うん！」

「リアクト・エンゲージ！！」

そしてトーマは第二形態の黒騎士になった。

「じゃあこれからは全力だ、安心しろ、この別荘は壊れはしない」
「ああ、それなら安心だ・・・いくぞ！」

1 Silver Stars "Hundred Million
"ー

いきなりか。だが！

「それでは当たりはしないぞ？」
「分かってるさ、だから・・・」
「む？」

今まで以上のスピードで向かってきた。

「はああー！！」

「無駄だ」

相手の攻撃を避ける。

「喰らえ」

――無極四式・零――

神速を超えたスピードで斬り付ける。

「ぐっ！」

「やはり致命傷は避けたか、さすがだな、普通のやつなら何をされたか分からずに真つ二つになるんだが」

それだけ強いということか。
負けてられないな。

「さて、時間はあるが余裕はない、次で終わらせようか」

「分かった」

「いくぞ！」

「ああ！」

――無極極式改・終焉向かえし世界――

――デイバイドゼロ・エクリップス――

互いの全力がぶつかり合う。

「はああああああ！！」

「うおおおおお！」

そして模擬戦は終わった。

「くっ、やっぱり俺もまだまだか」

「いやいや、ここまで強くなっているならまだマシだろ」

いつまでも強くなれないやつもいるんだしな。

「そうだな、でもまだまだ強くなりたいたんだ」

「大切なモノを護りたいから・・・か」

「ああ、そのためには力があるからな」

「そうだな、ああ、まだまだ強くなれるさ、そこで限界とは思わずに行動すれば先はある」

リリイは疲れたのか眠っている。

もうそろそろ戻る事になりそうだな、トーマとリリイは。

「お互い、後悔がないように頑張ろう、そのためなら俺はいくらでも手伝うからな」

「ああ、それはそうだな、俺も手伝うから呼んでくれ」

「クク、分かった、こき使ってやるさ」

「おいおい、さすがにそれは勘弁してくれ」

「冗談だ」

む。神から電話か。

オールドファッション
大嘘憑きで傷を虚構なかつたことにしてから出た。

「どうやら終わったようじゃな」

「ああ、で？もう帰らすのか？」

「うむ、そういう約束じゃったからな」

「そうなのか？」

「そうじゃ、じゃから準備が出来たら電話してくれ、そうすれば送るのでな」

「分かった」

さて、

「傷はもうないはずだが、大丈夫か？」

「ああ、大嘘憑オルフイクションきか、便利だな」

「八八、だがお前はその一つを極めるんだろ？ならいいじゃねえか、俺は元々才能がないから一つのことを極めるより複数の技術を使うほうを選んだだけだ」

「そうなのか」

「ああ、もうそろそろお別れらしい」

そう言うと分かっていたのか、

「ああ、そういう約束だからな、また相手をしてくれるとありがたい」

「勿論だ、ではまた会おう、リリイにはまた歌が聴きたいと言っておいてくれ」

「ああ、伝えておくさ、じゃあな」

「ああ、これは土産だ、役に立つか分からんがな」

そついいながら俺は訓練用の別荘につけることができる部分を渡した。

「これは？」

「これはお前がいままで会ったり戦ったりしたやつの幻影と戦えるようにする装置だ、これで訓練してくれ」

「ありがとう」

「じゃあな、またそちらにお邪魔したいな」

「ああ、また会おう」

そして神に電話して送ってもらった。

こついう日ならありがたいかな？少なくともこちらに直接くる転生者よりはマシだからな。
そう思いながら俺は帰った。

番外編 15 (後書き)

後書きコーナー!!

龍「楽しかった」

そうですね。

龍「まずは感謝コーナーだ」

KONA様、Rain様、Jam様、ケルベルス様、雨季様、メガネ様、けーくん様、夜神様、感想ありがとうございます!!

龍「次はリオン・マグナス様かJam様だな」

何か希望があれば感想もしくはメッセージで!

龍「あまり戦闘ばかりでもな、俺は大歓迎だがな、ややこしくなくていいから」

おいおい。

龍「まあトーマに渡したあれでトーマは修行してくれたらいいと思う」

説明です!

別荘に取り付ける事によって、別荘内で修行する時に仮想敵が出てくるように出来る。

敵は自分の思い浮かべた者になる。以上!

龍「次回はおそらく金曜日には投稿したいそうだな」

何故か一時間だけっぽいので。

龍「だから早めにメッセか感想で希望を書いてくれると嬉しい」

では！また次回！！

龍「ではな」

番外編 16 (前書き)

今回はJam様です！

でもキャラが合ってるか・・・(汗)

眠い中書いたのでグダグダです。

番外編 16

今日も何もする事がないのでのんびりしていると、

「すまんが頼み事ができたんじゃないが」

「なんだ？また転生者か？」

「・・・そのまさかじゃ」

「またかよ・・・で？次はどんなやつだ？」

「今回はジヨジヨじゃったか？あれのスタンドじゃな」

スタンドか・・・注意するのはキング・クリムゾンとゴールド・エクスぺリエンス・レクイエムか。

「で？どこまでのスタンドが使えるんだ？」

「第5部までじゃ」

ならその二つとノートリアス・B・I・Gくらいか。

「了解した、すぐに向かおう」

「ああ、そうじゃ」

「どうした？」

「今回は他の世界のやつも紛れ込んでしまったようでの、迎えに行つてやってくれんか？しつとるはずじゃし」

「・・・了解した」

さて、さっさと向かうか。

そう思い行動に移し、敵の目の前まで来たんだが・・・、

「キタキター！！俺の時代がキター！！」

なんだ、このうるさいやつは。

「さあ？でもムカつくからぶち殺し確定だろ？」

「それもそうか」

隣にいる当麻（とあるの主人公ではないほう）に喋りかけるとすぐに反応してくれた。

当麻は此処に来る途中で合流した。

まあその後すぐにこのキチガイが出てきたんだが。

「ネギまの世界来たコレ！俺というオリ主がハーレムを築き上げるんだな！」

「「ないない」「」

それは同時に否定できる。

「お前ら誰だ？まさか俺と同じ転生者か？」

「「お前と同じにするな、虫唾が走る」「」

「仲良いなお前ら！？」

まあ友だしな。

「さて、貴様の始末を命じられたのだが・・・覚悟はできたか？」

「お？何だ、今からこいつを殺ろうとしてたのか・・・よし！俺も手伝うか」

『マスターはさすがですね、馬鹿なのでは？とミサカはどこか呆れながら心中を吐露します』

「ああ？喧嘩うつてるのか？ミサカ」

『いえいえ、そんなことはありません、ただ相手の能力も分からず

に戦おうとするマスターに助言を・・・と』

まあ今回は陽動を頼むだろうけどな。

「じゃあ当麻は陽動を頼む、今回はスタンド勝負みたいだしな」

一応スタンドは使えるからな。

相手に合わせようか。

「分かった、なら龍斗が俺の分も殴れよ？」

「ああ、分かってるさ」

いくら本体に攻撃できてもしづといとな。

スタンド潰した方が早い。

「ククク、最強のオリ主の俺にお前らが勝てるはずないだろ？」

「最強オリ主(笑)」

きっと読者も思ってるはずだ。

ん？電波か？まあいい。

「スタープラチナ」

「なっ！？お前もスタンドが使えるのかよ！」

「さて、ここで質問だ、ジョジョは第何部まで読んだ？」

「5部の途中までだが？それがどうかしたのか！！」

「そうか」

これでレクイエムは警戒しなくて大丈夫か。

「さあ、殺し合おう」

「くっ！俺は最強なんだ！神からもらった力があるからな！」

馬鹿かこいつ……。

「貰い物の力で最強気取るなよ……せめてその力を十全以上に使いこなしてから言え」

『マスターの言う通りですよ、とミサカは文句を言います』

文句なのか？

「まあ所詮借り物の力で最強を名乗っちゃ駄目だろ、まあ此処で死ぬんだ、別に関係ないだろ」

「ふざけるな！！ザ・ワールド！！時よ止まれ！！」

本当に馬鹿だな。

「スタープラチナも時止めの能力だろうが」

「でも俺のほうが強い！！」

そう言いながら敵は向かってきた。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア！！」

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア！！」

ラッシュの打ち合いになる。

それに負けるはずもなく、

「ぐううううう！！」

「この程度か？そして時は動き出す」

「ハッ！まさかスタンドか？」

「そうだよ、だから当麻には陽動を頼んだんだよ」
「分かった」

「どうやら当麻はベクトル変換を使ったらしい。
これで全力で暴れる事ができる。」

「くっ！ならば・・・キング・クリムゾン！時は吹っ飛ぶ！！」
「・・・ゴールド・エクスペリエンス」

「まだレクイエムじゃないほうを出す。」

「それは無駄だ！」

「それはどうだろうな？やってみなきゃわかんねえだろ？」

「そして結果だけが残る。」

「なっ！？何故生きている！エピタフで見た限りでは死んでいるはず！！」

「さあな？まあお前がみた未来は偽者だったってことだ」

「あ、ありのまま起こった事を話すぜ！（ry）」

「おい、当麻、ネタに走るな」

「いや・・・俺手伝えるところあるか？」

「ああ、だから今此処にいるんだろ？まあこれが終わったら模擬戦
でもしようぜ」

「あ、ああ（龍斗って戦闘狂だったんだな）」

「さて、面倒だから終わらせるか。」

「ゴールド・エクスペリエンス・レクイエム」

ゴールド・エクスペリエンスが姿を変える。

「なっ！？何だその姿は！？」

「ん？まあ第5部最後まで読んでたら分かるさ」

こいつの能力は行動や意思の力を「ゼロ」にするというやつだ。

このスタンドを相手にすると、永遠に「真実」に辿り着けなくなる。
（「死んだこと」がゼロになり死ぬという真実に到達できず無限に死に続ける、など）

まあ今回は無限に死に続けてもらうがな。

「くっ！だ、だが！キング・クリムゾンなら勝てる！キング・クリムゾン！時は吹っ飛ぶ！」

「だから無駄だ」

吹っ飛ぶ過程の中でやつは行動しようとしていた。

「な、何が無駄だ、次もきちんと見えた、ならこれで終わり・・・
なっ！？」

今起きたのは吹っ飛んだ過程がなくなり元に・・・「ゼロ」に戻ろうとしていた。

まあもう王手詰みチェックメイトなんだがな。

「じゃあな、お前は永遠に死に続ける、もしまた会うことがあれば来世で会おう」

『ようは永遠に会いたくないと』

「そうとも言っ」

「なっ！？ま、まさか！？最強になったはずなのに！」

「馬鹿が、本来なら当麻だけでも勝てたさ、だが今回はストレス発

散のために一人で相手したんだ、だからこれで済んでいる、いや、何を言っても無駄か、じゃあな、永遠に苦しめ」

「や、やめ・・・ぎゃあああああああああああ！！や、やめろ！俺に近寄るな！！？」

ふう。終わったか。

さて、

「当麻、待たせたな」

「いや、まったく待ってない、というより終わったのか？」

「ああ、もうあいつは永遠に死ぬ事はできないよ」

心も体も死ねないんだ、地獄だろうな。

「さて、どうすればいいんだ？俺」

「模擬戦」

「えっ！？勝てる気がしないんだけど」

「お前には魔法の言葉があるから大丈夫だろう？」

「あの作者ア！！」

む？電波か？

「はあ・・・まあいいか、じゃあ何処でやるんだ？」

「ここでいいだろ、今神に準備させてるからな、模擬戦が終われば帰れるだろうさ」

「そうか・・・ならいいか」

『当たって砕けるですねマスター』

「本気で砕けそうだ」

「砕かないさ、潰すから」

「余計ひどいだろ・・・」

まあ気にするな。

「じゃあ始めるぞ？」

「ああ」

『では・・・始め！！』

開始の合図はクロスがやってくれた。

「はああああああ！」

——無極四式・零——

「いきなりか！？」

「む、やはり避けるか」

「ぎりぎりだけだな」

「もう少し改良がいるな」

「次はこっちからだ！！」

——超電磁砲——

「レールガンか、なら」

——無極五式・雷切——

雷を切断する斬撃を繰り出す。

「はあ！？」

「どうした！それで終わりか？」

「まだまだ！！」

――未元物質――

「む？何かが違う？まあいいか」

――幻想殺し――

「体全部覆うなよ・・・」

「気合だ」

「理不尽すぎる」

「じゃあこっちからだ」

――無極零式改・虚無・零――

神速を超えた居合いでブラックホールを出す。

「うおっ！？洒落になってないぞ!?!」

テレポートか、なら。

――無極四式改・零時雨――

四式の居合いを連続で放つ。

「ぐっ!?!」

どうやらテレポートが間に合わなかったらしい。

「どうした？もう終わるか？」

「ああ、そうしたいけど・・・さすがに一発も当てずには納得でき

ねえからな」

「クク、なら次でラストにするかい？」

「ああ」

「なら全力で来い！」

——超電磁砲・フルパワー——

——無極終式・神々の黄昏——

お互いの今出来る最大で攻撃する。

「ぐうづづづづづづづ！！」

「はあああああああ！！」

ドカーン！！

勝負はついた。

「ハアハア・・・クソツ！負けたか・・・でもまあ一傷与えただけマシか」

「クク、まあ大丈夫だろうさ、もうそろそろ帰れるだろう、これは土産だ」

「これは？」

「一つはいつでも俺を呼べる電話だ、鳴らすだけでいい、もう一つは訓練用のアイテムだ、トーマに渡した奴と同じだから大丈夫だろう？」

「ああ」

「お前も俺もまだまだ強くなれるんだ、だからお互いに頑張ろう」

「ああ、次は勝つ」

「クク、ああ、楽しみにしておこう」

もうそろそろ帰れるみたいだな。

「じゃあな、春樹によろしく」

「あいつはしばらく」

何故？ああ、また何かしたのか。

「まあそれは後にして・・・ああ、じゃあまたな！」

「ああ、またな」

こうして当麻は帰った。

やれやれまだ来そうだ。

少し楽しみだがな。

そう思い家に戻った。

番外編16（後書き）

後書きコーナー！！

龍「さて、まだもう少しコラボは続く、気楽に待っていてくれ」

さて！感謝コーナー！！

龍「雨季様、RAIN様、KONA様、Jam様、メガネ様、けいくん様、感想ありがとう」

次の更新は月曜か火曜予定です！

龍「次回のコラボはリオン・マグナス様だ」

次回も精一杯頑張ります！！

龍「当然だ、ではな」

ではでは！！

番外編 17 (前書き)

今回はリオン・マグナス様とコラボです！

遅くなり申し訳ございません！！

いつも通りの駄文ですがどうぞ！！

番外編 17

前回のオリ主(笑)襲撃から数日。

今日は何事もなく過ごせると思い、ゆっくりしていると、

「すまんが……」

「またか……」

また転生者か……また俺最強じゃね?とか思ってる奴が来るのか・
・・鬱だ。

「で?今回の能力は?」

「宝具とかを使用可、後はとあるに出てくる超能力じゃな」

「はいはい、また同じやつか、少しはバリエーションを増やして欲しいね、まったく」

「そう言うでない、まあ考えが下衆じゃから遠慮なく潰してくれてよいからの」

「ああ、遠慮なんかしねエよ」

「(あ、ほぼ本気でキレておるの、ご愁傷様じゃな、自業自得じゃがな)」

さアて、さっそく潰しにいきますかア。

「クロス、転移」

『了解です……(誰ですか!ここまでマスターを怒らせたのは!?)』

さア、スクラップの時間だぜエ!!

どこかテンションが高い状態で敵のいる場所に向かった。

「ク、ククク・・・最高にハイってやつだ!!」

何処の吸血鬼だ？

向かってすぐにこんな台詞を聞くとは思わなかった。

む？他にも誰かが来る？いや・・・これは、

「落とされている?」

「うおおおおおおおおお!!」ドカーン!!

上から誰か落ちてきた。

誰だ？

「くっ!ど、何処だここは?確か・・・修行してたはずなんだけど
な・・・ん?」

「悠二か」

「ああ、龍斗か、という事は此処は龍斗のいる世界か」

「そうだが、何故来たんだ?」

「いや、理由は分らん、気がついたら落ちてた」

「そ、そうか」

ま、まあそれは後でいいだろう。

今は目の前の愚か者を潰そうか。

「悠二はどうするんだ?」

「何がだ?」

「いや、目の前のやつ見てみる」

「やつ?」

そう言いながら悠二は目の前の患者を見た。
見た瞬間に顔を顰めた。

「何だ？あれ」

「転生者だと、潰していいみたいだが？」

「なら手伝おう、最近少しだけストレスが溜まってな」

『坊ちゃんの言う事は気にしないで下さい』

「そ、そうか」

シャルティエも疲れているんだな。

まあ俺もストレス発散のためにも暴れるが。

ん？能力は50%でいくぞ？

『此処を更地にするつもりですか？』

「なら40%」

『・・・まあいいでしょう、いざとなったら特殊な結界を張ればい
いだけですしね』

なら最初からそう言え。

「ん？何だお前等・・・まさか俺の邪魔をしに来たのか!？」

「あゝあ、出会っちゃったか」

本当に出会いたくないやつだよな。

「それは同感だ」

『そうですね、坊ちゃんの意見に賛成です』

最近皆が読心術使えるんじゃないかと思う。

『使えませんか？』

「クロス・・・」

間違いなく使えるだろ。

「俺は神に間違っつて殺されたんだぞ！？ならお詫びで転生して何してもOKだろ！？」

「限度を考える馬鹿が」

「救いようがないな」

『救う気はまったくないですけどね』

「くっ！だ、だがな！俺は能力を貰ったんだ！一方通行の能力だけでも勝てるだろ！！！」

「ざアンねエンでしたア、俺も使えんだよオ」

バキッ！！

「グブツ！！！」

「うわあゝ痛そうだな」

『そうですね』

「な、なら約束された勝利の剣で！」
エクスカリバー

ああ、ますますイラつく。

「テメエみたいなクズがそんな大層な剣使ってンじゃねエよ！！！」

——無極一式改・牙穿——

ベクトル変換で威力を上げた刺突を喰らわせる。

「ぐううう！！！」

「ついでにコレも喰らえ!!」

フルンテイング
「赤原獵犬——」

射手が健在かつ狙い続ける限り、標的を襲い続ける剣……いや矢を悠二が放つ。

「ぐはっ!!くそっ!!くそっ!!」

「ちっ!狂化か?」

「いや、おそらく十二の試練だろう、コック・ハンド赤原獵犬は効かない」

「別にいいけどな、まだまだあるから」

「ああ、まっただ」

「くそっ!何なんだよ!お前らは!せっかく転生して自由な生活が出来ると思っただのに!!邪魔を……するな!!」

「超電磁砲——」

「お前が無害なら普通に祝福はしなくても消したりはしないさ、まあ大凶に当たったと思っただけで往生してくれ」

「幻想殺し——」

「むしろ大凶に選ばれるのは運がいいから喜ぶべきか?」

「いやいや、例え大凶が証だとしても嬉しくはないだろ?」

「クク、それもそうか」

「死ねえええええ!!」

「天地乖離す開闢の星——」

「おいおい、えらく物騒なものを飛ばしてくるな……別に構わな

いけどね」

――直死の魔眼発動――

「殺せるのか？コレ」

「ああ、簡単だよ、ナイフを通せばほら」

エヌマ・エリシユ
天地乖離す開闢の星は跡形もなく消えた。

「な、ば、馬鹿な！何故消えるんだよ！対界宝具だぞ！？」

「さて、未練は捨てたか？義理は果たしたか？過去は清算したか？後悔はないか？まああっても死ぬのは変わりないが」

「く、来るな！来るなよ！来るなあああああ！！」

――エクスカリパー・ガラティーン 転輪する勝利の剣――

とっさにコレを選ぶか。

「けど俺に攻撃するってことは無抵抗でやられる覚悟があるって」とだよな？」

「は？」

グシャツ！！

「龍斗！？何故避けなかった！」

「ぐ……これをを使うためだ」

――ヴェルグ・アヴェスター 偽り写し記す万象改――

俺の体は今全身が死に体だ。

よってこれを使えば……。

「今回のコレ改良させてもらった、これで俺が回復しようともお前はそのままだ」

「なっ!?!」

相手は永続的に動けない。

まあそれでも動く奴なんていくらでもいるが。

「ふう、まだ改良の余地があるな」

「心臓に悪いから止めてくれ」

「すまないな、試したかったからしてしまった」

「まあ無事ならいいさ」

「ぐっ!!ぐうっ!!!!」

「で?コイツはどうするんだ?」

「勿論、殺すさ」

コイツが此処に……この世界に来て最初に考えていた事がハーレムだからな。

まったく、何故同じ事しか考えれないんだ?

馬鹿か?

「や、やめてくれ!お、俺はもう何もしない!だ、だから!」

「そう言ってるやつをお前は見逃すか?」

「!?!?」

答えは簡単。

——無極極式・世界——

逃すはずがない。

「が、あ、ああ」

「これにて終幕でございます」

「俺あまり手伝えてないが」

「気にするな、なんなら模擬戦でもするか？」

「いや、今回は遠慮する、修行してたところだからな、少し疲れた」

「そうか、なら次は戦おう、思う存分な」

「あ、ああ（龍斗・・・お前も戦闘狂になったか）」

『（龍斗さん・・・戦闘狂になってしまったんですね、周りの影響
でしようか）』

何故だろうか・・・失礼な事を言われた気がする。

「さて、ならもうそろそろ戻るのか？」

「ああ、そっちの神が戻してくれるだろ？」

「ああ、大丈夫だと思うが（どうなんだ？）」

「（大丈夫じゃ、すぐに準備しよう）」

無駄に準備いいな。まさか・・・。

「（あんたが悠二を間違つて連れて来たとかないよな？）」

「（・・・汗）」

よし、OHANA SHIだな。

「じゃあな悠二、悩むのは勝手だが・・・それで手遅れになるよう
な・・・後悔だけは絶対にするなよ？少なくとも悪とかそんなのに
拘るな」

「ああ」

「そうしている限り俺はお前の味方であり友だ」

「もし道を間違えたら？」

「俺がぶん殴つてでも元の場所に引きずってやる」

「フツ、ありがとう、俺みたいな奴にそんな言葉をかけてくれるなんてな」

はあく分かってないな。

「過去に何があつたかは分からないし聞かない、だがな？過去は過去だ、いつまでも引きずつていいものじゃねえんだ、引きずるくらいなら背負え、背負つて前に進め・・・止まる事はいつでもできる、後ろを振り向くのもな」

だからこそ、

「前に進まなきゃいけないんだ、前進を忘れたら成長なんざできねえからな」

「・・・そうだな」

「さて、説教臭くなつちまったが・・・ようは自分の生き方を見つける、見つけたら貫き通せ、そこに後悔は絶対にするな、それだけだ」

「・・・ありがとう」

これで少しは考えを変えてくれればいいが・・・簡単には無理か。悠二の事は悠二を思ってくれている人達に任せるか。きつと変えてくれるだろうさ。

俺はその手助けが出来て、今の状態を未来の悠二と一緒に笑い話にできればいいさ。

「じゃあな、次また会えるときを楽しみにしている」

「ああ、今回はありがとう」

『ありがとうございます龍斗さん』

「気にするな、俺がしたくてした事だ、文句は言われても感謝されるような事じゃないさ」

「素直じゃないんだな」

「うるさい、さっさと戻れ、心配してくれる人がいるだろ？」

「ああ、じゃあな」

こうして悠二は帰った。

その後神に O H A N A S H I をしたのは言っまでもない。

番外編17（後書き）

後書きコーナー！！

龍「何故遅くなった？」

星海「やっぱり7人目のスタンド使いやってたら遅くなりました！！

龍「自業自得じゃねえか」

言い訳できません。

龍「するな」

さて、感謝コーナー！！

龍「そらしたな？」

コホン！！Jam様、メガネ様、雨季様、Rain様、夜神様、感想ありがとうございます！！

龍「次回はおそらくけーくん様がKONA様とのコラボで次がIFの話、その次がけーくん様がKONA様とのコラボ、そして番外編で本編だと思う」

多いですが頑張ります！！

龍「まあ本編はウェールズでの悪魔襲撃からの可能性が高いかな」

次回はおそらく水曜日だと思います!!

龍「それまで気楽に待っていてくれ」

では！また次回！！

龍「ではな」

番外編 18 (前書き)

今回はKONA様の『とある魔砲の転生物語』からコラボです！
初めてなうえにこんな下手な文・・・鬱だ死のう。

こんな気分で書いたので今まで以上に駄文な上にキャラが合ってる
か不安です。

それでもよければどうぞ！！

番外編 18

またまたうつとおしい転生者が来た時から数日。

「今日こそゆっくりにできるはずだ」

(それはフラグでは?)

(それを理解して言ってるのだろ?)

(それだと面白いですね)

(俺は退屈だけだな)

くっ……好き放題言うな。

「すまんが……」

「またか」

本当に原作始まるまで平穩が来ないのだろうか。

(寧ろ原作が始まったら余計無理だろオがよオ)

(ですよね、諦めては?)

はあ。

「で?今回はなんだ?転生者狩りか?」

「いや、今回は間違っ来てしまった者を迎えに行っほしいんじ
ゃ」

「……まだ楽な方か」

(まアそうだろオな)

(まだ確信を持たた訳ではないですが、楽なのでは?)

(暇だよー)

(帰れ(って下さい)(

(2人が虐めてくる!?)

(虐めじゃねエよ、苛めだ)

変わりなくないか? まあいい、早く迎えに行つて帰つて寝るか。

「場所はつと・・・」

『どつやら結構近くみたいですな』

「なら早く行くぞ」

『了解です』

(戦闘になったら変われ、いいよなア?)

別に構わない。

そう返答し俺は向かった。

「ここか」

『そつみたいですな』

よく分からない所に来た。

だが・・・大丈夫だろ、同化できているからここは別の世界ではないだろうしな。

「で?そこにいるのは誰だ?出てこないなら消すぞ?」

そう少しだけ殺気を向けるとすぐに、

「すまない、此処はどこか分かるか?」

と聞かれコイツが今回の迷子か。

「何故か失礼な事を言われた気が・・・」

「気のせいだ、で？お前は？俺は森 龍斗だ」

「俺は小鳥遊 琥那だ、で？此処は何処なんだ？」

質問に答えた。

「そうか・・・俺は戻れるのか？」

「ああ、だから迎えに来た」

どうせあの神のせいだろうしな。

（確定ですか）

当然だろ？

（哀れだなア）

それがあの神だ。

「さて、どうする？いつでも戻れるか？」

「なら戦ってくれるか？」

どうしようか。

（俺に代われ、約束だろオがよオ）

そうだったな。

「分かった、此処でいいか？」
「ああ、頼む」

そして入れ替わる。

「さアて、さっさとやりますかア」
「変わった？」
「まアどオでもいいだろオ？」
「それもそうか」
「じゃア始めるぞオ」
「ああ！」

――未元物質――

へエ？コイツも超能力を使いやがるのか。
面白エ。

「狩られるだけの存在にはなンじゃねエぞー！」
「なっ！？反射！？」

未元物質だろうと関係ねエ。全てを反射するだけだぜエ！！

「くっ！なら！」
「クク！そうだよなア、反射には反射、ベクトル操作にはベクトル操作だよなア！いいぜエ！もっと本気出してみろオ！！」
「くっ！！」

コイツ・・・能力に慣れていねエのか？
っーかよオ。

「死にてエのかアテムエはア!!!」

「なっ!?!」

「何だ何だよ何ですかア!本気で来ねエのならそのまま殺すぞ!殺す気で来い!それでも死にてエならギネスに載っちまうぐれエ愉快な死体オブリエに変えちまおうかア!」

「・・・」

よし、それでいいんだよ。

「さアて、仕切り直したア、本気で来いよ?」

「ああ」

クク、いい目じゃねエか。

護りたいモノのためなら何でもしそうだなア。
それだけの覚悟があるってことだよなア。

「さアて!簡単に終わるなよオ!!!」

「はあああああああ!!!」

その後この戦闘は3時間続いた。

「で?気は済んだかよ」

「・・・ああ、また強くなれそうだ」

「なれそうじゃ困るんだよ、強くなれ、じゃねエと護りたいモンまで護れねエからなア」

「・・・そうだな」

「さて、もう帰るんだろオ?さっさと帰りやがれ」

ガスッ!

「イテエ・・・ひでえな」

「じゃあな、また会えんだろ」

「ああ、じゃあな」

「あア、生きてりや会えんだからな、次にはもっと強くなってるよオ？」

「勿論だ」

「じゃあな」

こうして琥那は帰った。

アイツも大事なモンが見つかったら嫌でも強くなんだろ。覚悟も信念もな。

（あなたの信念は？）

決まってるんだろオが。

「護りたいモンは全力で護る、たとえどんな事を言われよオとなア、別に誰かのためじゃねエ、ましてや赤の他人なんてどオでもいい、自分のために護ンだよ」

（自己中心的ですな）

「クク、だからどオした、所詮人間は自分が中心だろオが、まア例外はいんがなア」

コイツだとな。

（まあ良いですよ、本体に害がなければ・・・ね）

「本体に影響を与える訳がねエだろうがよオ、馬鹿かア？」

(フフ、まあいいでしょう、では戻りましょうか、今日は疲れまし
たしね)

「そオだな、さっさと帰って寝るか」

こうして今日という日が終わった。

やっぴ次会う時はどう変わってるのかが楽しみだ。

番外編18（後書き）

後書きコーナー！！

龍「おい」

どうかした？

龍「また星海していたる？」

う、そ、ソシナコトナイデスヨ

龍「ならそのレベル23のデータは何だ？昨日までは14だったよなア？」

ひい！？す、すみません！！

龍「ストーリーはまだ次の帝国に行く前だからな」

ケルベロスにやられてショックでした。

龍「体力が5000だったからな、相手」

さ、さて！感謝コーナーだあ！！

龍「Jam様、けーくん様、雨季様、リオン・マグナス様、メガネ様、KONA様、感想ありがとう」

盗賊の手袋って意味あるのかな？

龍「さあな、というよりまだ星海の話をするか」

だって4万も払って買ったんだよ？

龍「知るか」

ひでえ。

龍「次はEFだ、おそらく東方になるだろうが・・・タイミングはどうしようか」

多分紅魔郷かな？もしくは緋想天。

龍「・・・まあいつも通り過度な期待せずに見やがって下さい」

みな○け!？

龍「明日が休みだから早ければ明日、遅くても金曜に投稿予定だ」

ではでは!

龍「ではな」

番外編19（前書き）

今回はIF編で東方です！

でも紅魔郷編はうる覚えだったり・・・。

キャラ崩壊確定ですがそれでも、

「構わん、やれ」

という方はどうぞ！

番外編 19

此処は・・・確か俺は別の神に飛ばされたはず・・・だよな？
何故だろうか・・・ここは居心地がいい。

『マスター、人が来ます』

「何人だ？」

『一人ですね』

「そうか」

なら此処が何処か聞くか。

「誰？参拝客かしら・・・なら素敵な寶銭箱はあつちよ」

「む？」

博霊 霊夢との出会いだった。

それから数日。

急に霧が出始めた。

「何だ？この霧」

「知らないわよ・・・洗濯物が乾かないじゃない」

「なら解決しに行くか？」

「ええ、行くわよ」

「了解だ」

突如現れた紅い霧。

それを何とかするために俺は霊夢と共にでた。

「おっと！私も手伝うぜ！」

「魔理沙か」

「おう！楽しそうなんだから私も混ぜる！」

「勝手にしなさい」

「ああ！勝手にするぜ！」

途中で魔理沙と合流し先に進む。

「にしても面倒だなあ〜さっきも変なやつがいたし」

「変なやつって誰の事よ」

「誰もあんたの事って言っていないぜ」

「当然だな」

「で？何でそんなに手を広げてるのさ」

「聖者は十字架に磔られました」っていつているように見える？」

「人類は十進法を採用しました」って見えるな」

そう見えるのか？

「で？誰よアంతタ」

「さっき会ったじゃない

あんた、もしかして鳥目？」

「人は暗いところでは物が良く見えないのよ」

「俺は（私は）見える」「」

「あんた達は例外よ」

「そうね、夜しか活動しない人も見たことある気がするからそうでしょうね」

「それは取って食べたりしてもいいのよ」

「「いいの」「」

「そーなのかー」

お互い暢気だな。

「で、邪魔なんだけど(だぜ)」

「目の前が取って食べれる人類？」

「良薬口に苦しって言葉知ってる?(か?)」

こうしてルーミアとの戦いが始まった。

「トドメだ!」

――魔砲「星打ち砕きし閃光」――

「きゃあああああ!」

「良薬っていつても飲んでみなけりゃわかんないけどね」

「そりゃそうだ」

そして次に進む。

すると湖が見えてきた。

「この湖こんなに広がったかしら？」

「いつもはもつと狭いのか？」

「霧で見通しが悪くて困ったわ」

「霧は鬱陶しいからな」

「もしかして私って方向音痴？」

「道に迷うは、妖精の所為なの」

「あらそう?じゃ、案内して?こら辺に島があったでしょ?」

えらく暢気だな。

「あんだ、ちったあ驚きなさいよ目の前に強敵がいるのよ?」

「標的?こいつはびっくりだ(ね)」

「ふざけやがって」

「いたって真面目だが？」

「あんたなんて、英吉利牛と一緒に冷凍保存してやるわ!!」
「お断りだ」

そしてチルノとのバトルが始まった。

「トドメだぜ！」

――恋符「マスタースパーク」――

「お、覚えてろく!!」

「何処の三流の悪党だ」

無事に終了。

そして先に進むと、

「む？何か御用ですか？」

「ああ、アンタのこの主人にな」

「この霧を何とかしなさい」

「えくと・・・」

「面倒だ！さつさと行こうぜ！」

「さ、させませんよ！？というより何者ですか!？」

「ただの普通の巫女よ」

「普通の魔法使いだぜ」

「普通の吸血鬼だ」

「確か巫女は食べてもいい人類だって言い伝えが・・・」
「言い伝えるな！」

どんな言い伝えだ。

「と、とにかく！此処は通しません！」
「なら実力で押し通る！！」

美鈴との戦いが始まった。

「これでおしまいよ！」

――霊符「夢想封印」――

「ううゝやられた」

「さあて、案内してもらおうぜ？」

「すみません、お嬢様」

そしてついに紅魔館に入ることが出来た。
そして図書館へ。

「本がいっぱいあるぜ！」

「そうだな」

「後でさっくり貰っていい？」

「持ってかないでー」

「持ってくぜ」

「それはただの泥棒だろうが」

「失礼な、死ぬまで借りるだけだぜ」

それを盗むというんだが。

「ええーと、目の前の黒いのを消極的にやっつけるには……」
「（載ってるのか？）」「」

「それにしてもこんな暗い部屋で本なんか読めるのね？」
「私はあなたみたいに鳥目じゃないわ」

ルーミアにも言われたな。

「だから、私は鳥目じゃないって……って、そうじゃなくて、
あなたが、ここのご主人？」

「お嬢様に何か用？」

「霧の出しすぎで、困る」

「じゃあ、お嬢様には絶対会わせないわ」

「邪魔させないわ」

「また実力行使か……構わないがな」

「……ところで、あんた達、誰？」

あつ、自己紹介してなかったな。

「とりあえず魔理沙！頼んだ」

「おう！まかせろ！この本はいただくぜ！」

「そうじゃないんだが……」

「さっさと行くわよ！」

「ああ、魔理沙……ほどほどにな」

「おう！」

ここを魔理沙に任せて先に進む。

何せ時間がない（ページ数的な意味で）からな。

『メタ発言はやめて下さい』

「いいじゃねえか、別に」

「そんなのはどうでもいいから先に進むわよ！」

廊下を飛んでいると、

「此処から先は通さないわ」

「メイド？」

「メイドね」

「お嬢様には近づけさせないわ」

「・・・霊夢」

「何よ」

「先に行け」

時を止めるくらいならどうとでもなるしな。

「わかったわ、負けないでよ」

「勿論だ、すぐに終わらせてそっちに向かうから安心しろ」

『世間ではそれを死亡フラグというのでは？』

「気のせいだ」

「いいかしら？」

「ああ、じゃあ頼んだぞ霊夢」

「ええ」

「行かせないわ」

「行けるさ、さあ俺が相手だ」

「無駄よ」

――幻世「ザ・ワールド」――

「それこそ無駄だ」

「なっ！？何故動けるの！？」

「時を支配しているのはアンタだけじゃないさ」

「くっ！」

――幻符「殺人ドール」――

「効かん」

――無極四式・零――

居合いで全て落とす。

「なっ!？」

「じゃあな、次は楽しく話をしたいな」

――必然「キングクリムゾン」非殺傷V e r r i――

これで終わったか。

気絶した咲夜を運んでから先に進んだ。

霊夢は大丈夫だろうか。

そう思ったが、とりあえずは先を急ぐ事に決めた。

そして霊夢のいる場所に着いた。

「これで終わりよ!」

「ええ!終わりにするわ!」

――霊符「夢想封印」――

――神槍「スピア・ザ・グングニル」――

2人のスペルがぶつかり合う。

「終わったか」

「ええ、終わりよ、さあ霧を消してもらおうよ!」

「分かってるわよ・・・」

「ん？もう終わったのか？」

「魔理沙・・・その本の山はどうした？」

「借りてきたぜ！」

「返して来い、もしくは減らせ」

「ちえ〜面白くないぜ」

「私も面白くないわ、だってせっかく久々に外に出られたのにもう終わってるから」

「誰だ？」

「私？私はフランドール・スカーレット！よろしくね！」

「ああ、よろしく、俺は森 龍斗だ、で？何するんだ？」

「遊んでくれるの！？」

すごくキラキラした目で言われるとな。

こつこつ時は何て言えば・・・そつだ。

「まいったね・・・そんな目で誘われたら断れない」

合ってるか？

『間違いなくミスですね、相手のテンションがMAXですよ？』

「仕方ないか・・・じゃあどれで遊ぶ？死合いか？殺し合いか？それとも・・・弾幕ごっこか？」

「弾幕ごっこ！」

「いいだろう、さあ始めよう」

「いくよー！」

――禁忌「クランベリートラップ」――

「いきなりか、なら」

――霧符「ミスト・ボデイ」――

体を霧に変えて避ける。

「すごいすごい！じゃあ次はコレ！」

――禁忌「レーヴァテイン」――

剣で来るなら槍で向かおう。

――神槍「グングニール」――

型月基準のグングニールで向かおう。

「すごい・・・ハハハ！スゴイネオニイサン！ナラコレデモコワレナイヨネ？」

ちっ！狂気に飲まれたか？

――禁忌「フォーオブアカインド」――

フランドールが4人に増えた。まずいな。

「イクヨ？」

「スコシハタノシマセテネ？」

「ハハハ！モットタノシモウヨ！」

「マダコワレナイデネ？」

――禁忌「カゴメカゴメ」――

――禁忌「恋の迷路」――

――禁弾「スターボウブレイク」――

――禁弾「カタディオプトリック」――

一気に4つのスペルか。
なら、

「これを使うか」

――境界「全て止まりし世界」――

相手のスペルを無効化する。

「ナ、ナニソレ!?!」

「インチキだな」

「そうね」

酷いな、まあ卑怯なのは認めるが……霊夢には言われたくない。

「さて、隙だらけだ」

「!?!」

分身を2体潰す。残りは1体と本体のみ。

「クツ!マダダヨ!マダノコツテル!」

「イクヨ!」

――禁弾「過去を刻む時計」――

――秘弾「そして誰もいなくなるのか?」――

おいおい、まあ何とかなるが……。

――絶望「全てを否定する世界」――

相手の弾幕を全て打ち消すかのように弾幕が撃たれる。
だが少し足りないか。
なら、

「ほら、追加だ」

――希望「全てを受け入れる世界」――

さっきのスペルに比べると話しにならないくらいの弾幕のなさだ。

「フザケテルノ？ソナナノジャカテナイヨ！」

「さあ？まあ見ておけ」

その弾幕は相手の弾幕に当たった瞬間に、相手の弾幕を飲み込んだ。

「!？」

「全てを受け入れ、そして吸収する、これがこのスペルだ」

「また卑怯なのが出てきたな」

「ええ、そうね」

「というより落ち着きすぎじゃないかしら？」

「龍斗が負けるはずないじゃない(だろ)」

「そういう事ね」

フツ、信頼されているな。
ならその信頼に応えるか。

「そら、スペルブレイクだ」

「クッ！」

「そして分身はさよならだ」
「!?!」

これで本体のみ。
もうそろそろ終わるだろう。

「次で終わりにしようか」
「イイヨ、デモカツノハワタシ!」
「クク、そうはさせねえよ、まだ負ける訳にはいかないんだ」

「――QED」495年の波紋「――
――虚無」全て失いし世界「――」

お互いの全力をぶつける。

「ハアアアアアア!」
「うおおおおお!!これで!終わりだ!」

ドカーン!!

フランドールは吹き飛び、戦いは終わった。

で、今回の異変は霊夢と魔理沙の2人で解決した事にした。
2人は納得いかないという顔をしていたが勘弁してほしい。
射命丸が煩いからな。

あれから紅魔館に行くと必ずフランが迎えに来る。
懐いてくれるのは嬉しい、それにあの子の狂気は半分以上を消した
からもう大丈夫だろうしな。
そういえばレミリアやパチエリーもやたらと構ってくれるな。

それもそれで楽しいからな。

『マスター・・・相変わらずですね（射命丸さんも好意を持っているんですがね）』

「？どうかしたか？」

『いえ、さあ宴会を楽しんで下さい』

「そうだな」

『ええ、是非楽しんで下さい（ニヤリ）』

「む？」

どうしてだろうか。寒気が。

「どうかしら？此処は」

「ん？ああ、紫か」

「ええ、で？」

「ん？ああまあ楽しいよ、それに・・・」

「それに？」

「いや、何でもないさ、さて！さっさと飲むぞ！」

「気になるわね・・・まあいいわ飲みましようか」

「龍斗！私のグラスにもワインを入れなさい！」

「龍斗お兄ちゃん！私も私も！」

「うお！？レミリアにフランか、了解だ」

「フフ、楽しそうね」

「ああ、この日常を護る、そう決めるくらいにはな」

「さて、じゃあ龍斗には一言言ってもらおうかしら」

「勘弁してくれ」

俺はそういうのは苦手なんだよ・・・。

「フフ、冗談よ、でもそうね・・・ただ一言、乾杯だけ言ってくれ

るかしら?」

「それくらいなら構わない」

まあ乾杯だけならな。

「じゃあどうぞ」

「ん・・・じゃあ異変解決祝いに・・・乾杯！」

「」「」「乾杯!!」「」「」

こうして宴会が始まった。

この日常を壊したくはない。

この日常を護ろうと心に決めた。

え?宴会?酒を飲んでから記憶がない。

ただ・・・周りのやつが全員真っ赤だったな、しばらくの間。

何があったんだらうか?

番外編19（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回かなり適当じゃないか？」

いやいや、これが私めの全力でございます。

龍「そうか、なら精進しろ」

イエッサー！！

龍「感謝コーナーだ」

ユタ様、雨季様、メガネ様、けーくん様、夜神様、Jam様、感想ありがとうございます！！

龍「今回はけーくん様とのコラボだ」

次は多分日曜です！

龍「まあ楽しみにしている人がどれだけいるか分からんが・・・遅らせるなよ？」

い、イエッサー！！

龍「ではな」

ではでは！また次回！

番外編20（前書き）

今回はけーくん様とのコラボです！
いつも通りグダグダですがどうぞ！

番外編20

今日は特に何もする事がなかったので、少し別荘を改良していた。

「これでいいか」

『どこまでやれば気が済むんですか？今の別荘・・・地球より耐久が高いじゃないですか』

「さあ？満足はしていない、まだまだ改良できるだろうさ」

まあこれで全力で修行できるかな？別荘内ならば。

「すまんが」

「またか」

暇になると狙ったように来るな。

面倒だが・・・神の頼みだ、断れない。

「また転生者か？」

「うむ・・・その、何だ・・・」

「？」

今回はえらく言い辛そうだな。

「今回も一人巻き込んだのもあるんじゃないか・・・」

「それもO H A N A S H Iするとして・・・もう一つは？」

「転生したやつは・・・殺しを娯楽として楽しむやつでの・・・この世界に来た理由は・・・この世界の人間全員を殺すためじゃ」

「・・・」

まだハーレム狙いのクズよりはマシだと喜ぶべきなのか・・・こんなやつを送り込んだ別の神を恨めばいいのか。確実に後者だな。

寧ろつぶすか。

「まあそれは阻止するとして、今そいつは何処に？」

「まっすぐこっちに向かっておるよ、後巻き込んだ者は今ここに来た、寧ろ送り込んだので大丈夫じゃ」

いや、巻き込まれたやつにとってはたまったもんじゃねえだろ。はあ、誰が来たのか、知り合いだと嬉しいがな。

「クロス、モード刀」

『了解です』

さて、準備はできた。

後は待つだけだ。

「うおおおおおー!!」

「何だ？」

『上ですね』

上を見ると誰かが落ちてきた。

「大丈夫か？」

「くっ、死ぬかと思ったぞ」

「まあ大丈夫だろ、で？巻き込まれたのはお前か剣介」

そう、巻き込まれたやつは剣介だった。

「巻き込まれた？」
「それはだな・・・」

説明中

「なるほどな」

「すまないな、こっちのミスだ」

「気にしていないさ」

「まあこれからもっと厄介なやつが来るんだが」

「またハーレムとか言ってる転生者か？」

「いや、殺人を娯楽として楽しむロクデナシだよ」

まったく・・・マジで潰すか？

「どうするんだ？」

「徹底的に潰す、俺の知り合いを殺される訳にもいかないし、友を殺される訳にもいかないしな」

「そうか、手伝おうか？」

「ああ、頼む」

さて、もうそろそろ来るだろうが・・・。

「ククク・・・さあて、最初の相手はお前らか？」

「そうだが？まあ最初で最後の殺し合いにしてやるから覚悟を・・・
いや、貴様に言っても無駄か、獣に語る必要はないな」

「いや、獣にも劣る」

それもそうか。

「クク、俺を殺す？無理だな！俺を殺す事はできない！何故なら・・・

・
」

「不死身になつたからか？」

「そうだ！これで殺し放題だ！最高じゃねえか！」

「・・・馬鹿だな」

「何？」

「不死身なんてものは簡単に崩れる、ハルペーだつてあるし直死だつてある」

そう言いながら俺は直死の魔眼を発動させる。

剣介はハルペーを取り出した。

「だが、攻撃させずに一方的に殺せばいい話だ、クク、死んだと思えばまた殺せる・・・ああ、夢みたいだ」

「夢で終わらせてやる、一方的に殺される者の辛さを知れ、怖さを知れ、そして・・・その絶望を背負つたまま死ね」

「何・・・言つてやがる」

「ここで死ねと言つたんだ、二度も言わせるな」

剣介も準備は出来ているな。

さて、

「俺は十七分割なんて優しくはないぜ？やるなら粉微塵だ」

「それには賛成だな、コイツはイラつく」

「ちっ！まずはお前等を殺してから他のやつを殺すか！」

「させるとでも？」

「へっ！貰つた能力があれば余裕だ！」

「ク、ククク、ハハハハハハハハハハハハ！」

「な、何だ？」

「りゅ、龍斗？」

「俺達を殺す？面白い事を言つんだな、腹が擦れそうだ、いいぜ、

殺す覚悟があるなら・・・殺される覚悟ぐらいあるんだろうなあ？」

ククク、もう我慢できねえ。

今回は50%だ。

「クロス、50%だ」

『ここを消す気ですか？』

「そうならないように結界を張るさ」

『ならいいですが』

「剣介」

「なんだ？」

「巻き込まれないように気をつけてくれ」

「・・・分かった」

「クロス、モード刀&ナイフ」

『了解です』

さて、

「さあ殺し合おう」

「クク、さあ楽しもうぜ！」

「狂ってやがるな」

それには同意するが・・・人の事をあまり言えない気がするな俺の場合。

「剣介、宝具で攻撃してくれ、何を使っても構わない」

「分かった、任せろ」

「おいおい！さっさと来いよ！来ねえならこっちから行くぞ！」

そっつい向かってきた。

なら、

――虎落笛――

すれ違いながら攻撃する。

「なっ!?ぐっ!」

「今だ」

「ああ、いくぞ!」

――突き穿つ死翔の槍――

ゲイ・ボルク

「があああああ!」

まだ無理か。

「くそっ!くそっ!死んで堪るか!俺は生きて殺し続けるんだよ!
!」

「知るか、ここがお前の終焉だ、ああ、そもそもカタチが悪いんじゃないのか?優劣を競うのなら、腕の一本や二本、増やす覚悟が必要だろうか?」

「それは何か違う気がするぞ?」

「そうか?コイツは優劣を競っているのもあるからな、だからそう思っただけだ」

「くそっ!嘗めやがって!」

「さあ殺すんだろ?ならかかって来いよ」

「ふざけるな!」

――閃鞘・八穿――

七夜の技？まさか・・・コイツは、

「殺しの技術を望んだのか？」

「よく分かったじゃねえか！ならとつとと死ねや！」

「無理だな」

「まっただ」

――忌み斬り虎落――

相手に攻撃し、浮かせる。

「いくぞ！」

――メロダック原罪――

剣介がメロダック原罪で斬撃を喰らわせる。

「があああああああああああああ！！！」

「うるさい、少しは静かになれ、たかが死に掛けただけじゃねえか、そのくらいで発狂してんじゃねえぞ」

「十分発狂するだろ、普通なら」

「こつこつやつに普通を求めるなよ」

「それもそうか」

「負けてたまるか！死んでたまるか！まだまだ殺し足りねえんだ！」

「奈落より這い山河を越え大路にて判を下す、ヤマの文帖によると、
アンタの死は確定らしい」

「ふざけるなああああああ！！！」

「吾は面影糸を巣と張る蜘蛛、
よつこそのすばらしき惨殺
空間へ」

——無我識 心空妙有——

連続で斬りつける。

「台詞は七夜で技は両儀なんだな」

気分だ。

「ガフツ！」

「行き先は決まったか？」

地獄に落ちたら、閻魔によろしく言っといてくれ」

「まだだ！」

「もう終わりだ」

——是・射殺す百頭——
ナインライフズ・ブレードワークス

剣介が追撃を入れる。

「お、俺は死なない！」

「いや、これで終わりだよ」

——無極極式改・終焉——

アーチャーアンリミテッドブレイドダンスの無限の剣舞もどきから七夜の技、両儀の技を決め、無極全ての技を喰らわせ、とどめに閃鞘・迷獄沙門に無垢識 空の境界＋無極四式・零での居合いを同時に喰らわせる。

「オーバーキルだな」

「まあ終わったからいいだろ？」

「それもそうか」

「く、くそ・・・もう終わりか・・・ちくしょう、殺し足りねえ」
「知るか、その未練がお前には相応しいんだろつな」
「くそ・・・が」

こうして転生者は死んだ。

まったく・・・他の神はクズばかり送りやがる。

もうそろそろ我慢の限界だぞ？

「これで終わったからお前を元の世界に戻そう」

「分かった」

「じゃあな、またゆつくりと会えることを願おう」

「そうだな」

こうして剣介は元の世界に戻った。

土産は渡したから大丈夫だろ。

まあ内容はトーマ達と一緒にのやつ+別荘だがな。

これで剣介も強くなってくれると嬉しいな。

さて、帰って寝るか。

これから忙しくなりそうだからな。

番外編20（後書き）

後書きコーナー！！

龍「案外東方が人気だったな」

東方だからね！

龍「今回剣介あまり出なかつた気が・・・」

気のせいですよ！俺も精一杯頑張りました！

龍「まあ納得いかなかったら感想にでも書いてくれ」

全力で直します！余裕ができたんですが。

龍「感謝コーナー」

ユタ様、メガネ様、KONA様、ケルベルス様、夜神様、けーくん様、感想ありがとうございます！！

龍「前回の東方が思ったよりも好評だったのでここでアンケートだ」

- 1、番外編でたまにやる
- 2、別の作品として投稿する（龍斗が主人公なのは変わらない）
- 3、しなくていいよ！
- 4、これは嘘をついている味だ！

龍「またふざけたな」

気にしない気にしない！

龍「次回の更新は一応月曜か火曜だ、のんびり気長に待っててくれ」

では！また次回！

龍「ではな」

番外編 21 (前書き)

今回は短いです。

後キヤラ崩壊。

それでもよければどうぞー!!

番外編 21

今日は久々に皆で集まる事になった。

「久々？だな」

『ええ、まあ別荘にいるせいでしょうが』

「それもそうか」

別荘の設定は基本中の一日が外の一時間だが、時々中の設定を5日から1年くらいにしていたりしてたからな。その後ひたすら寝たが。

「さて、何故か置いてある手紙が気になるんだが・・・読むべきか？」

『そうですね、マスターあてですしね』

さっそく読むことに。

何々・・・。

「これを飲め、拒否権はない b y コダイ 追伸 アルとアリカには服を渡しているからそれを着ろ」

「何・・・だと？」

『あゝ、どんまいです、マスター』

くそ・・・俺が何をした。

『それを本気で言うからたちが悪いですね』
「？」

あゝ攻撃した事か？

『それですね、多分、まあ諦めましょうか』

「くっ！む？まだ書いてある」

「その前にこれを飲め、飲まなければ・・・ byコダイ」

何が起るんだよ。

まあ飲んでも死にはしなだろ。

『では飲むのですか？』

「ああ、それしかないからな」

さて、不味くないといいな。

ゴクッ！

微妙だな。

で、変化はなしか？

『ま、マスター』

「ん？どうかしたあ？」

は？

「ど、どういう事？な、何でまた女になってるのぉー！ー！？」

しかも子供になってる上に能力まで使えなくなってる！？

「あの2人に・・・特にアルにはばれないようにしないと・・・」
『マスター・・・すでに遅かったみたいだ』

「フッフ、いい事を聞きましたよ」

なっ!?!何時の間に!?!ちい!逃げない!

「残念ですが逃げられませんよ、アリカさんもいるのですから」
「何!?!」

「すまぬな、楽しみだったのな」

『マスター、諦めましょう、今は抵抗できませんからね』

「お前・・・楽しみにしてるだろ、クロス」

『ソナナコトナイデスヨ』

「後で覚えてるよ」

「さあ覚悟は出来ましたか?」

「くっ!や、やめる!」

「その願いは叶いませんよ、残念ですが」

逃げるなら・・・いや、もう遅いか。

「フッフ、似合ってますよ、龍斗」

「よ、よく似合ってるぞ?」

「慰めにもなんないわよ・・・」

口調まで女だし・・・今の格好?言っの?

『マスター、青のスク水似合ってますよ』

「言うなー!!」

最初に着せられたのはアルが渡された方である。
嫌な予感しかしなかったが・・・諦めました。

「うう／＼／＼」

『ああ！恥らうマスターも最高デス！』

「／／／」

「フフ、最高ですね」

「なあなあ詠春、アイツ本当に龍斗か？」

「あ、ああ、確かに龍斗だ／＼／」

そこ！顔を赤らめるな！

「つ、次はこっちの番だ、こ、これを着てくれんか？」

「うう／＼ど、どうせ逆らえないんでしょ！なら・・・好きにすればいいじゃない」（涙目＋上目遣い）

「！？／＼／龍斗ー！！」

「え、え！？あ、アリカ！？」

な、何で抱きついてくるの！？

「さあさあ！次はコレを着るがよい！」

「ちよつ！？」

そして着替えさせられた。

「う・・・恥ずかしい、さっきのも恥ずかしかったけど・・・」

「似合ってますよ、メイド服」

「／／／」

あつ、アリカが真っ赤だ。

「可愛すぎるー！...！」

「きゃっ！？な、何をするの！？や、やめて！」（涙目＋上目遣い）

「龍斗ー!!」

アリカが暴走したあ!?

『マスターが可愛すぎるのがいけないんです!』

「クロスまで!?!」

「フフフ、フフ、フフフフフフ」

「アルも壊れた!?!」

なんでこんなカオスなの!?

(完全にあなたの所為ですし、あなたの性格も破綻してしまってますね)

(恐ろしい薬だなアオイ、シヤレになつてねエぞ?)

(仕方ありませんよ、ある意味自業自得ですしね)

(確かにねー、まあ今回は運がなかったって事で!)

人事だね!?

(早く戻って欲しいのですが・・・どうやら明日まで戻りそうになるので、ならほっとくのが一番かと)

(確かになア、めんどうだしなア、まア頑張れや)

「くぅぅ、ま、まだ続けるの?」

「ええ、勿論ですよ、フフフフ、楽しみです」

「えー!? あ、後何着着ればいいのか?」

「え〜と・・・後30着ですね私のほうは」

「え? じゃ、じゃあアリカの方は!?! す、少ないよね!?!」 (涙目)

「うっ! あ、後・・・25着・・・ガフツ!」

「あ、アリカー!?!」

「わ、我が生涯に一片の悔い無し！」

「アリカ!？」

「巨星墜つか・・・」

「ナギは何でそれを知ってる!？」

巨星ではないでしょ!？

(もう跡形もないですね)

(まア戻ったら悶えるんだろうがなア)

(ですね、それを楽しみにしておきましょう)

(オマエ・・・誰かに似てないかア？性格とか特になア)

(気のせいでは?)

心の中での会話を背景に思ったことは・・・、

「誰か！助けて下さい！」

別に歌は流れませんが。

その後復活したアリカとアルにひたすら着せ替えをさせられた。
え？他に着た服？言わせないで下さい・・・。

『可愛かったですね、チャイナやバニー・・・あとは浴衣etc』
「言っつなー!／／／」

くそ・・・もうやだ。

番外編21（後書き）

後書きコーナー！！

龍「もう二度とあんなことするか・・・」

でももしかしたらまたするかもね。

龍「orz」

さて！感謝コーナー！！

龍「・・・ユタ様、ケルベルス様、Jam様、メガネ様、雨季様、けーくん様、夜神様、感想ありがとう」

前回のアンケートの結果、？が圧倒的だったので、別作品で投稿する事になりました！わーぱちぱち！

龍「まああまり期待するな、こいつの駄文だからな」

酷いなあ〜！！

龍「テンションがウザイ、どうした？」

いや〜攻撃が来てたら自棄になるに決まってるじゃないか！

龍「そうか、まあ・・・じゃあな」（テレポート）

逃げた！？

で、では！次回の更新はおそらく木曜です！

東方もそのくらいに投稿しようと思います。が過度な期待はしないで下さいね？まあ大丈夫でしょうが。

さて、にげ・・・ぎゃああああああああああああああ！！

ネギま編 第9話(前書き)

今回は短い上に「訳がわからないよ」状態です。
へへ……やっぱ俺って……可能を不可能に……！

ネギま編 第9話

京都に行ったあの日から数年・・・色んな事があった。

たとえばナギに頼まれてナギの息子・・・ネギの世話をするために今は向かっているが、その前には詠春の娘の木乃香やその友達、刹那の様子を見に行ったり、まあそのときは帰るときに大分泣かれたが。

後はアスナに色んな勉強を教えたり、魔法世界でテオドラやラカンに会いにいたり、アリカと仮契約したり、それを知って怒りながらテオドラが仮契約してきたり・・・。

「あれ？碌な思い出がない気がする」

『気のせいですよマスター』

そんな俺はさっき言った通り、ナギに頼まれたのでネギの様子を見に来た。

さすがに原作同様な状態は酷いからもう少し常識を学んでから向かわせようと思っている。

仮契約カードはどんなのかって？想像にまかせ・・・いや、「冗談だ、まあもう少ししたら見せる機会もあるだろうさ。」

『マスター、もう少しで着きますよ』

「そうか、何故か魔力反応というか、悪魔の反応がするというか・・・」

『まあぶっちゃけ襲撃されてますからね』

は？

「それを早く言え！」

『聞かれませんでしたし』

「まあいい、急いでいくぞ！」

『了解です』

どうやらいきなり使うはめになりそうだ。

急いで向かう事数分。

目の前には火の海が広がっていた。

「まずは生き残りを探すのと火を消すのを優先するか」

『了解です』

さすがにこれは酷いからな。

此処は分身に任せるとして、

「俺はネギの元に向かうか」

「了解です、早く向かってくれるとありがたいのですが」

「ああ、任せたぞ？狂識」

「ええ、大丈夫です」

ここのんびり話しているように見えて実際は周りの悪魔を殲滅中だ。
数が多いな。

「さて・・・ネギは無事だろうな」

そう思いながらも探していると、遠くから雷の暴風が見えた。

ナギが来たか。ならネギは大丈夫だろうが・・・ナギにも会ってお
くか。

急いで向かった。

「ネギ・・・この杖を」

「え？」

「元気に暮らせよ！ネギ！」

「父・・・さん？」

「行くのか？」

「龍斗か、ああ、もう限界だからな」「そうか」

「ネギの事は任せた、頼む」

「友の頼みだ、了解している」

「ああ、そうだったな、じゃあな」

「ああ、また会おう」

そしてナギと別れ、ネギの元に向かった。

すぐに治療したおかげでネギ達は無事だったが・・・俺が来た時から石化していた人たちは無理だった。

原作の石化と何処か違うので治そうにも治せなかった。

まあ石化させたやつはネギの前に現れるを待つか。

その方が確実だからな。

殲滅を終えた分身が戻ってきた。

「殲滅している途中であの老害共の部下が見えました、どうやらあの老害どもの所為みたいですね」

「やはりか」

潰すしかないのか？

害しかなければ遠慮はしないんだが・・・やりづれえな。

「まあいつかは潰すか」

「そうですね、そのときは手伝ってもいいですか？」

「別に構わない、今日はお疲れ様だ、眠っている」

「了解です」

そうして分身は消えた。

あの老害共は消すとして・・・どうするか。

『マスターの自由にどうぞ、私はそれに従うだけですよ、勿論間違いは指摘しますが』

「ああ、頼む」

『ええ、共に頑張りましょう、マスター』

さて、原作開始時までまだ時間がある・・・しっかりネギを原作よりはマシにしなくてはな。

『あれは酷いですしね』

「ああ、確かにな、だからこそ頑張るんだが・・・俺も胃薬が必要になるのか？」

『そこはマスターの頑張り次第では？』

「それもそうか」

せめて胃痛にならないように頑張るか。

じゃないと死なないけど精神的に参りそうだ。

こうして勝手に本人の知らぬところで改造計画みたいなものが考えられていた。

この時ネギは無意識に寒気を感じたらしい。

というか結局仮契約カードというか武器を使わなかったな・・・まあそれにこした事はないがな。

ネギま編 第9話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「死ね」

いきなり！？

龍「適當すぎるだろ・・・」

いえ！これが全力でございます！！

龍「じゃあ死ね」

結局！？ガフツ！！

龍「さて、感謝コーナーだ」

・・・ユタ様、メガネ様、夜神様、ケルベルス様、雨季様、感想ありがとうございます・・・。

龍「急にテンションが下がったな」

いや、曲聴きながら書いてるんだけどさ・・・。

龍「ああ」

今かかっている曲・・・悲しみの向こうへなんだよね。

龍「ああ〜」

まあだからどうした！ってやつなんだけどね。

龍「まあ気にするな」

そうするよ。

龍「次回はおそらく日曜か月曜だ」

次回で多分原作開始前くらいですね。

龍「その場で考えて書いてるくせに余計な事を言つな」

サーセンww

龍「悲鳴をあげろ！豚のような！！」

ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
あー！！

龍「ではな」

で、では……。

ネギま編 第10話(前書き)

今回は中途半端かもしれませんが・・・。

アスナの性格は原作通りです。

理由は・・・まあおいおい(後書きで)。

それではどうぞ！

「最初は5秒も持たなかったからな」

実際、今の分身は俺の5%くらいから10%だからな。
雑魚妖怪なら秒殺できるレベルだな。

中級も苦戦はしない。

まあそれも力を使うこいつ次第だがな。

「まあもう少しで日本に行くんだ、頑張れよ？ネギ」

「はい！」

常識？魂に刻むかのように教えこんだが？

そのせいかミス（常識についての）をすると震えるようになった。
やりすぎたか？

ただミスするたびに別荘で30%（これくらいでラカン達は負ける）
出しながら追いかけただけなんだが。

『9歳の子供ではトラウマになりますよ』

「そうか？」

『ええ、間違いなく』

そういえばネギはもうすぐで麻帆良学園に向かう事になる。

卒業はすんでいるからな。

アーニヤも頑張っていたからな。何かプレゼントでもしたいんだが・
・何がいいだろうか。

アーニヤは戦いの旋律に炎を付加した闇の魔法もどきが使えよう
になった。

ほかには紅き焰とかだな。

炎戦の旋律（今考えた、センスは言うな）を使っていれば燃える天
空をぎりぎり撃てるくらいだ。

まあそれをすれば一瞬で魔力が尽きるんだがな。

「どうかしたんですか？」

「いや、まあとりあえずは常識テストだな」

「えっ！？ま、またするんですか？」

「ああ、君がきちんと常識を持つまでな」

「ガクブルガクブル」

案外余裕ありそうだな、コイツ。

「さて、頑張れよ？」

「は、ハイ！！」

勿論ネギが一発で常識テストに合格するはずもなく……10分間の鬼ごっこが決行された。

その後俺とネギは日本に向かった。

アーニヤは「次に会った時に欲しいものを言います！」と言われたのでとりあえずは手紙交換することにした。

とても喜んでくれていたので嬉しい。

何故俺がネギと一緒に日本に向かっているかと言つと、ぬらりひょん 学園長に呼ばれたからである。

内容は、

「ネギ君のサポートをしてほしい」

だった。

まあいいがな。

で、今はもう麻帆等に着いている。

後ネギの魔力暴走は一応10回の内1回に抑えた。

これでも不安だから困る。

「あつ、ネギがない」

『はぐれましたね』

「まあ魔力で分かるからいいんだが」

あつちか。

嫌な予感がする・・・なるべく急ぐか。

――縮地――

認識障害を使ってから急いでネギの元に向かった。

どうやらぎりぎり間に合わなかったらしい、一応常識は教えたはずなんだがなあ・・・。

「取・り・消・しなさいよ」

「あいや、あわわ」

「たく・・・」

「え？龍斗君？」

「ああ、久しぶりだな木乃香、まあ積もる話もあるだろうが・・・
その前にあれだな」

あれではネギが潰れてしまう（物理的に）。

「あゝすまない、そいつを放してやってくれるか？アスナ」

「え？龍斗!？」

「おお、覚えてくれてたか」

というよりも記憶を消してないのにこんな性格に・・・まさか馬鹿
になってないよな？

「どうして此処に？」

「いや、まあ簡単に言えば・・・ネギ、自己紹介しろ」

「はい！」

「？」

「この度この学校で英語の教師をやることになりました、ネギ・スプリングフィールドです・・・」

「は？」

まあ驚くよな。

「そして俺は副担任だ、多分コイツは担任」

「ええー！？」

「そーなんかー」

何故だろうか、一瞬だけが金髪の妖怪を思い出した。気のせいだよな？

「さて、早速で悪いが案内してくれるか？学園長室まで」

「分かったわ」

「了解や〜」

「ネギ、行くぞ」

「ハイ！」

こうして物語が始まりました。

原作はあまりあてにならないだろう。

それでも頑張ると決めたのだから頑張るか。

ネギま編 第10話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「アスナ・・・何故ああなった」

それは・・・龍斗に会えない 勉強に身が入らない この通り（キリッ）だね。

龍「イラッと来た」

さて！感謝コーナー！！

龍「チッ」

R a i N様、K O N A様、メガネ様、夜神様、感想ありがとうございます！！

龍「クオリティーは下がり続けてるがな」

言わないで！？気にしてるから！

龍「次回の更新予定は？」

・・・水曜か木曜です。

龍「まあこんなクオリティーが見てくれると嬉しい」

では！

龍「ではな」

ネギま編 第11話（前書き）

今回もグダグダです。

オレハ・・・アセツタノカナア。

もうスランプかもしれないです。

それでも！俺が完全に諦めるまで！書くのを！やめない！
それではどうぞ！！

ネギま編 第11話

その後、学園長めらりひょんの部屋まで向かって、原作とたいして変わらない進みとなった。

まあネギは軽く震えてたが。

『まああの鬼ごっこをやると言われて大人しい人はいないですよ』

「そうか？今回は40%で追いかけてやろうとしてたんだが」

『間違いなくネギ君が死にますよ』

「そうか？」

『ラカンが1時間でバテたレベルですよ？ネギ君が30分も持つわけないでしょうが！』

それもそうか？

「さて、俺はやっぱり副担任か」

「うん、頑張ろうね！」

「・・・まあいいだろう、もし常識を間違ったら鬼ごっこだからな？」

「う、うん！間違わないよ！！」

まあ間違えたら・・・クク。

「！？（ゾクツ）」

「どうかしたか？」

「い、いえ・・・何でもないです！」

そんなこんなで教室に到着した。

一応後でぬらりひょんに文句を言うておくか。

ん？理由か？理由は部屋を誰かと一緒にしてくれないかとかほざきやがったからだよ。
時間がなかったから O H A N A S H I I が出来なかった。
そっつえば・・・、

「俺が先に入る」

「え？普通は担任が先に入るんじゃない・・・」

「ああ、だが上を見る、ドアの」

「あっ」

黒板消しが見えたので納得したようだ。

「後、一応障壁を消しておけよ？」

「うん」

これで大丈夫だろ。

アスナは平気だが、他のやつが感づかない訳ではないからな。

「じゃあ入るぞ？」

黒板消しにはわざと引っかかる。

そして他の罫は・・・矢とバケツとロープは壊す。グーで。
まあロープはチョキだが。

「さて、罫を仕掛けたやつは出て来い、出てきたら少しのお仕置き・・・出てこなければ・・・地獄を見せるぞ？」

黒板消しはネタで受けたのでもう後は消えている。

「こ、この子がやりました！」

「あー！パル！裏切ったなー！」

そうかそうか、後で話すか。

「そうか、それは後でじっくり話すとして」

ゲツ！とか聞こえた気がするがスルーした。

「自己紹介するから座れ」

「はい！」

「じゃあまずはほら、ネギ先生、自己紹介どうぞ」

「は、はい！今日からこの学校でまほ・・・英語を教えることになりました、ネギ・スプリングフィールドです、3学期の間だけですけどよろしくお願いします！」

鬼ごっこの時間を10分追加だな。

それよりも耳を塞ぐか。

「・・・・・・・・」

間違いなく騒がしくなるからな。

「「「キャアアツ！か、かわいい〜！！」」」

やはりな。

「何歳なの！？」

「えうつ！？その10歳で・・・」

「どっから来たの！？何人！？」

「ウエ、ウエールズの山奥の」

「ウエールズってどこ？」

「今どこに住んでるの!？」

「いや、まだどこにも」

さすがにうるさいな・・・よし。

――震脚――

かなり加減をして放つ。

これで静かになったな。

「まだこっちの自己紹介が終わってないからな、すまないがこっちを優先させてもらおうぞ」

そう言うと、そういえば誰なんだろーとかあ、あの人は!？とかなっ!？あ、アイツ!とか言ってるやつがいた。

誰かはあえて言わない。

「俺は森 龍斗だ、主に国語か体育を教えることになるかもしれないが、一応このクラスの副担任になった、よろしく頼む、後俺は男だからな？」

「・・・・・・・・」

またか？

「ええええええええ!？男!？」

驚くのはそこか。

「な、何歳なの？」

「15だ(一応)」

「見た目が外国人だけど何人なの？名前は日本人ばいけど」

「日本人とアメリカ人のハーフだ(でっちなあげ)」

「何処に住むか決まってるの？」

「いや、まだだ」

というよりこのままじゃ授業が進まないな。

「さて、質問はここまでだ、後は休み時間とか放課後にでも聞いてくれ」

「「はい！」」

これで授業が出来る。

後はネギに任せて、俺は教室に戻った。

勿論エヴァから目線を感じたのでまた後で、とっておいた。

これで大丈夫だろう。

刹那も若干何か言いたそうだったがな。

そう思いながらも後でいいだろう、エヴァと一緒にと思う俺であった。

『あの2人が可哀想ですね、まあいつもの事ですが』

「さて、ネギと鬼ごっこしますか」

『まさか本当に40%か50%で行くつもりですか!?!』

「冗談に決まっているだろ？」

『で、ですよね!』

「勿論30%だ」

『紅き翼がかなり早めに負けた%じゃないですか!?!』

「気のせいだ、あの時は40%だったろ？」

『そうでした?』

「そうだ」

さすがに30%でいけるはずないだろ？
今の最大は90%だな。

『まさか90%でいきませんよね？世界が耐え切れませんかよ？60%でもキツイんですから』

「俺の結界があれば大丈夫だが？」

『ネギ君逃げてー！超逃げてー！！』

「逃げるなら・・・いや、もう遅いか」

その後・・・ネギの姿を見た者は誰もいなかった。

「生きてますよ!？」

「まだ余裕そうだな！オラ！敗者復活でもしてみろってエの!」

「ひいひいひいひい!」

ネギのトラウマが増えた。

やったね！ネギ君！

ネギま編 第11話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「何故遅くなった」

え、えっと・・・中々思い浮かびませんでした！！

龍「死ね」

――無極零式・虚無――

ぎゃあああああああ！！

龍「こんな塵作者はスルーして感謝コーナーだ」

ク「KONA様、メガネ様、雨季様、夜神様、Jam様、感想あり
がとうございます」

龍「次回の更新は東方と同じだろうな」

え、えっと・・・頑張ります。

龍「スランプだろうが書き続ける、書くのは楽しいのだろう？」

それは勿論！

龍「なら努力しろ、まったく進んでいなくてすまない、次ももしかしたらあまり進まないかもしれん」

それでも書き続けるので見捨てられないように頑張ります！！

龍「常に何人かには見捨てられ続けているくせにな」

ガハッ！？

ク「あつ、死にましたね」

龍「気にするな、次には復活している」

ク「それもそうですね」

お、お前ら・・・ひでえよ。

龍「ではな、次回でも会おう」

で、では。

ネギま編 第12話(前書き)

次回でようやく戦闘にもならない戦闘です！

今回はいつも通りのグダグダです！

最後まで自分が何をしたいのか分からなかった・・・(汗)
では！どうぞ！

ネギま編 第12話

授業が終わり放課後・・・何？省略しすぎ？文句は作者に言え。
さて、ネギは・・・あそこか。

「おい、ネギ」

「はい？」

「今日はおつかれだったな」

「いえ、まだまだですよ、結局授業ができませんでしたし」

「はあく、まだ最初だろ？誰でも失敗くらいするさ、それを直せばいいだろ？」

「はい」

まあ落ち込んだ時の相談くらいは受けるか。

おや？あれは宮崎 のどかか。

あんなに本を持って・・・まさか・・・ここで落ちるのか？

そう思っていると宮崎 のどかは階段から落ちた。

「ちい！ネギ！認識阻害の結界を！」

「は、はい！」

ネギが認識阻害の結界を張り終えた。

これなら心配せずに使える。

「スターブラチナ星の白金ザ・ワールド！」

スタンドによって時を止める。

こっちにした理由はとっさにイメージしやすいからだ。

まあ10秒しか止められないがな。

だが10秒あれば十分だ。

「うわぁ・・・本も散らばってやがる、まあ優先するのは人だがな」
そう思いながらも宮崎 のどかを助ける。

「10秒経ったか・・・そして時は動き出す」
「えっ!?!」

スタンド能力が解け、時は動き出した。
宮崎 のどかは自分がどうなったかまだ理解できないらしい、まあ当然か。

「大丈夫か? あんなに本を持つな、誰かに手伝ってもらえ、お前の友達なら喜んで手伝ってくれるだろうに」

「は、はい・・・」

やはり男性恐怖症みたいだな。
ならさっさと離れるか。

「じゃあな、これからは気をつけろ、本は持って行っておく」
「あ、あれ?」

本を全て持って歩く。
本当に多いな。

宮崎は大丈夫だろ。
それよりも・・・、

「ネギ」

「はい?」

「誰も来なかったか？」

「はい、誰もきませんでしたよ？」

「ならいい、さて、本を戻しに行くか」

というより薄い本も含めて16冊は持ちすぎだろ……誰も止めな
かったのか？

そう思いながらも図書館島に持っていった。

「ふう……暇だな」

『暇ですね』

「もうエヴァの所に行くか？」

挨拶してなかったしいざとなれば泊まる事も可能かもだしな。

『（確実に泊めてくれますけどね）』

「さて、どうするか」

「あっ！いたいた」

「ん？」

振り返るとアスナがいた。

「アスナ？」

「此処にいたのね……ちよつときてくれる？」

「暇だから別に構わない」

「なら急ぐわよ！」

「お、おい！」

アスナに引つ張られて、教室に連れてこられた。

「ここで何が……ネギ？」

「あつ、龍斗さん」

「ここで何かがあるか知ってるか？」

「さ、さあ？僕にもよく分かりません」

「そうか」

「はいはい、2人とも入って！」

アスナの指示通りに教室に入る。
すると、

パン！パン！パパーン！！

「「ようこそ！ネギ先生！龍斗先生！」」

「む？」

「え？」

どうやら歓迎会らしい・・・無駄に元気だな。

「さあさあ！主役達は真ん中！」

「大変ですね、龍斗さん」

「タカミチ・・・そう思うなら何とかしてくれ」

「いやー僕には無理ですよ、この子達は元気ですから」

「はあ、これからが不安だ」

途中からタカミチと話していると、

「あの・・・龍斗先生」

「どうかしたか？宮崎」

「あの・・・さっきはその・・・危ない所を助けていただいてその・・・」

「あの・・・これはお礼です・・・図書券」

「別に気にしなくても構わないんだが・・・ここは素直に受け取っ

ておこつ、ありがとう」

「い、いえ・・・」

「本屋がもう龍斗先生にアタックしてるぞー！」

「違います・・・それに私本屋じゃないです・・・」

こういうタイプの人間はからかわれやすいな。

<どうして15年も放っておいた!>

ん? エヴァか。

<15年も経つたのか・・・>

<とぼけるな! サウザンドマスターは3年経つたら貴様が迎えに来ると・・・呪いを解きに来ると言ってたんだぞ!>

<は?>

アイツ・・・黙ってやがったな・・・面白いからとかで。

会ったら死合いだな。

<すまないな、ナギからはまったく連絡がなかったから気がつか

かった・・・>

<何!?!>

<それも含め後で話す、後でそつちの家に向かうから後でな>

<・・・分かった、逃げるなよ!>

どう逃げると?

麻帆良からは今は出るつもりはないしな。

エヴァには返事をしてから他の所に向かった。

その途中で生徒にアドレスや電話番号を聞かれたので電話事渡した。
面倒だしな。

「さて、久しぶりだな、刹那」

「はい、お久しぶりです、龍斗様」

「まだ続いているのか？その呼び方、呼び捨てでいいと言ったはずだが？」

「い、いえ！恐れ多いですよ！」

「はあく、まあいいさ、少しずつ直してやる・・・両方な」

「はい？」

木乃香との仲直りもしないとな。

忙しくなりそうだ。

「じゃあ後でな、どうせ学園長ぬらしひゃんに呼ばれるだろうさ」

「はい、また後で」

さて、そろそろこっそり抜けて別荘に入るか。

アリカが怖い。

携帯を返却してもらい、エヴァの家においておいた（許可はもらっている）別荘に入った。

「ただいま」

「おかえりなさいませ、創造主マスター」

「ああ、アリカは？」

「随分不機嫌ですね、呼びましょうか？」

「ああ、頼む」

「分かりました」

別荘を管理させるために創造したホムンクルスが出てきた。そのホムンクルスにアリカを呼んでくるように頼んだ。

「やはり不機嫌か」

『当たり前でしょう、放置されていたのですから』

まあ確かにな。

「何をしにきた・・・」

うわぁ・・・かなり不機嫌だな・・・。

<どうすればいいんだ？教えてくれクロス・・・ゼロは何も教えてくれない>

<誰がゼロなんですか？まあいいです、とりあえず抱きしめてみては？>

<は？そんなもので許されるはずが・・・>

<いいから、やってみてください、謝るのも忘れずに>

そんなもので許されるはずが・・・他に方法はない。やるしかないか。

「アリカ」

「何じゃ」

ギユ

「すまない」

「は、は！？りゅ・・・龍斗！？」

「すまない、放ってしまつて・・・」

「い、いや・・・あのだな・・・その・・・少し寂しかっただけじゃ・・・／／／」

寂しかった・・・か。

これからはそう思わないように頑張ろう。

「本当にすまない、できることなら何でもしよう、女装とかは勘弁してほしいが」

「そ、それならば今度買い物に行きたいと思っていたところじゃ」

「そうか、なら今度行くか」

「ああ（よし！これでデートに・・・）」

『（デートにいけると思っているんでしょね・・・マスターは鈍いですからね・・・ご愁傷様です）』

その後はずっと話し込んでいた。

話し込んだ結果、エヴァとの約束の時間に少し遅れ、怒られたのは余談だ。

ネギま編 第12話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回もグダグダだな」

自覚してるよ……。

龍「まあ思いつかないんだろ？」

でも手が勝手に動くんだよね。

龍「どういう事だ？」

実際執筆中は何も考えてません！勝手に手が動きます！！

龍「なんだそれ、一種のホラーか？」

事実だからしかたないね！

龍「……感謝コーナーに行くぞ」

イエッサー！！

龍「Rain様、メガネ様、ケルベルス様、Jam様、けーくん様、KONA様、感想ありがとう」

次回の更新は早くできたらいいなあ〜と思いつながらの火曜予想です。

龍「次は顔合わせだな」

その前にエヴァとの会話もあるけどね！

龍「ではな、次回も見てくださいと嬉しい」

ではでは！

ネギま編 第13話(前書き)

はい！今回も理解不能です！
それでもよければどうぞ！！

へへ・・・やっぱり俺って！

ネギま編 第13話

さて、エヴァの説教から数時間。
ようやく説教から開放された。

別荘だからいいものの・・・まあそれが分かっているからやったんだろうが。

「反省しているのか！」

「ああ、すまない」

「まったく・・・約束の時間に1時間も遅れるやつがあるか！大体だな・・・お前は乙女心が分かかっていない！だから鈍感といわれるんだ・・・ブツブツ」

訂正、まだ開放されないようだ。

「龍斗さん、お茶です」

「ああ、ありがとう茶々丸」

「いえ、当然の事ですので」

「ケケケ、ヤツパリゴ主人ハ甘エナ」

「なっ！？何を言ってるんだ！チャチャゼロ！私は甘くなどない！」

「ああ、あんなにマスターが楽しそうに・・・」

「／／／！！ま、巻いてやる！このポケロボ！」

「ああ、マスター・・・御止め下さい」

カオスだな・・・。

「用件を早く終わらせようか、まだ用はあるからな」

「ふん、どうせじじいの呼び出しだろくに・・・行く必要があるのか？」

「エヴァがナギにかけられた呪いを解いたからな、その報告も兼ねている」

「な、なら仕方ないな、ああ、仕方ない・・・わ、私のためか／＼」

どうしたんだろうか？急に赤くなって。

む？もうそろそろ時間か。

「ここから出るぞ、もう少しで出れるからな」

「あ、ああ、今日は少なくとも此処にいるんだろっ？」

「ああ、すまないが今日は泊めてくれると助かる」

「・・・寧ろこのまま住んでも・・・」

「？」

「このまま此処で住め！」

「いいのか？」

「ああ、恩もあるからな、遠慮はするな」

やはり優しいな。

「ああ、感謝する」

「ふん、まあこれから行くんだろっ？私もついていくぞ？」

「面白い事なんてないぞ？」

「それは私が決める事だ」

それもそうだな。

「じゃあそろそろ出るか」

「ああ」

「はい」

「オウヨ」

こうして別荘から出て、待ち合わせの場所に向かった。

「ようやく来おったか」

「すまんな、少し遅れた」

「いやいや、構わんよ」

さりげなく初台詞か？めらりひょん学園長。

「何故じゃろうか、ワシ・・・馬鹿にされた気がするんじゃが」

「気のせいだ」

「ならいいんじゃが・・・さて、この方が森 龍斗殿じゃ」

ザワ・・・ザワ・・・

カ〇ジか？

「静かに！誰か自分の力を試したいやつはおらんかの？」

「その前に言っておく事があるんだが」

「何じゃ？」

「エヴァの呪いを解いた」

「「「なっ!？」」「」」

何故驚く必要があるんだろうな。

「分かっているんですか!? エヴァンジェリンは悪の魔法使いですよ! 現に人を殺している!」

「・・・なら質問しよう、英雄とはなんだ？」

「そんなもの、弱きものを助け、戦争を終結に持ち込んだもの事です!」

「なら戦争とは何だ？」

「戦争は沢山の人が亡くなってしまふ悲しい争いです！」

「なら終結させる方法は？第2次世界大戦ではどのように終結した？」

「それはアメリカが核を・・・」

そこまで言ったのに気がつかないか。

何人かは気づいているみたいだな。顔面が面白いくらい蒼白だ。

「戦争は結局は殺し合いだろ？英雄は一番人を殺したロクデナシに与えられる称号だ、まあ要はタイミングなんだよ、日常で殺せば犯罪者、戦争中に殺せば英雄だ」

「・・・」

ようやく気がついたか。

「英雄と殺人鬼はたいして変わらないんだよ、それにエヴァは女子供、老人は誰一人として殺していない、そこの英雄よりマシだろうに」

まあ俺はヒトデナシのロクデナシの殺人鬼だがね。

「それにエヴァはナギと約束したはずだ、3年だけと、エヴァは15年もの間このままだったんだ、契約はもう消えている、解除してもいいだろう？ナギも俺に任せていたみたいだしな」

まあその件に関しては・・・ナギを殴る事になっているが。

「で？俺の用件は終了したんだが・・・誰が俺の相手をするんだ？」
「僕で構いませんか？」

「タカミチか、まあ他のやつは戦意喪失しているからな」

「誰のせいですか・・・」

「クク、さてね」

「では行きますよ!」

そう言いながらタカミチは居合い拳を飛ばしてきた。

――クラウン・クラウン 神ノ道化発動――

左腕が光り、爪のような状態に変化した。

うん、実に馴染む。

そう思いながらもきちんと居合い拳は避ける。

「まずは様子見か?えらく余裕じゃねえか」

「いえ、これから本気でいきますよ、じゃないとすぐに終わりますし」

「そうしろ」

――臨界点突破 クラウン・クラウン 神ノ道化発動――

左手を剣に変えて準備する。

さて、原作通りならタカミチにはダメージがいかないはずだが・・・。

「行きますよ!」

――咸卦法――

「来い!」

タカミチは咸卦法を発動させた。

「はぁぁぁあー!!」

――豪殺・居合い拳――

咸卦法によって強化された居合い拳が飛んできた。

「無駄だ!」

クラウン・クラウン

神ノ道化ではじく。

そして剣を投げつける。

「くっ!」

どうやらダメージは無いようだ・・・やはり原作通りか。
なら・・・そう思い、爪に戻す。

「そらっ! 避けてみる!!」

クラウン・エッジ

――爪ノ王輪――

指の部分からリング状のエネルギーを展開して、それをムチのように振るう。

どうやらこれくらいなら大丈夫らしい。

「け、結構キツイんですけどね」

「まだそう言えるだけ余裕だろ?」

「ハハ、厳しいですね」

「さて、もう終わるか?」

「そうですね、ハハ、やっぱりとてつもないほどに強いですね、まだまだ超えられそうにないですよ」

「簡単に超えられてたまるか、まだ超えさせるわけにはいかねえよ」

「では、これでラストです」

「ああ」

そういい、互いに構えた。

「行きます！」

「来い！」

「フルパワー豪殺・居合い拳」

「破滅ノ爪」エッジ・エンド

あつちは全力の豪殺・居合い拳を放ってきた。

それに対して俺は、左手のイノセンスにエネルギーを集中させ強化をして、それをタカミチに叩きつけた。

「ガッ！」

「よく強くなった」

「ハハ、まだまだです、まだ強くなれないと・・・守れませんから」

「そうか」

「ええ」

そうタカミチは言い残し、眠った。

「これにて終わりじゃ！」

「じゃあな、戻らせてもらっつ、だが一言言っておく、もし貴様らが意見を変えなければ・・・潰す」

相手に殺気をこめて睨んでからエヴァの家に戻った。

これから面倒になりそうだが・・・護りたいものを護れるのならば全然構わないさ。

全力で物事にあたるのみだ。

まあ問題はネギだけだな。

『胃薬いりますか？』

「ああ、頼む」

これが他の者の苦勞か・・・嫌だな。

こうして今日が終わった。

これからが大変そうだ。

ネギま編 第13話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「遅い」

すみません！！

龍「さあ理由を聞こうか」

純粹に迷ってました！！

龍「それでこれか？グダグダのままではないか」

言い返す言葉もありません。

龍「まあいい、感謝コーナーだ」

雨季様、Jam様、メガネ様、KONA様、ケルベルス様、感想ありがとうございます！！

龍「次の更新は木曜日か金曜だ」

どこまで進むかはあまり期待せずお待ち下さい！！

龍「ではな」

ではでは！

ネギま編 第14話(前書き)

今回はPCの調子が悪かったので遅れました！

その分、雀の涙程度ですが、少し文を増やしました。

駄文ですけどね！！

それではどうぞ！！

ネギま編 第14話

タカミチとの模擬戦が終わり、エヴァの家に帰り、睡眠。
その後、エヴァと茶々丸は学校に向かった。

「さて、俺達も向かうか」

『ええ、そうしましょう』

「遅刻するのは洒落にならないからな」

こうして俺は学校に向かった。

嫌な予感がしたのは気のせいだと思いたい……。

「じゃあ1時間目をはじめます、テキスト76ページを開いてください」

挨拶が終わり、ネギの担当の英語の授業が始まった。

「The fall of Jason the flower .
Spring came . Jason the flower .
was born a branch of a tall
tree . Hundreds of flowers were
reborn on the tree . They were
all friends .」

言い終わったな。問題は起こすなよ？

「今の所誰かに訳してもらおうかなあ、えーと……」

ついでに言うと、偶然同化していたら見つけたエキサイト翻訳だと、

「ジェイソンの陥落、花。 春は来ました。 花が高い木の枝の上で生まれたジェイソン。 何百輪もの花が木の上で生まれました。 彼らは皆友人でした。」

になつたな。カオスなのか？

というより何故あつた・・・アカシックレコード・・・。

「じゃあアスナさん」

「なっ・・・何で私に当てるのようっ!？」

「え・・・だつて」

「フツーは日付けとか出席番号で当てるでしょ!!!」

「でもアスナさんア行じゃないですか・・・」

「アスナは名前じゃん!」

「あと感謝の意味も込めて・・・」

「何の感謝よっ!?!」

はあく後でネギには O H A N A S H I するか。

「わ、わかつたわよ訳すわよ、えーと・・・」

そしてアスナは訳し始めた。

大丈夫だよな？

「ジェイソンが・・・花の上・・・に落ち春が来た？ジェイソンとその花は・・・えと・・・高い木で食べたランチで・・・骨・・・が百本？えーと・・・骨が・・・木の・・・」

タカミチは何をしてたんだ？

「アスナさん英語ダメなんですわえ」

あゝあ・・・お仕置きだなネギ・・・。

――極式無式・飛――

ナイフを投げる要領でチョークをネギの頭のすぐ横に投げる。
勿論加減しているぞ？

パァンッ！！

およそチョークでは出ない音で周りの声が収まった。

「ネギ？お前は今教師なんだよな？」

「は、はい」

「なら何故生徒を馬鹿にするんだ？そこは一緒に理解して行こうと
励ますべきではなかったかな？」

「え、えつと・・・」

「そして自分には関係ないと思っているんだろうが・・・周りも同
罪だからな？」

「え？」

「アスナが頑張つて解こうとしていたのに出来ないからといって馬
鹿にするのはいただけない」

「す、すいません」

「謝る対象が違うぞ？」

「ごめんなさい、アスナさん」

「」「ごめんなさい」「」

ふう・・・これで何とかなればいいが・・・。

「これからは他人を簡単に馬鹿にしないようになる？じゃないとソイツが傷つくことになる」

「はい！！！！」

「フツ、ならいいさ、さあネギ、授業を続けてくれ」

「はい！」

まあネギにはお仕置きするんだがな。

こうして授業は無事に終わった。

授業が終わったのでのんびり周っていると、

「はあくアスナさんには迷惑かけてばかりだなあくどうにかできないかなあ……」

ネギが落ち込んでいた。

まったく……、

「どうしたネギ、何か考えてるようだが？」

「あつ、龍斗さん」

「悩みなら聞こう、まあ答えられるかは別だが」

「えっと……聞いてくれますか？」

「ああ」

ネギの相談は独り言でも言ってたようにアスナに迷惑をかけていたから何かお詫びをしたいらしい。

「そこは頑張れとしかいえないが……まあそこは気持ちだよ、謝罪の気持ちをしっかり持っていけば大丈夫だ」

「はい！ありがとうございます！！」

これで大丈夫か。

そう思いながらネギが走っていくのをみていた。まさかコレが後のあれに巻き込まれるフラグだったのは予想外だった。

>ネギ Side<

龍斗さんに相談して、その後何を渡すかを悩んでいると、

「あつ！こ、これは・・・！？昔おじいちゃんがくれた「魔法の素丸薬七色セット（大人用）・・・！？」

こ、これがあれば！惚れ薬が出来る！

アスナさんに喜んでもらえるぞ！！

この時僕は相当焦っていたらしい、まさか昔龍斗さんが、

「絶対に惚れ薬を作るなよ？」

と警告していたのを忘れていたんだから。

「アスナさーん！！」

「何の用よ」

「惚れ薬が出来たんです！」

「いらないわよ・・・」

「本当に効くんですよ？」

「いらないって言うてるでしょ」

「本当なんです！ダメされたと思って、ちょっとだけでも・・・」

そう言っても受け取ってもらえない・・・。

どうしよう。

「ならあんたが・・・あつ」

「何だ、騒がし・・・ングツ!？」

あつ!？惚れ薬が龍斗さんに!？

ど、どうしよう・・・またお仕置きされる!？

そう思ったけどもう手遅れだと理解して、心で涙が流れた。

>ネギ Side end<

ネギを見送り、暇なので校舎を回っていると、少しにぎやかあだつたのでそこに向かうと、

「何だ、騒がし・・・ングツ!？」

な、何だ？悪意がなかったから反応できなかった!？

『（これがギャグ補正ですね、分かります）』

「ケホツ、まずい・・・なんだコレは？」

嫌な予感がする・・・何故か今すぐここから離れなければならない
ような・・・。

「うわあゝ、龍斗君、よく見たら綺麗やなあゝ」

「は?？」

木乃香が寄ってきた。

「んゝ」

まさか惚れ薬か！？
すぐに逃げないと・・・。

「すまない、木乃香」
「えっ？」

トン

優しく手刀をして、眠らせる。
さて、逃げるか。

「ネギ！後でO S H I O K Iだからな！！」

コダイと同じな！
そう言いながら逃げた。

「待って〜龍斗先生」
「待ってくれないかい？龍斗先生」
「待ってください！龍斗さん！！」

くっ！その他大勢に混じって聞きたくない声が・・・！

「うおっ！？真名！殺す気か！刹那も刀をしまえ！！」

「断る（断ります）」
「くそっ！！」

さらに速度を上げる。

どうやら逃げ切れたらしい。
さっきから、

「何処に行ったか分かるかい？」

「いや、すまない、見失った、でもここらにいるはずだ」

まだ追いかけてくるか・・・真名は寧ろ楽しんでる気がする・・・

。

「さて・・・どうするか」

「ど・・・どーしたんですか？」

「宮崎か、すまないが何処か隠れる場所はないか？」

「・・・それならこっちですー」

宮崎に案内してもらったのは図書室だった。

「感謝する」

「い、いえ・・・鍵はかけたのでしばらくは大丈夫だと・・・」

「フウ・・・」

「・・・？」

しかし・・・。

「ここはすごいな・・・本が沢山ある」

「この学園ってけっこう古くて昔ヨーロッパから来た人がつくった
んです・・・歴史が長いから蔵書数もすごくて・・・でも大学の
図書館島はこの何千倍もあるんですよ」

「そうか・・・詳しいんだな、宮崎は」

「い・・・いえ・・・」

じ

宮崎から目線を感じる。

スススツ・・・

横にずれる。

ススススツ・・・

「龍斗センサー」

「ちいっ！！まだ切れてなかったか！！」

急いでその場から離れる。

鍵がかかっているからすぐには出られない！
どうする！

ガッ！

「うおっ！？」

「きゃあっ！！」

本棚の上に逃げていたため、落ちてしまった。

「だ、大丈夫か？宮崎」

「は、はい・・・」

今の体勢は、俺が下で宮崎が上だ。

「すまないが・・・宮崎、すこしどいてくれないか？」

「は、はい・・・」

そう言いながらも宮崎は顔を近づけてくる。
まだ惚れ薬の効果が続いているのか!?

「宮崎・・・俺は先生でお前は生徒だ、分かるよな？」

「は、はい・・・そうですね・・・ゴメンなさいです・・・」

言ってる事とやっている事が違うぞ!?

「いい加減・・・」

な、何だ？

「開きなさいよ!」

ドカーン!

ドアが蹴り飛ばされる音が聞こえた。

宮崎はどうやら気絶したらしい。

「アスナ、助かった、感謝する」

「い、いいわよ・・・私にも原因があるんだし・・・」

「宮崎はすっかり保健室に連れて行く、どうやら薬は切れたようだ
からな」

「うん、それじゃあまた明日」

「ああ、ネギには話しがあるから逃げるなよ?と言っておいてくれ」

「ハハ、分かったわ」

こうして惚れ薬事件が終わった。

その日の夜。

「くっ！数が多い！」

「そうだな、まさかここまでとはな・・・やれやれ、請求額を増やさないとな」

侵入者を潰す作業に今日は参加した。
理由？ストレス発散だよ。

『ああ、今回の侵入者には同情します』

「ククク、幸い多いみたいだからな・・・楽しみだ」

「ナンダキサマハ！」

「どうでもいいだろ？まあとりあえずは・・・」

——断罪者^{ジャッジメント}発動——

「消えとけ」

ドンッ！

弾を撃ち込む。

「クッ！コノテイドドウニカナルトデモ？」

「見えたのは一発か？」

撃つたのは5発だ。

「ナ、ナンダト!?!」

「そうだ、あえて理由を言うなら・・・一発は学園^{スクール}の連中の分って

ん？何故怖がるのやら。

『（マスターの顔・・・今ものすごく笑顔なんですよね・・・逆に怖い）』

これで今日は終わった。

次の日にネギがお仕置きされたのは言うまでもない。

「そおら！！滅罪レベル三倍いくぞ！」

「ひいひいひい！！！」

『ご愁傷様です、完全に自業自得ですが』

惚れ薬の件は無罪らしい・・・やはり腐ってやがるな。

つぶすか？

そう考えながらもネギに撃ち込むのを忘れない。

ネギのお仕置きが終わった後、ネギが帰った後にアリカと談笑していた。

ネギま編 第14話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「PC買い換えるよ」

金がないです……。

龍「バイトは？」

する暇がないです。

龍「……感謝コーナー」

ユタ様、Jam様、メガネ様、KONA様、感想ありがとうございます！！

龍「今回はもしPCの調子がよければ月曜だ」

次回も頑張ります！！

龍「今回もグダグダだったからな」

言わないで……理解しているから。

龍「ならいい」

では！また次回！！

龍「ではな」

ネギま編 第15話（前書き）

どうも、頭痛と眩暈と吐き気が常に襲ってきている状態で執筆したのでいつも以上にグダグダです・・・やばい・・・眼が霞んで・・・では、どうぞ。

ネギま編 第15話

あの惚れ薬事件から数日。

今日は無事に授業が終わった。

ネギがまた問題をやらかしたのでO H A N A S H Iをした。

「はぁ・・・まだ胃薬はいらないだろうが・・・これ以上酷くなつたらいるかもな」

『それでも他の方に比べれば大分マシかと』

それもそうか。

「さて、今日は居残りがあるんだっか？エヴァは大丈夫だよな？」

「ふん、当たり前だ、何故私が居残りをしなければならんのだ」

現状はエヴァと茶々丸と一緒に学校に向かっている。

今日は居残りがあるっばいからな・・・俺も勿論先生だから参加する。

「だから少し遅くなるかもしれん、遅かったらご飯を先に食べててくれ」

「ああ」

「（ああ、マスターはきつと待つんですね・・・ずっと待ってるマスターを想像すると・・・）」

「？」

最近茶々丸がいろんな意味で変わった気がする・・・マイナス方面かもしれない。

「だから今日は頼んだ、まあ居残りだからそこまで遅くはならないだろうが」

『そうですね、よほど覚えが悪くない限り必ず覚えさせる事ができますからね』

「さてね、まあ頑張るだけだ」

そして学校に到着。

そして職員室ではしずか先生にネギが頼まれていたから確実だろう。タカミチから言われてなければ碌に準備も出来ないままやるどころだった。

「まあ頑張るとしますか」

そして何事もなく（少なくとも俺の周りでは何もなかった）放課後になった。

「2-Aのバカ五人衆レンジャーがそろったわけですが・・・」

「誰がバカ五人衆よっ！！」

まあそれを何とかするために俺達教師がいるんだが。

「いーのよ別に勉強なんかできなくても・・・この学校エスカレーター式だから高校までは行けるのよ」

「そういう問題ではないんだが・・・」

ん？ネギが何か言っている？

「でもアスナさんの英語の成績が悪いと・・・さんも悲しむだろうなー」

「うっ・・・わ、わかったわよ、やればいーんでしょやれば」

？何故か名前のとこだけ聞こえなかったが・・・まあタカミチだろ。

『（本当に鈍感ですね・・・分かりやすいのでも理解できないようですし）』

何故かクロスにバカにされた気がした・・・気のせいだと思いたい。

「えーと、じゃあまずこれから10点満点の小テストをしますので、6点以上取れるまで帰っちゃダメです」

どうやら小テストが始まったらしい。

やはり考え事をしてしていると、周りの事が疎かになるな・・・気をつけないければ・・・。

「できましたです・・・」

「む？もうか」

そう言いながらも採点する。

「9点・・・合格だ」

おおー！とか周りから聞こえる。

まあ仕方ないのか？

「出来るなら最初からやればいいと思うぞ？」

「・・・勉強キライなんです」

「ちゃんと勉強しなよ、ゆえー」

「やーだ」

「ま、いーや、本屋寄って帰ろーか」

こうして綾瀬　夕映は帰った。

「できたアルよー!」

「できましたー龍斗先生、ネギ君!」

どうやら三人ができたようなので採点をする。
結果は、

「長瀬　楓と佐々木　まき絵が3点、古　菲が4点か、どうやら少しのミスが目立つからそこからだ、そこさえ気をつければ合格くらいできるぞ」

「そうですよ!頑張りましょう!」

どうやらネギも相当やる気があるみたいだ。

「あれ?アスナさんは?」

「う・・・」

見せてきた結果は2点・・・。

「じゃ、じゃあポイントだけ教えますね!」

「はい」

「終わったらもう一回やってもらいますから!」

そう言い、ポイントを言い始めた。

「分からないところはきちんと聞いてくれ、聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥だからな」

しっかり勉強はしておくべくだからな。

「先生できたアルー」

どうやらできた様なので採点をする。

「ふむ、古 菲と長瀬 楓は両方8点、合格だ」

「アタシ日本語の勉強だけで精一杯アルよ」

「まあ頑張れ、分からない所は教える事ができるからな」

「了解アル！」

こうして2人帰った。

「先生ー」

どうやら次は佐々木 まき絵ができたらしい。
採点すると、

「6点か、合格だ、まあこれからも頑張ってくれ」

「頑張つて下さいね」

「バカでゴメンねーネギ君、龍斗先生」

これで残すところアスナだけか……。

「え、えーと……残るはアスナさんだけか」

スッ。

アスナがテストの用紙を渡してきた。

点数は1点……。

「何処が分からないんだ？そこを徹底的に詳しく教えるぞ？」
「うっ……こじ」

どうやら、分からないところは俺が説明できるところだった。
さすがにフェルマーの最終定理は説明が面倒だからな。

『（中学生に何を求めているんですかねこのマスターは……それに今の教科は英語ですよ？このマスターは天然なのか抜けているのか）』

何故かまたバカにされた気が……。
その感覚は気のせいだと振り切り、アスナにネギと一緒に勉強を教えた。

「どうだった？」

「はい！アスナさんも合格です！！」

どうやら原作みたいに何回もしなくて済んだみたいだな……。
ついでに言うと、点数は7点だ。

「よくやったな、アスナ」

「う……っ、次は大丈夫よ！今回は偶々苦手なところがただけで……」

「フフ、そうか、まあ日頃地道に勉強をしていればアスナなら余裕だろうさ、バイトも忙しいだろうがな」

「うっ……頑張ります……」

こうして放課後の居残りは終わった。

予想より少しだけ早く終わったので、エヴァ達が待っているために

少し急いで帰宅。

途中トラブルがあり、帰るのが9時になった。

トラブルの内容はあえて言うなら馬鹿が喚いていただけだ。

家に入ると、晩御飯が用意された状態でエヴァが待っていた。

「何だ、まだ食べてなかったのか？食べてていいと言ったのに」

「・・・お前と一緒に食べないと面白くないからな・・・そ、それに！今日は茶々丸がメンテに行っていて少し遅れたんだ！だからあまり待つてはいない！」

「マスターは二時間お待ちしていました」

二時間もか・・・。

「なっ！？こ、このポケロボ！巻いてやる！」

「ああ、いけませんマスター・・・」

「ケケ、マア事実ダガナ、アレダケ待ツテタンダカラナ」

「なっ！？チャチャゼロまで言うか！」

「ありがとう、待つててくれて・・・さあ食べようか」

「あ、ああ／／／」

その後は皆で楽しく夕食を食べた。

無論、エヴァには説明をしているのでアリカも一緒だ。

「何故か省かれた気がするんじゃが・・・」

「気のせいだろ？」

「そうなのか？」

「そうだ」

その後はまあ・・・別荘で修行だ。

まだまだ強くなれるはずなんだからな。

「護りたいモノが護れないのは嫌だからな・・・ならもつと強くなつて護り切るのみだ」

『そのためにも頑張りましょう』

「ああ」

その後も8時間ほど修行し、別荘内の自分の部屋で寝た。

朝起きたらアリカとエヴァがベッドに入ってきていたのには吃驚した。

ネギま編 第15話（後書き）

後書きコーナー……。

龍「テンション低いな」

いや、眩暈が酷くてね。

油断すると倒れそうなんだよ……頭痛も頭痛で酷いし。

龍「……大丈夫なのか？」

頭痛と眩暈と吐き気はデフォだから大丈夫だと思いたい……まあいつもより酷いけど……1/5倍くらい。

龍「そ、そうか」

さて、感謝コーナーよろしく。

龍「ああ、雨季様、Jam様、ケルベルス様、KONA様、感想感謝する」

PCと自分の調子が悪いので更新が遅くなった事を此処でお詫び申し上げます……。

龍「まだ体調は万全ではないからまた遅くなるかもしれないがきちんと執筆はするのでゆっくり待って欲しい」

一応次は金曜か土曜予定です。

龍「ではな、また次回」

では。

ネギま編 第16話(前書き)

今回も遅くなつてすいません！

ここから少しずつオリジナルストーリー（ただし敵対組織名は他の作品から）です！

今回もグダグダですがどうぞ！！

ネギま編 第16話

夢を見た……。

これは夢なんだと理解できる。

何故なら死んだはずの親父が目の前にいるから……。

「龍斗……」

「どうしたんだ？親父」

「お前は護りたいものはあるか？」

「護りたいもの？」

「そうだ、自分の命……自分の存在全てをかけてまで護りたいと思えるものだ」

「家族……かな、やっぱり皆で笑っていたいから」

「フツ、そうか、なら一緒に頑張らないとな」

「……親父もなのか？」

そう言つと苦笑いしながら、

「当たり前だ、護りたいと思うからこそ今があるんだ、俺の場合は「？」」

「フフ、まだ分からなくていいさ、でもいつか俺達家族以外でも護りたいと思えるような人に会えるといいな」

「ああ、頑張ってみる」

「フツ、それでいい、さて、今日ももう遅い……寝るか」

「ああ、オヤスミ」

「ああ、しっかり寝ろよ？」

ああ、段々眼が覚めてくる……もう夢から覚めるか……。そう思っていると、親父が急に、

「そつだ・・・もし・・・俺が先に死んだら・・・」

ああ、そつだ、この先の言葉を聞いて親父を怒つたんだ・・・くそつ、思い出せない・・・。

この時の会話は死ぬ前日の会話だ。

まるで親父には死ぬのが分かっていたみたいだった・・・だからこそ・・・否定したのかもな・・・親父が今にも消えそつだったから。

「くつ」

どうやら眼が覚めたらしい。

「こつちに来て初めて見たな・・・親父・・・俺は見つける事が出来た、大切なものを・・・護りたいと思うものを・・・だから俺は護り抜いてみせる、だから・・・見ててくれ」

さつきの夢のおかげでさらに決心がついた。

「さて、今日も頑張るか」

『とか言いながら今いるのは職員室じゃないですか、職員室で寝ないで下さい・・・』

「む、何故だ？」

『茶々丸さんが運んでくれたんですよ、後でお礼をいっておくべきかと』

「そつだな」

茶々丸には感謝だな。

『今日は授業がないといつても何があるか分からないんですから・・・』

・気をつけて下さいよ?』

「了解だ」

さて、次・・・まあ今日じゃないが、の授業の準備をしておくか、
そう思いながら、作業をしていると、

「龍斗先生！ネギ先生！」

「む？」

「・・・はい？」

和泉 亜子と佐々木 まき絵が職員室に来た。

何かあったのか？何故か面倒な事が起きそうな気がしてきた。

「こ・・・校内で暴行が・・・」

「見てくださいこのキズツ！！助けてネギ先生っ、龍斗先生っ！」

「え・・・ええ！？そんなひどいことを誰が・・・!?!？」

「案内しろ・・・」

たく・・・面倒だが・・・俺が副とはいえ担任しているクラスに手
エ出すなんて・・・許す訳ないよなア・・・。

（さりげなく入らないようにね？）

（ちィ・・・面倒だなアオイ、俺が全員潰しちまえばいいンだろオ
が）

（駄目ですからね？やるなら痕が残らない精神攻撃に決まってるじ
やあいですかあ）

随分物騒だな・・・お前らの所為で冷静になったよ。

「あっ、ネギのやつ・・・先に行ったな」

『ずっと考え事していたらそうなりますよ?』

「それもそうか・・・じゃあ行くか」

『ええ』

こうして俺はその暴行があつた場所に向かった。

「誰がゆずりますか!このババアツ!!今時先輩風吹かせて物事通
そんなんで頭悪いでしょあんたたち!!」

「なによ!やる気!?このガキーツ!!」

どうやら収まっていけないな・・・まあ仕方ないか。

「いい加減にしろ」

「えっ・・・龍斗先生!?!」

どうやら高等部のやつにまで知られているらしい。
有名になったつもりはないんだが・・・。

『(容姿と性格のせいなんですけどね・・・マスターは気づかないで
しょうが)』

とりあえずは収めないとな。

「女の子が取っ組み合いするな、みつともない」

「龍斗・・・先生、でも・・・」

「先に手を出したら負けなんだ、少しは我慢も覚えてくれ」

「・・・はい」

「その高等部のやつらもな」

「はあ!?!」

どうやら関係ないように考えていたんだろうが・・・、

「そも、君達は後から来たのだから別の場所に向かうべきだった、もしくは譲ってもらいたいならそれ相応の態度で接するべきだ、なのにそっちは無理やり退けようとする・・・それでは駄目だろうが」「はい・・・」

これで大丈夫か？なれない事だと疲れる。

「・・・ふんっ」

納得してなさそうだ・・・当たり前か。

「では、解散、しつかり授業には間に合わすようにな」

まあ面倒にならなければいいんだが。

まあそんな願いが簡単に叶うはずもなく、今は屋上にいる。理由？高等部が中等部のとこまで来ているからまた喧嘩になっている。

そして今はネギが魔力を暴発させてからドッジになったとこまで進んでいる。

「こっちは全部で11人、そっちは倍の22人でかかって来ていいわよ」

「わかっ「待て待て」何よ・・・」

まさか本気じゃないよな？

「まさか本気で22人で行こうとしてないよな？」

「え？22人で行くわよ？」

「おいおい、ドツチじゃあそれはハンデにはならん、寧ろ避けづらくなる」

「あっ」

「気づいたか」

あつちで舌打ちが聞こえるが知らん。

「じゃあ11人对11人でいいわ」

「そう・・・なら、私達が勝つたらネギ先生と龍斗先生を教生としてゆずってもらつわ・・・いいわね？」

「なっ!?!」

「む・・・」

「クク・・・」

「え〜〜〜〜っ!?!」

何故か刹那と真名とエヴァと茶々丸が反応していた。

何故だろうか。

「結局こうなるのか」

結局俺も参加する事になり、11人のため、俺、アスナ、木乃香、雪広、古 菲、宮崎、綾瀬、刹那、エヴァ、茶々丸、真名となった・・・。

俺がいなくても勝てる気がする。

ネギ？審判だよ。

「さて、頑張るとしようか」

「ああ、龍斗は私のものだ・・・それをやつらは!?!」

「この戦い・・・負ける訳にはいかない!?!」

「マスターもそうですが・・・私も負けたくないようです」
何故かやる気満々だなオイ。

「では試合開始！」

それが死合いにならないように祈るか。
そう思っていた時期が俺にもあった。

戦いは圧倒的差でこっちの勝ちだった。

途中で黒百合だとか言ってたがそんなこと知ったこっちゃんと言
わんばかりにフルボッコだった。

気がついたら11対2だった。
時間切れだった。

「まだロスタイムよ！」

そついいながら相手はボールをアスナに当てようとしていた。

イラッ。

「危ない、アスナさん!!」

「え・・・」

さすがにイラッと来たな・・・。

「オイ・・・」

「えっ!？」

「いい加減にしないと・・・」

そついいながらボールに力をこめる。

「「」にするぞ?」

ボールを破裂させた。

「ひいつ!?!」

高等部のやつは全員帰っていった。

高等部の教員には連絡していたので今頃怒られているだろう。
こっぴどして、無事にドッジは終わった。

その帰り、

「・・・エヴァ、先に帰っててくれないか?」

「む?どうした?」

「いや・・・少し用事を思い出してね」

「そうか・・・早く帰って来い・・・分かったか?」

「ああ、すぐに戻る」

「ならいいさ」

エヴァと茶々丸は先に帰る。

その後に隠密性に優れた結界を張る。

「で?そこにいるのは誰だ?」

「あれ?ばれてましたか?」

「あんなだけ殺気を出されたらな」

「いやあ試してすみません、弱い人はいらなと言われたので」

「・・・用件を言え」

「ええ、では言います」

そう言うと、金髪の少年は、

「僕達・・・螺旋オレオンなる蛇に来てくれませんか？」

「な・・・に？」

何故この世界に螺旋オレオンなる蛇があるんだ？

まさか・・・。

「ええ、想像通りだと思います、僕達は全員転生者です」

「やはりか」

なら納得がいく。

「で？どうです？仲間になってくれませんか？」

再度問われる。

「無理だな、俺は俺の道を行く、何人たりとも止める事はできない、少なくともお前らに止められはしない」

これは力の差の事ではない。

純粹に心が否定している。

だからこそコイツらでは止められない。

「そうですか・・・では、また来ますね？そのときには変わっている事を願います・・・でないと言方大切なものに手を出さないといけないからですから」

「・・・ギリッ」

「おおっと、その殺気には耐えれそうにないので帰らせていただき、ます、では・・・ああそうだ、僕の名前はフィン・クルーダです、

能力も同じです・・・今度こそさよならです」

こうして少年・・・フィンが消えた。

何か大変な事が起ころうとしている気がする。
嫌な予感しかない。

ネギま編 第16話（後書き）

後書きコーナー！

龍「大分戻ってきたな」

うん、まあ大分ね

龍「まあさつさと治せ」

それは無理、デフォだからね。

龍「・・・感謝コーナー」

ケルベルス様、Jam様、メガネ様、KONA様、感想ありがとうございます！
ございます！

龍「今回は番外編をしたいと思っている」

一応活動報告でも言っていますが、もう100部いったんですよね。
なのでその記念にやろうと思っています。

龍「だから何処か行ってほしい世界（アニメ、ラノベ、漫画などの）
を言ってくれ」

一応、ゼロ魔とFateは外しておきます。
理由は自分に書ける自信がないからです！！

龍「威張るな」

感想に書いてくれるとありがたいです!!

龍「締め切りは一応今週の木曜までだ」

もしなければレンタルマガキやムシウタなどの自分しか得しなさそうな世界になりますww

龍「まあ希望を感想に書いてくれるとありがたい」

では！また次回。

龍「ではな」

番外編22（前書き）

今回は100部突破記念です。

なのに・・・駄文・・・へへッ、やっぱり俺って！不可能を可能に！！
どんな状態でも読んでやる！という方はどうぞ！！

番外編 22

また夢を見ている……。
これは……。

「間違いじゃないんだから！」
「くっ!!！」

「はああああああ!!！」

何故士郎とアーチャーの戦いを見ている？
俺はこれには関与……ああ、能力のせいか。
この結末はなるべくしてなった……変える事は許されない。

「ああ、これを変える事はできない、させはしないがね」
「夢なのに語り掛けてくるか……」

「ああ、夢だからこそだろうな……さあ起きろ、もはや貴様の知る世界ではない」

「何？」

「ふむ……まあ起きれば分かるだろう、貴様が慌てふためく姿を見るとしよう」

「性格悪いな……」

「そら、さっさと起きろ」

そういいながら殴ってきた。
意識が……どうやら目が覚めるらしい。

「お前と私は何処か似ていて根本的に違う……だから私みたいにはなるな、貴様は貴様の信念を貫いて見せる」

「アーチャー……ああ、分かっているさ、俺は俺だ、俺は大事な

仲間を護る・・・そのために力をつけてきたんだ」

「フツ、ならば大丈夫だろう、精々足掻け」

「ああ、じゃあな」

「ああ」

夢から覚める・・・アーチャーとの会話は忘れない。

そう思いながら俺は目を覚ました。

目を覚ましたら違う世界だと聞いて少し不安に思いながら・・・。
まあ知らない場所だから混乱したのは当然の事だと思う。

あれから数年。

どうやら体が縮んでいたので周りを確認すると、学園都市があった。
とあるの世界かよ・・・と思っていたが今は開き直す事に。

俺が学園都市で検査した結果、レベル5でした。

能力は『全知全能』^{オルマイティ}だった。

名前負けしてる気がした。

今は高校生・・・上条 当麻と同じクラスであり、当麻とは友達だ。
何故説明しているかだと？

ただの現実逃避だ。

「不幸だあああああああ!!」

「そう言いたいのはこっちなんだが」

「えらく余裕そうですね!？」

「いや、結構しんどい」

まあ面倒だからだが。

「さっさと片付け・・・あゝあ、出会っちゃったか」

「いきなり言うわね・・・」

「げっ!?!?ビリビリ!?!?」

これで不良達は全員お陀仏か。

「勝手に殺人犯にしないでくれる？無能力者の扱いなんて慣れてるのよ」

「そうかい」

「それと、龍斗！私と戦いなさい！」

「・・・後は任した」

「ちよっ！？上条さんに全て丸投げですか！？それは予想外ですよ！？」

「じゃあな」

「不幸だああああああああ！！！」

その後原作通りに雷が落ちた。

まあ反射しておいたから俺の部屋は大丈夫だな。

『汚い、さすがマスター汚い』

「酷い言い方だな」

『事実ですよ』

そんなもんか？

「で？外に変な気配がするんだが・・・」

『見てみたらどうです？』

「嫌な予感しかしない」

というよりこれは直感か。

まあ行くしかないんだがね。

外を見ると、

『そこには銀髪シスターさんが引つかかってました』

「なん・・・だと?」

「おなかすいた・・・」

この出会いで俺も当麻も巻き込まれた・・・非日常に。

原作通りに進み、今はステイル・マグヌスが現れた。
相手は魔術師・・・遠慮はいらないな。

「当麻・・・少し下がってる」

「は?」

「我は命ずる」
ハイル

ヤドリギを飛ばす。

「無駄だよ」

そう言いながら相手は炎でヤドリギを燃やす。

「隙ありつてな」

「なっ!?!」

――無明神風流奥義・白虎――

白き獣を模した神風を放つ。一撃目で発生したすさまじい剣風で引き寄せて、強力なカウンターを放つ。

「ガハッ!」

「な、何だ今のは!?!」

「今は説明している暇は無い、インデックスをつれて逃げろ、こい

つは俺が潰す」

「なっ！？お前をおいていけるかよ！」

「さっさと行け、じゃないとインデックスが死ぬ」

「くっ！無事でいろよ・・・龍斗！」

「ああ、お前もな、当麻」

「逃がさないよ」

相手はインケンティウス魔女狩りの王を出してきた。
どうやら本気らしい。

「知るか、俺は護る・・・護りたいものを！そのためなら・・・貴様を潰す！」

――無明神風流殺人剣・みずち――

相手のインケンティウス魔女狩りの王に向けて放つ。

これは地面を食い荒らすものだ。簡略版のために足止めにしかならないが・・・これで十分！

「なっ！？」

「ここで沈んでいる」

――無明神風流奥義・青龍――

16本の「みずち」の渦を作り出し、それが竜巻となって敵を宙へ舞い上がらせ、無防備なところに強烈な一撃を加える。
これで終わりだ。

「さて、当麻は無事に小萌先生のところにいけただろうか」
『確認しに行きましょう』

「そうだな」

こうして、ステイルとの戦いは終わった。
だがこの戦いはまだ序章に過ぎなかった。

あれから少し経った。

インデックスと当麻と俺で温泉に向かう事に。

今日か……。

「当麻の馬鹿！」

む？どうやら勝手に行ったらしい……。

「当麻、追え」

「え？あ、ああ」

当麻はインデックスを追いかけた。
さて、

「出て来い、そこにいるのは分かっている」

「……只者ではないようですね」

「さてね、まあ当麻の所に行かせる訳にもいかない、インデックス
を連れて行かれるのはもつてのほかだ」

「彼女を保護させて下さい、手遅れにならないうちに！」

「理由は分かっている、だが無理だな」

「何故！？」

「治す方法が分かっているのを何故見捨てなければならない」

「本当なんですか！？」

「嘘を言っただろうする、でもまあ……信じるには値しないよなあ、

ならこれで語るうか」

そう言いながら俺は天狼を出す。

「いいでしょう・・・本気でいきます！」

そう言いながら相手はその手に持つ2mを越す日本刀『七天七刀』で攻撃してくる。

「ふむ、ワイヤーか」

「よく分かりましたね」

「何、少しばかり目が良くてね、偶然見えただけさ」

さっきのが七閃か。

当たったらバラバラにされそうだ。

「次はこっちだ」

――無明神風流奥義・朱雀――

火の鳥を模した神風かせを放つ。強烈な剣圧で敵の動きを封じ、上空から渾身の力を込めた一撃必殺の刃を振り下ろす。

まあ相手が相手だから一撃必殺にはならないだろうがな。

「くっ・・・あぶないところでした、この体でないと耐える事はできなかつたでしょう」

「なら次でしまいにするかい？」

「・・・そうですね、その前に一つ」

「なんだ？」

「どうしてあの子を？あなたは出会ってばかりのはずですが」

「クク、助けるのに理由は必要か？そこに助けたい存在がいるなら理由はいらない・・・ただ護り通すのみだ！そのための力・・・そのための信念だ！」

「・・・そうですか、では、最後です、全力で行きます！」

「来い！俺もそれに応える！」

――唯閃――

――無明神風流最終奥義・黄龍――

相手は独特の呼吸法で魔力を練り上げることにより、自身を人間の限界を超えた体の組織に組み換え、必殺の抜刀術が放たれる。

それに対し俺は、信念の極みにて「朱雀」「白虎」「玄武」「青龍」4つの神風を同時に発動したときに起こすことが出来るもう一つの神風。その姿は四神の中央に座し、森羅万象全てを護り、破壊する力を持った最強の神龍・・・それを放つ。

「くうううううう！！！」

「はあああああ！！！」

もつとだ！もつと強く！じゃないと信念が貫き通せない！！

「なっ！？眼が紅く！？」

「はあああああ！！！」

「くううううう！！！」

ドカーン！！

相手・・・神裂 火織は倒れた。

「私の負けですね・・・あの子を任せます・・・必ず救ってください」

い

「勿論だ」

神裂との戦いも終わった。

その後は原作通りとも言えるので省略。

今はインデックスにある呪いを解呪するために当麻に協力してもらっている。

「此処か？」

「ああ、そこだ、そこを幻想殺しで触れろ」

「その眼になると性格が変わるのか？」

「いや、元々だ」

今は妖精眼グラム・サイトを使って正確な位置を調べていた。

どうやら簡単にいけそうだ。ここまでは。

「なっ!？」

当麻が触れた瞬間、何かが壊れる音がした。

呪い・・・首輪をはずす事はできた・・・後は、

「これを何とかして終わりだな」

「そうだな・・・行くぞ」

「ああ！」

インデックスは今、自動書記ヨハネのペンによって迎撃を開始している。

ステイルと神裂はもう来ている。

ステイルは魔女狩りの王を発動させた。

だが、

「警告、第二二章第一節、炎の魔術の術式を逆算に成功しました、曲解した十字教の教義をルーンにより記述したものと判明、対十字教用の術式を組み込み中・・・第一式、第二式、第三式、命名、『神よ、何故私を見捨てたのですか』完全発動まで十二秒』

すぐに対策される。

だが、

「いくぞ・・・当麻、悲劇を終わらせよう・・・そして皆で笑い合おう』

「ああ！いくぜ！その幻想をぶち殺す！」

当麻の幻想殺しによって、インデックスの自動書記が破壊された。

ヨハネのペン

これで終わりだな。

まあ羽根を防いで・・・だがな。

「当麻！右斜め三十二度から四十二度にかけて幻想殺しで払え」

「お、おう！」

「次！左斜め後方四十度から六十度にかけて払え！」

「くっ！」

「何をボケツとしている！貴様らも手伝え！」

「あ、ああ」

「ええ」

そう言いながら、妖精眼グラム・サイトを使って指示を出し、全ての羽根を潰す。

「よし、これで終わり・・・」

「龍斗！？」

『マスター！？』

くっ！どうやら・・・まだ羽根が残っていたみたいだ・・・くそっ
！戻るとはいえ記憶が一時的になくなるのは嫌なんだが・・・まあ
当麻がなるよりマシか。
そう思いながら気を失った。

あれから数日。

記憶をなくしてから少しの間大変だった。
まあクロスの中に予備の記憶を入れておいてよかった。
これで復元完了。

「さて、インデックスや当麻達に会いに行くか」

そう思いながら俺は病院を抜け出した。

これから何が起きるか分かりはしない。

だが俺は護りたいものを護り抜くのみだ。

「答えは得ていたか・・・なら大丈夫だな、お前の信念・・・貫き
通してみせろ」

そんな声が聞こえた気がした。

番外編22（後書き）

後書きコーナー！

龍「何故アーチャーを出した」

つい最近映画を見たから！もう一回ね。

龍「だから出すか？普通」

あいにく普通じゃないんでね。

龍「どうでもいい」

ひでえ。

龍「さて、感謝コーナーだ」

紅舞姫様、雨季様、ケルベルス様、KONA様、Jam様、メガネ様、感想ありがとうございます！

龍「今回はとあるになったが・・・違和感だらけだろうが・・・すまない」

龍斗の能力『全知全能』は簡単に言えば全員の手を使えるというやつですね。

龍「分かりやすくわかり辛いんだが？」

何、気にする事は無い。

龍「・・・死ぬ」

ちよっ！？

——無明神風流最終奥義・黄龍——

ぎゃあああああああああ！！

龍「ではな、今回は本編だ、遅くなるかもしれないが、確実に投稿するので気長に待っていてくれ」

ではでは！

ネギま編 第17話（前書き）

テストが終わったので投稿します！

遅くなってすいません！

でもテストに自信はまったくありません！（汗）

今回は原作とは絡みません。

久々なのでいつも以上にグダグダですがご了承ください。

ネギま編 第17話

あの螺旋^{オビオン}なる蛇出現から数日。

今日はあいつ等の情報を少しでも手に入れようとしていた。

「何事も情報がなければキツイからな」

『あればあるだけいいですからね』

「そうだな、まあ見つければいいな程度だがな」

エヴァは花粉症でダウンしている。

一応呪いは解いているが、どうやら花粉症は防げなかったらしい。なので今日は一人だ。

「何かめぼしいものはあつたか？」

『いいえ、でも大分見ましたね』

「そうだな」

今いる場所は、別荘の図書館だ。

どんな感じかというと、地球の本棚だったか？見たいな感じだな。

まああれの劣化版だな。

便利だからいいがな。

『どうやら少しだけのようですね、情報は』

「だろうな、最近動き出したやつに絞れ」

『了解です』

クロスに手伝ってもらい、作業を進める。

面倒だが確実に相手できる状態に持って行きたいからな。

情報は大事だ、まあ半信半疑だがね。

『ありました』

「出してくれ」

『了解』

どうやら最近行動し始めたらしい。

もし目的があつちのやつと同じなら創世だろうな。

面倒だよな・・・魔法使いが普通に存在できる世界なんて・・・魔法世界で満足しろよ。

『人は・・・生物は今の状態に満足出来ずに上を求めてしまう存在ですよ』

「そうだな、俺もそうだったな」

でもまあ・・・後の事を考えずに行動するのは許せないよな？

『ええ、ですので潰してやりましょう』

「ああ」

2人で喋りながら情報を探した。

見つかったのは、やつらの人数、少なくとも七人はいるそうだ。

目的は分からず、ただ何かを探しているのは確かだそうだ。

「やはりコレか」

『でしょうね、あの世界通りならば・・・紅い種を探すのが筋でしょうね』

神のミス？でどうやら俺の右目に紅い種が入っているらしい。自分で持ってたほうが安全なため、こうしている。

「さて、一旦休憩にしよう、もうそろそろ1週間寝ていないからな・
・少し眠い」

『ならおやすみなさい、時間になったら起こしますよ』
「なら頼んだ」

そう言っつて、俺は眠った。

>クロス Side<

初めて自分Sideがあつたような・・・気のせいですかね？
でも、

『マスターは頑張りすぎです、もっと周りを頼ってください・・・
せつかくあなたを大事に思ってくれる方が多いのですから・・・ま
あ気づいていないんでしょうが』

まったく、何故こつちも鈍くなつたんですかね？

「む？龍斗は寝ておるのか」

『アリカさん』

「分かつておる、しかし・・・あどけない表情で寝るんじやな」

アリカさんの言う通りで、マスターは寝るときはまるで子供のよう
に安心した顔で寝ます。

まあそれだけ気が抜けるといふ事でしょうが。

「しばらく見ててもよいか？」

『ええ、別に構いません、でも起こさないで下さいね？それは私の
役目なので』

「了解じゃ」

それから5時間ほどマスターは熟睡しました。
まだ寝かしておきたいですが、約束の時間を越えているので仕方なく、起こす事にします。

>クロス Side end<

『マスター。おきてください』

「んう？」

「!？」

ん？どうやら大分寝てしまったようだ。

いつの間にかアリカが来ていた。

気の抜けた返事しかできない状態では少し恥ずかしい。

「アリカ、どうかした？」

「い、いや、何でもない！何でも・・・」

「？」

『（まあマスターの寝起きは強力ですからね、眼をゴシゴシしながらふにやっと笑う・・・これは強力すぎる！って感じですし、いや、ヴェスパーじゃないですよ？）』

何故だろうか・・・無性にクロスにツツコミを入れなければいけない気がした。

『では続きを開始しますか？』

「そうだな・・・ああ、今回はもう少し絞って検索しよう」

「む？何か探しておるのか？」

「あ、ああ、少しな」

「ならば手伝おう、暇なのでな」

何故じと目で俺をみるんだろうか？

「まあ手伝ってくれるなら是非」

『そうですね、では、探す内容を渡しますのでどうぞ』
「うむ」

こうして、2人と一機で残りの情報を調べた。

結果、わかったのはやはり少数精鋭だという事。

相手の一人はケルト魔術を使うこと、これは間違いなくフィン・クルーダの格好のやつだろう。

おそらく妖精眼もあるだろう。グラム・サイト

他はメルキオーレ・・・死霊術師か。ネクロマンサー

確か肺や腸を使う術式だったはず。胸糞悪いが。

だが・・・やはりここまでか。

「でも大分分かった、まだ調べないと分からないが・・・これで少しはマシだろう」

『そうですね、アリカさんは疲れたのか眠ってしまいましたし』

「ああ、今度礼をしないと」

『そうですね、でも大分見つかりましたね、全然無いものだと思います』

「確かにな」

でも見つかったんだ・・・これを使わない手はない。

「今日はもう寝るか」

『そうですね、今日は疲れました、と言っても外ではまだ1時間も経っていませんが』

「ああ、じゃあ3時間ほど寝ようか」

『いえ、もっと寝てください、それで無事なのは作者^{バカ}だけです』

「いやいや、結構いると思うよ？」

電波を流すな。

「じゃあ寝る、時間になったら起こしてくれ」

『了解です（また写真が増える！）』

「？まあいい、じゃあオヤスミ」

『ええ』

こうして俺は眠った。

外では試験の話が出ていたらしい。

それを知ったのは寝てから一日経ってからである。

ネギま編 第17話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「遅い」

すみませんでした！！

龍「次は早いんだろうな？」

精一杯努力はします。

龍「・・・ならいい、今回だけだ」

は、はい！！！！

龍「さて、感謝コーナー」

J a m様、W h i t e S e a l様、メガネ様、ケルベルス様、感想ありがとうございます！！

龍「今回は大分遅くなった、反省している」

次回はここまで遅くはならないと思います！

龍「まあ期待はしないでくれると嬉しい、コイツだからな」

ひでえ。けど否定できない！

龍「今回は一応日曜予定だ」

あくまで予定ですので、間に合うように努力はします！

龍「ではな、次回も見てくださいと嬉しい」

ではでは！

ネギま編 第18話(前書き)

今回もあまり原作と関係ありません！

ですが、少しずつ進んではいるので安心？して下さい！！

戦闘は難しいですね。何をしたいのかが分からない・・・orz

ネギま編 第18話

調べ物をしてから数日。

「どうやらもう少してテストがあるらしい。」

「噂では点数が酷いと小学生からやり直しか。」

馬鹿馬鹿しい。

「でも無視する訳にはいかないよな」

『ですね』

「む？どうかしたのか？」

「ああ、どうやら次のテストが試練みたいなものみたいだな」

理由をエヴァに説明。

「何？ならば協力しよう、龍斗がいないのは面白くないからな」

「そうか、感謝する」

「ふ、ふん！わ、私に礼を言っな！」

照れているのか？

まあそれはそれとして、

「茶々丸も協力してくれないか？」

「はい、頑張ります」

「ありがとう」(ナデナデ)

「!?!?!」(ボンッ)

あれ？茶々丸が倒れた・・・大丈夫だろうか。

「はぁ・・・私が連れていく、お前は寝ている」

「ああ、よろしくな」

今日はもう寝る事に。

原作通りならば俺がいなくても大丈夫だろうが・・・分身を向かわせておくか。

いつアイツらがくるか分からないからな。

「さて、そんなこんなで次の日」

『どうかしましたか？』

「いや、何故か言わないといけない気がした」

『？そうですか』

どうやらまた電波らしい。

まあ気にしないほうがいいか。

「さて、そっちは任せた」

「ええ、了解です」

狂識に任せて俺は警備みたいなものに出かける。

今日はどうやら図書館島に向かったらしいからな、ネギたちは。

俺はやつらに会わなければならない。

確かめなければならぬ事もあるしな。

「さて・・・出て来い」

「おや、自信はあったんですがね・・・やはり無駄でしたか」

目の前には以前現れたフィン・クルーダの名を語る転生者。

「それだけ気配を消す気がなければ気づくに決まってるだろうが」

「それもそうですな」

「で？用件はなんだ？」

「以前と同じですよ」

「くどい、断ると言ったはずだが？」

そう言うことやっはさぞ面白そうに、

「フフ、ええ、なので手段を選ばずに連れて来いと言われましたので」

「オイ・・・」

「いえいえ、あなたの大切なモノには手を出していませんよ、今はね」

「貴様・・・」

「怖いですね、今回はある程度実力を見て来いとも言われています、相手願います」

「・・・潰してやる」

こんなやつらに・・・護りたいモノを消されてたまるか！

「^{ハイル}我は命ずる」

ケルト魔術によるヤドリギを使った攻撃が飛んでくる。

「^{ナウマク}あまねく ^{サマンダ}金剛尊に ^{ハザラ}帰命し ^{ダンガン}たてまつる」

――不動明王真言――

不動明王を示す印を結び、仏法に仕える諸神の中でも五大明王の長に君臨し全ての不浄を怒りの業火で焼き滅ぼす仏の化身「不動明王」の権威を借りて、その神通力たる炎で不浄を焼き滅ぼす。今回はヤドリギを焼き滅ぼした。

「それは・・・密教ですか」

「そうだが？」

「貴方はケルト魔術と妖精眼グラム・サイトしか使わないものかと思っていたので

「勝手な想像だな」

「ええ、思い知らされました」

まだ余裕でいる・・・何かあるのか？

「ではこれでどうでしょうか・・・我ハイルは命ズずる」

ヤドリギの形が変わり、槍になった。

あれは・・・ミストルティンか。

確オリジンか原型に近い性能のはず・・・使われると厄介だな。

「仁高護我 丁醜保我 仁和度我 丁酉保全 仁燐管魂 丁巳養神

太陰華蓋 地戸天門 吾行萬歩 玄女真人 明堂坐臥 隱伏蔵身」

「――丁護身呪――」

太陰によって導かれる諸力を集中させ、自らの身を外部の影響から防護する。

原作でもかなり上の部類に入る防御魔術だ。

「今度は道教ですか、ですが・・・用意しておいて正解でした」

「何？」

そう思った瞬間。

「渾沌こんとん」

それは東にあつて悪をなす、盲目聾啞の妖狼。

「饕餮とうてつ」

それは南にあつて人を喰らつ、人面牛身の怪物。

「窮奇きゆうき」

それは西にあつて災いを撒く、翼を持つ虎の妖。

「檮杌ちうぶ」

それは北にあつて暴虐を起こす、人面虎身の魔獣。

「これは……」

さらに高く、低い声で呼ばう。

「逆しまに行い下せば、逆しまに行つぞ」

さらに続く。

「微塵と破れや……四方さんざら微塵と破れや」

「十年掛かりましたが……まあ貴方を少しの間押さえるには十分
でしよう?」

「くっ!」

詠唱を止めようにもやつが妨害してくる。

その間にも詠唱は続く。

「これは！」

式紙を出して、太極回帰の陣の準備をする。
だが、妨害は確実なので、

「ひとつがふたつ、ふたつがよつつ、よつつがやつつ、やつつがじ
ゆうろく　大極より両儀生じ、両儀より四象に至り、四象は八卦
へと変わり、八卦は六十四卦の大成卦となす、されど、我はその爻
を押し開き、三百八十四の爻を結ばん　今宵の演し物は、四神相
応がひとつ　六十四卦三百八十四爻の陣」

――六十四卦三百八十四爻の陣――

陰陽道によって式を増やす。

これで消し尽される前に完成できるはずだ。

「くっ、どうやら今回は厳しいようだが」

「そうですね、どうやら妖精眼グラム・サイトで強化されています、僕の妖精眼グラム・サイト
は消しきれません」

「目的は太極回帰の陣だろう、それでこの陣は無効化できるからな」
「でしょうね、どうやらここまでですね、ボスにも戻って来いと言
われていますし」

「ああ、戻るぞ」

「逃がすとも?」

「いえいえ、あなたも分かっているはずですよ?」

「くっ」

分かっているさ・・・貴様らが確実に見逃されるために俺の護る対
象を人質に取っている事位な。

くそっ！

「さつさと行け、次はない」

「ええ、次はどうでしょうね、ですが、意見が変わっている事を望みますよ、それがボスの望みですから」

「喋りすぎだ、行くぞ」

「はい、それでは」

相手は帰っていった。

くそっ！力が無いせいで・・・またあいつ等を危険な目に合わせる所だった。

俺はまだまだ強くないといけない。

今はネギ達は何も知らずに図書館島にいるだろう。

それでいいんだ・・・世の中には知らない方がいい事なんて沢山ある。

あいつ等を護りたいと思っっているのは自分のためみたいなものだ。

自分勝手に行動するなら自分自身で背負わなければいけない。

そのためにも力がある・・・護る為の力が。

そのためにも・・・

「もつと頑張らないとな・・・」

『ええ、頑張りましょう』

この後は何もなく、精々が分身の報告で、図書館島に行ったやつらが、テストを当日に受けれるか微妙な状態になっている事を聞いた程度だ。

分身を付けているので安心できるとは思うが・・・一応分身に、何かあったら呼べとっておいたので大丈夫だろう。

まさか原作以上にくだらない内容だったら・・・学園長とOHA

NA SHIだな。

今日は普段は使わない道教を使ったせいで疲れた・・・眠ろう。

そう思い、寝た。

次の日からはもっと修行を厳しくしようと思いつつながら。

ネギま編 第18話（後書き）

後書きコーナー！

龍「今回はひたすらレンタルマガ力だったな」

あの追加で出てきたのはイエンド礎ソくです。

龍「知らない人ばかりだと思っがな」

さて、感謝コーナー！！

龍「多人様、KONA様、メガネ様、感想ありがとう」

次の更新は東方のほうを更新してからになるので遅くなるかもです。

龍「まあ暇だったら東方の方でも見てくれ、こっちと同じく俺が主人公らしいが」

まあ同じく駄文ですけどね！

龍「なので次回の更新は今週中にはできるようにしたいと思ってる」

次回でテスト編は終わって、その次でエヴァ戦に入ります！

龍「修学旅行まで大分先だが、飽きずに付き合ってくれと嬉しい」

ではでは！また次回！

龍「ではな」

ネギま編 キャラ設定(前書き)

自分でも遅いと思いますが、キャラ設定です。
絵はぶつちやけ適当です(汗)

本当は本編更新する予定だったのに・・・。

ネギま編 キャラ設定

森 龍斗

> i 2 9 2 7 3 — 2 7 4 3 <

見た目はまんま少女ですが、これでも15歳設定です（笑）

性別 男（の娘）

普段の服装は寝巻きがこの絵の格好。

他は大体、七夜の学ランです。（時々クロスが服のサイズを変えるのでブカブカになったり、ただし本人は気づいていてもスルーしている）

好きなもの（事） 甘いもの、ロボット、読書、昼寝、頭を撫でてくれる人

嫌いなもの（事、人） 苦いもの、台所とかで見かけるG、外道、仲間を傷つけるもの

武器 大抵のものは使えるが、気に入っているのはナイフと刀、後は銃。

偶に鋼糸を使う。

能力は変わらず、主に使うのは、ブレイブルーの技、レンタルマギカに出てきた魔術、型月に出てくる技や魔術、アーカードと同じ技めだかボックスに出てきた異常と過負荷、無明神風流、とあるの超能力と魔術。

ネギまの世界に来てからまだ全力が出せない状態なので固有境界は不可。

ただし、固有結界は可能。

後は、オリジナルの剣技。

性格　ネギやナギの所為？で面倒な事は避けようとするように。

でも結局は自分から面倒事に首を突っ込むので無駄に終わる。

酒を飲みすぎると、一気に幼児化してしまい、近くにいる者に甘えてしまう。

昔は自分の命で誰かが救えるなら簡単に投げ出すような状態だったが、なのは達のおかげで今はない。

でもやはり、何処か命を軽視しているので無茶をする。

最近は護りたいものが増えすぎて困惑中。

自分の信念は何としても曲げはしない。

信念は自分の手が届く限りの護りたいものを護り抜く事。

ネギま編 キャラ設定（後書き）

後書きコーナー！

龍「・・・あの寝巻きはおかしいのか？」

いやいや、君がおかしいと思ってなければおかしくないさ。

龍「姉さんや母さんにこれを着るのが当然だと言われたな」

（やっぱり何処かずれてるなあ〜）

龍「さて、感謝コーナーだ」

ユタ様、KONA様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「今回はキャラ設定ですまない」

そつだ、絵を描こうと思って描いたら気がついたら龍斗を描いていて、ならキャラ設定書こう！と思ひまして。

龍「大して上手くないのにな」

言わないで！（本当はもっと幼女ぽく描きたかったけども！）

龍「？」

えっと・・・次回はきちんと本編ですのぞ！

しばしお待ち下さい！！

龍「ではな」

ではは！

ネギま編 第19話（前書き）

今回でテスト編は終わり、次から吸血鬼編です。

何も考えずに書いたのではつきり言っただけがしたいか自分でも分かりません！（オイ

それでもよければどうぞ！

次は少しだけ長くなるように頑張ります！

ネギま編 第19話

ふむ……。

『どうかしましたか?』

「何故かここにベルトがあるんだが……誰のだ?」

目の前にいかにもなベルトがある。

『それはあの神が送ったやつですよ?聞いてませんか?』

「いや、何も言われてないが……」

何故こんなものを?

今はテストで忙しいんだが?

『「何でも最近こういうのはまった、龍斗も付けて変身してくれんかのぉ」だそうです』

「そして何故ファイズ?」

いや、好きだけどさ。

ついでに言っていると作者が一番好きなのはカブト、その次がファイズ、ダブルだ。

まあどうでもいいが。

「どうするか……今はテストで急がしいんだがな」

『テストが終わってから変身してみては?』

「そう……だな、うん、神が変身しろというんだからな」

『そうですね(そう言いながら眼が輝いてるマスター可愛いですね

!)』

何故かイラツときた・・・。

「さて、狂識は大丈夫だろうか、あれから連絡がないが」

『大丈夫でしょう、なんならこちらから連絡しては？（多分意地悪的な感じでしょうが、まあいざとなったら連絡はくるんでしょうけど）』

「そうだな、なら連絡してみるか」

学校では大変だったからな。

なんせあの委員長が面倒だった。

あれが確かシヨタコンだったか？

・・・忘れよう。

「おい、狂識」

「はい？」

「そっちから連絡がないと分からないだろうが、状態はどうなんだ？」

「ああ、忘れてました、すいません、異常はないですよ、無事明日には戻れそうです」

「そうか、学園長めらりひょんは余計な事をしていないか？」

「ツイスターゲーム以外なら何も・・・いえ、今進行形でしてますね」

どうやら何かしているらしい。

「何をしている」

「ええ、無防備な女の子達を追い掛け回してますね」

「処刑だな」

『処刑ですね』

さて・・・ネギにやってるやつ強化版でいいか？

『それは処刑ではなく死刑です』

「まあまあ、今は私が何とかしておくので大丈夫ですよ」

「何とか？どうするつもりだ？」

「どうするつもりも何も・・・ただ転ばせるだけですよ？」

「（あの顔は何かたくらんでるな？ろくな事が起きなさそう・・・）
」

今だけ同情するよ。

今だけだけどな。

「あっ」

「どうかした・・・ああ」

何があったか見ると、ゴーレムが落ちた。

見事なぐらい綺麗に。

「すみませんね、何せ足癖が悪いので」

「悪すぎだろ」

学園長めいじやんが、いや、ゴーレムが綺麗きれいに下に落ちていったからな？

「まあまあ、本体には後の事を任せますね？もう疲れました、さすがに寝ないで見張るのは疲れます」

「もう戻ってくるのか？」

「ええ、今エレベーターに乗りました」

「そうか、ありがとう、ゆっくり眠ってくれ」

「では・・・ふあ」

戻ってきた感覚がするので戻ってきたんだろう。

まあ今は寝ているが。

さて、馬鹿共をどうするかな？

とりあえずは・・・

「説教だな」

『ですね』

まあ眠いだろうから先に帰すかもな。

・・・甘いのかねえ。

『いえ、一番駄目なのは無責任な甘さですよ、マスターは違うので安心してください』

「急にどうした？」

『いえ、急に言いたくなっただけ』

「そうか？変なクロス・・・」

『いえいえ（やはりマスターには笑顔でいてもらわないと・・・調子が狂ってしまいますね）』

「？」

なぜだろうか・・・嬉しいような嬉しくないような。

「まあテストは大丈夫だろう、明日の時間には間に合はずだしな」

『それは間に合わないフラグでは？』

「え？」

『え？』

まあ間に合わないとかそんなことはなく、無事にテストは終わった。結果は1位だった。

うん。学園長とは肉体言語で話し合ったよ。
その時の悲鳴は傑作だったがなあ・・・クク。

『ああ、最近ストレスががんがん溜まってますね・・・爆発しそう
です』

「まあ仕方ない」

確か次はエヴァがネギを襲うはずだが・・・呪いが無いからな・・・
じじいが絡んできそうだな。

「さて、テストも無事終わって食券も手に入ったから奢るぞ」
「「「やったー!!」「」」

まったく・・・現金なやつらめ。

『（そう言いながらも楽しそうなんですよね）』
「さて、行くとするか」
「「「おおー!!」「」」

今はこの平和をかみ締めようか。

「龍斗先生！龍斗先生！何食べてもいいの!?!」
「ああ、食券は余るほどあるしな、存分に食べる」
「やったー!!」

まあ食べ過ぎたら太るのは・・・言わぬが華か。

「というか先生が賭けとかしていいのかよ・・・」
「世の中綺麗事だけでは生きていけないぞ?」「ニッコリ」
「・・・そうですね」

どうやらいろんな意味で悟つたらしい。

頭がいいからな長谷川は、いろんな意味で。

その後、皆で焼肉を食べた。

久しぶりの大人数での食事だったからか、今まで以上に楽しかった気がした。

ネギま編 第19話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「遅い上に駄文・・・救いようが無いな」

返す言葉もございません。

龍「次はもう少し頑張るのだろうか？」

勿論。まあ遅くなる可能性大ですが。

龍「理由は？」

追試用の勉強を本気でしないと・・・やばい。

龍「さつさと終わらせる」

まあそれでも1週間に一回は更新するだろうけどね。

龍「大丈夫なのか？」

多分。

龍「感謝コーナー」

ユタ様、ケルベルス様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「次回の更新はおそらく来週だ、まあその前に東方だな」

頑張ります！両方！

龍「ではな、次回も見てくださいと嬉しい」

ではでは！

ネギま編 第20話(前書き)

今回は早く書けた気がします！(気がするだけ)
吸血鬼編は早ければ3話くらいで終わります！
まあ気楽に待っててくださいな。

ネギま編 第20話

テストが終わり、少しの間の平和は過ぎ、今は・・・、

「・・・3年！A組！！ネギ先生！龍斗先生！！」

「（バカどもが・・・）」

「（アホばっかです）」

「（無駄に元気だな）」

皆も三年に上がり、俺とネギが正式に担任、副担任になった。

無駄に元気なコイツらをまた面倒を見なければならぬのは大変だが、同時に楽しく思う。

「ネギ先生、龍斗先生、今日は身体測定ですよ、3-Aのみんなもすぐ準備してくださいね」

ふむ、さっさと出るか。

嫌な予感しかしないしな。

「で、では皆さん、身体測定ですので・・・えと、あのっ、今すぐ脱いで準備してください！！」

バカか。

「ネギ先生のエッチッ！」

「あれ？龍斗先生は？」

「とっくに出て行ったぞ？」

「む、それはそれで納得いかん」

なぜだ……。

「さて、エヴァは今回は何もしないはずだから……」

寧ろなぜ私がそんなことをしなければならぬ……他のやつに頼め、とか言つてたな学園長めいじひびょうに。
だから大丈夫だろうが……。

「先生ーっ！大変やーっ！まき絵が……まき絵が！」

何？なぜ……もしかしたら転生者か？

ああ、そういえば、眼を瞑らないとな。

「……何！？まき絵がどーしたの！？」

やはりか。

眼を瞑っておいて正解だったな。

そう思いながら、保健室に向かった。

その後は原作通りだが、エヴァが手を出していないのだから確実に転生者だろう。

おそらく敵も吸血鬼だろうが……もしかやツエツイーリエか？
確かルーン魔術を使う吸血鬼だったはず。

「面倒な事になりそうだ……最悪他の転生者かもしれんな」
『まったくですね』

今は見回り中だ。

エヴァには適当に言っておいた。

まあ警戒だけはしてもらっているが。

「さて、そこにいるやつ、出て来い」

「ああ、退屈だったからつい殺気が出ちまった・・・まあいいよな？　ずっとそこらの餓鬼の血を吸うだけじゃ物足りなかったんだ・・・お前は楽しませてくれるよな？」

やはり見た目はツエツイーリエだった。

おそらく能力や魔術は同じだろうな。

「隠れる気がないならさっさとかかって来い、生徒に手を出したんだ・・・死ぬ覚悟はできてるだろ？」

「つれないなあ、一応さ、お前に会う為に来たんだぜ？」

「知るか、というより会話がしたくない・・・さっさと消えるなり死ぬなりしろ」

「ひでえやつだ、まあ人の事はいえないか」

そう言いながらやつは誰かを持っていた。

ウチのクラスのやつではないので誰かは分からないが・・・おそらく死んでいる。

「いや、あんまりにも遅いからさ、つい、な」

やつはまったく悪びれもせずと言う。

「まあ前菜は喰い終わった、後はメインディッシュだけだ」

「・・・言いたい事はそれだけか？」

「何？」

「なら・・・死ぬ」

そう言いながら俺は文字が書かれた石を投げる。
その文字の意味は『災い』、

「汝は嵐！汝は雹！汝は災い！されば喰らえ、ハガラズ！」

黒風がやつに向かつて放たれる。

その風が通る場所は腐っていく。

人間が浴びればその肉と骨はバラバラに分解される・・・『災い』
という概念の実体化。

しかしやつには効かないだろう、なぜなら・・・、

「おいおい、そんなの効く訳ないだろ？たくつ、期待はずれか？これ」

そう言いながらやつは毛皮の豊かな胸元に指を差込み、そこから金貨が出された。

金貨の表面にも文字が刻まれていた。

「汝は氷、汝は凍結、汝は停止・・・されば止め、イーサ」

『停止』の意味を持つルーンによって、こちらの攻撃は止められてしまった。

「はぁ・・・オルトと同じかぁ？なら期待はずれもいいとこだぜ？」

「・・・落ち着いた」

「は？」

「いや、少しイラツときてたからな・・・ついな」

「そうか、なら楽しませてくれるだろうなあ！！」

「さぁ？楽しませるつもりはない」

そう言いながら俺はベルトをつける。

「ん？何だ？そのベルト」

「すぐに分かる、来いカブトゼクター」

そう言うと、上からカブトゼクターが飛んで来た。

「変身」

『Henshin』

変身した結果は勿論カブトのマスクドフォームだ。

「んだ？その愉快的格好は」

「格好いいだろ」

「はっ！愉快的格好だって言っただろ？」

「・・・まあいい、キャストオフ」

『Cast Off』

マスクドアーマーが弾け飛び、ライダーフォームになる。

『Change Beetle』

「へえ、面白いな」

「だろ？」

まあ最近神が無駄に送ってきたベルトだからな。
気に入ってるが。

「さて、行くぞ・・・クロックアップ」

『Clock Up』

クロックアップを使い、接近する。
いつまで出来るか不明なので出来る限り攻撃する。
そろそろかな？

『Clock Over』

「何を・・・ガハッ!!」

やつは思いつきり吹き飛んだ。

「何しやがった・・・」

「言つとでも？」

「それもそうか・・・ちっ！今回は退かせてもらっ

「させるとでも？・・・クロックアップ」

『Clock Up』

逃げようとするやつに向かって接近する。
そして敵の上に打ち上げる。
そして、

『1,2,3』

「ライダーキック」

『Rider Kick』

落ちてきたやつに向かって蹴りを放つ。

「はあああああ!!」

『Clock Over』

ドカーン!!

爆発音が響いた。

「がああああああ！クソッ！好き勝手やられてこれでも退けてかあ！」

「ええ、今のあなたでは敵わないと理解したでしょう？帰りますよ」「ちっ！また来る・・・次は殺してやるから覚悟しろ！」

どうやらフィン・クルーダも来ていたらしい・・・ちい！転移で逃げられたか。

『終わりましたか』

「ああ、また逃げられた・・・逃げ足だけはすごいな」

『確かに・・・でも』

「ああ、油断はしない、出来るはずが無い」

油断できるほど強くないからな。

そもそもどんなに強くなっても油断はしてはいけないからな。

「さて、おそらくネギが変な事をしない限り大丈夫だろう」

エヴァにちょっかいをかけなければ。

『無理だと思えますよ？まだ実力差がよくわからないでしょうから』

「確かにな、エヴァにはまだまだ敵わないからな、ネギは」

逃げるだけなら30分はもつか？

『逃げる事に無駄に特化しましたからね』

「あの状態じゃ仕方ない」

(ンだア？俺が悪いつてエのかア？)

別にそこまで言っていない。

(そオかい、ならいいがなア)

まあいいか。

『どうしますか？おそらく今日はもう出てこないと思いますが？』

「ならさっきの死体を処理しようか、家族に届けなければな」

『どう説明するのですか？』

「事故扱いにするしかないだろうな、それで誤魔化されるんだろうさ、忌々しいことにな」

ここの結界は一般人の事を本当の意味で考えてない気がする。

いや、確実に自分達の都合のいいようにしているだけだ・・・そう考えているやつも少なくないはずだ。

虫唾が走る・・・こんな結界に頼らなければならぬ俺自身にも・・・ここの馬鹿な魔法使い共にも・・・。

「さて、帰るか」

『はい、了解です・・・死体の処理は学園側がするそうです』
「そうか・・・」

真実を知らずに自分の息子が死体で戻ってきたら親はどう思うんだろうな・・・世の中本当に不条理だよな。

(認めるしかねェんだよ・・・どんなに足掻いても現実が変わらね
エ)

変えるために力を得たんだ・・・自分の護りたいモノのために。

(ならここで立ち止まってる暇はねエだろオが、さっさと前向いて進みやがれ)

そうだな。先に進むしかないんだ・・・なら、

「今出来る限りの事を全力でするのみだ」
『ですな』

ならさっそく修行だな。

まだまだ強くなって見せる。

これからも頑張っていこうと思いつながら家に戻った。

ネギま編 第20話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「今回は少しは早く書けたな、それでも他作者から比べれば亀更新だろうが」

言わないで！知ってるから言わないで！

龍「そういえばアレルギーは大丈夫なのか？」

いや、スギとかハウスダストとかダニとか結構多かった。

龍「そうか、基準値が170で？」

多くても500から600なのに6300だったよ！悪いか！

龍「もうアレルギーで死ぬんじゃないか？」

確かにねー。

龍「まあ作者が死のうがのうでもいいとして、感謝コーナー」

ひでえ・・・ユタ様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「作者はアレルギーを抑えるための薬を飲んだり、不眠症のために睡眠薬もどきを飲んだりしているために更新が遅くなるかもしれない、まあ薬の副作用でペアになりそうだしな」

それでも頑張りますのでゆっくり待っててね！

龍「お前はスギの花粉なんかでタヒるだろうが」

いやいや！半分くらいだからね！半分生きてるから大丈夫！！

龍「・・・安心できないな」

で、ではでは！次も今週中に更新できたらいいなと思ってます！

龍「・・・ではな」

ネギま編 第21話(前書き)

今回は過去最長です。

過去話を加えて、書いていたらこんなことになっ……。

神父出して満足しようとしたら気がついて……どっしてこんな
ったんだろっか？

ネギま編 第21話

あの吸血鬼の襲撃の次の日。

昨日の出来事はエヴァには話している。

エヴァは、

「お前のしたいようにしろ、私は見ておくとしよう」

と言っていたので大丈夫だろう。

今日も特に何もなく、学校は終わった。

・・・いや、本当に何もなかった。何も。

『そんな念入りに言わなくてもいいのでは？』

「いや、何もなかったんだから仕方ない」

『そうですか（実際はネギ先生がまた余計な事をしたせいで胃が痛くなりそうなんですよね）』

くそ・・・何か恨みでもあるんじゃないかといいたいくらいネギがミスするんだが・・・。

「はぁ・・・もうすぐで胃薬がなくなりそうだ」

『まあ3年分が一週間で飛ぶのはどうかと思うんですが』

「・・・はぁ〜」

もう帰って寝たい。

そう思えるくらいにしんどくなっていた。

まあこの体に身体的疲労はないから精神的疲労なんだが・・・。

「まあ見回りしないといけないから寝れないんだが・・・くそ、

あいつらめ……」

螺旋なる蛇漬オレオンそうかな、今すぐ、気合で。

『マスター……（冗談抜きで出来そうだから怖いんですね）』

「……見回りの範囲はここまでか？」

『ええ、ここで何もなければ帰っていいそうです』

「なら早く終わらせよう、あいつ等もすぐには攻めて来ない……」

『マスター……それはフラグです』

「は？」

「お前達は……何者だあ？」

どうやら俺にはゆっくり休むということすら出来ないらしい。

まいったね、どうも。

さて、現実逃避しても現実が変わる訳でもなし、そろそろ現実見るか。

「俺はただの一般人だよ」

「ククク、貴様が一般人だとお？貴様みたいな化物があ？……笑わせる」

「いやいや、そこらにいる取るに足らない吸血鬼だと言ったんだ、間違いはあるまい？」

「ククク、クハハハハハハ！そうか！やはり化物かあ！！」

「ヴァチカン法皇庁第13課の特務機関イスカリオテのアンデルセン神父に比べれば小さい存在だよ」

「クハハハ！分かりながら逃げぬか！面白い！お前のような……アーカードのようなやつが此処にしようとはなあ！！」

さっきいった通り、今日の前にいるのはあのアンデルセン神父だ。おそらく紛れ込んだイレギュラーだろうが。

「ここにいた吸血鬼は？」

その反応があつたからここに来たんだが、この様子だと・・・

「とうの昔に始末したよ・・・とんだ雑魚だった、楽しむ間すらありはしない」

「そうか」

そう言いながらお互いに進む。
俺はクロスを銃に変え、進む。

「残っているのは貴様だけ」

「そうかい」

どうやらエヴァには気づいて無いらしい。
まあ一応結界は張っておいたが。

「シイイイイイイ！！」「ちい！！」

やつは銃剣で攻撃を仕掛けてきた。
俺はそれに対して銃で応戦する。

ドンッ！

相手の額に銃弾が当たる。
アンデルセンは吹き飛んだ。
だが・・・

「さっさと起きろ、死んでいないことは分かっている」

「クツクツッ！クカカカカツッ！！」

ドンドンドンッ！

銃弾を連続でやつに当てる。

相手は避けようともしない。

いや、そこは少しでも避けるよ。

「シイイイイイイ！！」

「くっ！！」

しぶとい・・・やはりただの銃弾では死なないか。

ドンッ！

避けられた？いや、また当たって・・・しまった！？

ズカツ！

銃剣が手に刺さってしまった。

壁に縫い付けられたので少しだけ動けない。

「シイイイイイイ」

相手の額を見るとやはり回復している。

「Amen」

「やはり再生者か」
リジエネクター

「そつだ！！我々人類が貴様らと戦ったために作り出した技術だ」

まあ理由は後で聞くとしよう。
今は……

「修復して戦わないとな、さて、殺して解して並べて揃えて晒してやるか」

戦う事にしよう。自分の好きな殺し合いで。
前世の苗字、零崎の名にかけて。

こんなロクデナシでもヒトデナシでも護りたいモノが出来たんだ・
・護りきってみせるぞ。

「貴様……まだ無事だったか」

「ああ、俺はヒトデナシのロクデナシだからな、簡単には死なせてもらえないんだよ」

「ああ、化物は全員ロクデナシだろうな」

「いやいや、俺はその上なんだよ、まあ殺しを快樂に変えちまうヤロウなんだよ」

『マスター？』

「ククク、いやはや、記憶が改竄されたら性格まで変わるんだな、といっても護りたいモノは護るといふ気持ちに嘘偽りはないけどな」

「クハハハ！とんだ化物だ、人間のような表情かおをしゃがって！」

「いやいや、中途半端な生き物なんだよ、俺は、だからこそこうなつたんだろうが」

「……どうやら今の装備では殺しきれんな」

「帰るのか？」

「ああ、次に会った時は必ず殺す」

「おお、怖い怖い」

「ククク、また会おう、中途半端な化物」

そう言いながらアンデルセンは消えていった。
やれやれ、

「どうやら消えたようだな」

『はい、反応ロスト、完全に消えました』

「なら帰るか」

『あの、マスター・・・』

「エヴァの家に戻ったら話す、それまで待つてくれ」
『・・・はい』

こうして今日の戦いは終わり、エヴァの家に戻った。

その後、夕食を食べ、自分の部屋に入り、結界を張ってから神へ連絡した。

「聞きたい事は分かっておる、名前の事と転生させた理由じゃろう？」

「ああ、何故俺の苗字を零崎から森に変えた、別にそのままでもよかっただろう」

「この世界もある意味おぬしがいた世界の平行世界なんじゃ」
「何？」

「だから零崎の名は悪い意味で有名なんじゃ、それに、零崎の名を自覚するという事は零崎に完全に覚醒する事を意味するしの」

「そこまで考えていたのか」

「うむ、おぬしの人生は見ていた、あのような事をこれ以上してほしくないがためでもあるんじゃない」

「なるほど、そっちはわかった、ならもう片方は？」

「転生させた理由かの？」

「そっだ」

それが一番の謎でもある。

「それなら簡単じゃ、おぬしにはもう一度きちんとした人生を歩んでほしかったからじゃ」

「・・・それは同情か？」

なら俺はいらないんだが。

「いやいや、同情ではない、確かにおぬしは人より不幸な人生じゃった、そこに僅かに同情はしたじゃろう、じゃが・・・おぬしは後悔してはおらんじやろう？最後は、じゃが」

「ああ、最後に殺された事に不満はない、殺されるべくして殺されたのだから」

あれに不満を持つほうがどうかしている。

俺はあれだけ殺したんだ。

一回死ぬだけですむならまだマシだろうさ。

別に罪が消えたとは言わないが。

「おぬしがそこまで狂いながらも進み続けた人生に興味が出ての、その先を見てみたいと思ったからあの場所に呼んだんじゃ、まあ後で娘に怒られたがの」

「ハハハ、そうか」

それは災難だったな。

だが・・・まあ自業自得だな。

「そう言われては辛いのお」

「クク、知るか」

「・・・後悔はないかの？」

「まったく後悔せずに生きられる人間は本当にごく少数だ、俺はそ

れほどできた人間ではないよ、後悔なんていくらでもしてきたさ
「・・・うむ」

「だがな、一度でも立ち止まるうとは思いはしなかった」

止まる事はいつでも出来たからな。

「だからこそ前に進み続けた、まあ前世は進み方を誤ったが」

「そう自覚できるのであれば大丈夫じゃろって」

「アンタこそ後悔していないか？」

「何をじゃ？」

「俺を転生させた事」

そう言うと神は面白そうに笑った。

「笑うとは酷いな」

「ククク、すまんのお、でもまあ・・・答えを言うならNOじゃ」

「何故？」

「そも、後悔するくらいじゃったらおぬしを転生させたりはせん、

おぬしを転生させてよかったと思えるくらいじゃ」

「だが・・・俺を転生させるためにアンタの神としてのランクを2
ランク下げられているのに」

「誰が話したんじゃ？」

「セラ」

「あのバカ娘が・・・まあよい、ワシは後悔なんぞしてはおらぬ、
たとえ神でなくなるうともおぬしを転生させたじゃろって」

「どうしてそこまで・・・」

「簡単じゃ、おぬしを気に入っただからじゃ、それ以外に理由は必要
ではあるまいて」

本当にそれ以外に理由はなさそうだ。

「ハハハハ！そうか！そんな理由か！」

「何じゃ？何かおかしいかのぉ？」

「い、いやいや、予想外だっただけさ、だが、そうか・・・ならますます感謝だな、俺にもう一度生きる道を与えてくれて感謝する・・・ありがとう」

「う、うむ（これがデレというやつかのう？）」

『（空気ぶち壊しです）』

「こ、コホン！で、ではどうするんじゃ？」

「何がだ？」

何かほかにあったか？

「苗字じゃよ、今の森を名乗り続けるか、零崎と名乗るか」

「そうだな、俺は普段は森を名乗ろう、だが・・・仕事、もしくは戦いの時は零崎を名乗ろう」

「そうか・・・ならそうしておくかの」

「感謝する」

この苗字は家族の苗字だからな。

死ぬ前にあった家賊でもあるがな。

元気かな・・・あいつ等。

「さて、もう寝るのじゃないかの？」

「ああ、もう眠い」

「では、また何かあれば連絡するのぞな」

「ああ、じゃあな」

こうして今日という日は終わった。

色々大変だったし、思い出した事もあるが、一つだけ分からない事

がある。
それは・・・

「どうして・・・どうしてあなたが！」

「クク、さてな・・・だがまあ・・・殺人に理由は必要か？」

「ッー！う・・・うう・・・」

「これで・・・いいんだ」

この最後の記憶に出てくる人は・・・何故悲しんでいるんだろうか。
まるで大切な手をにかけられるような・・・そんな顔をしている。

だけど理由はわからずじまい・・・その状態で寝てしまった。

>神 Side<

龍斗との連絡が終わり、落ち着いた今、ふと思ってしまう。

これでよかったのかと。

「それは今まで記憶を改竄したことを黙っていた事？それとも・・・
まだ改竄している場面があることを黙っている事？」

「セラかの？」

「ええ、で？いつになったら改竄をなくすのかしら？」

「・・・少なくとも今は無理じゃ、たとえあやつに恨まれようとも、
今だけは」

「理由は？あの子が耐え切れないから？それとも・・・その女の子
が にいるからかしら？」

「・・・」

「そう・・・なら何も言わないわ、ただ・・・」

「ただ・・・何じゃ？」

「龍斗を悲しませるようなことをしたら・・・私は許さないわ」

「・・・肝に銘じておこつ」

「ならいいわ、じゃあね」

「ああ」

そう言いながらセラは去っていった。

あやつは無駄に鋭い。

おそらく理由は完全に気づいておるじゃろつ。

じゃが・・・、

「今は言うわけにはいかんのじゃ・・・すまないのぉ」

それが・・・龍斗のためなんじゃ。

そう思うが、やりきれない気持ちでいっばいなのは否定できなかった。

龍斗が気づかない内に物語は進んでいく。

それは時に残酷に龍斗を切り裂く。

そのときが来ないように努力をする。

そのくらいしか出来ない自分に歯痒さしかないのが悔しかった。

>神 Side end<

ネギま編 第21話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「グダグダだな」

否定できません。

龍「まあいつもの事だ」

まったくだね！早く精進したい。

龍「なら頑張れ」

イエッサー！

龍「さて、感謝コーナーだ」

ユタ様、KONA様、Jam様、ケルベルス様、メガネ様、けーくん様、感想ありがとうございます！

龍「今回は来週中だな」

最近1週間に一回から二回更新になってる気がする。

龍「確かにな」

なるべく早くはしたいんですがね。

龍「お前・・・今回の話、実質4時間くらいだろうが、もしくはそれ以下」

そつえばそうだね。

龍「なら毎日更新できるんじゃないか？」

無茶いわないで・・・死んじゃう。

龍「・・・仕方ない」

ふう・・・よかった。

龍「今回は長くてグダグダで駄文ですまないな、次回は今回ほどにはならないから気楽に読めるはずだ」

読み辛いかもしれません、すいません！

龍「では、また次回」

ではでは！次回も頑張ります！

ネギま編 第22話(前書き)

。今回も遅くなった上に駄文・・・ちよつと首でも吊ってきます・・・

こんな駄文でもよければどうぞ・・・ハハハ！僕は・・・僕はねえ！！

ネギま編 第22話

アンデルセンが出てきた次の日。
今は修行中だ。

「首を斬り落とされるとはな．．．まだまだ弱いな、俺は」
『なら上を目指す．．．そうでしょう？マスター』
「ああ、勿論だ」

という事でいつもの10倍の量をしている。

『マスター、右です』

「了解だ」

「悲鳴を上げる．．．豚の様な!!」

「お前がな」

――閃鞘・八点衝――

連続で斬りかかる。

「ぐうううう!!」

「そら!追加だ!」

――閃鞘・迷獄沙門――

一気に決めにかかる。

「がはっ!!クク、クハハハハハ!面白い!ならば私も全力でか
かるっ」

――拘束制御術式零号 開放――

ちい！死の河か！
ならば、

「クロス、モード刀」
『了解』

クロスを刀に変える。

「いくぞー!!」
「来い！」

――無明神風流奥義・青龍――

相手に向かって放つ。

無防備なところに追加で攻撃しようとする、壁ができた。

「ちい！面倒な！」

『まったくです、まあマスターも使えるのですから』

「そうだな、だからこそコレの厄介さも知っている！」

「さあ来い化物！化物には私は殺されんぞ！」

「知るか！俺はお前がどうだろうと殺して解して並べて揃えて晒してやるだけだ！」

そっぴいなながら相手を斬り裂く。
キリがない……。

「ひやははは！お前はここで死ぬんだよ！さっさとおっ死ね！」

「うるさい、蠅が」

――無明神風流最終奥義・黄龍――

「朱雀」「白虎」「玄武」「青龍」4つの神風を同時に発動し、敵を纏めて葬る。

「さて、まだほかにいるよな？」

『ええ、後3億5千2百32万5634人ですね』

「面倒だ・・・十倍に増やすんじゃないか」

ついでに始めた時の人数は8億だ。

「はあ・・・アーカードの死の河含め4億か・・・本当にアーカードを呼ぶんじゃないか」

『どうして呼んだんですか』

「何となくだよ」

というより勝手に出てきたの方が正しい。

「さあ！見せてみる！貴様の戦い方を！」

「了解、見せてやるよ、今の全力を」

『マスター・・・』

「大丈夫だ」

――無極零式改・虚無――

空間を切断し、擬似ブラックホールを作る。

これでも100万しか減らないか。

次、

――血風開封――

突進技で沈める。

「ナメルナアア!!」

「ここで・・・沈め」

――レムリア・インパクター――

相手に向かって手を向ける。

すると、機械が現れ、攻撃する。

追加で、

「禁忌の血を解放つ、侵せ」

ガード不可（空中のみ）だが、跳んでくるやつばかりだからなよく効くだろうさ。

「隙ありいいいい!!」

「叫ぶなよ、無意味になるだろう?・・・血の水面に魅入る、写せ」

4人に分身し、分身が消えた時に相手にダメージを与える。

「血刃を放つ、断て」

相手にガード不可の打撃を喰らわせ、その後、血の武器を飛ばす。

「くう!!やはり化物か!」

「ああそうだ、俺は化物で、ロクデナシで、ヒトデナシの人殺しだ・

・・・殺人鬼だ」

「ククク！自覚してなお眼から輝きが消えていない・・・寧ろ強く
なっている、面白い！面白いぞ！！」

「そりやどうも」

「さあ殺してみろ！貴様の全力で！」

「ああ、殺すさ」

――無極極式・世界――

無極の技全てを秘剣・燕返しと同じ要領で放つ。

「クク・・・ああ、私の負けか」

「ああ、そして消えてる、俺は先に進まなきゃならない」

「そうか・・・」

死の線と死の点を攻撃したんだ・・・助かりはしないだろう・・・
この模擬戦用の機械はやはり便利だな。

俺の知っている人物なら仮想でも呼び出せるのだから。

まあ俺が実際に会った人物も呼べるが・・・別人だからな。

「まあ・・・呼ぶのではなく、実際に帰ってから会うのが一番か」

『マスター、まだ2億ちよいくらいるのですか』

「・・・考えるのは後だな、今は・・・殺し尽くすだけだ」

そう、俺は・・・

「さあ・・・零崎を始めよう」

目の前の敵を殺して解して並べて揃えて晒してやるだけだ。

「残り380万」

『ええ、次で終わらせてください』

「ああ」

といつても……まあ鬼巫女のスペルだけで終わらせるのは……面白くない。

やはり考えが……戦闘狂みたいだ。

「やっぱり名のせいなのかねえ……まあ俺はただ……殺すだけ……か」

まあ護りたいものがあるんだがね。

「さて、残りのやつら……逃げたいなら逃げろ」

「ふざけるのも大概にしろ、俺達はアンタを殺す、だから逃げないぞ！ー！」

「そっかい」

ああ……まあ模擬戦というよりは……実戦を忘れないための実践しあひか。

「やれやれ……まいったねどうも」

なら……

「逃げると忠告はした……それでもやるってんなら、俺の方はお前の命が続く限り相手になるぜ？痛みを感じる暇もなく解体れんあいしてやるよ、自分から殺してくれて望むような低能相手に仏心を出すほど俺は優しくない、その場合、栄えある……何人目だっけ？まあい

いか・・・タダタダ殺してバラして並べて揃えて晒してやる」

残りの人数全てを殺してバラして並べて揃えて晒してやった。

「はあく疲れた、寝たい、寝ていいよな」

『ええ、さすがに8億はやりすぎましたね、少しお休み下さい』

「了解、さすがに少し疲れたからね、眠らせてもらう、そうだな・・・2、3時間で起こしてくれ」
『了解です』

その後、3時間寝て、起き、エヴァに挨拶し、アリカも起きたので挨拶。

アリカは何かしたい事があったのか、飯を食い終わった後、すぐに地下に籠った。

手伝おうとすると、真っ赤な顔で、

「お、おぬしに手伝ってもらうものなどない！だから少し待っておれ！！／／／」

だそうだ。

訳がわからないよ・・・。

まあエヴァに、

「あいつも一人でやりたい事ができたんだろう、ほっておけ、助けが欲しかったら言うだろうからな」

と言われたから待つことにした。

それを後悔するのはすぐ先だった。

ネギま編 第22話（後書き）

後書きコーナー！

龍「死ね」

いきなり！？

龍「待たせた上に駄文・・・救いようがないだろうが」

うう・・・否定できない。

龍「というより・・・いつになったら吸血鬼編が終わるんだ？」

え、えくと・・・9月20日以降にネギまの単行本を借りるのでそれまでには！

龍「そうか」

感謝コーナー！！

龍「八雲 葵様、Rain様、Jam様、ケルベルス様、メガネ様、感想ありがとうございます」

今回は来週には更新したいのですが、実習があるので・・・（汗）

龍「介護のな」

なのでもしかしたら更新できないかもしれません・・・なるべく

頑張りますのでゆっくり待っててください!!

龍「すまないな」

しかもその次の週は追試なんですよねえ……。

龍「さつさと勉強しろ」

イエッサー!!

龍「まあこんなだから次は遅れるかもしれん、すまないな」

次回もこんな駄文ですが、読んでくださると嬉しいです。

龍「ではな、また次回」

ではでは!

ネギま編 第23話(前書き)

今回も駄文です！

キツイ・・・実習がキツイ。

終わったけどね！いろんな意味で。

今回はアンケートがあるので後書きもどうぞ！

ネギま編 第23話

ト○ポってすごいよな、最後までチヨコぎっしりだもんな。

「だ、大丈夫か？」

「ハッ」

何故だろうか・・・急にト○ポを食べたくなってきた。
くっ！自分はブリ○ツ派なのに！！

「何を考えている？ちなみに私はト○ポよりアポ○だな」

「お前・・・分かってて答えてるだろ」

「クク、さあな、貴様が勝手に喋ったんだ・・・私は知らん」

というよりも何故こんな会話になったんだろうか？

確か最初は今回の出来事について報告してたはずなんだが・・・。

そうだ、何故かエヴァがチヨコはどんなのが好きなんだ？とか聞いてきたからだ。

茶々丸も何故か聞いてきたし。

そして答えは冒頭だ。

あ、後、最初のは電波だ。

気にするな。

『止めて下さい、結構崩壊しています』

「何がだ？」

『主にキャラが』

「そうか」

まあどうでもいい。

さて、アンデルセンの事は報告したし・・・大丈夫だろ。
エヴァの事だから挑みに向かいそうだからな。
止めとかないとな。

アイツを殺すのは俺の役目だ。俺が奴を殺す。

「はあ・・・言っても無駄なようだな」

「ああ、俺は・・・」

「分かっているさ、貴様の事くらい、存分にやれ、一切の慈悲をやるな、殺すなら確実に、見敵必殺だ」
サーチアンドデストロイ

「クク、了解だ」

ああ・・・まるでインテグラのよう。

まあ今はそれよりも・・・、

「ああ・・・マスターが楽しそうに」

「ケケ、確力ニナ、面白エ戦イガ出来ソウダツタンダガナア」

残念そうなチャチャゼロを何とかしないとな。

というよりこのチャチャゼロをネギに戦わせたほうが早い気がしてきました。

『マスター・・・ネギ先生を潰す・・・消す気ですか？』

「何故だ？逃げだけなら一流一步前だぞ？」

『逃げだけでは持ちませんよ』

「それもそうか」

というより何故こうなったんだろつか。

会話がおいしい気がする。

「さて、龍斗、お前はやつ・・・神父を殺すのだろうか？なら、私も

連れて行け」

「何故？」

「簡単だ、貴様がその神父と戦うのをみたいからだ、色々と気になることもあるのではな」

「そうか、別に構わない、これを所持していれば」「何だ？これは」

「ただの認識阻害の呪符」

「・・・ああ、バグアイテムか」

何故そうなるんだ？

「まあいいだろう、所持しておこう」

「ああ、後、これは常に持っていてくれ」

「何故だ？」

「一応の保険だ」

後、転生者対策でもある。

下衆なやつは狙ってくるからな。

「はぁ・・・分かった、これでいいのか？」

「ああ、傷つけられたくないからな・・・大切な人を（Like的な意味で）」

「そ、そうか・・・大切な人か／＼（Love的な意味で）」

何故だろうか・・・どこか食い違ってる気がする。

「じゃあ見回り行ってくる・・・夜更かしするなよ？」

「子供扱いするなあ！！」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに・・・」

「こ・・・このポケロボ！巻いてやる！」

「ああ・・・駄目です、マスター」

「ケケ、結局ハコウナルンダナ」
「そうだな」

まあだからこそ護りたいと思っているんだがな。

「今度こそ行ってくる」

「ああ、早く帰って来い」

「ああ」

さて・・・狩り尽くすか。

あの転生者^{クズ}を。

複数・・・数は大体10人か。

さて、

「零崎を始める」

殺して解して並べて揃えて晒してやるよ。

そう思い、エヴァの家を出てすぐに、結界が張られた。

・・・壊すのが面倒だ。

「お前・・・何者だ？」

「さあ？答えるとも？」

「これだけの人数相手によくもまあ・・・強気でいれるなあ？勝てると思ってるのか？」

「思っているが？」

負ける気で戦うはず無いだろ・・・バカか？

「・・・貴様、エヴァに何をした！」

「は？」

「エヴァの呪いが解けている・・・俺が解くはずだったのに!!」
「・・・知るか」

やはり屑は所詮屑か。

「で？あんた等の名前は？俺は零崎 龍識・・・貴様らを殺す者の名だ」

「零崎!？」

「知ってるのか？」

「あ、ああ・・・人殺しの・・・殺人鬼の集団の名だ」

「へえ・・・よく知ってやがんじゃないやねえか、ならお前らがどうなるかは・・・ワカルヨナ？」

「か、勝てるはずがない・・・逃げるんだあ」

どこの王子だ？

「まあまずは一匹」

そついいながら転生者のやつの一人を解体す。
バラ

直死を同時に発動させたため、即死した。

「なっ!？」

「オイオイ・・・この程度か？さすがにショックを隠しきれないんだが?・・・ああ、やっぱり」

何故逃げないのか疑問だったんだ・・・確かにこれなら逃げないな。

「結界・・・それも複数、なんだ？結界を能力としてもらったやつ

「がいるのか？」

「ど、どうだ！これでお前は動けまい！！」

「動けまい？・・・それで？」

「一歩ゆっくり動く。」

「なっ！？普通のやつなら即死する結界だぞ！？」

「知るかよ・・・普通のやつと同じにするな」

普通のやつに失礼らしいからな。

そもそも魔を滅する結界なんか張られてもな・・・吸血鬼対象なのは良い選択だが。

「さアて、此処で問題でエす」

「ひい！？」

「なんだよ・・・まアいい、問題は簡単だ、お前はどやって死ぬでしょうかア？正解者には安らかな死をプレゼントオ！」

「ぎっ！」

パン！

そう言いながら近づき、頭に手を当て、ベクトル操作を発動し、頭を弾き飛ばした。

「さアて、コレで二匹目だア・・・まだまだ終わりじゃねエぞ！」

「くっ！し、死ね！！」

「・・・ハア、そんなんじやあ奇襲にすらならんだろうが、来世からやり直せよ、お前」

――極死・七夜――

相手が剣で斬りかかってきたのでカウンターの要領で攻撃し、首の骨を折る。

「これで三匹」

「はあああああああああ！！」

「……」

学習能力がないのか？

「『避ける』『必要がないね』『無駄すぎるよ』『その攻撃』」

――致死武器――
スカーデッド

相手の攻撃を相手に押し付ける。

「がああああああああ！！」

「『うるさいなあ』『少しくらい静かにできないのかな？』『それとも』『もう壊れた？』」

「くそつ！くそつ！どうしてこんな化物がここにいるんだよ！あの野郎は誰もいないって言ってるやがったのに！」

「『へえ？』『その野郎って誰か』『教えてよ』」

「ひい！？」

残り人数は大体8人・・・来ない理由は動けないからなのか、敵が減るからなのか。

前者だったら楽なんだけどな。

「い、言う！だから助けてくれ！！」

「『いいいよ？』『言うなら助けてあげる』」

「ほ、本当か！」

「『うん』 『僕は嘘はつかないよ』 『だから言ってくれるかな？』」
「あ、ああ・・・やつは神を名乗っていた、名はサタンだ」

どう考えても魔王です、本当にありがとうございます。

「^{オン}や、やつは俺たちを集めて何かするつもりだ、その証拠が螺旋^{オヒ}なる蛇だ」

なるほど、だからああなつてたのか。

^{グラム・サイト}妖精眼であいつ等を観た結果、やつらは^{エーテル}霊体だった。

ただし中途半端に受肉した状態のだからな。
だから殺しきれなかった。

「『目的は？』 『君なら知ってるでしょ？』 『教えなよ』」

「し、知らない！目的は本当に知らないんだ！知らされてない！俺たちは自由にしてくれて構わないと言われたからここにいる！」

どうやら本当らしい。

心を読んだが、言ってる事と同じだしな。

「『うん』 『どうやら本当みたいだ』」

「な、なあ、しゃべつただろ！た、助けてくれ」

「『うん』 『助けてあげる』 『助け方は』 『この世からいいよね？』 『答えは聞いてない！』」

『（直訳で楽に死ねなんですよね）』

「う、嘘だろ！？」

「『ん？』 『言ったよね？』 『僕は嘘はつかないよ』 『じゃあね』 『また会えるといいね』」

グシヤ

螺子をぶち込んで潰す。

まあ大嘘憑オルフイクシヨンきで消したけどね。

残りのやつらは・・・逃げたか。

「『どうやら』『もういないみたいだね』『出てきてもいいよ』『隠れてるなら』『そのままでもいいけどね』」

「い、いや・・・話がある」

「『ん？』『どうかした？』『僕は何もやってないよ？』『ほら』『何も残ってない』『』」

「・・・助けてくれ」

「『どういう事かな？』『理由と状況を』『話してくれなきゃ』『分からないよ』『』」

「・・・そうだな」

という訳で謎の少女から頼みごとをされた。

内容？妹を助けて欲しいだってさ。

どうやらやつらに人質にとられたらしい。

この子は平穩に生きるつもりだったらしい。

だったらまあ・・・助けるしかないよな？

嘘を言ってる訳じゃないし。

「『いいよ』『喜んで』『行く』『』」

「感謝する」

「『感謝は』『全部が』『終わってからね』『』」

「ああ」

こうして俺はやつらのアジト（人質をいれるだけの）に向かった。

ネギま編 第23話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「遅い」

仕方ないね！

龍「前回も今回も駄文だしな」

うう・・・死人に鞭以上のものをつつなよ・・・。

龍「死人に口無しつてな」

・・・

龍「・・・」

！（逃げ）

龍「逃げるな」（ガシッ）

は、離せ！！

龍「感謝コーナーな？」

八雲 葵様、メガネ様、感想ありがとうございます！！
さあ言っただぞ！離せ！

龍「アンケートは？」

あ、アンケートです！

今日誕生日だったんで記念に何か番外編を書こうかと思ってます！
何か希望があれば感想にどうぞー！

さあ H A N A S E !

龍「死ね」

ちよっ！？おまつ！？

龍「アンケートにはなるべく協力頼む、幻想郷のほうもするかもだから
それも書いてくれ、読んでる場合はな」

で、では！

龍「ではな」

ぎゃああああああああああああああああ！！

番外編23（前書き）

どうも！

自分の誕生日記念に番外編を書いてみました！！

まあいつもよりかなり長い上に、駄文なんですけどね！！

それでは！8000文字を超えてますが、どうぞ！！

番外編 23

これは一時の夢・・・前世の俺の・・・過去。

その時は復讐するのに必死で・・・周りの人間を壊すのに必死で周りを見ているようでみていなくて・・・だから気づけなかった。

あの・・・
の想いに気がつけなかった愚か者の・・・今より弱かった頃の記憶。

「これで終わりか」

今いる場所とはある組織の取り引き場所だ。

目の前には三百ほどの肉塊がある。

全て鋼糸でバラバラにした元人間だ。

「ちっ、まだ家族を殺したやつらは見つからないか・・・殺した本人は殺したが・・・」

命令をしたやつはまだ見つかってないからな。

「まあ次の場所は聴いた、なら次に向かうとしよう・・・」

『おい、龍識』

「む、斎賀か」

『ああ、で？どうだった』

「目的のヤツはいなかったが・・・全員殺した」

『・・・そうか、早く帰って来い、あいつも待っている』

「了解、すぐに戻るう」

アイツはうるさいからな。

俺はバイクに跨り、今の家に向かった。

「遅い！何でこんなに遅いの！？もう少し早く帰ってきなよ！」
「……ああ」

帰った瞬間これだ。

「そこまでにしてやれ、彩香」

「むう……斎賀が言うなら仕方ない、次は早く帰ってきてよ？龍斗」

「……ああ、分かってるよ」

コイツは……彩香は俺の本当の名を知らない。

龍識とは呼ばれない……裏を知らないから、知らないなら知らないままで過してほしい。

「今日の夕食の当番は龍斗だよ？早くしてよ、おなかへって仕方ないんだから」

「はいはい、で？ご所望は？」

「肉！！」

「……大雑把な」

「それがコイツだろ？」

「ああ、斎賀酷い！！」

「クク（はは）（フフ）」「」「」

三人で笑い合える……それはとても素晴らしい事だ。

今は……それが続けばいいと、思っていた。

でもその幸せも続く訳もなく。

「逃げる!!」

「えっ!?!りゅ・龍斗!齋賀!」

「ちい!!まさか此処がばれるとはな」

「ああ、油断していた・・・これは俺のミスだ、此処は俺がひき付ける、彩香を逃がせ、龍斗!!」

「し、しかし!お前が・・・助からないじゃないか!!」

相手の数は五百・・・コイツでは相手しきれない。

「大丈夫だ、お前にコレを教わってたんだから・・・」

「だ、だが・・・」

「しつこいぞ?俺は大丈夫だ、後で合流する、だから早く行け!」

「・・・死んだら承知しねえぞ?」

「それはこっちの台詞だ」

彩香を連れ、齋賀があけてくれた場所から逃げる。

「ね、ねえ!何でこんな事になつてるの!?!齋賀は!?!」

「・・・説明は後です、今は逃げるぞ」

「い、今してよ!分からない事だらけなんだよ!?!」

「・・・すまない」

「えっ!?!」

トンッ

彩香の首に手刀をいれ、気絶させる。

「アイツの想いを無駄にさせたくないんだ・・・必ず逃げ切ってみせる」

彩香を肩に持ち、走る。
すると、

「おい！此処にいたぞ！こっちだ！！」
「ちい！見つかったか」

目の前に二百ほどの敵が現れた。

「ようやく見つけたぞ・・・零崎 龍識、人間失格」

「それは別のヤツの呼び名なんだが？」

「ふん、貴様もそうだろう？零崎の名を持つものだから」

「否定はしない・・・だが、俺の家賊を侮辱するなら、殺すぞ？」

そう言いながら殺気をぶつける。

それだけで、相手の3割以上の人間は使い物にならなくなった。

「・・・普通の人間じゃないな？」

「ああ、こいつらは化物だよ、とある科学者が作りあげた薬によって化物になった」

なるほど、おそらく鈍くなっているんだろうな、殺気に。

「さあ・・・コイツの所に連れて行ってやるっ」

「！？」

ヤツが持っているのは斎賀の首・・・。

「こやつは強かった、化物になったコイツラを半分以上削ったのだからな」

て三人ほどいるさ」

ば、化物・・・コイツも化物だった!!
会話してただけに見えるだろうが今もやつは他の化物を殺し続けている。

それも・・・その場を一步も動かずに。

「ん？何で此処に龍斗がいるんだ？」

「なっ！？」

な、何で人類最強の請負人が！？

「・・・今は話しかけるな、哀川」

「オイオイ、上の名で呼ぶな下で呼べ、あたしを苗字で呼ぶのは敵だけだつて言ったよな？」

「後でいくらでも話してやる、今は黙ってる」

「はっ！面白い事してんのなら混ぜるよ、仲間はずれは駄目だぜ？」

「・・・人識兄さんの真似はやめてくれないか？」

「かはは、気にすんなよ、龍識、俺は気にしてないぜ？」

「兄さん」

なっ！？零崎 人識まで来ているだと！？

「「さあ・・・殺して解して並べて揃えて晒してやんよ（る）」

その後は地獄で・・・俺の意識がなくなるのも時間の問題だった。

> 敵 Side end <

「で？何で人識兄さんと哀・・・潤さんといーちゃんがいるのかな

「？」

斎賀の死体を埋め、彩香を隠したのち、三人に質問した。

「ああ？家賊が危険だから来ただけだ」

「無理やりつれてこられた」

「いーちゃんを無理やり引きずりながら暇つぶしのために来た」

まともな理由が人識兄さんしかない。

「まあいいか、潤さん」

「ん？」

「彩香を頼みます」

「それは依頼か？」

「勿論報酬は払う、だから頼む」

「・・・高いぜ？」

「ああ、払える限り払うさ、残りは・・・体で払おう」

肉体労働で足りるだろう。

「よし！なら請け負った！あたしが請け負うんだ、安心しな」

「ああ、頼む」

「おゝい、龍識」

「ん？」

「コレを渡せって言われたから渡す、舞織から」

「舞織から？」

何なんだろうか。

「これは・・・」

《自殺志願》マインドレンデル・・・の「コピー」か。

「コレを私だと思ってください！だってよ、かはは、想われてんじやねえか」

「そうなのか？」

コレを舞織と思えと言われてもな・・・。

「で？いーちゃんはどつするんだ？」

「ん？帰りたい」

だよな。

「そついえばあの子が呼んでたよ？」

「ん？闇口崩子か？」

なぜかご主人様って呼ばれるように・・・色々あつたんだがなあ・・・。

「急に遠い目になったけど大丈夫？」

「ああ、少し厄介な子を思い出してた」

「ああ、確かにあの子は厄介だな、かはは、難儀なやつに好かれちまつたな」

「まあ龍識だから仕方ないだろお？あたしも気に入ってるしな」

クイクイ

ん？・・・げつ。

「崩子……」
「ん」

頭を撫でると？
そう思いながらも頭を撫でた。

「さ、さて、俺は行くぞ……やつらを片付けないとな」
「そうか、俺も行っちゃ駄目なのか？何なら他のやつらも呼ぶぜ？」
「いや、俺一人で片付けたいんだ」
「分かった、でもピンチの時は駆けつけるぜ？」

そうならないことを祈るけどね。
間違いない他の家賊も来るだろうし。
潤さんが静かなのがすごく気になったが、まあそれは後でいいか。

で、今はあの人達と別れ、やつら組織の取り引き場所に来た。
もうそろそろ取り引きが開始されるはず。
来た。

「ふむ、確かに受け取った、で？やつは……人間失格は殺したのか？」

「連絡が来ていないのでまだ不明です」

やはりけしかけてきたのはこいつらか。
分かった事だな。

さて、こいつらを殺す理由が一つ増えた。
一つは家族の復讐。
もう一つは斎賀の復讐。

最後は理由無き殺人のため。

まあいーちゃんの台詞を借りるなら・・・戯言だけどな、だな。

「さて、零崎を始める」

今回の装備は、ナイフが十本、糸が50m分、そして《マインドレンデル自殺志願》を所持している。

《マインドレンデル自殺志願》は、握り部分を半月輪状にした両刃式の和式ナイフを二振り、ネジで可動式に固定した大鋏だ。さっそく見張りの2人を解体する。

ふむ、どうやら中には千人くらいか・・・多いな。

この組織がどれだけ大きいか分かるな。

『見張りが2人か・・・まるで殺してくれと言わんばかりだなあ』

「まったくだ」

『かはは！まあそっちは任せる、こっちは任せな』

「了解」

人識兄さんは無駄に優しい気がする。

「さて、覚悟はできてるのか？」

「な、何者だ!!」

「零崎・・・これで十分か？」

「なっ!? 零崎・・・しかも貴様は零崎 龍識！人間失格だと！」

「だからそれは兄さんの二つ名だっつて」

何で俺が人間失格なんだろうか・・・まあ否定はしないが。

「さあて・・・俺の仲間を殺したんだ・・・覚悟は出来てるよな？
出来て無くても殺すが」

「た、助け・・・」

「そう言ったやつに貴様らはどうした？」

「あ、ああ・・・」

「じゃあな、閻魔にあつたらよろしく言っといてくれ」

グシャ

相手の首を飛ばす。

ふむ。

「さすが兄さんと言ったところか、武器の硬度が全然違う」

前は百人くらい殺すと壊れてたからな。

まあいざとなれば《マインドレンデル自殺志願》を使えばいいだけだが。

双識兄さんは使わないほうが強いんだけどね。

「あ、相手は一人だ！全員でかかれば殺せる！殺せ！！」

「了解！！」

「人識兄さんの言葉を借りるなら・・・老若男女、容赦なし、だ」

それから虐殺が始まった。

「な、何が目的だ！！」

「お前達のボスの居場所を教えろ」

「な、なら！教えたなら助けてくれるのか！？」

「・・・さあ？考えてはおこう」

「ぼ、ボスの場所は・・・○○○だ！言ったぞ！だ、だから命だけは！！」

「考えるだけだ、殺すことに変わりはない」

「そ、そん（グシャ）」

情報を聞き出し、殺す。

『どうだ？何か分かったか？』

「あ、うん、場所が分かったからこれから向かう」

『そうか・・・死ぬなよ？』

「了解」

死体の処理を人識兄さんに任せ、ボスの居場所に向かう。

「ここか」

どこかのホテルだな。

かなり立派なホテルだ・・・だが何故ピンク色なんだろうか、趣味が悪い。

「さあて・・・殺して解して並べて揃えて晒してやる」

どうやら703にいるらしい。

確認したところ、いるのは確認できた。

彩香はもう目を覚ましたらしい。

潤さんに説明は任せただけ・・・大丈夫だよな？

「きさ（グシャ）」

「なにも（グシャ）」

「おっと、気がついたら着いてたな・・・中には一人・・・いや、2人か」

一人は間違いなくボスだ。

これは確定だ。

だがもう一人は誰だ？

気配を隠す気もない・・・油断しているのか、それともそれだけ自信があるのか、畏か。

最後の可能性としては濃厚だな。

「まあ向かうのは確定だからな、両方殺せばいいか」

準備は出来た、後は・・・行動するのみ。

ガンツ！

ドアをぶち破り、部屋に入る。

「死ね」

「なっ!？」

ザシユ

ボスの首は容易くとんだ。

・・・は？

「死んだ・・・のか？」

死体は間違いなく、ボスだ、心臓も止まっている・・・殺せた・・・のか？

「ハハハ・・・なんてあつけない、こんなやつが俺達を苦しめ、齋賀は殺されたのか・・・こんなやつに!!」

死体は蹴り上げない、そんな事しても意味が無いのは分かっている

るから。

「父さん？どうかしたの……!?!?」

「ん?」

「どうやらコイツの娘がおたらしい。」

「夜のせいで顔が見えない。」

「あ、あなたは……誰?どうして父さんを殺したの!?!?」

「……」

「答えなさい!?!」

バンツ

銃弾が放たれるが、避ける。

「な、何で当たらないのよ!?!」

「そんなもの……発射角とタイミングで避けられる」

「……!?!?」

「どうした?まるで体……動かないみたいじゃないか」

「な、何をしたんですか!?!」

「何、ただ音を聞いただろ?お前」

「それが……!?!?」

「理解したか」

「どうやら知ってたみたいだな。」

「あ、あれは……零崎 曲識しか使えないはず!?!」

「ああ、兄さんには教わったからな、今は音使いでもある」

「ば、化物……」

「ああ・・・とつくの前に理解している、俺は殺人鬼だ」

さて、老若男女容赦なしとは言ったが・・・気分が乗らない。

「ではな、死体はどうしよう構わない」

「何処に行こうというのですか!!」

「帰る、目的は果たした」

「待ちなさい!!」

「動けないなら無理はするな、面倒になる」

そついい、帰ろうとすると、

「待ちなさい!!私はまだ動けません!!」

「・・・甘かったか」

やはり兄さんほどに使いこなせないか。

「あなたは私の父を殺しました、それが許せない!!」

「だろうな、復讐なんてそんなものだ・・・それが分かっている行動したのだからな」

「ですから・・・私はあなたを殺します」

「そうか」

相手は日本刀を持っている・・・。

「自分が死ぬとは思わないか？」

「ええ、死ぬとしても貴方を殺してからです」

「へえ・・・いいぜ、相手してやる、来いよ、せいぜい楽しませてくれよ?」

悪役を演じる必要はないが・・・演じた方が気が楽だ。

「行きますす!!」

相手は日本刀で斬りかかってきた。

俺は《マインドレンドール自殺志願》を使い、迎え撃った。

「くっ!!」

「そら!どうしたあ!!殺せないぜそんなんじゃあ!」

「なめないでください!!」

ガキンツ!

刀と《マインドレンドール自殺志願》がぶつかり合う。

その瞬間、相手の顔が見える。

「何!?!」

「?」

まさか・・・まさか、

「お前は・・・綾香か、彩香はどうした」

「姉さんと私を知っている?・・・姉さんは、家を出て行きました、今何処にいるか分かりません・・・何処にいるのか分かるのですか?」

「・・・さあな、勝てたら教えてやる」

「では・・・」

「いくぞ!（行きますす!!）」

綾香・・・彩香の妹で、昔一緒に遊んだ仲。

父親がどんなやつかは見た事がなかったが・・・まさかコイツだったとはな。

因果だな。

さて、どうするか。

まあ答えは決まっているか。

「くっ!!」

「これで終わりです!!」

ズシャツ!

俺はわざと斬られた。

「な、なぜ・・・」

「さあ・・・ガフツ!な」

ああ・・・血が止まらない。

そつえばまだ顔を隠したままだったな。

「なっ!?!」

「クク、やっぱり俺は・・・出来損ないだったらしい・・・一時の感情で動くとはな」

「な、なんで・・・龍斗が」

「さてね、ただの復讐のためだけに動いたんだ・・・お前の父、あの組織のボスを殺すためだけに動いていた」

なのに・・・潤さんに会って、兄さん達に会い、いーちゃんにも会い、崩子にも会い・・・そして、斎賀や彩香にも会った。

その生活が楽しかったんだ・・・復讐を一時的とはいえ、忘れてしまっただけ。

でも・・・後悔はない。

「お前に・・・頼みがある」

「・・・なんですか」

「彩香を・・・頼む、あいつは裏を知らない・・・知らないままで・・・生きてもらいたいから」

「・・・分かっています」

ならよかった・・・あいつは・・・護らないと。

崩子もいる・・・頼めば必ず護ってくれるだろう。

「ケータイ・・・取ってくれ」

「はい」

ケータイで連絡をとる。

『なんだ？彼女は無事だぜ？まさかほかに依頼が出来たとか言うんじゃないやねえだろうな？』

「フツ、そのまさか・・・ですよ」

『・・・そうか』

どうやら今の俺の状態を理解したらしい。
ありがたい。

「頼みは・・・綾香がここにいます、綾香を、彩香の所に連れて行って下さい」

『仕方ねえな・・・依頼料はお前が帰ってきてからな？』

「・・・」

まさかそう言われるとは・・・潤さんみたいに生き返れないんだが

(苦笑)

「ええ、では戻った時にも」

『おう、高いぜ？どんなことされても文句は言うなよ？』

「ええ、好きに・・・して下さい」

『で？用件は終わりか？』

「いえ、崩子に代わってください」

『はいはい、ほら、代われだとさ』

『はい』

「ああ・・・命令だ」

まったく・・・眼が霞んできた。

「綾香と彩香を護れ、絶対にだ・・・俺が戻ってくるまで護り通せ」

『はい』

「ではな・・・また会おう」

『では』

まったく駄目だな・・・出来ない約束はしないつもりだったんだが。

「・・・綾香、お前が気に病む事はない、どちらに・・・せよ、俺は死んでいたさ」

「で、ですが！」

「しつこい・・・グツ！俺は・・・後悔はしていない」

ただの殺人鬼には贅沢な日々だったさ。

ああ・・・もう見えない。

「そこにいるのか？まだ」

「・・・もう見えないんですね」

「ああ、もう真っ暗だ」

「・・・何か伝えることはありませんか？」

「俺はもう伝え・・・いや、彩香に一言伝えてくれ」

「はい」

「

「はい、伝えて・・・おきます」

よかった・・・。

これで思い残す事も無い。

兄さん達には武器が届くようになっていいるから大丈夫だ。

「あ、あの・・・」

「どうかした・・・か？もう眠くて仕方ないんだ」

「・・・いえ、お休みなさい」

「ああ、死体は保存しててくれ、戻ってみせるから・・・何年経とうとも」

「はい」

そして・・・俺は死んだ。

最後に、綾香から、

「貴方の事を・・・」

「

何か言われた気がしたが・・・聞こえはしなかった。

「・・・」

眼が・・・覚めた。

長い夢を見た。

幸せであり幸せでなかった日々。

『どうかしましたか？マスター』

「・・・少し昔を思い出していた」

『昔ですか？』

「ああ、懐かしくて、楽しくて、大変だった日々をな」

『戻りたいのですか？』

「・・・さてね、まあ言える事は」

『言える事は？』

「戻りたいと言つのはただの戯言ということだ」

『そうですか』

「それに・・・」

潤さんなら世界ぐらい超えれそうだ。

混じっているらしいしな。

『それに？』

「何でもないさ」

『そうですか』

「龍斗・・・大丈夫なのか？」

「アリカか」

「うむ、随分魔されておったからな」

「ああ、大丈夫だ・・・ありがとう」

「い、いや・・・だ、大丈夫ならよいのだ!!」

どうやら心配をかけたらしい。

さて、音も糸ももう少し使えるようにならないとな。

「さあ、修行だ、頑張るか」

みつともないとこをみせたくないからな。
戻るためにも・・・いや、此処のやつらを護るためにもな。

番外編23（後書き）

後書きコーナー！！

龍「長い」

確かにね！

龍「なぜ長くなった？」

したい事を全部してたらこんな事に・・・。

龍「まあいい、だがなぜ俺の過去をした？」

いや〜気になる人がいるかなあ〜って思っ

龍「さて、まずは感謝コーナーだ」

雨季様、夜神様、Jam様、メガネ様、ユタ様、ケルベルス様、感想ありがとうございます！！

龍「ついでに言うと、今の吸血鬼編はオリジナルが混ざった状態だが、修学旅行編はきちんとするから安心してくれ」

今回は東方を更新してからのなので、おそらく来週最初くらいですね。テストも終わったので。

龍「まあ次は本編だ、気長に待っていてくれ」

ではでは！

龍「もし今回の番外編で気になるのならキャラ設定でも書かせる、だから感想にでもよろしく頼む、ではな」

ネギま編 第24話(前書き)

はい！遅くなりました！！

しかもネギま要素がどんどんなくなつて・・・いや！次回からはもう少し進めます！なので石は投げないで！！

・・・それでは！今回も駄文ですがお楽しみいただけたら幸いです！！

ネギま編 第24話

さて、やってきました敵のアジト（人質用）

『大丈夫ですか？マスター（テンション的な意味）』

「『うん』 『大丈夫だよ』（怪我的な意味）」

「……（確実にかみ合っていない）」

なんでだろうか……いきなり理解された気がする。

「『さて？』 『此処がそうなのかな？』 『だとすると』 『完璧に
めてるよね』』」

『そうですね、まあ世の中の悪党はそんなものです』

「それよりもそのしゃべり方を何とかして欲しいのだが」

「『ん？』 『ああ、戻して無かったね』 『うん』 『戻すよ』』」

結構楽しんだが。

「さて、敵の規模は？」

『中には人が50、人ではないのが70、その他が5ですね』

「その他が人質か？」

『そのようです』

「……大嘘憑オールライクションきで片付けたら駄目か？」

『駄目ですよ、間違つて人質まで消したら洒落になりません』

「そっだな……」

さて、どうするかねえ？

「仕方ない、完全に把握してから動くか」

『どのように調べるんですか？』

「糸」

『なるほど』

「糸？」

隣の謎の少女に説明した……あっ、名前聞いてなかったな。

「そういえば名前は？」

「……私の名前は、イリヤ」

『……（何処かで小さな聖杯やったりバーサーカー呼んでたりしそうですね）』

余計な事をクロスが考えてる気がする。

「で？妹の特徴は？」

「えっと……これだ」

何処からともなく写真が出てきた。
どうやって出した？

「ふむ、理解した」

そう言いながらも糸を使ってアジトを調べる。
結果、敵は人質をあまり監視していないらしい。
ますますバカだな。

「敵は相当馬鹿みたいだ、今の内に救出するぞ」

「ああ」

『了解です』

こうして人質救出作戦が始まった。

『ここですね（作戦名がどことなくゼロ使臭がしますね）』

「本当にいないな（この喋るやつは何とかならないんだろうか……うるさい）」

「さて……数は5、ここであってるな」

あっけない……罠か？

「あっ！セラスー！」

「お姉ちゃん！？」

『……（何処かで吸血鬼してそうな名前ですね）』

なぜだろうか……クロスにツツコミを入れなければならない気がした。

「さっさと脱出するぞ、他の子も来い、外なら安全だ」

「」「」「はい」「」

えらく大人しい……まあ下手に騒がしいと面倒だからいいが。

「クロス、敵は？」

『今、こっちに20ほど向かってきてますね、後30秒くらいでこっちに来そうです』

「転移すれば大丈夫だな、皆、こっちによってくれ、今から転移する」

そっぴいながら転移の準備をする。

『マスター！敵の反応が急に！』

「む？」

どうやら誰か来たようだ。

「イリヤ、すまないが外で先に待っていてくれ、これを使えば結界が張れる」

「あ、ああ」

「じゃあ、後で」

イリヤたちを転移させた。

「さあかかって来い」

『マスター・・・モードは？』

「2ndだ」

『了解』

ドカーン！

壁が壊れた音がしたので、そちらをみると、

「お前が侵入者か？」

「ああ、で？ここは何の研究してたのかな？」

変な男が現れたので、質問してみることに。

「教えるとしても？・・・といってもいいんだが、冥土の土産だ、教えてやる」

「・・・」

「ここに閉じ込めてたやつら全員を使ってもっと強い魔法使いを造ろうとしたんだよ」

「何？」

コイツはなんていった？

「あいつらには俺達の正義の犠牲になってもらうつもりだって言うてんだよ！」

『（死にましたね、コイツ、同情はしませんが）』

ああ・・・コイツは馬鹿か。

（そうだなア・・・殺したくなるぐらい哀れだなア）

（私たちが手を下しても？）

いや、俺がやる。

「お前もそうか」

「ああ？」

「お前もその言葉を使えば何でもやっていいと勘違いしている愚か者か・・・殺してやる”かっこう””七星””ふゆほたる””オオエンマハンミヨウ”」

俺の周りに虫が四匹現れる。

一匹は緑色のかっこう虫。

一匹はナナホシテントウ。

一匹は白い蛍。

一匹は名前どおりの虫、オオエンマハンミヨウが現れた。かっこうを銃に同化させ、他の虫はいつでも攻撃できるように待機させる。

「な、なんだ・・・お前は！！何だ！その化物は！！」

「俺の名は零崎 龍識、お前を殺す者だ」

そついいながら奴に銃を向け、いつでも攻撃できるようにする。
そつすると奴は怯え始め、

「ま、待て！な、何も殺す必要はないだろ！？ま、参った、降参するから・・・命だけは・・・命だけは助けてくれ」
「・・・」

銃を下げる。

「あ、ああ、助かった・・・かかったな！死ね！！」

相手から魔法の射手が飛んでくる。

俺の頭が弾け飛ぶ。

「ははは・・・クハハハハハハハハハ！やったぞ！油断なんかしてるからだ！このっ！コノッ！コノッ！コノッ！ハハハハハハ！！・・・さて、あの女共を連れ戻すか」

「ジャスト一分だ・・・いい夢は見れたか？」

「な・・・に？」

「いい夢は見れたかって聞いてるんだ」

今の状態はコイツが下に倒れていて、俺が上で踏ん付けている。

「なっ！？確かにさつき・・・殺したはず！」

「残念だったな、あれは幻覚だ」

「何だと！？あ、あの感触が幻術だと！？あ、ありえない！？」

「あり得ない事はないんだぜエ？ハハハハハハハハハハハハ！！」

「た・・・助け・・・」

「何でだ？」

「説明をしたらくようになった……まあその前に一方的だが認識があったようだ」

「？」

「こいつ等は魔法世界出身だ、活躍している時をみていたのだろう」
「なるほど」

ようは一種の憧れ？

『……（鈍感ですからね、たとえ憧れでも好意には気づかないという……さすがマスター格が違った）』

なぜかクロスと肉体言語で話し合いしななければならない気がした。

「さて、離れてくれ」

「はい」

「了解です」

「はい」

「ええ」

「こら、離れなさい」

「ぶっ」

どうやら軽く洗脳されていたらしく、洗脳を解いた瞬間、抱きつかれた。

まあ今がこの子達本来の姿なんだろう。
よかった。

「／／／／／／／／／／／／／／／／」

「ん？どうかしたか？」

「……（鈍感なんだな）」

『……(圧倒的ですがね)』

「さて、君達はどつする？俺が知っているのでいいのなら、施設に送るが？」

「はい、それでいいです」

どうやら全員親は目の前で殺されているらしい。

なので両親もいないから施設に送るしかないからな。

まあそれぞれの暮らしがあるからな。

選択肢くらいは与えてやりたい。

「じゃあ明日送る、今はこれに入ってくれ」

「……別荘ですか？」

「ああ、中の時間は今は合わせている、だから大丈夫だ」

そして6人を別荘に入れ、自分はエヴァの家に戻った。

あっ、

「アリカに説明忘れてた」

『(ドジッ子ですか、マスター)』

その後アリカが阿修羅すら凌駕しそうな勢いで説明を要求してきたのが怖かった。

なぜかエヴァや茶々丸まで参加してきたからな。

ネギま編 第24話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「愚図が」

言い返せない！

龍「事実だからな」

さ、さて！感謝コーナー！！

龍「夜神様、雨季様、ケルベルス様、感想ありがとう」

次回からはきちんと続きますので！！

龍「後、斎賀や綾香、彩香について気になるなら次の後書きにでも設定を書くそうだが、まあ最悪次の投稿がそれになりそうだが」

いわない！その方が更新は早いけどね！！

龍「ん？壁が」

ん？

ドカーン！

？「ふう・・・よつやくあきましたか」

龍「なぜナギがいる、こつちだとややこしいから来るなといったのだよな？」

う、うん。言ったよ!？

ナ「うるさいですよ屑、少しは呼吸を止めてエコに協力しなさい」

ひ、ひでえ・・・そんなんじゃないぞ!？

ナ「殺しますよ?」

すみませんでした!!

龍「・・・まあ次回はおそらく来週になる、遅くてすまないな」

ナ「屑な作者ですいませんね、謝ります」

うう・・・味方がいない。

龍「ではな、また次回」

ナ「作者はこの文を1時間半で書いてるのでミスが多いと思いますし適当だと思いますが、勘弁してくださいね、では」

で、ではでは・・・orz

ネギま編 第25話（前書き）

今回も全然進んでません（汗）

ですが次は進ませます！別にキンクリは発動しません（多分）
では！今回も楽しんでいただけたらなーと思います！

三人称はさりげなく初挑戦だったので不安ですがどうぞ！！

ネギま編 第25話

敵の基地殲滅から次の日。

昨日はアリカやエヴァ、茶々丸への説明が大変だった。

言っても信じてくれないし。

クロスが言ってた通りにしたら許してもらえたが……。

『（本当にするとは思いませんでした……まさか本当にするとは、泣き落とし）』

何故か鼻血で沈んでたな。

まあそれはいいとして、あれはあの人に任せてるから……寝るか。そう思いながら意識を手放した。

>三人称 Side<

龍斗が寝て、周りが静かになった頃、一人の女性が現れた。

「……何処にあるんだろうか」

その女性はあるものを探していた。

だが、下手に探す事ができないため、この時間まで待っていたのだ。

「早くしないと誰かに気づかれる、何処にあるの……」

「さあな？もしかしたら別の場所かもしれねえぞ？」

「誰!？」

女性が後ろを見ると、そこには一人の男性がいた。

「龍斗・・・さん？」

そう姿は龍斗だった。

だが、少し気配がおかしいことに女性は気づく。

「・・・（何処か様子がおかしい・・・本当にあの人の？）」

「だんまりかい？まあいいけどな、たく、あいつも優しいというか、甘いというか・・・確実に後者だな」

龍斗？はクツクツと笑っている。

その笑い声を聞いて、女性は龍斗？が龍斗ではないと確信した。

「誰かしら？」

「ああ？俺か？俺の名は零崎 人識・・・まあ今はこいつの体を借りて行動しているだけだけどな」

かははと笑い声を上げる人識。

対して女性は顔を真っ青にした。

「（くっ！まさか人間失格がくるなんて・・・予想外にも程があるわ！）」

女性はどうやら人識の存在を知っていたらしい、その反応をみて、なおさら笑みを深める人識。

「かはは、絶望に歪んだ顔だ・・・まあ今回は運がよかったな？今回はお前をその娘から追い出すだけで済ませるんだからな」
「なっ！？」

女性はさらにこれ以上青くなるのかと思うくらい顔を青く染める。

「何故分かった！絶対にばれないはずだぞ！」

「かはは！絶対とはえらく自信もってんだなあ・・・まあ世の中には絶対なんてものは無いんだ、今回もこいつが気づいて俺が処理しようとしているだけだしな」

その言葉に女性は唾然とする。

あまりにも聞いていた姿とは違うではないかと。

人識は老若男女全てに容赦がない、出会ったら逃げる、命の保障は無いとまで言われ、人間失格とまで呼ばれる存在。

なのにこれでは・・・ただの優しい兄ではないかと。

「ん？ああ、俺が想像と違って戸惑ってんのか、まあ仕方ないわな、でもまあ兄貴の言葉だが『兄を殺す弟というものはこの世に存在しても、弟を殺す兄というものはこの世に存在しない、弟を殺す兄、そんなものはもう存在としては兄とは呼べないのさ、そいつは最早人ではないし、そいつは最早鬼でもない』だそうだ、まあ変態だが、あの意見には同感だな」

だから手伝うんだよ、と人識が言う。

それを聞いた女性は、

「く、狂っている・・・貴様らは狂っている！」

「ああ？かはは！今更何言ってるんだ？元々ろくでなしだろうが」

「くっ！」

「さあて、で？お前何よ？俺みたいなんに訊かれたくないかもしれ
ないけどさ、これって犯罪だぜ？不法侵入に強盗、理解してるか？
やっていいこと悪いこと」

「お前みたいなやつが言うか！お前みたいなロクデナシが！」

「いや、だから言ったじゃねえかよ、俺みたいなんに訊かれたくな

いかもしれないけどさってな
「くっ！」

ああ、悔しそうな顔しやがって・・・と呟く声は聞こえていない。

「（どうすれば逃げられる！やつは生粋の殺人鬼！間違いなく殺される！いや・・・やつは私を追い出すと言っていた・・・ならまだチャンスは！）」

「ねえよ、そんなもん」

「なっ！？」

「オイオイ、俺から逃げられると思うなよ？お前はさっさと出て行くようにすればいいんだよ」

「くっ・・・分かった」

「かはは！えらく大人しいじゃねえか、てつきり襲ってくるかもと思ってたんだが？」

「人間失格とは戦いたくないんでな」

なるほどとうなずく人識。

すると、女性に変化が。

「あ・・・あああああああああああ！！！」

「はあ・・・みていて気分の良くなるもんじゃねえなあ・・・まだ戯言聞いてた方が有意義だ」

今度いーちゃんと話そう・・・そう人識は呟いた。

「あああああああああああああああ！！！！」

「さっさと出てけよ、アンタはそこに居ちゃいけないらしいぜ？」

まあ俺が言えることでもないか、と人識は言いながら、女性に近づ

いた。

「さあて、アンタもこの娘から出たから・・・遠慮なく解体してやる、老若男女、容赦なし・・・だ」

人識はナイフを出した。

「安心しな、こいつの能力が使えるからな・・・殺しには便利で無駄で面白くないモンだが・・・今回は助かったな、お前が入ってる女・・・俺の好みなんだよ」

「は？」

「俺は好みの女を殺さないからなあ、まっ、早く終わらせたいから・・・じゃあな」

そう言いながら人識はナイフを振り下ろした。

その時、一人の霊体が消えた。

>三人称 Side end<

>龍斗 Side<

今日は久々の学校だ。

まあ実際は1日休んだだけだがな。

『メタ発言はよしてください』

「ん？気をつけよう」

『で？あの子達はとうするんですか？人識さんが一人片付けましたか・・・』

「ああ、兄さんには感謝だな、まあ兄さんの好みと分かってたから任したんだが」

『性格悪いですね、マスター』

「いやいや、潤さんに比べれば・・・」

その先を言おうとした瞬間、

ドカーン！！

大きな音を立てながら、柱が振ってきた。
柱には手紙がついていた。

「何々」

【今回は許すが・・・次はお仕置きだ b y 哀川 潤】

「・・・」

『・・・怖いですね』

「ああ・・・もうあの人の悪口はやめておこう、次は本人が来そう
だ」

来たら洒落にならん。

また鬼ごっこだ。

「潤さん生き返るからなあ・・・3百回くらい殺したらようやく」

飽きた」の一言がもらえたからなあ・・・」（遠い目）

『ま、マスター！？』

もうやだあの人・・・何故か気に入った！とか言ってたしなあ・・・
何で3百回以上殺した相手を入るんだろうか・・・。

『マスター！』

「何だ・・・今俺のテンションはどこかの謙虚なナイトの謙虚状態より下なんだよ」

『すぐく下ですね！？で、ではなくてですね、あの娘達は見送らなくてよかったですか？』

「ああ、あいつらはいつらで進んでいける、あいつらは一人じゃねえんだからな」

一応お守り（大抵の攻撃は防げる札）を渡しているから大丈夫だろ。それこそ創造主なみの力でもない限りな。

それよりも・・・、

「なんでネギのテンションが低いんだ？」

『おそらくエヴァさんと戦って負けたのが理由でしょう』

「そうか」

エヴァと戦ったのか・・・逃げしか成長してなかった気がしたが・・・

・まあ30分は持っただろうさ。

全力のエヴァ相手に。

『エヴァさんから一言、「何だ！あのボウヤは！？逃げだけ一級ではないか！！さてはお前何かしただろ！！」だそうです』

「・・・」

まあ確かにしたな。リアル鬼ごっこ。

まあひたすらこっちの攻撃を避ける作業だからまだ簡単だと思うが。

『何事もマスターと同じ考えの人はいませんよ？（高畑さんでも5分持たなさそうな攻撃を永遠にされたら・・・まあ逃げはうまくなるでしょうね）』

逃げただけならタカミチにも負けない状態だな。
あれ？ただのヘタレじゃねえか？

『そうしたのはマスターですよ？』

(まったくだア・・・まアノリノリでやった俺が言える事でもねエ
か)

(寧ろよくもまあ生き残れたよね、そこは評価すべきじゃない？)

(図に乗ると全てをなくしますよ？鏡夜)

(うっ、分かってるさ)

脳内会話はすぐくつるさいからやめると・・・言ってるだろ？(二
コリ)

(りよ・・・了解)()

『マスター・・・星との同化ですが』

『どのくらい進んだ？』

『60%です、どうやら何者かが妨害しているらしく・・・思った
ように進みません』

『そうか』

確実にサタンなんだろうが・・・仕方ない。

『今の状態で頑張るしかないか』

『そうですね、そしてマスターは現実を見てください、さすがにこ
れ以上はスルーできません』

『・・・だよなー』

ん？今の状態？エヴァとアリカとアスナが阿修羅すら凌駕した存在
状態だが？

エヴァは闇の魔法、アリカは王家の魔力、アスナは感掛法を使って構えてるし・・・しかも逃げる事ができない。

これがギャグ補正か！（正解）

だが何故あんなに怒っているんだ？訳が分からないよ・・・。
あいつらの会話も途切れ途切れにしか聞こえなかったし。

確か・・・、

「また龍斗・・・六人も・・・」

「節操が・・・でも・・・」

「龍斗だから仕方なかるう？今は・・・」

とか言ってた気がする。

『（実際は、「また龍斗が六人も女を連れてきおつた！」「節操がなさすぎでしょ・・・でも仕方ないのかしら？」「龍斗だから仕方なかるう？今はどう仕置きをするかだ」と会話してたんですがねえ）

おかしいな・・・確か昨日の事は許してくれたはずなんだが？

（実際はその後の行動だよね・・・さすがにいきなり大切な人扱いは駄目だと思うんだ）

（鏡夜もそう思います？私もそう思うんですよね）

そうなのだろうか・・・でも、

「お前達の方が大切だぞ？（護る順位的な意味で）」

「わ、私たちの方が大切！？（愛してる的な意味で）」

『（いつその事哀れと思うべきなんですかね？）』

この一言で何とか怒りは収まった。
なんだったんだろうか？

まあその後はエヴァに説明を求めたりした。
その時の会話を一部抜粋。

「なるほど・・・」

「あ、ああ、じじいに頼まれたので仕方なくな！」

「実際はマスターの八つ当たりです」

「茶々丸!？」

「八つ当たり?」

「ち、違うぞ!??わ、私は純粋にボウヤに興味があっただけで・・・」

「そうか」

「こ、コレも違う!!ああー!!このポケロボめ!巻いてやる!!」

「ああ・・・いけませんマスター」

こんな感じだったな。

エヴァはネギの事が好きなんだろうか？

『(ここまで鈍感だと逆にすごいですね、まあそこに痺れも憧れも
しません)』

酷いことを言われた気がした。

まあ気のせいかな。

「さて、今日も授業を頑張るか」

『教える立場ですけどね』

「ああ、まあアイツらも別の意味で面白いかな」

だから気に入ってるんだが。

その後、一日特に変わった事はなかった。

「私たちの出番が!？」

何か聞こえた気がするがスルー。

もう少しでおそらくネギvsエヴァが終わるだろう。(二回目)

それが終われば修学旅行。

まあその前に他の転生者共を片付けないとな。

ネギま編 第25話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「おそい」

ナ「遅すぎます」

すいませんです！！

龍「で？今回は感謝コーナーの後に簡易ながらのキャラ設定を書くんだろ？」

うん。斎賀と彩香のね。

後、前世のお前も。

龍「俺もか？」

うん。微妙に容姿が違うし。

ナ「どうでもいいので感謝コーナーいきましょっ」

ひでえ・・・

龍「では感謝コーナー」

メガネ様、竜華零様、八雲 葵様、夜神様、感想ありがとうございます！！

龍「ではさっそくキャラ設定だ、まあ簡易なもんだからあまり期待しないでくれ」

ナ「ではどうぞ、見たくない人はスルーして下さい」

零崎 龍識（覚醒前は龍斗、どちらにしる零崎なのに変わりは無し）
年齢 14

容姿 黒髪で肩まで伸ばしている、男の娘なのは元々。

身長 145cm

体重 38kg

趣味 武器の手入れ、読書、人の解体

性格 他人に対してはほぼ会話すらない状態。気を許せば少し喋る程度。

某戯言シリーズの人識と同じく、純粋な零崎。

武器は刀と鋼糸、あとは音。

家族が殺される前は少し大人びた少年だったが、殺された瞬間、元々中途半端だった零崎が完全に覚醒した。

そのため、家賊の存在に気づかなかった。（人識に会うまで）

二つ名は『人間失格』

スキルは曲弦師、音遣い。

闇口 斎賀

年齢 14歳

身長 165cm

体重 50kg

容姿 少し灰色が混ざった髪、髪はぎりぎり肩にかかるくらい。眼

は紅、そのため昔はいじめをうけていた。

趣味 龍識をからかう事。料理。彩香の面倒を見ること。

性格 身内には優しく、その他には容赦がない。

龍識に会うまでは誰も信用していなかった。

家族は生きているが、勘等された。

理由は闇口を否定したため。

武器は基本はナイフだが、龍識に教わったため、鋼糸を使うことも勘等されたため、苗字を名乗りはしない。

龍識にはある意味主君として忠誠を誓っている。

齊藤 彩香

年齢 14歳

身長 148cm

体重 ここは赤く塗り潰されている。

容姿 黒髪を腰まで伸ばしている。顔は美人ではなく、可愛い系。

趣味 龍斗をからかう事。龍斗を眺める事。他人の料理を食べる事。

性格 基本はフレンドリーな性格。ただし、一度でも気に入らない事が見つかると、冷酷になる。

家族は生き別れた妹がいる。

普段は明るく、陽気な性格だが、実はすごく冷静に物事を考え、行動できる。

だが、一度限界を迎えると脆くなる。

龍識が零崎として完全に覚醒するまえの名前で呼んでいるのは裏を知らないため。

龍識もそれを望み黙っていた。

分かる人は分かるだろうが、龍識の事が好き。

以上です!!

龍「まあ穴だらけの設定だが、許して欲しい」

ナ「あくまでも戯言シリーズの世界の平行世界なのであしからず」

次回はきちんと話を進めます!!

龍「まあ運がよければ来週の初めには更新できるから待っててくれ」

ではでは!

ナ「疑問があれば感想でどうぞ、なるべくその場かこの後書きで答えます、気楽にどうぞ」

龍「ではな」

ネギま編 第26話(前書き)

またまた遅くなりました。

ですが次で吸血鬼編が終わりです!!

色々キンクリしてる気がしますが、もう少しで修学旅行にいけると
思うのでゆっくり待っててください!!

ネギま編 第26話

今日はネギとエヴァが決闘？を行う日だ。
俺の知らない間に結構進んでいたみたいだ。
何故かエヴァが怒っていたな・・・何故だろうか。

『（おそらくネギさんが余計な事を言ったんでしようねえ・・・例えばナギの方が強いな・・・バカにされたならキレるに決まっていますし）』

「さて・・・もうそろそろ停電かな？」

『そうですね、もう少しです』

まあ停電なんてなくてもエヴァは全力を出せるんだが。

エヴァは停電に合わせて行動したほうが被害がなくていいと言っていたが・・・結界を張るんなら一緒にじゃないか？と思った俺がいた。まあ何かがあつてからじゃ遅いからな・・・警戒してて損はないか。

『マスター・・・転生者の反応が』

「数は？」

『おそらく50～100くらいですね、しかも魔力や気はやたら多いと』

「はぁ・・・面倒だ、いつその事の間だけアンデルセンと組むか？」

あの神父が協力するようなやつには見えないが。

『一応連絡しておきます』

「さて」

『はい？』

「何でアンデルセンの番号を知っている？」

『やですね、私に知れないことは殆どないですよ？』

そこまで万能だったのかこいつ。

『連絡しておきました、おそらくすぐに飛んでくるでしょう』

「何を言った？」

『マスターと本気で戦いたいなら全力で協力してくださいと』

「・・・はあ」

面倒な事になりそうだ。

そう思いながらも、転生者の反応があった場所に向かった。

んだが・・・おかしい、確か反応は百だった気がするんだが？

今いるのは確実に70人だな。

『まあおそらく神父が頑張ったんでしょうね』

「・・・まあいいか」

今は先にコイツらを片付けるか。

「いくぞクロス」

『了解です、邪魔をするやつらは片っ端から潰してやりましょう』

「クク、まあ全力で相手するだけさ」

今の全力で何処までいけるかな？

「やっと来たかあ」

「ああ、悪いね」

「フン・・・今回は仕方なくだ、本来ならば・・・貴様から片付け

るものを」

「クク、まあ今は・・・後の20人を任せるよ、それで丁度半分だろ？後・・・」

あいつらの正体を話す。

「そうか・・・やつらは死人か！」

「ああ、あながち間違っではないな」

一度死んでいるからな。

それに・・・やつらももうすでに人間じゃない。

「さあ・・・零崎を始めよう」

「貴様らは藁のように死ね！！！」

アンデルセンは銃剣を二本構え、敵に向かった。

戦闘が始まって数十分。

アンデルセンの向かったほうは弱い部類だったらしく、すぐに終わった。

今はそこから切り上げて帰っただろう。

俺が片付けた分も含むと残りは30人か。

まだまだいるな・・・メンドクサイ。

「俺はハーレムが目指せるから此処に来たんだ！！何でこんな化物と戦わなきゃいけないんだよ！！」

「ああ？何いってやがる・・・どうやら死にてエらしいなア・・・」

「ひい！！！」

能力が強くて精神がこれじゃ意味が無いな。

俺も未熟だが。
さてと、

ガシャン

『え！？ま、マスター？それは何ですか？』

「ん？局点防衛用長々距離砲撃戦装備ハルコンネン？」

『ちよっ！？』

「いくぞ！ファイヤー！！」

弾を一斉に発射した。

ドカーン！！

どうやらこれで少し減ったみたいだ。

うん。追撃だな。

「次は・・・広域立体制圧用爆裂焼夷擲弾筒「ウラディーミル」
で行くか」

『別の意味でやりすぎです（諦め）』

ドンツ！シャシャシャ・・・ボツ！

うん。威力は申し分ないな。

さて・・・これ以後10人くらいか。

「くっ！な、何なんだよ！！お前は！！」

「俺か？俺は零崎 龍識・・・お前らを殺す者の名だ」

鬼に逢うては鬼を斬り、仏に逢うては仏を斬る。

俺に善悪はない・・・あるのは護るために得たこの力のみ。
だから恨まれようが憎まれようが嫌われようが否定されようが俺は
この道を進み続ける。
だから、

「ここで貴様らを殺す・・・さよならだ」
「なめるなあああああああああ！！」

いきなり相手の後ろに大量の剣が現れる。
どうやら能力はアーチャーの無限の剣製らしい。
またかと思いつつもクロスを刀に変え、迎撃する。

――無極四式改・炎獄――

本来以上の火力で相手の剣を蒸発させる。
ふむ、

「これで一人」
「畜生・・・」

相手は完全に消えた。
後9人。

「化物があああああああああ！！」
「ここで死ねええええええええええ！！」
「オイオイ・・・隙だらけだぜ？その程度じゃさすがにあたらねえ
よ」

というより似たようなやつしか来ねえじゃねえか・・・それじゃあ
嫌でも対策が取れるってもんだな。

「お前達は大凶に選ばれたんだ・・・喜べ、大凶つてのは選ばれたやつ の証みたいだぞ？」

――無極獄式・縁――

刀によって斬られた場所から手が出てくる。

この技は相手をその手で地獄に引きずり込む技だ。まあその後は消えちまうが。

「そら、死ぬ気で避ける」

――無極獄式・滅――

次は刀で斬撃を飛ばし、その斬撃で結界を擬似的に作り、閉じ込め、滅する・・・要は某結界師の技を使ってるようなものだ。

「し・・・死にたくない！た、助けてくれ！！」

「残念だったな？俺に会ったのが運の尽きだ、自分と俺を恨んで死ぬ」

こいつの考えも読んだが・・・ただの下衆だった。

ハーレムだけでなく、自分の気に入らないやつ・・・一般人だろうと殺すつもりだったらしい。

覚悟無き者を殺すなよな・・・。

まあ、

「殺す覚悟があるなら殺される覚悟もあるよな？」

「ひい！？」

「まさか・・・殺される覚悟もなく殺そうと・・・いや、お前はす

でに殺しているな？」

しかもコイツは自分の家族を殺している……。こっちで過ごした家族を！

「お前はアレか？自分の思い通りにならないやつは殺すのか？」

しかも殺した理由が下らない、ただ親父から殴られたから、妹に逆らわれたから、母親にはたかれたから殺した……。そんな屑だ。

「な、何が悪いんだよ！俺に逆らったから……。強者に逆らった弱者は死ぬのが当然だろうが！！」

「ほう？なら貴様は今この時をもって弱者となった、さあ……。死ぬ覚悟はできたか？」

「ふ、ふざけるな！！俺は強者だ！俺は狩る側なんだよ！！神にだつて力を貰った！！これで俺に勝てるやつはいない！！」

「その力も所詮は貰い物……。己自身の力ではない、それで強くなつたつもりでいるのはお門違いだ」

そう言うと、さらに喚いて、

「な、ならお前は貰った力で何をするんだよ！！」

「ああ？俺は俺の護りたいと思つた人や物を護り通すと決めた」

「そ、そんな綺麗事！！嘘をつくな！どうせお前も俺と同じような事を考えてんだろ！！」

「んな訳ねエだろ、俺には俺の信念がある、護り通すんだよ、そのための力だ」

「ハッ！お前みたいなやつが一番死ぬんだ！お前もさっさと死ね！」

「ああ、確かにそうかもな……。だが少なくとも貴様に殺されたりしてやる訳にはいかないんでね」

俺が死ぬ時は・・・信念が貫徹なくなつた時だ。
少なくとも・・・貫徹なくなるつもりは欠片もねえよ。

「くっ！死にたくない！！俺はまだ夢をかなえてないんだ！！俺は
ハーレムを作つてないんだ！」

「途中まではいいやつつぱいが・・・ただの最低野郎だな」

うん。まあ・・・さつさと片付けないとな。

俺はこんな所で止まる訳にはいかないからな。

「さあ・・・いい加減終わらせよう」

「くそっ！なめるな！！俺はこの力を貰つてるんだ！！」

——超電磁砲——

ああ・・・超能力か。
なら、

「効かねエよ」

相手の攻撃を反射する。

「なっ！？お前も超能力を！？」

「いやいや、それは一部だよ、まだまだ他にも使えるぞ？」

まっ、今はこれで・・・いや、いつでも何処でも全力全壊だったな。
どこかの魔王みたいに。

（違うの！？）

何処からか電波？がきたが無視で。

「”かつこつ”」

虫を呼び出す。

その虫を自身の体に同化させる。

これで身体能力を上げれる。魔法よりもな。

「さアて・・・覚悟はいいかア？まあ、答えは聞いてないがな」

『モード変更は？』

「必要ない」

『了解』

「くそっ！ならコレならどつだ！」

――未元物質――

ダークマターか。

なら、

――無極零式改・無限――

ブラックホールを極限に小さくして、それを無数に分裂させ、迎撃に使う。

よし、消えた。

「どつした？コレで終わりか？なら死ね」

「くそっ！くそっ！くそっ！くそっ！何で！何でお前みたいやつが――！」

「さあな？でもまあ・・・俺は俺の道を進み、お前は俺の障害にな

った、それだけだ、後は外道が許せないだけだ」
「くそおおおおおおおおおおお！！」

ー プラズマー

ふむ、ベクトル操作によるプラズマか。
なら、

「お前の技を全て打ち消すだけだ」

ー 無極極・獄式・鎮魂歌ー

圧倒的に高い熱で相手の攻撃を消し飛ばす。
温度にして摂氏5億。
消し飛ばした先には斬撃が相手に向かって放たれる。
ある程度の距離になると、結界ができ、そこに斬撃が集まる。
いくら反射できてもこれは無駄に終わる。

「これにて終演でございます」

「く・・そ」

これで終わりか・・・分身の反応もある。
おそらく終わりだ。
エヴァとネギの戦いも終わったみたいだな、分身を置いておいたか
ら大丈夫だな。

「帰るぞ」

『見ていかないのですか？』

「ん？ そうだな、様子だけ見るか」

幸い近くだしな。
そう思い、向かった。

「予定より時間がかかりましたね」

「む？別に構わんだろう？ポウヤにも良い経験になっただろうからな」

「どうやらすぐに終わったみたいだな」

「む、龍斗か」

「ああ、どうやら余裕だったみたいだな」

そう言うと、当然のように、

「当たり前だ、この私があこのポウヤに苦戦するはずがない！」

「まあマスターは逃げているネギ先生をひたすら追いかけてただけですけどね」

「う、うるさい！あれは龍斗が悪い！！何であんなに逃げるのだけ得意なんだ！！」

「む？」

と言われたので、説明をすると、

「今だけあのポウヤに同情するぞ」

「すいません、同意します」

どうやらやりすぎだったらしい。
まあいいか。

「さて、帰るか・・・眠い」

「・・・そうか、まあいい、確かに今日は疲れた・・・ど、どうだ？一緒に寝るか？／／／」

「む？別に構わないが」

「ほ、本当か！嘘ではないな！？」

「あ、ああ」

「じゃ、じゃあ帰るぞ！早く寝るぞ！」

「了解」

その後、家で一緒に寝た。

抱き枕状態だったので寝辛かった。

その話をしたらアリカとアスナに怒られ、今度は私たちと寝て！と言われた。

何故だ？

ネギま編 第26話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「遅い」

ナ「作者ですから仕方ないですね、極刑です」

死んじゃう？！

龍「さて、感謝コーナー」

Jam様、夜神様、メガネ様、感想ありがとうございます！

龍「次回で吸血鬼編は終わりだオリジナル（たぶん）」

まあ終わらせる気ではいます！

そのせいで今回はこんな事に・・・。

龍「このままだとネギまだという必要がなくなるからな」

ナ「まあ次で大丈夫である事を祈りましょう」

龍「ではな」

ナ「では」

次回も頑張ります！！

ではでは！

番外編24 もしも龍斗が他の世界に行ったら・・・(前書き)

今回は残念ながら番外編です！

まったく人気がなかったの+Fate/Zeroが面白かったので
やってみました！

次はきちんと本編を進めます！

遅くなってすみません！

では！今回も駄文ですが楽しんでいって下さい！

番外編24 もしも龍斗が他の世界に行ったら・・・

— Fate / stay night 編 —

ん？ここは・・・いや、まずはそうだな。

「どうやって無事に着地するかだな」

『そうですね、後、下には家があります』

「・・・どうするか」

飛ぶのはいいんだが・・・というかこのパターンは・・・

「はあ・・・聖杯戦争か」

『みたいですね、情報が流れてきました』

どうやらクラスはアーチャーらしい。

という事は・・・、

「遠坂家か」

これまた面倒な。

記憶の話はどうするか。

「とりあえずは落ちて大丈夫だろ、被害は最小限な？片付けさせられるだろうから」

『了解です』

そう言いながら被害を減らすために術を発動する。

「重力軽減、対象自分」
『軽減完了、落ちます』

ドカーン！

「な、何なのよ！コレは！」
「ふむ、いきなりだな・・・まあ一応呼ばれたのだから説明するしかないのだろうが」

説明中・・・

「は？ならアンタは急に落ちてたって訳？」
「そういうことになるな、おそらくそつちの不手際だろうが」
「うっ！」
「さて、自己紹介だ、俺はアーチャーだ」
「アーチャー？セイバーじゃなくて？」
「む？セイバーの方がよかったか？」

腹ぺこ王は相手が面倒だぞ？

「そうね、セイバー目的で行動してたんだし、出たほうがよかったわ」

「そうか、まあ別に構わない、これからの行動で信頼を勝ち取ろう、だから君は下がっていてくれ」

「は？」
「君は魔術師といってもまだ実践をあまり経験していないだろうからな、危険だろう？」

そう言うと、体を震わせ始めた。
嫌な予感が・・・

「あッたま来たーッ!!」

やはりキレたか。

「ちよつとアンタ何様のつもりよ！黙って聞いてりやズケズケズケズケとッ！」

「いや、そこまで言っていないが」

「そこまで言うならやってやるうじゃない！アンタは誰に従うべきかってこと教えてやるわッ！」

「なッ！？ま、待て！まさか令呪を使う気か！？わかっているのか！？令呪がどれだけ重要なものか！」

「うるさいうるさいうるさーい！！大人しく私の言うことを聞けーッ！」

カツ！

令呪が使われてしまった。

結局こうなるのか・・・そう思いながらこれからどうするか悩んだ。

「凜」

「何？」

「サーヴァントの気配だ、構えておけ」

「へえ、よく分かったじゃねえか」

「それだけ殺気を出されれば嫌でも気づくさ」

「そうかい、なら・・・ひとつ手合わせ願おうか！」

あれから自己紹介も終わらせ、見回りのために学校に向かっていた。まあランサーに会うのは仕方ないか。

「考え事とは余裕だなあ！」

「いやいや、余裕ではないさ、さて、こっちも反撃させてもらおう」「ハッ！きやがれ！」

そう言いながらやつは槍をふるってくる。
ふむ、なら……。

「テメエ……何のつもりだ？」
「何がだ？」

「この俺に槍で勝負を挑むとは……馬鹿にしてんのか？」
「いや、滅相もない、ただ……試してみただけだ」

そう言いながら俺は紅い槍と黄色い槍を構える。

「我が槍……受け切れるか！」
「上等だ！」

槍をぶつけ合う。
やはり槍の扱いではあっちの方が有利か。
だが、

「いくぞ！」

——必滅の黄薔薇——
ゲイ・ボウ

「!？」

ちい……避けられたか。

「テメエ……何モンだ？セイバーには見えねえが？」

「む？クラスのことを言っているのなら、この身はアーチャーだと答えておこう」

「ふざけてんのか？剣や槍を使う弓兵なんざ見たことねえぞ！」

踏み込んで来た所をカウンターの要領で返す。

「それは偏見だ、弓兵が弓しか使わないと誰が言った？」

「ちっ！……一つ聞かせろ、テメエの本来の武器は何だ？」

「フツ、弓かもしれんし剣かもしれん、だが……そちらに知る意味はないだろう？」

「ククク、そうだな」

「それに……それ以上は槍で語れ」

そう言いながら相手の攻撃を思いっきり弾く。

「いいぜ……ならばこの槍にかけて貴様を討つッ！」

来るか。

「いくぞ……その心臓貫い受ける！」

「来い」

「刺し穿つ死棘ホルクの槍！！」

因果逆転の槍が放たれた。
だが、

「残念ながら効かない」

確か幸運 A 以上あれば避ける事が可能だったはずだからな。

「なんだと！？かわしたと言っのか、我が必殺のゲイボルクを……」

「ゲイボルク……やはりお前は」

そう言っつと、やつは舌打ちし、

「まずったぜ……こんな早々に正体がばれちまっとはな」

そう言いながらやつは此処を離れようとする。

「逃がすとても？」

「生憎マスターの命令でね、まあ次会ったら本気でやるっや」

パキッ

「誰だ！」

「くっ！」

「ちっ！」

どうやら衛宮 士郎はすでにいたらしい。
まずったな。

「アーチャー！追っわよ！」

「了解だ」

まあ結果は変わらなかった。

士郎は死に、凜が宝石を使って治した。

「アーチャー……」

「何だ？」

「あなた・・・真名は何て言うのかしら？」

「ふむ、言っても分かりはしないさ」

「聞かせなさい」

「はぁ・・・零崎 龍識だ」

「零崎！？」

なぜかすごく驚かれた。

有名なのだろうか。

「魔術師の中では知らないやつはいないくらいにね」

そこまで有名か。

「味方でも敵でも最悪だとか、殺人鬼の集団だとか」

ああ・・・否定できない。

兄さん達の行動がなぁ・・・。

だって・・・見た限りだと即効で潰す時もあればじっくり時間をかけて殺す時もあったからなぁ。

うん。すごく楽しそうでした。

「どうしたのよ、そんな遠い目をして」

「いや、ただ昔を思い出してただけだ」

「？そう、なら質問」

「何だ？」

「あなたの宝具は？」

「・・・固有結界と空想具現化がそれに当てはまるか」

「は？固有・・・結界？空想・・・具現化？」

「そうだが？」

「何ていう規格外・・・」

失礼な・・・誰が規格外か。

固有境界は何故か使えないし、空想具現化も完全ではないしな。固有結界の内容をいっただら呆れられた。

それはさておき。

今は衛宮邸にいる。

セイバーが向かってきたのを弾き、何とか話に持っていった。

「聖杯戦争？」

「ああ、まあいきなりいわれてもわからんだろう・・・凜、コイツを教会に連れて行こうと思うが・・・何か意見は？」

「・・・別にないわ、行きましよう」

「・・・俺の意見は？」

「マスター、敵にそれを求めるのはどうかと」

なんて会話があつたが、取り敢えずGO。

まあ中に行くまでは原作通りか。

「アーチャー、あなたは一体何者ですか」

「それに俺が答えて何か得が？」

「いえ・・・なら質問を変えましよう、何が目的だ」

「目的？」

「そつだ、何故私のマスターを此処に案内した、そんな必要はないはずだ」

目的ね。

「ただの気紛れ、それでは理由にはなりえんか？」

「戯言を！」

「世の中戯言だらけだろくに・・・まあこれも戯言か」
「言葉遊びに付き合う気はない！」

はぁ・・・本当に固いな。

「まあ敢えて理由をつけるなら・・・何も知らないやつを倒しても意味がないからだ」

「何？」

「うちのマスターは優秀でね、まあこれくらいの余裕はあるんだよ」
「慢心は身を滅ぼすぞ」

「知るか、俺には負けは許されない・・・俺は破壊しかできないこの力で少しでも護りたいモノが護れるように生きているんだ・・・誰にも邪魔はさせん、俺の生きる道だ」
しんねん

その後は原作通り進んでいった。

バーサーカー戦では、月落しを使うはめになったが、何とか退却させることができた。

「アーチャー！何でも使ってるのよ！周りの被害を・・・」

「何、もう直してある、というより結界を張ってあったのだから人は無事だった」

「そ、そう・・・ならいいわ」

などの会話もあつたが。

さて・・・これから先忙しくなりそうだ。

これからの事を思い、俺は動き出した、戻るため、そして・・・自分の信念を貫くため。

番外編24 もしも龍斗が他の世界に行ったら・・・（後書き）

後書きコーナー！！

龍「遅い・・・遅すぎる」

ナ「うつ病なんて逃げ道ありませんよ？」

え・・・えつと・・・すみません！少しだけ悪化してました！！

龍「油断するとすぐこれだ」

ナ「いい加減病院に行きなさい」

だが断る！ただしくは行けないんだけどね。
どこにあるか分からないし・・・親に心配させる訳にはいかないし。
今は誤魔化せてると思うので。

龍「はあ・・・なら感謝コーナー」

ナ「Jam様、メガネ様、夜神様、感想ありがとうございます」

次の更新は早くできるように頑張ります！酷くならなければですが。

龍「お前の文以上に酷くはならねえだろ」

o r z

ナ「落ち込む暇があるなら更新しなさい」

イエッサー！

龍「ではな、次回も頑張らせる」

ナ「では、また次回」

ではでは！

ネギま編 第27話（前書き）

次から修学旅行編です！

大変遅くなりすいません！

後、龍斗のアーティファクトですが、名前を募集します！

能力も書いて下されれば参考にします！

期限は修学旅行の襲撃編までです！

皆様のご意見をお待ちしております。

ネギま編 第27話

これは・・・夢？

「フウ・・・もう疲れてしまったよ」

な、何故か目の前にネロ・カオスがいるんだが？

「すまないが・・・眠ってしまいたいと思っている・・・」

あれ？こいつこんなキャラだったか？

「さあ・・・寝るか、パトラッシュ」

「お前はネロはネロでも別だから！！」

目が醒めた。

うん。あれは悪夢だ。

ネロ・カオスがフランダースの犬のネロの配置とか・・・かなりカオスでした。

『どうかしましたか？』

「いや・・・作者が無い頭を振り絞って出したギャグが滑っただけだ」

『メタ発言乙です』

メタなんだろうか？

「それより」

『なんでしようか?』

「エヴァと茶々丸は?」

『今はカフエかどこかにいますよ、マスターが起きた場合は来るように言っておけと言われてます』

「そうか」

なら向かうか。

そう思いながら俺は服を着替え、出かけた。

「なら京都に向かえ」

「京都ですか?」

「やつ of 隠れ家があったはずだ」

ついた瞬間に聞こえたのだが・・・ナギの事か。

「よう」

「む、遅かったな」

「夢見が悪かったんだよ・・・」

あれは悪夢というかシユールだけの夢というか。

ネロ・カオスの格好があ of ネロだぞ?シユールにもほどがある。

「あつ!龍斗さんは父さんの事何か知りませんか!?」

「む?ナギか・・・あの馬鹿は死にはしないだろうな、としか言いようがない」

「龍斗?・・・もしかして森 龍斗ですかい?」

「ん?カモ君は何か知ってるの?」

「知ってるも何も超有名人だぜ!?森 龍斗、『無敗の英雄』『星

の意思』『超越せし英雄』で有名な人だ！な、何でこんなところに・・・」

えらく増えてるな。

確実に変な二つ名も増えてるんだろうな・・・。

「ま、京都に行けばいいのは確かだし都合もいいしな、なあ？アスナ」
「そうね」

確か修学旅行の行き先が京都だったはずだ。

まあ原作通りなら・・・一回断られるか、良い顔されなかったはずだが。

「ええー！？修学旅行の京都行きは中止ー！？」

「ふむ、あちらさんが良い顔をせんでのう・・・」

「そ・・・そんなあ・・・」

すごい落ち込みようだな。
だが、

「まあどうせ何か考えているのだろうか？」

「ふむ、よくわかったのう・・・まあいつまでもこんな仲ではなく、仲良くして行きたいと思っておるのでな、親書を届けてもらいたいんじゃない」

「わ、わかりました！！」

「ではネギ君・・・任せたぞい？」

「はい！！」

そしてネギは出て行った。

「で？どうせネギの護衛を頼むんだろっが」

「よく分かったのう」

「だが俺が護るのはクラスのやつらだけだ、ネギは二の次だ、それで構わぬか？」

「・・・（仕方ないの）あい、分かった、よろしく頼む・・・という事でいいかの？」

「ああ」

まったく・・・どうせ助ける事になるんだろっが。

こうして修学旅行の詳しい話し合いは終わった。

その後？

エヴァの家に戻って修行をし、アリカとエヴァとアスナとトランプ・・・ばば抜きをした。

その時のダイジエストは、

「さあ龍斗、選べ」

「む」

「龍斗、エヴァちゃんに負けないでよ」

「負けるでないぞ！龍斗！！」

「なんでプレッシャーがかけられるんだか」

「さあ！」

「・・・負けたくは無いから・・・仕方ない」

「む？」

「Clock Up（ボソツ・・・これだ」

「あっ！？ま・・・負けた」

『（大人げないですね）』

「（負けたくなかったからっつい）」

「龍斗！イカサマしただろ！！」

「・・・してない」「顔を見て言え！」

「してない」（少し涙目）

「うっ！？」

「・・・」（鼻血＋気絶）

「（な、何だ！この捨てられた子犬みたいな眼は！！卑怯すぎるぞ！！）」

「・・・（保存ですね）」

気がついたら目の前がカオスな事に。

クロックアップなんて使うんじゃないかな？

でも負けたくなかったし・・・天道総〇もやってたし。

え？本編ではやってない？

・・・そうだったな。

「そういえば・・・エヴァは修学旅行に来るのか？」

「む？あ、ああ・・・呪いはなくなっているからな、行かせてもらうでしょう」

「素晴らしいながらマスターはすごく楽しみにしながら準備をするのでした」

「ちゃ、茶々丸ー！！ま、巻いてやる！」

「ああ・・・駄目ですマスター」

「はあ・・・じゃあ準備しておけよ」

「もうできている」

「早いなオイ」

「マスターは一週間前から準備していました」

「まだ言うかアー！！」

またエヴァが茶々丸の螺子を回している・・・やりすぎでは？

『これくらいがちょうどいいんでしょう、楽しそうですし』

「誰がだ!?!」

「確かにそうだな」

「龍斗まで言うか!?!」

確かに楽しそうだ。

うん。呪いを解いてよかった。

こんな笑顔を見れるなら・・・護っていけそうだ。挫けることのない・・・な。

「さて、アリカはどうする?別についてきても大丈夫だが」

「本当か?」

「ああ、別荘に入っていれば大丈夫だし、外に出る場合は認識障害を使えばいいしな」

「そ、そうか・・・ならお主と一緒に回ってはならんか?」

「ん?別に構わないよ、なら約束だ、よほどのことが無い限り大丈夫だ」

「や、約束じゃぞ!?!」

どうやら楽しみらしい・・・そんなに京都が気に入ったか。

『マスターは鈍いなんてレベルを超えてる気がします』

「何か言ったか?」

『いいえ』

まったく・・・いいたいことははっきり言えよな。

そう思いながらも俺は修学旅行の準備をした。

途中で手伝いとかがあったが、中々楽しかったと言えよう。

ネギま編 第27話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「遅すぎないか？」

すいません・・・本当に中々落ち着かなくて。

ナ「だから馬鹿なんですよ」

うう・・・返す言葉もございません。

龍「さて、感謝コーナーだ」

ナ「八雲 葵様、メガネ様、ケルベルス様、夜神様、感想ありがとうございます」
うございます」

前書きでも書きましたが、募集します！
すいません！他力本願で（汗）

龍「まっただな」

ナ「どうしようもないですね」

言い返せない！！

龍「言い返してたら生きているのを後悔させるところだったぞ？」

何それ怖い。

ナ「事実です」

調子のつてすいませんでした!!

龍「後、本編冒頭部分は気にするな、作者が実際に夢だそうだからな」

ナ「どうやら事実の中にカオスが混じった感じですね」

龍「だな」

実際見たから仕方ない。

龍「カオスだな」

カオスだね。

龍「さて、次回も見てくれると嬉しい。ではな」

ナ「では」

ではでは！

ネギま編 第28話（前書き）

またまた遅くなった上にまだ修学旅行に行ってません！

・・・今回は準備編？です。

次こそ！次こそ修学旅行に！！

ネギま編 第28話

修学旅行で京都に行くことが決まった。
まあ原作通りと言えるから別に構わないか。
だが、

「螺旋オレオンなる蛇が何もしない訳がないか」

『そうですね、あちらも転生者の塊、原作知識くらいあるでしょうし、行動に移すのは間違いないですね』

「どうにか手段を増やしたいが・・・」

どうするか。そういえば、

「他の転生者はサーヴァントを時々連れていたな」

『？ええ、時々ですが、今までで出てきたのはアルトリア・ペンドラゴンやギルガメッシュ、ハサンでしたね』

「他にもいたがな」

アサシンは強敵だった。

あれは避け切れなければアバラが1、2本やられたらうな。
无二打は恐ろしかった。

あれは喰らいたくない。

「ふむ、幸い宝具はいくらでもあるからな・・・呼んでみるか？」

『なら誰を呼ぶつもりですか？』

「そうだな・・・」

現状ではディルムッドやヘラクレスかな？

後はネロと玉藻か・・・よし、

「クロス、宝具を」

『了解です、思考を読みましたので大丈夫です』

すると、ゲイ・ボウ必滅の黄薔薇とゲイ・ジャルグ破魔の紅薔薇、アエストゥス・エウト原初の火、アイト水天日光天照八
やのしずいし野鎮石が出てきた。

これで大丈夫かな？

あつ、後デカイ斧を出てきた。

これで本当に大丈夫だな？

『では、始めます』

「ああ」

さて、呼ぶか。

召喚台詞？面倒だから「カット！」・・・ワラキアは帰れ。

「余の奏者マスターはそなたか？」

「……………」

「召喚に応じ参上いたしました・・・」

「謂われなくとも即参上、良妻賢母のデリバリーです」

「……………」

「あ、あれ？もしかして引いてます？」

まあいきなりああもいわれたらな。

「コホン、で？貴女が私のご主人様・・・であってます？」

「ああ、後俺は男だ」

「……………」

まさかのバーサーカー（ヘラクレス）までが驚愕しているという・・・泣くぞ。

「我が主」

「ん？」

「我々を呼ぶという事は聖杯戦争が行われると？」

「いや、それはないよ・・・お前達は俺の我俣で呼んだだけなのだから」

「なら魔力は・・・我々サーヴァントを4体も使役できるような魔力が・・・」

「あるよ、それは心配するな、全員が宝具を同時に使っても余裕がある」

そう言うのと、さらに驚愕していた。

そんなに不思議か？

『（マスターは今すぐFateのマスター組に全力で謝るべきそうするべき）』

「さて、とりあえずは自己紹介からだな、まずは俺からだ・・・俺の名は零崎 龍識だ、今は訳あって森 龍斗と名乗っている、どちらでも好きな方で呼んでもいいが、外では龍斗で頼む」

そう言いながら俺はデイルムツドに紹介を促す。

「はっ、私の真名はデイルムツド・オディナだ、よろしく頼む・・・主、この槍にかけて貴方に忠義を誓います」

「ああ、共に戦おう」

そして次はネロだ。

「余の名はネロ・クラウディウスだ、よろしく頼むぞ、奏者よ」
「ああ」

次は・・・玉藻か。

「私の真名は玉藻の前です、^{マスター}ご主人様以外はどうでもいいのですが、
・・・まあよろしくやってもらってもいいのでよろしくです・・・あつ、
^{マスター}ご主人様、私の事はタマモがお前って呼んでく・だ・さ・い・な
きゃっ言っちゃった」

「あ、ああ・・・タマモと呼ばせてもらう」

「今回のご主人様は可愛くてなおかつ魂がイケメンなので言う事なしです！」

それは喜ぶべきところか？
さて、次はヘラクレスか。

「で、コイツはヘラクレス、バースーカーのクラスで呼ばれている
ため、喋れないから代わりに紹介しておこう」

「！！！」

うん。実に元気だ。

本当はアーチャーのクラスで呼び出せたらよかったんだが。

「さて、皆を呼んだ理由は簡単だ・・・俺の護りたいモノのために、
共に戦ってほしく、呼んだ」

俺一人では限界があるからな。
ならこうするしかない。

「そういう事なら、このデイルムッド、全身全霊をかけて護り抜き

ましよう」

「ふむ、余も芸術品が減るのは勘弁ならぬ、協力しようぞ」
「私はご主人様の良妻なので全力でサポートします」

バーサーカー……いや、ヘラクレスも協力してくれるか。

これで俺が見れない範囲の護衛も可能になった。
分身では駄目だからな。
どうしても偏りがちだからな。

「じゃあ頼む……共に戦おう」

「御意」

「うむ」

「はい！お任せ下さいな」

「――！！」

心強いな。

さて、

「どう説明するかな？」

『何も考えてなかった事に吃驚するしかありませんね』

いや、エヴァやアリカへの説明は面倒な気がしてな。

あっ、そういえば。

「デイルムツド」

「はっ」

「お前には確か魔貌の呪いがあったな」

「はい、ですが……私にはどうする事も」

「ああ、だから俺が消しておこう、その方がいいだろう？」

「はっ！ありがたき幸せ、感謝します」
「いや、別に構わないさ・・・さて、消えたぞ」

実際は簡単だからいいんだがな。
ただ呪いを虚構なかつたことにしただけだし。

「さて、紹介したいやつはほかにもいる、行くぞ」

「はっ！」

「うむ」

「了解です！」

バーサーカーは無言で肯定した。

さて・・・本当にどうしよう？

その後、エヴァとアリカがタマモとネロを見て、阿修羅すら凌駕する存在になったり、4人でのにらみ合いがあったり、何故か結託したりと、訳がわからない状態だったが、無事に？すんだのでよしとし「終わりだと思いましたが？ハサンめでございます」アサシンは帰れ。

呼んでないからな。

後、精々命令させるくらいだったよ、許す条件。

まあ・・・大丈夫だろうと思ひ、それで許してもらった。

その時の笑顔を見ていれば、後のあれはどうにかできたかもしれない・・・そう思った俺だった。

ネギま編 第28話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「鈍い」

ナ「まったくですね、この鈍間」

本当に申し訳ない（焼き土下座）

龍「何故呼んだ？」

最近Fate/Zeroを見てたら出したいくなりました。

龍「この無計画人間が・・・」

ネ「奏者よ、そう邪険にするでない、その無計画さのおかげで余は奏者と出会えたのだから」

タ「そうですねよ！私は寧ろ感謝してますよ？こんなご主人様マスターに出会えたんですから」

龍「お前らが言うなら別にいいが・・・」

デイ「そうですね、私も感謝しております、もう一度忠義を果たす事ができるのですから」

龍「そうか・・・こいつらに免じて今回は許す、だが次はないぞ？」

イエッサー!!

龍「では、感謝コーナーだ、ネロ」

ネ「うむ、メガネ様、Jam様、夜神様、感想感謝するぞ! . . .
これでよいか?」

龍「ああ、上出来だ」(なでなで)

ネ「〜次も余がしてやろう! だからまた撫でるがよい!」

タ「次は私です! セイバーさんだけです! 私も^{マスター}ご主人様に頼りにされたいんです! 良妻ですから!」

龍「ああ、頑張ってくれ」(ニコリ)

タ「あ、ああ . . . こんな^{マスター}ご主人様なら . . . どんな存在でも相手とつても悔いはありません!」(尻尾パタパタ)

ああ〜そろそろ終わりたいんですが?

タ「作者さん?」

はい!?

タ「私と^{マスター}ご主人様の邪魔をするなら . . .」

するなら?

タ「バリバリ呪うぞ」

すいませんでした。

ネ「さすがキャスター・・・余と同じくらい暴君じゃな」

デイ「それは褒めているのか？」

ネ「うむ！最高の褒め言葉じゃ！」

タ「まったく嬉しくありません・・・」

さ、さて！次回からはきちんと修学旅行に向かわせます！！（たぶん・・・いや、きつと）

ネ「不安要素ばかりではないか」

タ「これだから・・・ですねえ」

！？で、ではでは！次回も頑張ります！！

ナ「まったく・・・にぎやかになりそうです、嫌な意味で」

龍「ネタデイ」「」「」「」

ネギま編 第29話（前書き）

今回から修学旅行編です。

オリジナルの敵もいるので原作通りにはならない気がしますが、なるべく頑張ります！

ネギま編 第29話

あれから数日。
ついに修学旅行だ。

「ふむ、呪いのせいで出られなかったが・・・やはり外はいいな
「そうだな、いつまでもあっちにいたら新鮮だろうな」

「(主、怪しい者が一人・・・)」

「・・・(ああ、警戒しておいてくれ、もし変な動きをしたら連絡
を)」

「(御意)」

ふむ、電車を待っていたのだが・・・どうやらもついているらしい。
ネギもエヴァもネロも浮かれてるし・・・はあ、疲れそうだ。

「どうした？」

「いや、少し眠いだけだ・・・電車の中では寝かしてくれ」

「あ、ああ、別に構わんが・・・ふわあ」

む、眠気が酷い・・・普通は一年以上は寝なくても大丈夫なはずな
んだが？

何か異常でもあるんだろうか？

ん？何故周りの奴等は顔を紅くしてるんだ？
男はかがんでるし。

『(可愛すぎるのも罪ですね、別の意味で)』

何故だ？実に不愉快な事を考えられた気がする。

「（奏者は自覚がないから仕方ないのだろうな）」

「（可愛いから文句なしですけどね）」

「で？エヴァは京都に行った事は無いのか？」

「む？そうだな・・・確か一度だけだったか・・・まあ観光する余裕はなかったがな」

ああーまあ追われてたり何か調べてたらそれはな。

「龍斗先生」

「どうした？」

「点呼終わりました」

「そうか、欠席者は？」

「さよさんだけです」

「いや、相沢は後で来るそうだ・・・まあ遅刻だな」

「そうなんだ」

まあ実際は無理やり連れてきたようなものだがな。

む？どうやって？とかいつ？とか聞きたそうだな・・・詳しい事はいえないが・・・まあ相談した結果だよ。

幽霊のままだとあの土地に縛られた状態だったからな。

だから仮の人形を作ったんだが・・・うん、人形遣いみたいにはいかないな。

完全な人間は造ることはできないが、ほぼ人間に近い人形は何とかできた。

それに相沢を入れている。

別荘にいたので、調整が済み次第、合流させるつもりだ。

「さて、皆！きちんとマナーを守れよ？」

「「「はい！」「」「」」

ネギまで一緒に返事か・・・どれだけ嬉しいのやら。
まあ自分の父親の情報を得られる可能性があるから楽しみではある
か。

ん？情報はお前が渡さないのかだと？

クク、勝手なイメージで本質を見ようとしていない者に教える必要
はないさ。

「そんなこんなで電車の中です」

「どうした？茶々丸」

「いえ、説明が必要かと思ひまして」

「大丈夫か？」

「はい」

茶々丸が電波を受信したのか？

「じゃ、少し寝る・・・何かあれば起こしてくれ、多分起きる」

「ああ、ゆっくり眠れ」

今の場所？エヴァの班のどこだ。

理由？エヴァに連れてかれた。

ふわぁ・・・寝よう。

> 龍斗 Side end <

> エヴァ Side <

ふむ、龍斗は寝たのか。

「寝ていると本当に女にしか見えんな」

「そうですね」

しかも寝てる姿が女全員が羨む、もしくは嫉妬するぐらいの可憐さだからな。

しかし・・・

「コイツは無理をしすぎるからな・・・よく見ておかないと勝手に一人で抱え込んで潰れてしまいそうだ」

他人にはもっと周りを頼れと言う癖に自分は頼らないからな。

『そうならないように見守ってくれるのでしょうか？エヴァさん達は』
「ククク、当然だな・・・癪だがやつらも同じ気持ちだろうさ、龍斗の敵は私達の敵だ」

アリカも修行しているしな。

何故かナギの馬鹿と同じかそれより少し下程度にはなっているな・・・バグか。

私か？全盛期より強くなっているぞ？少なくともナギの馬鹿には負けん。

龍斗には勝てんがな。

「さて、少し騒がしいが何だ？」

「どうやら蛙が出てきたそうです」

「蛙？・・・はあ」

龍斗が起きる前に解決しよう・・・じゃないとゆっくり休めんだろうしな。

『ニヤニヤ』

「そのム力つく擬音を出すな、凍らすぞ？」

『いえいえ、今の貴女の顔を見て・・・』

「何だ？」

『今の貴女……いい笑顔ですよ、マスターの頑張りに意味はありましたね』

「フンッ！……まあ確かに龍斗のおかげではあるな、やつらもそうだろう？」

『そうですね、まあマスターは自覚なしですが』

「……だろうな、じゃないとここまで鈍くはないだろうさ」

あの鈍さは異常だからな。

「マスター……蛙の処理、終わりました」

「そうか、ご苦労……これで龍斗は着くまで寝れるな」

「そうですね」

「ケケケ、御主人モ甘クナッタナ」

「うるさい、そうしたのはこいつだ」

そう言いながら私は龍斗の頬をつつく。

「んみゆ」

「「!？」」

「ケケケ、本当ニ男力疑ウナ」

「みゃ……ふみゆ」

『マスター……（いつも通りなのも考え物ですね、寝てる時々にこうなるんですよね）』

本当に男なんだよな？

まさか性同一性障害とかではないよな？

「もつそろそろ着くそうです」

「そうか、なら起こすか」

そう言いながら龍斗を揺する。

「オイ、着いたぞ」

「んみゆ？ふわぁ・・・着いた？」

「あ、ああ・・・もう着いたから起きろ」

「・・・」(録画中)

さて・・・茶々丸は後で仕置きをしてから録画したビデオは没収だな。

そう思いながら、限界を超え、意識を飛ばした。

>エヴァ Side end<

>龍斗 Side<

ん？ああ・・・着いたのか。

どうやら蛙の件はエヴァと茶々丸が解決してくれたらしい。起こしてくれてもよかつたんだがな。

それより・・・何故目が覚めなかつたんだ？普通なら起きたはずなんだが・・・。

それより、

「エヴァはどうして気絶したんだ？」

「ケケケ、オマエノ所為ダゼ」

「？まあいい・・・連れてくか」

そう言いながら俺はエヴァをだっこして運び始めた。

「(何故お姫様だっこなのだ！余が真っ先にされるべきであろう！

！)」

「・・・セイバー、今は少し静かにするべきかと思うが？」
「(今の状態を我慢せよと言うのか!)」
「・・・すいません、主、止められそうにありません」
「帰ったらしてやるから・・・これで勘弁してくれ」
「(本当じゃな!!嘘であったら余は奏者相手でも許さぬぞ?)」
「(ああ、約束するさ)」
「(うむ!ならば許そう、余の寛大さに感謝するがよい!)」

まさに暴君だな。
別に構わないがな。

「皆さん!しつかりついてきて下さいね!」
「」「」「ハッイ!!」「」「」

元気だな。
さて、

「(デイルムツド、警戒頼む・・・ネロもな)」
「(御意)」
「(分かっておる)」

タマモ?タマモは今木乃香の護衛だ。

最初は渋ってたが、急に考えを変えたらしく、

「任せて下さいな、全力で護ります」

とか言ってたので大丈夫だ。

さて、今から京都を回るわけだが・・・大丈夫だよな?

最近は今まで以上に体の調子が悪い・・・まるで人間に戻っていつてるかのようだ。

まあその時はその時か。

そう思いながら俺は先に進んだ。

この時にもう少し警戒しておけば・・・あんな事にならなかった
ただ
ろっ・・・そう思わずにはいられなかった。

ネギま編 第29話（後書き）

後書きコーナー！

龍「今回から修学旅行に入った訳だが・・・」

ん？

龍「進みが遅いのは変わらないな」

ガフツ！？

龍「まったく・・・ほかの作者なら間違いなく一日目が終わるか、観光時の嫌がらせが発生するまでであったろうに」

・・・すいません。

ナ「次はもう少し進めるよう・・・努力しなさい」

はい。

龍「さて、感謝コーナーだ」

タ「夜神様、メガネ様・・・感想ありがとうございます」

ネ「むう・・・キャスターめ・・・どこに行きおった」

タ「ではご主人様、^{マスター}頑張ってくださいね」

龍「ああ」

あつ、逃げた。

ネ「奏者よ！キャスターは何処へ行ったか分からぬか？」

龍「さあ？」

ナ「あつちです」

ネ「感謝する・・・奏者とは後でお話をするでしょう」

龍「・・・ああ」

O H A N A S H I F L A G ですね分かります。

龍「塵も残さず消えるがいい」（メイオウ攻撃）

ぎゃああああああああああ（蒸発）

ナ「では、次回は恐らく遊戯王と東方を更新してからのなので少し遅くなりそうです」

龍「少しは急がせるので気長に待っていてくれ・・・ではな」

ネギま編 第30話（前書き）

かなり遅くなりすいません！

その上まったく進んでなかったので無理やり進める事に・・・。

次回から少しでも戦闘がある予定です！

なので今回はこれで・・・お許し下さい！

ネギま編 第30話

電車を降りた後には色々あった。

何がって？嫌がらせだよ。

何故か落とし穴があったり（蛙入り）恋愛祈願の水の部分だけ酒になつてたり・・・やる気があるのか分からん嫌がらせだったな。

酔っ払った生徒達は新田先生に報告し、バスに乗せ、先に宿に行く事になった。

え？進みが速い？

・・・仕方なかるう？このままだったら1日目で何話使うと思う？
予定では3、4話くらいだからな？

『メタ発言自重してください』

「・・・無理ダナ（・×・）」

『マスターエ』

さて、今はさっきの説明にあった宿だ。
いたって？普通だと思いたい。

「（主・・・）」

「どうした？今は結界を張ってあるから関係者以外来ないから出てきて大丈夫だ」

「主、敵を見つけましたが・・・どうするおつもりですか？」

「今は様子見、もし何かしてきたらその槍を遺憾なく發揮してくれ」
「はっ！」

ふむ、これでここ付近は大丈夫かな？

後はバーサーカーに見回りさせるか。

バーサーカーの今の状態は少し人の中では大きい方な程度に抑えてある。

戦う場合は元に戻すが・・・この方が見回りにするのに適しているからな。

ネロは一応アスナとネギにつけてるが・・・まあ納得はしてなかったな。

確か「その色男に任せればよいではないか！余は奏者と共におるぞ！」とか言ってたな。

・・・マスターと共にいるのは当然なんだろうが。

『（駄目だこのマスター・・・早く何とかしないと！）』

「（・・・あの2人が少しだけ哀れだ）」

そこはかとなく馬鹿にされた気がする。

「さて、刹那、入ってきてても大丈夫だ」

「は、はい」

「・・・」

デイルムツドが槍を構える。

おそらく敵と判断したんだろう。

「いや、そいつは仲間だから大丈夫だ」

「はっ」

「すまないな、刹那・・・こいつにも悪気があった訳じゃない」

「いえ、龍斗先生を護ろうとする意思が強く感じられたので」

「そこまで思われてるのなら嬉しいが」

さて、

「で？用件は何だ？まさか日常会話をするためだけに来た訳ではあるまい？」

「ええ、お嬢様が狙われる可能性が高いので護衛を」

「タマモだけでは不安か？」

あれでもかなり強いぞ？

ゲームで言う全てのステータスがMAX状態だからな。

「いえ、そういう訳ではないのですが・・・」

「少しでも誘拐される可能性をなくしたいと」

「はい」

やはり・・・刹那は優しいな。

まあ過去の償いもあるんだろうが・・・それでもここまで本気で護ろうとはしないだろう。

なら、

「協力しない手はないさ、出来る限りの事をしよう」

「ありがとうございます」

「何、元々護るべき対象だよ、俺みたいなヒトデナシでは不足かもしれないが・・・いや、忘れてくれ」

「・・・はい、ですが一言だけ」

「何だ？」

「貴方は貴方が思っているほどヒトデナシではありませんよ、少なくともヒトデナシならば護りたいとは思いません」

「・・・一言だな」

まったく、気を使わせちまったか。

「さて、警戒を続けよう・・・頼んだ」

「はっ、お任せあれ」

「さて、刹那も見回りをするんだろ？なら途中まで一緒に回るつか」「は、はい！」

何故顔が真っ赤なんだ？

・・・理由が分からん。

「とりあえずは向こうからだな、行くぞ」「はい！」

元気だな・・・俺は最近無駄に疲れてる気がする・・・休めてないのかねえ？

「そう思ってる時点で俺も年寄りなのかね？」

『いえいえ、まだマスターは40くらいですよ？精神年齢は、肉体年齢は14ですけどね』

「そのせいで身長が止まってるんだが？まあ別に構わないが」

18くらいから一気にのびたからな。

「さて、行くぞ刹那、鬼がでるか蛇がでるか・・・少し楽しみにしているというのは不謹慎だろうが・・・まあどんな相手が来ようとも負ける訳にはいかない、全力で相手するぞ」

「はい！」

そう言い合いながら先に進んだ。

イレギュラーのせいで原作から離れていつている事に気づかずだ。

そもそも自身が居る時点でもはや原作通りに行くはずがないと言う事にも気づかなかった。

ん？またフラグ？しかも前回と重ねて確立アップ？
・・・少し話そうじゃないか。

ネギま編 第30話（後書き）

後書きコーナー

龍「次元連結システム起動・・・」

やめて！メイオウ攻撃は洒落にならない！

ナ「手が震えてますよ？」

寒さのせいかわからないけどそのせいで入力がし辛いんだよね！

龍「知るか」

デスヨネー。

ナ「さて、感謝コーナー」

龍「Rain様、Jam様、メガネ様、夜神様、感想ありがとうございました」

無駄に丁寧だよね、こういう時だけ。

龍「それがマナーだからな」

ナ「？ネロ、どうしたのです？」

ネ「あの女狐めえ・・・余の芸術を馬鹿にしよったのだ！それだけは許せぬ・・・何処にいるかわかるか？」

ナ「いえ、ここには来てませんよ」

龍「もう少し仲良くしたらどうだ？」

ネ「いくら奏者の頼みでも無理というもの……あやつとは気が合
わぬ」

ナ「あつ、走っていききましたね」

龍「はあ……仲良くしてくれたら嬉しいんだがな」

まあ……いつか仲良くなるって！

龍「だどいいが」

ナ「次は東方を更新します、戦闘描写をもう少し工夫したいのです
が、今の限界に挑んでみるそうです」

龍「まあ気長に期待せず待っててくれ」

では！

龍「ではな」

ナ「では」

ネギま編 第31話（前書き）

またまた遅くなりました！！

今回はいきなり戦闘です！

色々別の意味でカオスですが、それでもよければどうぞ！！

ネギま編 第31話

あの後、刹那に先に合流するように指示した後すぐに敵の反応があった場所に向かったんだが……。

「まさかここまで居るとはな……まあまだ少ないほうが、イレギュラーは」

「それは貴様も同じだ、イレギュラー」

「ククク、そうだな……確かにイレギュラーだな、俺もお前も」

人数はざっと10人……しかもほぼ全員が転生者か。まったく……暇なのかねえ？

「で？あんならの目的は？」

「言うところで？」

「いや、期待してなかったから別に構わん」

「そうか……ならここで死んでもらうぞ！」

そう言いながら周りは刀、銃、鎌、槍……色々な武器を構え、向かってきた。

それに対し俺は……クロスを日本刀に変えた。

「さて、武器を構え、殺気を持って俺に接したんだ……死ぬ覚悟くらいはできてるよなア？」

「なっ!？」

そう言いながら俺は敵の一人を刀によって斬り刻んだ。

ドシャッ

「ふむ、やはり鈍っているな・・・本来なら17分割で留めるはずがないのに」

本来なら一瞬でまったく同時に25回くらいは斬れたはずだからな。

「ば・・・馬鹿な、やつは俺達の中でも強い方のはずなんだぞ！？どうして一瞬で!？」

「見えなかったのか？俺が17回同時に斬った瞬間が」

見えない時点でたかが知れてる・・・情報も引き出せはしないか？だが慢心はしない。全力で叩き潰す。

「さア・・・覚悟はいいかア？」

「くっ!!撤退だ!!逃げるぞ!!」

そう指示を飛ばし、やつ達は逃げようとする。
だが、

「簡単に逃げてンじゃねエよ・・・そもそも逃がすと思ってンのかア？」

――無極終式・終焉の世界――

ウィークエンド・ワールド

刀によって飛ばされた斬撃に結界の能力を付与し、敵を大きく困う。これによってやつ等は逃げ出す事ができなくなった。ついでに転移できないようにもしたしな。

「さア・・・道化は道化らしく踊ったらどうだア？『僕みたいな弱い存在に』『苦戦してるようじゃ』『目的なんて果たせないよ?』」

相手がフラグを建てる・・・それも死亡フラグを。

「駄目じゃないか」 「それはフラグだよ？」

「なっ!?! あんだだけの攻撃を喰らって無傷だと!?!」

「無傷ではないよお?」 「全部なかつたこと「虚構」にしたただだよ」

「ま、まさか・・・大嘘憑きだと!?!」

「大正解だよ!」 「そんな君に賞品を渡したいね!」 「そうだ!」

「君には切符を上げるよ!」 「片道だけどね!」

「どういう・・・」

「地獄への片道切符さ」 「分かるだろう?」

「なっ!?!」

「遠慮しないでいいよ!」 「存分に受け取ってよ!」

そう言いながら俺はクロスをモードリリースし、あるものを取り出す。

「それは・・・何だ?」

「ん?」 「これが分からないかい?」

「・・・?」

「そう」 「なら数字を選びなよ」 「695、944、718、9

96」 「どれがいい?」 「オススメは718かな?」

そう言うと、相手は戸惑った様子で、

「・・・718だ」

「ふうん」 「わかったよ・・・」 「じゃあ、行くよ?」 「リアク

ト

自身に傷をつけ、血を出し、発動させる。
出したのは一見少し変わった程度の銃剣。

だが、使用者との連結により、外殻（内部構造までを）変化させる。
その武器の名は……、

「それは……デイバイダーか」

「ん？」 『そうだよ』 『これはデイバイダー718 リアクテッド』 『世界を殺す猛毒らしいよ？』 「」

武器の形を銃剣からガトリングガンと多連装ロケットランチャーに変わる。

……刹那は無事タマモ達と合流できたか。

式紙を送りつけてて正解だったな。

今はそんな事より……目の前の敵を殲滅するか。

「さあ」 『覚悟はできてるかな？』 「」

「くっ！！」（魔力による攻撃と通常の攻撃では殺せない……分断デイバイドされるのがオチだ……どうすればいいんだ） 「」

「それじゃあ」 『逝ってみようか』 「」

手始めに50発ほどを撃ってみる。

「くっ！イージス！」

敵の目の前に薄く紅い盾が現れる。

……宝具ではないとなると、魔術か。

「へえ、耐えるねえ」 『じゃあ多分このままじゃあ無理かな？』 「」

「……このままでは？」 「」

「そうだよ」 『少し痛いかもしれないけど……』 『大丈夫だよ
ね！』 「」

そして俺はガトリングガンと多連装ロケットランチャーを銃剣に戻し、もう一度リアクトし直す。

「『デイバイダー718 リアクテッド「プラズマケイン」』』少しどころかなり痛いだろうけど』『我慢しなよ?』」
「くっ!」

少し大きくなった銃剣から電気が出ている状態に変化した。近距離斬撃武器のため、遠距離戦ではなく、接近戦になる。

「『喰らえ』」

「くっ! やられてたまるか!」

ガキンツ!

互いの武器がぶつかり合う。

ジジジ・・・

「なっ!」

相手の武器に輝が入った。

「『吹き飛びなよ』 『綺麗にね!』」
「ガッ!」

相手は耐え切れなかったのか、一気に吹き飛んだ。まあこの武器は切り裂くんじゃなくて焼き切る武器だからな。でもやはり構築が甘い・・・かなり威力が下がった。

「『とどめ行くよ?』」

ガシャンという音と共に、俺は持っているディバイダー2門を連結させる。

「『じゃあね』 『次はきつといい人生であるように祈つとくよ!』」

『プラズマディスチャージャー』」

連結させた武器から膨大なエネルギーが発射される。

「グツ! イーグス!」

相手がもう一度薄い紅色の盾を出す、一瞬だけしかもたなかった。そしてやつは呆気なく跡形も無く消え去った。

「『さて』 『この逃げようとしている人達?』 『君達は逃げちゃ

駄目だよ』 『正義は逃げずに戦わなきゃ』」

「ひい!？」

「『駄目だなあ』 『そんなんじゃ僕には勝てないぜ?』 『それに・
・君達に逃げる資格なんて』 『最初から虚構なかつたんだよ』」

そう言いながら俺はリアクトを解除し、次は刀を出す。

「そ、それもディバイダーか」

「『そうだよ』 『さあ覚悟はできたかい?』 『逃げる事ができないんだから』 『戦いなよ?』」

「う、うあああああああああああああ!」

「『はあ・・・』 『そんな三流な愚者はいらぬよ』 『リアクト』」

手に、ナイフよりも短い武器・・・一応ナイフみたいなものかな?

を思いつきり刺す。
すると、刀が双剣に変化した。

「『デイバイダー944 ケーニツヒ・リアクテッド』 『魔導殺し
のこの双剣』 『止められるものなら止めてみるってね』」
「うわああああああ！消えるオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
お！！」

そう言いながら相手は自身の魔力頼みの砲撃を撃ってきた。

「『無駄だよ・・・』 『今の僕に魔力攻撃は一切効かない』 『残念
だったね』 『さよなら』」
「ガッ!？」

双剣を叩きつけるように振りぬく・・・すると、敵はミンチより酷
い状態に。

さて、残りは5人か。

「『じゃあね』 『君達も運がなかったって事で来世に期待してな!』
『じゃあまた来世とか!』」

――無極極零式・無の煉獄――

リアクト状態のこの双剣で、いくつもの斬撃を相手に浴びせる。
相手に斬撃が当たると、その当たった場所から原子レベルで消滅し
ていく。

「『リアクト』 『解除』・・・ふう、終わったか」
『お疲れ様です、マスター』

「んうゝ・・・まあ大して疲れてないよ、相手が油断してくれてて助かったよ、無駄に労力を消費しなくて済んだしね」

『・・・（まあ油断してなくてもあの程度ならマスターなら勝てますがね）』

「さて、刹那達と合流するか・・・タマモとネ口をつけてるから木乃香は大丈夫だろうが・・・イレギュラーのせいで何が起るかわからんからな、警戒しておいて損はない」

『ですね・・・では合流しましょう』

「ああ」

周りの処理を終わらせ、すぐに刹那達との合流予定ポイントに向かう。

・・・何もなければいいが。

ネギま編 第31話（後書き）

後書きコーナー！！

龍「温い、遅い、鈍間」

グフツ？！

ナ「まったく・・・あなたは速さが足りない」

クーガの兄貴！？

龍「さつさと感謝コーナー行くぞ」

夜神様、メガネ様、感想感謝です！

龍「次回で多分2日目だ、ゆっくり待っていてくれ」

ナ「次は東方を更新予定ですからね」

あ、後、ディバイダーにミスがあれば言って下さい！直しますので！

龍「一応作者は単行本を持っているからそこから引っ張りだしている（後、少しの独自解釈）なのでミスがあれば報告願う」

ナ「では、また次回」

ではでは！

龍「ではな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7066p/>

テンプレな転生 強き信念持ちし者

2011年12月16日01時47分発行